現代日本文學全集

ND 6-64

PL
755
.6
Y32

Yamamoto, Sansei
Shukyo bungaku shu

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/shkybungakush00yama

杉浦非水裝幀

宗教文學集

改造社版

PL
755
.6
Y32

LIBRARY
JUN 4 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

向つて右より〔上段〕清澤・福田・田中〔中段〕大西・新島・植村〔下段〕木下・綱島・西田の諸家

「宗教文學集」目次

巻頭寫眞（諸家照影）

福田行誡篇

法語雑話……五
をみなへし……一〇
剃度のいはれ……二五
房總日記……二六
釋教百種……三八

清澤滿之篇

精神主義（第一）……四四
精神主義（第二）……五四
精神主義（第三）……六一

田中智學篇

聖史劇佐渡……六六

新島襄篇

書簡
解題……一三六
箱館脱奔ノ際ニ於ケル書簡……一三七
米國ヨリノ初信……一三七
箱館ヨリノ略記……一三八
弟君ノ訃音ニ接シ尚留學ノ志ヲ滋ヘラレザル事、森辨務使ノ知遇ヲ得ラレシ事等……一四三
田中文部大丞トノ邂逅等……一四四
米國教育制度視察、歸朝時期ノ事等……一四五
兩親ヘ金子ヲ送ラル、事等……一四五
田中文部大丞ニ隨行英國ヘ到着ノ事等……一四六
歐洲ニテ教育制度取調ノ事、歸國計畫ノ事等……一四六
獨逸ニテ罹病ノ事、家事ヲ心配セラル、事等……一四八
獨逸視察ノ事、歸朝見込ノ事等……一四九
米國ヘ再歸ノ事、歸朝遲延ノ事等……一五〇
歸朝ノ催促ニ應ゼラレザル事等……一五一
（附）請師歸朝之書……一五一
函館ニ於テニコライニ寄スルノ書……一五三
歸朝日誌……一五四
同志社大學創立記事……一六四
辯明書……一六六
第二回歐米紀行……一六七

植村正久篇

宗教の衣裳……一八二
志と信仰……一八七
急がば迂回れ……一九一
祈の標本……一九四
生命の曙……一九九
死と死者……二〇二
杜鵑一聲……二〇八
黑谷の上人……二一三

大西操山篇

悲哀の快感……二二三
耶蘇教問題……二三〇
當今の衝突論……二三三
宗教の究極的證據……二四六
和歌に宗教なし……二四九

綱島梁川篇

宗教的眞理の性質……二五四
悲哀の高調……二五八
一家言……二六一
秋の力……二六三
苦痛と解脱……二六四
心のたどり……二六六
病間録
知己……二六九
價値……二七〇
理性……二七〇
愛……二七三
心響録
悲哀の祕義……二七四
心性の要求……二七五
心機縦横……二七六
自力信と他力信……二七六
偶思録……二七七
心の一ふし
法友……二七九
恩寵の生活……二八〇
驚異と宗教……二八一
予が見神の實驗……二八五
予は見神の實驗によりて何を學びたる乎……二九〇
二聲録……二九五
神子の自覺……二九八
如是我證……三〇二
自覺小記……三〇八
斷光録
苦痛の祕義……三一三
最も單純なる信念……三一三
自大自矜の一念を儆めよ……三一三
われは谷間の白百合花なり……三一三
自然……三一三
後者に與みせむ……三一四
祈禱……三一四
『極數道德』の著者に……三一四
「神子」の辯……三一五
負けじ魂……三一六
不斷の神在……三一七
「誰人の孤衣てゐます花の春」……三一七
人と石……三一七
先後本末……三一八
融會力、妙法力……三一八
眞人と神……三一九
信仰と理性……三二〇
大西祝先生を弔す……三二三

木下尚江篇

乞食……三二六

西田天香篇

福田……三九四
藝術と一燈園生活……四〇五

諸家略年譜……四一五

序

この卷の出づるは正に吾が邦に於ても、左翼一派の『反宗教闘爭』と、一部宗教家の間の宗教擁護闘爭との尖銳に對立してゐる時である。併し、かりにマルクスの云つた「宗教は阿片である」との言葉を、そのまゝ鵜呑みに承認しても、混亂した明治時代に於ては、それが却つて應急の對藥となつて著大な效果を擧げてゐるのを見逃し難い。全く明治の文化史――は愚か範圍を文學史に狹く限つても、宗教の寄與貢獻した所は偉大なものがある。

明治の宗教は、傳來の佛教と、外來の基督教とが主勢力をなし、之に、神道などに系統をひく土俗的宗教と、佛耶兩教の融合の意圖、その他から生じた新興宗教とがある。

福田行誠上人は、幕末から明初に渡つて鬱然として聳えた佛教界の大樹であつた許りではない、別に文藝の嗜みも深く、その遺された詩文悉く嗜讀に値する。

淸澤師は佛教に新らしい魂を吹きこんだ功績者とも言ふべく、その唱へた精神主義は一時わが青年思想界を風靡した。未だ健在せるゝ田中智學師に就いては事新らしく贅言の要を見まい。晩年の高山樗牛の如き、日蓮については師から學んだ跡が多い。

外來の基督教が、最も初期に新島襄氏の如き達識の指導者を得たことは非常の强味であつた。同志社を設立し、三田の福澤翁と並んで教育界の二大先覺と仰がるゝは世のよく知る所である。但し新島氏には自筆になる文章が殆んど無く、本卷所收の諸篇も一般には初めて公表さるゝ珍篇で、これを持つことは本全集の一つの誇でなくてはならない。

新島氏に次いでは、より多く辯の海老名彈正氏、より多く筆の内村鑑三氏、その兩者の長を併せ得たる植村正久氏等が鼎立の形で最も顯れた。本卷にはその植村氏の著述のみを載せた。

基督教に對する壓迫は、幕府時代には邪教の名に於て徹底的なものであつたが、明治になつて信教の自由を獲得して後は、佛教徒からくる慢性的攻擊以外には、井上哲次郎博士の提供したわが國體及び教育敕語と牴觸するとの議論が一時世の視聽を集めた。大西操山博士の諸論はそれに對する辯駁として最も組織立つたものである。但し博士の著作は文化の全面に涉つてゐるから、この諸篇のみを以てしては或はその片鱗にすらも觸れ得ないかも知れぬことを恐れる。

操山博士薰陶の下に現れた一異彩が綱島梁川氏である。この師弟に於て吾々はわが國には絕えて他に類例のない眞個の「哲人」の俤を見る。梁川氏の「見神の實驗」は日露戰爭後の思想界を賑かに動かした論題の一つであつた。

西田天香氏の率ゐる一燈園は、一切宗教の對象の綜合に、お光の名を冠して禮拜する新教團である。その團名は梁川氏の感想「一燈錄」から出でた。世界大戰終結の後には一時思想的歸嚮に迷うたわが國の青年子女を吸集した事がある。

木下尙江氏は宗教と社會問題の中間に跨つて、又一種獨特の地位を占めてゐる。初めの著作は、社會主義的色彩の方が遙かに勝つてゐたが、晩年に到るに及んで次第に宗教味が濃くなつた。「乞食」の一篇は宗教が主となつた著作の最も傑れたものである。

一卷必ずしも、明治以後の宗教界の全貌を收め得たりとは言はぬが、代表的なものは一通りこれで窺へると信ずる。

昭和六年十一月

法語筆話

をみなへし

剃度のいはれ

房總日記

釋教百首

福田行誠

法語筆話

勅修御傳第二十一卷に

いけらば念佛の功つもり、しなば淨土へまゐりなん、とてもかくても此身には、思ひわづらふことぞなき。

御傳語灯錄など申す御法語どもあまた集めたる御文どもあまたあれども、言葉みじかにして行者の今生後生の安心起行をのべつくし給へるは此にまされるはあらじかし、まして今樣の體裁なるぞはた珍しからずや、されば同行の人々の爲めにいさゝか講說の詞を述ぶ。

いけらばとは、我人此一生いきのかよはん間をさす、扨人の壽命は長短あることは誰も知ることなり、御經には神代の昔のことども說かせ給ひて、人壽無量歲或は八萬歲四萬歲二萬歲などとかせ給へり、釋迦如來御出現の時は僅かにちゞまりて百歲のときなりとぞ、此よりちゞまりに縮りゆきて十歲をかぎれるころは人の長けも一二尺となり、食ふ者もきる物もすみ家も今の世の百分が一にも及ばずして、取る物皆刀杖となるとて軍陣爭ひ闘ふをのみこととするよし說かせ給へり、かゝる時に生れ出でたらんには、實に生ける甲斐なき世とや申すべからん、あなうれし、今の世にありて身もやすく、心も靜かに後生菩提の道をさへに、おもふまに〳〵つとめらるゝよはた喜びの中の喜びにあらずや。

念佛の功つもりとは、念佛の二字は御經の中に種々の御說あれども、今は南無阿彌陀佛の六字の御名號を聲に出して唱ふるなり、觀無量壽經には令聲不絕具足十念と說き、善導大師は大經の本願の文を釋して稱我名號下至十聲一聲と示し給へり、此稱名の數多き功德は淨土の上品に生れ、少なければ下品にとは聞えたり、臨終の時十聲一聲までも必ず此功德を以て九品の內に生ると承れば、如何なる人もおこたり申すまじきことになん、凡そ我佛法修行のおこなひに三種あり、身口意の三業と名く、其身業とは我身體の働きに顯はるゝ行ひなり、謂ゆる合掌し禮拜し或は香花燈明など供養し、或は筆染めて御經文寫し、或は刀を取りて佛菩薩の御姿を彫刻申すなど、皆身の上の修行地と名く、法華經に童子の沙を以て塔を作る亦是緣因佛性なりと說き給へる是なり、其意業の修行とは所謂心の中に在りて思惟觀察する如きなど、暫く觀念の名を出さば、天台宗にては一心三觀あり、法相宗には五重唯識觀あり、眞言宗には三密道場觀あり、三論宗には八不中道觀あり、此等渾て心上にて憶念思惟の位より郭然大悟に至るなり、其口業の修行とは、或は陀羅尼を讀誦し、或は佛菩薩の御名を唱へ、或は衆に對して說法教化するなど、渾て脣、舌、牙、齒、喉の五音にあらはるゝ音聲を用ゆる佛事を口號の佛道修行と名く、身口意の三業の中にては口業を行ひやすき者とす、第十八願に稱名をえらびてけるも或は此御意なるべきにや。

功つもりとは、功は功績とて其功德を指すの詞なり、つもるは蓄積とて其德の山の如く高くそびえてつみかさねたるなり、抑元祖大師は四十三の御としより、日々六萬遍をつとめ後には七萬遍となされたり、二祖鎭西國師、三祖記主禪師皆然り、隆寛律師は八萬四千遍なりしとぞ、近比奥州の無能和尚は十萬の日課なりしと聞ゆ、唐の道綽禪師は道俗をすゝめて大豆

を以て念佛の數をとらしむるに、上根の者は八十石九十石、下根の者猶二十石三十石を得たりと云ふ、善導大師曰く、在家は緣務多ければ一萬以上、出家は必ず三萬以上なるべしと、又曰く、三萬六萬十萬者皆是上品上生人ともの給へり、我祖の授手印の序文に曰く、依レ之專二自行一之時、以二日稱數遍一而爲二正行一勸二化他一之日以二稱名多念一而教二淨業一と、和漢の祖師の御行儀いづれも均しくしてかはることなし、是皆懈怠をいましめて精進をすゝめ給ふ御遺誡なり、夫れ佛教は因行勝るれば果報も必すすぐる、因行劣れば果報も亦おとる者と說くを、三世諸佛の御法なりとす、左れば法華經に三車の御喩へを說かせ給へり、其意は三乘等しく菩提の名をうれども、聲聞は三生六十劫にして菩提を證し、緣覺とまをすは四生百劫と申すをへて菩提の悟りをひらき、菩薩は三祇百大劫と申す長く久しき修行の功つもりて佛果の大菩提を證得し給へるよしなり、元祖大師の御ことばに一丈の堀を越えんとせば一丈五尺をこえんとはげむべしとは、おもしろき御たとへなり、さらば一念十念ときかば、やがて千念萬念を唱へんとはげむべし、此にて初句の註釋をはる、次に第二句を註すべし。

死なば淨土に參りなん、此句は行者の後生の果報を指すなり、扨て死なばと申す死の字の註釋すべし、漸然として氣の窮するを死と云ふと註せしは、今俗に云へる息風の絶えしなり、此死の一字皆人々の常々能く知る處なれば、將あまりおもしろくなき話なれば、法座にても省きて申さぬことなれども、今序でもよければ少々示すべし、佛昔十二因緣と申すことを說かせ給ひし中、生と老死との兩種を未來の兩果と名けて一切衆生のまぬがれざる處なりと示し給へり、此生死のけたいは、昔の業因緣にて顯はれ來れる者にて、此の一種なれば苦道と名く、昔神代と稱する時の人は數百萬年の壽命のよし申し傳へたれど、今日まで存在して居る者一人もなし、命に早晚あれども死なぬ人一人もなし、毘沙門は五百年の壽にして、帝釋天は千歲ときけども、果報盡くるとき五衰の相顯はる、此に比すれば人間の五十年百年など申さん、蜉蝣と云へる蟲の朝に生れて夕に死するよりも猶はかなかるべきをや、楞嚴經に十種の仙類を說けり、其さま支那國の列仙傳に似て長生不死の趣あり、全く一種の外道法なるのみ、(仙說は佛經中處々に說かざる處なり、愚老曾て十仙考あり、今はくた〴〵しければ之れを略す) 昔魏の國に曇鸞法師と聞えたる大德おはしませり、一時大集經と申す六十卷あまりの御經註釋せばやとて筆記せられたるほど、あやにく病にかゝれり、竊かに自ら思へらく、我數千卷の一切經を註釋講說を作らまくほつす、然るに大集經の筆點未だ半ばにも至らずして疾病困苦す、尋常の人界に在りては果して果すこと能はざるべし、今の世猶仙法を存す、此れを傳へて本願はたさばやとて、其頃梁の都に陶隱居と申す翁あり、此人仙法しるよし傳へきゝて病をつとめて遠く往きて訪はれければ、陶氏大に喜んで速かに仙書十卷を授けらる、歸路天竺より流支三藏の來り給へるときゝて、とりあへず三藏に面謁して問うて申さく、佛教の中長生を說く、此土の仙經に勝れたる者ありやと、三藏之を聞きて地につばきはきてのたまはく、此の娑婆世界何れの處にか長生不死の法あらん、汝長生不死の法を得んとならば此經よめよとて一卷の文を與へ給へり、即ち觀無量壽經にてぞありける、鸞公言下に悟了して御前にして仙經十卷やかれたりと傳に見えたり、おもしろき昔ものがたりになんありける、涅槃經には四人の仙人あり、死

を恐れて一人は虚空の雲の中に、一人は大海の底に、一人は岩むろの奥になん隠れたれど、叶はで皆死にたりとぞ、死のまぬかれざる喩へなりけり。

抑身を愛し命を惜めることは只人情のみに限らず、鳥獸鱗甲の類を始め蚤、蚊に至るまでも同じさまなるは、いづれも生々世々の貪愛執着のくせづきたるにて、たれ〴〵も同樣に其情少しもかはらぬ者にぞありける、或山寺に愚癡なる老法師ありけり、卯月の誕生會は目出度お式なればねんごろに勤めつれど、二月の涅槃會は佛の死にたるさまなど繪に寫したる世に忌はしとてつとめざりしとぞ、法師めかぬめづらしきはなしなりけり、さまでに死をいみおそるならば、何ぞ生れたる方をおそれざるや、生るればこそしぬるなれ、生れて死なじとすまふは、水に入りて衣ぬらさじと思ひ、火をつかみてやけどせじと願ふが如し、此を御經には三毒の煩惱と云へる中の愚癡の一毒なりとぞ說かせ給へり、龍樹菩薩の大論に八念と云ふことをとかせ給へり、其の中第九に念死の一段あり、念とは心にかけて忘れざることなり、夫れ死の緣無量にして定め難し、或は水火盜賊、或は天雷地震、或は猛獸毒蛇、或は內外の病患すくひがたき、或は連年の饑饉食を失ひ、或は兵亂國を亂し疫災人を損ず、其の餘暴風駛雨、山崩れ海溢れなど百千かぞふるにいとまあらず、玄奘譯本の藥師本願經に七難九橫を出さる、大論には此等を他因緣死と名く、此餘おそくもはやくも壽命つきて死ぬる者を自死を名けられたり、遺教經に世は實に危脆なりと說かせ給ひしも渾て此等のお言なるべし、古語十死一生と云へる言葉あり、こはむかし梶原の景季が生田の杜にて平家の士卒にかこまれたるに、からくきりぬけてけるに今の世にも人の稱へ申すなり、我等も千百の死賊に取りまかれたるなれば、たれだれも今日まではきりぬけてきたれども、只今にも打死せんことは計り難し、たれだれも今日までは生きて斯る佛法の尊きことを信じ、若し聽聞もせらるゝ者は、世に難有きことなりかし、謂ゆる十死に一生を得たる彼の景季の生田の合戰をきりぬけたるより十倍も仕合せたることよと、よろこび申すべきことならずや、死の一字の註釋をとゞめんと思ひつるが、世の老人たちの心得にも今一くだり申すことあり、むかしは寺參りする老人には、迷子札と申す者を腰につきけるを折々に見たり、僕從など召つれたる人は夫に及ばねど、極老の一人出あるきたらん人は必ず住所姓名を記したるかきつけを用意すべし、例の死の緣無量なればさるべきことと用心はすべきことなり、おのれ十九と申す年學問の爲め旅に出でゝ行脚僧となりし時、此寺に百日彼地に半年と、所をも定めず一人にて往來したりける折、ふと心づきて、例の死の緣無量なれば何くいかなる所にてゆきだふれんも計り難しと思ひしより、一紙にかきける、法子行誡行脚僧なり、何の所にゆき倒れ申すともすぐに其邊の寺にて火葬にして、齒骨にして國郡寺の名の所に贈り、雜用を請ひとらるべしとかきて袈裟袋へをさめ置きたり、ゆくへも知らぬ法師の上などには、必ずかく有るべき事なり、此一くだり心得べき事なり、今一乘申すべし、としよりたらん者は存の通り死の緣無量なれば、食事の內も油斷ならず、夜ねたる內にも其ぎりの人々もまゝ見聞せらる、左ればすこやかなる日にあとの遺言或は書おきに記しおくべし、さなきときはたれ〴〵も凡夫なれば萬一心にかゝり乍ら死ぬることありては、後生の障となるべきこともあるべし、瑜伽論には臨終の三愛を示し給ひ、曇鸞菩薩は臨終の一念は百年の業にまされりといましめおかれたり、我宗には臨終節要一卷あり、能化の人々

自らも心得人にも示すべし、昔齊の桓公と申す國王あり、齊桓晉文とて其頭の二人の名君と稱せられたる程なり、三人の夫人あり、皆子なし、又六人の夫人に似たる妃あり、是は皆子あり、初は鄭妃の子孝公を太子とす、後佞臣のことばに惑ひて衛妃の子無詭を太子となせるを見て、孝公奔りて宋にゆく、桓公死するに及びて五公子自立せんとして宮中大に變亂を生ず、桓公のしかばねを牀上におきしまゝにて人のかへりみる者なきこと凡六十七日、屍蟲戸外に出づと史記に見えたり、いかにもみぐるしきことにか有りけれ、是桓公の死を忘れしと遺言の及ばざるより、公が一代の美名を失ひ、國勢をおとして叛亂是より絶えざるに至る、修身齊家を心とする人々尤も知るべきことなりかし、孔門の子路は軍中に纓のみだれたるを正しくなほし、我甘糟の太郎は今はとて敵に身をまかせて合掌して終りたるに、軍中に紫雲たな引けるよし御傳に見えたり、死を見ること歸るが如しと古人の申したるおもしろきことなりけり、二祖鎮西國師は常にのたまひし御言葉に、六念八念十随念あれども、予が所存の如きは念死念佛の二念に過ぎずと承はるにも、たれたれも此死の一字は常々に心に忘れ申すまじき修行なりと思ひ給ふべしな。

次に淨土に參りなんと申す一條を説き示すべし、此中重々の法門あれば心を靜めて聽聞すべし、先づ佛教に三世を説かれたる趣を示すべし、支那國孔門儒書には現在一世のことのみを説きて過去未來のことは絶えて説かざる教なり、皇國も古事記の中伊ざなみの尊のかつて神ざりましましける後を、すこし氣色ばみて傳へ申せども神代の昔がたり定かならねば、たしかなる證ともなしかねたり、此書册ども固より三世は説かざるの部中に收むべし、天竺の古代六種外道及び九十六種など申す外教はありては、やゝ三世の事實を説かざることたしかに傳へ申したり、瑜伽論には一十六種の外道を出し、唯識論には一十三種の外道を列し、維摩經には六種の名を示さる、其祖先の外衆は大かた有漏相似の神通を得たる者共なれば、須彌山七金山なども過去未來のこともまのあたり見る者なれば、さることとは決して疑ひとするに足らざるなり、彼等の法も上世に有りては隨分氣高き道を修して、後世の如く競爭をもて宗法を弘通すべきさまにはあらぬなり、我佛家にても爭諍の意をもて彼等に論じかちたりとも佛意には叶はざるべく思はる、法師などは心すべきことなり、彼等暫く三世とは説けども極みじかき三世なり、佛説の三世はかぎりなき三世なりと知るべし、左れば三世の法門の究竟説は佛説にまかせざるべからざるなり。

次に淨土と申すことを示さんに、先づ娑婆世界のことを示すべし、一切衆生共業の感ずる所、大虛空の中に成劫現ず、所謂上色界より下地獄界なり、其中央一須彌山現ず、高さ八萬由旬四寶の成就するところなり、四方の海中四洲成就す、則ち人間界と名く、今五大洲と稱する者は須彌山の南方に屬する一小洲なり、其實はこゝにも八萬の洲ありと云へり、大海の四方に鐵圍山あり、一世界の疆界となる、須彌頂上廣博八萬由旬、兜利天と名く、三十三天あり、帝釋を主とす、半腹に四天王天處あり、其等分虛空に在りて日月天運動す、此を地居の天部と云ふ、此上四天あり、空居の天、此を欲界の六天と云ふ、此亦上に在りて四禪天十七處あり、此外無色界に四空處あり、總じて二十八天と云ふ。下の地獄に一百三十六處あり、畜生界に三十四億趣ありと云ふ、委細は正法念經六道品を讀むべし、以上に列するところを一世界に名く、斯の如き世界其數一千種並列す、此を一小千世界とす、此一小千世界を亦一

千種並列す、此を中千世界とす、此中千世界を又一千種並列す、此を大千世界とす、經論に三千大千世界と說き玉へる是なり、慧心僧都の三界義一卷あり、就て見るべし、凡夫外道は此中の一日月界に就て一地球を議するなり、聲聞羅漢の佛弟子は此三千世界一百億の日月界を覺了して此內にて見思の煩惱を斷じ、人無我滅諦の眞理を證得したる〈聖者を出現すべきなり、此を界內の敎を名く、此を又は小乘敎と稱す、劣機鈍根の聲聞衆の耳に應ずる爲めなるを以てなり、故に此中には界外の說少しもまじへざるなり、小乘經中にては淨土の名とかざる所以なり、扨て大乘經は菩薩根性の人の爲めに說ける法門にて廣大無邊の敎なり、右に說ける大千世界を數かぎりなくならべたること觀音文殊も其はてを知らずと云へり、此中凡夫のすむところを娑婆と名け、又穢土と云ふ、有漏善惡の業因より感じ出せる境界なるを以て也、此中佛のいます國を淨土と名く、無漏純淨の最上善功德を以て建立し玉へばなり、阿彌陀經に成就如是功德莊嚴と說かせ給へる是なり、十地論には十八圓淨の法門を示し玉へる、論註に二十九種を示し玉へる皆是なり、天台法相或は四土或は三土など淨土の體相を判談することさま〴〵なり、此は法師達の學問上のことなれば今は略す。

今淨土と申すは阿彌陀如來のまします極樂淨土なり、抑々十方三世の諸佛其數恆沙の如くにして、其淨土も亦恆沙の如しと云へる中、極樂淨土は是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて極樂と云ふと阿彌陀經に說かせ給へるは、往生人の爲めには善き榜示杭とや申すべき、喜しき道しるべの枝折にぞありける、外敎の敎ゆるところ善人は天に生れ、惡人は地獄におつるよし申せど、其天其地獄と申す所如何なる所にや、何と申す所なりや、絕えて知られぬことなり、かれらは如何なる經を信じいかなるところを歸依する者やらんいといぶかし、扨て又きくところに依れば十方に無量無邊の淨土ありと云ふ、我等何故にわけて西方極樂世界に往生せんと願ふ者なりやと申すに、此に就きて昔より傳へ申すことに五種ばかりの道理あり、一に依報の遠近なり、二に正報の有緣なり、三に法の勝れたるに依る、四に行の易きに依る、五に本願の强きに依る、第一依報の近きに依るとは淨土はかず〳〵かぎりなけれど、極樂世界のみ此娑婆世界の直ぐさま隣合せなりときこえたり、淨土を以て娑婆のとなりと申すこと花嚴經の如來名號品に出でたり、（大疏第十二卷）又顯無邊佛土功德經と申すには、多く淨土の名を出したるに此世界のとなりに極樂を出されたり、十方隨願往生經には種々の淨土を說き並べ玉へる中、先づ極樂往生を最も先きとす、第二に佛此土を緣深き故とは無量壽經に、法藏菩薩國を捨て王をすて行じて沙門となり世自在王佛のみもとにして發心發願し玉ひしこと、悲華經に無淨念王法藏佛の御もとにして發心し玉へること、法華經の大通智勝佛に十六人の王子あり、第九の王子後に成佛して阿彌陀と號す、渾て此娑婆世界の發心なり、往生拾因に我等は其ころの國民にてやあるべしとは殊勝の御考へなりけり、別して此日本全國大乘は有緣の御國なる中にも、淨土の一門は萬人の歸向するところをみても極樂には生々世々、値遇結緣の深きことを知るべきなり、第三念佛の功德すぐれたるよしは、選擇集本願章の中に曰く、名號は萬德の歸する所也、然れば則ち彌陀一佛にあらゆる四智、三身、十力、四無畏等の內證の功德、相好光明說法利生の外用の功德、皆此六字の中にをさまれり、故に勝行と名く、諸行は然らずと云々、第四行法やすきに依るとは要集の文に

曰く、只是男女貴賤行住坐臥を擇ばず、時處諸縁を論ぜず、之を修するにかたからず、乃至終る時願求するに其たよりよろしとしめさる、又往生禮讃を引きて曰く、是を以て大聖悲憐して直にすゝめて專ら名字を稱せしむ、正しく稱名易きが故に相續して即ち生ずるに依ると云々、此勝と易との二義は元祖大師撰擇集の御相傳なり、第五本願の由とは集の第三章本願章の一題を別立す、是善導大師の御相傳にて元祖大師の開宗の根基也、禮讃の文を引きて曰く、まさに知るべし本誓のおもき願空しからず、衆生稱念すればかならず往生すとの玉へる是なり、我等念佛して往生を得るは大半右の義どもにて、厚く信じ深くたのみ、常々南無阿彌陀佛と唱ふべし、第二段の註釋凡そ斯の如し、

とてもかくても此身には、思ひわづらふことぞなきとは、とてもかくてもとは古書には取捨の二字をともかくもと讀み、又左右の二字をもいふ、こゝの言葉は生きても死してもと云ふ心なるべし、思ひわづらふとは思ひ煩ふことなしと云ふが如し、後世を思はず淨土を願はざる者は、平生は固より死なんずる時など別して心の殘ることのおほかるに、此も亦人情の常なれば無理ならぬいはれなれども、死王のせめきたらんには金城鐵壁のかためありとも、孟賁はんくわいの勇ありとも、須達、陶朱の富ありとも防がるべき方便はなかるべきなり、然れども凡夫愚癡の煩惱より、或は親子にも或は夫婦にも、或は國郡城宅園林草木にも心殘る者なりとぞ御經には説かせ玉へり、大集經には妻子珍寶及王位命終時不隨者との玉ひしも此まどひをさとし玉へるなるべし。

丁亥のとし二十年十月ばかり難波のまつうら寛篤翁の請に應じて花頂山の老法師筆をそむるときにとし八十二、なき後の形見にとて

難波がたあしかる人もよき人も
ひとを擇ばぬ誓ひとぞきく

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

いまよりはいつとしばかりの水な月此書ある人のもとめによりて筆をそむけふにしてこれをみればかきざまのつたなきよりことわりまでもうと〱しうなんきこゆる事すくなき折をみて改めかきなほさばとおもふなり扨ぞすこしは見らるべきかたにもあなるべし其かみ一日二日ばかりのうちなどあつらへられしよりかくてかなしきさまになんなれりものはいそぎてはすまじき事にこそ

とらのとし　行誡しるす

和泉式部が家の前を人の女郎花もてすぎけるを見て、いづくへぞととひしに、叡山に供養せんとてゆくと、こたへけるに、

名にしおはゞいつゝのさはりあるものを
浦山しくものぼる花かな

とよまれき、げに女は罪ふかくうまれ出でて、三世の諸佛にもきらはれ、十方の淨土にもとざされて、出離時をうしなひ、解脫道を忘れたり、はやくぼだい心をおこさずんば輪廻はたはるかなるべし、抑二千八百年のむかし、釋迦牟尼如來世に出でさせ玉ひて、八萬四千の法とかせ給ひしかど、女人の後世ぼだいの道たやすくしめし給へる法門いとまれなり、たゞ無量壽經の四十八願の中、第三十五の願のみひとり女人の菩提の道ひらくべき御願にてぞ有りける、いでやその願文のこゝろをしめさんに、まづ初に本願の文をしるし出し、後に其願のこゝろをこまかにときわくべし、初に本願の文とは、

設我得レ佛、十方無量、不可思議、諸佛世界、其有二女人一、聞二我名字一歡喜信樂、發二菩提心一、厭二惡女身一、壽終之後、復爲二女像一者、不レ取二正覺一、

後に此願の心をときわくるに、三段にわかちてしめし申すべし、初にほとけ此願をたてさせ給ふ心をとき、次に厭惡女身といへることばを釋し、後に女人此願に乘ぜざれば後世たすかるまじきよしをしめす、初に佛此願をたて給ふこゝろをとかば、そも〱あみだ佛まだぼさつにて法藏比丘と申し給ひしころ、世自在王如來と申す佛の此世に出現まし〱けるに逢ひ奉りて、はじめて此願をおこし給ひしなり、およそ佛ぼさつの一切衆生を救ひ給ふ御志は、父母の子を愛するにもはるかにまさりて、それが中にも十惡五逆など申すすさまじき罪つくりたるもの、或は女人などの佛法非器の人をば、わきていつくしみあはれみ給ふなり、其中にも惡人なれども、をとこはさしたる事もなし、女は解脫の道に遠きものなればとて、とりわき女人ばかり救ふ願ひとすぢおこし給へるなり、女も男もおなじ人の身をうけたるに、とりわき女のみを願にまうけたるを、大悲きはまりの樣にまをすは、そのいはれある事ぞかし、抑男女は境界のたがへるものにて、其かたちのことなるより、心もしたがつてたがへる物なり、されば男は天に配し、陽に配し、輕くやすらかに、心もすみてうまれ出で、女は地に配し、陰に配し、おもく六かしく、心もにごりてうまれつきたり、かたちの上にても男は進退出入もかろらかにして、六かしからず、女は門を出づるにも必ず其面を蔽へ、夜ゆくには燭をとれなど曲禮と申す書に見えて、むかしよりいとむつかしげに生れつきたり、こゝろのかた

にとりても、をとこはこゝろもちかろく、やすらかにして、水のすみたるにたとへ、女はかたくなにむつかしくて、水にたとふれば、いと濁りたるものなり、何事につきても竹の葉わたる夕風の、さら〳〵とすゞしからで垣根のいばらまがるかたにのみ從ひやすくて、おなじ人の身ながら、陰陽はるかにへだたり、曲直ことの外にたがひたり、をし鳥と申すとりは雌雄つがひてすめば、後のうきねいとしづかなれど、めとりばかりをかひたる時は、夜ひるにさわぎあらそふとぞ、此鳥かひたる人のものがたりき、女とてもさすが人の身うけたれば、此鳥のやうにはあらねども、こゝろゆくかたはおのづから相似たるにや、されどおなじ貪瞋癡などのぼんなうも、殺生、邪婬などの惡業も、男のはかろく、女のはおもげにぞ申し傳へたる、疑心と申すも十纏惱のひとつにて、男もたがはでおこせども、女の疑ひはわきていみじくつよきよしなり、右のぼんなう業のつよき殺、盜、婬のまされることをすなほにしても、佛法にいりたゝざる人など、後の世は無しなど思ひ、又はたとひありとも、女などは救はるべきよしなからんなど、疑心ひとたびおこらば、千引の岩引かへすべき方便なかるべし、されば疑惑も男子にまさりてつよかるべし、むかし今の物語もいと多かれど、後のくだりにしるし申すべし、さゞれ石はさゝやかなるものなれば、かひなき女童のたな心の上にものせつべし、若むせる岩となりたらんのちは、大きなる舟にあらざればのせはこぶことあたはざるがごとく、罪障もかろく、ぼんなう薄き、をとこのかたは、佛ぼさつ方便も御力おほくつひやし玉ふに及ばじを、女人ばかりは、もとより罪障ふかき上に、疑心なども世につよくて、浮ぶべき期もしられざることを、ふかくあはれみ玉ひて、さてぞ法藏ぼさつのむかし、第十八の願には十方衆生と誓はせ給ふ上、また第三十五に女人往生の願をたてて、大悲の御力をつよくかけさせ玉へりしなり、女人往生を別に誓はせ玉ふよしあらましかくの如し、このごろ、ある上ろふのまうできて、承りたき事の侍るをこたへ玉ひてんやといふ、何事にかと申しければ、すぎしころ、ある上人のいへるには、法華經に八歳の龍女、法花の功德によりて無垢世界と申すにて、たちまち成佛の相を現じ玉へり、ことに法華經は一切經中の經王のよしとかせ玉へり、釋迦佛をすてて阿彌陀を念じ、法花經をさしおきて四十八願をたのまん事は、ちかきを捨て遠きにゆき、たときをなげていやしきをとるなり、女人成佛と申す事は法華經にかぎりて餘經にはなき事なりなど、理をせめてとかれき、今聞くとは水火各別なり、いづれにかより侍るべきと問はれき、それに答へ申しゝ旨を、いさゝかしるし申すべし、抑一切衆生はさま〴〵にうまれ出でて、かしこきものあり、おろかなるものあり、たとき人あり、いやしきひとあり、心のひろきものあり、心せまき人あり、人心おもての如しとて、百人百種にたがへり、ひとすぢなるべからず、こゝをもて佛の說法もひとかたによらず、千萬にわかれたり、小機のためには小法をとき、大人のためには大法をとき玉ふなり、維摩經には是を病に應じて藥をあたふるが如く、機に對して法をとくとなんしめし玉へる、かたくなに申すべきにはあらぬなるべし、何と說かせ給ふとも、みな般若波羅蜜より涌出し給ふみ法なれば、いづれも甚深みめうの法門なり、釋迦如來むかし三十の御とし、御さとりひらかせおはしましてより、八十ねはんの夕まで、一代五十餘年の間、はじめ鹿の園生の御會座より、をはり沙らさう樹の夕まで、およそ八萬四千の法門と申せども、其ことは無量無邊の御說をしへなるべし、此中に片言のあやまり

なく、一語のたがへることなし、いづれかよくて、いづれかあしと申すことのあるべきぞ、たゞ機根のすぐれたる人きけば、あさき御法もふかきさとりとなり、機根のおとりたるが承れば、深き御經もあさくぞさとられける、西行法師の月やは物をとなげかれしも、紫式部はうはの空にもとうらみられたるも、おなじみそらの月かげなれど、物思ふ人々の心の上には、うらめしくもみえ、なげかしくもながめらるゝぞ、いとをかしげなる物なりかし、佛の道もそれとおなじことにて、いづれかよき、いづれかあしと申す事たえてなき事なり、淺深勝劣はみな其人によりて申す事なり、其證據一つ出すべし、むかし釋迦如來鹿野苑と申す處にて、まだ初學の御弟子衆のために、阿含經と申すをとかせ玉ひぬ、此御經はこゝろあさく、筋いやしく說きて、いとうひ〳〵しくぞをしへさせ玉ひたるなり、さるを其時虛空にはべりて聽聞し玉ひたる梵天帝釋などの諸天人、毘沙門、廣目などの天衆たちは、けふは不思議の大般若經とかせ玉ひたるとぞ窺はせ玉ひぬる、此天人たちはむかしよりおほくの佛に逢ひまゐらせて、久しく大乘のふかき法門どもを聽聞し玉ひて、たかきさとりをもひらき給ひたるぼさつたちにいませりければ、かるくあさ〳〵しく說かせ給ひても、やがておもくふかくぞ聞きなされ玉へると、天台大師はとかせ玉ひぬ、これぞ佛法はいづれもおなじことにて、ふたへなしと申す事を、からこそ心得申すべきなれば、機に叶はぬをしへはふかくとかせ玉ひたるも、あさくきかれ、機根に應じて利益あらはれぬれば、あさき法もふかくたとくなるなり、法花經を經王と唱へ、龍女の成佛と申す事も、其機根に叶ひて利益あらはれてこそ申す所なれ、われらが分には、結緣と申す名もはゞかり申すべき事にてぞありける、それを龍女成佛と申すことばのちかきをとりて、法花つとめよ、女人は成佛すなど、おほらかに申しちらすは、かへつて法華經の旨にはあらざるべくして、佛の御こゝろには叶ひがたきにや、龍女成佛と申す事いとたとき事なり、ついでに御經のこゝろをつまみてしるし申すべし、法華經第五提婆達多品にとかせ玉へるは、大海の中に沙竭羅龍王と申す龍神あり、それが娘に八歲の龍女ありけり、文殊菩薩にしたがひて靈鷲山にまうで、釋迦牟尼如來に見え奉りけり、如意寶珠と申すたまは、ふたつなき龍宮のたからなりけるを、父の王に乞申して、もてきたりしを、けふの御布施にとて釋迦牟尼佛にぞ獻じ奉りける、佛御こゝろよくうけさせ玉ひたるをみて、龍女いとうれしげに御座をしりぞきて、御弟子の智積菩薩と申すに向ひていへりけるやうには、我つたなき海鱗の類に生をうけ、人天の果はうにだも及ばざれど、宿善たゞならず、今たま〳〵釋迦如來に見え參らせぬ、今は成佛の期ほどもあらじをなどほのめかし玉へり、智積ぼさつと申すは、まだ御さとりたらざるぼさつにや有りけん、龍女がかくほのめかし玉へる事をきゝとがめ玉ひて、あな思はずよ、およそ女人には五障と申す事の侍りて、梵天帝釋などきこえつる世界の王にだもなれざるを、まして女人のいやしくけがれたる身をもて、無上獨尊の佛の御位にのぼらんなど思ひもよらじと、こぼちしかり玉へり、龍女此をきいて、おもむろにこたへていはく、善惡の因果はかげとかたちとの如し、寶珠を如來にほどこし奉れる此果報、いづくにかむくはん、たゞ佛果にこそむかふべけれ、われたゞ今その佛果をしめさんとて、見るがうちに女身をてんじて、三十二相の佛形を現じ、南方無垢世界と申すにて八相と申す大なる佛事をあらはし玉ひたるを、智積ぼさつ舍利弗尊者などの、當時の衆會まのあたり此不思議をみ參らせて、

はじめて佛道にいるものは、遲速遠近はあれども、一切衆生悉皆成佛すべきものぞとはさとられたりとなん、さて此龍女をいかなるものとかしる、諸佛所レ說、甚深祕藏、悉能受持、功德具足、とときて、形こそ龍女なれ、其さとりは文殊、普賢、觀音、地藏などのぼさつにおとらざる御さとりひらかせ玉ひたるにて、扠こそ於二須臾頃一、辨二成正覺一とて、見るがうちに成佛の相を示現し玉ひしなり、されば天台大師は普現色身三昧の示現する所なりとぞ、文句と申す文にはとかれたる、何の修行もなく、何のさとりもなき人の、法華經一度讀誦し、題目一遍唱へたるが、すぐに龍女とおなじく八相成道し、南方無垢世界にて佛身を現ずるやうになど申す事のあるにはあらざるなり、されば、とて、一句聞法の力むなしからず、成佛の遠因とはなり侍れど、けふより幾百千萬劫をへての後をへざれば、あたはざる事なり、あやまておのれと龍女と同じほどなるものなどおもふまじきなり、こは增上慢と申しておそろしき罪らべきなり、抑成佛と申す事は、釋迦、彌陀、藥師などの多百千萬劫の修行成就し給ひ淨土を建立し、一切衆生を利益しつくしたる人のなれるにて、わづかに此三千界のうちにたゞひとりぞましましけるなり、たれ〳〵もみな佛になるなど申す事は、佛になれる遠き因緣となれるにてすぐにと申すにはあらぬなり、慈惠大師ののり玉ひたる車の牛の、おのがよだれにて、おのづからかきたるやうになりたるをみれば、歌によまれけるとて申し傳ふるをきけば、

草も木も佛となるときくものを心ある
身のたのもしきかな

これ法華經の功德、卽身成佛の利やくよみたるなれども、これも心あるほどのものは、みなほとけのたねもてりといへる涅槃經などのこゝろをよめるにて、たれ〳〵もすぐにほとけの姿をあらはすなど申すにはあらざるなり、天台、大師は六卽と申す事をときて、成佛と申すにも六しなにわかれて、ひとかたならずといへり、凡夫の身ながら、すぐになど申すは理卽の佛とて、佛の名はありても、たとからぬほとけなり、ことばに成佛と申せるを、かろ〳〵しくは思ふべからずといましめ玉へり、されば法華經の結緣などは成佛の遠因なりとふかく信じさせ玉ひて、なほざりにおぼすべからず、なほざりに思へば、ひはう正法の罪うる業となるなり、たゞし、成佛と往生とのわかれめをよくしるべし、成佛と申すは右申しゝ如く、凡夫などの容易にうべき位にはあらざるなり、いと〳〵遠きことなり、往生と申すことは、此身の一生をつくして、この後の世にはすぐにごくらくの蓮臺にたましひをやどすなり、こは百年ばかりのうちにて、いとちかき事なり、こは罪ふかき障りおほき、凡夫の身をあらためずして、すぐゆかるゝ所なり、これをたとへて申さば、成佛は一國の王となるが如し、煩惱の敵をきりたひらげ、法王の御子なりと申すさとりひらけて、一切衆生みなすくひて後にこそうべき位なれ、いと〳〵むつかしきことなり、往生と申すことは其國に奉公給仕に參る如きものなり、何樣のものにても參るべきゆかりもとめつれば、ゆかるゝ所なり、たとへば奉公には、かろきもおもきもあれど、人をもえらばれず、うつはにもよらざるなり、いとなしやすきわざなり、されば往生すと申す事は、後に成佛すべきの下づくろひと、しり申すべきなり、法華經にも十方の淨土に往生せよと所々にとかれたるは此意なり、されば成佛はきはめてかたく、往生はたやすき事なりと申す事をよく〳〵しり申すべきなり、其事もろこしの善導大師のしめされし御ことばに見えたり、かく申したらんには、いか

ほどおろかなるものにても、よくわかれぬべしと申したりき、阿彌陀如來、女人往生の本願をたてさせ玉ふこと、あらましかくのごとし、
此外に藥師の十二の願の中に、女人、男子の身に轉ずといへる願あり、今の本願に相似たりなど申すことも侍れど、事しげければ畧し申すなり、
次に女人は必ずおのが身を厭惡すべしと申す事をとくべし、法華經には諸苦所ㇾ因、貪欲爲ㇾ本ともとかれて、男女とも、此世界にも、おのが身にも、貪執してこそ、生々世々の迷ひはさめぬなりけれ、されば善導大師は生死甚難ㇾ厭といましめ玉ひて、おしなべては厭離穢土とは敎へ玉ひしなり、中につきて女人の身は愛執ふかくうまれつきたるより、其身をいとひ、にくむなど申す事は、かけても思ひもよらず、さる事承りてもうるさしなどおぼすべし、遺敎經にも我は病をしりて藥をあたふるものなり、服するとふくせざるとは醫のとがにあらずととかせ給ひつれば、うるさしと思ふ人はおもふべし、いでや佛のとかせ給ひつることばども、とりあつめてしるし侍るべし、およそ佛敎に女人のよからざる事をとかせ玉ひたる、千も萬もあり、くはしくはのべがたし、今唐の道宣律師と申せる大德の、淨心誡勸と名けし書に、かゝせ玉ひし女人の十失と申す事をうつし出して、扨それにむかしばなしいさゝか思ひ出づる事をしるしつけて申すべし、童部たちにも此通りを傳へ給へかしと思ひ侍るなり、十失とは

一には貪婬　　二には嫉妬
三には諂曲　　四には放逸
五には惡言　　六には背夫
七には姦儉　　八には貪財
九には欲火　　十には不淨

なり、
一に貪婬とは、貪とは心にかなふことに執心のふかきなり、これは何の事にもわたれども、わきて色欲をもととときたまへり、此國を欲界と申す事は婬欲、食欲、睡眠欲とて、欲ありてぞ名けたるよしなり、禮記と申す文には、飮食男女は人の大欲存すとかれて、ふるきむかしより今の世までも、おなじさまに心をつくし、思ひをこがす境界とはなれりけり、それ、をとこもおなじ煩惱なれども、わきて女は甚しきよし聞ゆ、もろこし陳と申す國に、夏姬といふ女は、みたび后となり、七度諸侯の夫人となれりしとぞ、陳の靈公も此女のためにころされまし〳〵、申公巫臣と申すもこれがために三族を夷げらる、おそろしき貪婬のさまなり、されば此道をよくつゝしみ申す人をぞ世には賢人君子などほめ申すなり、煩惱無邊なれども、誓願して斷ぜんと佛の誓はせ玉へるも、かばかりのきづなきらんとての御てだてなりけり、つゝしむべきことなりけり、
二に嫉妬とは、物ねたみするなり、人の上に幸ひあるを見て浦山しく思ふより生ずるなり、をとこの上にもそなはりたるぼんなうなれども、女人の上はわきてはなはだしきなり、むかし漢の高祖のきさき呂后と申すあり、又高祖の妃に戚夫人と申す侍りて、趙王如意の母なり、高祖の御心には、此如意を太子に立てばやとおぼししかど、さま〳〵の障る事ありて、さもせられずなりて、呂后の御子惠帝ぞ御世はつがせられける、いくほどなく高祖崩御まし〳〵けり、としごろにくしとおもひしかど、高祖の御寵愛ひまなくしてすごしつるを、今はたれにかはゞからんとて、呂后の戚夫人をとらへ出して、これをしばり、まづふたつの御まなこをくりぬき、ふたつの御みゝを火をもてふすべつぶし、ものいはれぬ藥をのましめ、さて兩の御手、兩の御あしをきりすて、これを人彘となんなづけて罪人をおくひとやのうちにぞなげいれられけ

る、いたましきかな、戚夫人は玉の如き御かほばせ、雪をあざむく御はだへ、たゞあけにそみて、きも消え、たましひほろびて、苦痛申すばかりなけれども、聲をさへに出すことも叶はざりけり、あやにくかひなきいのちはまだつきざりければ、あるにもあらで苦しませおはしけり、嫉妬の婦人よにもおほけれど、かゝる無ざんなるせめさいなみは、もろこしにも、むかし今、ためしなかりけり、さるたゝりにやありけん、呂后の一族ども、後にむほんして三ぞくみなたひらげられ侍りき、いとおそろしきわざなりけり、抑おのが果報のつたなきより、世のおぼえもわるく、寵もおとろふるなるを、かれあらずばなどおもふは、いと〳〵おろかなることなり、つゝしむべき事なり、

三には諂曲、諂とはへつらひなり、曲とはまがるなり、心に左もおもはぬ事を、ことばなどに出して、まげてへつらひ、いつはりて、をとこなどたぶらかす、野にすめるふるぎつねなどのしわざに似たりけり、むかし天竺に老いたる波羅門あり、わかきつまもちたり、此つま老いたるをとこをいとひ、あはれわかきをとこになど思ひて、老ばら門をあざむきて、こゝらのわかきばら門、徳ありときこえたり、家に請じ入れ玉へといひけれど、老ばら門妻の志もや、うつさんかとうたがひてたえてゆるさざりけり、或時老ばら門の先の妻のうみたりしいとけなき兒の、あやまりていろりの火の中にぞころび入りたり、此妻見てありながら、さらにたすけんともせざりけり、老ばら門あわてまどひて、これをたすけ出して、後に妻をとがめて、何とて小兒の火中にころび入りしをたすけぬぞ、いとなさけなしとうらみければ、妻こたへていへりけるは、かの小兒もをとこ子にあらずや、おのれ君の妻たるもの、何とてをとこにはちかづくべき、君が思ふらんもはづかしなど、まことしくいへりけり、此老ばら門もとよりおろかなりや、又老にほれたるにや、我婦は貞女なりなどよろこびて、其後はわかきばら門どもをまねかせけり、女は思ひまうけし事なれば、わかきばら門どもと、おもふまゝに姦通をぞしたりける、老ばら門後にこれをしりて、いかりくやめども、せんすべをしらざりけるとぞ、雜寶藏經にはとかせ玉へり、よにをかしかりけり、これらを諂曲とや申すべからん、

四に放逸とは、心のゆくに從ひ、思ふにまかせて、なじとなすこと善きかたへおもむかぬを申すなり、たとへていはゞ、君父に奉公し參らすにもあらず、夫主につかふるにもあらで何事もなきに衣裝をきらびやかにかざり、かたちをかいつくろふなどにも、其ほどほどをすぐしたらんは、みな放逸と申すものなり、位にかぎりあり、身に定まりあれば、僭上のかざりはかまへておそるべき事をしるべきなり、むかし後漢の明帝の后は、賢女にまし〳〵て、きさきに備はらせ玉ひても、猶衣裾を引かずとて、長き御すそを曳かせ玉はずとなん、節儉のいたり、いとありがたくこそ、

五に惡口とは、人をそしりこぼつなり、そしりこぼつ中にも、人の非儀過失を見出で、聞き出でて、それを申しならべてそしるなり、こは貴人などの中には、すくなきとがなれど、下ざまの人、はしたなきあたりには、きはめてたぐひおほし．女は常より物しづかにうまれ出でたれば、をとこよりはつゝしみもこまかなるべきを、おし出でてそしりごとするなど、人ぎきわろきさまなり、はづべき事なりかし、つゝしむべき事なりかし、雨夜のしな定めに出せしひるひの女めきたるぞ世にはいとおほくこそ、天竺のむかし波斯匿王と申すに、金剛夫人とて、ひめ御いませり、生れつき見にくき事いはんかたなし、髮の毛はあらくして馬の尾のごとく、總

身は蛇の皮のごとしとぞ、父の王いたく恥かしくおぼして、人にも見せずなんありける、後にある臣下に此夫人を玉はりてけり、その國に妻もてるものは、妻をゐて、ものへまかるべき禮の事ありけり、此大臣つまありつれど、いつも具せで出できにけり、外の大臣どもみな〳〵さたしけるは、彼人はいつも妻をおきて、ひとりのみぞいで來る、何のゆゑならんといへりけるに、かたへの大臣、かの人の妻のかたちいといとすぐれて、天下にならぶものなかるべし、扨は人に見られればいたづら事もありなんとて、ひとりくるならんといふ、かたへの大臣のいへるには、左にあらじ、いとみぐるしくて、人中には出し難きなるべし、扨こそ將てはこぬならんなど、とり〴〵に評したり、はてはおし入りて其妻を見ばやといひ出せり、大臣のなき折なればとて、さておし入りたり、大臣の家には例の錠口ありてみだりがはしき人いれじとひしめきたれど、何がしの大臣ぞ、それがしの大將ぞなど、なのりつゝ、いやおしにおしいりたり、金剛夫人は深閨のうちに人となりたるさへあるに、としごろわがをとこより外の人みし事もあらぬを、けふはよそ人やがておし入りてきつるよしきかせ玉ひて、いかにせまし、かゝるすがたをあだ人に見られれば、父の王にも、わが大臣にも申すべきことばなし、大聖釋迦牟尼如來よ、われをたすけさせ玉へかしとくりかへし打くどき念じ玉へりけり、佛の世にまし〳〵ける時はかたじけなきものにて、やがて天耳通のきかせまし〳〵けん、金剛夫人の宮殿のうちに釋迦牟尼如來ぞあらはれ玉ひける、烏瑟の御ぐしみどりにして、はれたる空にひとしく、月の御かほばせかゞやき、青蓮の御まなじり慈悲をたゝへたり、光明あたりにかゞやき、相好見るにいとふことなし、金剛希有の思ひたゞならず、身もかろく、心もすが〳〵しく成りて、世の事すべてわすれはてたり、かゝるともしらで例のわろものども、おし入りきて見けるに、夫人は玉のかんばせかゞやき、ふようのまなじりいつくしく、寶冠いたゞき、やうらくかゝりて、瑠璃の床に、にしきのとばりをたれて、何事をか念じ入り玉ふさまにて、御手なよやかに合せおがませ玉ふさま、さながら帝釋天のなさき舍支夫人にもまさりつらんとまでに見ゆめり、おのづからなる威儀あたりはらはれて、恥かやかゝさんとておしいりし大臣たち、ねずみのにぐるごとに、みな〳〵はしり出でたり、このをとこの大臣歸りてければ、ありし事どもかたらせ玉ふをみれば、こはいづくの姫君ぞと申さんばかりの美人にぞかはりおはしける、何としてかうまでは成らせ玉へるぞ、ひとへに御ほとけの御利益よと、まづ父の王の御もとへ申させ玉ひければ、父の王おどろきて見玉ひ、かぎりなくよろこばせおはして、佛に此事とはせ玉ひければ、佛のつげ玉ひて、むかしの世に長者の宅に女あり、其ころたとき羅漢まし〳〵けり、かたち見にくかりしなるべし、此女口さがなき人にて、あのらかんよ、かみは馬の尾のごとく、からだはくちなはの皮の如し、見るもいまはしとなんそしりたり、扨此らかん後に神通あらはし玉ひしをみて、はじめて恥ぢくやみ、ゆるさせ玉へとぞ申しける、其そしりつる如くに、おのがみも、からだもその如くなり、後にくいわびたるにて、扨佛にあひてふたゝびうつくしく成れるなりと說かせ玉ひける、因果はおそるべきことなり、つゝしみ申すべきことぞかし、悪口のとがをしめしをはる、

六に厭背とは、おのが夫をそむきて、他のみそかをするなり、これがため百千の悪計して、つひに夫を害するにいたる、むかし今、常のことなり、むかし、天竺に女ありけり、荒姪無道人をえらばず、おのが夫主を厭背して、ころさん

ことを思ひはかりけれど、いまだ其時を得ざりき、ある時をとこ他國にゆく事あり、旅よそほひせり、女五百粒の丸藥を製してこれをしろかねの壷にいれて、をとこにいへらく、出でたゝせ玉ふ時もわろく、處もよからず、病あらば是をめせ、すみやかに病いゆべし、うゑ給ひなば、これをたうべませ、力つかん、よくいとひ給ひて、はや歸りきませかし、ひとりすみたらんは心うき物をなど、打なげきつゝいだしやりぬ、夫主ゆく道たがひて或山中にまどひ入りぬ、ゆけども〳〵里にいでず、日くれたり、とらおほかみどもすめる所なりけり、いかにせまし、たゞにねたらば、夜中にくはるべしと思ひて、もてるもの木のもとにおきて、おのれひとり梢によぢのぼりて、枝ほどよき所にねたり、子ふたつのころもすぎて、うしのころなるべし、すさまじき人のわめく聲す、ばけ物なめりと思ひてのぞきみれば、いかめしきぬす人どもなりけり、手に手にまつともしてけり、四五百ばかりなるべし、おの〳〵いろ〳〵のものぬすみたるを、木のもとにおきてやすらひたるさまなり、此旅人のもてるものさしおきたる見て、引ほどきたれば、銀の壷に例の丸藥五六百粒いれたり、ぬす人どもよろこべるさまにて、こはよきものこそあれ、あまりにいそぎてにげたれば、物くふひまもなかりき、はらへりたり、こは力づくくすりなりとて、われおくれじとてみなとりくらひをはりぬ、とみるがうちに、とり〳〵くるしみて、血などはきちらし、うめきくるひつゝ、みなしにたり、としごろぬすみせしむくいなるべし、旅人梢よりはひおりて、はじめて妻のおこせしくすりは、毒やくなりけりとしりて、扨もあやふかりしを、いたましくもぬす人どもこそわれにかはりけれと、念じはてて、それらの事を其國のおほやけにつげまをしければ、國王はうびし玉ひ、つひに其國にとゞまりけりとぞ、此事法苑珠林の背恩の部に百喩經を引きて出されたり、にくき女にあらずや、

七に姦儉とは、姦はあやふく私するなり、儉はさがしくするどきなり、女のこゝろたのみがたく、まことをいつはりとし、いつはりをまことゝす、あるは國王の勢をかり、あるはまひなひをえて事をひるがへし、物をてんだうす、ひとたびゑめば城をかたぶけ、ふたたびゑめば國をかたぶくと、むかし人のうたひたるぞげにまことなりける、伊勢物語に鳥の子を十づつ十はかさぬともとうらみしは、此姦儉などの事をよめるなるべし、

八に貪財とは、財とは財祿なり、金銀などにはかぎらず、國城、田宅、衣服、飮食、其餘珠玉、珍奇のたぐひ、意にかなひたるもの、みなこれなり、男子の上にも、此むさぼりはかはらねど、例の女なれば執着ふかしとす、むかし釋迦牟尼佛世にまし〳〵ける時、難陀といへるいやしき老婆あり、きはめたる物をしみせる人なりけり、びんづるらかんと申すが、むかしの世の因縁やいましけん、ある時たくはつに門にたゝせ玉へりけり、老婆其日はもちひくはんとて、みづからつきこねなどして、あみにのせて火とりてゐたる時なり、人きたらばくはせんことのおそろしくて、門はさきにとざしてけり、尊者神通にて庭に出現し、老婆のもちやきゐたる前になんたゝせ玉へりき、老婆これを見奉り、きもをけし、あなけうとき人かな、いづくより入りて我前にはきたり給ふぞと云ふ、尊者のたまはく、ともあれ、其もちひ、ひとつ、ふたつ、われにえさせよと、老婆またきもつぶれて、さればこそ門とざして人はいれじとせしを、よし〳〵、何との玉ふともやらじと、思ひ定めて申しけるは、よしや君がふたつのまなこは、とび出でて、地におつるともやらるべきかとい

ふ、尊者神通にてふたつのまなことび出させ玉へり、老婆これをみて、よしやまなこはおろかなり、死すともやらるべきかといふ、尊者また滅盡定と申す定にいりて、いきすこしも出さで死にたるさまになり玉へり、老婆これをみてさすがに心まどひて、此尊者は國君大臣たちのうやまひもてなし玉へる人なるを、わがやどにて死にたらんなどいはゞ、いかなるうき目やみるべき、あはれ今一度いき出でさせ玉へ、さらば此もちひ參らせんといひければ、尊者やがて息ふき出させおはしけり、老婆もよみがへりたる樣によろこびて、さらば參らせんとおもふに、こちらのは大きすぎたり、これはいとあつかりけりなど、もてあつかひけれど、みなをしくてやられず、別にちひさくこしらへてんとて、いとさゝやかにつくりてあみにのせて、やきて、いざとてはさみて出さんとせしに、いかにかしたりけん、外のもちどもみなつき從ひてあがりけり、こはとて引はなしてあぐれども、またおなじさまにつき合ひたり、老婆はらたちて、沙門よ、ほしとおぼさば、どれにてもたゞひとつとれ、などてかばかり老ばにからき目みするぞ、もちどもはみなつきてはなれぬはと、くどく、尊者笑ひての玉はく、我あに汝がもちひひとつほしとてきつるものならんや、汝にはさるべき因縁ありてこそきたれるなれ、いざわれにしたがひて釋迦佛の御前にまうでよ、汝に大なる德つくことあり、其もちひもみなもちてこよとしめし玉ふ、老婆おもへらく、げに此もちひとつも、のこしおかば、人やくはん、もちゆくもげによからんとて、みな箱にいれて錠などおろしこめて、扨尊者につきて祇園精舍にぞいたりける、思ふにはまさりて、ありさまのたとさに、こはかたじけなき事よと思ふこゝろぞ出でにける、佛つげて汝がもちひとつ水になげてみよと仰せけるに、なげつれば、其まゝほのほとぞなれりける、こは餓鬼道の前相なりとぞ、其餘今日の大會にひとつづつ供養せよとの玉ひける時、老婆はじめて宿善ひらけ、こゝろざしおこりて、その如くなしてけり、佛さま〴〵に說法まし〳〵ければ、初果と申すさとりひらけ、五戒うけて歸りけりとぞ、此老婆の因緣いみじくて、佛にも、らかんにも、あひまゐらせける果はうあれども、猶宿習やみがたくて、さるをかしきけんどんは、のこりたるを、ましてたゞの凡夫いかほどかものをしみはつよき物とかはしるや、をしむともをしみはつべきにあらねば、心よりかけはなれて、悲田、敬田、福田、施しまをすべきにや、

九には欲火、これは人々情慾の心のほのほ、おもひをこがすこと、さかりなる火の如しとなり、此事大かた上のどんいんの段にて申したれば畧すべし、

十に不淨とは、むさくけがれたる事なり、抑人の身の上はほねをつらね、肉をつゝみ、筋をくさりて、皮をはる、九穴よりうみしるあふれ流れて一日もやすむことなし、女はこれが上に月々の經行をそへたり、淨心誡觀にはこれを出されたり、經行はうまれつきたる身體の上の病にて、大小便利とおなじほどの物なれば、それありとて罪と申すものにてはなし、されどけがれたる方は今ひときはをとこよりまさりてけり、扨此等の不淨は男女に通じておなじことなれど、わけて女はよく容貌をつくり、脂粉をいろどり、錦繡をまとひ、けはひふるまひ、きよげにうつくしく、なよやかに思ひはなつべき所もあらぬより、人のうはの空になりゆき、身にかへてだもあふことをなど、おもひしみたる執念、いづれのよにかはわすれはつべき、それはた男の方によきもあれど、まづうつくしきかたは女ぞすぐれたればとて、あるは九想觀、骨鎖觀、不淨觀などとて、このまどひさまさん

とての方便に、いろ〳〵の執行はとかせられたるなり、むかし目連尊者、いまだ家にいましゝ時、妻を具し給ひけり、ほとけの御弟子とならせ玉ひし後は、ふるさとのことなどはすべて思ひわすれて修行し給ひければ、羅漢果と申すおさとりひらかせおはしましけり、のこりゐたる妻の夫人、いたく悲しくやおぼしたりけん、或時姿かたちうつくしくかいつくろひ、祇園精舍にぞまうでたりける、むかしのをとこよ、あはれ御寺にあきたり、けふはもろともに歸らんなどの給はゞ、いかにうれしからんなど、はかなくも思ひつゞけられて、扨あひまみらせたりけり、めづらかにもまうでき給ひけるものかなと、の給はする御貌かほもやせほそりて、むかしのおもかげは露のこらざるに、まづ涙のみはふりおちぬ、しばし家に歸らせおはしてんや、あまりにつかれさせ玉ふなど聞えければ、尊者打きかせ給ひて、汝はまだむかしの目連とやおもへる、世におもひ違ふるところならば、汝がきつるをうれしとも、なつかしともおもふべけれ、三界のぼんなうたえはてて、かけひの水のすみわたりたるこゝろより、汝が今日の姿を見れば、刀に蜜をぬりたる樣にも、ゑがけるかめに糞をもりたらんやうにみゆるぞ、毒蛇の毒をふくむは倚手をもふれつべし、女人の笑をふくむはちかづくべからず、汝は世々の契りありて、しばし夫婦のえにしむすべるものなれば、あはれわれに習ひて御佛の道にいり玉へかしと、ねんごろにしめし玉ひけり、夫人は今更の樣にかなしくも、かたじけなくも、今までのまどひごころも、まぼろしの夢さめたらんやうにおぼえて、御貌いとま申してけりとなん、御佛の御世にあひ參らせたるさへあるを、まして目連尊者の妻となりたらん いみじき宿善の人にやと いとら山し、

むかしより女の經行を罪のこと、とがめて、此不淨を諸天善神もきらひて云々、……後に血の池地獄におつるなど申して、血盆經と申す經つくり出で、それ申しつろめて女をおとすわざせるもの、ちかごろ聞ゆ、いと理なきものなり、女の經行は人の大小便利とおなじものなり、不淨は不淨なれどもこれありとて罪うべきものにあらず、罪と申すものはぼんなうの心より、せでもよきことするぞ罪にはなるなり、身の上におのづからなれる事は、果報にてあらはるゝものにて、果はこれ無記とこそ判じ申候なり、經行罪得ば、男の大小便利もながれて海川へもいり、其終り佛神へも奉るなり、さらばをとこも血の池へゆくべし、さらばとてこれこらへてせぬことにも及ばず、もしいましめば涕涶便利西方に不向といへり、經行も西に向ひ申さずやうにもあるまでなり、血盆經のこと別に記するものあり、今は畧す、

女人の十失と申す事、あらましかくのごとし、此外にもかぞへなば、數猶おほかるべし、さまではとて畧し侍る、から承ればあしといふことは、おほかた女人の上に流れよるもののやうなり、なにしか、さるやうにはうまれつきたりけん、あやしきまでに心ぐるしき姿なりけり、されば御經には女人のある所には地獄ありともとき、女人は地獄の使なりともの玉ひ、外面如菩薩、內心如夜叉などともしめし玉へり、扨こそ女の身は世にもいとひにくみて、貪着をおこし、愛執すまじき事を、今の願の文には、厭惡女身とは說かせ玉へるなりけり、いとふが上にもいとふべし、不淨臭穢の身なり、憎むが上にもにくむべし、惑業深重の形なり、千歲集に和泉式部が地獄のゑに、つるぎの枝に人のつらぬかれたるを見て、

あさましやつるきの枝のたわむまでこは
なにの身のなれるなるらん

とよめりしは、まことのことにぞありける、後に女人此願に乘ぜざれば、後世たすかるまじきよしをしるす、此事むかし向阿上人と申し、大徳いまそかりき、それがしるされし西要抄と申すふみの中のことばをときわかちて、これをしるし參らせたらば、われらがつたなきことかきつらねたらんには、はるかにまさるべしと、おもふものから、いさゝか其よししるしつく、たかくかけるは本文なり、ひくき方は其講釋なり、

西要抄にいはく、

又なまさがしげなる女の聲にて、

時は秋の末とかや、向阿上人と申す大德、嵯峨の釋迦堂に通夜し玉ひし夜、おなじ堂の局に女のゐて老僧に物とひしことばども、みなたゞならぬ事どものみにて、みゝとめてきかせ給ひたるを後にしるしたるなりとぞ、まことには佛の變化し出で玉ひけるなめりなど、かきしるされき、此書は三部のかな抄とて、本朝の佛說など申して、むかしよりもてはやすものなり、ことばのみやびかなるはもとより、義理のたゞしき、後世者はかならずかたはらにおくべき文なり、註釋はいろ〳〵見ゆれど、心ゆきし註はまれなり、

彌陀の御誓は世に超えて、むらなき御慈悲といへば人によりてことごとには、よもと、たのもしけれども、

みだの誓とは四十八願なり、中にも第十八願は十方衆生とちかはれ、三十五の願は女人をとちかはれたり、むらなきとは、むらは一村しぐれのやうにところまだらにはあらじとなり、もと平等一子の慈悲とて、一切衆生をわが子の如くおぼす所より、おこし玉ふ本願なり、ことゞ〳〵とは、人によりてかはるべきやうはよもやあらじとたのみおもふなり、世にある人々おしなべて此位に信じらるるものなり、

女の身は、ことにいつゝのさはりとかや、おもくていみじかるべき事には、みなきらひすてられたりと聞けば、まして往生などたやすかるべしともおぼえず、

五障と申す事、法華經提婆品にみえたり、一には梵天王、二には帝釋天王、三には魔王、四には轉輪王、五には佛身なり、前の三王は天人界の王なり、第四は人間の世界建立のはじめ出でさせ玉ふ天子にて、三十二相をそなへ、神通自在の王なり、女身にて此位にのぼる事を得ざるよしなり、第五佛身なり、此も女身にてすぐにはのぼられざること上に提婆品を引きて、智積菩薩の龍女をとがめさせ玉ひし所にてしるしたるが如し、いみじき事にはきらひ捨てられたるとは、日本にても比叡山は傳敎大師結界の地、高野山は弘法大師結界の地なり、結界とは法を立て女人は影をもさゝせじとかぎりを制し玉ふなり、元祖大師の大經私記に、一乘の峯には五障の雲たなびく事なく、三密の月も女人非器の暗を照さずとの給へるなど、すべて此たぐひなり、此國は娑婆世界のうちにて穢土のさかひなり、それ猶女人をいみていれ玉はず、まして淨土の淸淨無漏のところをや、そは思ひもよらじとなり、

それはた、げにもと身にしられたる事おほし、はかなくかたちをつくろふわざだにも、かゞみにうつる心はづかしきまで、しみふかきかたは、とよなくをのこどよりもまさり侍るべし、すべてかず〳〵思ひあつ

めたる、心のうちをきこえつくしたらば、たふとき御心にはいかゞうとましくも思ひ給へられたるべし、なほも本願などやげにおもほしはなたざらんとは思へども、一定往生とまではおぼえずといへば、

此段女人の述懐にて、男とたがひて女は罪ふかきさまをことばみじかによくもからはかゝれたるものかな、此の事は前の十失の中にいへれば、今は略し侍る、なほも本願などや、げにおもほしはなれざらんとは、なほはからぬこゝろなり、などやとは、こは何ぞやなり、げにとはことさらと申すこゝろ殊異の字なり、おもほしはなれざらんは、おぼしめしはなれじとなり、もとより大悲の御こゝろかはりなき本願なれば、何とて女人とてとりわきて捨てさせ玉ふべきやとなり、左は思へども、また打かへしては、一定とも思ひ定めがたしと申す疑なり、

答へていはく、まことに五障の身はさらなる事なれども、またゆめゆめ九品ののぞみはひげし玉ふべきにあらず、

五障の事前に見ゆ、およそ女身を轉ずる事、一大阿僧祇劫をへて、一萬五千佛を供養奉仕し奉れる後にこそ、はじめて決定して男身をうるなれ、其事はもとよりの定まりにて尤の事なり、されどゆめゆめとは、つとめてといへることばなり、つとめて往生にのぞみをかくべし、何事にものぞみをかけざればならぬなり、極樂ものぞみをたしかにかけざれば往生あやうかるべし、元祖大師の曰く、一定と思へば一定なり、不定と思へば不定なりと申せば、きはめて不定げにおもひて後生しはづし申すまじきなり、

そのゆゑは、まづ第十八の願に、十方衆生乃至十念せんに、もし生ぜずば正覺をとらじとたてられし、その十方衆生の中には、男子も女人もみなもらさずとさだめられたり、されば男子往生すべくは女人また往生すべし、などかおなじ本願にのれる機の、ひとりはゆき、ひとりはとゞまるいはれあらむ、

四十八願の第十八願をいだす本文に曰く、設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、この文の中の十方衆生のことば男女をえらばず、善人惡人をえらばずとなり、唐の法照禪師の下智と高才と、破戒と罪根のふかきとをえらばず、との玉へる此文をさすなり、それゆゑ女人は總じて此願の中にまづひとたびをさめらるゝなり、此中にもらすべきいはれはなしとなり、

その上、女性はさはりおもければ、しひてもやなほ疑はむとて、又第三十五の願にとりわきて女人を往生せしめんと誓はれたり、つらつらこれを思ふに、打まかせては、えらびこそ捨てられましものを、男子とともに願ぜられたるだにもありがたきに、あまさへ女人をば、ねんごろにふたゝびまでちかはれたる、御じひのこまやかさこそ、まめやかによろこびもかなしみもあひなかばなれ、

女人ばかりのために別に三十五の願たてられたるいはれをのべ玉ふなり、まことには第十八願に十方衆生と侍れば、これにて善惡男女の往生おしなべて定まりたるものなり、さるをその上に女は例の疑のぼんならのふかきものぞとて、わきて此一願を別におこさせ玉ふなん、いと

いと不思議の事なりけり、女人は罪ふかければ、十方衆生の文にはぶかれてもあるべきに、十方衆生の中にひとたびをさめられ、またかさねて此願を別にたてさせ玉ひて、攝取し玉ふなん、言語道斷ともほめ申すべき御慈悲なり、さらば女人のためには、第十八願は總の願にて、此願は別の願なるべし、惣別ふたつの願に乘じたらんには、往生まことに心づよかるべし、これをよろこびと申すなり、しかし佛のかくまでに御心をつくしくだかせ玉へるも、よくよく女は罪ふかきものなればこそ、おなじ利益衆生の御こゝろをいたくいためさせおはしますを、あなかしこしとやいはん、あな心ぐるしとや申さん、

よく罪ふかき身なればこそ、返す返すは願ぜられたるらめとおもふはかなしけれども、また往生のやすき事は本願に乘ずるゆゑなれば、いくたびも誓はれたらむこそ、よろこびにてはあるべけれ、

前のかなしみとよろこびとをならべてときしめす文、わかりやすし、

すでに男子は、ひとつの願に乘ずるを、女人はかさねてふたつの願に乘じぬれば、他力いよいよつよくなりぬ、往生何のあやぶみかあらん、中々女の身こそ、それましきまで浦山しけれ、さるを女人なればと、ひげせむやは、無下にさまあしきうたがひなるべし、たとひまたおのづから信をとりたるよしなるも、からくして、男子のつらにたのみをかけて、さしもとりわきいまひときはと、立て給ひつるちかひまでをば、つやつやさらに思ひもしらず、これうたてほいなきことになん侍り、

往生のかたに取りては、女のかた男よりひときはつよき願力のあるを、男子のかたより見ては女をそねみ浦やむとなり、それほどまで佛のかたにては心をつくしたて玉ひつるを、男とおなじやうにたゞなみ〳〵の信心にてすぎんは、佛のかたにてかほどまで思召しいれて、たて玉ひたる本願をと、女のかたにておもふ心のかひなきにて、本意そむきたるとなり、からくしてとは、辛苦してといはんほどなり、もとより不信の女、やうやうのことにて、いさゝか信心をおこしたるも、まづは男なみのこゝろざしにては、二重にたて玉ふ本願を、また夫ほどに思ひしらぬなりとや申すならん、願くはいまひときはつよくかたじけなくとおもふやうにありたしとなり、うたてとは、此の所にてはあまり心うすきと申すほどなる心なり、

かまへて女心は、かたくなに思ひいれて、そばめもみず、ふかぶかとたのみ奉るべきなり、さても千劫萬劫をふとも、あらためがたき女の身の、わづかなる一念十念によりて、たやすく往生をとげんきざみ、すみやかに男子とならん事、それいくばくのよろこびぞや、まめやかに本願の世にこえたる程は、これにてあらはれたり、

女はうまれつきてかたよりやすきものなれば、それぞ幸ひなり、此本願を信じ參らす外に、そばめもふらず、よそを見ずして打かたよりてたのみ參らすべきなり、千劫萬劫とは、此劫と申すことはいろいろに申せども、まことには教へ申すべき事には及ばずとなり、これをたとへば四十里ばかりの岩あり、それを百年にひとたびづつ、天人あまくだりて、天の羽衣のいとうすきものにてなでたり、

かくの如くしてこれをなでなでて、なでへらしつくしたる時を一劫と申すとぞ、御經にとかせ玉へる、拾遺集に元輔がよめる、

うごきなき岩ほのはても君ぞみん
をとめの袖のなでつくすまで

といへるはこのふる事なり、あらためがたき女の身とは、此劫の數百千萬かさねて、これを一大阿僧祇劫とぞ申す、此間に一萬五千體の佛にあひ參らせて、奉仕供養し修行したる功徳はじめて決定して男子となり、女身を轉ずといへり、こはむかし釋迦牟尼佛のぼさつ修行し玉ひし時に、なしこゝろみ給へりしよしにてとかせ給へりしなり、女の男になると申すことは、からぞ六ケしきことゝしるべし、さて今の世にも、まれには女の男となると申す事、世間にまゝきこゆるはしかるべき因緣にて、ふとひとたび男身をうけたるなり、其後はけして女にならぬと申すにてはなし、またやがては女にかへるなり、又男も女になる事あり、是も女にて生々世々をはたすと申すには非ず、また男にかへるなり、凡夫の位は何事も定まりたる事なし、たとへばある時は天人にもなり、或時は人間にもなり、或時は地ごく、がき、畜生ともなるが如し、六道の輪廻とはこれをいふなり、釋迦菩薩の、一大阿僧祇劫をへたる修行の功徳にて決定してえ給ひたる男子の身とは大にことなりとしるべし、かばかりむつかしき變成男子を淨土に往生しぬれば、すみやかに成就し、此後はふたたび女人の身はうけずなれることは、彌陀如來の大悲かぎりなき御はからひなりけり、いとうれしきことゝしるべし、さればこれを轉女成男の願ともなづけたるなり、十方世界に諸佛もかぎりなく、ぼさつも數々にましませど、女人をわけてと誓はせ玉ひたるは、ただ彌陀ほとけのひとりにかぎらせ玉へり、一切經七千餘卷と申せども、女人往生の願と申すは、ことに此無量壽經にかぎりたり、女人たるべきものは此こゝろをえて、まことしく信じ參らすべし、それをまめやかに世に超えたる程をあらはすと申すものなり、諸佛にも此願なければ、それを世に超えたるとは申すなり、我建超世願と無量壽經にのたまひしは此意なり、

さる御慈悲は、又何にむけても、いとゞ男子の往生さへ、心やすくなぞらへしられぬ、

女人の罪障ふかきさへ別願たてられて往生とげしめ玉へり、ましてこれにくらぶれば、男子の往生は心やすくなれるぞといふことをうちかへして、男子の信心をしめさるゝなり、罪おほき女の上よりとりなして、男子の信心をすゝむるなり、男も女ももらさじといへる平等大悲のこゝろを汲みとりて、ことばうつくしく旨たくみによくもかうまではかきつられ玉へり、およそ淨土宗の書ども、むかしより世に數かぎりなくおほけれど、女人往生の事について、佛の大悲のいたりより、女人のこゝろざしのさままで、おちなく細やかにしるしあらはしたるふみといへるは、此西要抄にたくらぶべきものたえてあらざるなり、女は此文を常にかきて机の上にさしおきて見つべくやなどおもひ侍る、

風雅集に、

こと浦にくちて捨てたるあまを舟我かた
　にひく波もありけり

と、後光明院前關白のよませ玉ひたるは、よく此願のこゝろをつくし給へる御歌なりけり、女人此願に乘ぜざれば、後世たすかるべきよしなきいはれ、あらましかくの如し、なほ申す事もおほけれど、さのみはとて筆をとどむ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

男女均人。而賢良多二于男子一。毀責歸二于女子一。孔子曰。女子與二小人一難レ養。不二啻佛之警レ之也。今之世。敎二女兒一。多以二弦歌一。以爲レ足矣。至レ授二縫織一。尙爲レ少焉。而於レ學二聖經賢一乎。女中不レ聞レ有二貞良之名一爲レ久矣。宜哉。蓋學レ之不レ行レ之歟。抑不レ知レ行レ之歟。予觀下人之敎二男兒一者上。未レ觀下敎二女兒一者上也。漢劉向作二列傳一。漢曹大家作二女誡一。長孫皇后。作二女則十卷一。加有二女孝經女論語一。古人既施二訓譯一。布二于閭巷一。育二女子一者。不レ可レ不レ知。夫入道信佛之人。唯善是務。雖二婦人女子一。夫可レ然也。記以傳二于未聞一。壬戌六月二十八日

剃度のいはれ

釋迦牟尼如來の御幼名を悉多と呼びて御父淨飯王の太子に備はらせ給へり、御降誕の初めに種々の御奇瑞まし〱ける中にも御身に自ら御光有りて、三十二相備はらせ給へりとぞ申し傳へ侍るなり、吾皇國の聖德太子の御昔がたりに似させおはしましつるも不思議の一になん、十九と申す御年夜にまぎれて御城をのがれ出で檀特山と申す山に入りて、御自ら御かざりおろしおはせしとど、猶きら〱しき御そうぞく其の御心易からずおぼす程に、林の中より弓矢携へたる獵師の出でこしを御覽じて、汝が身に附けたる衣は何と申す者ぞと問はせ給へたれば、獵師愼みて答へ申さく、此は昔の世に佛と申すさとり聞かせ給ひし世に尊き聖の召し給ひつるにて、御袈裟となん申し侍るを、己れ故有りて傳へて侍ると奏し申しければ、其は尊き服ぞかし、吾に得させくれんやとの給ひける、獵師の承りていかでをしみ申さんやとて、謹て愼みて奉りければ、御そうぞくぬぎ捨て給ひて此御袈裟を着し給ひしと、佛法の法服備はりし初めにぞありける、獵師と見えしは光音天の天子にて、過去の古佛より太子に授け參らせよとて傳へもてりし也とぞ（此事御經の中に之を說けり）、其より後は目連阿難の如き、五百の羅漢を始め、文殊彌勒、扨は地藏菩薩の類、いづれも剃度して御袈裟を着給はざる御弟子は非るなり、人の世に在りては黑髮は第一の飾にて、衣服は各々其位を輝かす者なり、今此世を去り此を被る者、謂ゆる煩惱の迷を去り、解脫の悟に赴くのしるしを現す者也けり、出家功德經と申す御經に說かせ給ふには、七寶の寶ものをもて、高さ八萬由旬の寶塔を造り、佛舍利を安置し百年の間供養せんよりは、一日一夜出家したらんかたぞ功德は勝ると承るにも、今日の御剃髮の御功德こそ世に尊く有難き事になん、昔話、すこししるし侍るなりし、いつのころにかありけん、國々を行脚の法師ありけり、行きくれて野末の古社に宿りぬ、夜更けて馬の嘶くおとす、鳥居近くなるに此社の主はありやときこゆ、社の奥よりありと答ふ、明日は某村の某の寺に一佛出現す、をがみにいでよと命ぜられたりと云ふに、かしこまり答ふるさまなり、法師痛くおどろきて、斯る古社にも神は在せる者にやと、おもひつゞくる程に夜は明けたれば、いでや一佛出現とは如何なるさまにやとおもひつるにも、夕は確かに其所とぞ聞き置きたれば、往きて見るにたがはざりけり、寺の住持の法師に今日は何事かおはすると問ひ申すに、何もあらず、今朝村の翁が老いて髮うるさし、剃髮の式授けよと聞えたる迄なりと云へりしに、去らば己もをがまんとてゐろりにほたさしくべなどする程に、短きもの着て藁沓はきたるが出でにけり、住持の法師いざとて本堂に誘ひ、かたの如く偈文など授けてかみそりおしあて、此にてよし本尊拜して歸れと云へる迄なりけり、行脚の法師昨夜のさまを住持に語り出でたるに、住持の法師深くおそれまどひて、其後は佛道なほざりならず勤め侍りしとなん、此事著聞に出でたるやに覺え侍るのみにして、今は大方忘れたれども、斯る淺墓なる式をも神祇は一佛出現と見給ふにもなほざりならずなん、行誠昔剃髮を題にて讀めりし歌に

我法にいらんとならば梓弓
そるぞはじめの敎へなりけり

房總日記

十六年といへる四月廿日前、九時ばかり芝をたつ、貫光教正貞門法師、某講義、某沙彌隨行す、誓願寺住職は十七日より佐倉へゆきてまてりときこゆ、今日は朝より春雨しめやかにふりていぶせくみゆれど、よも靜かに寒きこともなければ、大橋の行德舟かよふと申すところにゆきぬ、色川母子、つちや齊兵衞などきてわかれ申す、其外回向院はじめ人々も來ゐたり、やがて舟に乘る、此舟上等と聞えたれど、雨のしづく所々よりもりてければ、人々紙もてぬぐひなどす。

うき舟のとまもる雨に旅衣
しぼるばかりにぬらしけるかな

もりてこそ昔よめりしに似かよひしとて笑ふ、五ツ目の末より兩岸の所々にさま〴〵の花どもさけり、櫻なども色めきたるおほし、めづらしをかし、

翠柳紅桃又白櫻。
兩涯春色送舟行。
行人不是思鄕客。
半弄吟情半醉情。

源法寺は浮田へとてわかる、行德の寺の岸に人おほく出てまつに、寺にゆき晝飯す、湯もありてみなゆあみす、後三時ごろ供養式あり、けふは一切經請したれば此が供養式行ふ、心經よむ間に各帙に洒水す。式終りて說法す、無上甚深の文をからず、名號ほどこす、今夕は圓遊翁の隱宅に宿る、及川の翁とぶらひく、歌どもかきて出す風體もよし、

廿一日、雨やむ、所々よりかきもの申し出でたるに筆そむ、九時過に此菴を出づ、雲きれ青空みえわたるうれし、上尾（五里）にて晝飯す。此より四里ばかりにて佐倉の城見ゆ、町はづれに講中寺院も待ちて禮儀あり、是より前薄井（印旛沼みゆる所）と申す所寺院二人待ちうけず、六時ごろ清光寺に入る、庭に大木の櫻あり、おもふまゝにはびこりぬ、いとめづらかなり、

法の會もかをりわたりてなにしおふ
櫻の花ぞ今さかりなる

たゞならぬ御法の花もふる寺の
櫻よりこそ匂ひそむらめ

先に行德の圓遊翁と申すは篤信の人にて、をとゝしの五重の時もきてやどりかしたる人なり、庭にさま〴〵の花ども植ゑならべて、よしありげなるやどりなり、歸るにかきてやる、

紅々白々又靑々。
奇草珍花滿花扃。
樂水樂山還樂醉。
古稀之客古稀亭。

廿二日、雨はあらねど空くもる、車のものけさ歸るに物かづけ、倘翁のもとへものかへしに遣はす、此寺の小僧等扇かきてよなど申すに書かきてやる、ひるのころ日出でたり、櫻の枝につけたる、

里の名のさくらにほへり春きても
恥かしからぬ古寺の庭

甁に櫻、山ぶきをさして出したるを、授戒の本尊に手向け奉るとかきてつけたる

あはれともみよのみ佛みよしのゝ
高根のさくら岸の山ぶき

床に九十九翁可菴幽淸と記したる獅子を書きたるに詠ず、

妙吉祥家知者誰。

五臺雲卷石橋危。
水晶巖下瑠璃池。
遊戲金毛獅子兒。

枯野の女郎花を、

ちりはてし後に思へばなびきしと
みしも夢野の女郎花かな

田家花、

めでて見る人もあら小田すきかへし
すきかへすまに花やちるらん

廿三日、晴、此寺の前々住貞存尋ね來る、昔の書狀もちて三十二年ぶりなりしとぞ、今は世になき人とのみ思ひたりしを珍らしうてさまざまものがたりす、

此世にあらじと思ひし人みれば
さながら夢の心ちこそすれ

といへる歌一首をかきて品々遣はす、今井村のむら長子成田へ參るとて詣できたる、是も思ひかけざれば、

見なれざる旅寢の床に見なれたる
人をしみればうれしかりけり

廿四日、晴、八時ごろさくらを發足す、町はてまで住持檀方數人おくる、成田新勝寺へ詣づ、廊所狹く、本堂は大こまなり、人多く詣づ、門前の旅宿松田屋にて食す、此にて眞言小泉等三人むらも千住誓願寺もわかる、芝山の仁王へ參る、觀音寺と號す、大なる仁王門あり、仁王を安ず、此より車をかへて蓮沼へ參る、道二三里ばかりなれども、田間夜に入り大にむつかしかりき、車にゆられたるにや氣分あしく、蓮沼の新島に入り、伊藤十左衛門宅にて休息す、寺よりかご迎ひにこす、寺に入りしは十時過なるべし、月、中天に近づきたり、少し寒し、其夜はゆに入りしまゝ臥す、かゆをもくはず、

廿五日、晴、此寺には授戒新受者五百人餘あり、いと殊勝なる、此寺は記主上人の開基とぞきこゆる、庭の作りざま牡丹などもさきたり、いとをかし、住職茶を好みて庭に茶室ども作られたり、むかしは大地なりしも、一とせ旋風にふきやぶられたりとて、今はかりたちなり、三疊じきの茶室に休息せしむ、いろいろの花などならべてみ所ありけり、天台宗藥王寺(武射郡親鹿村住)職鈴木觀應面謁、八仙女の畫をおくる、昨夕藥王寺住職及び同宗光福寺同住職蘆川文融、武野里村池邊豪榮迎ひとして伊藤氏の宅まで出らる、午後說法一座、書き物數十枚認む

藥王寺觀應阿闍梨贈仙女之圖

蓬萊閣下八仙女。
玉蕊背花臨玉泉。
歌舞且休聞我說。
長生不死大因緣。」
吾大仙人者闍會。
曾濱淨樂我常幽。
長生不死妙眞訣。
不在三山與十洲。」

はす沼の里人いとす勝に見て侍るによめる、

濁りなき人の心やはすぬまの
花にはちすと見るべかるらん

今夕藥湯たつ、けふはさまざまの畫どもかく、歌も詩もありていと興じぬ、今宵もくたぶれて夜のふすま引かづきてねたれどさめてければ、玉あられなどよみながらいつしかねぶる、

廿七日晴れたり、風もなし、朝八時極樂寺を立出づる、男女僧衆五六十人一里ばかりおくる、午時大網といへる所にて齋食す、此家は日蓮宗なれども、何か結緣とて書きものす、無二亦無三と、待郭公の歌かきてつかはす、是より前、東金の町を過ぐ、繁昌の地なり、此あたりは日蓮宗おほきよしなり、同宗の寺どもおほく見ゆ、牡丹花おほくありとて案内す、まだはやし、三四輪さく、牡丹五十種ばかり見ゆ、梅林花菖蒲などあり、五時ごろ千田の極樂寺に

宿す、山門本堂廊下庫裡大寺なり、住持はしる人なり、

旅路に花を見て

さきのこる花はあれども旅衣
たちどまりても見られざりけり

旅宿に梨の花さけり

ゆきくれてやどをかり寐の軒ちかみ
さびしげにさく妻なしの花

牡丹を見て

みつふたつさきかゝりたるはつか草
はつかに見るもえにしなるらん

此上總の東金あたりは大かた日蓮宗ばかりにてかためたる所にて、世に七里法華と申す所なりとぞ、むかし領主の日蓮宗に歸依して他宗をみなこぼちしとも申す、かゝることになりゆくも他宗の人のおのづからのおこたりなるにこそあるらめ、此ごろは演說と申すことも流行すれば、それらより少しづつ眞の佛法說かんはいかにと住持に申し侍りしかば、住持もかねてさることも思ひしなり、つとめてなど申したりき、

上つふさの國千田稱念寺と申す寺の本尊を齒吹如來と唱へて、彌陀の打ゑみて御齒あらはれ玉へる御像なり、よきさくらどもさきのこりていみじう匂ひけるに

此あさけ岸のあらしはふき絶えて
殘りて匂ふ山ざくら花

旅夢

見なれたる人を見る夜は草枕
むすぶ夢ともおもはざりけり

海邊殘花

めづらしき磯山櫻しほ風に
からくも世にものこる花かな

廿八日、すこし曇る、門中の寺院ども絶えずとひく、

旅宿曉鐘

草枕いかに結ぶと人とはゞ
寢ぬ夜をさますあかつきのかね

山館殘月

きゝなれぬ岸の嵐に夢さめて
枕にのこるありあけの月

伊勢の本居の翁の古事記傳の說ごとをはじめ、玉の緒其餘くさ／＼の文どもを見るに、よく／＼むかしのふるごとをかくまでにしらべ考へたるものかなと、おどろかるゝまでになん有りける、此國の古事どもは守屋の亂に大かた燒けうせたる以後はいさゝか傳へ殘りし唯今の古事記どもなるべし、されば猶是にてふる事の物たれりともおぼえずなん、とは我國のみにかぎらず、もろこしの秦火の災、天竺にも惡國王ありて佛經などやきたるよし傳へたれば、末の世となりては、大かたいづくの國も人の心けはしうなりて、さま／＼のあとあらはるるなん、おのづからのおもむきなるべき、此ごろは西洋の人々のいろ／＼工夫どもして、さま／＼のをかしう、おもしろきしわざどもなし出でたるを開化なりとて、上下ともてはやし、我おとらじとて、きそひものすることの流行する世とはなれりけり、其人々のいへるむかしは、人おろかに智もたらず、何事も迂遠のことのみなるいと便なし、これを野蠻といふ、されば人も其祖は猿にてやあらんなど、いひさわぐを實にさることなりとて、此合槌うちて古聖昔賢をあなづりものいふ輩、をちこちにきこえたるは、一わたり理めかしたるやうなれど、もののもとすゑのわいだめにうとしとやいふべからん、そは世の事くはしくしらざるものの、今をのみ又なきことにして、おもふまゝに申したるにぞ有なる、西洋に

創世記といへる書あれども、いと〳〵あはあはしきものにて、みるにたへず、我國の古事記などこそ、やゝふるきさまをいさゝか見るべうしるしたれど、是はた燼餘の文にて千百の一つにやとおぼゆ、佛敎のみは、佛の宿命通くはへられしさまなれば、大よそには太古の事もしらるゝなり、是は人間の傳への外なれば、たゞ人には疑はるゝなるべし、抑むかしは男女のけぢめもなく、自他のわかれもあらず、自然の衣ありて、物くはでも、いけるとし長きは光遠天の果報のこりたるなりけり、終にものくふやうになりて、男女の形わかれたるより、おのづから、果報つたなくなりさがりて、草衣穴居などいへるむかし語も出で來にけるならし、末の世になれるまゝ、事もおほく、わざもしげくなりまさりてけるより、君臣四民などの差別もいできては、自他の執情やむことなくて、いつしか軍陣攻伐などやうの事もおこりて、それが器機などおほく出で來つるなり、近きころ、としごとに此等のもの、各國にいできて、此に戈あれば彼に盾あるやうになりゆきぬ、此後はいかさまにかあるべき、御經には取る者皆刀劒となると見えたるは、さるべき事にこそ、扨も人のこと葉なども、もと光遠天は言語なき國なり、此に下りては少しく言もあれども、いと〳〵すくなかりけん、ものの名などもおほくはなかりしなるべし、耕作の器もなく、舟車臼杵もなしとは易にも見ゆ、此らはふるめかしき說の殘れるなり、されば古はことば少きより、正しきことのみや申したりけん、後世ことばのおほくなれるにつきて、いつしかいひあやまり傳へたがひて、扨今の世とはなりけらし、古事記の歌どもはたゞよみて陀羅尼などやうなり、註釋ありてやう〳〵に其よししるべく、おなじ人の此國の言葉の、今昔とかはりゆくさまあやしきまでなりけり、中昔の源氏ものがたりなどさへ、註釋の書凡そ二千卷ばかりもやありつべし、扨も昔の語はたゞしう、うつくしうて今の語はひなびて、いやしげなるぞ、世の末になりたるさまいはでも其けぢめしらるべし、さるを昔は野蠻なりなどいへるは、今をもてむかしをはかるのみ、かへりて野蠻流とやいはれぬべき、心をたひらかにして考へなば、今の世のむかしにくらぶればいかに恥かしきことにこそ、心のなまさかしきともがら、さかしらにむかしをあなづりそ、

未の四月上總の國千田の稱念寺に寓して、いささかおもふことありて筆はしらす、

今日夕座說法の後、みなへ名號施さんとて高座の前に老若大勢立てりしに、名號わたしつるうち其所一間餘方ほど板じきぬけて、十人ばかり一度にえん下へ落ちたり、みな〳〵驚きこれをたすけ上げたるさま、いかにもいはんやうなし、やがて所をかへてほどこし畢りつ、堂內四百人餘なるべし、怪我人は一人もなしとぞ、賽錢箱のあとかりそめに張りたるよしなれば大勢にふみぬきしなり、あやふきことなりかし、後々の寺にてもかゝることを傳へよと申しける、

海邊月

月やどるあら磯なみのかげみれば
　　おもひくだけぬ宵々ぞなき

旅

柴人もつりするあまも海山も
　　見なれぬをのみ見るたび路かな

題行山順海之詣贈晃榮上人

行山順海詣尤奇。

百劫三祇是可期。
立雪童兒求半偈。
出波龍女獻摩尼。
一杯汲處潮初滅。
一簣覆時既嶮巇。
鷲嶺法門無別說。
願爲苦海濾魚師。

廿九日、朝より少々雨ふる、今日極樂寺和尙、笠森寺觀音へ參詣するよし、賽錢つかはす、

　御影　供物　田樂一包名物のよし

昨日天台宗三途臺長福壽寺住持權大講義平林晃榮入來、弟子兩人召連十念受度由なり、額面三枚詩一律書きて遣はす前に見ゆ

今日當住職弟子の內入弟願出づ、兩人弟子剃度式、一人を行進歲十四一人を行嚴歲十と號す

三十日、朝より曇り、九時ごろ此寺を發足す、住持幷行進途中まで送る、晝後三時過より雨ふる、五時ごろ姉ケ崎へ着、同所瑞安寺住職宿屋まで來り寺へ請待す、舊藩五十嵐老婆迎へて寺へ參る、

見なれてし人をしみれば姉が崎
　やどる施子の夢かとぞ思ふ
ふじがねのみ雪のかげやうつるらん
　白くぞたてる安房のうらなみ

旅寐ともしらずや夢の花見客
山かこやあしはあたまの上になり
本堂の瓦の鬼の目に淚
　こぼすおばゝのこゝろかはゆし
打まかす苗代水に聲立てて
　所得がほになく蛙かな

四月一日、晴、晝後參詣人へ剃髮式を授く、說敎名號ほどこす、今日はふるき人々大勢入來、夕刻まではなしなどす、面々へ目錄など遣はす、當時みな窮迫し侍る者なればなり、

二日、天氣くもる、九時發足、人々見送る、三里ばかりゆきて休息、其家の小女病氣のよしにて三歸十念說敎少しきかせ遣はす、明日は選擇寺にて施餓鬼願ふよし申す、午後木更津選擇寺へ着す、此近邊村々みなきれいなり、貧村はすくなきさまなり、木更津はよき町なり、此にて三百人ばかり五重願ふ、けさは一里ばかりも五六十人迎に出づ、ばゝどもはしろき手ぬぐひをくびにまきて出づる、田の中四五町はばゝぢゝにてつゞき〳〵くる、町々にてもみな出でて見る、珍らしげなり、此寺の本尊靈佛なり、庭に牡丹おほくさけり、打開きたる庭にて見所あり、犬二ツゐる、尾をふりてなづく、

三日、曇り雨になる、檀中門中面會、午前岸東寺へ請待、法要、午後某氏施餓鬼會、兩人へ剃度式授與、說敎一座、

四日曇、風いみじう吹く、ひる前傳法要偈式、ひる後剃度式をはりて、夕刻檀方稻次氏へまかれ誦經非時有之、十時歸る、

五日、朝より雨、弘法大師筆不動尊を寫す、金五圓此寺の修覆料とて遣はす、今日發足すべきところ、雨中につき、梁師、富津大乘寺へ先驅し、餘はみな〳〵逗留、晝後說敎剃度式等あり、夕刻雨やむ、入浴、菖蒲湯なり、

詠牡丹（二首）
沈香亭北草芊芊。
萬里橋邊落日懸。
唯有斯花眞富貴。
至今千歲保嬋娟。
魏紫蜀紅何比類。
天香自染舊袈裟。
栽培未聽祇園發。
元是沈香亭北花。

六日、好晴、九時發足、周准郡富津大乘寺へ參入、途中送り百人ばかり。迎の者所々待ちうけ濱傳ひ田道山村等うち過ぎ、富津の町入口、寺門これあり、門前溺死五十三人の墳、コレラ病死者石塔等これあり、本堂左右梁上千體

佛座鋪むき綺麗、厠其外新規建設す、住持よく勤行するよしなり、

木更津をたつ時かきおく、

發足の時刻おくるゝ牡丹かな

住持隱居其外門中三四名富津まで送る、木更津より此まで四里餘りのよし、途中農家より土瓶茶出す、名號やる、大勢なり、

此日、午後近村眞言宗住持六人來訪、

密家各寺へかきてやる、

信爲能人

まことある心にきけば入相の
かねの音にも驚かるべき

待曉

高野山たかくもなのれほとゝぎす
其曉をまつ人のため

玉川

玉川のながれにやどる月見れば
いまも昔の姿なりけり

八葉

高野山やまにはあらで蓮葉の
花さかのぼるけふのうれしさ

無常

おのづから松の嵐やはらふらむ
月にさはらぬ峯のうき雲

發菩提心

埋火のきゆるはかきもおこさなむ
おこしがたきはぼだい心かな

今日說敎一座、

七日、晴、

八日、晴、晝前放生會溺死者囘向、晝後一切經供養讀經一座、一切經演說、一同へ御經をいたゞかせ畢る、四時なり、剃度二百人、五重四百人、金十圓一切經購求の扶助として遣之、

春夕聞鐘

けふもまた霞のよそにきゝすてつ
春の野寺の入相のかね

山吹隨水

ゆく春もちる山吹もとゞめあへず
かひなきものや井出の柵

猨猴捉月

かげぞとも思ひよらざる浪の上の
月とりぐ～にまどふよの中

九日、よべより空少しくもる、けさきり雨ふる、九時ごろ發足、道のほど雨やゝまされり、天羽郡佐貫（藩主阿部駿河守領一萬六千石）花香谷村の勝隆に著す（十一時）、雨ゆゑ鹿野山參詣延引にて此寺に止宿のつもりになり、此寺四面岡山にて竹林あり、庭に麥の穗出でたる畑どもあり、小野寺なり、せばけれどもとりしきり座所を設く、小手まり花、赤きつゝじ多し、

こきうすきわかみどりして見わたせば
翁さびたる山のはもなし

午後雨はれたり、參詣人大勢來る、勝隆寺は慶長年中松平出雲守勝隆（勝隆院殿、寛文六年二月三日沒年七十七）と申す人の開基なるよし、其後阿部家の寺となる、

村しぐれはれての後もふる寺の
ふるごときけば袖はぬれけり

萬代はまだほど遠し我法は
けふぞさかりにひろむべき時

右書きて住職にやる、

十一時過湊村天神山湊濟寺に着、午飯、花香谷村の送り十餘人、いせの濱と申す所にて、

いせといふ濱のはま荻折しきて
あはの海いづる月みつるかな

けふはひねもす雨ふりて道ぬかる、みなわらぐつはきてまくり手にてゆく、かごもゆれがちなるわびし、くるし、川の所の向にあまた人あたり、道者など渡しにまつにかとおもひたりしに、みな迎の人ども、三四十人ばかりなるべし、眞言宗華藏院住持、川ばたまで迎に出づる、あすなん詣でんとて手札わたす、七條かけ加法のさまなり、こなたは雨じたくなければ毛

ものかぶりなどして、何とも名づけんやうなし、世に恥がましきことにぞある、
夜も猶小雨ふる、旅ねの床眠りがたうておきて茶などのみたれば、ます〳〵ねられず、みやこの友垣たれかれのこと思ひ出でられたるよ、さすがに旅人の心はまぬかれがたしや、筆とりて歌などかきけれど、くたぶれてければ、やがてしる人の面かたどもみたりよたりかきてみれど、世に似ざればこれもやめたり、ゐもかきたきものなり、むかし筆取らざりしを今はくやしうなん、
大文字と申す人の山路菊「我親に見せばやつとにかざしもて思ふ山路のきくの一本」かへし、

千代までと我たらちねのためにとる
　薪にそへし菊の初花

眞言宗二軒尋問せらる、面會す、
飯田傳治といへる人、むかし十二と申すとしより東京湯島の山がやに奉仕して、二十と申すに此に歸りて呉服の商方して、よにゆるやかにすめるも、ひとへにむかしの主人家のあつきめぐみなるから、さる心の歌一首給へと申しきこゆ、いと殊勝におぼえてよめる、

いにしへをしのぶが岡の櫻花
　みしよは今もわすれかねつゝ

十二日、はれたれば濱見物に出づる、某家にて茶のむ、舟を出して十二天の山へ上る、氣しきよく、ふじほの〴〵と見ゆ、ゐにうつす、晝後、五年前まで東京大坂町根本治助方にゐたりし竹が岡の人角之助、其節は久米次郎と申す者（廿三歳）尋ね來る、其母にもあふ、十念授け名號やる、翌日舟に乘りて金谷まで送る、
十三日、曇りたれども、おだやかなり、松翁院檀頭岩野氏より大船出して八反の帆をかけ、金谷へむけのり出づる、波靜かに風もなし、船中法語したゝむるほどに、三里の海上金谷につく、浦の見わたし寺あり、本覺寺といふ、住持は東京下谷の榮正寺兼務にて留守のよし、留守居へ遣はし物あり、同檀方の内渡邊孫八といへる漁家あり、今朝網にかゝりし菊銘石一個獻るよしなり、石上に枝立つこと十四五莖、各小枝を生じさながら珊瑚の如し、海神の供養にやなどいふ、其報せよとてこれを收む、岩野氏世話して東京へ送るよし申し出づる、寺の右に八幡宮左の高所に淺間の社あり、皆ゆきて拜す、浦のあま多く出でて掃除などまかなふ、夕刻説法名號施す、剃度二十人ばかりあり、當村華藏院權訓導黑川圓隨、うかゞひとして入來、巻きもの遣はす、金谷の浦人漁業の御歌給へと申しける、かきてやる、

浦人を救はんとてのすさびかな
　南無あみだ魚の昔語りも

十四日、雨はやみたれど猶くもれり、道などあしからんを、けふは御とう留にもやと人々申す、けふは舊の四月八日にて御たん生會なり、甘茶などものす、本堂に小どもらはやくきたれりといふ、よき天氣につき梁師は先に發足す、浦へ出づる、岩野氏案内其弟の宿へ立よる、菓子等出す、よき宿なり、家内に十念授け名號やる、保田より迎僧雨人來る、午時なり、
十五日、朝晴、金谷發足、おくり十餘人、總房國界にてわかるゝ者は岩野氏なり、（名號船頭共にべそ分け遣はす）餘はみな送る、保田岩戸の觀音行基大士の作などにもやとおぼゆ、御丈は一尺餘り、古像なり、岩をくりあけ龕とす、老婆ども六七人通夜なしゐたり、是より羅漢山嶮しき所なり、此山中にも、亦觀音堂あり、是は五尺ばかりの古像なり、日本寺の本堂修復中なり、本房にて齋食す、金谷より辨當まはる、此にて金谷の送りにわかる、山中所々巡拜、大佛尊は御首を損じてをがめず、保田の町にて別願院といふ寺による、加知山村淨蓮寺に毘沙門の開帳あり、又濟門長谷寺に觀音開帳あり、此あたり雨ふ

る、田路をへて久枝村蓮臺寺へ着す、明定院の註類なり、丁寧に奉事す（濱出以來の開運なりといふ）、よき寺なり、藥師如來佛一體あり、五分ばかり、惠心の作か、緣起わからず、

十六日、朝晴、午後曇る、參詣あり、說教一座、剃度貳百餘人、

十七日、少し曇り、蓮臺寺發足、八時ごろより雨ふり出づ、つよからず、午後平郡多田莊船形村光勝山西行寺に着す、此寺は慧心僧都の開基にて西行法師所住の由緒ありといふ、

今日開帳の寺、

　平郡金山村興禪寺濟門　行基作

　同郡青木村眞勝寺眞言宗　海中出現と云ふ

此邊の寺々觀音の像數を見るに大かた名作なり、當西行寺にも小像あり、蓮臺寺にも名像あり、那古寺にも並ばせ玉へるおほし、竹が岡には三十三體を別所に安置す、四時船形山觀音參詣、此寺大地なり、大福寺（俗稱崖觀音）といふ、眞言宗（新義）、下より一百七十段ばかりをのぼりて、大岩石おほひたるやうなるに御像ゐり出づるなり、行基の作といふ、ことしまで一千一百六十七年なり、堂は瓦ぶきにて五間ばかり、三方ときらんかんのえんあり、滄海を見渡す、不動の堂あり、西の方に諏訪の社あり、土屋の額かく、今日は大漁ありとて濱にゆく、いわし多く沙の上にほせり、腥し、大かた歸る、沖に島見ゆ、鏡がしま、沖のしま、鷹のしま、

　手にとりて見るばかりなるわざもこが
　　鏡の島はなどくもるらん

　なみの上にたかくぞみゆる鷹のしま
　　我きゝなれし名にもあるかな

十八日、曉天寺を出で那古の觀音參詣、眞言宗にて大地なり、本堂は七間ばかり、諸堂多し、本尊何れも多作也、金臺寺にて中食、蓮臺寺の檀方小澤仲右衛門宮澤清兵衛兩人追かけ來る、書きもの願なり、三時說教名號施し出立、途十三町ばかり、北條村を經て大網大巖寺に着、此寺は、靈巖上人開基の名地、浴室新規、此寺の住職は二十年前深川にて大存と兩名にて論注講釋を願ひし者なり、其ころ月のみさきに夜行して歌をいたゞけりとて、昔語りあり、絕えてわすれたるが、さらば昔なじみなりとて笑ひけり、寺に頌義の古判木あり、靈巖上人の直筆と申し傳ふ、四枚ずりの板百枚ばかりありといふ、一二枚ずりもまじれり、めづらしきものなり、一枚すらせてもたらす、

けふは野べあすは山邊と浮雲の
　行くへもしらぬ旅衣かな

旅衣きてみるべくもしらざりき
　波の上なる安房の遠山

波の上ほの見し安房のとほ山の
　遠くも我はきつるものかな

ゆきくらしあまのとまやの草枕
　濡すばかりに浪の音する

　寶松院へ

草枕つゆにちぎりをむすぶ夜は
　月ぞ今宵の合宿りなる

まつひとにはつ音きかせよ杜鵑
　旅ねの床は鳴かぬ勝れり

　明定院へ

きゝなれぬみねの嵐に夢さめて
　枕にのこる有明のつき

廿一日、好天氣、晝前かきもの

「淨陀羅久山觀自在大菩薩三十三所拜禮の言葉」と申すを冠におきて、三十三首の歌讀みて結緣の爲めに奉る（四季、戀、羇、教、雜、釋）

　　　大教正　行誡

　春

ふかくしもけさは霞のたち籠めつ
　沖の小島も見えぬばかりに

・たちかへる春の印をうぐひすの
初音にこそは今朝は知らるれ
・らきにだもたへぬ袂を春かぜの
吹けばあやにく散る櫻哉
・くもや花はなや雲かとみ吉野の
峯も麓もはるは分れず

夏

・せを淵にかはるあすかの川波に
うつるを見れば今日は卯の花
・むかし誰がすみつる宿ぞたび衣
花橘の香にぞしみつる
・くちまさる賤が垣根も珍らしく
匂ひ初めたる夕顔の花
・わき出づる岩もと清水おとせずば
むすばで過ぎむ旅の衣手

秋

・むしのねもまた初秋のすゝき原
亂るゝ迄は聞えざりけり
・しみて身におぼゆるものは旅衣
秋風吹きて露のおくなる
・さらぬだに結びかれたるくさ枕
そをねて聞くと小鹿鳴くらむ
・いつしかと秋も末野になること繩
又引き替へて音ぞ淋しき

冬

・たまさかに殘る紅葉を木枯の
誘ひおほせる冬の山里
・いほやすく夢も結ばゝ結びつる
氷の床や池のをしかも
・ほの／＼とおく霜白く見えつるは
氷れる月の影にぞ有りける
・さしてゆく方もあらじを一年の
今宵ばかりと急ぐなるらむ

神祇

・つりばりを龍の都にもとめたる
のりみや安く渡る浦人
・さはべなす神はありとも世を守る
神の力に豈しかめやも
・むかしたが植ゑし櫻ぞはるごとに
ふりては見えぬ古の玉垣
・しも白くおくかと見れば有明の
影殘りたる月よみの宮

釋教

・ふだらくの岸打波を安房の海の
なこの浦邊に今日きける哉
・さくら花匂ふ吉野のやまながら
我御ほとけに奉らなむ
・むつの道今はたどらじ一すぢに
西へと急ぐ我にしあれば
・しばしとて影は見えても濁江に
濁りもはてぬ花蓮かな

戀

・よひのまと言ひしを人や忘れけん
きぬ／＼ならぬ鳥の鳴く也
・はてしなき戀にぞ身をや盡し舟
こがるとしもは人はしらじを
・いづれの世何れの人かいひ出でて
戀といふこと教へ初めけむ
・れいの音鐘の響きもきゝかねぬ
耳ぞ戀にや潰れたるらむ

無常

・いのちをばのぶと云ふてふ藥さへ
なのみ殘れる世にぞ有りけれ
・のちの世を願ふ人こそ悟るらめ
千代も八ちよも定めなき世と
・この身さへ有りてつましき習とは
亡なる人を見ても知らなむ
・とに角に定めなき世に生れきて
千代と祈るぞ愚なりけり

祝

・はてしらくとこよの山に巣立ちつゝ
往きはて歸る和歌の浦鶴

大巖寺觀牛 作書

從作草繩穿鼻身。犂耕難脱幾多春。對君適憶前生事。我亦掌纏金紫人。

里眺望

くれ竹の伏見の里にみわたせば　霞にわかず八幡やま崎

廿二日、朝より小雨ふる、晝後大巖寺發足、和尚世話人いとま乞ふ、平郡海老敷村正林寺に着、田畠の間に驟雨あり、風もあり、此寺にて廿四日まで授戒式あり、小寺なり、普請よく出來、一切道具ども新調のよし、庭なども少し出來、山中にて不自由なり。

正林にて善導大師の一千二百年行しに

唐土の山のあなたの夕日かげ　千とせの後もさす光かな

廿三日、晴、朝若經、

あひしきの里を寂しき山畑の　麥の葉末に月さしのぼる

廿四日、晴、午前授戒一百餘人、受者三十人、午後せがき、善導大師一千二百年忌供養回向畢る、

古寺の浴室すゞし夏木立

水仙や保田の羅漢の花供養

旅硯今宵の題は隔戀

富山にて

犬たでや伏ひめのあと思ひ出し

廿五日、快晴、今日は左の寺へ參詣、前日大巖寺より申入置く、

本織村延命寺　長谷大棟

右里見代々の寺とて樓門經藏本堂庫裏盛大なり、衆僧送迎懇懃なり、餅を出す、本尊虚空藏觀音開帳あり不知作者、靈屋は開山堂なり、彩色あり、里見代々の像六七體、衣冠の像なり、寶物、里見の鎗、細身二尺五寸ばかり、裏にひあり、こみは一尺六七寸、銘あれどもよめず、古法眼の廿四孝彩色畫帖、

四時前大巖寺に歸る、かみそる、休息にて三輪明神に詣づ、此邊皆石山なり、洞口所々にあり、今日五惡段一卷授終る、

竹外斜陽赤。守窗松籟親。
授書終一卷。不似客中人。

廿六日、曇、少しさむし、大戸村大圓寺に至る、授戒あり、明教新誌一千五百三號明治十六年五月十八日の誌に、續日本高僧傳作者、大講義竺道契和尚の傳を出す、見るべし、美作愛染寺沙門照南撰は此人の弟子なり、師字は天靈號瓦は別號、備後安那郡神邊村の人、姓は黑瀬氏、明治九年七月廿二日を以て寂す、齢六十一、著、般若心經一滴讚、密宗祖影贊、保國篇、同續、闢邪大義あり、右の人は早く故舜統上人より傳聞したり、僧傳の編述は是非なければならぬものゆゑ、己れもいろいろの傳記數十部を集め、兼て心がけたりしを、此人にして果して此擧ありしを竊に贊美して、予が筆記ども少々なりとも贈りてんなど思ひしかども、既にかく物にまぎれてさることも得果さでありしぞいと殘りおほき、願はくは贊成して此十二卷なりとも上木させまほしうなんおぼゆ、今日此傳を讀みて頗る懷舊にたへず、

癸未五月寓房州大戸大圓寺

植木復軒寄詩　乃和韵

鐵錫草鞋已兩旬。
雲烟堆裏謝紅塵。
寒村叩鉢朝求食。
古渡無人夜賽神。
愧對總房山水美。
未能詩句詠時頻。
適聞玉韻金聲春。

吠鏡浦邊知有隣。

晝晴耕雨讀四字示植木復軒

出養田園入養親。
紅花翠柳幸爲隣。
未知官海波瀾險。
閑暇晴耕雨讀人。

今夕植木氏にやどる。そば供、入浴、この宅地柏多し、前山白旗山といふ、今日終日雨、ことに風つよし、夜に入りはれ、

廿八日、晴、風つよし、入浴、朝物かき遣はす、十一時過寺に歸る、

田家

人入義皇以上班。
地隣孤竹採微山。
五風十雨固無怪。
擊壤歌存田圃間。』
堯圃舜田山下阿。
老翁何事笑呵呵。
城中絲竹春如涌。
未聽一聲擊壤歌。』

廿九日、快晴、大圓寺發足、道中二里、此間觀音菩薩開帳二ケ所、青柳村長泉寺に着く、說教一席名號ほどこす、出野尾村小網寺三十二番行基菩薩作、此にて東京豐島町老婆にあふ岡田屋うはさあり、

雨のふるに

旅ねするかやの軒ばの雨の音は
つねにきくよりさびしかりけり

登大莊嚴寺大悲閣

山圍三密寺。松響五智聲。
曳錫初瞻仰。千光照衆生。

今日授戒幷剃度式、此寺深養山長泉寺從來院名無之につき無涯院と額書きて遣はす。

三十日、天氣よし、長泉寺を發足す、十時安房郡笠名村安樂寺著、蘇鐵多くある家を見たり、

三十一日、晴、午前授戒、午後發足、館山三福寺着、二百人餘紅白旗立て迎に出づ、樓あり、よき寺なり、

旅夢

打とけてねられぬものを草枕
何結ぶらんふる里のゆめ

あふとしも見しは夢にてあはの海の
波の浮寢の有明の月

六月一日、曇、說教、

二日、晴、午前授戒、午後法要、

汐見松

靜かにも千歲をしもやまつならむ
あらしをなみの音にゆづりて

なみの音におのが嵐やゆづりけむ
靜かに千代をまつの一もと

房海之濱夕日輝。
適看松樹十餘圍。
鐵鱗不動醉龍眠。
抱石橫崖伏虎威。

三日、晴、八時過發足、送り百人ばかり、夕五時磯村森巖寺着、寺の庭すぐに荒礒なり、

四日、石火堂觀音開帳に付拜禮、名號施し鮨魚三百ひきばかり放生會、

庵しきの瞿麥を見て

塵の世のちりもすゑじと御佛の
おほしたてたるなでしこの花

五日、晴、

鴈

かりのよぞかりの宿りぞかりの身ぞ
とばかり鴈の鳴きわたるらむ

○

ちらぬ里かげかたぶかぬ山のはに
月と花とをまかせたらなむ

西にのみ心ひかれむ幾よよに
めぐりあひたる法の小車

六の道引なかへしそたまさかに

めぐり合ひたる法の小車

夢昔

ふたゝびは見えぬ習の昔をも
　又みせつるはゆめにぞ有りける

旅夜

なみの音に打さまされし後も猶
　ゆめかと思ふ磯枕かな

海上月

さし出づるあまのつり舟かげみよと
　又さし出づるなみの上の月

六日、終日雨ふる、授戒式、剃度式あり、七日、曇、安房郡須賀村秋山源兵衛宅へ一宿、慶願に因て随行五人、右秋山従来信者にて、慶應元年八月房州路廿四所観音開帳につき接待所を設け施行、明治三年及び十六年又接待施行す、

八日九時出立、車にて館山へおもむく、旗たておくる、

降魔相を咏ず

こりずまにうちはよせても岩が根に
　おのれくだけて帰る白なみ

秋山氏の家にやどりて

やどれるはひと夜なれども呉竹の
　ひとよにはあらぬ契なるべし

卯花

おもしろくさくと見るまにちりぬるを
　あなうの花と人やいふらん

編者曰、上人、鋸山に登り玉ひし時の詩あり、左に録す。

金環鳴絶頂。合掌似前身。
香散花千片。燈殘月一輪。
虎巖疑長嘯。龍松黑鐵鱗。
靈山高萬仭。踏雲再拜貟。

九日、十二時館山より汽船に乗りて、六時東京に帰る、海上浪風しづかにて、いとをかし、かねてはらそこねたれば、酔ひもするやと、きのふよりものくはでけれど、さしてほしともおもはず、よこ濱にちかくなるときゝて、初てすし二つくふ、

しばしとてとまりもあらぬなみの上の
　船やうき身のたぐひなるらし

釋教百首

不自惜身命　法華經壽量品
法のため身をすて小舟おなじくはこの荒
磯にくちねとぞ思ふ
こは相模國江の島に七十日籠りて大般若
經よみし頃詠めるなり

長別三界苦輪海　仁王般若經
山ざとの朝けのけぶりよそに見てたち別
れゆく峯のよこぐも

諸病悉除身心安樂　藥師本願經
月花をいのちとなせば世のなかにおもひ
わづらふ春秋もなし

常在靈鷲山　法華經壽量品
わしの山たかねにのみと聞きしかどわが
軒端にもありあけの月

棄國捐王行爲沙門　無量壽經
みほとけの道おほかれど捨つといふ一す
ぢよりやおもひ入りけむ

大音演說　同上
とく法の聲ともしらで今日までは空ふく
風ときゝすぐしつゝ

四十八願　無量壽經
その名こそ數はかぞふれまことには限り
しられぬちかひなるらむ

一心不亂　阿彌陀經
一すぢに心かけずはさゝがにの蜘のいが
きもかゝらざらまし

過十萬億佛土有世界名曰極樂　同上
遠しとはとけどもちかのしほ竈のけぶり
ばかりもたちはへだてず

佛種從緣起　法華經方便品
うちかへし思へば春のあらを田も菩提の
種をまくところなる

令聲不絕具足十念　觀無量壽經
南無と思ひ阿彌陀佛といふほかはいふこ
ともなし思ふこともなし

猿猴捉月　涅槃經
かげぞとも思ひしらざる溪河の月とりど
りにまよふ世のなか

道心恆不絕
おどろかすほどならずとも鳴子繩たえぬ
をみちの心ともがな

無常迅速
いつのまに昨日はすぎて今日もまた暮れ
むとすらむ入相の鐘

月前觀念
西にいる心ばかりはひさかたの月のかげ
にもわれはおくれじ

即得淺處　法華經普門品
淺瀬えしことをうれしと思ひしはまだふ
かからぬ悟なりけり
こは品川の海にて船のくつがへりて溺ひ
し時の歌なり

十界の中佛界
しるやいかによるはすがらによぶ三世の
佛の御名は我名なりとは

行無常　涅槃經
時しあれば松もたきぎとなりぬなり何を
常磐のものとさだめむ

愛欲榮華不可常保　無量壽經
もみぢ見し秋はきのふの夢のまに世はふ
りかはるむら時雨かな

生死涅槃猶如昨夢　圓覺經
何ごとも昨日のゆめときゝながらなほさ
めかぬるわが心かな

檀波羅蜜　六波羅蜜經

衣だにふたつときゝし言の葉のつゆにぬらさぬ袖なかるらむ

戒波羅蜜

わが道にいらむとならば梓弓そるぞはじめのをしへなりける

忍辱波羅蜜

世のうさをあはれしのぶの摺衣きてこそは見めみちの奥をも

精進波羅蜜

すゝみゆく心の駒はうつむちのかげも月毛もおよばざりけり

禪定波羅蜜

高野山こけのとぼそはしづかにて音もきこえず春さめのふる

般若波羅蜜

何をかはてらざるものと冬の夜のあらしの後の月にとはゞや

雪山大偈　涅槃經聖行品

身をすてし峯のみ山のゆきよりも深きは法のさとりなるらむ

[illegible]

[illegible]れてはよその木末とおもひにき阿耨菩提はとのみなりしを

金剛寶石　佛成道坐石生於金輪際云(西域記)

劫をへて天の羽衣なでて見よつきぬやこれのいは根なるらむ

盲龜値浮木　涅槃經

めしひたる龜も浮木にあふものをいつまで沈む我身なるらむ

妻子珍寶及王位臨命終時不隨者　大集經

うへもなき玉のうてなもおく露のしばしけぬまの光なるらむ

由妄念故沈生死　心地觀經

あともなき風にあらそふ心よりまよひの波やたちさわぐらむ

生死甚難厭　善導和尚觀經玄義分

木末にも心とまらぬもみぢ葉をいとひかねたる人に見せばや

聞名得忍願　無量壽經四十八願中

御名をのみきくの下露いつのまに深きさとりの淵となりけむ

如大夢覺　法界無差別論

さめぬればありとも見えず手枕のゆめの通路なにたどりけむ

極樂無爲涅槃界　善導和尚偈文

ちらぬ里かげかたぶかぬ山のはに月と花とをまかせたらなむ

樹下石上

苔むせる岩が根まくらかをるなり春はうれしき花のしたぶし

二河白道

西へゆく道ひとすぢにまかせてむなみも炎もあとに見なして

貪

天が下みなわがものとなれるにもなほものたらぬ心地こそすれ

瞋

いが栗のとげとげしさのみの末や落ちていかなる火に焼くるらむ

癡

はらくろき人のこゝろやぬばたまの闇路をたどるたねとなりけむ

菩薩界

三十あまりみつの浦舟なみたちてさす棹いかに隙なかるらむ

天人界

ひく絲のしばしばかりのゆるびより思ひあがれるいかのぼりかな

修羅界

はてもなく思ひあがりし心よりあそらとまでの名はおひにけむ

餓鬼界

袖ぬれし水際のなみも音かへてほのほばかりぞもえわたるなる

畜生界

父といふ名をだにしらぬ蓑蟲の身のはていかにならむとすらむ

人間界

うれしくも人とうまれてみ佛のさとりの道もこれよりぞいる

殺生戒

我もまたをしとこそ思へをしと思ふいのちはおなじ命ならずや

偸盜界

みるめこそしばしはからめおりたちてかづかば浦の蜑やとがめむ

邪婬戒

まねくとも尾花がそではこゝろせよあらぬ荒野にみちやまよはむ

妄語戒

呼子鳥よべばこたふる山びこのそれもまことの聲にやはある

常念我名

つの國の蘆の八重ぶきひまをなみつとめよ常に南無阿彌陀佛

漏盡通

功徳池の無漏のながれにみがかれていしもかはらも玉がはのみづ

他心通

かねてわが阿頼耶の鏡みがかれてひとの心もうつるなるらむ

神足通

ゆかばやとおもへばやがて足柄の關のとざしもさはらざりけり

宿命通

幻のゆめぢをからで過ぎし世をうつゝとなして見るがめづらし

天耳通

みゝと川きしうつ波もなみならぬみ法の音ときこえこそすれ

天眼通

いつしかとこゝろのかすみきえはてて見むと思へばみよし野の山

尸羅不清淨三昧不現前

角田川すめばこそあれ待乳山かたぶくつきのかげもやどれり

人能念佛還念

阿彌陀佛と聲にはたてよ山彦もよべば答ふるならひある世に

慧可禪師

少林のゆきにしたゝるくれなゐにそめよ心のいろあさくとも

拈華微笑

こゝろなき嵐にもあるかつとにとて手折りし花はちりにけらしも

百丈野狐

たちかへる道まどふらむ霜さゆる枯野の原にきつねなくなり

香嚴樹上

ふる雪もおよばぬまでに花ぞちるあなおもしろの春のやまかぜ

如是我聞

はるかにも我もきゝしかわしの山むかしのまゝの峯の春かぜ

無住爲本

さら〳〵と音はたてゝもあし原の末葉に風はとまらざりけり

如是因果

かれやらぬおのがふる根のおひいでて今年もさわぐ蘆の亂れ葉

羅漢托鉢の畫に

春霞けさうら〳〵とたちいでぬ初音ほどこせかどのうぐひす

意馬

あれまさる心の駒はいくたびも鞭うちてこそすゝむとをしれ

心猿

塵の世を梢となして木づたふはなにのこゝろのやまざるぞこれ

三時のうち末法の心を

わが法もやまの端ちかくなりぬらしかすかにのみぞ有明のつき

人にしめしける歌

此世のみよとなおもひそ後の世もそののちの世もおなじ世なるぞ

寅のとし試筆

虎とみて石にも征箭はたつかゆみひきなゆるべそ摩訶菩提心

花

さだめなき風にまかせてちる花をはなとばかりもおもひけるかな

春山寺

墨ぞめのくらまの山のやまざくら夕べは鐘とあやしまれつゝ

更衣

ぬぎかふるわづらひもなし四きても苦の衣はたゞひとへにて

蓮始開

もとよりもにごりにしまぬはちすばの開くや花のさとりなるらむ

秋のはじめに

事もあらで今年も秋になりひさごなり下りたる身ぞ安げなる

月

あまりにも滿つればかくることわりを忘れがほなる秋の夜の月

野月

きゑやすきかげともしらでもとの露すゑの雫にやどる月かな

草花

かつうらみかつまねきつゝ葛尾花おなじ夢野にたち騒ぐらむ

網代　こは八十になりける時の歌なり

わが年も八十うぢ川のあじろもりしぬるひをまつ翁なりけり

雪月花

花とめで月とながめし春あきのはてはかしらの雪ぞつもれる

歳暮

なす事もあらで今年もくれはとりあやまりがちに過しつるかな

峯

こゝをしもさとりの峯とおもひしは迷にくだるはじめなりけり

井

かげだにも法のしるしの見えぬかな心あさかの山の井のみづ

竹

おきふしを風にまかせてすなほなる竹を心のともがきにせよ

舟

のりの舟さすとはすれど角田川わたしもりにはおよばざりけり

蝸牛

世のなかはかりほの垣の蝸牛つのさしいだすひまにぞありける

道

ならはじな澤邊の蟹の横にのみ行けばゆかるゝ道はありとも

知足

あればまたなきを數へて世の人の足れりと思ふときやなからむ

待賢南容園集鳴南無欣淨土行人得蓮處南業

長きよの旅ねをさますくだかけはにしに心をかけろとぞなく

思ふことありける時

しばしこそ世の冬枯にならふともしたもえそめよ法のみち芝

題しらず

くるずゝのたま〳〵えたる人の身に數ふるほどの功德ともがな

世のなかはしばしばかりの乘合の舟つくまでのすさびなりけり

人の扇に書ける

あふがれていつまで世にはふる扇やがて骨ともなり果つる身を

髑髏のゑに

春といひ秋とくらして花紅葉みしはゆふべの夢にぞありける

月前述懷

さやかにも心の月はみゆべきを晴れぬや胸のけぶりなるらむ

ゐの年の秋傳法復古かきけるおくに

うらみなき秋をむかしにふきかへせ眞葛がはらをわたるあさかぜ

戌のとし三緣山を辭職して深川の本誓寺にうつりける時

かくれ笠かづくとまではあらねども今日より人に見えじとぞ思ふ

精神主義（第一 第二 第三）

清澤滿之

精神主義（第二）

一　精神主義

吾人の世に在るや、必ず一の完全なる立脚地なかるべからず。若し之なくして、世に處し、事を爲さんとするは、恰も浮雲の上に立ちて技藝を演ぜんとするものの如く、其轉覆を免るゝ事能はざること言を待たざるなり。然らば吾人は如何にして處世の完全なる立脚地を獲得すべきや、蓋し絕對無限者によるの外ある能はざるべし。此の如き無限者の吾人精神内にあるか、精神外にあるかは、吾人一偏に之を斷言するの要を見ず。何となれば彼の絕對無限者は、之を求むる人の之に接する所にあり、内とも限るべからず、外とも限るべからざればなり。吾人は只此の如き無限者に接せざれば、處世に於ける完全なる立脚地ある能はざることを云ふのみ。而して此の如き立脚地を得たる精神の發達する條路、之を名けて精神主義といふ。

精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり。故に外物を追ひ他人に從ひて、爲めに煩悶憂苦することなし。而して其或は外物を追ひ、他人に從ふ形狀あるも、決して自家の不足なるが爲めに追從するものたるべからず。精神主義を取るものにして、自ら不足を感ずることあらんか、其充足は之を絕對無限者に求むべくして、之を相對有限の人と物とに求むべからざるなり。

然れども、精神主義は强ちに外物を排斥するものにあらず。若し外物に對して行動することある場合には、彼の外物の爲めに煩悶憂苦せざるのみならず、彼の外物は精神の模樣に從ひ、自由に之を變轉せしめ得べきことを信ずるなり。故に彼の「隨㆓其心淨㆒則佛土淨」とは、是れ善く精神主義の外物に對する見地を表白したるものといふて可なり。

又精神主義は自家の精神を以て必要とするが故に、其の外貌或は利己の一偏に僻し、他人を排斥するが如きものなきに非ず。然れども、精神主義は決して利己一偏を目的とするものにあらず、又他人を蔑視するものにあらず。只自家の立脚地をだも確めずして、先づ他人の立脚地を確めんとするの不當なるを信じ、自家の立脚地だに確乎たらしむるを得ば、以て之を人に移し得べきことを信じ、勉めて自家の確立を專要とするが精神主義の取る所の順序なり。

故に若し外物又は他人と交際して、自他の幸福を增進することに至りては、精神主義は決して此事を排斥せず。寧ろ反て之を歡迎するなり。故に精神主義は決して隱遁主義にあらず、又退嬰主義にもあらざるなり。協同和合によりて社會國家の福祉を發達せしめんことは、寧ろ精神主義の奬勵する所なり。

精神主義は完全なる自由主義なり。若し其制限束縛せらるゝことあらば、是れ全く自限自縛たるべく、外他の人物の爲めに制限束縛せらるゝにあらざるべし。自己も完全なる自由を有し、他人も完全なる自由を有し、而して彼の自由と我の自由と衝突することなきもの、是れ即ち精神主義の交際といふべきなり。

而して通常の場合に於ては、彼の自由と我の自由と衝突なき能はざる如きは何ぞや。他なし、此の如き自由は完全なる自由にあらざ

るが故に、完全なる服從と平行せざればなり。今精神主義によりて云ふ所の自由は、完全の自由なるが故に、如何なる場合に於ても、常に絕對的服從と平行するを以て、自由に自家の主張を變更して他人の自由に調和することを得て、決して彼の自由と衝突することあらざるなり。

然るに此の如き服從の場合に於て、最も注意すべき所の要件あり、煩悶憂苦の有無即ち是なり。此點に就ては精神主義に一種の要義あり、他にあらず、精神主義は總ての煩悶憂苦を以て、全く各人自己の妄念より生ずる幻影と信ずるにあり。乃ち、精神主義よりして之を云へば、我は外他の人物を苦むること能はざると同じく、外他の人物は我を苦むること能はざるなり。故に或は外他の人物の動作によりて我が苦惱するが如きことあるも、精神主義よりして之を云へば、是れ我が妄想の爲めに苦惱するものとし、決して外他人物の爲めに苦惱せざるものとするなり。(之に反する場合も推して知るべし)。而して此の如き苦惱は畢竟妄念より生ずる幻影に過ぎざるが故に、精神主義の實行が進步するに從ひ、吾人の立脚地の益々明確となると共に彼の苦惱は漸次に滅退消散するものたるなり。

之を要するに、精神主義は吾人の世に處するの實行主義にして、其第一義は、十分の滿足を精神內に求め得べきことを信ずるにあり。而して其發動するところは、外物他人に追從して苦惱せざるにあり。交際協和して人生の幸樂を增進するにあり。完全なる自由と絕對的服從とを雙運して以て此間に於ける一切の苦患を拂掃するに在り。

(明治三十四年一月發行「精神界」所載)

二　精神主義と物質的文明

玉杯象箸、高樓に宴安するは、常識の以て盛大となす所なり。簞食瓢飮、陋巷に潛居するは、凡情の以て陋小となす所なり。輕車肥馬、堂々として國事に奔走するは、常識の以て盛大となす所なり。赤脚草鞋、役々として家業に勞働するは、凡情の以て陋小となす所なり。乃ち陋巷を卑とし、高樓を尊とし、脚鞋を賤とし、車馬を貴とし、天下を擧げて車馬高樓を羨望し、脚鞋陋巷を厭斥す。是れ一方には競爭相殺の根源にして、一方には奢侈贅澤の濫觴なり。豈警戒すべきことならずや。精神主義は、之に對して一種の見識を揭げんとするものなり。今少しく之を開陳せん。

世に一種の主義あり。前段の事象に關して、直面反對の見地を立て、車馬高樓を卑賤として、之を厭斥し、脚鞋陋巷を尊貴として、之を羨望せんとす。精神主義は物質的文明に對して、此の如き消極主義を宣揚するにあらざるなり。

車馬可なり、高樓可なり、脚鞋可なり、陋巷可なり。此の如き客觀的事象に對して卑を見ず、賤を見ず、尊を見ず、貴を見ず。略言せば、能く平等の見地に住せんこと、是れ精神主義の要義とする所なり。

夫れ吾人の生存は、是れ與へられたる問題なり。貧富貴賤、士農工商、吾人は生れて各異れる家庭にあり、各異れる身心を以て、各異れる經驗を受く、如何に勉めて之を平等ならしめんとするも、吾人は決して其目的を達すべきにあらず。況んや、男女老幼天然に相同じからざる諸點あるに於てをや。然れば則ち、人生の行路に於て、或は輕車肥馬高樓宴安の舞臺に立つものあり。或は赤脚草鞋陋巷潛在の隱居に處するものあるは、固より當然と云ふべきなり。加之、世相の變轉、富も變じて貧となり、貴も轉じて賤となるを免れず。此

間に處して、能く不動の安心に住せんとするもの、豈彼の車馬高樓と脚鞋陋巷との爲めに變轉して可ならんや。吾人は吾人現在の境遇を以て、其車馬高樓たると、其脚鞋陋巷たるとを問はず、之を與へられたる問題として解釋せざるべからず。而して此問題を解釋せんとせば、吾人は吾人現在の境遇の中に於て滿足の見地を發得せざるべからざるなり。是れ精神主義の活動によらずば、決して達し得られざる所なり。

然れば則ち、精神主義は如何に活動して、彼の問題を解釋せんとするか。精神主義の活動は、眞理の遍在を確信するを以て、根據とするなり。乃ち眞理が萬物に遍在する以上は、客觀の上にも主觀の上にも、眞理は決して缺乏することあるべからず。而して客觀上の眞理は主觀上の眞理によりて、始めて觀見せらるゝものなるが故に、吾人は彼の客觀上の眞理を觀見せんが爲めにも、先づ主觀上の眞理を自覺せざるべからざるなり。而して主觀的眞理の自覺が即ち精神主義に外ならざるが故に、精神主義は常に主觀的作用の完全圓滿に到達し得べきことを確信するもの也。果して主觀的作用が完全圓滿に到達し得べしとせば、吾人は、現在に於ては、客觀的事象に對して、彼を厭ひ此を望むが如き妄念の爲めに障礙せられて、平等の見地に住する能はずと雖も、是れ畢竟自覺の未だ十分ならざるによるものにして、決して彼の客觀的事象に尊卑貴賤等の性質あるにあらざることを信知するなり。即ち彼の陋巷は決して陋小なるにあらず、之を陋小なりとする我心が陋小なるを信じ、彼の赤脚草鞋は決して卑賤なるにあらず、之を卑賤なりとする我心が卑賤なるを知るなり。是に於てか、吾人は現在の境遇に不滿を感ぜずして、只管自家修養の道に傾注するに至る。而して彌々修養の道に於て進達する所あらんか、吾人は、彼の境遇に對して、啻に不滿を感ぜざるのみならず、如何なる所にも無限の妙致を發見して、到る所に、十分なる滿足を獲得すべきなり。是れ即ち、精神主義の客觀的事象に對する活動の概觀なり。

終りに精神主義の客觀的事象に對する態度を反面的に略言せば、精神主義は彼の客觀事業の進歩、特に物質的文明の進歩に對しては、敢て妨害せんとするものにあらざると同時に敢て貢獻せんとするものにあらざるなり。精神主義は、物質的文明が進歩すれば、其進歩したる所に活動の地歩を占め、物質的文明が退歩すれば、其退歩したる所に活動の地歩を占むることを得るなり。此點に於ては精神主義は、客觀的事象と、全く關係なきものと云ふべきなり。

之を要するに、精神主義が客觀的事象に關係する所は、其主觀的成立即ち物質的文明の價値、趣味、品格、意匠等を認識する所にして、精神主義は實に此等認識の唯一主宰者なり。而して精神主義活動の極致は、萬物に於て同一價値、同一趣味、同一品格、同一意匠等を認知せしむるにあり。此の如き精神主義の活動は、則ち、是れ競爭相奪の害を防ぎ、奢侈贅澤の弊を救ふの必須條件なり。

（明治三十四年五月發行「精神界」所載）

三　精神主義と競爭

名譽の競爭あり、財産の競爭あり、實力の競爭あり、門閥の競爭あり、他の歡心を買はんとする競爭あり、人の機嫌を損ぜざらんとするの競爭あり、上を凌がんとするの競爭あり、下に凌がれざらんとするの競爭あり。凡そ社會活動の現象は、見來れば、一として或る競爭の事にあらざるものなし。否、社會

活動の現象のみならず、萬有活動の現象は、悉く是れ勢力競爭の事にあらざるものなしと云ふものあり。

　然り而して、彼の無意無心なるものの動化を活動と名けて、之に競爭と稱すべき作用ありやなきやは、今の要問にあらず。吾人は今活動と云ふべきもの、競爭と云ふべきもののある所の範圍內に就きて、檢する所あらんのみ。而して、競爭は精神主義と如何なる關係に立つものなりや。

　競爭は如何なる場合に於ても、客觀的對象を離れざること勿論なり。故に競爭は第一着歩に於て、精神主義と反對する所あること明かなり。特に吾人に最も近切なる競爭の對手は、常に社會に於ける吾人の同胞なり。換言せば、吾人は日夜に同胞に對する競爭に驅られて、苦悶を脫する能はざるなり。更に緊切なる事例に就かんか。吾人が君上に忠順なる能はざるは、一種の競爭心を以て、其根柢となせるなり。吾人が父母に對して孝順なる能はざるは、一種の競爭心を以て、其根柢となせるなり。吾人が朋友に對して柔順なる能はざるは、一種の競爭心を以て其根柢となせるなり。其吾人が所謂修身道德の大義と稱する所の事に於て、吾人が其實踐躬行に達する能はざる所以は、蓋し幾多の競爭心が吾人の心裡に潛在して、常に從順的本心を壞亂するが爲めならざるなし。所謂修身道德の心と競爭とは終に兩立する能はざるものなり。或は云はん、修身道德も、亦進化の現象なり、而して其進化は亦競爭心に據らざるべからずと。吾人は今玆に修身道德の進化論の實踐躬行上に於て、修身道德と競爭心との衝突あることを指すのみ。是れ吾人の實驗を表白するものなり。即ち換言せば、吾人の內的實驗は、常に修身道德の心と競爭心との衝突を感ぜしむるなり。而して吾人の修身道德の心が競爭に據りて進化したるものなるや否やは、毫も此實驗に影響する所なきなり。

　更に進んで吾人の實驗を開陳せば、吾人の競爭心は、客觀的對手が、目前に實現したる時に於て、最も强盛なるを覺ゆ。名譽の場合に於ても、財產の場合に於ても、實力の場合に於ても、門閥の場合に於ても、他の歡心を買はんとする場合に於ても、人の機嫌を損ぜざらんとする場合に於ても、上を凌がんとする場合に於ても、下に凌がれざらんとする場合に於ても、其競爭の主因となるべき事件が、吾人の眼前に存せざる間は、吾人は、幾分か之に對して競爭するの念を脫却し得べしと雖も、一たび其事件が目前他人の上に發現せんか、吾人は直に之に向ひて、競爭の念止む能はざるものあり、他人の名譽を見れば、直に之に競爭せんとし、他人の財產を見れば、直に之に競爭せんとし、他人の實力を見れば、直に之に競爭せんとし、他人の門閥を見れば、直に之に競爭せんとし、他を見れば、直に其の歡心を買はんとし、人を見れば、直に其の機嫌を損ぜざらんとし、上を見れば、直に之を凌がんとし、下を見れば、直に之に凌がれざらんとす。之を要するに、客觀的對象の實現は競爭心を激成するの大動機たるものなり。

　夫れ此の如く、競爭心は客觀的對象の實現を以て大動機とす。故に、彼の客觀的對象の實現に動轉せられざらんとする所の精神主義は、蓋し競爭心とは、相兩立せざるものたるを知るべきなり。精神主義は自家の內部に圓滿を期するものなり。外他を望觀して煩悶苦惱することを爲さざるものなり。是れ競爭心の根據に背馳するものなり。乃ち知るべし、競爭心に驅らるれば、驅らるゝ丈、其丈精神主義に乖離し、精神主義に進めば、進む丈、其丈

競爭心を脱却すべきことを。

（明治三十四年七月發行「精神界」所載）

四　精神主義と唯心論

吾人の精神主義を宣揚するや、屢々物質を排して精神を採り、客觀を斥けて主觀を取る。其論固より實際門内の言にして、敢て哲學的理論に亙るものにあらずと雖も、或は亦此點の明瞭を缺くものなきにあらざるべし。而して精神主義の最も混化し易き哲學的理論は、蓋し彼の唯心一元論なるべし。

精神主義と唯心論との區別は、第一に、宇宙萬有に對する見解に就きて見るべし。唯心論は宇宙萬有を以て、直に之を心的現象となし、所謂物質なるものも、亦是れ心的現象にして獨立存在のものにあらずとなす。然るに、精神主義は此の如き定説を要とせず。宇宙萬有が心的現象なるも物的現象なるも、所謂物質なるものが是れ心的現象なるも或は亦獨立存在のものなるも、精神主義は、此等哲學的理論には、其如何なるものなるも、毫も關係することなく、只彼等哲學上の諸論が、何れも除却する能はざる所の、我と萬物、主觀と客觀との對立を基本として、其上に於ける實際に就きて、主觀的精神の内に、滿足と自由との存し得べきことを宣揚するなり。故に唯心一元論は唯物一元論と、物心二元論は、絶對迷妄論と、兩立する能はざるも、精神主義は毫も此等諸論と牴觸することなきなり。

次に萬有中の邪惡なるものに對しても、唯心論は（此點には他の諸論と同じく）何故に此の如きものが存在するやの説明を爲さざるべからず。然るに、精神主義は此點に於て、頗る其趣致を異にするなり。所謂毒蛇惡龍なるものありとせんも、其ものを毒蛇惡龍と見るか、藥蛇善龍と見るかは、是れ吾人の精神如何によることにして、吾人は此事に關して十分の自由を有するものとするが、精神主義の一大要義とする所なり。故に其物が客觀的實在上に於て毒たり惡たるの説明を要とせざるのみならず、其物が主觀に對して毒たり惡たるの説明をも要とせざるなり。何となれば、精神主義より見れば、其物が客觀的實在上に毒たり惡たらざるのみならず、其物が主觀に對しても、毒たり惡たるにあらずして、只全く精神の開展其當を得ざるが爲めに毒惡を感ずるものに過ぎずとすればなり。換言すれば、精神主義より云へば、毒惡と云ふことは、全く精神内のことにして、外物に關することにあらざるなり。

唯心論は絶對心の一元を主張すと雖も、而も亦我と萬物との相對を許すが故に、所謂大我と小我、絶對心と相對心の關係を明かにせざるべからず。是れ哲學上最後の難問題にして、今日何一人の是が明解を與ふるものなき、寔に其所なり。然るに、精神主義は、此の如き難問題を抱持せず。只吾人各自の精神が、其開展の模樣によりて、能く滿足と自由との福樂を受有し得べきことを指説するなり。之を例するに、美衣美食を好み惡衣惡食を恥づるが如き、是れ實際上の問題なり。而も亦之に對して大我の要求する所如何、小我の要求する所如何と考究し得べからざるにあらず。然るに、大我小我の何たるも明かにせずして、此の如き考究に闖入するは、是れ塵を抑へんと欲して彌々塵を揚ぐるものたらずばあらず。精神主義は、之に反して實際問題は實際問題として、美衣美食を好むの精神如何、惡衣惡食を恥づるの精神如何、此精神心地は決して轉改せられざるものなるや如何。「士、道に志して惡衣惡食を恥づるものは、未だ與に議するに足らざるなり」と。而して小兒は道に志さざるも惡衣惡食を恥ぢざるなり。美を好み惡を恥づるは、決して不變の精神

にあらざるなり。何すれぞ、吾人は彼を恥ぢ之を厭ひ、福樂を捨てて禍苦を取る。吾人は須らく吾人の心機を開展して、實際に滿足と自由とを享有すべきなり。精神主義が實際問題を解決する、蓋し此の如きのみ。決して唯心論の如き哲學的問題よりして、大我小我、絶對心相對心等の説明を根據とするを要せざるなり。

之を要するに吾人の所謂精神主義は實際門内の主義にして、理論上の系統にはあらざるなり。而して心機の開展を説き、滿足と自由とを唱ふるが爲めに、或は唯心一元論の絶對的自由の萬有開展と混するが如きことなきにあらざるが如しと雖も、精神主義は、萬有の成立の説明に對して、其唯心論たると唯物論たると、物心二元論等たるとに關せず、主客兩觀相對立せる實際上に於て心機の開展を唱導すること（第一）、其相對立せる主客兩觀上に就ても、善惡正邪、有害無害等の相對的性質は、之を客觀的實在の上に存するものと見ずして、全く主觀的精神の開展如何によるものなりと定むること（第二）、及び、此主觀的精神其物の成立に對しても、決して此が哲學的説明を要求せず、只實際的發動の上に於て、滿足と自由を享有し得べきことを宣揚すること（第三）によりて、十分に唯心論や其他哲學的諸論と甄別し得べきなり。

（明治三十四年十月發行「精神界」所載）

五　精神主義と他力

精神主義は各自の心中に滿足を求め得と云ふ。忽にして之を見れば、實に自力全能を主張するものの如し。然れども、是れ未だ精神主義の實際に明かなるものと云ふべからざるなり。精神主義は寧ろ之に反して純然たる他力主義に據るものと云はざるべからず。

抑ゝ精神主義は、相對が絶對に入り、有限が無限に合する所に發展する所の實際主義に外ならざるなり。其所謂入と云ひ合と云へることを説明せんとするは、不可能のことなりと雖も、而も吾人が今此事に關して自力他力を説かんとする以上は、吾人は精神主義の他力的なることを宣言せざる能はざるなり。何となれば、相對が絶對に入り、有限が無限と合すと云ふ所に於て、吾人は相對の外に絶對を説き、有限の外に無限を説き、而して吾人が所謂自己心中の滿足なるものは、卽ち此絶對無限の賦與する所に外ならざればなり。

更に吾人が自己心中に滿足を得る模樣を檢察するに、吾人は世上百般の事に當りて、不滿足の爲めに煩悶することあるも、一たび轉じて絶對無限、如來大悲の實在に想ひ到れば、先の不滿足の煩悶は煥然として消散し、滿足の歡喜は油然として流出するを覺ゆ。蓋し吾人が不滿足を思ふは、畢竟自己の意力の薄弱なるに基因するものにして、若し自己の意力の牢強なるものは、如何なる境遇に臨み、如何なる狀態に陷りても、毫も不滿に沈むことなく、常に其の境遇と其の狀態とに滿足して、只管自己の職分を盡さんことに進むのみなり。然るに此の如き意力は、決して吾人の常に有する所にあらず。吾人は寧ろ意力（只意志あるのみを云ふにあらず、能く其の意志に順じて終始を貫徹する力用をも併せ云ふ）の非常に薄弱なるを感ず。而して此意力の薄弱なるものが、其の心中に滿足を得る所以は如何と云ふに、吾人が無限大悲の實在を感ずるにより、自己は唯其無限大悲の賦與に屬する分限內にのみ自由を得、其分限外の範圍に於ても、別に如來大悲の妙巧あるべきことを信ずるが故に、自己の內外に對して、共に不滿の念あることなし。是れ豈無限大悲の他力的感動と云ふべからずや。

然り而して、無限大悲の他力により、自己の內外に對し滿足すと云ふ中に就きて、其自己內

に關するの點は則ち可なり。其自己外に對するに當りて、只管無限大悲の妙巧を信ずと云ふに至りては、其意を領し難きものあり。喩へば、路傍に急患の爲めに呻吟する者あり、之に一顧の惠を與へ、之が一時の急を救ふは易々たる事なるも、精神主義のものは、之を無限大悲の妙巧に任せて、平然知らぬ振りして通過し去ると云ふものの如し、果して然るや、と。是れ屢々吾人の精神主義に對して發せらるゝ所の疑問なり。請ふ少しく之を辯明せん。

精神主義の他力を云々するは、其他力が各自の精神に感ぜらるゝ所を基本とするなり。此點よりして之を云へば、假令無限大悲は所謂客觀的には實在せるも、夫が吾人の精神上に感ぜられざる以上は、精神主義は之に關係せざるなり。而して此事情は總ての場合に及ぶ事にして、吾人が他力によりて自己の內外に對して滿足を得と云ふも、皆一々の場合に於て、彼の他力が自己の精神上に感ぜられたる時に就きて云ふものなり。故に今彼の路傍の急患者の場合の如き、精神主義が之に對して他力の妙巧を信ずと云ふは、決して知らぬ振りして平然通過し去ると限るべからず。寧ろ直に歩を止め、全力を盡して之を介抱するを當然と云ふべきなり。其介抱と通過とは、精神主義の一定する所にあらず。無限大悲が吾人の精神上に現じて、介抱を命じたまはゞ、吾人は之を介抱し、通過を命じたまはゞ、吾人之を通過するなり。通過と介抱との二點に就きては、吾人は自ら虛心平氣にして、無限大悲の指命を待つあるのみ。啻に他人の危急に就きてのみならず、自己の危急に於けるも亦同般なり。大地震轟し來りて家屋將に顚覆せんとするとき、走り出づべきか、走り出づ可からざるか、走り出でて災害に逢ふことあり、災害を免るゝことあり、走り出でずして災害に逢ふことあり、災害を免るゝことあり。災害の來否は、吾人の知見し得る所にあらざるなり。知見し得ざることに對して狂亂するは無用のことなり。吾人は此無用のことに對しては、勉めて虛心平氣の工夫を盡し、而して、走り出づべきか走り出づべからざるかの直接問題に對しては、一に無限大悲の指命に待ち、若し走り出でんとするの念起らば、驀直に走進し、若し走り出でんとするの念起らずば、泰然として安坐すべきなり。然り而して、自他の危急等に就き、通過と介抱、走進と安坐との如く、其何れかの一方に他力の指命を得る場合は、即ち決定を得べしとするも、其他力の指命が判然たらざる場合は如何、豈煩悶なきを得んや、と。是れ亦精神主義の他力門に對する一個の疑問なり。然れども精神主義に於ける他力を感知し得るものは、深く此の如き疑問に惱亂せらるることなかるべし。何となれば、此の如き猶豫不定の間に居らしめたまふも、亦是れ無限大悲の妙巧に出づることを感知し得べければなり。乃ち此の如き場合に臨まば、吾人は彌々勉めて虛心平氣に指命を待ちつゝ滿足すべきなり。

（明治三十四年十一月發行「精神界」所載）

六　精神主義と三世

精神主義は過去の事に對するアキラメ主義なり。精神主義は現在の事に對する安住主義なり。精神主義は未來の事に對する奮勵主義なり。

吾人が過去の事に對するや、固より苦痛と快樂との場合あるべきなり。而して此快樂に放心し、其苦痛に傷惱するは、蓋し通常の事なるべし。驕傲懶怠、彼より起り、悲泣怨恨、此より生ず。人世の弊竇、其過去の事蹟に對する感想より發するもの、實に鮮少ならざるなり。精神主義は此の如き場合にあたりて、一方には快樂苦痛の主觀的現象なることを覺りて、其

轉換の自由あることを知らしめ、一方には事の成蹟に就ては、無限大悲の善巧方便あることを諒とし、其良否の共に意味あることを領せしむ。乃ち放心と傷惱とは自然に消散し去りて、所謂驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等の弊竇、亦生起せざるに至る。精神主義が過去の事に對するアキラメ主義なりとすべきは、蓋し其吾人をして放心と傷惱とを脫却せしむるを云ふなり。而して其吾人をして放心と傷惱を脫却せしむる結果は、やがて亦吾人をして、驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等を脫却せしむるなり。然り而して此は是れ消極的言明なり。若し夫れ之を積極的に開說せんか、放心の消散する所に懺悔の心生じ、傷惱の消散する所に感謝の念發す。乃ち驕傲、懶怠、悲泣、怨恨等の代りに、忍辱、精進、歡喜、愛樂等の好果觀るべきなり。

然りと雖も、一概に過去に傾注して、其より好果を觀んことは、決して精神主義の本旨とする所にあらざるなり。否、精神主義は寧ろ現在の安住を主要とするものなり。彼の無限大悲の善巧方便を諒知することの如きも、先づ現在の信念を確立したる上にあらでは、明瞭なる能はざるなり、現在に於ける無限大悲の實現を感知するものにして、始めてこの無限大悲の過去に於ける善巧施設を信ずるを得るなり。現前信仰の一念が救濟の大事を完了し、吾人永劫の未來が信仰の一念に決定せらるゝの妙旨を會得したるものにあらずば、過去未來に關する大義を領解する位地を得たるものにあらざるなり。精神主義は常に此信念を發揮せんが爲めに、此無限大悲を感知せんが爲めに、敢て客觀主義を排して主觀主義を唱ふるなり。即ち精神主義の目的は物質主義を去り、動物主義を去り、社會主義を去り、國家主義を去り、個人主義の中にも、肉體主義、不足主義、競爭主義を去りて、精神主義、滿足主義、自由主義に就くにあり。語を換へて之を言はんか、精神主義は、彼の生物(特に吾人人類)を解剖分析して、物質の集合體に過ぎずとする說明を以て、吾人に安住を得せしむるものとする能はざるなり。精神主義は、彼の動物の狀態を查察して、動物此の如きが故に、人類も亦此の如くあるべしと云ふ推論が、吾人に安住を得せしむるものとする能はざるなり。精神主義は、彼の社會の爲め、國家の爲めを先として、自己の爲めを知らざる主義が、吾人に安住を與ふるものとする能はざるなり。精神主義は、個人主義を取ると雖も、彼の個人の肉體を以て第一義とし、現在の境遇を不足とし、他人を倒しても己れを利せんとする主義が、吾人に安住を與ふるものとする能はざるなり。即ち精神主義は、自己の精神を第一義とし、其精神が現在の境遇に滿足して自由自在に活動する處に、吾人は安住の地位を得べきことを唱導するなり。而して吾人は、吾人の精神が無限大悲の光明懷裡に攝取せらるゝにあらずば、此滿足と自由とを得る能はざることを斷言せんとするものなり。

然り而して、安住と云ひ、滿足と云ふ、其未來の事に對するに於て、優柔沈滯の憂なきやと。是れ吾人に對して屢々來問せらるゝ所なり、吾人は常に此に對して、只之を反言するの要を見るのみ。抑々安住と不安と何れか事を爲すに力あるか。吾人は安住せるものにして始めて事を作すに足るを見る。彼の戰々慄々として常に不安に驅らるゝものは、決して事を作す能はざるなり。泰然自若と云ひ、綽々として餘裕ありと云ふが如き、皆是れ事を爲すに當りて、重要なる性行に非ずや。而して皆是れ安住の或狀態を表する者に非ずや。而して滿足の義に就ては、吾人は常に滿足せざるもの、働く能はざるを聞くものなり。吾人が事を爲さんとす

るに當りて、心中に不足を思ひ、不平を懷く時には、吾人は殆んど其事に着手する能はざるにあらずや。不平不足の思念が活動を痲痺せしむるに反して、滿足と平安とが活動を策勵せしむること、吾人の常に實驗する所にあらずや。彼の小兒の行動に就て見るも、彼等が求むるものを與へられざるか、或は與へらるゝも十分ならざる場合に當りて、不足不平に堪へざる間は、顚轉號泣して、殆んど狂倒するが如きも、一たび其欲する所の滿足を得るや、忽ちにして其狂亂は鎭靜して、滿面笑を含みて其姿勢をも端正にし、活潑潑地の行動に勇進するを見る。是れ豈吾人自然の傾向ならずや。然れば則ち吾人が精神主義の指導によりて、實地に滿足と安住とを得ば、吾人は自然に彼の小兒の如く活潑潑地の行動に勇進し得べきなり。自由の活動とは則ち是なり。精神主義は未來の事に對しては實に奮勵の主義たるなり。

（明治三十五年二月發行「精神界」所藏）

七　精神主義と共同作用

精神主義は、一に內觀主義と云ひ、或は主觀主義と云ふ。卽ち、外界客觀に對して、毫も頓着することなく、隨て社會同胞と相接して、共同作用を爲すの意なかるべく、よし之ありとするも、其間に規律と秩序とを認むることなかるべし。果して然るや、と。是れ寔に好個の疑問なり。今少しく之を解說せん。

吾人の所謂精神主義は、實に內觀主義を要義とするものなり。然れども、此が爲めに外界客觀を否定するものにあらざることは、先に屢々言明する所なり。而も外界客觀に對して頓着することなしと云ふ場合は、彼の外客の模樣によりて煩悶し惱亂せざるを云ふなり。決して接觸を拒否し、共同作用を廢絕するにあらざるなり。固より強ちに隱遁を排し孤棲を斥することは、之なしと雖も、而も、社會同胞に交際して、共同の事に從ふに於て、決して躊躇逡巡することを要とするものにはあらざるなり。

然り而して、所謂規律秩序なるものに至りても、精神主義は、決して之を無視するの要を認めざるなり。唯其所謂規律秩序なるものを認定するに於て、精神主義は、其根源本據たる萬物一體の原理により、萬物の動作は、皆是れ唯一本體の規律的秩序的活動なることを信知するなり。卽ち換言せば、精神主義は、宇宙萬化の全體に亙りて、嚴然たる規律秩序の存することを確信するものにして、其萬化の一部たる人間活動の範圍に於ても、固より規律と秩序との嚴在することを疑はざるなり。故に、精神主義は、此點に於ては、或は部分的に或は人爲的に、規律と秩序なるものを按排し、此の部分には規律秩序あれども、彼の部分には規律秩序なく、此は紊亂なり。彼は紊亂にあらずと云ふが如き差別的見解を異にして、所謂規律秩序なるものを、平等的に一切の活動、一切の作用に遍在すと爲すなり。

而して、精神主義が、共同作用の規律秩序に就て、特に貢獻するものあり。他にあらず、精神主義は、外他の如何なる作用に對しても、常に內部の滿足を得るものなるが故に、共同作用の調和し難き場合にありては、容易に全體の便宜に服從して、其共同作用を調和せしむることを得るなり。是れ精神主義が、或は頗る非活動的のものたるが如くにして、却て非常なる活動主義たる所以なり。而して共同作用の場合に於て、最も明瞭に之を認知し得べきなり。只所謂活動と發動とを一視し、發動にあらざれば活動にあらずとするの誤解なきを要するのみ。

發動と云ひ、受動と云ふ。各活動の一面

たるものなり。獨り發動のみを活動なりとするの誤れること、言を待たざるなり。而して、之を最も明瞭ならしむるは、共同作用にあり。

抑共同作用なるものは、一方より之を觀れば、各別なる多數人の活動なりと雖も、又一方より之を觀れば、一團體の活動なり、而して、之を各別の個人よりして云はゞ、受動もあるべく、發動もあるべしと雖も、之を一團體活動として見るときは如何。蓋し活動といふの外なかるべし。即ち個人個人の發動受動は、皆各全團體の活動の一部分を成すものと云うて不可なきにあらずや。換言せば個人個人に取りては、或は發動的或は受動的の差別ありと雖も、之を相寄りて一團體の活動を成すものと見るときは、發動も其活動の一部分なれば、受動も亦等しく其活動の一部分たるなり。

然り而して、尚ほ一段の指說すべきものあり。所謂團體なるものが、二人より成立せる場合にありては、其團體の活動は、一人の發動と一人の受動とより成立すべしと雖も、若し一團體が三人以上より成立せる場合にありては、其團體の活動は、一人の發動に對する二人以上の受動より成立せざるべからず。之を換言するに、一團體の人數の增加すればするに從ひ、受動者の數は其に順じて增加せざるべからず。而して、此の如く團體の人數が增加する間に於て、發動者の數は、毫も變動することなくして、常に一人以上たる能はざるなり。乃ち彼の共同作用の模範とすべき議會なるものに就て見るべし。啻に之を統理するに議長といふ者を要するのみならず、議員が其意見を戰はすと云ふ時に於ても、一議員が其意見を開陳しつゝある間は、他の多數の議員も、議長其人迄も、皆共に之を傾聽しつゝあらざるべからざるにあらずや。即ち、議會の統一的共同作用は、一發動に對する多數の受動より成立するものたらざるべからざるなり。果して然らば、團體の共同作用に於ては、受動の必要なること頗る明瞭なるのみならず、團體の增大するに從ひ、受動の之に順じて增加せざるべからざることを知るべきなり。而して、此の如く共同作用に必要なる受動を體認するの心地は、精神主義の指導によりて、大に開展せられ得べきなり。

之を要するに、精神主義は、自由と服從との雙運を覺悟せしめて、發動と受動との兩面に活動を指導すと雖も、其頗る消極的非活動的なるが如く誤らるゝ所の服從奬勵の方面に於ても、其實、活動を助長し、特に團體的活動に資益すること寔に大なるを知るべきなり。

（明治三十五年三月發行「精神界」所載）

精神主義（第二）

第一回

今回は精神主義と云ふ題にて、二三回の御話をすることであります。そこで先づ、此の御話を申す趣意を一言しまする。此の御話は、學説の研究や、經文の講義を申すのではなく、自分の信念を、諸君の前に披瀝して、相共に宗教の幸樂を慶ばんとすることであります。

大體、宗教の肝要は、所謂信念でありて、宗教上に於ては、學説の研究だの、經文の講義だの、と云ふものは、畢竟信念を開發せんが爲めに外ならぬのであります。純粹なる學問上に於ては、學説の研究や、典籍の講義が、最後の目的でありて、其に就ての實行は、寧ろ從屬的のこととなり、又純粹なる實行上に於ては、學説の研究や、書物の講義は、餘り必要を感じないことであります。今宗教は、學問か實行か、どちらであるかと云へば、勿論學問と云ふよりも、實行と云はねばなりませぬ。特に其實行と云ふのが、通常の實行は學問の進歩によりて、頗る其發達を見ることでありますが、宗教に於ては、其が全く無關係であると云うてよい様なことであります。

此に就ては宗教と云ふものは、實行であると云ふ中に、一種特別の實行でありて、他の諸種の實行とは、其趣を異にするものであることを知らねばなりませぬ。其の譯は、他の諸種の實行は、皆有限不完全の實行であるが、宗教は無限完全の實行であると云ふことであります。有限不完全の者は、追々進歩するものでありますが、無限完全なるものは、最早進歩すると云ふことはありませぬ。(若し進歩することあるものならば、其は無限完全なるものではない)。故に他の諸種の實行(農業工業等の如きは、學問の進歩によりて進歩することのあるものであれども、宗教は學理研究の進歩によりて、左右せらるゝものではありませぬ。此點から見ますれば、學説の研究だの、書物の講義だのと云ふものは、宗教に對しては、一種特別の關係(即ち單に宗教的信念を開發せしめんが爲めと云ふ)を持つて居る外はありませぬ。裏面より云へば、理窟が合うても、合はぬでも、正當なる信念を開發することを得ば、説明の目的は達せられたとするのが、宗教の見地であります。故に世界の構成や、社會の組織抔のことを宗教上に論述することがありても、其主要とする所は、信念の開發に在るが故に、其所説が學理に合ふとも合はぬとも、少しも頓着しないのである。唯信念開發の爲めに、最も便利なるものを、採用するのが、所謂善巧方便と申すことであります。

然るに世間の宗教を知らぬ人々は、宗教も其他の實行も同じことの様に思ひ、他の諸種の實行が、學術の進歩によりて進化し、又時世の變遷によりて變化するを見て、宗教も亦學術の進歩によりて進化し、又時世の變遷によりて進化すべきものの様に早合點して、科學哲學の理に合はぬ宗教は、取るに足らぬだの、三千年前の説法は、今日に用なし抔と云ふものがあります。此の如きは、勿論、宗教の何たるを知らぬ人の云ふことであります。けれども其誤謬は今云ふ所の宗教と學問との關係、宗教と他の實行との關係を知らざるより起ることであります。此の如き誤謬に陷りて、其過失を辨知せざ

る人は、最も憐むべきであるが、其外に亦此の如き謬誤の説に迷はされて、宗教の門戸を望みながら、之に直入する能はざる人々は、一層憐むべきである。

そこで今日の如き科學的研究だのと云ふことが喧傳せられ、文明だの、開化だの、進歩だの、發達だの、と云ふことが、人心を支配せんとする時に在りて、宗教を求めんとする人々は、先づ第一に、宗教は信念を要とするものにして、學理や時世によりて、變動するものにあらざることを知らねばなりませぬ。精神主義は、此の如き見地を以て門戸とすることであります。

第二回

精神主義が明かならざるときは、學術の進歩や、時世の變遷によりて、宗義が左右せらるるかの如く思ふ過失を免れない。勿論、夫を過失とは思はずして居る。御維新の時、政治上の大混雜の爲めに宗教が殆んど忘却せられた様になり、其後、世の鎭靜と共に、宗教の事が彼れ此れ評判せらるゝ様になつた時、第一番に議論の種となつたのが、須彌天文の説や、天地創造の説であります。佛經中に顯はれてある須彌天文の説を論議する爲めに、佐田介石、禿安慧と云ふ様な人々が、非常に盡力せられたことは、世人の知る所であります。又耶蘇教の『舊約全書』中に顯はれてある天地萬物創造の説に對しても、辯難攻駁頗る盛なことでありました。（今日でも動もすれば同様な事がある）。つまり世界の構成や、萬物の組織に就ての説は、學説としては色々の研究が必要なれども、宗教に關しては、何れの説にても、差支はないといふことが明かならぬが、當時の狀況であつたと申して宜しい。

然るに、其後、何時となく、此事も自然に轉開して、天文説や、創造説の論議を以て、佛教や耶蘇教の價値を定めようとすることはなくなりたれども、其代りには、靈魂不滅だの、一神實在だの、諸法實相だのと云ふ様なる、所謂哲學上の問題によりて、宗教の價値を定めようとすることが起りて來ました。此は井上圓了氏の『佛教活論』や、中西牛郎氏の『組織佛教論』や、村上專精氏の『佛教一貫論』等を經て、今日でも、一神教だの、汎神教だのと云ふ様な論説を生ずることであります。

然るに此の如き哲學的問題の解釋によりて、宗教の價値を上下せんとすることも、今は漸々其勢を減少して來て居ります。其代りに宗教は理論ではない實際であると云ふことが分りて來たが爲めに、今度は社會上の利益や、倫理上の德行を以て標準として、社會上の利益を生ぜざる宗教は無用で有害である、倫理上の德行を起さざる宗教は無用である有害である、と云ふ風潮が現はれて來ました。そこで今日以後の宗教は、積極的でなければならぬ、活動的でなければならぬ、倫理的でなければならぬ、などと云ふ様な註文が生じて來て居ります。先づ此邊が宗教に對する謬誤でありませう。其故は如何となれば、宗教は、社會上の利益や、倫理上の行爲の外に一種の別天地を有するものなることを解するに至れば、既に宗教の門戸を開きて、一歩を其內に容るゝものであるから、最早宗教を門外より批評するの必要を見ざることであります。此が正しく精神主義の立脚地であります。故に精神主義は、門外を標準とせずして、門內に標準を置き、客觀的構成に着眼せずして、主觀的心地を主要とするものにして、時には、或は內觀主義を以て之を標し、或は主觀主義を以て之を標することであります。

然るに、內觀主義、主觀主義と云ふは、勿論內外並べ認め、主客並べ立つる上に於て、

只外界の觀察、客觀の事物に主眼を置かずして、內界の觀想、主觀の見地に偏議を定むるものに過ぎずして、決して外界を破却し、客觀を排斥するものではありません。況んや彼の學說上、唯心論を主張して、客觀の實在を否定せんとするものではありませぬ。そこで前段に於て、精神主義は學說には無關係であると云ひました處であります。心身の相關や、物心の相對や、主觀客觀の對立や、萬物顯現の法則や、種々なる學問上の論說は、如何に多樣になり、如何に進步し、如何に興廢するとも、精神主義は決して其等の變動には左右せられざるものであります。地動說を取る人には、地動說を取るを妨げず、天動說を取る人には、天動說を取るを妨げず、唯物論を取る人には、唯物論を取るを妨げず、一心論を取る人には、一心論を取るを妨げず、汎神論を取る人には、汎神論を取るを妨げず、啻に學說上に於て、人々の所見を妨げざるのみならず、實際の行爲上に於ても、精神主義は、決して客觀的に、善惡邪正等を認定しませぬ。故に、例へば、他人が我を打ち、我を罵るが如きことあるも、精神主義は決して彼の打罵の行爲は、我に對しては善とも云ふべからず、惡とも云ふべからず、邪とも云ふべからざる、全く善惡邪正に無關係のことであります。若し此に善惡邪正を定めんとするなれば、彼の打罵によりて、我に喜びを生ずれば、之を善と名け、正と名け、我に怒りを生ずれば、之を惡と名け、邪と名くることでありまして、畢竟我が喜ぶが善であり、我が怒るが惡であるのであります。而して其我が喜び怒るには、我を喜ばすべき又怒らすべき客觀的のものが定まりてあるかと言ふに、決してさう云ふことはなく、我心機だに開展すれば、如何なる事に對しても、決して怒ることなく、常に喜び得るものであると云ふが、精神主義の主張であります。

ゆゑに外界の事情に對して苦しんだり、他人の行爲に對して怒つたりするのは、我心機の開展せざるによることとゆゑ、これによりて外他の事行を、非難すべきではありませぬ。若し外他の事行にして我意を苦しむる樣な場合には、須らく內觀反省して、自家の心機を開展すべしと勸むるが、精神主義の指導するところであります。

第三回

精神主義は、實行に關する主義を申すのでありますから、別に學問的の理論と云ふ樣なものの必要はありませぬが、實行を督勵するが爲めに、一の理想と云ふ樣なものを說きます。卽ち萬物一體の理想とか、萬物同體の原理とか名けて宜しい。然るに精神主義の唱導する所の萬物一體と申すのは、決して哲學上の原理だの、理論だのと云ふものではありませぬ。萬物一體と云ふから、此は唯心一元論を主張して、唯物一元論を排斥するのであるとか、所謂學理的に宇宙萬有を硏究考究して、此が眞理であり、此に反するは非眞理である杯と云ふのではありませぬ。前に申す通り、唯物論を取る人には、唯物論を取るを妨げず、唯心論を取る人には、唯心論を取るを妨げず、一元論を取る人には、一元論を取るを妨げず、二元論を取る人には、二元論を取るを妨げず、如何なる理論を取る人にも、其理論を取るを妨げずして、而も精神主義は、其人の實行に對して、一種の指導を與ふるものでありますから、今萬物一體と申すに就ては、其趣意を明瞭に申さねばならぬ。

精神主義に於ては、萬物一體と申すは、精神の坐り樣によりて、我等は萬物一體と云ふ見地に住することが出來ると云ふので、換言すれば、精神主義は、萬物一體と云ふことを、一の

信念とすると云うても宜しい。故に萬物を、科學的や哲學的に研究考究して、果して其が一體であるかなきか、客觀的實在上に於て、萬物が果して一體であるや否やと云ふ樣なことは、毫も精神主義の關與する所ではありませぬ。そこで精神主義は、決して主觀客觀の相對立して、共に實在してあると云ふことを嫌ひませぬ。否却て通常人の認定するが如く、我と萬物と對立して居ると云ふことを最も便宜とします。又外界萬物が無量無數の獨立的實在であると云ふのをも咎めませぬ。否此も、一種の便宜ある考へ方と思ひます。所謂客觀的外物は、我の外の無數の實在物であると認むるも、我と相離れざる一體のものであると認むるも、皆悉く我に屬したるものであると認むるも、何れも皆我精神の坐りに由ることであります。法華經には、「今此三界、皆是我有、其中衆生、悉是吾子」とあり、「華嚴經」には、「三界唯一心」とあります。三界とは、宇宙萬有のことで、衆生とは、一切萬物のことであります。其他「心外無別」だの、「一切唯識」だの、「一心一界」だの、「萬法是眞如」だのと、萬物一體の意義は種々に說かれて居ます。

然るに、此意義は、此見地に到りたるものには、明白なるも、此見地に到らざるものには、解し得られないことであります。よしや解し得られても、常に此見地に住すると云ふことは、亦一段の難事であります。然るに如何にして此見地に到り、如何にして此見地に住すべきやと云ふことは、言論で解決の出來ることではなく、寧ろ實際實驗によりて解決せらるべきものでありますから、今其參考ともならんかと思ふ所を、一二點擧げて見ませう。宇宙萬物が皆我物である以上は、如何なるものをも棄つべきではありませぬ。一切の動物が、皆我子である以上は、蟲一疋をも害すべきではありませぬ。慈善、忍辱、恭敬、尊重等の心は、湧然として現起せねばなりませぬ。又宇宙萬有が、皆我物であり、一切動物が皆我子である以上は、我は天地萬物に關して、全責任を有するものであります。天下に一の無辜を誅し、一の無罪を罰することあれば、一として我は其に對する責任を免るゝ譯はない筈であります。

今日、諸君の責任の觀念は如何でありますか。此は自分の責任である、彼は人の責任であると、天下の責任を分割して考ふるのみではありませぬか。萬物一體の理想の上に立つ所の責任觀は、不分割的であります。支那の王道の教では、帝王には常に此全責任主義を說きたことであります。帝王は億兆を以て其心とすべきであると說き、而して帝王は、亦億兆が各其心を以て心とせずして、帝王の心を以て心とせんことを希望すると云ふことでありました。「たかきやにのぼりてみれば、けむりたつ」の御詠は、精神主義の全責任的觀念の御詠であります。一切の動物を以て我子とする佛心は、決して責任の分割を思ひませぬ。此佛心の得られざる間は、責任を分割的に考ふるも止むを得ないことでありますが、若し此佛心を得、此佛心に住せんとする人士は、責任は決して分割的に限るべきものでないことを思案すべきであります。彼が我を罵つた、我を辱しめた、決して容赦が出來ぬと云ふ、或は其理あるべし。然れども全責任の觀念は、此の如き報復の情を、一掃すべきであります。敎員が惡い、事務員が惡い、僧侶が惡い、外敎徒が惡い、と云ふ。皆責任分割の主義に從ふものにして、精神的責任の主義に反するものであります。責任抔と云ふことを、一切思はぬ樣になれば、兎も角、然らざる間は、責任分割主義を取りて、天下に爭鬪の種を蒔くより、責任不分割主義を取りて、天下に安樂の地を拓く方が願はしいことであり

ます。

然るに全責任主義だの、責任不分割主義だのと云ふときは、非常に心配なこと、苦しきことであると云ふ考が起るかも知れませぬが、其は精神主義が尙ほ明確でないからであります。大體世界に、善があるの、惡があるの、罪業があるの、功績があるのと云ふ、其に就き主觀主義と客觀主義との區別がありて、善惡邪正、罪業功績杯と云ふことが、我心以外に、客觀的實在的に存するものであるとするは、所謂客觀主義であり、此の如きことは、皆我心內に存立することであると觀ずるが、所謂主觀主義であります。而して精神主義は、二者の中では無論主觀主義を取ることであります。故に我に宇宙萬有に對する全責任ありとするも、其全責任は、我一心以外のものにあらず。我一心さへ清淨であれば、天地は則ち清淨なり。「隨二其心淨一則佛土淨」と云ふ所に住立しますからして、所謂「自淨二其意一」の外に、何の心配も苦勞もなきことであります。而して我等が、各其意を淨くせんとするには、內心に確固不拔、牢乎不動の根據がなくては叶はぬことであります。所謂確固不拔、牢乎不動の根據とは、佛陀無限の大悲より外はありません。此大悲の光明は、常に我等を照護して間斷あることありません。我等は心眼を開きて、此光明を見ねばなりませぬ。

然るに其心眼を開くと云ひ、光明を見ると云ふは、畢竟譬喩の言に過ぎませんが、今其に就き、一の參考とも云ふべき場合を申して見ませう。或人の所へ、盜賊侵入し、其主人の眼前に、秋水を閃かしたるに、主人は之に依て、忽然一種の無常觀に打たれ、直に盜賊に向ひ、何物にても思ふ儘に之を取り去れ、金錢を欲するならば甲處にあり、衣服を欲するならば乙處にあり等と、丁寧懇篤に教示しつゝある間に、盜賊は、亦一種の異感に打たれたるが如く、前の姿勢を一變し、自分は君の金錢を欲せず、衣服を欲せず、唯此我異感の解說を乞ふとて、終に兩人對談、一夜を徹して相分れたりと云ふことであります。此話は少しく奇異に過ぐる樣ではありますが、自分の實地に見聞したることの中にも、此に同軌範なる系統に屬することは、決して乏しくありませぬ。我等が所謂感動を受くるとか、感心するとか、感服するとか、感奮するとか云ふ所の、心機開展の實際は、蓋し皆此の如きものであります。靈的感化の說明如何と問はゞ、不可思議と云ふ外はありますまい。けれども遠きことではありませぬ。我等日々の實際に就て、其場合を求むれば、左右に源に逢ふことが出來ます。

第四回

精神主義は、各個人が、宇宙萬有に對して、全責任を負ふと云ふことに付き、前回に於て、略其旨意を開陳しましたが、尙今日は其に就ての注意を、一寸申上げて置くが適當と存じます。其は前回にも其事の大體は顯はれて居ることでありますが、今一層明白に申上げたい。

責任と云ふことは、（其文字にも何となく現はれてある樣でありますが）一種の苦痛を含んで居ることが多い。況んや宇宙萬有に對して、全責任を負ふと云ふに於てをや。然るに精神主義より出でたる全責任は、さう云ふ苦痛を含んで居るものではありませぬ。夫は如何なる都合かと申すに、通常の責任は、萬物別體の上に立てらるゝが故に、責任は我が外物他人に對する責任と云ふことになり、我が其責任を盡す能はざるときは、我は他人に苦痛を與へ、又他人が我に苦痛を與ふることとなる。故に責任と云ふものが、我と他人と、雙方へ苦痛の因となることであります。然るに、萬物一體の上に立つ

所の責任は、原責任者と被責任者と、同一心なるが故に、此の如き苦痛は、共に消散して、全責任と同樣の心狀を持つことになります。換言すれば、責任と云ふことが、總て自己が自己に對することになりますゆゑ、所謂自業自得と云ふことが明白に感ぜられ、隨て自由に事の成り行きに服從することを得るが爲めに、決して壓制束縛等の苦痛を感ぜずして、常に自由行動の喜樂を感ずることとなります。

服從と云ふことは、一般に苦痛を帶ずるものの樣に云ひますけれども、自ら進んで服從すること、所謂自由の服從は、決して苦痛を帶せずして、常に喜樂を伴ふものであります。他人より壓制せられてするときは苦痛であるのに、自ら進んで之に當るときには、喜樂であるではありませぬか。勞働するでも、困難するでも、自ら進んで之れに當るときは、非常なる愉快を感じますが、他人の爲めに勞働させられ、困難に陷れられたるときは、實に憤激に堪へぬことであります。

然るに精神主義に基き、自ら天地に對して全責任を有するものであると覺悟するときは、總ての動作が、皆自由の動作となります。故に決して外來の壓抑制肘を感ぜずして、常に自由の天地に逍遙自適することになります。而して實際に此境界に到達するには、勿論修養練磨を必要としますが、中に就きて最も注意を要するのは、內觀反省の事であります。古人が三省とか言うて、自己省察を敎へられたるは玆であります。我等が萬物一體の理想に背きて、萬物別體の思想に從ひ、我他彼此差別の妄見に住して、平等大悲の光明界裡に安んずる能はざるは、要するに內觀の工夫を凝らして、自己の立脚地を省察せざるに起因することであります。

而して內觀を盛にして、自己の立脚地を省察せば、我等の第一に感知する所は、自己の闇愚無能、所謂罪惡生死の凡夫であると云ふことであります。全責任を負ひながら、之を辨ぜざるは闇愚であります。假令之を知るも、之を果す能はざるもの多きは無能であります。其間に於て昏々として、徒らに生を愛し、妄りに死を憎みつゝ、醉生夢死するは、是れ罪惡生死の凡夫であります。然るに此の如く自己の闇愚無能なることを自覺するは、是れ非常なる苦痛の因なるかの如く思はるゝかも知れませぬが、決してさうではありませぬ。或る所に二軒の家がありまして、一軒の方では、日々喧嘩の絕え間もなきに、隣家にては一言口爭ひの聲も聞えぬと云ふので、喧嘩家の主人が不審を起し、隣家へ行きて、何故に貴家には喧嘩なきや、我方にては、日々喧嘩の絕え間もなき位にて困り入ります、と尋ねたるに、隣家の主人の答に、貴家は定めて善人許りの御集合でありませう、我方は惡人許りの集合でありますから、喧嘩といふことを致しませぬと云ひましたが、喧嘩家の主人は、其意を解する能はずして歸りまして、何時か隣家に喧嘩はなきかと靜にして居ました處、翌朝、隣家の勝手にて、非常なる物音がしました。馬が勝手へ入り込みて、膳椀類を破壞した樣子である。定めて喧嘩が起るであらうと、聞き耳立てて居るに、寂として其樣子がない。故に隣家へ行きて、老人に會ひ、馬の勝手に入りて、膳椀類を破壞したることなきやと問ふに、其事ありと云ふ。然るに少しも喧嘩の樣子なきは如何、御互に咎め合ひと云ふ樣なことは爲されぬかと問ふに、老人が答ふるには、あれは自分が惡くありましたので、昨夜、馬の繫ぎ方に注意せざりし爲めに、此の如き事になりました譯で、中々、他人を咎むる筈はありませぬと云ひ終らざるに、老婆が奥より出で來り、あれは私が惡くありましたので、老人の過

ではありませぬ、私が老婆のこととして、唯夜不注意でありましたのでありますと、此も云ひ終らざるに、若き主人が出で來り、あれは自分が惡くありましたので、老人達は無論早く休むが當然であります、自分が、若者のこととして、不注意でありましたと、此れ亦云ひ終らざるに、新造が出で來り、あれは私が惡くありましたのでと、云ひ掛る處に至りて、喧嘩家の主人が、はたと感じたるものと見え、成る程恐れ入りました、貴家は惡人許りの御集合との、先日の御教示の意味を了解しました、私方は善人許りの集合で、喧嘩の絶え間がありませなんだが、此より申し合はして貴家の如く、惡人許りの集合に致し度う存じますとて、大いに感謝を表して歸りたと云ふことであります。

何事にも、自ら進んで責任を負ひ、自ら罪惡のものなりと自覺せる人物の住する所は、恭順和樂の天地を構成することになります。精神主義に就て御話は盡きませぬが、今回は此にて御分れと致します。

（明治三十四年七月伊勢四日市における關西佛教青年會第十回夏期講習會講演筆記）

精神主義（第三）

今日は私が精神主義の御話をするのでありますが、別に秩序も組織もないので、只思ひ付く儘に述べようと思ひます。

精神主義とは、宗教を信じ、其宗教の立場に心を据ゑるものでありますから、宗教以外の事に心の立場を据ゑるものとは、自ら違ひます。例へば、世間凡ての宗教以外の學問に重きを置きて、其學問が眞理を教へる者であるとして居る者に對し、否學問は主とならぬと云ふが精神主義である。又實際上に於て、政治法律に重きを置き治國平天下を以て主とせざる可からずと云ふに對し、理論上、實際上、其他凡ての點からするも、宗教以外に重きを置くものとは違ひ、宗教の見地に重きを置きて、他のものを見て行くものが精神主義である。例へば茲に佛を信ずると云ふ形の宗教ありと云へば、佛を信ずると云ふことを第一義として、總ての事を見て行く、其所で學問の事を云ふにしても、やはり政治法律其他日夜に見聞する所の事に當つても、佛を信ずると云ふことを主として、總てのことに當る。又宗教の中で、佛を信ぜず神を信ずると云ふ人があらば、其人は其神を主として他の總てのものを見て行くが精神主義である。然し、私共は、佛を信ずるものであるから、佛を信ずると云ふことを主として、他のことを見て行くのである。又證りを開くと云ふ人は、證りに至りたるを主として總てのことを見て行くが精神主義であります。

又宗教には、自力の宗教と他力の宗教とがありますが、私共は到底自力には及びませぬ、其れ故自力の精神主義ではなくて、他力の宗教に依る故、私共の精神主義とは、如來の廣大なる他力に依つて、總ての事を見て行くのである。

又精神主義は、多くの經論釋の中、他力を信ずると云ふ宗教の上についての、自分の心に感ぜられた部分を根本とするのであるから、宗教を信ずる前は、精神主義と云ふことは出來ないので、卽ち自分が、信念、信仰、信心、を確立せられた上に、得たる味を以て大切とするのであります。其の心に感ぜられた部分、心に味はれた有様と云ふものは、何とも詞を以て云ひ盡すことが出來ない。感ぜられた部分は自分の精神に入つた所である故、私共は之を精神主義と稱へて居るのである。されば精神主義は教理の奧底を極めずとも、經論釋の總てに涉りて其深意を知り盡さずとも、宗教第一の目的たる、涅槃に到達することが出來るので、卽ち自分の根機相應に滿足を得るのである、換言すれば心に感じて、我行ひ得る所に滿足して樂んで行くが、精神主義であります。今其精神主義の顯はるゝ所を二三點擧げて見ます。

第一に、他力を信ずると云ふ。他力に就て他力が絕對無限完全圓滿であると信ずるのであるから、之れを信じた上は、決して不足は感ぜぬので、自分の至ることの得べからざる所、得られざる所を、他力が與へて下さると信ずる故滿足して十分であります。其滿足を得て行くと云ふことは、裏面より云へば、不足を感ぜぬことである、不平を懷かぬことである。然し乍ら、こゝに云ふ滿足と云ひ、不足を感ぜぬと云ふは、金や、名譽や、智慧や、權力や、其他かゝるものの揃ふが如き滿足ではない。精神主義の上の不足のないと云ふは、私共の心の上

に、滿足を持ち、不足を感ぜぬことである。故に金が無くとも、智慧が無くとも、學問が無くとも、名譽がなくとも、之れに就て不足を感ずることはないのであります。

第二に他力に助けられ、他力にまかせて居ると云ふのでありますから、自分の力で、からせなくてはならぬと云ふ、必要を感じて、苦惱することはない。詳しく云へば、世間では義務責任のことを八釜敷く云ふが、……或る所に於ては之れも云はなければなりますまいが、他力によりてするのであるから、私共は何でも、かくせなければならぬと云ふ、義務責任は持たぬのであります。

誠の義務責任と云ふものは、無限なものでなくてはならぬので、到底私共の爲すことの出來ぬものである。私共の爲し得る所の義務責任は、唯其一部分である、即ち義務責任に關して、私共の絶對の力無き故、之を全然盡すと云ふことは出來ないので、又強ひてなさずともよいのである。

さういふと、世間からはそんなら倫理に悖るではないか、道德に背くではないかと非難する人があるかも知れぬが、私共の守つて居る主義は、他人に強ひてからせよと勸める、實行上のことではない。唯私共が、私共自身の感じて信じて居る所である。之に對して、仁義忠孝に反くと、責めらるゝならば、私共は之を甘んじて受けるのであります。

之を又他の方面から云へば、自分の心に感じたる所を主とするのであるから、他人と爭ふことはない、即ち爭ふ心が起らぬのである。他人が、自分と異つたる心であらうが異つたる行であらうが、之れに對して強ひて責めることはしない。唯自分丈けの感じて、自分丈けの信じて居る所である。是の如く私共の言ふ所は、社會を忘れたる如く、自分のみ爲す所であるとする故、動もすると隱遁主義である、非社會主義であると、攻擊する人がありますが、別に私共は、社會を忘れたのでもなく、社會より離れて隱遁したのでもない。只絶對無限の力のみ、社會を云々し得るのであるが、私共には此の力の無きことを知つた故、爲さんとせぬのである。

又私共は、社會の不足弊害等に對して、之れを滿たして、之れを正さんとも敢てせんのである。精神主義より云へば、如來の光明は無限であつて、社會に滿ちたるのであるから、それに不足や弊害のあらうとは思ひませぬ。之に不足弊害のあるやうに見るのは、私共の心の至らないのであります。其れ故私共の心さへ立派になれば、自ら社會は立派になるので、丁度此世界を凡夫の世界と見て居るのは、私共の見る心が凡夫であるからなのであるが、今如來より見給へば、此世界は清淨なる國土となるのと同じことであります。

かく云ひますと、又かういふ質問があるのであらう。社會に不足はない、弊害はないと云はるゝが、現在種々の罪惡をし掛ける人があるではないか、今それを實際自分自身が受けることがあるではないか、それであるに何社會は完全であるとせらるゝかと云ふに、さうである、私共は人より惡をし掛けられて非常に苦痛を感ずるのは、私共の心の至らないのであります。斯く見て行く故に、私共に又凡ての事が自分の心に責めかけるのであります。

然し私共は、世間から如何なる事に遭遇するとも、其れに從つて行かれる丈けの心にならなければならぬ。其れには、絶對の心に依るので、若し私共が、絶對の心によることが出來れば、何事も自ら樂しく、喜しくなるのであります。即ち實際上には、苦しむことがあつても、玆に私共の心の、未だ至らぬので

あると考へ直して喜ぶやうになるのであります。

究る所、何事によらず、不都合を感じた時、他の者に不都合を認めずに、直に自分の心に反省して、自分の心の至らぬと考へるのである。

第三に、無限の大悲に乗託して、安心したものは、自由である。此自由とは、完全なる無限の自由で、佛心を我に得て居る以上は、佛心か無限であるから、私共も亦完全なる無限の自由で、決して何等の束縛も感ぜぬのであります。

斯く云ひますと、然らば國家の法律にも服從せず、人の約束をも守らぬかと云ふ非難があるでせうが、さう無暗に自分勝手なことをするのでない、從ふ可き所には、非常に從ふのであります。此時は他から自分が壓制されたのでも束縛されたのでもなく、忌やな心、苦しい心などは少しも起らぬのであります。即ち此場合の自由とは、自分の心の中に、「他人の事に進んで服從する」と云ふ、自由であります。勿論他人の事に服從せぬのは、猶自由であります。然らば、其服從を如何なる點迄進む可きかと云ふに、反對するも、服從するも、其進退皆自分の心の儘であるから、自由である。即ち念々の臨機應變に任すので、其事に從はんと云ふ念の起りし時は從ひ、背かんと云ふ念の起りし時は背くので、即ち、之れ皆、他力光明の導きに依つてであると信じ、如來の爲さしめ給ふことをするのみである。

之れ等は、實際上の問題で、種々の經驗のあることですが、私は元來病人で、今日は八時に來る御約束をして置きましたが、同時間に來られなくなり、十時に出頭しますと、急に御答へ申して置きました。然るに今日參つて見ますれば、十時前でありましたやうな次第で、是の如く病の爲めに、どの場合にどうすると確定することは出來ないのであります。

今私共は無限大悲の眼より見給へば、心の大病人である、其れ故、今日の法則に從つて、總ての事を確となすことは出來ないので、只私共は、他力に依り如來の命じ給ふ所に依りて、事を爲す許りである。

精神主義に關し、著しく私共の感じた所は、先づ此三點であります。

之れをおし弘めて、種々の事に當てて云へば、諸種の方面から歡喜が起り來るもので、大體世の中のことを見るに、客觀と主觀とがある、他のものに執着して、其れに迷はさるゝのを客觀主義と云ひ、然らざるを主觀主義と云ふ。

今私共の申す精神主義は、即ち主觀主義である。即ち無限の他力より、私共の心に來、其れより總ての事に向ふのでありますから、客觀の物より私共へ及ぼさず、如來より私共に向つて來るので、私共は如何にしても、如來の心を得なければならぬのであります。

されば、精神主義と云ふは、宗教的見地に立ちて、私共の如き力の足らぬ者が、他力の無上の力に依りて、其力を進むるのであると云へます。

客觀主義では、他の人に就いて、善惡等の判斷を下すが、精神主義では、さうではないのである。例へば自分を殺しに來た者があるにしても、其殺されんとした爲めに悟を開いたとしたならば、其殺さんとして來た罪人は、自分にとりて善知識である、如來の大命を奉じた使であるのであります。

又私共の家へ盜賊が這入つても、其盜まれたことに就いて、私共に自覺する所があり、啓示を齎したならば、世間では縱令罪人であると云はるゝも、私共にとりては決して罪は認めぬのであります。却つて善知識であると喜ぶ

次第であります。

又世の人は、肺病と云ふ病氣は、不治症の最も恐るべきものとして嫌忌しますが、私は此病氣になつたのが、非常な良縁であつたので、若し此病氣にならなかつたならば、是れ程迄に宗教の眞髄を味ひ、是れ程迄に如來の光明を認むることが出來なかつたかも知れないのであります。其れ故、私にとりては、此恐るべき肺結核と云ふ病氣になつたのが、實に幸福なのであります。卽ち天下の災禍も、之れに依りて私共が、如來の慈悲を喜ぶやうになつたならば、其れが善であります。

されば、是等の客觀的のものに對して、善惡の差別をし、是非の判斷をするのは、甚だ其當を得たことではないのであります。故に法律や倫理も、單に人が假りに定めたもので、之れを唱ふるのは、其局に當つた人が爲すので、私共宗教の上より云へば、私共が心を開發して、絶對無限の智を開くが、絶對の善である。宗教を見る時は、政治、法律、倫理以上にあるので、私共の云ふ所が、往々にして世間の通義に背くと云ふは、以上の點に導かんとするからである。今其局に當れる人の言と合はぬ所を明かにすれば、からであります。

現今、倫理、法律、政治、道德等の爲めに、宗教も大に振はなくてはならぬと云ふ人があるが、其れは謂れのなきことで、宗教はそれ等以上に出て居るので、私共の信ずる佛教の如きも、其初め、釋尊の說き給うた彌陀法が、天竺に顯れて救濟となり、其が少しも變ることなく、玆に傳來して、今や私共を救ひ下さるのである。然るに、世間の倫理や法律其他は、人の假りに定めたもので、時々變化をして行くものである。其故時々宗教とは、一致せぬ所があるのであります。然し乍ら、此中何れを主とすべきであるかと云へば、宗教に主眼を置くは勿論のことで、宗教は時間的に永久不變のものである。卽ち宗教は少しも世界の文化等より影響を受くる者でなく、釋尊の國が滅亡しようが、日本が進まうが、又文化にならうが、なるまいが、さういふことには關らず、唯平等の眼光を以て、救はせ給ふ如來の慈悲を喜び、其光明に助けらるゝので、其慈光は、今後何萬年の後、否過去現在未來の三世を通じて、時間上、永久無限に變らせ給ふことはないのであります。卽ち、私共精神主義の者は、古今不變の佛教を信じ、限りなき如來の慈光の下に於いて、退く可きに退き、進むべきに進み、唯私共の進退は、如來の命じ給ふ所に從つて爲すのであります。

（明治三十五年六月二十四日、關八州講習會席上に於ける講話筆記）

聖史劇

佐渡

田中智學

聖史劇　佐渡

聖史劇脚本「佐渡」の首めに

此脚本の由來

予は文學者でもなく、藝術家でもない、隨て劇の事は、全くの門外漢で、おまけにロクに芝居も見て居ないから、不案内の事最も甚しい。『忠臣藏』も『仙臺萩』も通して見て居ないほどの不通用者、纔に『勸進帳』に由良之助が出ず、直實は玄冶店に居るものでないぐらゐの事を承知した程度の分齊。いくら他から勸められたからとて、オイソレと劇をかくといふ事はない筈である。亦ことわるのが當り前でもあるのだが、それが何の考慮もなく、承諾したといふ事に就いは、そも〳〵大に理由がある。其理由は、此脚本を公けにし、又上場するに就て、是非とも一往述べねばならぬ次第であるから、それを語る。事の起りは、昨秋の或一日、新文藝協會の東儀鐵笛、石川木舟の兩氏が來訪しての話に、今年『法難』(坪内博士の作)を各地に演じて、大に歡迎されたところから、自分等も心づき、又他の有力者からも勸められて、來年の聖誕七百年を好機として、二たび日蓮上人の劇を上演して、一は宣傳のお手傳をも爲し、一は協會の力も造りたいと思ふから、是非日蓮上人の劇をかいて吳れといふことであッた。予は全くの素人であるから、うまく出來まいと考へて一端斷ッたが、肚の中では聖誕七百年といふ時機は、眞に宣傳の好機だとも思ひ、又劇で聖傳正義を普及するといふことも、好個の宣傳方法だから、どうかして書きたいと思ッた。芝居の事は不案内だけれども、日蓮上人を傳へるに就ては、多少の腹案もある。又かねて考へて居た劇の試案もあるから、すぐにウンと言はうかしらんとも思ッた。然し、之を芝居にするのに、全くの手さぐりでは、自分にも不安なり、又一つには若し其れが不成功であつた時は、新文藝協會へも氣の毒をせねばならぬ。やりたくも有るし、けんのんでもあるし、するので、生返事をして置いた。その後日蓮宗宗務總監の武田宣明師が見えられた時、ふと此話をしたら、それは是非やりたいといふ。それから國柱會の或る時の會合に、その話が出た、みんな目を揃へてやりたいといふ。社中の同人も悉くやりたいといふ。予も大に心が動いたが、書けるかどうかが不安で躊躇した、若し書くとすれば、こんな筋でと話したら、みんな既にきまッたものの様に、良案だの名趣向だのと、自分たちに苦勞がないから、頻りに煽動的にそやし立てる。予もそれに乘るほどおめでたくもないが、唯一つ……大に食指の動いた事……がある、それは此宣傳の好時機に乘じて、どうかして日蓮大聖人を世に紹介したいの熱望が、藝術傳道の一門を開いて、その方面からも何とか宣傳の一功をあげたいものといふ、正義宣傳の本誓を鼓動して、何とかして書きたいものだと考へ出した一事である。そこで同じくば、宣傳上の便宜からして、成るべく大劇場でやりたいと考へたので。時期は三月で、劇場は

歌舞伎座か帝劇でなら、といふ條件をつけて新文藝協會へ答へた。すると、どちらも都合が悪いといふので、一時お流れになりかゝッた。斯くて一二ケ月の後に、再び歌舞伎座へ申込んだところ、果して田中さんが書くなら、三月に歌舞伎座を提供しようと、座主が答へたといふので、又復東儀石川の兩氏がやッて來た。いよ〳〵ッンと言はなければならなくなッた。それでは一往坪内博士に相談してといふと、イヤ坪内先生も是非お願ひしろといふのですといふ。そこで坪内博士に聞いたら、爾うだといふ。それなら斯んな筋で芝居になるやと聞いたら、それで結構だといふ。此專門の大家から免狀が出れば、少しは安心が出來ると考へて、思ひ切ッて承諾を東儀氏に與へた。ところが生憎年末で忙しくもあり、三保の越年講習會に出講の約もあり、稽古はいそぐといふ、坪内博士の「法難」より今少し長くかけといふことだし、なれないのと、急がれるのとで、大に閉口した。舞臺や道具の事はまるで知らず、二三の脚本を見たホンの人まねで、全くの手さぐり、あてずッぽうの我流で書いたのが、大晦日と元日から脅威されつゝ、促かれせがまれして、十日ばかりの急ごしらへで、出來あがッたのが、この脚本である。

脚本の主張と其の結構

元來が芝居をかきたいといふ目的でなく、どうかして日蓮主義を世に知らせたいといふのが趣意で、その一方法として、藝術に託して其れを現はして見よう、それには、芝居が一番よからうと思ッて、取りかゝッたわけなので。予に於ては、日蓮主義そのものが主で、劇そのものは方便である、方便ではあるが、まづいよりは無論巧いのが佳いにきまッて居る、けれども其れは今の予には望みがない、どうやら一日の芝居になれば、先づ可いとして置かねばならぬ。但しその肝心な日蓮主義の現はしかたとか日蓮上人の主張人格とかいふ事には、誇張を離れた實寫に於て、成るべく遺憾のない現はし方をしなければならない。それが此脚本の大主眼であるから、力をその點に注いだのは言ふまでもない。而してその描寫も、成るべく手ツ取り早く、且つ成るべく具體的に、餘り頭を痛めないで合點し得る樣にと力めた。乃で材を上人傳中の正宗分たる佐渡に取ッた。佐渡流罪中の日蓮上人は、一代の中堅にして、法門事業人格内觀のすべてが、最高調に達した時である。上人の教法は、これを「教判」と「宗旨」とに分ち、「教判」には、教・機・時・國・教法流布の前後・の五綱を判じ、「宗致」には、本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇の三祕を明かして、はじめて宗教宗旨を完全されたので、その「五綱」は、弘長元年伊豆流罪中に開示發表せられ、本化大教の起らざるべからざる所以を明かにして、全佛法の進退を良斷した。それから後、文永八年九月、龍口の頸の座で、「凡夫の日蓮から本化上行の日蓮に移り代ッた」と、御自分で主張されるほどの大自覺を高調して、その翌月十日に、佐渡が島へ流罪の身として渡られて、在島三年の流人生活をされた。この間に於て、「三大祕法」の宗致を顯示されたのである。

斯くの如く、伊豆の流罪で、「教判の五綱」が顯はれ、佐渡の流罪で「宗致の三祕」が顯はれて、兩度の罪流といふことが、上人に取ッて甚だ大切なことになッて居る。さうして此流罪が、一度でなく二度に及んだと

いふことが、亦深い感激となッて、同時に嚴正なる敎法的批判の要材となッた。开は法華經の現文に、末代濁世に法華經を弘むるものは、必ず人から惡口罵詈されたり、打擲されたり、斬られたり、殺されようとしたり、其上度々『島流し』になると記されてある。上人は此經文通り、悉く具さに此迫害を受けられた。故に『日蓮は法華經を身に讀んだ』と言はれて居る。ところで、此中の『島流し』だが、それは經文に『數々見擯出、遠離於塔寺』とあッて、數々擯出せられて塔寺を遠離せんとあるから、法華經の故に流罪されること、若しも、一度でお仕舞になッたら、それは流罪されても、數々ではない。然るに初めは『伊豆』、後に『佐渡』、公難すでに二度に及ぶ、『數々』の二字は正しく身に讀んだ。して見ると吾が一身は既に法華經の全文に映し出されてある。一閻浮提の一切衆生（全世界の人類）を救ふことは唯我れ一人の責任となッた、我は卽ち末法の時代を救濟する唯一の依怙であるといふ高大の自覺に入られたのが、此佐渡流罪中に在る。故に佐渡は日蓮上人一代の中心であると申すのである。

ところで、一方また日蓮上人の主張を、手ッ取り早く描寫するねらひ處はいかんといふに、その所謂『三祕』も『五綱』も、畢竟世を救ふための法門指南修行願業であるから、その醇味を搾取ッていへば、此世界の處置といふことになる。それを如何處置するかといふと、先づ世界を一つものにせねばならぬ、さうするには人類の思想信仰を一つにせねばならぬ。卽ちその聚り歸すべき標準を、最も正しく最も明かな最も淨いものに極めねばならぬ。その精神的歸依所は、世界第一高妙深大なる敎旨の法華經である、而して其物質的歸依所は、世界の最中心にして最古の王統を傳へ、祖宗嫡々の相承、毫も私を混ぜざる純正道義の名家、世界第一の貴族たる日本帝室の統治せる大日本國である。日本の精神は法華經であッて、法華經の發祥地は日本である。世界人類は、これを中心として最後の文明を建設せねばならぬ、これに心づかぬうちは、迷妄禍亂の世である。先づ法華經を以て日本を點睛し、その日本を以て世界を點睛して、世ははじめて理想的常寂光の境界に入るのである。これが日蓮主義の世界統一觀で、同時に日本國體觀であるから、此點を單刀直入に言ひ顯はすのが、日蓮主義の眞面目を顯はすにも、現代思想解決のためにも、一番埒が早い。それには佐渡に於ける日蓮上人が、すべての點に於て意義が具備して居る、就中、日本國體の開顯者としての日蓮上人が、彼の承久亂の大國難を見ること、古今のあらゆる學者宗敎家歷史家に超勝して、一番篤い注意と深い考察を以て、この國史上の大問題を決せんと試みた。『日蓮は此承久亂の不審を決するために佛門に入ッて研鑽した』とまで言はれた程の大問題である。實にこの承久亂は、陪臣の北條義時が、後鳥羽天皇、土御門天皇、順德天皇の三帝を隱岐、土佐、佐渡の三島に流し奉り、日本開闢以來未曾有の大事件を斷行した。日本國體明滅史上の最大險相を示した、精神的亡國の最大國難である。其承久帝が遷帝流謫されて、二十餘年の囚人生活に、萬代拭ひ難き國民的悲憤の痕を留めたのは、此佐渡が島である。承久事件を根本的に解決しようといふ日蓮上人が、承久亂の犧牲者

たる順徳天皇の二十餘年の流寓御生活に、無限の怨みを呑んで、國運の否塞を憤らせたまひ、終に孤島の土と化したまへる最大悲哀の痕跡たる眞野山陵の所在地たる此佐渡へ流謫されて、同じ配所の月の下に、承久亂の犠牲者を訪うての感慨といへば、直ちに詩である。況して其供奉の一人にして最後まで御給仕申上げ、崩御の後も幾十年の島生活に御墓の苔を掃ッた、院ノ北面遠藤左衛門尉爲盛入道阿佛房が、上人に歸伏して、上人の徹底せる承久觀を聞き、深い改悔歸信に、新らしき性命を獲た稜々たる俠骨に、過去を追懷し、未來を豫想しての感想を描寫したらば、その順徳帝に對し、義時に對し、日蓮上人に對し、世の中に對し、可なり深く可なり大きい追懷やら感謝やら悲哀やら憤慨やらが、順徳天皇と日蓮上人とを、結び付けたり、床しがッたりして、多量なる憧憬と解決とを産まずには居ない、この阿佛房をくさびとして、承久問題の當事者と解決者とを浮き出させることは、當然の傾向を有した史的話柄なり、文學的事實なりである。

そこで承久帝を佐渡に弔し來りての徹底解決としては、承久主義の生んだ鎌倉の裏面を照映して、その結論としなければならぬ。日蓮上人の二大豫言として、一は他國侵逼難即ち蒙古の襲來と、一は自界叛逆難即ち北條一門の同士打をあげてある。内亂といへば北條一門には限らない筈だ、然るに北條一家が内亂の本家本元である樣に、特に

「夢の如く妄語出來して御一門より同士打起るべし」

の一語は、暗に現實曝露を以て、事實的に北條一門の醜面を論證したものである。されば時輔の謀叛、名越の合戰を以て、日蓮上人の流罪を赦すに至ッたのは、或る意味に於ける北條氏の日蓮上人に對する降伏で、佐渡の赦免は、即ち一種の凱旋である。この急所をねらッて、承久事件を因とし、北條内亂を果としたる運命觀、承久帝を因とし、法華經を果とした國體觀、それが承久帝の供奉者にして、後に日蓮上人の弟子となれる阿佛房と、阿佛房の師たる、承久問題の唯一解決者たる日蓮上人とによりて、表裏兩樣、縱斷横斷兩面の描寫を試みたのが此劇である。つまり注文通り行ッたかどうか、判らぬが、予の考案は爾ういふ意味で、行ッたのである。日蓮上人がなぜ「日本の柱」だかといふことを、手ッ取り早く示したいのである、芝居としての面白味といふことにも、自分では可なり注意したつもりだが、何分不案内の手さぐり仕事だから、工合のわるいところも多いことであらう、そこは謹んで專門家及び大方の指教を待つ積りである。

事實と脚色

劇のことだから、多少の脚色は已むを得ないが、大體は史實を基礎として立案した、序幕の名越の後室は、人はあるが、事件は推定である。尤も「遺文錄」にある「名越の尼」とは別人だ。老若の從臣等は大抵脚色である。二幕の人物中、羽黒半尾及細見は脚色、他は皆實在の人、事件は事實、時は推定及び脚色。三幕の人物は、嫁と里の女を除くの外は事實の人、夢の幕の人物は、嘉平太を除くの外みな實在者、事件は脚色。四幕の塚原に出る農民は脚色。五幕の「二月騒動」は事實、人物は酒出小坪を除くの外は實在者なれども、軍役等は假設。四條金吾の早馬鎌倉は事實、鎌倉陣

述の推定。六幕の佛事は脚色、印性の訴人と、鎌倉の急報は事實。七幕は全部結論的脚色。

尙承久帝供奉の人名は『承久軍語』に據り、池ノ藏人權頭清範の佐渡奉仕及び七幕目の農民三人の名は『眞野皇陵誌』に據る、五幕の名越見西討手の五人は、『保暦間記』の記述に據り、之を大名と斷じたるは『吾妻鑑』に據る。その他參考したる記錄類中、佐渡に關せるものは、『塚原根本寺文書』及『本光寺文書』等に據る。『都忘れ』の事は『佐渡誌』『皇陵記』等に據り、おくれ咲きの事と童謠は全く脚色に出づ。

又日蓮上人御遺文の本據は、毎幕の後に掲げて、參考に供へる事にした。

尙序幕に就て一言して置く。實は最初書いた序幕の『上』は、此に掲げたのより數倍長く、光則と名越後室の問答、長谷部彌四郎の調査報告、及び北條彌源太の面折等の件をかいたのであるが、上演に要する時間の都合で、全然これを撤回し、代ふるに本篇の喧嘩場を以てした。折角の努力を無にしたのは甚だ惜しいが、まだ是れでも長いといふので、どれかの幕を略するとかせぬかの話もある、予は初め協會側より申出の時間量に書いたので、長くても予の知ッた事ではない。但し讀み本としては殘らずで差支ない。その所謂序幕の『上』の初稿は、『天業民報』紙上には連載してある。芝居といふものは面倒なものだ。

本劇に就て坪内博士の批評

此脚本の假刷を、斯道の大家にして、且つ此作劇を予に慫慂された坪内博士に送ッて忌彈なき批評を求めたところ、いろ〱上演に就ての篤き注意を示され、素人の心づかざる興行上の新知識を與へられたることをこゝに感謝する。又博士は大に序幕を推賞されて、この上演用にとて改作した『序幕の上』よりも原作の方よろしき樣言はれ、別にこの序幕上下を獨立上演用にしてもよしなど注意され、尙左の如く來示された、

かゝる巨篇を、主題が平素御暗熟の祖師傳事蹟に候とはいへ、難なく忽ちのうちに取纏められ候事、斯道の專門者以上の御手練と驚歎の外なく候、次に最も愉快なるは、詞白の美しきことに候、申すまでもなきことながら、驅使自在の佛語雅語、これは教門外の俗作者等の到底及びもつかぬ所に候、殊に上人の白は、遺文錄の正脈を傳へて、而も俚耳に近く、俗に墮せず、朗々可誦候、

過褒當らず、却て汗顏の次第なれども、斯道大家の讃辭、揭げて以て此の脚本の源頭紹介とする。それでこの次、若し何か書くことがあつたら、時間その他上演の事項にも注意する事にしませう。

大正十年二月二十一日

田中智學識す

序幕（上）

宿谷邸塀内

人

宿谷重臣　長谷部彌四郎
同家臣　稻村左仲
北條彌源太從臣　龜谷源七郎
名越の家臣　小坪平六
名越後室の供廻り

北條彌源太の供廻り

時

文永八年十月九日

處

鎌倉長谷宿谷宅塀内

場景

幕開くと、宿谷邸塀内の書割、こゝに宿谷邸訪問者、名越の後室と、北條彌源太との、雙方の家來が供待中に、相互に自家の主人の主張を言ひ張ッて、果ては評論となり、今にも刃傷に及ばんとす。上手は名越の後室の從者、老黨小坪平六を首め、若黨三四人侍女二人、下手は北條彌源太の家來、老黨龜谷源七郎を筆頭に、これ又若黨馬丁等、數人立あらはれ、雙方互に罵り合ひ、刀の柄に手をかけて擬勢するどく、今にも拔き合はさんばかり、大勢は口々にガヤ〱騒然罵詈、甚だ喧噪を極む。

小坪「其方の國家が惡いとは何じや。上から許されて憐れなものを救ふために取り立てる慈悲の沙汰が、お身たちには判らぬか。

龜谷「何が慈悲じや。癩病人の三人や五人を救ふ爲めに、多くの町人百姓に難儀をかけて、それが慈悲になるか。

小坪「難儀と言ッたッて善根の爲めじや。米を出したものは自然と功徳が積まれる。喜んで可い事じや。

龜谷「善根は志でするが法じや。無理に通行のものから取り上げるのは盜賊にひとしい。多分の町人百姓を泣かせて、僅かの癩病人を救ふ、それが善根と謂へるか。

小坪「善根でなうて何だ。

龜谷「善根の皮を被ッた名聞沙汰じや。それが鎌倉中の大名や後家尼たちを蕩らす手段。因て良觀は國賊と責めるのじや。

小坪「良觀上人を國賊と罵る日蓮は謀叛人じや。

龜谷「謀叛人とは何だ？

小坪「この頃の放火殺害、市中の物騒沙汰は何じや。

龜谷「それが、どうした。

小坪「みんな日蓮坊の連中がした事ではないか。

龜谷「何を證據に左樣な事を申す。

小坪「證據は現に二百六十餘人、問注所の書上げがある。

龜谷「それは訴人の申立じや、そんな事が證據になるか。吾々の一味は潔白だ。放火や殺害は、みんな讒者の作爲事じや。

小坪「讒者とは何ものじや。

龜谷「大かたお身達の一團だらう。

小坪「何と……。

龜谷「何が……。

（雙方詰寄ッて、將に刃傷に訴へんとする。大勢もガヤ〱喧噪して、おの〱自家の主張を言ひ罵る。この騒擾の中へ、宿谷の家臣稻村左仲出で來り、兩人の間へ割ッて入り）

稻村「おしづまり下さい。名越樣にも彌源太の殿にも、モハヤ御退出で厶ります。

（これで、雙方我れに返り、おの〱供揃へをすべく、一方は上手へ、一方は下手へと、ドヤ〱去る。稻村左仲は雙方を見送りて、獨語）

稻村「主人につれて家來まで、おの〱思はくが違ふものと見える。名越の後室は評判の極樂寺殿故、彌源太の殿とは話が合はぬの

も其筈だが、生憎にも今日といふ今日、どうしてこゝで落合ッたものであらう。何か奥向でも、一行搊あッたといふ話であるが、いつにも珍らしいあの名越の後室の入來が、一圓合點がゆかぬテ。

(この獨語中、重臣長谷部彌四郎は、主命によりて、裏山の土牢を巡見すべく、この處を通り合はして稲村を見出し)

長谷「おゝ、稲村姓か。只今は大分騒がしいことであッたが、全體何事でムッたな。

稲村「事の起りは確と判りませんが、何か良觀坊が國賊であるとか無いとか、日蓮坊が謀叛人であるとか無いとか、雙方聲高に爭ッて居りましたが、主人たちの退出と聞いて、喧嘩もそこ／＼に出て參りました。承れば雙方の主人方も、何か殿の御前で諍はれたとか申す事ですが、全體どういふ事で、あの名越の後室殿は參られたのでありませう。

長谷「名越の後室は修理權ノ大夫時房殿の息女で、故名越遠江守朝時殿の奥方、中務權大輔教時殿の母御で、御一門にも輕からぬ御人じやが、ヒドク極樂寺良觀坊にうつゝを拔して夢中になッて居らるゝ所から、その法敵といふので、日蓮御坊を一通りならず憎んだものじや。今日も此方の殿を自分の身方の積りで、日蓮も日朗も殺して仕舞はねば、世の爲めにならぬと、その事を殿へ勸めに來られたのじや。

稲村「彌源太の殿は、例の法華の勸めに見えられたのでムるか。

長谷「イヤ、彼殿は、牢舍の日朗殿へ、見舞のため見えられたのであるが、思掛けなく名越の後室と出遭ッて、したゝか言ひ懲されたが、傍目にも笑止なことであッた。

稲村「女さかしうして牛を賣り損ふとか申す、手もなくそれでムるな。

長谷「まア爾うじや。それに此頃の放火殺害の一件を、何でも日蓮黨の所爲じやと言張らるるが、今日それがし松葉ケ谷をはじめ、問注所等殘りなく調べたところ、右は悉く訴人の作爲事であると知れ、依智へも上より其御沙汰があッて、二百六十餘人悉く無實と判り、當所の五人も追附御赦免ある筈。任麼底へ名越の後室、骨折損の草臥儲けであッた。

稲村「奥の牢舍の五人が御赦免になッたら、口の牢の日朗殿も許されますか。

長谷「筑後殿は問注が運ぶから、此方は赦免にはならぬ。其どころではない、名越の後室は殺して了へと曰はれるのじや。それを又彌源太の殿は、自分の頭の蠅を逐ふが可い、江間入道の前車に鑑みて、子息教時の行末に氣をつけろと、散々に言ひ懲し召された。笑止なことでムッた。

稲村「何方も御一門の間柄で、何して爾う意氣の違ッた者でムりまするかなア。

長谷「北條の御一門は、名越殿極樂寺殿、大佛赤橋常磐金澤の諸家に分れて、餘りに御繁昌の爲めに、つい種々の面倒が起ることであらう。彌源太の殿は、其れを見るが厭さに出仕もされぬと申すことじや。……(四圍を見て)……おゝ、モー殿の御巡檢に用もあるまい、それがしは是れより下検分を致さう、足下は殿のおん許へ……。

(トこれにて兩人は左右へ相わかれて去る。そのあと道具廻る)

序幕(下)　土牢の場

人　宿谷左衛門尉光則

日朗法師
宿谷の家臣　長谷部彌四郎
依智の代官　有馬太郎
若黨
牢番二人

時
前幕の日の夕暮前

處
宿谷邸背後の丘なる土の牢

場景
舞臺中央小高き處へ岩窟の土牢、それより上手へ斜めに小逕ある心、その折曲ツた處に今一つ土牢ある模様よろしく、牢の格子少々見える。前の土牢だけは、鎌倉長谷光則寺土牢の現物を、或る程度まで實寫する。この牢の格子戸「くゞり」の錠前物々しく、其前斜面の處は、シダなどの簇生せる岩石、それより下手へかけて斜めに一面、下手全面は岩山に木立、上手「ロの牢」と「奥の牢」との見切りにも二三本杉の木立、牢の前に岩角又は木の切株二三あり。牢より下手に床几を置き、前に粗朶の三叉あり、罐子の古びたるものをかけ、ここに落葉枯枝など其傍らに積んであり。こゝに牢番の二人、三叉の下で、たき火をしながら、雜談最中道具停る。

番人甲「大分寒うなツた、鎌倉は暖いところじやといふが、今年は寒い樣じやなう。

番人乙「左樣じや。今年は秋口から陽氣が變で、光りものやら大風やら、いかにも騷々しい年じや。

番人甲「その加減か、今年の風は餘計に身に感みる樣でならぬ。

番人乙「今年ばかりでなく、全體この近年は、一年として穩かな年はないて。ヤレ地震だ、飢饉だ、疫病だ、大風だ、彗星が出たとか、天道さまが二つも三つも出たとか……。

番人甲「天子樣が島流しになるの、將軍が逐ひ出されたり、殺されたり。昨日まで榮えた大名衆も、一つ間違ふと一族根絶やしになる。なんと安心のならぬ世の中ではないか。

番人乙「それを思へば吾々は却て安樂じや、寒いぐらゐは我慢すべしだ。時に物騷といへば、この頃の樣に、市中に毎晩放火や殺害があツては、以ての外諸人の難儀じや。風評では日蓮黨の所業じやといふ話だが、眞實かイ。

番人甲「それに就て、今しがた御用人長谷部殿から聞いたが、この間から殿樣の御苦辛で、すツかり實否をしらべた所、みんな讒者の惡巧みで、惡黨どもをかたらひ、火を放けたり人殺しをしたりして、惡名を日蓮黨にぬりつけようと仕組んだ狂言といふことが、今日すツかり判ツたさうだ。

番人乙「長谷部殿が今朝馬で出かけられたのは、そのしらべの用か。何にしてもそれはまア善かツた。さしづめ奥の牢舍の五人の衆も許される事だらうが、ロの牢の一人は、問注が違ふからどうかわからん。あの人も氣の毒だが、樣子を見ると少しも弱ツて居らぬ。經文を讀むか書物を見て居るか、一向平氣な樣だが、覺悟のよい人じや喃。

番人甲「それに、殿樣が氣をつけておやりになるから、牢舍とはいへ一通りの囚人と違ツていくらか樂だ。さう言へば、今まで讀經して居られた樣だツたが、急に靜かになツたのは、又書物でも見て居ると見える。

（此處へ老黨長谷部彌四郎出で來り、番所を點檢する。牢番の二人一揖して會釋する）

長谷部「寒いのに御苦勞じや、牢舍の人たちに變ッた事はないか。

番人甲「いづれも變ッたことはムりません。

長谷部「殿からの仰せは、いづれへも申傳へられたかな。

番人乙「先刻それ〴〵申達しました、みんなかたじけないと申して居りました。

長谷部「今日は殿が直々お見廻りになる、床几の用意などして置くがいゝ。

（これにて長谷部は牢舍を外面より巡檢する。牢番は床几を上手よろしき處に据ゑ、たき火の用意などする。下手木立の間より宿谷光則出で來り、若黨見參臺の贈物を携へて從ふ。坂を上ると牢番等出で迎へる。光則設けの床几に腰をかける。若黨は見參臺を光則の傍らに置く。牢番は下手に控へる。此時上手より長谷部巡檢を終りて、光則の前に出で、一禮し）

長谷部「牢舍の面々どれも變りなく、ひたすら殿の御明斷を信じて、聊かも苦惱の樣子なく、いづれも機嫌よくして居られます。

光則「それは何よりじや。奧の牢舍の人々は、問注明白の今日、今にも御赦免あるべき筈じやが、日朗坊は別の御沙汰によッて預ッたことゆゑ、師の坊の進退定まらぬ間は、裁許の御斷もなるまいから、永びくものと見て、隨分ともに心添申せ。彌源太の殿より御見舞の口狀もあれば、こゝで對面をしよう。案内申せ。

（長谷部は牢番を指揮する。牢番は心得て格子の錠をあける。長谷部戸際によりて）

長谷部「筑後殿、只今主人御對面致したいと申す。暫時あれへ御出まし下され。

（牢の戸の「くゞり」を明ける。中より日朗法師年齡二十九歲、一ケ月弱の牢舍生活を表示すべき頭髮及髭よろしく、短き素絹に小五條、總じて常着のまゝといふ姿、長谷部に導かれて輕く一揖し、悠々として光則の前に來る。光則會釋して床几をすゝめる。たき火をはさんで對座）

光則「永々の御牢舍、嘸かしおつらい事でムらう。光則重々お察し申しながら上よりの嚴命に是非なくも、御赦免の表沙汰あるまでは、牢人として光則お預り申す。依ては出來る限りはおんいたはり申す所存。追つけ晴天白日の時もムらう。しばしの御辛抱願ひまする。

日朗「宿谷殿には、先年『立正安國論』御執奏以來、久々の御對面に事をかへ、思ひ設けぬ奇禍によりて、かく牢舍の辱め、世の成行とは申しながら邪は却て正に勝ち、惡は却て善を害ふ顚倒惑亂、歎いても餘りある次第。只禍の中の幸は、同じながらも貴殿のおん手に預けられ、おん心をこめられた御介抱、御親切深く肝に銘じて居ります。

光則「此頃中御心にかけられた日進房と共に、山城入道以下四人の人々は、御不審の事も分明致し、今日にも牢舍御免の御沙汰ある筈、御安心下され。

日朗「それは悦ばしい事でござる。聞けば拙僧牢舍の後、市中に放火殺害頻にして、これ皆日蓮黨の所爲なりと誣ひ、吾が同門の人々、尠からず御不審を蒙ッたとか申す。相も替らず法敵どもの奸計、聞くも苦々しい次第でムる。

光則「その儀に就ては、今日すでに問注所に於て、理非明白と相成り、依智へも既に立文を

以て申し通じられたと申す事ゆゑ、定めし師の御坊にも御安心の事と察し申すが、唯おん傷はしきは、上の御不審猶晴れず、愈よ佐渡へ御配流の由、隨ッて御坊の牢舎も永引くは必定、何とも以て御氣の毒に存じ申す。さるかはり此光則が身にかなふほどは、いか樣とも御介抱申す所存。表を憚る牢舍の朝夕、その外の事に於ては何なりと、お心置なく仰せ聞けられよ。

日朗「今に始めざる貴殿の御心づくし、日朗深く滿足いたしまする。

光則「折からの寒氣、(牢をのぞき)あの通り上は漏り下は潤ふ土の牢、おん傷はしや、定めし身にこたへて寒じることでムらう。せめて衣類など襲ねさせられ、おん身をお厭ひある樣、お氣をつけさせられい。

日朗「その寒氣は、日朗少しも身に感じませぬ。

光則「イカサマ、血氣盛んのおん身。御勇氣の程さもありませう。

日朗「イヤ、血氣の爲めでない、勇氣の故でもムらぬ。

光則「では、何か咒術法力のためにでも。

日朗「イヤ〳〵、そんな次第ではムらぬ。此日朗は、かうして身は此土の牢に籠り居ッても、朝な夕なの起臥にも、晝夜不斷寸分の間も、心は常に恩師上人の御許に在ッて、今頃はいかにましますか、今日の御氣色はいかにと、雨につけ風につけ、念頭に浮ぶは只そればかり。身を捨てゝ國を救ひ、百難を苦とした まはず、おん心つねに一切衆生を憐みたまふ、底知れぬおん慈悲、世のいのち國の柱たるべき聖者をば、打ち罵るはまだしも、果ては謀叛殺害のものにもまさる理不盡の刑罰、流罪死罪無盡の讒言。その暴狀さながら天の日を射落し、國の柱を倒すも同樣、危しとも申すばかりなき世の顚倒迷亂を見るにつけ、一つは恩師の身を案じ、一つは此曲り狂ッた國の行末を憂ひて、憤りもし……泣きもする。日朗の涙は既に涸れて、今は全身の血が焰ともえて居よう……。我身の寒さなどは、心附きも致し申さぬ。

(光則は默して聞きて居り、一語々々に感動の表情ありて)

光則「光則おろかにして、去る大いなる覺悟を窺ひ得ず、尋常の思ひを以て聖賢の境界を忖度し、おもはぬ失禮を申しました、(やゝ深き感に打たれて)國を思ひ法を思ふの外、一身の安危を意とせざる大慈悲のおん心、凡慮の企て及ぶ所でない、光則ほと〳〵感心いたしてムる。それにつけても、武藏守殿といひ、殊にはあの名越の後室たち……(間)……御一門の禍とも心づかず、良觀ばらの誑惑にすかされ、さま〴〵の讒奏毒言に、聖者を陷れんとする卑劣の振舞。御一門の爲めにも、申さば師子身中の蟲、(やゝ切齒慷慨の態度にて)……おゝ、御一門といへば、先刻北條彌源太殿御入來あり、御坊の御樣子を氣遣ひ、ワザ〳〵御見舞の御懇志、御無事の旨承知して、安堵めされた樣子。御勘氣中の事ゆゑ、ワザと御遠慮申す、萬事はそれしより宜敷申上げくれと申す事で。其節御持參のおん見舞品、これへ持參いたしてムります。

(ト若黨に命じて、持來りし見參臺に橘の實の枝つきのまゝをうづ高く盛りたるを、日朗法師の前に進め)

光則「彌源太殿の御志。御受納下さらば幸に存じます。

(ト會釋する。日朗法師一瞥して、徐に禮を返し)

日朗「北條彌源太殿、ワザ〳〵音問のおん志、剰さへ心をこめられた贈りもの、忝けなく

頂戴いたしまする。

（ト臺の上の橘一枝を取り上げ、打かへしうちかへし見て、やゝ昂奮したる體）

日朗「おゝ、みごとな橘！

（ト言ひさして、ぢッと見つめつゝ、ハラハラと落涙し、しばし感慨に激せるものの如く、果ては枝を抱き聲を放ツて泣き沈む。光則この體を見て不審の面色）

光則「御坊には、いかゞなされました。

日朗「日朗今この橘を見て、感慨に堪へずして思はず取りみだし、恥入つてムる。

光則「橘を見て、その御感慨とは？

日朗「されば、この橘の實を見るにつけ、はからず恩師上人の事を思ひ奉りました。師の御坊には、此橘の實が、上もなき御好物。年々の季節には、必ずいつも摘償が折ツてさし上げるを、世にこれほどの好物はないと仰せあツての御悦び。其おん聲は今も耳に殘つて居る、今此橘のうつくしくなつたのを見るにつけ、これをさし上げたらば、定めしおん喜びの事と、はかなき空想に惑せまり、不覺の涙に咽び申した。

（暗然として泣き伏す。光則以下並み居るもの悉くも、同情の涙にくれる。

日朗法師は、涙の中より）

日朗「世にも國にも掛替のない大切のおん身。よしや身を肉橋と爲し牀座としても、給仕申上げねばならね尊貴の御法體。一刻片時もお傍去らず御給仕申上げた身が、おもふにまかせぬ牢舍のうきめ。殊に承はれば遠からず佐渡が島へ遠流と申すこと。吹く風あらき北海の孤島。お傍に在ツて朝夕のお給仕も出來ぬ此身の不運。一念こゝに到る時は、骨も摧け身もさかるゝの思ひ。翼があらば飛んでも行かん、あゝ懷かしの大上人、慕はしの師の君。日朗はかく悶えて居ります。自分の苦痛は兎の毛ほども感じませぬ。只お傍に居られぬ今の身を悶えて居ります。あゝ依智の空はあれか、慈悲の御聲は、雲を傳うて耳に入る樣に思ふのに、給仕に伺候すべき身は、斯く牢舍の囚はれとなつて、恩顏に咫尺する事かなはず。かくては生きても生申斐のない此日朗。あはれ佛天、日朗が命を召されて、師の御坊の御身に恙なき樣守らせたまへ……。あゝなつかしの依智の空！　日朗は鎌倉の牢舍に、不孝の悲さを悶えて居ります。

（ト昂奮感激の身をふるはして、對座の人にものいふ如く、感懷を敍し終りて、徐に橘の枝を臺に置きて）

日朗「彌源太殿の志は、かたじけなく受納致し申す。されど日朗これを見て感極つて口にも致されず、見るさへ悶えの種となりました。どうぞ番人の衆にでもお頒ち下さい。

光則「御述懷承はつて倶に感涙を催してムります。今にはじめぬ御坊の御孝心。鎌倉中にも評判の事ながら、まのあたり謦咳に接して、光則深く感服致してムる。一花を見て天下の春を知る、御坊の高德を推して、師の君の御盛德を偲び申す。光則前年『立正安國論』の執奏を致したれど、因緣拙くして親しく御教導にも預らず。曾て叡尊に戒を受け、良觀の法座に交りて、形のごとく禪門氣質の法緣は結びたるものゝ、近年彼の人々の事に不審起り、思案の折から、彌源太殿の切なるおん勸めに、一たび松葉ケ谷の法席に參向致さうと存じながら、其も果さず。然るに此度不思議の緣で御坊を預り奉り、此中數度の御高說といひ、今日只今のあたり貴き御心情を見聞して、渴仰の心泉と涌き、隨喜の感涙と流れて、光則五十餘年の迷夢を散じ、今日只今改めて日蓮大師を師と仰ぎ、一乘法華の信者となり申した。

日朗「宿縁淳厚、あッぱれ御歸正の歡び、日朗も祝着に存じまする…。

光則「大上人佐渡へ御配流の事に就ては、それがしの存じよる旨もムれば、御坊御對面の事、光則命にかけてもお計らひ申しまする故、お心强う思召されい。

日朗「何あの、師の御坊のおん元へ。拙僧をおやり下さるとか。あの牢舍の身でも…。

光則「大事ムらぬ、萬事は光則が方寸にありまする。猶それのみならず、事に先ッて計らひたき仔細もムッて、是非に御坊を佐渡が島まで…。

日朗「一日たりとも配所の御給仕が出來るなら、日朗が命の一つや二つはどうならうと…、（間）…宿谷殿！　御親切心魂に徹して、かたじけなう存じ申す。シテ、事に先ッて計る旨とは…。

光則「法華ばらの巨謀、のこりなく聞取ッてムる故、彼等の裏をかく所存。

日朗「萬事は貴殿のおん肝煎で。

光則「委細の儀は、いづれ改めて申上げませう。

（ト日朗法師滿足の體よろしく、一同をかへり見て、）

日朗「日朗參着以來、各々方にも、いかい御世話に相成り申した。主從一致の御懇切、深く滿足に存じ申す。

（ト皆々へあいさつする。老黨長谷部彌四郎一同に代りて）

長谷部「おん言辭恐れ入りまする、殿にはかねてより良觀の振舞に疑念をいだかれ、心竊かに松葉ケ谷の御法流をお慕ひのところ、今日改めて御歸依の誓詞、これで日本晴の致した心地、吾々迄も一同御隨喜申上げまする。

（一同も同感といふ態度にてよろこびに輝く。この處へ若侍一人走せ來り）

若黨「ハ、申上げます。

光則「何事じや。

若黨「只今依智の鄕より、本間殿の御代官右馬太郎殿、日朗殿へのおん文持參いたし、殿へ御對面の上、おん渡し申度しと申出でられました。

光則「ナニ本間殿の御使者と申すか。日朗御坊への御文とあらば、すぐさまこれへと申せ。

若黨「畏りました。

（若黨去る。光則うなづき）

光則「定めし佐渡御出立の日限がわかッたものでがなムらう。

日朗「折も折、時も時、宿谷殿歸伏の今日、はからず恩師のおん文とは、かさね〲の吉祥、此上の歡びはムらぬ。

（若黨に案內せられて、本間の代官右馬太郎、年齡三十四五歲、馬より下りたばかりといふ態度にて登場）

右馬「これは依智の本間が代官右馬太郎と申すもの、先日來日蓮御坊お預り中、鎌倉市內物騷沙汰の御不審もはれて、今日上より立文の御使者到來、佐渡御發足の日限も定り、それに就ての御消息、持參いたしてムりまする。

（ト消息を老黨長谷部に渡して取次を乞ふ。長谷部は之を光則の前にさし出す）

光則「師の御坊より筑後殿へのおん文、光則役目の手前、一往あらためておん渡し申す。

（ト中をあらためべくして、改めず、御消息を一瞥して凝視することしばらく、やがて恭しく押し戴き、そのまゝ日朗法師に手渡して）

光則「光則とくと改めてムります。

（日朗法師恭しく受取り、あまたたび押

日朗　し戴き、瞑目感謝やゝありて）

「御意にかけさせられ、ワザ〳〵日朗へ賜ツた御消息、ありがたく拜讀いたしまする。

（ト依智の方にむかひ、拜禮の上、御消息の封をきり、全紙一覧の上、更に戴いて朗讀）

> 日蓮は明日佐渡の國へまかるなり。今夜のさむさに付ても、らうのうちのありさま、思ひやられていたはしくこそ候へ。

（これまで讀んで來て、感激の情にむせび、再び同文をくりかへして）

日朗「今夜のさむさにつけても、牢のうちの有樣思ひやられていたはしくこそ候へ…いたはしくこそ候へ。

（ト讀み終つて、感激一層深くなつて泣伏し、やゝあツて）

日朗「吾々風情の上を、かくまで御心にかけさせられてのお思ひやり、勿體ない此御文言。何といふ…おやさしい御慈愛であらう…。

（ト言ひ終ツて又々泣伏す。光則はじめ並居るもの皆悉く感涙を催す。日朗法師は涙を收めこ、次の御文を朗讀す）

> あはれ殿は法華經一部色心二法共にあそばしたる御身なれば父母六親一切衆生をも助けたまふべき御身なり、法華經を餘人のよみ候は、口ばかり言ばかりは讀めども、心は讀まず、心はよめども、身に讀まず。色心二法俱にあそばされたるこそ貴く候へ。

（こゝまで讀み來つて深い感悦に入り、悦びと感謝に、誇りの色、服從の色、ひとしく溶けて輝ある感激となつて、扨て一同にむかひ）

日朗「法華經を讀むに、身口意の三業がある。その中で口によみ意によむは誰しも出來る。身に讀むといふ一段は容易でない、如法に法華經の信心を貫かんとすれば、忽に起る三類の強敵。惡口打擲は更にもいはず、流罪死罪の橫難競ひ來る。論より證據は師の御坊。又數ならぬ拙僧迄も身に讀んだ一人にお加へ下されたかたじけなさ。王侯の果報も及ばぬ身の面目、これも畢竟吾等の貴き故ではなく、只々法の人とみそなはしての御賞讃、まことに身に餘ツた果報と申すは此事。たとひいかなる苦痛艱難でも、この喜びに思ひ返せば、水火湯鑊の難も風前の塵じや。かゝるいみじき果報を得たのも、みんな師の御坊の賜じや。ありがたい師の惠み…尊き法華經の利生！これが悦ばれずに居られますか…。

（一座ます〳〵感激にかゞやきて）

光則「尊い御消息の御文言、一同拜聽して、ありがたく感銘いたしました。

日朗「今にはじめぬ甚深の御教恩、慈愛あふるるこの御文言。咳唾珠玉と申すべきか、一字千金のおん玉章…。

> 天諸童子以爲給使刀杖不加毒不能害と說かれて候へば、別の事はあるべからず。牢をばし出でさせ給ひ候はゞ、とく〳〵きたり給へ、見たてまつり見えたてまつらん。恐々謹言。
>
> 文永八年辛未十月九日　日蓮　在御判
>
> 筑後殿

（朗讀は末になるほど感銘高調し、年月日の次に宛名を讀み、靜かに「日蓮」と嚴かに稱呼し、更に力を入れて「在御判」と高聲に呼びて泣き伏す。一同感泣の中

に幕）

聖典の本據

本劇は聖典の史實に據り、兼て國史の事實を參酌して脚色す、依て今聖典の本據を掲げて參考とす。

【報恩抄（下）】・（讒構の史實）：
禪僧數百人念佛者數千人、眞言師百千人、或は奉行につき、或はきり人につき、女房につき、或は後家尼御前等について無盡の讒言をなせしほどに。最後には天下第一の大事日本國を失はんと咒咀する法師なり。故最明寺殿極樂寺殿を無間地獄に堕ち給ふと申す法師なり。御尋ねあるまでもなし、但須臾に頸をめせ、弟子等をば又或は頸をきり、或は遠國につかはし、或は籠に入よと、尼御前達いからせ給ひしかば、其まま行ひけり。（類纂一八八）

【土木殿御返事】・《武藏守の預り》：
此ノ十二日酉ノ時御勘氣、武藏守殿御アヅカリニテ十三日丑ノ時ニカマクラヲイデテ佐土ノ國ヘナガサレ候ガ、タウジハホンマノエチ（依智）ト申ストコロニ、エチノ六郎左衞門ノ尉殿ノ代官右馬太郎ト申ス者アヅカリテ候ガ、イマ四五日ハアルベゲニ候。（類纂四四九）

【種々御振舞御書】・（鎌倉放火殺害陷穽の史實）：
依智にして二十餘日其間鎌倉に或は火をつくる事七八度、或は人をころす事ひまなし。讒言の者共の云、日蓮が弟子共が火をつくるなり。さもあらんとて、日蓮が弟子等を鎌倉に置くべからずとて、二百六十餘人にしるさる。皆遠島に遣すべし、ろうにある弟子をば頸をはねらるべしと聞ふ。さる程に、火をつくる等は持齋念佛者が計ひ事也。其餘

はしげければかゝず。（類纂三九八頁）

【彌源太殿御返事】・《北條彌源太の歸依》：
日蓮は法華經の行者なる故に三類の強敵あつて種種の大難にあへり。然るにかゝる者の弟子檀那とならせ給ふ事不思議也、定めて子細候らん。（類纂九四四）

第二幕

印性房住庵の場

人

印性房（念佛僧）
唯阿彌（同上）
性瑜房（修驗）
道觀房（律宗）
慈道房（禪宗）
北方の最蓮房
遠藤爲盛入道阿佛房
本間山城の老臣　羽黑甚作
同　牛尾與太六
武藏守密使　細見平内兵衞

時

文永八年十一月下旬

處

佐渡國畑野ノ庄印性房の住庵

場景

高き二重の座敷。正面は上手一間半の床、それには書棚、その上に卷軸の經典少し置きてあり。その側に負櫃、それに竝んで寺らしき襖。ずツと上手は相當の面積に持佛の間。それを下手に面して、佛前の莊嚴向を見せ、その間だけ約一間ばかり張出して火燈口の窓あり。その障子は七八分あけて、そこより佛壇が見える。持佛の間と座敷の見切の庭面に、山茶花の類の植木、ずツと上は藪の心。座敷の次は内玄關で、その前面に草庵に相應しき冠木門。林藪庭除の光景よろしく、總じて道心者の庵室といふ風情を見せる。こゝに當庵の主人印性房は、唯阿彌、及び河原田本間家の家臣牛尾與太六と對話中、幕開く。

牛尾「お招きにより、早速參上致してムるが、今日の御相談は、例の日蓮に付ての事と承

はッてムるが、他の方々もモー見えられさうなもの。

唯阿「拙僧出かけに性瑜房を誘ひ申したところ、只今修法中ゆゑ、濟み次第すぐに參る、一足先きへと申す事でムッた。これもモー參るでムらう。

印性「道觀房も、先日師僧良觀殿よりのお招きで、急に鎌倉へ赴かれたが、すでに歸られた樣子。何かに就て都合のよいことでムる故、これへも別に報知せて置いたで、多分見えることでムらう。

（此對話中に、修驗者性瑜房、慈道房と共に、花道より話をしながら、兩人打ち連れて出で來り、すぐに座敷へ通り、居住ひ程よく構へ、互ひにあいさつの事よろしく、あとで性瑜房、先づ主人印性にむかひ）

性瑜「出掛け先にて、生憎祈禱の賴みを受け、大きに遲刻致し申した。

印性「各々方には、早速の御入來、忝く存じます。御同樣捨置きがたい一件は、今度來島した例の日蓮じやが、彼奴中々の曲者で、一筋繩ではいくまいから、どうか相談の上、うまい分別したいものじや。

唯阿「聞ゆる阿彌陀佛の怨敵、八宗九宗の仇がたきたる不當人。天罰佛罰に惡運つきて此島へ流罪となッたは、日ごろ惡業の報い、所謂運の盡きであらう。

性瑜「前年參ッた鎌倉の同宿が申すには、只佛法の議論のみでなく、政道にも口を出して、鎌倉殿の仕置を誹り、義時公を逆賊謀叛人と罵り、極樂寺殿は地獄に落ちた、最明寺殿は牛飼じやとさまざまの雜言を申して、世人を惑はし居るといふことじや。

慈道「そればかりでない。當時鎌倉で佛法の頭目、上下渇仰の靈刹と崇められた建長寺壽福寺長樂寺大佛殿等の七大寺を、殘らず燒拂うて、住僧等の頸を由比の濱で斬らずば、日本は亡びるなぞと、途方もないことを申す。惡人だか狂人だか、どちらにしても前代未聞の沙汰じや。

牛尾「各々方の仰せの通り、佛敵法敵は申すに及ばず、政道の敵、天下の仇。現に彼れが毒言に誑かされて、上に對し不滿を懷くものも尠くないと承はッてムる。

印性「それは爾うと、彼れには隨分と徒黨もあると申すことじやから、その内に追々此島へ渡ッて來ようも知れぬ。今はあの塚原に唯一人居るさうな。左すればいかに手剛いとは申せ、こちらは多勢の事、滅多に打損じはすまい。トカクは早いが勝ちといふものじや。

性瑜「その事〳〵、先んずれば人を制するの本文。とかくは急におもひ起つことじや。

慈道「併し私に人をあやまちて、何ぞ面倒が祟ッても困るが、其儀はどうじや。

唯阿「むかしから此島へ來たものゝ、無事に故鄉へ還ッたものは優曇華じや。流人はやがて死人も同樣じや。

牛尾「彼れが事は、上に於ても既に持てあまされて、よき折あらば死罪に行ふつもり。すんでにこの九月十二日にも、表の沙汰は遠島と觸れて、内々はその途中、龍ノ口で斬るつもりのが、仔細あッて延びたといふことに風聞してムる。所詮は上の邪魔もの故、殺したとて何のお咎があらう。その儀は御懸念に及び申すまい。

印性「其にしても成るべく島中の諸宗一致して事を謀るが上策と存じ、念佛持齋眞言師、俄禪門道心者に至る迄、重なるものは今日悉く招いた事じやが、餘人は兎に角、念佛行者の剛の者と島中に隱れのない、あの新穗の阿佛房、今一人は流人なれども、當時この島中

で雙ぶものなき碩學と仰がれて居る、叡山の學僧最蓮房、この二人は是非とも此評定に拔き難い人たちゆゑ、今日の刻限も知らしてあるが、一人は老體、一人は病身、それ故遲刻したものと見える。堅々の約束じやで、モー見えられさうなものじや。

性瑜「イカにも、あの最蓮坊は、餘程の學匠と申す事じや。まさかの場合、身方にも一人位は學者が控へて居らぬと、何かにつけて心細いテ。

唯阿「新穗の老體は、國中に隱れもない元氣者じや。元が北面の武士だけあツて、あんなに年はとツても、壯者を凌ぐ勇氣に、うまれつきも剛情な替り、念佛の信仰も、名前の通り強く固い樣でムる。

慈道「強いと申せば、彼の人は、それあの、此度に島流されて來た、遠藤武者盛遠、後に高雄の文覺！　あれの一門で從兄弟にあたると申す事じや。

牛尾「イカサマ、剛情で強いわけじや。その上念佛の凝りと來て居ては、定めし日蓮を憎んで居ることであらう。

印性「憎む段でない。飛びかゝツて一ひしぎにも仕兼ねまじい憤りで、いつぞやも散々に罵られた。俺はかうして院の御菩提を願ふために、日々御陵參申して念佛三昧に心をこめて居る身じや、その念佛を地獄の業なぞと申すやつは、如來樣の敵ばかりか、院のおんためにも仇がたきじやと、それは〳〵以ての外の憤りであツた。

（ト 取沙汰の最中、花道より北方の學僧最蓮坊、三十七八歲、叡山僧らしい着附に、杖をついて步行、蒲柳の質といふ風情、つゞいて遠藤爲盛入道阿佛坊、禪門姿、太刀にそりを打たせ、杖もつかず武强の態よろしく、途中語りながら出で來る）

阿佛「御坊には御病後と承はり、御遠慮申さうかとは存じたれど、事が事ゆゑ申さば佛法の一大事、それ故無理におさそひ申した次第。ようこそ御同行下された。定めし皆の衆も待兼ねてムらう。

最蓮「病身の事とて、常にはいづれにも不沙汰がちで通して居ります。御老體のおかげで今日計らず外出を致し、却て氣も晴れ〳〵と致してムる。入道殿には御達者とは申せ御老體の事、さぞおつかれでムらう。

阿佛「なんの是しきの道、何ともムらぬ。

最蓮「相かはらず御元氣の事じや。

（ト 語りながら庵門を入り、すぐに玄關へ通り、小法師に迎へられて座敷へ入り來る。印性は此時持佛の右端を背にして坐し、新來の最蓮坊と阿佛坊を正面に坐せしむ。諸人程よく席を讓り合ツて、各々會釋よろしく）

印性「御兩所には御苦勞に存じます、先刻より御一同もお待兼ね申した。常より御病身の最蓮御坊。御老體の入道殿。寒氣の中、御集會忝う存じます。

阿佛「最蓮御坊をおさそひ申すため、いから遲刻致してムるが、シテ御相談の次第はいかゞでムツた。

印性「彼是の評定は申したものゝ、入道殿の御分別を承はり、殊には最蓮上人の思召も窺ひたいと、一同お待申した譯でムる。

阿佛「シテ、御一同の御存意は。

印性「申す迄もムらぬ、佛法守護のため……。

性瑜「あゝいふものを活け置いては……。

唯阿「佛門の煩ひ。

慈道「諸人の迷惑。

牛尾「第一政道の妨げ。

阿佛「シテ、その分別は？

印性「上にも憎まれ、諸人にも怨まれた世のねぢけもの、どう計らッたとて仔細はムらぬ。

性瑜「一同から守護所へ訴へ出て、代官に成敗して貰ふも一策。

唯阿「四の五の面倒なく、手療治で治めて仕舞ふのも一策。

慈道「諸人の疑ひを晴らさんためには、問答で詰めて、赤恥をかゝすも一策と申すものゝ、これは所詮吾等の手際ではいかぬこと。からなると學道名譽の最蓮御坊にお鉢を廻すの外はムらぬ。最蓮どの御存意いかゞでムるな。

印性「吾々の評定は略一決いたした。最蓮坊は今入りなり、又一座の長者なり。是非御坊の御存念を承はりたい。

一同「どうか、御坊の思召を……。

最蓮「貧道の存意と申しても別段のことはムらぬが、あの日蓮坊は、曾て叡山に留學いたし、その折は蓮長と申され、當時名だたる心賀、政海なぞいふ學匠と肩を竝べられたほどゆゑ、所立の法門もなにさま仔細ならでは協ふまい。理非を糺すは佛法の習はし、論議の得失を以て義の邪正を決するは學問の掟なれば、彼れの所立に就て、先づ論議決着を試み、彼若し非にして猶改むる所なき時は、いかなる成敗を加へるとも、一たびは論難を以て當るが道理かと存じ申す。

印性「御坊は左樣に仰せられますが、彼れは既にみづから不當の振舞を以て、常に世を騷がすことを詮と爲し、室中に武具を備へ、放火殺害の振舞も度重なると申す風聞、この國までも聞えてある。左樣の白徒を退治するに、分にすぎたる法門沙汰。そんな面倒をしようより……。

唯阿「手間隙いらず鐵の一棒。

性瑜「大法祕法の荒療治で。

慈道「即身即佛の引導を渡すのが。

牛尾「當位即妙の活法門。

阿佛「仇敵の世迷言を聞く迄もなく、かくも弘まる八宗九宗を惡口するといふ不當人。勿體なや念佛を地獄の業なぞとほざく大賣僧。問答も詮議も要ッたものでない。首筋押へて否か應。即座に懺悔して邪見を飜さば兎も角、否とぬかさば一捻り、息の根とめて佛罰を生で見せう。

最蓮「イヤ、各々は左樣仰せあるが、佛法の事は佛法で捌くが定法。たとひ念佛を地獄といひ、諸宗を罵ればとて、教門の破立、先例のない譯でもムらぬ。所詮はその所立が道理極成して居るや否や、弘通の本心如法なりや否や、經文論釋に據ろありや否や、それ等の邪正得失を糺明して、果して無文無義と定らば、其時彼れが誑惑を責め、謗法毀人の罪を鳴らし、尚その非を改めざるに於ては、王法佛法の掟に從ッて、如法の成敗を爲すべきが當然。頭から理不盡の糺彈、殊に私の成敗は、以ての外の儀と存じ申す。

印性「然らば御坊には、彼れが暴逆の振舞をも、佛法の沙汰と申さるゝか。

最蓮「暴逆とは？

印性「上に敵對の逆意をも。

最蓮「上とは？

印性「鎌倉殿を惡口して、義時殿は謀叛人じや、最明寺殿は牛飼じや、極樂寺殿は地獄に墮ちたなど申す僭上の暴言を、御坊は御存じないか。

最蓮「鎌倉殿は鎌倉殿、佛法は佛法でムる。權威よりも道理じや。日蓮房の言ふ所に道理あらば、執權だらうが將軍だらうが、それを破折するに何の遠慮が要らう。只彼れが所立の理非如何が目安でムる。

性瑜「七大寺を燒拂ひ、諸宗の僧をのこらず斬れと申す。これほどの惡逆は提婆瞿伽梨にも

先例がない。

唯阿「それでも道理じゃ法門のうちじゃと言はるゝか。

慈道「御坊には日蓮を惡人でないと申さるゝか。

牛尾「同じ叡山の流れを汲んだ最蓮御坊ゆゑ、左様ひいきに思召すやも知れませぬが、何を申すも上下舉て彼を憎まぬものゝない中に、これは又餘りのさかしらだて。

阿佛「サスガ學者の最蓮御坊は、學問が邪魔をして、見すく見えた惡行をも、何か道理がましく披ひめさる。つまり學問がたゝりを爲して、事が迂遠くなるので厶らう。御坊一人が左様仰せあッても、衆議の趣すでに一決いたした上は、問答などは無益の事。前代未聞の佛敵日蓮！ 阿彌陀如來や先帝さまの御恩報じ、此入道一人でも、刀に掛けて成敗して見せう。

最蓮「各々方に斯ういふ決心がござる上は、この最蓮長座は無用じゃ。さらばこれにてお暇申す。後に悔なき御分別をひたすら念じ申す。

印性「その野心には……。

一同「及ばぬことじゃ。

最蓮「新穂の御老體にも、篤と御再考下されて。

阿佛「すでに決心いたした。お構ひなく……。

（ト最蓮房は不本意の容子にて退場。あとに一同口々に最蓮の橫論を嘲笑する）

印性「どうも京方育は、トカク物事にふんぎりがムらぬわい。

阿佛「トいふも一つは病身ゆゑ、自然と引込思案になるのと、一つは學問の力負けで、あまりに日蓮を買被ッたものと見える。

（此時最蓮房花道へかゝッて退場の際、これと行違ひに、河原田の家臣羽黒甚作は、鎌倉より來れる大佛家の密使細見平内兵衛、並に良觀の弟子道觀を案内して出で來り、すれ違ひに相顧みて登場。羽黒先に入りてそれと通じる。牛尾先づ迎接する。一同少しく訝る）

羽黒「今日の御案内で、參上致さうと存じて居ッた處へ、計らず道觀律師のお尋ねを蒙り、鎌倉よりの珍客を御案内申して參りました。

（ト羽黒は牛尾へ耳うちして密使なることを報ずる。牛尾は隣へ、隣は隣へと耳うちよろしく態。この間に細見及び道觀、案内されて座に着く）

道觀「御一同お揃ひで御苦勞に存じます。愚僧先頃鎌倉なる師僧良觀より火急の招きに付、取るものも取りあへず鎌倉表へ參ッて承はれば、法敵日蓮、一たびは龍口で死罪と事極ッたところ、その夜障ることあッて斬り損じ其儘依智へお預けとなり、彼地に於て死罪の積りであッたが、守殿のおん館に物怪があッたり、折しも御臺所御懷姙中の故などで、今日斬る明日斬るが、つい延々となッて、武藏守殿も、上の御氣色に詮術なく、一端佐渡へ遣したる上、とにかく計らはうと、師坊へも内々の御沙汰があッた。それに就て、名越の後室はじめ、極樂寺殿後家尼御前等より訴訟の次第もムッて、此度細見平内兵衛殿、密々のおん旨を含んで當地へお越しとなり、拙僧即ち御同行申してムる。

（ト一同へ細見を紹介する）

細見「下拙が細見平内兵衛。この度殿の御内意を受けて渡海の次第は、只今お聞きの通り。承れば各々方にも、日蓮退治の御評議中とか。何分然るべく御力添を御願ひ申す。

道觀「先刻羽黒氏の御入來によッて、今日お寄り合ひと承はり。事の趣、符節を合はすが如く、悦びいさんですぐに參上いたしたわ

印性「上にも憎ま同じこと、あの不當横暴の惡ぢけもの、ど綾めれば一日の世の害。忍辱慈

性瑜「一同門良觀御坊さへ、國の爲め一切衆生の道理

攻の爲めには替へられぬと、一殺多生の道理によッて、惡僧退治をあながちに上へ訴訟申したほどの次第。

羽黑「承はれば同類も中々多く、中には上に嫉刃を研ぐやからもある様子。殊に辯舌巧みに人を惑はす術に長け、別に魔法呪術の力にてもあると見え、到る處で忽ちに渇仰者を得ると申すこと。各々方もお聞きでムらう。

印性「イカサマ前年伊東流罪の時にも、捨てた俎岩で死にもせず、剰へ地頭までも歸伏したので、近郷より一國中に夥しき歸依者が出來たと申す事。

羽黑「同類中には由緒ある文武の大小名も數ありとも申す。

細見「ソレ〳〵、太田曾谷南條高橋をはじめ、甲斐には南部、武藏には池上、御一門の中にも北條彌源太殿。

道觀「この頃彼地で聞けば、日朗を預ッて居る宿谷左衞門尉も、とう〳〵改宗して、彼れの檀越となッたと申す事。

牛尾「左樣の怪物を此儘置く時は。

性瑜「此佐渡とても危いこと。

唯阿「堂一宇もなくなる迄に。

慈道「僧一人も居られぬ迄に。

印性「坊主飢饉が來ようも知れぬ。

阿佛「何はともあれ躊躇は廢れ。シテ鎌倉よりの御内意といふは。

細見「殿より御下知の趣は、彼の日蓮事は上にも以ての外の御不興なり、又諸宗諸人の憤りも深く、惡行の段々謀叛にも超えたれば、何時でも死罪に行ふべきやつなれど、同類の蜂起を恐れ、天下の靜謐を思召され、密かに亡きものにして世の害を除くが上策と、地頭山城兵衞殿へは、別の御教書を下され、内々は拙者に仰せ含められて、何人にもあれ、手段を盡くして彼れの隙を窺ひ、人知れず打取ッて。下手人の知れぬ樣計らへとでムります。

印性「行届いた其おん下知、感服いたしてムります。扨てその奉行者は。

阿佛「誰彼れと謂はうより、それがし彼處へ走せ向ッて、唯一刀に打取ッてお目にかける。但しこの入道こッそりは致さぬ、陰謀でも巧みでもない、天地に容れざる彌陀のをん敵、誅戮するは國への奉公、かくし立には及ばぬこと。それがし立派に名乘ッて引受け申した。

細見「流石は北面の御老功。あッぱれの御勇氣感じ入りました。

印性「お任せ申して不足のない、剛勇無雙の入道殿。

阿佛「たとひ日蓮、三目八臂の通力ありとも、佛威を頭にかざし、彌陀の利劍を力として…。

一同「首尾よく彼れを。

阿佛「御念には及びませぬわい。

（ト阿佛坊立ちあがッて、太刀を取るトタン、幕）

聖典の本據

【種々御振舞御書】…《佐渡の法敵》…

佐渡の國の持齋念佛者の、唯阿彌陀佛、生喩房、印性房、慈道房等の數百人より合て僉議すと承るは、聞ふる阿彌陀佛の大怨敵、一切衆生の惡知識の日蓮房、此國にながされたり。なにとなくとも此國へ流されたる人の、始終いけらるゝ事なし。設ひいけられたれどもかへる事なし。又打ころしたりとも御とがめなし。塚原と云所に只一人あり。いかにがうなりとも力つよくとも、人なき處なれば集りて射ころせかしと云ものもありけり。（類纂四〇〇）

【窪尼御前御書】…《そら御教書》…

佐渡の國にても空御教書を三度まで作りて候ひしぞ。（類纂五八四）

第三幕（上）

佐渡新穂ノ庄阿佛房住宅

人

爲盛入道阿佛坊
同妻　千日
同　子　藤九郎盛綱
嫁　沖野
中興次郎信重
里の女　若干

時

文永八年十一月下旬前幕の翌日

處

佐渡雜太郡新穂ノ庄阿佛坊住宅

場景

二重の上の方、床の間。側に奥よりの通ひ口ありて、こゝより出入りする。正面は横、下手は庭の植込、約束の處に柴垣門、總じて田舍びたる構へ、老武人の閑居といふ心を失はざるしつらへ。門と廚の中間と覺しき邊に、實の熟したる柿の木ありて趣を添へる。門外は下手より奥へかけて、木立の間から田野へつゞく意。柴垣は下手より斜めに半圓形を描きたる如き向きにて、門も半横に構へられて、斜めに座敷の左側面より上り下りする。主人阿佛坊、子息藤九郎盛綱と對話中、幕開く。

盛綱「では、父上には、どうでも今日塚原へお越し遊ばす御決心でムりますか。

阿佛「いかにも、その決心じや。

盛綱「御老體の事。萬一の用心に、拙者をお召連れ下さる樣願ひまする。

阿佛「なに、これしきの事に。年は取ッても北面の爲盛。昔時把ッた杵柄は、めッたに狂ふまい。たかの知れた賣法坊主の一人ぐらゐ。

盛綱「それにしても、彼の日蓮の方に、いかなる介けのあらうも知れませぬ。先づ初めは法門の質疑に事よせ、篤とあたりの樣子を御見屆けの上になされては、いかゞでムりませう。

阿佛「そんな用心も無用じやが、併し俺も初は一わたり、彼れの惡見を言ひ懲らしての上にしようと思ひ居るわい。

盛綱「然らばそれがしは、前にあの邊の樣子を見屆けて參りませう。父上にはその上にて、御ゆるりお越し遊ばす樣願ひまする。

阿佛「それは其方の心まかせじや。吾等夫婦隔日の參陵も、ちやうど今日は千日が番じや。御陵參を濟さぬうちは、那處へも出ぬ。行くなら早う行ッて參れ。

（この談話中に、本間重連の家臣中興次郎、花道より出で來り、昵懇の交際とて、門より入りすぐに座敷へ通る。それと知ッて盛綱は親友の來訪を歡びむかへ、すぐに座に請じて）

盛綱「コレは中興殿。よい所へ參られた。今一足の行違ひで、それがし外出の留守になるところ。實は足下に相談したい事もあつたところ…、シテ足下には何の用事で見えられた。

（阿佛坊は中興にむかひ）

阿佛「これは次郎殿、よう見えられた。御親父清久殿にも、お變りはないかな。

中興「いつも息災で居ります。父よりもよろしく申しました。就ては早速ながら二宮御供養の歌會、今年は事にまぎれて延引いたした

が、是非にこの月の内に催す様、入道殿にも尼御前にも申上げよとの事で、参上いたしました。

阿佛「なるほど、二宮忠子内親王薨去より今年はちやうど二十三年の御忌辰、院の御崩御よりは三十年。月日は駒と過ぎて行くが、世はいつまでも直らない。濁りの中に身を置いて、都をよそに佐渡の住居も、皇陵に日參したいばッかりじや。姫宮御存生の折は、それがしも妻も、歌のお相手に册き、畏れ多くも院には直々の御指南。お蔭を以てそれがし如き武骨もの迄、卿にても敷島の道に分け入り、又此土地にも此道を嗜むものあるは、正しく故院のおん餘風じや。おもへば二十餘年の島住ひ、御歸洛の望みも絶えた憂き月日を慰めるものは、花鳥風月の外はない……、歌は配所の命であッた。

盛綱「では、父上はじめ、歌のみちは、故上皇のお仕込でムりましたか。

中興「文德高くましました上皇が、かゝる邊鄙のさすらへにも、懐ひを風月に託して世のうさを忘れたまひし叡慮のほどは、あの『都忘れ』の……おう爾う〳〵、定めし御聞きでもムらうが、その『都忘れ』の菊が、いつも秋を限りの露と消ゆるが例であるのに、今年はどうした時候のくるひでか、この霜月の寒空に、今を盛と咲き亂れた。餘りの不思議に、誰れいふとなく、世が立直る兆じやの、又此上みだれる惡兆じやのと、果ては童の謠にまでうたはれてムる。只今それがし參上の途中で、里の童の謠を聞き、したゝか憐れを覺えました。

阿佛「いかさま、そんな噂もチラと聞いた。あの『都忘れ』の菊は、忝くも陛下御在島の徒然を忘れたまはんため、都の便りに親しくおん取よせあり、畏れ多くもおんみづから、御所の御庭に造り植ゑさせられ、ひたすらに山野にまでも繁殖を計らせたまひて、名も『都忘れ』と名けさせられ、秋ごとの御愛翫に、貴き名殘を留めさせられた。それが今年は、此十一月咲き出したとは、いかにも不思議な瑞兆じや。

盛綱「善か惡かは存じませんが、花が咲くとは耳よりの噂。世が直るのかも知れませぬ。

阿佛「惡うなるのかも知れぬわい。

盛綱「では父上、餘りに遲くならぬうち、私は是より彼の塚原へ樣子を見に行ッて參りまする。

中興「塚原といへば、流人日蓮の處か。

盛綱「その事じや。

中興「俺も北方の最蓮御坊まで歌會を知らせねばならぬ。つい同じ處ゆゑ、幸ひ同道いたさう。

盛綱「それは幸の事、然らば御一所に。

（ト此時盛綱の妻沖野奧より出で來り、中興次郎に會釋し、良人が外出の支度など手傳ふ。四人の間によろしく捨臺詞ありて、二人は花道にかゝッて出て行く。あとに沖野は父をいたはり）

沖野「父上さま。昨夜のお集會に、いかう夜も更けました御樣子。定めしお疲れ遊ばしたことでムりませう。少し肩癖でも打ちませう。暫時お休み遊ばしてはいかゞでムりませう。

阿佛「いかにも少々つかれた。氣は丈夫でも年をとると爭はれぬものじや。

沖野「チトお横におなり遊ばしたがよろしうムります。

（ト入道は兩手を開いてのびをする、沖野は被ぎものを出して父に薦める。此時奧より妻の千日外出の服裝して出で來り）

千日「今日は、妾が御陵參の當番じやが。お

供の花を、一昨日お參りのかへりに、里の女にたのんで置いたが、もう持ツて來さうなものじや喃。

沖野「ホンに、此頃の時候では、青いものゝ外に別段の花もなく、毎日の事ゆゑお困りでムりませう。

（沖野は父の肩をもみながらいふ、此時下手木立の奥より、里の女若干、身體の見えぬうちから、謠の聲聞えて、段々に出で來る。垣の外まで來て謠を切る）

里の女一「おたのみの花を持ツて參りました。

同二「この頃咲出した美しい野菊じや。

同三「『都忘れ』の遲れ咲。

同四「こんなに澤山採れました。

一同「どうぞ、お供へ下されませ。

（ト手に携へ來ツた野菊を、緣端の阿伽桶へさす）

千日「これはまア、みごとな……。噂にたがはず此霜月に『都忘れ』のおくれ咲き……。

（トその一枝を把ツて、深き感慨に打たれ、阿佛房にも示して、倶に追懷の情に堪へざる狀）

千日「御覽じませ。此のまア美しう咲出でた花の姿。時候の變による事やら、但しは何ぞの瑞相か。いづれにしても吾々が身には、思出多き此野菊（ト花の一枝を熟視して深いおもひに沈みたる風情、ホロリと落涙し）故院御在世の折り、うき島守の心やりにと、菊作りのおん慰みに、妾も召されて花壇の行水など、承はツたこともある。斯くは傺い賤の業をも、おんみづから遊ばしたのは、みな憂を忘れうためのお思立。丌は此菊の名をば『都忘れ』と名づけさせられた叡慮でも知れる、それが今年はどうしてまア、此十一月に……。その吉凶はいづれにもあれ、時に取ツての手向艸……。

阿佛「御陵へのお供へには、何よりの御料じや。

千日「叡慮のこもツた名殘の花。

阿佛「御尊靈、嘸かしお喜びであらう。

（ト此時千日は、緣端から空を仰ぎ見て）

千日「どうやら雪模樣の氣色ゆゑ、降らぬうちにお詣りして參じませう。

（ト良人にあいさつし、沖野に會釋して）

千日「そんなら行ツて來ませう。時にこの娘たちには、御褒美を取らすがよい。

沖野「畏りました。みんなには、良い御褒美をあげませう。

（ト下僕をよび、阿伽桶をもちて千日の供をせよと命ずる。千日は下僕をつれて花道より出で行く）

沖野「さア〳〵、みんな近うよりなされ。お花の御褒美をとらせませう。

（ト菓子を紙にとりて一々に渡す）

里の女一「僅かばかりの花のおちんに、こんな澤山に結構なお菓子。ありがたうムります。

一同「ありがたうムります。

阿佛「時に、最前そち達が謠うた歌は、いかにも面白う聞いたが……（間）……花の咲いた事といひ、又里の童の謠といひ、定めし何かの瑞相かも知れぬ。天に口なし人を以て言はしむ。吉か凶かは計りがたいが、何ぞの敎になららも知れぬ。コレ〳〵女共、其謠を今一度唄うて聞かしてくれ。なう沖野。

沖野「いかさま、由ありげなあの童謠。殊にかはゆらしい娘たちの聲で唄ふのは天人の音樂でも聞く樣な……。さア〳〵今一度、あの美しい聲で唄はしやれ。

里の女「ハイ〳〵、そんなら唄ひませう。

（ト童女は柴垣に添うて千鳥に並び、唄ひ出す。調は今樣、二度くりかへす）

..唄..

『霜に枯れても　根はのこる。
都忘れの　菊の香を。
眞野の日出に　匂はして。
雲の上まで　ことづてん。

（此謠、初めの一回は、舞臺に在る人數だけで謠ひ、二度目の時には、かげで數人の聲を合せて、賑やかに謠ふ）

沖野「おゝまア、よう唄はれました。全く天女の音樂の樣でありました。

里の女一「今日のお花がお役に立ツて、わし等もうれしい。

同二「また今度澤山採ツて來て。

同三「花もあげませう。

同四「謠も唄ひませう。

同一「今度も御褒美を。

一同「澤山下されや。

（トいさみ立ちて、前の今樣を低く高く唄ひながら、朋輩の肩につかまりなどして、あどけなく植込の中から田園の方へと消えて行く。あとを見送ツて阿佛房は、思案しつゝ、沖野に向ひ）

阿佛「そちは、どう聞いた、今の童謠。....『霜に枯れても根は殘る』トカ....。

沖野「『都忘れの菊の香を』....。

阿佛「『眞野の日の出に匂はして』...トカ申した。

沖野「エヽ、あの...おゝそれ〳〵『雲の上までことづてん』と申す樣でムいました。

阿佛「爾うじや〳〵。その....『霜に枯れても根は...のこる』、ム、霜！　爾じや『霜を履んで堅氷至る』と聖人の格言。世の變遷もそのことわり。それからそのう...エヽと、ム、『眞野の日の出に匂はして』...日の出？...それから『雲の上』？　ハテ何人の口吟から流行り出したものか。夷曲ながらも、意味ありさうな天の聲ともいふべき童謠じやわい。

沖野「童謠といひ、花と申し、只事ならぬ何かの前相、いづれは吉い事でムりませうわい。

阿佛「此上惡ければ世は滅亡じや。思出しても身が震ふ、承久三年の七月...あゝ言ふまい....。惡運強い鎌倉には（聲を強めて）いつ、....天の罰があたることやら。

（トやゝ悲憤の感想にふける、沖野はそれと心附いて）

沖野「父上さまには、母上の御歸りまで、暫時お休み遊ばしませ。

阿佛「大分疲れた。さらば、しばし休むとしよう。

（ト枕を引よせる、此トタン、暗轉にて道具靜かにまはる）

聖典の本據

【高橋入道御返事】..（承久亂の史實）..

但し眞言の事ぞ御不審にわたらせ給候らん。何にと法門は申すとも御心へあらん事難し、唯眼前の事を以て知食せ。隱岐ノ法皇は人王八十二代、神武より一千餘年、天照大神入代らせ給て人王と成らせ給ふ。何なる者か敵すべき上、欽明より隱岐の法皇に至るまで、漢土百濟新羅高麗より渡り來れる大法祕法を、叡山東寺園城七寺竝びに日本國に崇め置かれて候、此れは皆國を守護し國王を守らん爲也。隱岐ノ法皇世を鎌倉に取られたる事を口惜と思食して、叡山東寺等の高僧等を語ひて義時の命を召とれと行ぜし也。此事一年二年ならず數年調伏せしに、權大夫殿はゆめゆめ知食さゞりしかば一法も行ひ給はず、又行ふとも叶ふ可しとも覺えず有りしに、天子は軍に負させ給ひて隱岐の國へ流され給ふ。日本國の王となる人は天照大神の御魂の入り代らせ給ふ王也、先生の十善戒の力と云ひ、爭か國中の萬民の中にはかたぶくべき、設ひ失有とも罪有る親を失なき子の怨むにてこそ候ひぬらめ。設ひ親に重罪有りとも子の身として失に行はんに天うけ給ふべしや。而るに隱岐法皇の恥に遭せ給ひしは何なる大禍ぞ、此偏に法華經の怨敵たる日本國の眞言師を語らはせ給ひし故也。（類篡五〇九）

【千日尼御返事】..（藤九郎守綱）..

阿佛上人は濁世の身を厭て佛に成給ぬ。其の子藤九郎守綱は此の跡を繼て、一向法華經の行者と成る。（類篡七八一）

第三幕（中）

黒木御所『殿居處』の場（夢）

人

左衞門大夫康光
遠藤左衞門尉爲盛
右衞門佐局
局附女房　千日
池藏人權頭淸範
下司武士　嘉平太
武士　刺客　仕丁

時

延應元年秋（後鳥羽天皇崩御の年）

處

佐渡國堂所行宮黒木御所

場景

高き二重の前側、階段を除きて全面に丸木を藤蔓にて結びたる宮殿式の高欄を設け、階段にも、同じ形式の高欄つける。上には二三段と覺しき高さの上段あり。これにも黒木の高欄を廻し、その二方に破れたる御簾を垂れ、その奧に色あせたる几帳を見せ、その先きが御座所に通ふ處といふつもり。この緣の下は山の岩石を見せ、これによせかけて造れる家のさまを示す。正面は莚をつぎあはせたるものにて仕切り、その下手に、九尺ばかりに、角格子の障子を反古にてはりたるものを建て、屋臺の下は岩組、又は木立にて、そのあたりの一面、及び殿舍近くの庭等に、花壇しつらへあり。これに野菊の花の白色なるもの栽培されあり。總じて黒木御所行宮殿居場の體。

左衞門大夫康光は、仕丁二人を指揮して、菊の手入をして居るところで、幕をあける。

康光「かなたの花畠がすんだら、こちらの方へも水を行り、枝などいたみ居らば、見苦しからぬ樣手入れいたせ。

仕一「年々からうして丹誠を致しますので、追々と殖えるばかり……。

仕二「今ではこの山の處々にも、又里の方にも此花が方々にある樣になりました。

仕一「この佐渡には全く珍しい。

仕二「いかにもみごとな菊でムります。

康光「此方が終んだら、裏庭の花壇を仕れ。但し御座所が近い故、神妙に致せ。

仕二「ハイ〳〵畏りましてムります。

（ト手桶其他を提げて上手へ消える。下手より、下司の武士嘉平太出で來り）

平太「申上げます、それがし仰せを蒙り、先づ國分寺へ參り、今日歌の會おん催しの事を申入れましたところ、住持の上人は留守だと申しまする。依てすぐに隣村の眞光院にまはり、同じく會の事を申入れましたら、これも何やら障ることがあッて參れぬと申しまする。其故空しく歸りましてムります。

康光「いづれも不參と申すか。聞けば先日鎌倉より何事か內沙汰があッたとか風聞いたす。大方それが爲めであらう。イカサマ勢ひにつく人ごころ。勿體なくも萬乘の至尊をかくむざんにも島に流し奉り、朝夕の供御も乏しく、おん傷はしや囚人の扱ひ。御歸洛の叡慮も、幾度か鎌倉へ、御沙汰あらせられても、遂に敕を奉ぜざるさへあるに、今また參殿の輩までも防ぐとは、返す〴〵も殘酷極まる

下剋上。あゝ天地も顛倒し、日月も光なき世のありさま。無念至極の事じや。

平太「御尤さまでムります。十善の王位にまします玉體が、このさすらへの侘住居。何一つ叡慮のまゝならず、朝な夕なの御不自由。何とも勿體なうて、承はるごとに血の涙を絞りまする。それに引替へ守護地頭のやからは、いづれも分に過ぎたる榮耀三昧。鎌倉方の系を引いた出家までも、侮り申すこの頃の様子。吾等とても無念でなりませぬ。

康光「勢ひにつくと申せば、最初京を御發輦の時、おん供にあてられた公卿、權大納言爲家卿、華山院少將義氏朝臣、甲斐左兵衛介範經殿と、かくいふそれがし。あとは佐ノ局と女官少々、北面の武士、總じて十人に足らぬ御供の中、二人までも裏切りのものがあッた。

平太「それは誰々でムります。

康光「シカモ歴々の身分、忠勤の手本ともなるべきものじや。一人は爲家の卿、これは始めからお見送りもせぬ。一人は華山院の少將、これは途中から病氣と稱して京へかへられた。甲斐ノ左兵衛介殿は、越後の寺泊まで來て病氣となり、御出船の後、まもなく病歿された。

平太「おもひやッてさへ心細うムります。其時の御心中恐れながらお察し申上げます。

康光「爲家卿といひ、少將といひ、お供に選ばれた人たちでさへ、かういふ浮薄の人情じや。身方でさへこれじや。まして鎌倉方の、つらくあたるのは無理もない。何事も天命とあきらめて、出來る限りの忠勤をはげみ、少しでも叡慮をやすめ奉るより外はない。

平太「それがしは、近くお召し出しになッたもの故、前の事は存じませぬが、あの爲盛様は、ヤハリ京よりお供でムりましたか。

康光「遠藤氏は院の北面として、勿論おん供の一人、世に聞えた武勇の一門、彼の遠藤武者盛遠の從兄弟で、心剛なるのみならず、忠義一途の武士。當御所に於ては、藏人並に召され、上下共に頼もしう思ひ居るものじや。

平太「イカサマ爲盛さまには、吾等も常に感服致し居りまする。

康光「遠藤氏には今朝地頭役所へ供御の事に付談合の爲め參られたが、大分に暇どれる事じや喃。

平太「今日は御會の催しもあらせられます故、もう追ッつけお歸りでムりませう。

康光「守護も地頭も、悉く鎌倉の爪牙じや。『死なば死ねかし』の待遇、何とも以て心外千萬の至り。シダガ遠藤氏の一徹氣質で、何ぞ面倒でも引き起さねば可いが（と少しく憂慮の體、猶語をついで）今日は誰も參向せぬとあれば、ホンの内輪で心ばかりの催し。遠藤氏もまもなく戻らう。千日殿にもすぐ出仕ある樣申して參れ。

平太「委細畏りました。

（ト嘉平太は下手へ去る、康光は座敷に上り、文臺を出し、料紙の用意などして、和歌披講の準備にかゝる。此時下手廊下より、局附女房千日出で來り、康光に會釋して座に着く）

千日「人少のお宮仕、萬事に就て追はれがちの事とて、この頃は和歌の催しもはか〴〵しからず。いとゞ拙きものが、ます〳〵あと戻りを致して、お恥しいほどでムりまする。

康光「みやこ在住の折は、攝家堂上の歴々も伺候して、月と冴え花と榮えるおん催しに、名吟麗句も數々あッたが、この島に來ての後は、折角のお相手とあてにした爲家朝臣は、どう鎌倉の手前をこしらへてかお供を拒み、華山院殿は途中より逃げ、左兵衛介殿はあ

はれ旅路の露と消えて、天にも地にもお相手申すはそれがし一人。あとは女性のお二人。習はうよりは慣れろの理り、遠藤氏もこの頃では、少々づつは歌もよまれる様になり、時々催す歌の會に、おもはぬ座興も、時に取ッてのおん慰み。今日は約束の人々、いづれも障ることあッて不參と申す。詰合のものだけにて水いらずの披講。此方が却てよろしうムらうわい。

千日「存じもよらず此島のおん供に加はりました身の幸ひは、おもひもかけず敷島の道にわけ入り、お蔭を以て少しは風月の心も知り、世のうきこともよそに見て、朝な夕なのお宮仕へも、足らはぬながら身のよろこびと、勇んで勤めて居られまする。これも偏へに叡慮のおんめぐみ。つゞいては貴方さまの御教導。骨身にしみて、ありがたう存じて居ります。

康光「なんの、吾等の蔭があらう。皆上のおん慈愛。憂島守のお慰みには、これにました心遣りはない。殊にこの道に御堪能の事とて、御遷幸以來は日々の御製積んで山を爲し、叡慮のたけを詞の花に咲かせて、後の世までも芳ばしき名殘をとゞめさせたまはんの聖意かと、畏れながら推し奉る。さも在まさずば、この堪へがたき苦惱をば……。

千日「凡下の吾等さへも覺えぬ憂目。これが十善萬乘のおん身に……勿體ないやら畏れ多いやら。口にするさへ憚りある此年月のうき御艱難。義時風情の我意威勢で、ようまア此樣な理不盡が出來たもの。普天の下王土ならぬ處なしと承はる。其に何ぞや、日本國中一人も、『こは捨置けず』と忠勤に走せ參ずるものがないとは、天が地となり、晝が夜となりでもした事か。あまりといへば不審の至り。どうした世の成行でムりませう。

康光「當所のみならず、本院は隱岐の島に、中院は阿波の島に、その外本院の直宮方、いづれも配流の御艱難。定めしこゝに違はず侘しきおん住居。

千日「されば、いつぞやの御製にも拜しました、『おきの方には何事かある』……。

康光「いかさま、あの御製。誦し奉るだに腸のちぎれる思ひがする。

千日「『いざさらば礒うつ波に言問はん』……。

康光「『おきの方には何事かある』……。

千日「かよふ濤路は一つでも、西と東の千萬里。

康光「おん父子遠く別れまして、同じ憂に沈みたまふ、幾十年の長い惡夢。此先きいつまで此苦みを果ぬる事か。

千日「道理も義理もすたれ果て、今にも滅する世の終りか。神も佛もないことか。隱岐にまします父帝も、定めし朝夕『此佐渡を〳〵』とくり返したまふこと、此佐渡よりも『隱岐を隱岐を』と戀ひ慕はせたまふと、同じ涙のうき年月。おんいたましとも、勿體ないとも、語ることばもムりませぬ。

（ト千日よゝと泣き沈む。康光も感慨胸にせまッて涙にむせぶ。此時遠藤左衞門尉爲盛、花道より足どり荒らかに出で來り、康光に會釋して、すぐに階下の床几に凭り、少しく怒氣を帶びたる樣子）

康光「おゝ遠藤氏。だいぶ戻りが遲いゆゑ、これにも案じて居ッたところじや。シテ地頭役所の模樣はいかな樣子……。

爲盛「言語道斷でムッた。

康光「鎌倉よりの内沙汰でも……。

爲盛「その儀はしかと分明致さねども、相もかはらず僭上無禮。畏れ多くも囚人扱ひを以て、調度の切盛りも、乏しく〳〵に進ぜ申す

段、あまりの不埒と、それがし執當の武士を說き、强か言ひ懲らしてやり申した。普天の下王土にあらざることなく、率土の濱王臣にあらざることなし。此日本國の王土に在るもの、一ひらの草、一本の木も、天子の御物ならざるものはない。鎌倉の成敗だらうが、將軍執權の下知だらうが、陛下の供御を限るの條、すでに奇怪の不臣沙汰、ましてや御料を減じ奉るなど、以ての外の次第と、理詰の示談に行かざる萬一の節は、一刀の下に切り伏せ、世の鑑末代の誡めに、不當のやつばら一人のこらず誅戮して、命を限りに斬死せんと覺悟を究めて說破いたし、漸くの事にて『新九郞田』の供御田を取り返し申してムる。

康光「それは强いお手柄じや。然し後の祟りもムれば、餘りに深入りは御無用。自然上のおん累ひともならば、忠節却て不忠ともならう。萬事は用心にぬかりなく……。

爲盛「餘りの傍若無人さに、鎌倉がたの片割れと思ふと、無體癪に障るところへ、今度の理不盡。許しがたしと存じ、敎訓かた〴〵叱り懲してムる。

康光「それは爾うと、今日の歌會は悉く不參とあッて、內輪だけの催しとなッてムる。先刻より吾邊のお歸りを待ち申したところじや。

千日「武士は兎もあれ、出家は別段世の憚りもムりますまいに。

爲盛「それも恐らく鎌倉方のさしがねでムらう。出家と申しても末世の悲しさ、大抵は權門に阿り勢利に就くやからが多く、京鎌倉の高僧智識と申すものさへ、約ね名利の奴が袈裟着た分際。況て這る邊土の痩道心！ 地頭小役人の一睨みにも堪らぬ奴原。恃みになるものは絕えてムらぬ。

（トこゝで康光心づきて）

康光「上にも定めしお待兼……。遠藤氏にも着座あッて。

爲盛「委細畏りました。

（ト爲盛は歷階して、千日を次に着座する。康光はかねて兩人より差出しありといふ歌を、文臺に載せ披講にかゝる）

康光「今日は遠藤氏を始めとし、次に千日どの次にそれがし、次に佐殿の順に披講いたしまする。

（此時一同相並んで、御座所の方にむかひ敬禮する）

康光「さらば、これより披講いたさう。

（ト康光一同に會釋し、一同も會釋して式禮中、上手の御簾うちより、右衞門佐局出で來り、上座に就いて、おごそかに）

局「御諚でムります。

（ト此一言に、一同座を正して平伏する）

局「今日の兼題二種のうち、『都忘れ』の一題は、思召によッておん取止め仰せ出され、只『故鄕』の一題のみを仕れとの御諚でムります。それに就て恐れながら、中院既に神去りまし、本院も今春御登霞遊ばせし今日、もはや京もたのもしからずと、御歸洛の望も絕たせたまひ、ひたすら故兩御院の御菩提に叡念を注がせたまひ、『都忘れ』の花も、この後は只々手向の料とみそなはすべき叡慮とあッて、

『いかにして契り置きけん白菊を
都わすれと名づくるもうし』

と御製遊ばされ、今後は此花の事を申し出す勿との御諚でムりまする。

康光「畏れ多き御諚の趣、只々感佩し奉ります。

局「倘御歸洛の御望に就ては、それなる千日、

叡慮を畏み、一千日の願をこめて荒海に身を浸し、雄々しくも苦行に誠をあらはしたる事、女ながらも抜群の忠節と、その折叡感ありて名を「千日」と召され、ます〳〵忠勤怠らぬあつぱれの女丈夫。それに左衛門尉爲盛は、忠義一途の剛のもの、永年の忠勤にその誠あらはれ、これ又叡感浅からず頼もしう思召され、この兩人は一對の忠勇、得がたき天の配劑とも思ふに付、此度格別の叡慮を以て、千日を爲盛に下し賜はり、夫婦同心していよ〳〵忠勤を勵むべしとの御諚。兩人ともありがたくおん受け申し、千代萬代の松のいろ、みどりいや濃き至誠をあらはし、大御心を安んじ奉る樣、妾からも望みまする、康光どのにも諸共にお悦び下され……。

康光「かたじけなき御諚の趣。當人たちは申すに及ばず、吾等も深く天恩のありがたきことを感銘仕ります。遠藤氏も千日殿も嘸かし滿足におぼさう。

爲盛「思ひもかけず、身に餘るおん惠み、只々叡慮を畏み奉るの外、一言も厶りませぬ。

千日「數ならぬ身の御奉公、何の御役にも立たぬ不束を、おんとがめもないのみか……、かくまで人がましう御心つけさせられ……、山海の御恩命……、つゝしみて……御諚を……かしこみ奉りまする。

（ト千日は雄々しき中にも、恥かしきこなし。伏目がちに、且つ辭もきれ〴〵に、やツとの事で、それをいふ）

局「兩人お受けの上は、その由を奏上いたしませう。次におん待兼の詠進。定めしよき歌もありませう。續いて御披講なされませい。

（ト康光即ちうなづいて、文臺の前に坐し威儀を整へ、局をはじめ一同へ會釋して）

康光「然らば御諚に從ひ、今日『故郷』の一題のみを披講いたしまする。

（と文臺の懷紙をとりあげ）

康光「披講の順は前きに申した通り……。御題は『秋日おほせごとを奉じて故郷といへることを詠ずる和歌』！　左衛門尉爲盛！

「君まさばこゝも都とおもふにぞ
　我故郷は戀しくもなし』

（ト一通り讀み終り、更に音調を整へて）

「君まさばこゝも都とおもふにぞ」

（ト讀みあげ、下の句をよみ出でんとする時、下司の武士嘉平太はしり出でて、あわたゞしく）

平太「ハ、申上げます。

爲盛「何事じや。

平太「只今地頭役所より武士一人參り、申しまする樣は、隱岐の島より遙に當御所へ參候の由にて、内藏人權頭池清範と申す京方官人、鎌倉殿よりの下知によつて、こゝへ御案内申したと、其公家衆をおつれ申して參りました。すぐにこれへお通し申しませうや。

康光「隱岐より……？

爲盛「池藏人どのが……？

局「あの隱岐より……清範どのが？

康光「おもひがけない珍客ぢや。すぐにこれへ御案内申せ。

平太「畏りました。

（ト嘉平太取ツてかへす、あとに三人思案とりどりに）

康光「たえて久しき清範殿が、思ひがけなく此島へ……。

局「隱岐よりのおこしとは……氣にかゝる。

爲盛「ハテ何事の。

千日「おはしてやら。

（此時嘉平太先に立ちて案内し、池藏人權頭清範、年齢四十七八、仕丁兩人

に小唐櫃を持たせて花道より登場。一同に迎へられて着座。仕丁は階下まで唐櫃を持ち來る。爲盛これを受取りて座に据ゑる）

康光「絶えて久しき御面會、御健勝よろこばしう存じ上げます。シテ珍しき御來島…いかなる御用で。

清範「何からお話し申さうやら。先づ當春法皇御崩御の事は、その折すぐさま特使を立てさせ、おん知らせ申した通り、承久以來永々の配所住居、言語に絶した朝夕の御艱難、全くの罪人扱ひ、何とも畏多い日夜の御憂悶。京都はいかに、佐渡はどうある、阿波はどうしたと、日ごと夜ごと拜承するだに身を斬らるゝ思ひ、苦悶の中に今日と過ぎ明日とくらして、勿體なや玉體日に〳〵弱らせたまひ、遂に二月二十二日といふに、かへらぬ大御幸となつて、天に哭し地に歎いても及ばぬ悲みに、供奉の面々も泣く〳〵配所を引上げはしたものゝ、憂侘住居のあの島も、久しう起臥に慣れては、御座所の名殘りの床しさに、殘つて御菩提を弔ひ奉るものもあり、京にかへりて遁世するもあり、心ばかりの心喪もホンの供奉の輩だけ、兩六波羅も鎌倉も、諒闇の愼みさへ爲さざる不臣の振舞。陪臣國命を執る國の殃は、何とも以て悲憤の至り。

康光「御述懷逐一御尤も。これにも同じ憂悶に日を送り。日夜悲憤の涙にくれて居りまする。法皇御崩御の事も、數月すぎて、事の序に知せて參ッた始末。よろづの事全く以て言語道斷でムる。

局「上を上とも思はぬ振舞に、齒をくひしばる悲歎の袖、くやし涙のしめりがちに、永の月日を送りました。

千日「萬乘の君を、かくまでに苦しめ奉る、大罪の末は、いかなる罰があたることやら。

爲盛「天地顚倒の世とは今。日月地に墜ちたとは此日本。見るごとに、聞くごとに、無念は骨に透るばかり。

康光「シテ隱岐の御座所は、どういふおん光景で。供御の御樣子は？

清範「お話し申すも涙の種。承久三年七月六日四辻の御所より鳥羽殿に遷りたまひ、八日におん薙髪の上、おん名をさへ良然と改めさせられ、ひたすら關東に對し、わびたまへる叡慮には耳も假さず、その十三日といふに、武士夥多甲冑物具いかめかしく、有無を言はせず、理不盡に隱岐の島へ流し奉り、供奉の官人女官六七人の外は隨身を許さず。おん舟島に着いて、苅田の御所に入らせられた。その御所の模樣は、海邊より少し引入ッて山峽に、大なる岩石のそばたちたるを便りに、松の丸木を柱と爲し、葦で葺いた廊下、賤が伏屋といふ程らひ、見渡す限りの大海原に、二千里外の濤の音、はても知らぬ歎きの耳を驚かして、夜もろく〳〵におん夢も結ばせたまはずとて、或る時の御製に、

『我こそは新島守よ隱岐の海の
　あらき波風心して吹け』

と遊ばし、拜聽のともがら、いづれも同じ涙にくれ申した。今見受ければこの御所もいづれ劣らぬ侘住居。いかなれば斯く、おん父子御兄弟、處は違へど同じ憂へに世をはかなみたまふ、配所の御艱苦。

康光「中院おん事は、鎌倉も其まゝにと申上げたるところ、父帝が島にいまして、朕のみ京に安く居るに忍びずと、御自身より申出させたまひて、土佐へ御遷幸。かく三柱まで、遠島に流し奉ッた鎌倉の捌は、日本開けてためしなき横暴、大逆といふも餘り

ある、前代未聞の罪悪を、一人として意にもとめざる世のあり様、あまりといへば不思議千萬。

千日「本院中院おん二方、すでに神去りました今となッては、いとゞ叡慮におん歎きを増し給ふ、其朝な夕なを拜し奉ッては、身も世もあらず思ひまする。

爲盛「あの間あたりの、北條一門！

（ト此時康光及び千日、爲盛に注意して、あたりに氣をくばる風情）

康光「靜かに！

千日「壁に耳ある世の習ひ。

爲盛「……八裂にして、肉を食ッても飽足らぬ奴原！

（切齒憤慨の極、悲壯の涙にくれる。他の四人も相顧みて落涙のこなし）

局「シテ清範殿には、何ぞ格別の用事でもあッて、此島へは渡らせられましたか。

清範「實は法皇の御遺品獻上の爲め。

局「ナニ御遺品？　そのおん品は……。

清範「朝夕御手澤の、琵琶と簫……。

局「それはまア、何よりのおんかたみ。嘸おんなつかしう、御愛玩遊ばされう。

康光「六波羅や鎌倉か、能く御渡海を許しましたなア。

清範「されば、其儀に付ては再三六波羅に申出で、法皇の御遺品傳達の爲め下向といふことで、辛く許しを得申した。若しも此御遺品が外の品であッたなら、どうむづかしく祟らうも知れぬ。幸ひ物が樂器ゆゑに、彼等の疑も掛らぬと見えてムる……。此二品實は御遺命ではなけれど、日夜の御徒然を慰め奉らんと、京なる承明門院のおん方より、竊に獻上申した此琵琶と簫。これを朝夕無二の友として御愛翫遊ばされ、崩御の前に小臣に賜はッたのを、父帝のおん記念とも御覽ある樣と思立ち、此度此島まで持參して、獻上申上げたる次第。然るべく御奏聞おん願ひ申す。

（ト唐櫃より、琵琶と簫を取り出して、恭しく康光等に示す、一同拜見してなつかしき感ありて見入る。康光感悦して）

康光「父法皇の御手澤品とあるさへ、世にありがたきおん片身。まして上にも御堪能にまします琵琶の琴。此上もなき貴の品々。定めし御滿足の事でムらう。

千日「お局さまは、簫の御名手。花のあした月の夕、よきおん慰めの御料。時にとッての百萬の身方。定めしおんよろこびの事と存し上げます。

康光「佐樣！　清範殿の心づくし。片時も早く御座所へ。シテ、隱岐の行宮に仕候申した內藏人權頭藤原ノ清範、天氣おん伺ひのため參內の旨、これまた宜しく御奏上を願ひまする。

（ト佐ノ局うなづき、一座に會釋して）

局「それでは、妾は御座所へ、此御遺品を……。

（ト千日に目くばせで知らせる、千日は心得て、その內の琵琶を取ッて起つ。局は簫を持つて）

局「康光殿には妾にかまはず、御披講を……。

（ト特に藏人清範に會釋しながら）

局「清範殿にも、此間に御詠進なされてはいかが。

清範「幸ひのおん催し、それがしも腰折一首獻るでムりませう。

（一同かしこむ。この間に佐ノ局は先きに立ち、千日は後に從ひ、肅々として御座所さして立去る）

康光「シテ、清範殿には、御遺品獻上の後はいかゞの御進退……。

清範「法皇御昇天の後は、出家いたして御菩提をとも存じたが、イヤ〳〵佐渡が島には、新院のおん侘住居。かしづく人も少くて淋しくましますおんありさま。島になれたる此身には、京の榮花も望みなく、このまゝ此處に册き奉らん存意。方々にも宜しくおん引廻しを頼み奉る。

康光「それは何よりのおん事。今の時に一人の身方は百千人の力とも存ずる。

爲盛「權頭どの御伺候によりて、さしづめ吾等の便宜と申すは、御所內の手少のため、爲盛專らに外を警衞いたし難く、近ごろ不安に存じ居るは、折々怪しきもの御所の周圍を徘徊いたす、油斷ならぬ昨今の樣子。例の鎌倉の廻しものなるやも計り難く、用心はいたしてムるが、御內に一人を增す時は、爲盛これより外面を護り、萬一に備へ申し度、誠に幸ひの儀と存じまする。

清範「不肖ながらそれがしも身命を捧げて、御奉公いたす所存。

康光「鎌倉の理不盡は今にはじめぬ事。近來わけて不當の振舞多く、奇怪千萬の次第でムる。

爲盛「設ひいか樣な毒の牙も、爲盛かくてある以上は、滅多に指でもさゝせる事ではござらぬ。

（ト此談話の最中、千日は御座所の方よりすべり出でて着座する）

千日「折からの獻上品。ことの外の御滿足。詠進果てなば、清範を召せとの御諚でムりました。

（一同平伏する）

康光「千日殿復座の上は、先刻につゞいて披講いたさう。事にまぎれてムるゆゑ、今一度はじめより（ト一座へ輕く會釋して）『秋日おほせごとを奉じて故鄕といへることを詠ぜる和歌』！　左衞門尉藤原爲盛！

『君まさばこゝも都とおもふにぞ
我故鄕は戀しくもなし』

（ト讀み繼がんとする時、千日、爲盛、一齊に聲せはしく）

二人「ヤ、、曲者！

（ト叫ぶ、此時下手廻廊より一人、上手高二重の緣下岩組の處より一人、各々黑裝束に小具足覆面したる曲者、座をめがけて飛びかゝらんとす。下手よりの曲者は、手近の千日執ッて押へ）

千日「なに奴じや。

（ト膝に組敷き、懷劍を引き拔いて身がまへる。上手の曲者は、爲盛の投げたる小柄に刺されて倒れる。爲盛疾風の如く飛下りて、曲者を捉へ、これも膝下に組伏せて、聲もあらゝかに）

爲盛「ちよこざい千萬な曲者。爾は何ものじや。

康光「扨ては刺客！

清範「油斷のならぬ！

爲盛「何これしきの蛆蟲ども、おかまひなく御披講を……。

康光「左衞門尉藤原爲盛。

爲盛「……『君まさばこゝも都とおもふにぞ』……。

千日「……『我故鄕は戀しくもなし』……。

（ト高く吟ずる。此トタン恰も御座所の方にあたりて、簫の音おこる）

爲盛「おゝ、あれは御座所の……。

（つゞいて琵琶の音起る）

康光「おゝ、上の……。

（ト一同も肅然、康光清範は御座所の方を、爲盛千日は曲者を組み敷いた儘低頭して）

一同「ハヽア……。

（琴曲洋々のうちに、暗轉にて道具廻る）

第三幕（下）

同じく返し

元の阿佛坊住宅

（藤九郎盛綱は、外面より歸り來る。此時妻の沖野も奥より出で來りて迎へる）

盛綱「父上には御寢なッたか。

沖野「先刻より御寢遊ばし、心持よささうにお鎭まりでムります。

盛綱「母上には、既にお歸り遊ばしたか。

沖野「ハイ、あの今少々先にお歸り遊ばし、雪途で難儀したと仰せられ、只今お召替遊ばしたところでムります。父上さまには、母上御歸宅あらば、すぐに警眠せよと仰せられましたが、あまり熟うおやすみ遊ばしてでムります故控へて居りました。シテ塚原の樣子は、どんなことでムります。

盛綱「御老體の一徹に、御氣は丈夫なり、お身體も堅固にはおはすものゝ、萬一の事あッてはと思ひ、竊かに彼の周圍をしらべ、殘りなく吟味致したが、何も氣づかひは要らぬ樣子。彼の日蓮唯一人、例の三昧堂にうづくまり讀經などして居る樣子に、安堵して歸ッて來た。

沖野「それはまア安心いたしました。最前も堅くあれほどに仰せられましたから、母上のお歸りを申上げねばなりますまい。

盛綱「アヽ申上げよう！

（ト盛綱枕頭に近く）

盛綱「父上。只今歸宅いたしました。それに母上も既に御陵參よりお歸り遊ばしてムりまする……父上！

（ト此時、屏風の中に、聲ありて警眠の樣子、沖野は屏風を除く）

阿佛「おゝ、そちは盛綱……然らば今のは夢であッたよな。

（幕）

第四幕（上）

塚原三昧堂場

人

日蓮上人
爲盛入道阿佛坊
妻　千日
一子　藤九郎盛綱
農民　兵四郎
同　娘

時

前幕と同じ日の午後

處

佐渡國塚原の三昧堂

場景

雪中の平野。舞臺中央より少々上手にかけて、小高き丘（平舞臺より約三尺位の）ありて、其中央に一間四面の三昧堂（俗にいふ湯灌場）の廢堂あり。軒傾き四壁なくして屋根も崩れてある。そこへ雪が積ッて、わら葺の端の不揃ひなるさまを顯はし、そのあたりは木立まばらに、その間に墓石所々に在り。うしろの方にも大木の木立ありて、こゝにも卵塔見える。總じて京都の蓮臺野に似たる戸陀林の體。堂の前面にも二三本小さき木立。堂の隅から下へかけて、ゆるき坂道のこゝろ。左右に木立。その

路面も木立も墓石も、悉く雪の積りたるところ、すべてに亙りて雪布を敷く。此三昧堂の中に、日蓮上人端坐念誦して在り。其前に立像の釋迦佛と法華經十軸（卷軸の經典）が雪で固めた壇の上に安置せられ、その隅の方に「負笈」と「三衣袋」に「一杖」などの調度二三見える。上人念誦回向の最中、幕あく。

上人「南無久遠實成本師釋迦牟尼佛、今此三界は皆是れ吾が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾子なり、而も今此處は、諸の患と難と多し、唯我一人のみ能く爲に救ひ護らん。一心欲見佛不自惜身命時我及衆僧俱出靈鷲山。大慈大悲大哀大慇大恩報謝。

（ト回向し終ッて、瞑目合掌しばらくありて、釋迦佛を三拜したる後、徐に外面をのぞき見て、獨白）

上人「朝がた歇んだ雪が、又降り出しさうな。北山おろしのひまなき寒風。鎌倉の氣候とは、かうも違ふものか。積ッた上に又積ることの寒冷は、一切衆生の罪業にも似て解けがたい。さるかはり、野山も路も一面の銀世界は、又平等大慧の佛境界とも見えて心地よいながめじや。十月十日に依智を發足ッて寺泊より此島に着き、住むに家なき流謫の身。この三昧野の尸陀林は、死人を棄つる洛陽での蓮臺野。「天下の邪魔もの、活きた死人」の捨どころには、ちやうど適いところじや。此荒堂の家根は破れてあるが、恰も雪が降り積んで家根を補ひ、壁は落ちて寒風ひまなけれども、時に月光を入れて燈のかはりとすれば、結句は住むに事かゝず。かゝる處に雪を積みて壇と爲して、所持し奉る立像の釋迦牟尼佛を安置し參らせ、晝は經典を讀み奉り、夜は唱題に觀念に、心ゆくまで修行の出來るは、これ禍の生んだ幸ひ、毒を變じて藥と爲す法華經の妙益。尊いことじや。……おゝ、其にしても、鎌倉に居る弟子檀越が、かゝる自受法樂の法悦を知らず、定めて日蓮が身を案じて居らう。且つは安心のため、且つは敎訓のため、消息一通を……遣らじや。

（ト此時調度の中より旅硯をとり出し、木立の中の泉を汲まんとて、堂を出で水を硯に入れ了りて、堂の横なる前面に立ちて、再び述懷の獨白）

上人「此經を說かんが爲めに此諸の難事を忍ばん。我れ身命を愛せず、但無上道を惜む。……弘長元年には伊豆の流罪、今茲文永八年には此佐渡が島へ、流罪すでに二度に及ぶ。法華經には末代に此經を弘めんもの、必ず惡口せられ、打擲せられ、斬られ、殺され、又數々見擯出！ しば〳〵擯出とあッて、數々流罪に逢ふと經文分明に說かせられた。今日蓮は二度の流罪、數々の二字を身に讀んだ。經文は反古でない。此末來記が、かく符合する上は、此法華經が如來の本懷といふ事も、此法華經が衆生成佛の要道といふ事も、共に疑ひなき道理顯然。加之末法に法華經を弘むるものは、末代の導師上行菩薩じやといふ事も、いよ〳〵以て疑ひない。吾身かく法華經の鏡に浮べる上は、一閻浮提の救ひの主、日本國の柱たるべき大任も、いよ〳〵此身の上となッたか。敎主釋尊のおん魂わが身に入り代らせたまひて、凡身即佛の一念三千、正しく身に讀むありがたさ……。

（ト雄大莊嚴の姿勢に、深い感慨にふける偉人の態度、餘韻つきざる風情のところへ、上手木立の墓所の中より、農民兵四郎、身に蓑笠を被て十三四歲の少女の

手をひき、堂の前へ出で來り、上人を見て、いぶかしげに）

兵四「おゝ、これはどこの御出家さんじややら。この三昧堂に住んでムると見えるが、それでは、噂に聞いた、あの、鎌倉邊から遠島されてムッた御出家といふのは、こなたでムッたかなう。見ればこの寒氣に、戸障子もない荒堂の住居。嘸お寒いことであらう。

上人「察しの通り、俺は鎌倉から此島へ流されて來たものじや。こなたは此あたりの農家と見ゆるが、見受ければ少女をつれて、此雪の中、墓參にでも見えられたか。

兵四「ハイ、左樣でムります。此中配偶を亡くしまして、今日がちやうど三十五日。此娘があけても暮れても、母よ〳〵とばかり申しまして、泣いてばッかり居りますので、初めは初日二ヽの墓へ伴れて參らせましたが、初七日の頃から、私も看病疲れか何かで、どッと床に就く樣になり、それから墓參りも致しませなんだ。やッと病氣も全快いたしましたので、餘りこれが歎きますゆゑ、雪はふりますが、三十五日の墓參りを致したところでムります、ハイ。

上人「それは[illegible]な事である、少女の母を慕ふもふびん。又こなたが配偶を亡くなされた悲歎の上に、娘の母を戀しがるを見るに付けて、亦一層の歎きを增す、いはゞ二重の悲みぢや。御愁傷お察し申す。さりながら生あるものは必ず死す。王侯の尊貴でも、如來聖人でも死は脫れない。又別れを惜むは人情の當然じやが、只何の目安もなく悲むのみでは、自分の性情を傷ふ害はあッても、それが却て死者の爲めの何にもならぬ、畢竟徒らの歎と申すもの。それよりも其やるせなき悲みの心を、菩提の道に轉じて、死者の冥福を祈らるゝが、死者に取りては何よりの力じや。

兵四「ありがたうムります。今日は圖らず子にひかされた墓參りに、あなた樣に御目にかゝり、尊いお話を伺ひました。これで墓參をした甲斐があると申すもの。さうしてどういふお咎めか存じませんが、貴方樣は此島へ、いつ頃おいでなされました。

上人「此十一月のはじめに着きました。俺は法華經を弘めて世を救はうといふ願を立てたものじや。世間はそれを仇におもうて俺を罪に陷した。俺は其が修行になッて佛道が進む。[illegible]で、俺は此佐渡へ佛道修行に來た。讒言の輩も、非道の役人も、俺の爲めには恩人じや。俺は遠島されても流人ではない。生きて還れぬ佐渡が島も、俺の爲めには修行の道場。身を斬るばかりの軒の氷柱も、さながら天宮の玉のすだれじや。こんな果報は求めても得られぬことじや。

兵四「シテ、此荒堂に、唯お一人で‥‥。

上人「供のものは、寺泊から返した。こゝには本師釋迦佛と御弟子の俺ばかり。『朝々佛と共に起き夕々佛と共に臥す』と古人の言を現にした、人も羨むべき今の境界。

兵四「それはまア、貴いおン覺悟。吾々の思案とは雲泥の相違でムりますなア‥‥。

（ト兵四郎は空を仰ぎ見る。此時雪チラチラ降る）

兵四「おゝ小歇の空も又降り出して來た。子供をつれて居りますから、そんなら是でお別れ申しませう。‥‥シタが、此寒空に、失禮ながら召物が甚う薄い樣にお見受け申します‥‥嘸お寒いことでムりませう（ト少し思案して）エ、是は誠に失禮ですが、私は家もほど近く、ホンの一走りで參られます故、汚い物ではムいますが、一寸な時の鼻こすりやら、此簑と笠を差上いたします。吹雪を防ぐ補にでも、

お召しなされて下さいませ。
（ト着て居た蓑笠をぬいで、上人にすゝめる）

上人「それは御厚志かたじけないが、俺は着物が薄うても決して寒くはない。こなたは病後じやと申すに、歩行に難儀をしてはならぬ。思召は受けるが、それはこなたが着てかへられたがよい。

兵四「こんな汚いもので、強てとは申し兼ねますが、實は今日の忌日に、せめて此娘の母の追善にと存じて、外に持合せもムりませぬゆゑ、雪を見て俄の思付、お恥しながら供養の志、妻が菩提のため、どうぞお受け下さいませ。

上人「左樣か。さういふお志ならば、受けもしようが。時に爾は何の宗旨じや。

兵四「家が貧乏で、歸依寺もなく、生れつきが頑固ゆゑか、此邊の出家たちには、一人もありがたいと思ふものがなくて、何と定ッた宗旨もムりませぬ。

上人「さらば、俺は法華經の行者じやが、こなたは俺を信じなさるか。

兵四「何かは知らず、先程の御教訓、骨身にこたへてありがたく存じます。貴方樣がその法華經で、御修行の序にでも、一言の御回向下さらば、此上もない仕合せと存じます。

上人「然らば、よろこんで御供養を受け申す。
（ト兵四郎のさし出す蓑笠を受け取る、兵四郎は子供を促して歸りかけて、娘にむかひ）

兵四「このお上人さまが、ありがたいお經で、かゝさんををがんで下さるさうじやで、よくお禮を申せ。

娘「お上人さま、ありがたうムります。

上人「あゝ、俺は今、お前の爺の蓑笠を着て、お前がたに代ッて、お前のかゝさんを救うてあげますぞ。よう參られた、神妙な少女じや。

兵四「左樣ならばお上人さま、これでお別れ申します。隨分寒さをお厭ひなされませ。
（ト兵四郎は丁寧に一禮して、娘の手を引いて、上手の卵塔場の森林へと立去る。此うちに上人は受けたる蓑笠を着て、堂に入ッて中央に坐し、端然合掌、しばらく念誦の上）

上人「女姓亡靈頓證菩提！　南無妙法蓮華經！
（ト回向終ッて、更に恭しく釋尊を一拜の後、嚴然たる姿勢端正に）

上人「日本國の一切衆生、其の苦みを受くるは悉くこれ日蓮一人の苦み。良藥は口に苦く、忠言耳にさかひて、國を救はんとする我れを怨み、流罪死罪を以て法華經の行者を苦しめ、我れと我が國の柱を倒すあはれさを思ふにつけ、その行末を救はずば、本化の慈悲も甲斐はあるまじ。いざ吾國の現在未來を救はんため、法華三昧の修行を……(間)……南無本師大覺世尊！　國の亂れを救はせたまへ……
（ト經卷を頂禮し、徐に繙讀して、音吐朗々、勸持品の偈を讀誦する）

上人「濁劫惡世中。多有諸恐怖……我不愛身命、但惜無上道。
（のところまで讀み來る時、花道より、爲盛入道阿佛房輕裝して、雪よけの冠りもの（わら帽子の如きもの）を被て、雪を履みしだき、ひそかに窺ひよる、坂みちの木立半ばまで、ツカ〳〵と奮進し來り、この處にて急に體をひそめ、中の樣子をうかゞひながら、耳を傾けて經文を聞居り、幾度か闖入せんとしてはためらひ、決意して驀進せんと氣構へては、

又經文にきゝとれる態度よろしく、此間寄盛にふる。トゞ上人讀經のきれめに至ッて、人の氣色あるを察して、外面に目を注ぐ時、阿佛房は我にもあらで進みよりて、聲もあら〳〵しく）

阿佛「讀經のお僧にもの申す。おん身は鎌倉よりの流人日蓮か。

上人「いかにも日蓮じや。さういふおん身は誰れじや。

阿佛「俺は此地に年久しく、念佛の修行に餘念なき、元は新院の北院に侍るものとありと知られた、遠藤左衛門尉爲盛。新院御崩御の後は、ひたすら御墓の苔を掃ひつゝ、御菩提の念佛を一生の業とした低禪門の阿佛房と申すものじや。今日少し尋ねたい仔細があッて、ワザ〳〵參ッたのじや。

上人「阿佛房と申さるゝか。何なりとも尋ねなさい。日蓮が身にかなはんほどは、いかにも不審を晴らして得ささう。

阿佛「承はれば、おん身は念佛の教法を地獄の業因と罵り、諸宗諸佛を無得道と誹られるさうじやが、全く左樣か。

上人「いかにも爾うじや。

阿佛「ナニ爾うじやと。然らば汝は阿彌陀如來、の怨敵、諸宗諸佛のあだがたきじや。仔細によッては容赦はならぬ。（ト氣ごんで太刀に手をかけ、つめよりながら）その次第を承はらう、さア聞かう。

上人「よく尋ねさせられた。此地へ來ての初談義、最初解脱の第一人、こなたは仕合せものじや。問はるゝ所はいづれが趣意じや、諸宗を破るそれを問ふのか、念佛を破するそれの事か。法門次第あり、理義詮を別にす。一つづつかたづけよう。どれから尋ねる、みづから擇びなさい。

阿佛「然らば、先づ現在弘まる八宗九宗を無得道と申さるゝ、その筋目から聞かう。

上人「それが順じや、よう擇ばれた。それに就て先づ一往念を押す事がある。外ではないが、おん身は八宗九宗の教法を釋尊の教と思ふか、開山祖師の教とするか。いづれに考へらるゝな。

阿佛「いふまでもない、佛の教じや。それを世に傳へられたのが、諸宗の祖師先徳じや。

上人「然らば、其祖師が釋尊の御意に背いた時は、汝何れに屬かるゝな。

阿佛「釋尊に背く祖師といふが、どこに在る。馬鹿なことを言はッしやるな。

上人「それではおん身は佛法者でない。隨ッて佛教の沙汰は全くの不案内。此上は只俺が教へて進ぜるばかりじや。心を鎭めて聞かれよ。

阿佛「何でもよい、早く申せ。

上人「こなたは今、何といはれた。佛教諸宗は皆釋尊の教と申されたではないか。然るに諸宗は悉く釋尊の教に背いて居る。

阿佛「悉く？

上人「爾うじや、すべてじや。

阿佛「どう背いて居る。

上人「いづれも法華經を用ゐないから。

阿佛「それが、どうしてじや？

上人「されば、釋尊一代五十年の說法、初め華嚴經より、阿含、方等、般若と四十餘年の間、衆生の機根を調へんため種々の教法を說かせられ、最後に出世の本懐たる法華經を說きたまひ、萬機群類を一時に成佛せしめたまふのみならず、末代濁世のために、別して此法華經を留められ、本化の菩薩に弘通を附屬し、衆生得道の要、唯これに限ると教へられ、四十餘年の經々は未顯眞實の方便教と榜示をうち、『是故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずること能はず』と決

し、但法華經のみを以て世を教へ、人を導くべしと誡められた、『乃至餘經の一偈をも受けざれ』の現文、日月の如く明かに、泰山の如く動かざる、この金言を反古にして、或は華嚴經を、或は解深密經を、或は大日經を、或は觀經阿彌陀經を、或は般若經を、先師先德おのが意樂にまかせて我意を立て、『法華經ならで、末法の教法はないぞ』と示された佛誡に背いて、いづれも法華經を用ゐざるが論より證據の佛誡違叛。これ眞赤な謗法でないか。謗法ときまれば、その成行は俺が別段詮議せずとも、經文すでに『若人信ぜずして此經を毀謗せば則ち一切世間の佛種を斷つ、乃至其人命終ッて阿鼻獄に入る』と分明に地獄の業と說かれてある。日蓮に別の才覺はない、只經文の表にまかせるのみじや。阿佛房賢なりといへども、經文を造り直す力はあるまい。これでも諸宗は佛の教どほりと申さるゝか。

阿佛「經文はとにかく、諸宗の祖師はいづれも智德すぐれた明匠、まさかに經文のよみ違ひもあるまい。

上人「經文はとにかくとは何事じや、佛涅槃經に末代の教徒を誡めて、『法に依て人に依らざれ、智に依て識に依らざれ、義に依て語に依らざれ、了義經に依て不了義經に依らざれ』と四依の教誡を垂れさせられ、人師を主とせず佛を主とせよと教へられた。佛あッての祖師先德じや。兎の毛ほども佛の意に背いた時は、何なる智識明匠でも、それは佛の敵じや。謗法の罪人じや。あながちにこれを破するは、諸人の迷ひを救はんとする慈悲の叫びじや。佛を信じ人をあはれむ菩薩行として、かゝる大事が捨置かれるか。日蓮不肖なりといへども、心に一點の私なく、只々佛の金言を信じ、佛の御意に從ひ、經文にまかせて權實二經のけぢめを明かにし、佛法の光をもりかへして末代の闇を照さうと、身命を捨てゝ國を護り、一切衆生を救ふために、此義を弘通する次第じや。

阿佛「聞けば道理にも聞えるが、利生方便の念佛をも、無間の業といはるゝ事、甚だ以て不審の至り。念佛の勸進は、善導法然等、念佛の先德耳ならず、天台傳教慈覺慧心等法華弘通の先德さへも、念佛を或は行じ或は勸められたるは、御坊も承知であらう。さすれば必ず念佛門徒の私とは謂はれまい。かたぐ以て聞捨ならぬ誑惑の言。確と此義を承はらう。

上人「念佛の可否は第二に置かう。先づ法華經を信ぜざるの條、明かに佛敕違背じや。方等權教の念佛を以て、法華一乘の經王をさみするは、臣下を尊んで王位を輕しめる下剋上。今の鎌倉殿と同じことじや。善導は末法に法華經の利益は、『千の中に一つも無し』と貶し、法然坊は『法華經を捨てよ閉ぢよ閣けよ拋てよ』と言はれた。信ぜよといふ釋尊に就くか、捨てよといふ法然等に就くか。順逆の進退は此二つじや。おん身はどちらに就く氣じや。

阿佛「法華經は尊けれども、末代の機根が堪へぬゆゑに、念佛の一門を開かれたものと承はる。さすれば經は捨てても、心は一つではないか。

上人「法華經は末代の衆生の爲めに說かれた經で、その旨經文に明白じや。若しも末代の機に當らぬものならば、なんで佛が勸められう。前にも申した依法不依人。末法の鏡は經文じや。經の文義に背いた所立は、何人の義なりとも魔の言說と知れとは、これ亦涅槃經の御遺言、佛弟子たるもの、堅固違背はなるまい。

阿佛「然らば天台傳教慧心等の法華の先哲が、念佛申された仔細はいかに。

上人「さては、法然の念佛に就ては、其疑すでに明瞭いたされたと見える。天台傳教兩大師の事は、「以偏助圓」と申して、念佛を方便引攝の一門に備へられたのみで、これを正意とは致されもせず、又それが爲めに法華經を捨てよとも申されない。法然の念佛とは全く類が違ふ。慧心僧都が「往生要集」を書いて念佛を勸進されたのも、此「以偏助圓」の道理による。故に後年別に「一乘要訣」と申す書を記いて、法華經正意の由を申しのこした。法華經を捨てゝ念佛せよとは、いづれの文にも一句としてない。名は念佛でもお門が違ふ。學問されぬおん身には、深い仔細は解るまいが、理の當然は爭はれまい。どうじや得心が參られたか。

（ト念を押されて、阿佛坊ははじめの擬勢に似ず、少し意外だといふ感じ）

阿佛「さらば天台大師慧心先德の勸められた：其念佛：：それを信ずるのは、あながち謗法とは申されまい。此義はいかゞ。

上人「それは、「像法」といふ過ぎ去ッた時代の爲めに殘された指南。今は末法の時じや。末法は末法の機があるから、それに應ずる末法の教がある。教機時國少しも相違すれば、利生も得益も全く無くなる。去年の暦じや、昨日の食じや。正法千年には正法の教、像法千年には像法の教、正像二千年は既に過ぎて、今は末法に入ッて二百二十年。純圓一實の法華經廣宣流布の時。『閻浮提内無令斷絕』の金言。『日本一州圓機純一』の指南。此時此國此人に、掛替のない唯一の教は法華經なりと說かせられた、佛の金言を反古と見るか。

（ト阿佛坊は漸く得心の態度にて、猶）

阿佛「法門の得失は、段々の御理解に少しく得心も參ッたが、御坊のいはるゝ所、餘に荒氣、聊か廣言に類したかと思はるゝ節もあり、猶疑念のかども尠くない。念佛を謗法とし謗法を地獄とするの義は、經文に證據ある上は爭ひもなるまい。然るに之を國賊と貶し、亡國と罵るは、經文に證據ありていふか、或は只の惡口か。念佛並びに諸宗を信じて、いつ國が亡びたといふ確たる證據があるか。此義を確と承はらう。

上人「經文の證據は先きに擧げた、「其人命終入阿鼻獄」。「阿鼻」とは梵語、此に無間といふ、即ち無間地獄、此上もない極苦の地獄、并は此上もない罪といふ目安じや。地獄の因は上品の貪瞋癡三毒と申して、貪りと瞋りと愚癡の三つじや。此三つが縱横に絡を爲したるが世の亂れじや、亂れの末は滅亡じや。教法の根元一つ違へば、世間の亂れこれに從ふ。之を亡國の法といふ。その亡國の法を弘むるものは、いはずとも國賊じや。

阿佛「さらば、いつの世に、どの國が亡びたといふ、眼前の證據あッて、左樣申さるゝか。

上人「諺にいふ『千里の遠きを見ても、おのが睫毛を見ず』のたとへ。餘りに近いものは見られぬかして、おん身は現に吾身にそれを驗しながら、それに心附かずして、却て俺に證據を尋ねらるゝは、いぢらしいほどの顚倒じや。

（ト阿佛大に驚きて）

阿佛「何といはるゝ。この阿佛が身に其れを驗したとは？：：

上人「おん身は先刻何と名乘られた。我は新院の北面遠藤の何某といはれたではないか。

阿佛「いかにも左樣申した。それがどうじや。

上人「新院は、いかにして此佐渡が島へ流らせられたと思ふ。

阿佛「承久三年の亂に、御運めでたからず、鎌倉のために非道の御配流……。
上人「新院は、此國の何じや。
阿佛「言ふまでもない、天子にまします。
上人「鎌倉の義時は、新院の爲めの何じや。
阿佛「いふまでもあらず、陪臣じや。
上人「そこじや、そこじや。義時は職は執權でも、身分は民じや。日本の天子は悉く天照大神の裔にして、且つ神の威德の乘うつッて王位を繼がせ給ふ現身の神にまします。日本の民は、善惡によらず天子の所從なり子なり弟子なりにして、何事にも違背は出來ぬ理合じや。然るに武家は朝廷を蔑みして、天下を我物顏に振舞ふ。後鳥羽法皇その橫暴を憤らせたまひ、承久の當今順德の帝と謀らはせたまひ、承久三年に義時が違敕の罪をせめて御征伐の院宣を下され、京には叡山御室東寺三井寺をはじめ、諸寺諸山に命せて、五壇十五壇等の大法祕法數を盡して、義時調伏のおん祈り。そもく天子が民の叛逆を討つは、盤石を以て卵を摧くよりも易かるべき筈、その上かくも盛の修法調伏。王威の尊嚴に關東勢一たまりもなく打亡さるべき筈ではないか。然るに合戰の成行言語道斷にして、おん傷はしや本院は隱岐に、中院は土佐に、新院は遠くこの佐渡が島へ放たれたまひ、萬乘のおん身を邊鄙陋屋の配所住居。二十餘年の憂艱難。終に御歸洛も協はずして、佐渡が島根の土と化したまふ。日本開闢以來未だ見ず未だ聞かざる王土の不祥、前代未聞の下剋上。これが不思議と思はぬか。これが心外と感ぜぬか。おん身は新院のおん供して來た從者の一人じやといふではないか。これほどの不思議に出遭ひながら、其れを何とも思はぬか。
阿佛「思はぬどころではムらぬ。烏の啼かぬ日はありとも、悲憤の涙に暮れぬ日とてはなく、院の御悲歎、吾等の齒がみ、二十餘年を恨みの中に送り、今は三十年の夢うつゝ、ねてもさめても忘れ申さぬ。只せめてもの心やりと、夫婦日ごとの御墓守り、ひたすらに御菩提を念じ奉り、世をはかなくも送ッて居りますわイ。
（ト言ひ終ッて、追懷の涙にくれる）
上人「良醫は病の因を治す。おん身いかほど悲憤慷慨すればとて、事の末を見て本を見ずば、病あって藥なきに同じく、その慨きはいたづら、その涙はむだ涙、そも此承久の亂が、前代未聞の國の殃を爲したに就ては、その源が二つある。その一つは朝廷が邪法を信じて自ら敗を取りたまへる事。その一つは鎌倉の政道が國の根元を忘れて、民を治める爲めには、天子を廢立し非分を侵すとも、治國の要には替へられずといふ邪見を本としたる事。この二つの殃が日本國の心を失ひ、政道の大義を亡した。この大惡見の大本は、何から來たと思召す。
（此時、千日と盛綱は、阿佛坊のあとを慕ひ下手より出で來り、林間に潛みて、この場の論議を立聞く）
阿佛「さア……。
上人「まだ心附き召されぬか。朝廷は加茂岩清水には厚けれど、伊勢の大神にうとく、廟堂の公卿は歌管絃を職として、傲き名利の爭ひに、國も君も打忘れ、上下非分に惑溺して少しも悟らず。武家は又吾家の勢利と身の幸福の外に何ものもなく、政治を德の行ひとせずして、只勢利の業とする。その顚倒の根本は、いづれも敎一の邪見に基く。君を忘れ國を忘れ、分を紊し位を侵し、名分紊れ大義すたれた殃の本は何あらう、佛法の雜亂、權實を紊し、佛誡を無みし、此土有緣

の本佛を棄てゝ、他方無緣の彌陀に執し、唯我一人の釋尊に背いて、大日藥師の他佛を拜し、小を以て大を打ち、權に執して實を謗る、敎の紊れは世の亂れ、佛敎の大義先きに蔽れて、世間の名分隨ッて紊れ、逆臣世に榮え、天子孤島に流寓して、國家の綱紀地に墮ちたる、論よりの證據、眼前の國難。あまりの殃に疑とけず。日蓮此不審を晴らさんが爲めに佛門に入り、學び得たるは此一大事。大事の中の大事といッぱ、國の亡ぶるほどの大事はない。忠義の中の忠義といッぱ、國の危きを見て諫め正すより上の忠義はない。日蓮この大忠を懷いて世を醒まさんとするに、理不盡にも流罪死罪の害を加へて、我れと國の柱を倒さんとする、鎌倉一門の非義非分。承久文永時は替れど、昔ながらの佐渡の地に、同じ配所の月を見て、世の成行を悲むのも、恐く冥合の因緣か。順德天皇在天の靈魂！　憐れ日蓮が護國の心を御照覽あれ、承久國難の一部始終、いかに入道殿、合點が參ッたか。

（ト阿佛は此時まで、一語々々に首をうなだれ、深く驚き且つ感じ、次第に身を顫はして、漸々に懺悔の色をあらはし、のり出して聽居たるが、上人の語の終ると共に、「ハ、ア」と一聲、後に飛び去り、大地に平伏し、雪に首を埋めて、五體投地の大恭敬を以て）

阿佛「段々の御敎諭！　入道はじめて目を醒ましてムる。愚老妄昧にして、疑ふべからざるを疑ひ、爭ふべからざるを爭ひ、現身の聖者を害し奉らんと致した罪、今更お詫のしやうもムらぬ。身親しく承久の亂に處し、而かも天子遷幸のおん供にたち、五十年來の悲憤に日を送りながら、その殃の根元に心附かず、剩さへ佛意に背き虛妄の行に執して、それを御菩提と存じたる段、今更おもへば身を割かるゝの悔恨。遲しといへども、改めざるには增しかと存じ、今日只今、一心に正法に歸依仕ります。憐れおん弟子の末に加へさせられ、現當二世をお救ひ下さる様、ひたすらお願ひ（ト合掌して）……申上げまする。

上人「さすがは誠忠無二の入道殿！　逆卽是順の頓悟歸伏、自他の祝着此上ムらぬ。

阿佛「知らぬ昔はトニカク、かくあり難き正法を持ち申した上は、この新しい悦びを奏上のため、時刻をうつさず只今より山陵へ走參じて、永年謗法のおん詫を申上げ、改めて正法の法味を捧げ度くと存じます故、何かの意中は後と致し、暫時お暇を賜り、これよりすぐに御陵墓へ參拜し、再びこれへ取ッてかへしまする、上人樣！　しばらく御免……。

（ト一揖して去らんとする。此時上人は阿佛をとゞめ）

上人「御陵前の懺悔尤も千萬。貴邊は貴邊の懺悔を言上するがよい。日蓮もまた、おんみの敎化を緣として、聊か微衷を御尊靈に奏し、改めて法味を獻じたい儀もある故、俺もこれより同道いたさう。

阿佛「それは千萬ありがたい仰せ。上人の御陵參は無上の御法味。王法佛法冥合の姿。こんな尊いことはムらぬ。嘻ありがたい！　ありがたい!!　是で千萬年の壽命を延べた樣な心地。……爾らばおん供申上げませう。

（ト此時木立の蔭より、千日藤九郞の兩人走り出で）

千日「委細はあれで拜聽致しました。只々ありがたい此場のありさま。兩人ともにお歡びを申述べます。

（ト言ひ訖ッて、上人の前に、恭しく拜

禮する。）

阿佛「そちたちは、いつのまに此處へ來た。

盛綱「母上は御陵參より御歸宅あッて、父上の事が氣にかゝる故、すぐに塚原へ行くとの仰せに、私も父上の跡を慕ひ參らうと存じたる處ゆゑ、すぐにおん供致して參りました。

千日「おもひもよらず尊き御法談に、昨日の敵は今日の御弟子。『毒藥變じて藥となる』とは、まのあたりに見る御法の驗、ホンに尊い御威徳でムります。

阿佛「兩人ともに、上人の御談を拜聽したとあらば、俺と同じく心魂に徹して目が醒めたであらう。俺は今日といふ今日、生れてはじめての悦びを得た。そなた達よりも、厚く御禮を申上げるがよい。

（ト上人に一揖して、二人を紹介する）

阿佛「これは拙者の妻の千日と、一子藤九郎盛綱と申しまする、おん目を賜はり、何ぞの御用にお召し下さらば、忝く存じます。

上人「御兩人にも、彼にて法談聽聞あッて同時の御得心、祝着に存じ申す。

千日「御慈悲のみをしへに依りて、良人はじめ親子三人、一時にお救ひ下され、山海の御恩……。

盛綱「一家の面目……。

二人「ありがたく存じ奉ります。

（ト四人の間に法悦の交換といふ片言的臺詞よろしく、上人は空を仰ぎ見て）

上人「幸ひ雪もすッかり歇んで晴天となッた。まだ日も高い故、くれぬうちに御陵へ參らう。

阿佛「然らば、おん供申しませう、（兩人に向ひ）そちたちは、これより直に宿元に取ッて返し、上人様へ御供養の支度をいたせ。

二人「畏りましてムります。

（トこのうちに上人は法華經を懐中し、杖をもちて三昧堂を出で）

上人「入道殿！　さらば案内を……。

阿佛「お供申すでムりませう。

（上人前に歩し阿佛つゞき、兩人は目送敬禮する所……道具廻る）

聖典の本據

【種々御振舞御書】…（三昧堂の光景）…

同十月十日に依智を立て、同十月二十八日に佐渡の國へ著ぬ。十一月一日に六郎左衛門が家のうしろ、塚原と申す山野の中に洛陽の蓮臺野のやうに、死人を捨る所に一間四面なる堂の佛もなし。上はいたまあはず、四壁はあばらに雪ふりつもりて消る事なし。かゝる所に所持し奉る釋迦佛を立まいらせ、しきものなければしきがは打しき、蓑うちきて夜をあかし日をくらす。夜は雪雹ひまなし、晝は日の光もさゝせ給はず、心細かるべきすまゐなり。彼李陵が胡國に入りて巖崛にせめられ、法道三藏の徽宗皇帝に責られて面にかなやきをさゝれて江南にはなたれしも只今とおぼゆる。（類纂三九九）

【妙法比丘尼御返事】…（同上）…

佐渡ノ國にありし時は里より遙にへだたれる野と山との中間に、つか原と申し候三昧所あり。彼處に一間四面の堂あり。空はいたまあはず四壁はやぶれたり、雨はそとの如し、雪は内に積もる。佛はおはせず、筵疊は一枚もなし。然ども我が根本より持まいらせて候教主釋尊を立奉せ、法華經を手ににぎり、蓑をき笠をさして居たりしかども、人もみえず食もあたらずして四箇年也。（類纂三九三）

【種々御振舞御書】…（同上）…

かくて過る程に、庭には雪つもりて人もかよはず。堂にはあらき風より外はをとづるゝ物なし。眼には止觀法華をさらし、口には南無妙法蓮華經と唱へ、夜は月星に向ひ、晝は日に向奉て、諸宗の違目と法華經の深義を談ずる程に、一年かへりぬ。（類纂四〇〇）

第四幕（下）

順徳天皇眞野御陵

人

日蓮上人

阿佛坊
羽黒甚作
牛尾與太六
印性坊
藤九郎盛綱

時
前幕の日の暮方

處
佐渡國眞野順徳天皇御陵

場景
上手斜めに少しく高く、石の玉垣の粗末なるが四五間の廣さ、處々缺け損じたるを、莊儼の眞野山陵御陵域。その中央に一段小高き處に五輪の塔あり。うしろは木立、左右も木立、後陵域前面にも處々に木立。以上の全部どれも雪のふり積りたるところ。石門階段の上に、千日がツイ先刻奉獻の「御忘れ」を入れたる阿佛廂あり。一面の雪景。相役のさゝ下手へよせて、木立の間より暮色の薄空に日没の夕景を見せ、億氣にて段々に日の入りをあらはす仕掛。山鳩の聲にて幕開く。花道より印性坊と牛尾與太六の兩人、つれ立ちて話しながら登場。

印性「別段時刻の約束は致さぬが、餘りにしらせが遅いので、どうしたかと案じて居たところへ、羽黒氏が見えられた故、樣子を探りに塚原へ行ッてもらッた處、途中で千日と藤九郎が話しながら來たのが、どうも怪しい樣子と、見えがくれに跡をつけて話を聞くと、俗にいふ木乃伊とりが木乃伊になッて、どうやら阿佛坊は、日蓮奴に降參したらしい。それで日蓮と兩人つれ立ッて、此山陵へ參詣に參ッたと申す事で、すぐにお知らせ申した次第。

牛尾「それはけしからん事でムる。彼奴中々の辯巧者と見える。こりや一筋縄ではいけませぬ。シテ羽黒氏はどうなされてムる。

印性「阿佛坊の宅へ廻り、ひそかに樣子を探ッて、いそいで近道をこれへ參ることになッて居りまする故、ともかくもあの木立のかげで、暫く樣子を見ると致さう。

牛尾「それがよろしうムらう。

（ト兩人正面まで來る、上手より羽黒甚作出で來り）

羽黒「おゝ、御兩所にはお早いことじや。

印性「樣子はいかゞでムッた。

羽黒「日蓮と阿佛坊は、確かに此へ參るに相違ムらぬ。シテ阿佛が宅では、何か饗應の支度最中らしい樣子。

印性「では、いよ〳〵彼れも裏切り致したか。

牛尾「油斷のならぬことでムる。

羽黒「老年の足とは申せ、もうやがて見えるであらう……シテ手筈は……。

印性「手剛いのは阿佛一人。御兩所にはぬからず御用意。まさかの場合は、愚僧もお手傳いたす所存。

牛尾「大丈夫でムる。

羽黒「御安心下さい。

印性「然らば暫時、あれで……。

（ト三人は物かげへ忍ぶ。再び山鳩が鳴く。此時花道より上人と阿佛坊出で來り、花道にて）

阿佛「雪中の歩行、定めし御疲れの事と存じます。

上人「俺よりは御老體の入道殿、寒氣の中歩行御難儀の事であッたらう。

阿佛「愚老は常に參陵に慣れて居りまする故、聊かも苦になりませぬ。……おゝ、あの森が即ち御陵。

上人「然らば、日の暮れぬ間に、法味を獻ずることと致さう。

（ト舞臺へかゝり、上人は御陵墓に正對して立ち、阿佛坊はその傍らに蹲踞して）

上人「法華經の行者本朝の沙門日蓮、謹みて人皇第八十四代順德院天皇山陵の大御前に拜詣し、恭しく法味を獻じて微忠を奏し奉る。尊靈天に御して、日蓮が奏する所を聞しめせ。本朝の政道一たび王威の衰へを示し、蘇我藤原の僭上より、源平政權をかすめ、陪臣義時に至ッて、大逆その極に達し、武威を恃みて朝廷を凌ぎ、兵力を以て九重を侵し、恣に廢立を行ひ、畏くも三帝を三島に流し奉る。天地顛滅し日月明を失ふ、前代未聞の下剋上。日本國の綱紀、この時を以て一たび斷絶せるに似たり。天壤無窮の神敕は萬古に動かず。百王守護は正八幡のおん誓ひ、閻浮第一の靈土、八萬の國々に勝れる日本神國が、何なれば斯くは亂れしぞ。夫れ本朝開闢以來叛逆のもの、總じて二十六人。第一は大山ノ王子。第二は大石の山丸。乃至第二十六人は權大夫義時。古來王法に敵する者皆亡びずといふ事なし。況や承久の役は、叡山園城東寺御室の名僧高德、大法祕法の數を盡して義時を調伏せるに、逆臣義時は敗れずして、三院却て遠く孤島に放たれたまふ。天柱拆け地維摧けたるか。王法の威光地に墮ちて、國家の大義湮滅せる事、その禍の根元を討ぬれば、全く佛法の雜亂に在り。此土を捨てゝ他土を樂ひ、此土の教主を捨てゝ他方の教主を崇め、權を以て實を侮り、小を以て大を侵す。秩序の顛倒は、名分の荒亂、形曲れば影正しからず。人心を導くべき教法斯の如く紊れて、世間やはか安穩にてあるべき。日蓮此疑ひを決せんため、博く佛教の明鏡に照らして、世間佛法の得失を究め、國の魂たる法華經を以て先づ王法佛法の正義を示し、大義を掲げ名分を正して、國の危害を除き、萬民の正氣を回復して、君恩國恩を報じ奉らんと誓願し、偶ま流謫によりて陛下と同じ配所の月を見る。今孤忠爲盛を度して、相倶に一乘護國の誠を獻じ、恭しく醍醐の法味を回向し奉る。願くは尊靈昭鑒を垂れたまへ。

（ト朗々又肅々と雄大悲壯の格調、慨然又嚴然として、訴ふるが如く、敍するが如く、奏上終りて合掌禮拜す。つゞいて阿佛坊は、大地に平伏して）

阿佛「小臣爲盛、こゝに謹んでお詫を申上げます。小臣不肖にして武骨粗忽の一轍、只世の習ひに從ッて、佛法の權實をも辨へず、悪知識に欺かれて、佛法の本意に背き、無益の行を修して、御尊靈を累し奉りました。今日生身の菩薩に値遇して、佛法の深義を承はり、宿執頓に破れて、多年の迷夢茲に覺め、懺悔の心禁じがたく、即ち救世の大導師日本の柱たる日蓮正師を請じて、御尊靈に法味を獻じ奉り、兼て爲盛が謗法の罪を懺悔し奉りまする。

（ト落涙倶に下ッて、訴ふる如く奏白す）

上人「尊靈天にみそなはせ！日本國の未來は、必ず法華經に依て救ひ護り申すべし。義時の逆は即ち天下の逆、天下の逆は即ち教法の亂より來る。日蓮先づ佛法の邪正を糺して世間の闇を破り、國土を泰山の安きに置き、帝德王法の正理を明かし、以て王法佛法冥合一體の春を迎へ、一天四海皆歸妙法の願を全うし、必ず一閻浮提一統して、正法の法

威を信じ、日本國の國威を仰ぐの日あらんことを言上し奉る。

（猶阿佛房は、追懐の涙にくれつゝ）

阿佛「陛下御在世の折は、永く鎌倉の横暴に虐げられさせたまひ、左右齒をかんで悲憤の月日を送り、終に御歸洛の大御幸を拜せず、御昇天の悲みに遭ひ奉り、おん滅後の今にして、國の柱の學者をすゝめ奉り、其尊き法味を以て、改めて御菩提をいのり奉り、こゝに天恩の萬分一を報じ奉ります。

上人「陛下の御一生は申すも畏し。時の悲運に遭遇して、國家積業の殃に果せられたまふ。されど陛下の御國は萬代の御國なり。日蓮かくて候はん上は、必ず正法の威力を以て、陛下の御國を護り、祖宗の建業を輝し奉らん。尊靈大御心安くおはしませ。（ト默禱しばらくして）……むかしは十善萬乘の君が……。

阿佛「今は國の柱の大導師が……。

上人「同じ配所の佐渡の雪。

阿佛「積もる非道の惡戲も。

上人「循環の天理あやまたず。やがては目を覺ます時あらん。

阿佛「あはれ口惜し！　御無念を晴れさせたまへ。

（ト上人は法味進獻の爲め、歩を進めて石門に近よらんとし、阿佛房は前に千日の捧げし獻花を、中央に直し終ッて、上人にむかひ、一禮して）

阿佛「おもひがけざる今日の御參陵。甚深高大の御法徳に、御尊靈も嘸かし御滿足のおん事と存じます。折から幸ひの晴天……心遣までの述懐。近ごろ會心の至りでムりました。モハヤ日も暮れかゝりましたから、御回向の後、拙宅へおん供仕りませう。

上人「おゝ、いかにも將暮ッた！　あれ見られよ。遠野に落ちんとする雪中の夕映。黄金白銀を一時にのべた樣な美しさ。美は美なれども悲みを伴ふ落日の風情。今この日本の國運も、ちやうど此落日の空。王朝の式微は武門の跋扈。武門の跋扈は、名分の頽廢。互に相依り相つるべて、道心日に衰へ人心日に荒む墮落の夕日、刻一刻と落ち行く王魔の時。溷亂の闇は、次第に濃くならんとして居る。

阿佛「仰せの通り、天日將に地に落ちんとする世の光景。夕陽落日の國運！　悲憤の限りでムりまする。

上人「しかし、あの落日！　斯くいふ裡も刻々に光はらせ行くか、かくて落ち切りたるあの日は、必ず再び明日の曙光を染むる、旭日瞳々の曉もある。否極ッては泰を生ずるの道理。日蓮は承久亂の翌年貞應元年の生れ。義時が倒した國の柱を、日蓮再び萬年の礎として興して見せう。夕日の次に來るべき、大日本の日の出を待たれよ。

阿佛「ありがたい御曉諭。承はッて骨の眞から丈夫になッた心がいたします。

（ト此時、羽黒牛尾二人、森蔭より躍り出て、羽黒は下手より阿佛に、牛尾は上手より上人に、いづれも拔きつれざま）

羽黒「裏切りの阿佛房。汝も今は佛敵の片割れ。覺悟しろ。

牛尾「天下を騒がす賣僧の日蓮。此世の引導、觀念しろ。

（ト兩人ひとしく切らんとする）

阿佛「裏切りとは何のたわこと。正義に歸順の阿佛房だ。正法守護の給仕役、指でもさゝせる事ではない。

羽黒「佛罰思ひ知れ。

（ト羽黒先づ阿佛房目がけて切りつける。阿佛房身をかはしざま）

阿佛「何が佛罰？　貴樣等には、おれの罰で澤山だ！

（ト羽黒を取ツて擲げる、一方牛尾は上人に斬りつけんとして、一刀を上段にかまへるトタン、上人聲高く）

上人「無禮もの！

（ト一喝して、眼光之を射る時、牛尾太刀をふりかざしたまゝ、感電者の如く、ぬツと立ツたまゝ反りかへツて、うしろへどうと倒れる。これより先き、二人と少し後れて森蔭を忍び出でたる印性房、二人の痴れたる慘敗の狀を見て、加勢もせず一目散に上手の木立の中へ逃げ去る。トタン藤九郎盛綱、家僕に松火の用意をさせて出で來り、此體を見て、あわたゞしく驅けより）

盛綱「盛綱、只今お迎ひに參上いたしました。見れば狼藉者、御怪我はムりませぬか。

上人「それは御苦勞でありました。

阿佛「盛綱！　此曲者を成敗いたせ。

上人「アイヤ。彼等は皆一時氣を失ツたもの故、手當を施して、貴宅へおつれなされ。

阿佛「この曲者どもを……。

上人「他の毒藥を飲み藥發し悶亂すとは佛の金言。いづれも邪教の毒が致した顚倒の現病。本を洗へばふびんのもの、追ツつけ敎化して得させうと存じて……。

阿佛「限りなき深大のおん慈悲。恐れ入ツてムります。

盛綱「ありがたいお慈悲でムりますなア。

阿佛「然らば、其方は二人に手當を加へて、一足先きに率いて行け。

盛綱「畏りました。

上人「入道殿！　いざ法味じや。

（ト阿佛房を警め、上人は端然正門に面して合掌、朗々として經文讀誦）

上人「今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子而今此處多諸患難唯我一人能爲救護。

（此經文のきれぬうちに、靜かに幕）

第五幕（上）

鎌倉名越の合戰

人

中務權ノ大輔　北條敎時
同　老黨　濱士七郎
同　母　名越の後室
澁谷新左衞門尉朝重
横地左衞門次郎師重
名越の老黨　小坪平六
雜兵若干
名越の侍女
町人の老幼男女、法師、尼、山伏の類、大勢（戰亂に騷ぎ立ちて四方へ逃げ走る種々階級の人々）

時

文永八年二月十一日（所謂鎌倉二月騷動）

處

鎌倉名越の辻なる敎時邸宅前

場景

陣貝陣太鼓の音にて幕開くと、並木幕、鎌倉場末の或る地點のつもり、こゝに「二月騷動」の合戰に、今しも討手の部將澁谷新左衞門尉朝重は、從兵若干と共に名越一門討伐の爲めに發向のところ、從兵と共に戰友を待ちながら談話中。

澁谷「大藏氏をはじめ、討手の面々は、いかゞ致したか知らん。

兵一「こゝでお待合せのお約束と承はりましたが、どなたも遲いことでムりまする。

澁谷「モー刻限は何時じや。

兵二「おッつけ辰の下刻にもなりませう。

（ト此時一從兵、下手より駈け來り）

兵三「殿！ これにお出でムりましたか。只今途にて承はりますれば、大藏左衞門尉樣はじめ、同志申合せの方々、當所へ立寄らす、すぐに尾張ノ前司見西入道の館へ、馳向はれましたと申す事でムります。

澁谷「ナニ。あの大藏はじめ、我れを出し拔いて獨り功名を貪らうとは、不埒千萬。シテ大藏の外には誰れ〳〵じや、殘らず參ッたか。

兵三「ハイ、四方田瀧口左衞門尉、石河神次左衞門尉、鷺座左衞門三郎、それと大藏次郎左衞門尉の面々でムります。

澁谷「シテ、横地左衞門次郎師重はいかゞ致した。

兵三「多分中務大輔殿へ向ッたことと存じます。何にしても、見西入道は、此度謀叛の張本と目指されて居りまする故、一味の面々も殿を出し拔いたものと見えまする。

澁谷「いかにも。尾張ノ前司は、名越一門の頭目なり、彼等一味の本陣なりだから、先駈けの功名を急いでそれがしを出し拔いたものと見える。其儀ならば、これより一散に名越へ押し寄せ、天晴れ功名して彼等に一泡吹かせてやらう。一同續け！

（トこれにて、從兵もドヤ〳〵澁谷に跟いて上手へ去る、トタン、並木幕をおとすと、舞臺の中ほどより下手の奧へ斜めに辻のあるつもりで、一面に武家屋敷の築地塀。上手寄りの處に、武家屋敷《北條家一門の貴族的構造、中務權ノ大輔教時の邸宅》の表門ありて、門のつきあたりには網代の板塀を見せる。この門から出入し得るしつらへ。門の上手は下手と同じ模樣の塀、門内に木立いろ〳〵ありて、その幾分の所に、弓又は長卷の刃先チラ〳〵見える。下手の手前にも、武家屋敷の塀ありて、角地面の趣を爲し、この道具と教時邸の塀との間を道路とし、下手奧の方より此所へ通行し得る辻のこゝろ。この角地面の邸内にも木立四五本、程よく塀の上へ出て居る。極の奧の突當りは鎌倉名越邊の山の遠見。その前に邸宅民家など見ゆ。こゝへ奧の辻からも、下手からも、上手からも、種々の階級種々の服裝の人、おもに市民、中には僧、尼、山伏などの類もまじり、老幼男女とり〴〵に、右往左往といふ狼狽の狀、女は泣き叫ぶもありて、いづれも調度の類を持ち、今俄の合戰に、逃げ惑ふところ。一しきり此等の人々走せ違ひ、混亂の狀の中に、處々より士卒夥多入りみだれ、刀をぬきつれて走る。時々流矢が飛んで來る、そのたびに婦女子が泣き叫ぶ。この雜沓狀態が暫く續いて、ほどよき頃、奧の方の辻より、武裝して少々手を負ひたる北條教時出で來る。從兵五六と戰ッて之を走らし將さに我邸に入らんとする時、老黨濱土七郎、これも負傷して主を慕ひ來り、主人を見て）

濱土「殿！ 御無事でムりましたか。追ひ來る雜兵は、身方の奮戰で一先づ追ひ散してムります。それがしのみはおん跡を慕ひ、これまで參りました。片時も早く御歸邸あッて、最後の一戰……（ト少し落淚の模樣）……花々し

く願ひ奉ります。

敎時「モハヤ、所詮……（ト少し息をつき）この度の企ては一朝一夕の事にあらず。一門の非道餘りに長じて、上を上とも思はず、將軍家の御無念は申すにおよばず、兄上越後守光時殿も、曾ては無實の汚名を忍んで世を穩かにと伊豆に蟄居あッたが、世は中々に靜かならず。一門の中にも兄弟常に猜疑の中に坐して、戰々兢々片時も安き心はない。折柄六波羅式部大輔殿、兄にして弟に執權職を奪はれたるを憤り、此度大事を思ひ立たれ、この敎時に内通あッて、東西一擧に事を運ばんと企てたるも、武運拙く密計漏れて、はからずも兄上尾張ノ前司殿に疑かゝり、今日討手のもの、兄上の館を襲ふと聞き、南無三！　何にも知りたまはぬ兄上に、此不慮の災難。捨て置かれずと、取るものも取り敢ず、驅けつけは驅付けたが、既に討手に先んぜられたる上、身方は無勢、敵は目に餘る多勢……。

濱土「殊には弓矢の手鍛錬と名も高い、澁谷、大藏、四方田等の面々。人は多し、手筈は十分なり。それに引きかへ、味方の不揃ひ。

敎時「兄上にも、『無念！』の一聲と共に……ハヤ御生害。敵におん亢を渡すも心外なればと、館に火をかけて引上げたのは、母上の安否心許なき故じや。……あゝ我れ故に兄上を失ひ奉るに至ッた……事の成行、伊豆の入道といひ、今また名越の兄上といひ……（悲憤と負傷とに悶えて）……無念至極じや。

（ト此時、うしろの方にあたりて、炎々と火の手あがり、矢さけび鬨の聲遠く聞える。濱土七郎うしろに氣がつき、火災を見て）

濱土「殿！　あれを御覽じませ。おん館既に炎上のところでムりまする。

敎時「兄上の館炎上の上は、敵も此方へよせ來るに相違ない。母上を落し參らせたる上、潔く我れから名乘ッて最後の一戰……爾らじや。

（ト勢をつけて身を起し、門に入らんとする時、追兵二三敎時主從を目がけて襲擊し來る。濱土七郎これにわたり合ひ、敎時に聲をかけ）

濱土「この敵は、それがし防戰いたしまする故、此間に片時も早くおん館へ……。

（ト濱土は追兵と激しき鬪諍ありて、トヾ殘らず敵兵を一端追ひ拂ふ。此間に、敎時は門内へ入る。忽ちに鬨の聲うしろに起りて、討手の將横地左衛門次郎師重、手兵あまた引率して、敎時邸へ攻めよせ來る）

横地「敎時は、たしかに吾家へ取ッて返した樣子だ、モー此上は袋の鼠だ。後詰のもの共に申觸れて、横手裏口すきまもなく、蟻も出ぬ樣おッ取り圍めと申渡し、其方どもは我れにつゞけ。

（ト下知して、折から門内より防戰の爲めに迎へ擊つべく出でたる守兵と戰ひをまじへたる末、寄手は優勢にして終に門内に闖入す。門内には矢さけび鬨の聲きこゆ。このうちに名越の老黨小坪平六、征矢二三本を身に中て、負傷のまゝで、主人名越ノ後室（敎時の母）を守護して拔け出づ。後室も少しく負傷の體。侍女二人、支度甲斐々々しく、手に〳〵婦人用長卷を持ち、後室をいたはりつゝ辛く矢叫びの中を切り拔け、こゝまで遁れ出る。小坪平六は、後室にむかひ）

小坪「殿は、既に御生害の御覺悟で、最後の御奮戰花々しく、いよ〳〵の折は、兄上の如く火を放ッて館を燒けと、近臣どもへ御沙汰

あり。猶それがしへの仰せに、只此期に於て氣がかりは母上じや。汝おん供して坂の下の親時方までお連れ申し、その上にて御先途を計らへと堅々の御嚴命でムりまする。敵兵の出て參らぬうち、一刻も早く坂の下までおん立退を……。

（ト後室は悲歎やるせなき樣子にて）

後室「吾子の戰死をよそに見て、他に遁れるよりは、いッそ諸共に、妾も同じ道にと申し張ッたが、たッて倅の不承知ゆゑに、これまで拔け出しはしたものゝ、死ぬに死なれず生甲斐もない。一家の椿事、一門の非運……いかなれば斯く、不祥のつゞくことやら。

（トくやし涙にくれる、侍女等かはるがはる慰めて）

女一「御殘念は、私どもも同樣に存じまする。……此處は危うムりまする故、ともかくも。

女二「一端坂の下まで、おん立退の上で……。

小坪「江間の殿とも御談合あッて、今後の御思案遊ばされたがよろしうムりまする。

（ト後室は氣遣はしげに）

後室「坂の下へも、討手の向ッた樣なことはあるまいかなう。

小坪「江間の殿には、御若年の事といひ、御本家とおん遠々しい間柄とて、多分何事もムりますまいと存じまする。

後室「坂の下の親時は、教時のためにも姪ではあるが、あの家の重臣に例の四條金吾が居て、何事につけても、日蓮々々と夢中になッて讃めそやし、良觀樣を惡しざまに申すが苦々しうて、つい〳〵坂の下へ足が遠うなッたわけではあるが、この場合は是非もない。トモカクモ行くとしませう。

小坪「彼の金吾奴は、先日來伊豆へ參りまして、只今は鎌倉に居りませぬ。

女一「それでは、ちやうど可いところ。

（ト此うち、又々門内に矢さけびの聲盛に起る、ときの聲と前後して、奧の方にあたり、物のもえる音聞え、つゞいて黑烟見える、叫喚の聲ます〳〵すごく聞ゆ）

女二「あれ〳〵、あの煙……。

小坪「少しも早く、おん立退を。

（ト後室は館をふりかへり見て、殘り多き思ひと悲痛の情とに、取みださんとして）

後室「エヽ。是非がない……さア行きませう。

（ト侍女兩名前後に、小坪後へに從つて、塀外を上手へと走り去る。……道具廻る）

聖典の本據

【種々御振舞御書】・・《二難の豫言》・・

日蓮御勘氣を蒙らば佛の御使を用ひぬに成べし。梵天帝釋日月四天の御とがめ有つて遠流死罪の後ち百日一年七年の内ちに自界叛逆難とて此の御一門どし打ち始まるべし。其の後佗國侵逼難とて四方より起り殊に西方より責められさせ給ふべし。爾の時後悔有るべしと平の左衛門の尉に申し付けしかども、太政入道の狂し樣に少しも憚る事なく物に狂ふ。（類纂三九三）

【妙法尼御返事】・・《内亂豫言的中》・・

又佐渡の國にて切られんとせし程に日蓮が申せし如く鎌倉にどし打ち始まりぬ。（類纂九九三）

【光日房御書】・・《二月騷動》・・

設ひ大梵天として色界の頂に居し、千眼天と云はれて須彌の頂におはすとも、日蓮を捨給ならば阿鼻の炎には薪となり、無間大城をば出ずる期おはせじ。此罪をそろしとおぼさば急ぎ國土に瑞を出させ給ひて本國へ還させ給へと高き山に登りて大音聲を放ちて叫しかば、九月十二日の御勘氣に十一月に謀叛の者出來す。返る年の二月十一日に日本國のかためたるべき大將共由なく打殺されぬ。天の責めと云ふ事明か也。此れには驚きけん、弟子共は免れぬ。（類纂一〇八九）

【賴基陳狀】・・《四條金吾の急還》・・

又賴基は去る文永九年二月十一日の鎌倉の合戰に、折節伊

豆の國に候ひしかば、十日の申の時に承りて只一人箱根を越へて三時が中ちに馳せ參りて、御前にて自害すべき八人が中にて候ひき。（類纂五七五）

【四條金吾殿御返事】…（法華經の四條金吾）

强盛の大信力をいだして法華宗の四條金吾法華宗の四條金吾と鎌倉中の上下萬人乃至日本國の一切衆生の口にうたはれ給へ。（類纂八五四）

第五幕（下）　由比ケ濱の野陣

人

總大將　秋田城ノ介泰盛
軍奉行　土肥四郎左衞門實綱
四條金吾賴基
橫地左衞門次郎師重
海野矢四郎助氏
士卒若干

時

前幕の日の午後

處

鎌倉由比ケ濱

場景

正面一體に大海、濱邊より少々陸へ引込んだる處、松の並木十數本あり。右手に稻村ケ崎見え、左に小坪乃至三浦半島遠く見え、近き林間には、神社佛閣及び民家點在し、その內名越の方角にあたりて、遠く兵火見える。總じて由比ケ濱の景。こゝに上手にも下手にも斜めに陣幕を張り、幕の內外には多數の長卷及び弓の先見え、その奧に多數の軍兵居るこゝろ。松の大木の下に床几を据ゑて、討手の總大將秋田城ノ介安達泰盛（五十七八歲）、軍奉行土肥四郎左衞門尉（四十二三歲）、これは少し引下ッて床几に凭り、從兵二三、雜卒若干、その背後及び左右に居流れ、上手陣幕の前には、總大將泰盛乘用の馬繋ぎあり。軍議評定中道具止る。軍奉行土肥は下手の奧を見渡して

土肥「名越の方角に當ッて、火の手の上ッたは、既に合戰酣に及ぶと見ゆる。手廻し早く討手を向けた事ゆゑ、身方の勝利は疑ひなしと存じ申す。大將殿の御思案は…。

泰盛「いかさま、先んじて人を制した今度の計ひ。六波羅の密使を捉へたが事の起り。はからず謀叛の實情を知り、名越一門の內應を察し、早いが勝ちと守殿にも申し計り、此程中より內々討取りの手配を致し、ひそかに軍勢を催促して、今朝不意に名越を攻めさせた。彼處には尾張ノ前司入道を首め、中務大輔教時、其外彼が一門宗徒の面々も多い故、先づ其根城を一番に成敗してしまへば、あとは坂の下の江間四郎親時と、伊豆に蟄居の越後入道位のもの。遠からず彼の一門も根絕しでムらう。

土肥「六波羅式部殿は、守殿のおん兄にして、家督を御舍弟に奪はれた憤りで、此度の御謀叛…。これは是非ないと致しても、名越の御一門が是れに身方されたのは、少し合點が參りかねる。尾張ノ前司殿はいふに及ばず、御舍弟中務大輔殿も、それ〴〵の重職に在ッて、世に時めいて居らるゝのに、何の不滿で他の謀叛に與し、われと好んで夏蟲のやう、火に入られたのは、いかにも不審の次第…。

泰盛「恐らくは先年彼等の兄越後守が伊豆へ流

されたのを銜んで、上を恨む心と、一つは極樂寺殿一門との權勢爭ひなどより、僻みの心も加はり、折もあらばと窺ひ居たところ、恰も守殿の兄時輔殿の謀叛を幸ひに、一も二もなく之に内通して、あはよくば、おのれ執權連署にも押し直ッて、世を自由にせんの企てでがなムらう。

土肥「永久以來、鎌倉の武威ます／＼盛なるにも似ず、同じ御一門の中に於て、六波羅殿といひ、名越殿といひ、いかなれば斯く、互に疑ひ疑はれつゝ、嫉刃を研ぐお家の不祥‥‥世はどうなり行くことでムらう。

泰盛「一門であらうが、同族であらうが、上に對し不所存のものは、一人も容赦はならぬ。申さば一門の繁昌が却て禍の根元となッて、權勢榮利の奪ひ合ひで、又しても／＼と物騒沙汰、這般の謀叛を幸ひ、後の患を除くは、結句雨降ッて地固まるの道理。今度の事も、早く手配り致したが、天下の幸ひと申すもの。猶豫は百損の元‥‥討手の首尾は何とあらう‥‥。

（ト、名越方面なる兵火を見やる。そのうち前の火事の右手にあたりて、又一ヶ所の火の手があかる、諸見よろしく、泰盛も、實綱も、從兵も一同起ッてこれを見る）

泰盛「先からの火は、見西入道の館と見える。今のは教時の第かも知れぬ。

土肥「何樣。中務大輔の館でムらう、シテ見れば教時殿も既に落命と見える。

泰盛「見西、教時の兩人既に滅亡致して、彼等の企ても水の泡となッたは心地よい。此上は坂の下に走せ向ひ、親時を一蹂みに亡すばかり。同時に討取らなんだことは、市中の騒動を慮ッた爲めじや。今はハヤ、後ろやすい。時刻を移さず押取り圍め‥‥討手のもの用意。

（ト軍奉行土肥にさしづする、土肥は了承して）

土肥「坂の下討手の將海野矢四郎助氏殿。人數引具して發向の用意‥‥。

（ト海野を麾く。海野、幕内より出でて之を聞き）

海野「承はッてムる。

（ト海野郎ち下手幕内に控へ居る寄手の軍卒にむかひ）

海野「物ども用意！

（ト下知し、海野は總大將に一揖して、早や出發せんとするこの時、揚幕の方より、一聲高く「しばらく／＼」と聲かけて、四條金吾頼基（三十四五歳）馬上にて驅け出で、花道程よき所に馬を立てゝ）

四條「坂の下征伐の御軍勢、しばらく御控へ下され。

（ト聲をかける。泰盛以下これに驚くことなし。聲に應じて土肥奉行）

土肥「寄手の出陣を留めたは何ものじや。

四條「それがしは江間四郎親時の重臣四條左衛門尉頼基と申すもの、主人親時の事に付、急々陳情の旨ありて、今朝伊豆より驅付けてムりまする‥‥御免！

（ト四條金吾は馬を下手幕張の一隅に進め、ひらりと下りて馬をそのあたりの木立に繋ぎ、衣紋をつくろひ、大將泰盛以下に一揖したる後）

四條「火急の陳情、陣中へ直々の推參、御無禮の段偏へに御宥免を願ひ奉ります。

泰盛「坂の下征伐の出陣を止めた仔細を、疾く疾く申せ。

四條「その仔細は外でもムりませぬ、主人親時に付ての此度の御不審は、全く以て無實でムります。

泰盛「ナンと申す？　其許の主人は六波羅の隱謀に加らぬと申すか。

四條「仰せの如く、主人親時の父越後守儀は、去んぬる寛元四年の五月、前將軍家と共に、御不審を蒙りたる折、みづから謹愼を表して遁世致され、所領江間に蟄居して、ひたすら世の塵事を絶ちたるは、一身の故を以て天下を騷がすに忍びずと、偏へに世の靜謐を願ふの餘り、身の濡衣を忍んで今日に至り、一門相誡めて謹愼を守りたるところ、近時中務大輔殿、上を怨み奉りて、六波羅殿の御謀叛におん身方ある趣相聞え、伊豆なる主人入道以ての外に驚かれ、尾張ノ前司入道幷に當地なる主人親時と共に、言を盡して順逆を說き、所志を飜す樣諫曉再三に及ぶと雖も、中務殿承引なく、事既に破れんとするを見て、是非なく尾張入道に申入れ、教時若し最後の諫曉に從はざるときンば、彼一人を打果しても、世の騷亂を未前に防ぐ樣、汝これより鎌倉に走せ歸り、せがれ親時を介けて、此事を尾張入道方へ申入れよと、前司殿への消息と共に、それがしに嚴命あり。折柄鎌倉急變のしらせに、取るものも取りあへず、今朝未明に伊豆を發し、馬を飛ばして三時がほどに馳せ參じ、腰越口に到ッて承はれば、名越は今朝より合戰、尾張ノ前司殿、中務大輔殿は既に殁落、寄手は今坂の下に向ふ所との事に驚き、何よりも先づ寄手を停むるが急務と存じ、主人方へも立寄らず、そのまゝ馬を乘りつけて、かくは御陣所を騷がし奉り、主人無實の顚末を陳情仕ッた次第……。あはれ大將殿の御明斷によッて、主人幷に尾張入道殿の寃枉をおん雪ぎ下さる樣、偏へに願はしう存じまする。

（ト堂々として陳述する、泰盛聞いて意外の感）

泰盛「然らば尾張ノ前司殿は、六波羅の謀叛に加擔せぬと申すか。あの親時殿も一味せぬと申すか。……越後入道殿より名越殿への消息、只今それに所持致し居るか？

四條「いかにも。これに所持いたして居ります。名越殿御生害の上は、受取るべき相手のなき文……幸ひに御一覽を賜ッて、故入道殿及び主人親時が、潔白の證左とも相成らば、數てもの心ゆかせ。イザ御披見を……。

（ト賴基即ち懷中より、江間入道の消息を出して、泰盛に示す。泰盛披見する。その文言は）

此度六波羅式部殿企之旨者、全憤舍弟相州之榮達而已、非爲義非爲公、專由一身之私、其企甚以聊爾也、我先年雖蒙理不盡之御不審、敢不爭之、忍恥蟄居豆州江間者、一恐處將軍家之御煩、一思天下之靜謐故也、然此度我一門之中、中務大輔獨與彼之隱謀、有內應之企之條、甚以心外之儀也、剩申勸一門之甲乙趣、彌以難許之罪狀、於不及公之沙汰之前、宜嚴責彼教時、旁加炳誠於名越一門之輩、入道殿者爲家督、親時爲予嫡子之間、急々告知予之本意候、教時若不從此儀時、則爲一門之面目、臨機之成敗可然者歟、使者忩々之間、事々令省略候畢、委細在企書之口述、恐々謹言

文永八年二月十日夜半認之　　蓮智　在判

尾張前司入道殿

江間四郎殿

（と認めあり。泰盛みづから之を朗讀す）

泰盛「ナニ『此度六波羅式部殿企ての旨は、全く舍弟相州の榮達を憤れるのみにして、義の爲にも非ず、公けの爲にも非ず、專ら一身の私に由る、其企て甚だ以て聊爾なり。

我れ先年、理不盡の御不審を蒙ると雖、敢て之を爭はず、恥を忍んで豆州江間に蟄居せること、一は將軍家のおん煩ひを恐慮したると、一は天下の靜謐を思ふが故なり。然るにこの度我一門の中に、中務大輔、獨り彼の陰謀に與し、內應の企てあるの條、甚以て心外の儀なり。剩へ一門の甲乙を申し勸むるの趣、彌よ以て許しがたきの罪狀たり。尙や公けの沙汰に及ばざるの前に於て宜しく彼教時を嚴責し、旁炳誡を名越一門の輩に加ふべきなり。入道殿は家督たり、親時は予の嫡子たるの間、急々予の本意を告げ知らせ候、教時若し此儀に從はざるときンば、則ち一門の面目の爲め、臨機の成敗然るべき者歟。使者忩々の間、事々省略せしめ候ひ畢んぬ。委細は全吉の口述に在り、恐々謹言。文永八年二月十日夜半之を認む、蓮智在判。尾張前司入道殿、江間四郎殿……ムヽ、此狀は全く江間入道殿の自筆に相違ないか。

四條「賴基不肖なりと雖、武士の端くれ、常に君國の爲めに一命を惜まざる決心、何しに偽りを申しませう……若しおん疑ひとならば、入道殿熱懇の黨々も數多くムる故、何人にても尋ね下されて……。

（ト賴基少しく激越して抗辯せんとする。此トタン、下手幕張の中に物さわがしく、がや〳〵いふ。そのうちに一人の軍兵下手幕外より現はれ出で）

軍兵「名越寄手の人數、くり上げて參り、只今横地殿これへ御參着でムります。

土肥「横地殿が凱陣されたと申すか。大將殿のお待兼ねだ。すぐにこれへ。

泰盛「いよ〳〵名越の合戰もすんだと見えるな。

（ト此時、横地左衞門次郎師重、從兵二人を引つれ、下手幕際まで來り、從兵をこことゞめ、一人大將の前に進み）

菊地「それがしは、中務大輔殿館へ討手として參り、教時殿は尾張入道殿の館へ加勢に赴かれ、入道の歿落後、家に歸ッて覺悟の處へ、責めかけ〳〵既に距離二三間のあなたに、今しも覺悟の支度されるのを見かけ、討手の頭人横地左衞門次郎師重推參致した。あはれおん元を賜はらんと詰め寄ッたる時、中務殿は聲高く、從四位下遠江守平ノ朝時が七男、中務大輔北條教時は、今武運拙くしてこゝに生害する。最後の一言として寄手の頭人師重殿に申置く。必ず傳へて世の鑑とする樣、しかと傳言賴み申す……と息もせはしく申されてムります。

（ト泰盛は、乘り地になッて聽き入り）

泰盛「シテ、その最後の一言とは？

菊地「教時殿は既に數ケ所の深傷を負ひ、息も絕々に申さるゝ樣は、『抑も此度の企ては、六波羅南方と、かく申す教時と二人の間にのみ計ッた事で、兄弟一門何人も關り知るものはない。然るに兄上尾張入道、最先に疑ひかゝり、不意の討手と聞いて大に驚き、取りあへず救ひに赴いたが、事すでに遲く、むざんや何にも知りたまはざる兄上は、理不盡の不意打に無念の御最後……我が企てよりして、かく兄を殺したるは、罪すでにのがれ難しと雖、式部殿始め此教時か、この度の企てに於ては、やみがたき仔細あッて、事玆に至ッた。いまはの際に……只一言、教時が最後の教訓として、北條一門のものどもに申置くことあり。權勢の爲めに骨肉故舊を殺して顧みざる非道の報いは、やがて子孫にめぐり來て、思ひ知る時があらう。六波羅の怨みも、教時の憤りも、皆これが爲めだと、しかと傳言を賴む。』倘尾張入道の無實は、固く

訴訟是又頼み入る。今は此世に用なし。北條一門の、滅亡を見ざる間に死ぬのは、却て教時が仕合じや……と恨みの形相すさまじく、そのまゝ生害致されて厶ります。
（ト泰盛少しく氣味わるき態、さあらぬ體にて）
泰盛「教時の自滅は、自業自得。最後の世迷言は、牽かれもの〻小歌も同様だが、その一言で見ると、尾張入道は全く此企てに與らぬに相違ない。隨ッて親時殿も與同人でないことは明白じや。然らば坂の下討伐の詮議は無用じや。（軍奉行土肥に向ひ）寄手のものを止め申されよ。
土肥「坂の下へ寄手の人數。一同差控へェ。
（ト土肥軍奉行の命令に、――寄手の頭人海野矢四郎は、幕内に在る軍卒等へそれを申渡しに行く。四條金吾は得意滿面の態にて）
四條「大將殿のおん疑ひ晴れ、主人親時の潔白相立つのみならず、尾張ノ前司入道殿の無實さへ分明致し、再び天日を仰ぐの心地。主從の大慶、忝く存じ奉ります。
泰盛「おゝ、それにしても尾張入道を理不盡に討取ッたるは誰々じや。交名を注して、然るべく成敗致さねばなるまい。
（ト土肥奉行に訊ねる）
土肥「尾張入道方への討手は（ト軍令帳をひろげ見て）大藏次郎左衛門尉、澁谷新左衛門尉、四方田瀧口左衛門尉、石河神次左衛門尉、薩摩左衛門三郎、以上五人！
泰盛「ム〻、然らばその五人は、召捕の上死罪じや。坂の下勢はそれへ向ひ、時刻を移さず搦め取れ！
土肥「坂の下寄手の面々。五人を召捕のため、これよりすぐに、名越の陣所へ急げ。
（ト又々幕内ドヤ〳〵して、海野矢四郎先きにたち、軍兵あまた引つれて出發する樣子。泰盛は四條金吾にむかひ）
泰盛「四條氏！　おん身の陳情に由て、今度の一條明白に落居いたし、自他の爲め祝着に存ずる。但し尾張入道枉死の事は、これにも殘念に存ずる故、討手の者共を成敗して、粗忽を補ふ事と致したから、この旨を江間入道殿へよろしき樣傳達頼み入る。
四條「御明斷によッて理非明白。御一門の爲め天下の爲め、幸ひの儀と存じ奉る。これに就けても深く感じまするは、餘りに幻の世欲にかゝはり、分も大義も打忘れて、只一身の榮利のみを計る、貴賤上下おしなべての惡風、近年頻りに起る大變地夭と、爭亂相應した人心の亂離は、その根元全く教法の雜亂に基くと、吾師日蓮上人の教へ、邪法惡見天下に充ちて、世道人心日に荒む、天地黑白顚倒の世の中！　天子に敵し、將軍を虐し、功臣を亡ぼし、一族を狹め、彼れを疑ひ此を妬み、猜忌咒詛の間にさまよふ世の行末、『夢の如く妄語出來して御一門に同志打起るべし』と上人の讖言、恐ろしきまでに的中致して厶る。現に見たる今日の戰亂。夢の如く妄語……慨はしい世のありさま！　賴基悲歎にくれ申して厶る。
泰盛「吾邊は日蓮坊の教を信じて、左樣に世をはかなむ樣じやが、それを信じて、どんな效能がある？
四條「その效能は、今現に御覽ぜられた通り、伊豆の入道殿をはじめ、主人父子が變に處して聊かも取り紊さず、從容として大義を履み、天命に任して惑はず、一身を捨てゝ、天下の靜謐を思ひ、順逆の義に於て、些かも誤らざる振舞は、既に大將殿にも御照覽あッた論よりの證據。不肖なれども賴基、彼の御内に在ッて、先代以來後見補佐の役目、

正義に依て主君を助けんと、常に日蓮正師の教を鏡として、法華經を主の宮仕へ、所詮は今度の進退も、全く以て正法護持の賜でムりまする…。

（ト頼基の辯明、流水の如く、泰盛は感じもし、迷惑もして、モヂ〳〵して居る時、幕の下手より、從卒かけ來りて）

從卒「ハ、申上げます。

泰盛「何じや。

從卒「只今上よりの御使者、大須賀六郎兵衞殿、御來陣でムります。

（ト一同これを聞いて緊張する）

泰盛「おん使者、すぐにこれへ御案内致せ。

（ト從卒は去ッて、再び下手より執權の使者大須賀六郎を案內し來る。泰盛は床几を離れ、上手の床几を使者にすゝめる。使者大須賀は嚴おごそかに）

大須「今日の軍務、火急の手配り、寄手の進退合期せず、祖忽の軍配、終に無實の見西入道を失つの段、心外の至り。依て申請ふの旨に任せ、大藏以下五人のものを死罪に處し、教時の所領を沒收し、急ぎ六波羅南方時輔誅戮の旨、北方探題義宗に仰付けらる…。即ちその御教書は、これに…。

（ト使者は御教書を泰盛に渡す。泰盛は御教書を披見し終ッて恭しく）

泰盛「御教書の趣、委細承はッてムる。

（ト一同更に緊張の間に…幕）

第六幕

本間重連新穗の館

人

本間六郎左衞門尉重連
新穗の代官　畑野藤內
印性坊
唯阿彌
依智の代官　右馬太郎
中興次郎信重
老女　小木濱
侍女二人
伴僧二人
若黨
小姓

時

文永九年二月十八日

處

佐渡新穗地頭本間重連邸

場景

平舞臺一面の座敷。正面には襖。上手に床。その上手横に書院窓、その外面に庭、植込少々見える。その書院窓の奥寄りの處に離れ座敷などの通ひ廊下ありて、一間の出入口障子。その「折績き」に脇床。その隣りが佛壇、これに香花燈明ありて、今日忌日の佛事を意味す。下手は廊下との間に杉戸を立てゝ、出入口とする。總じて本間重連が、佐渡ノ國新穗なる居館大廣間。ここに本間が老女小木濱は、侍女二人と、談話のところで、幕開く。

小木「申付けた用意は、皆整ひましたか。（ト二人の侍女に向ッていふ）

女一「モー、すッかり整ひまして、いつでもお出でを待つ許りになッて居ります る。

女二「今日の御佛事に、お招きの御出家方は、お幾人でムりませう。

小木「さア、多分例の印性様をはじめ、唯阿彌さま、其れに御伴僧の二人ぐらゐと思ひます。

女一「お齋の出ますのは、いつもの御座敷でよろしうムりまするか。

女二「さうしてあの、ヤハリお酒もさし上げますのでムいませうか。

小木「いつもの御座敷といふ仰せでありました。御出家でも、あの方々は、中々の御酒家ゆゑ、お酒も澤山さしあげる樣、支度をと、廚房のものへ傳へて下され：：モーお客來に間もあるまい。では、支度の整ッた事を、殿さまへ申上げませう。

（ト奥へ入らんとする時、小姓出で主人着座の由をいふ、つゞいて此館の、主當所の地頭本間六郎左衞門重連（年齡四十前後）小姓につゞいて襖口より出で、座敷よき所に着座す。侍女等は敷ものなどの注意よろしく、老女は侍女と共に下に居て一禮する）

重連「賓待の用意は、萬端整ッたか。

小木「整ひましてムりまする。

重連「來客前に尋ね置く事があるから、藤内をよべ。シテ其方共は奥へ參れ。

（此に當館の重臣新穂ノ代官畑野藤内を召び來るべく、侍女は下手へ退く。これと引違ひに、畑野藤内年齡六十五六歲出で來り、主人に一禮して）

藤内「お召しでムりましたか。

重連「おゝ、外でもないが、今日の佛事に出家たちを招いて供養することになッて居るが、その人たちの出頭せざるうち、少し尋ねて置きたいことは、先日來噂に承はッたには、先月十六日の塚原での大問答に、我を折ッて日蓮坊に歸依するものも大分出來たと申すこと、又それに引き替へ、前にも增して日蓮を憎み、折々は不穩の事を企てる者もあるとか申す。それに就ては、河原田の老黨羽黑牛尾の兩人。はじめは當家へも度々參ッて、日蓮を誅戮せよと勸めて居たが、このごろトンと參らなくなッた。噂に聞けばどうやら此頃は、日蓮坊に靡いたとか申す事じやが、其方何か承はッたことはないか。

藤内「その事は、それがしも不審に存じ、中興次郎殿と共に、先づ河原田を調べましたるところ、羽黑も、牛尾も、去年の十一月頃から、主家を退身して、那處に居るか居所分明いたさぬと申す事に、段々詮議致しましたる處、中興次郎殿の丹誠で、やう〳〵兩人の在處も判り、早速尋ねて參り、一部始終を承はりましたが、兩人とも既に改宗して日蓮法師に歸依致し、河原田の主家を見限り、御當家へ奉公の儀、ひたすら某にまで歎願いたしてムりまする。折を以て拙者よりも殿へ言上致さうと存じて居りました處でムりまする。

重連「シテ、彼等兩人は何れに居ッた。

藤内「彼の阿佛坊方に居りました。事の起りは昨年霜月頃、河原田の一黨は印性坊其外の寺がたと謀し合はせ、阿佛坊を先達に日蓮を殺害いたさうと企て、阿佛坊先づ塚原へ馳せ向ひましたるところ、遂に日蓮に說伏せられ、そのまゝ歸伏致したるを、羽黑牛尾の兩人これを憤り、阿佛坊を打果さんとして、さか捻に組伏せられ、既に一命に及ばんとしたるを、日蓮法師に救はれ、殺さんとした怨敵の手に一身を委ねて、それより阿佛坊方に在ッて日蓮法師の教を受け、今は改宗歸伏致して舊宗を捨てたことにより、自然河原田の主家に歸りがたく、其儘退身の願を出して蟄伏致し、よき折もあらば御當家へ隨身致度存ずる故、拙者に御推擧を賴むと申し居る次

第。日蓮と申す出家は、不思議の人でムりまする。

重運「それで樣子が分ッた。彼の日蓮坊が事は、予が鎌倉在番中にも、度々彼れの噂は耳に致したが、信ずるものは如來の如く崇め、又誹るものは芥の如く申す。緣なくして一度も法説は承はらぬが、此度不思議にも、守殿のお預りによッて當所へ配流となり、ここにも敵對のもの多く、すんでに私にあやまたんとまでしたのを制し止め、諸人の嗷訴を取り做しがてら、問答論議を申し勸めて、扨ては先月の問答を興起した次第じやが、あの時の問答の樣子では、風評の如き人物でなく、學問智德も勝れた天晴名僧と感じ入ッたから、惡口雜言のやからを即座に成敗してやッたので、不當人等も是非なく鎭まッた樣であッたが、イヤハヤあの數百人の僧俗、一人として敵し得るものがなく、隨分と見ものであッた喃。

藤内「仰せの如く、あの折の樣子は只事とは思はれませなんだ。獅子の群羊を壓するありさまとも申しませうか。あの時若し殿の御出役がなかッたら、理不盡の奴原、いかやうな間違ひを惹起さうも計られませぬところ、御制止によッて幸ひに賢者をあやまたず、御家の面目をも害はずにすみましたこと、今となり益々仕合せの儀と存じまする。

重運「あの節の捌に付ては、日蓮坊も満足された樣子で、予の歸らんとする時懇ろに勞を謝し申されたが、その時彼の人の申された『鎌倉に合戰が起らうに、なぜ直に馳せ加はらぬか』…。との一言は、今に以て合點が參らぬ。何を目度にあゝいふ事を申したものであらう。

藤内「拙者とても、あの一言は今に不審に存じまするが、殿もお聞きでありましたらう、其節日限まで申されました。一國擧ツて正法を用ゐず、剩へ正法の行者を害ふときは、三災七難とか申す災難の數々國に起り、人民安きところなく、中にも國に同士打の戰爭起り、終には他國より責め來ると、佛説の明文ある由、頻りに申されてムるが、成るほど彗星やら天日が二つも三つも並び現ずるとか、その外大疫病、饑饉、大地震、大風、洪水、なぞは連年の樣に、國を惱まして居ります。蒙古國からも、日本を襲ふべき由牒狀到來致して、上下安き心もなき折から…。國に同士打など…。聞いても慄と致しまする。

重運「イカにも不祥の一言、それが中る樣では國の大變。まア外れて日蓮の顏が潰れゝば、國の幸ひといふものじや。それにしても、彼の人の所論は道理至極の樣じや。さうして法の爲めに度々の法難に遭はれても、少しも怨みとせず、從容として道を樂む樣子。何とも賢明な振舞…。

藤内「コリヤ阿佛坊や、羽黒牛尾の歸伏も、無理ならぬことでムりませう。それにつけても御先代からの歸依僧、彼の印性坊はじめ唯阿彌、その他一味の性瑜坊慈道坊など申す人々は、宗門の敵とは申せ、あながちに日蓮法師を罪なはうとされるのは、出家に似合はぬ振舞、苦々しい事に存じます。

重運「印性坊事は、先代の歸依僧として、格別の取扱を致し居る者じやが、この度の振舞とかく法に過ぎた所爲が多い。既に彼の先月、十六日の論席にも、彼れが問答非運の事は、諸人存知の事であるに、翌日又々日蓮の住所を襲ひ、再びしたゝかに論伏されて、恥の上塗りをしたと申す事じや。今日の佛事にやがて參るであらう。予は家廟升遷の爲め、衣服を改めて來う、其間に篤と申し談じて見い。

（ト重連は奥に入る。殆ど同時に若侍出で來り、印性以下、佛事勤行の爲め參上の旨を告げる。すぐにこれへ通せとあッて、印性坊先きに、唯阿彌これに次ぎ、伴僧二人隨從して、座敷に入り來る）

藤內「コレは〳〵早々の御入來、御苦勞に存じまする。

印性「今日はチト內談の筋もムッて、この方よりも推參いたさうと存じて居ッた所、折からの御佛事に、おん招きを蒙り、渡りに舟と、早速唯阿彌殿をも同伴致して、參上いたしてムりまする。

唯阿「今日の御佛事に、隨喜出頭致してムりまする。

（ト伴僧二人も式禮する。印性は少し座を進めて）

印性「扨て御代官！　外の儀でもムらぬが、例の日蓮。御案內の如く、常に諸宗諸佛を誹謗致すは申すに及ばず、上の御政道をも非議致して、諸人を惑はし、內亂をも企てかねまじき不當の言行に、鎌倉殿も持餘され、何とか亡きものにして、世の難題を除かんとの御存意の由は、河原田の殿よりも度々承はるところ。生れつきトカクに辯巧邪智の彼れ、別けて魔法咒術をも行ふものと相見え、彼の爲盛入道をはじめ、河原田邊の甲乙も、すでに彼れが邪辯に說き惑はされてムる。この上緩怠に過ごす時は、國中の騷動とも成りかねまじうムれば、度々諸寺より訴訟申上げたる通り、急に何とか御成敗なされずば、御當家の瑕瑾とも相成らうかと存ずる仔細もムッて、御存知の爲め、それをも言上致度と存じて…。

唯阿「お聞きになッたら、定めしお驚きなさるほどの事でムる。

藤內「日蓮を成敗せよと申す事は、昨年來方々よりの御訴訟も度々ござッたが、殿には理不盡の檢斷は決してならぬと、篤と彼の人の言行に心を配りたまひ、雙方の申條を偏頗なく聞取り、近きうちに理非を決擇すべき思召ゆゑ、それをお待ちあッて然るべく存じ申す。但し聞いて驚くほどの事と申す、それは何體の事でムるな。

印性「されば、日蓮日頃の邪見いよ〳〵長じ、この頃深更より未明にかけ、山上に登ッて天下を咒詛する由、確かに突きとめてムる。高聲に呼ばはる傍若無人の暴言、「梵天帝釋あはれ此日本を亡せ！」と口ごとに叫び、守殿おん始め武藏守殿、地頭諸役の面々より、天下の名僧高德、當國諸宗の僧徒、わけて拙僧の事も、調伏致し居ると申す事である。凡そ國家の御恩に預るもの、いづれも天下泰平萬民快樂とこそ祈れ、天下大亂を願ひ、上を咒詛するとあッては、紛れもなき謀叛人。…これを此まゝには捨置かれますまい…。

唯阿「急ぎ御裁斷、肝要と存じまする。

（ト藤內これを冷やかに聞いて、「又か」と言はぬばかりの樣子にて、猶冷やかに）

藤內「仰せの如くんば、由々しき天下の一大事。このまゝには致しがたいと存じ申す。何はともあれ此旨殿へも申上げ、何とか良き思案を廻らすでムらう。既に時刻も過ぎてムれば、設けの座敷に齋の用意も致しました故、とにかく、あれにて御休息…（ト少し笑ひを含んで）腹が空ッては戰も出來ぬ道理、（印性等ヤ、訝る、其れを偸み見て）あハ、、、まア御ゆるりと御休息…。

（ト言ひかけて、委細構はず、高聲に人を召んで）

藤內「設けの御席へ御案內を…。

（ト此時侍女二人出で來り、印性等に會

釋して)

侍女「どうぞ、こちらへ。

(ト先きに立ッて導く。印性等は張合ひ抜けのしたる體にて、是非なくスゴ〳〵と起ッて、行きしなに)

印性「デは、只今の事は直に殿へ言上下されて、急々におん計らひを……。

(ト言ふを、藤内耳にもかけず)

藤内「どうぞ御席へ。

(ト追ひ出す様に敬遠的に、ワザと空恭しく言ふ。よんどころなく印性等は、侍女の導くまゝに、上手廊下の方へと去る。此時若侍遽然として出で)

若黨「申上げます。只今鎌倉表より御代官右馬太郎殿、火急の公用に付、早船を以て御參館と申す事でムります。

藤内「ナニ、依智のおん館より右馬太郎殿が、ムゝ、すぐにこれへ御案内を。

(ト若侍去る。藤内不審の思ひ入れ、獨語にて)

藤内「ハテ、何事が起ッたか知らん。代官の來島とあるからは、輕い事ではあるまい。

(ト思案しつゝ、奥の人をよぶ。老女小木罷出で來る)

小木「何ぞ御用事で……。

藤内「何か急用出來して、依智のおん館より代官殿御來館いたしたと、殿へ言上をお頼み申す。

小木「何御用か知らぬが、氣がかりな。……若しや奥様のおん身にでも……。

藤内「イヤ御公用と申す事故、お裏向の御用ではムりますまい。

小木「なにはともあれ、すぐに殿さまへ申上げませう。

(ト老女は襖口より去る。重連家廟拜禮のためとて、衣服を改めたまゝ、急報に接して出で來り)

重連「鎌倉表よりの急用とは何事であらう。

藤内「何事の出來致しましたことか。不安至極に存じまする。

(と擬案中へ、導かれて右馬太郎出で來る)

右馬「殿には御健勝にわたらせられ、大慶至極に存じまする。

重連「ムゝ、その方にも長途早打、下向大儀の至り。シテ、その火急の用とは何事じや。

右馬「殿！ 天下の大亂が起りました。

重連「ナニ、天下の大亂とは？

藤内「鎌倉にか、京にか？

右馬「京も鎌倉も、鼎の湧くが如き大騷亂、今にも世が覆りさうな騷動が起りました。兼て御賢知の通り、六波羅式部大輔殿は、上のおん兄上にありながら、弟に世を奪られたりとのおん憤り淺からず、御一門の中にも、それこれ確執の絶え間もなき疑ひの世に、關東六波羅の往來激しく、何か事起りはせずやと案じて居りましたるところ、いよ〳〵六波羅南方には、御謀叛の企てあり、鎌倉の御一門にも、名越御兄弟同心とあッて、俄かに討手を尾張ノ前司殿幷に中務大輔殿方へ向けられ、この十日の夜より、八谷七郷一時に騷ぎ立ち、十一日未明より合戰はじまり、見西入道と、教時殿は討死……。

重連「シテ、坂の下の江間殿は……。

右馬「坂の下親時殿も、既に討手の向はんとする時、彼の御内の名物男四條金吾頼基殿の陳情に由ッて、主家の無實潔白致し、備より六波羅追討の御教書下り、見西入道を討手の諸大名五人まで、即日斬罪の御成敗。それやこれやの混亂に、上下安きこゝろなく、諸家ともに兵備を怠らず、今にも大兵亂の起らん氣色。諸國在鄕ひとしく物騷がしく、日本

國中の大禍亂とも成り申すべき模様。此内亂に付ては、日蓮坊が諫言の旨的中せりとあッて、『流人なりとも粗略を存ずべからず』との御沙汰。諸國御家人おん召寄の御下知と共に依智のおん館まで達してムりまする故、取る物も取り敢す、夜を日に繼いで、此旨言上の爲め下向致してムりまする。

（ト此急報に、重連も藤内も、驚くこと大方ならず、重連は思はず藤内と顔を見合はせ、「扨ては」といふこなしありて）

重連「幵はまことに、天下の一大事。それに就けては當方にも思ひ合はすことあり（ト藤内を見て）……いよ〳〵以て、日蓮御坊は凡人でないわい。

藤内「仰せの如く、上人明言の照覽、天地を見貫く明察、今さらの如く恐れ入ッてムります。鎌倉殿御一門の確執は、取りも直さず、つれて天下の亂れと成り申す。全く以て天下の一大事に相違ムりませぬ。

重連「諸國の軍勢催促の上は、直にも鎌倉へ馳せ上らねばならぬ。（ト右馬太郎にむかひ）其方はこれよりすぐに取つて返し、依智の館の惣勢を引きまとめ、卽日鎌倉へ先發致せ。予も當所より直ちに鎌倉へ馳向ッて一つにならう、（ト今度は藤内に向ひ）當地の人數は、是より直に殘らず召し出して、出陣の用意をさせよ。

藤内「委細心得てムりまする。

重連「偖上人の明斷符節の上は、是迄の疑惑のこりなく晴れた。依て改めて歸伏入門の決心じや。其方は何と思ふ。

藤内「實は自分よりも申上げようと存じて居りましたところ、明智高德比類なき大導師！ おん歸依の趣、御尤千萬に存じ奉ります。

重連「鎌倉發向の前、是非とも戒を受け、然るべき訓言をも聽聞して、陣中の護りとせう。其方これより師の許へ推參して、重連一家歸伏の旨申入れよ。我れは直ちに軍役の手配り……。誰れかある……、信重を召べ。

（聲に應じて、中興次郎出で）

中興「先刻より、お次に控へ居りました。

重連「軍勢催促は時刻を移さず、領内一統へ申觸らし、兵粮武具早船の用意は今明日中に相辨する樣。人數は一日も早く館へ參集の事を軍役のものへ申渡せ。藤内は直樣、上人のおん許へ……。我れは是より出陣の用意にかゝらう。

（ト夫々部署を定めつゝある時、別室にて齋に就き居たる印性以下の諸僧、酒氣に足許も危げに座敷に來り、重連以下に一禮して）

印性「殿！ それでは、これより御忌日の勤行に取りかゝりませう。

（ト佛前に進み、勤めにかゝらんとする此時、重連きッとして）

重連「モー、その勤行は無用じや。

（これを聞いた印性等、酒の醉ひもさめる程に、びッくりして）

印性「なんと、仰せられまする……。

唯阿「勤行無用とは……？

（重連は、印性等をはッたと睨んだまゝ、一言もなく、激昂の態にて中興等にむかひ、一聲高く）

重連「出陣の用意！

（ト言ひ捨てゝ奥へ、ッと這入る。あとに藤内は衝立ち上りて、印性等にむかひ、にらみ付けて）

藤内「モー、汝等に用はない!!……。

（印性等驚き狼狽へる、この模様よろしく 幕）

聖典の本據

【種々御振舞御書】‥《塚原問答》‥

又なにとなくとも頸を切らるべかりけるが、守殿の御だい所の御懷姙なれば、しばらくきられず、終には一定ときく、又云、六郎左衞門の尉殿に申てきらすべきはかり事をなすと云。多の義の中に、これについて守護所に數百人集りぬ。六郎左衞門の尉の云、上より御狀下て、あなづるべき流人にはあらず。あ　まちあるならば、重連が大なる失なるべし。それよりは法門にてせめよかしと云ければ、念佛者等、或は淨土の三部經或は止觀或は眞言等を、小法師の頸にかけさせ、或はわきにはさみて、正月十六日にあつまる。佐渡の國のみならず、越後越中出羽奥州信濃等の國々より集れる法師等なれば、塚原の堂の大庭山野に數百人、六郎左衞門の尉兄弟一家、さならぬもの、百姓の入道等かずをしらず集りたり。念佛者は惡口をなし、眞言師は色を失ひ、天台宗ぞ勝べきよしをのゝしる。在家の者共は、聞ふる阿彌陀佛のかたきよとのゝしり、さはぎひゞくこと震動雷電の如し。日蓮は暫くさはがせて後。各しづまらせ給へ、法門の御爲にこそ御渡りあるらめ、惡口等よしなしと申せしかば、六郎左衞門より初て諸人然るべしとて、惡口せし念佛者をば、そくびつきいだしぬ。さて止觀眞言念佛の法門、一々にかれが申樣を、てうじあげて承伏せしめて　ちやうとはつめ〳〵一言二言にはすぎず。鎌倉の眞言師禪宗、念佛者、天台宗の者よりもはかなきものどもなれば、只思ひやらせ給へ。利劍をもてうりをきり、大風の草木をなびかすが如し。佛法のおろかなるのみならず、或は自語相違し、或は經文を忘て論と云ひ、論を忘て釋と云ふ。善導が柳より落ち弘法大師の三鈷を投たる、大日如來と現たる處の、或は妄語、或は物にくるへる處、一々に責たるに、或は惡口し、或は口を閉ぢ、或は色を失ひ、或は念佛ひが事也と云ものもあり、或は當座に袈裟ひら念珠をすてゝ、念佛申まじきよし誓言を立る者もあり。皆人立歸る程に六郎左衞門の尉も立歸る。一家の者も返る。日蓮不思議一云はんと思て、六郎左衞門の尉を大庭よりよび返して云、いつか鎌倉へのぼり給べき。かれ答云、下人共に農をさせて七月比と云云。日蓮云、弓箭とる者は、公の御大事に合て、所領を給り候をこそ田畠つくるとは申せ、只今軍のあらんずるに、急ぎうちのぼり高名して所知を給らぬか。さすがに和殿原は、さがみの國には名ある侍ぞかし。田舍にて田をつくりて軍にはづれたらんは恥なるべしと申せしかば、何にとか思ひけん、あはてゝものも云はず。念佛者、持齋、在家の者共、なにと云事ぞと怪しむ。（類纂四〇一）

【佐渡御書】‥《佛の棟梁》‥

今年正月十六日十七日に、佐渡國の念佛者等數百人、印性房と申すは念佛者の棟梁也。日蓮が許に來て云、法然上人は法華經を抛よとかゝせ給て一切衆生に念佛を申させ給て候、此大功德に御往生疑なしと書き付けて候を、山僧等の流されし、並に寺法師等、善哉善哉とほめ候を、いかがこれを破給と申しき。鎌倉の念佛者よりもはるかにはかなく候ぞ、無慚とも申す計りなし。（類纂四六五）

【種々御振舞御書】‥《武藏守の新迫害》‥

さて且くありて世間靜まる。又念佛者集りて僉議す。かうてあらんには我等かつえしぬべし。いかにもして此法師を失はゞや。既に國の者も大體つきぬ、いかんがせん。念佛者の長者唯阿彌陀佛、持齋の長者性喩房、良觀が弟子道觀等、鎌倉に走り登て武藏守殿に申す。此御房島に候ものならば、堂塔一宇も候べからず、僧一人も候まじ。阿彌陀佛をば、或は火に入、或は河にながす。夜もひるも高き山に登て、日月に向つて大音聲を放て、上を咒咀し奉る、其音聲一國に聞ふと申。武藏前司殿是をきゝ、上へ申までもあるまじ、先國中のもの日蓮房につくならば、或は國をおひ、或はろうに入れよと、私の下知を下す、又下又下る。かくの如く三度。其間の事申さざるに心をもて計ぬべし。（類纂四〇四）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第七幕　眞野御陵道

人

日蓮上人
日朗法師
阿佛坊
同　妻　千日
同　一子　藤九郎盛綱
盛綱の妻　沖野
本間六郎左衞門重連
中興次郎信重
羽黑甚作
牛尾與太六
農民　式部の長吉
同　佐山の甚左郎
同　松塚の兵四郎

時　文永八年二月二十一日

處　佐渡國眞野御陵道の山路

場景　一面の山路、上手に遠く御陵の森林見え、中央より下手へかけて、眞野灣見える。あたりは杉の木立又は松などの林木ほどよく間生して、海を數町のあなたに望み得るほどの高さの丘地。處々に立木の舊き切株もあり、山にありがちなる岩石も處々にあり。その左右には密林ありて、閑寂の氣にみてるさま、總じて眞野山林の或る一部位にして、御陵間近の山路のつもり。花道のかゝりから、ゆるき坂になり、中央で平地へ出る心。中央の平地より奥の眞中ごろに、思ひ切ッた大木に、程よき立木一二本ありて、これを帶して正面に海をすかし見る。海の左手には長く岬が出て、長汀曲浦のさまを示し、その近き所に船二三艘つなぎあり。中に半分ほど定紋(本間家の)つきの帆を張りかけてあるのも見える。

幕開くと、こゝに此附近の居民で、順德天皇のおん乘物に奉仕したものゝ末孫と傳へられた舊家、泉澤の式部長吉、同佐山甚五郎、八幡村の松塚兵四郎等、その當時祖先の農民が、日々御陵參せりといふ傳說を翻案して、その名も其儘に今のを用ゐた樵夫體の農夫が、今しも御陵參の途中で相逢うたといふ處。甚五郎は六十歲位、兵四郎は三十四五、(是は第四幕の塚原に出た男)長吉は二十七八といふ年頃。甚五郎と長吉の二人は、未明にお參りをすまして、今戾りがけの處へ、兵四郎はこれから參拜といふところで、今こゝで出逢ッての話。先づ上手より甚五郎長吉の二人、話しながら下りて來る。

甚五「それでも、大分日が永うなッたで、早うから明るいことじや。

長吉「からして、毎日お詣りをするのは、廣い世界に、たッた新穗の入道殿御夫婦と、吾々ばかりかと思うたら、この頃見慣れぬお坊樣が見えるなう。

甚五「ムヽ、あれが評判の日蓮さんじや。新穗の入道どんが、弟子にならしッて、それで能う作立ッて參られるのじや。

長吉「それじア、矢ッ張新院樣に緣のある人でもあるのかなう。

甚五「さうではなからうが、矢ッ張出家じやから、入道どんが賴ましッたのだらうわ‥‥おゝえらう明くなッた。枯木でも拾ッて早う戾らうぞ。(ト下手を見て)おゝ、あしこへ誰か見えるぞ。

長吉「あゝ、松塚の兵四郎どんだ。

(ト此時下手木立の中より、兵四郎荷籠を背負ッて上り來る)

兵四「あゝ、二人ともモーお參りはすんだのか、大そう早いことだなう。

甚五「お早うごわんす。あんたも能う參られることじやなう。

兵四「御同樣に、新院さま御在世から、一通りならぬお惠みを受けたで、せめて御恩がへしに、お墓の掃でも‥‥。

甚五「今思ッても勿體ない。吾々ごときものにまで、折々おことばを下さッたからなア。冥加なことだ‥‥。

兵四「わし等の宅へも時々おいでになッて、頂戴ものもある。何だか知れんものじやが、天

子さまからの下されものじやで、子孫代々の家の寶にするつもりだ。

甚五「時世とは言ひながら、何ちふ情ないことだか。天子樣がこんな島へなア……。

兵四「こなたは、京からお供してござッたといふことだが、生れは京か？

甚五「俺は京の在の八瀬じや。その時分俺は二十歳で、この長吉の爺と外にまだ二人で、お輿を舁いて來たのじや。

（ト此時林間で、鶯が啼く）

兵四「お互に冥加の身だ。精出してお參りをしようぞ。だが餘り大びらにすると河原田の殿さんにならまれるでなア。

甚五「それじやで、朝早くか夜參ることにして居るのじや……。おゝ、モーお日さんが上らッしやるげな、急いで歸りませう。まアゆるりお參りなされ。さア長吉や、歸らうぞ。

（ト これにて相別れ、甚五郎長吉の兩人は下手へ、兵四郎はせおひ籠を道傍の林の中へ置いて、上手坂みちへ上ッて行く。これと略同時に花道より、千日藤九郎盛綱沖野出で來り、花道途中にて、盛綱は千日に向ひ）

盛綱「朝業の御歩行で、嘸御難儀で厶りましたらう。

千日「なんの〳〵、お上人さまや良人を御覽、まだ闇いうちからの御參詣。日々の御修行、大ていなことではない。

沖野「此朔日からの御別願で、日々の御參陵も、ちやうど今日が三七日の願あけ故、御勝緣にあづかりたいと、無利にお願ひ申して、母上さまのお供に……。

盛綱「お上人さまには、モーお戻りの時分かも知れませぬ。早く參りませう。

千日「爾うしたら、吾々は後からゆるりと參拜を致しませう……。ともあれ、急いで行きませう。

（トこれで三人は舞臺の坂みちへかゝる。此時上手御陵の方より、上人は阿佛房を具して出で來り、中央に到りて、上らんとする三人に値ひ、上人先づ）

上人「あゝ、千日殿、御子息夫婦も、寒いのに朝早う、よく參られた。

千日「今日は二十一日で御滿願の日と承はりまして、嫁も共々お參りしたいと申しますので、擧家でお跡をしたひましたが、何が扨て年よりや女子の足で、甚う遅うなりまして、御修行の終んだ後へ參り、殘念を致しました。

阿佛「今日はいつもより早う參陵しての滿願の御祈請、一しほ心魂に徹してありがたく存じ申した。

上人「日蓮がこの度の祈願は、天を責めて正法の威力を現はし、一日も早く人々の邪見を醒し、根本より世を救はうと思うての祈請じや。それを法敵どもは、咒詛の調伏のと申し觸して、日蓮を陥れうとするさうじやが、相も替らぬ彼等の邪見、想へばふびんなことであるわい。

阿佛「承はれば、彼の印性の輩、執拗くも地頭へ訴人に及びたるところ、地頭本間殿には、いよ〳〵上人の御明鑒に信服致し、改悔歸正の折柄とて、したゝか印性等を叱り懲されたとか申す……。氣味の佳いことで厶る。

（此談話中、花道より、日朗法師、旅姿にて出で來り）

日朗「おゝ……大上人は彼處に！

（ト一散に駈け出し、舞臺中央間近に進し來り、上人を仰ぎ見て、大地に平伏し、うれし泣きに泣いて、感激の調子にて）

日朗「御機嫌伺ひの爲め、日朗只今參着いた

してムりまする。

上人「おゝ、日朗！　おん身は如何して、この佐渡へ？

日朗「宿谷殿の好意により、牢舍の身ながら、日限を切ッて、配所の省覲を許され、取る物も取り敢ず、夜を日に繼いで今曉未明に着船。地頭役所に於て、當所御別願の事を承はり、天にも昇らん歡びにて、一散に馳せ參じ、かく麗はしき尊顏を拜し、大慶の極みに存じ奉りまする。

上人「俺は、遠流の身ながら、自由の天地に法樂して、聊かも苦痛はない。おん身は禁獄の身として、進退意に任せず。日蓮深く察し申す。

日朗「宿谷殿歸伏の事は、既に尊聞に達した事と存じまする。それに就き法敵どもの隱謀に裏をかゝんと、上へ愁訴の折柄、名越の騷亂によッて、自界叛逆難の御明鑒に驚き、さすがの鎌倉殿も我を折ッて、此度本間殿への下文。これにて法敵の隱謀も水泡に歸し、御法體恙ましまさず、法運めでたき御ン歡び。祝着至極に存じ奉ります。

上人「宿谷殿歸正の事は、北條彌源太殿よりの便りで知ッた。當所にも此度本間氏の歸正。それに先だッては、此阿佛房……。

（ト上人は阿佛房一家を、日朗法師に紹介する。阿佛房以下、千日、盛綱、沖野、皆丁寧に日朗法師に會釋する事よろしく）

阿佛「愚老は即ち阿佛房と申す、老骨無知の僞道心。又これなるは愚妻及び子息夫婦のもの、何分よろしく御教導を……。

日朗「自分は筑後と召され、幼少より隨逐申上げたる日朗でムる、貴老御一家には、恩師上人擁護御供養のおん勳、貴きおん事に存じまする。

阿佛「此度計らず御省覲のおん望みが協ッたのは、全く貴僧の御孝心を佛天が憐れみたまひてのおん守護と存じ申す。

上人「宿谷殿の執成しは殊に拔群の好意じや。辨の阿闍梨は、片時も留守を離せまい。その餘のものは、かはる／＼省覲苦しかるまじと思ふ。

日朗「この次には伯耆阿闍梨と佐渡阿闍梨の兩人渡來、おん給仕の順番とか承はッてムりまする。

上人「有馬太郎殿が見えたは、一つは軍勢催促の爲めと申すことであッた。北條一門の積惡も、いよ／＼總勘定の時が來た。日蓮の勘文に驚いても、心からの眼はまだ覺めまい……。それが緣となッて、當所の地頭が歸伏したのは、まだしもの事じや。

盛綱「それに就いては、かねて羽黒牛尾兩人より新穗の館へ仕官の望みも、すぐに協ひ、此度の軍勢催促を幸ひ、夜前すでに出陣のおん供を許され、人數のうちに加はり申してムる……。これも偏へに上人樣の御高恩忝いことに存じまする。

（此時阿佛房、遙かの浦曲に、今しも帆をあげんとする船を見て、藤九郎にむかひ）

阿佛「出陣と申せば、あの今がた帆をあげかけて、半ば紋所の見ゆる船は、たしかに本間殿の用船の樣じや。せがれ！　あの半ば張ッた帆の紋どころを見イ、本間殿の定紋ではないか。

（ト居合はす皆々、おもひ／＼の姿勢にて、いづれも海岸の方を眺める。藤九郎盛綱は父にむかひ）

盛綱「仰せの如く、全く本間家の定紋に相違ムりませぬ。

阿佛「では、今朝出船と見えるわい。

上人「然らば、本間殿参詣のため來訪との事ゆゑ、行違うては氣の毒。これよりすぐに歸ると致さう。

（ト一同もこれに從ッて、歸らんとする時、花道より本間重連以下出で來るを、藤九郎盛綱、これを逸早く見出して）

盛綱「おゝ、あれに見ゆるは、本間殿の一隊。さては御参陵のおん跡を慕ひ、これへ推参致されたものと見える。

（ト此時本間六郎左衛門重連は武装、中興次郎は武装せず、羽黒甚作牛尾與太六二人は武装、これに雑兵數人從ひ、定紋の旗一流れ、馬を軍卒にひかせて、花道より出で來る。重連は花道の七三あたりへ來て、はるかに上人の一行を見つけ、中興等に向ひ）

重連「ハヤ御陵参のおん歸りと見え、上人その他の方々、あれにおわたりある。

中興「然らば、あれにて御見参。誠によい仕合せと存じ上げます。

（トすぐに舞臺へ進む。從兵は最後に、その前には軍旗、下手木立のあたりに乗馬、これは立木に繋ぐ。旗のすぐ下には羽黒と牛尾、その少し前に中興次郎、その先頭に重連すゝみ出で、恭しく上人に敬禮し、扨ていふ樣）

重連「新たにおん弟子の一分に召されたる、後進の小檀越、本間六郎左衛門ノ尉重連、こゝに改めて歸伏入門の御挨拶を申上げます。下拙罪根深重にして、まのあたり天日の光を仰ぎながら之を見ること能はず、叨りに正師を疑ひ奉り、すんでの事、邪坑に墜ちんと致せし處、去ぬる正月十六日塚原問答の節、鎌倉に内亂起るべしとの金言、一ケ月にして符合致してムる、聖智神斷の威力、ふかく心腑に徹して、重連の宿迷頓に醒め、即座に歸伏入信仕り、早速入門おん許しを蒙り、枯骨再び肉を生ずるの悦び、おん禮の言辭もムりませぬ。去んぬる十八日鎌倉殿より當所の軍勢催促のおん下知。即ち夜を日に繼いで出陣の用意に餘念なく、この數日拜謁の折を得ず、今曉出船の間際に臨み、未明の御陵参と承はり、親しく法話を拜し、且つおん暇乞をも申さんと、軍装のまゝながら、おん跡を慕ひ馳せ参じてムりまする。

上人「貴殿が御歸正の次第は、具さに御名代より聞き申した。早速の御賢斷祝着に存ずる。シテ鎌倉へは、今日御出立でムるかな。

重連「十八日に、人數催促の急使到來に付、早速兵糧夫役軍用萬端の手筈中、昨夜深更又々二度目の催促到來いたしましたる故、夜中ながら船出の用意、すぐにも開帆致すべきのところ、一たび上人を拜し、おん禮言上の上と、人數は悉く乗船いたさせ、それがし即ちおん暇乞の爲め参上‥‥。あはれ此折を以て、重連が一生の明訓たるべき御教辭を示し賜らば、生々世々の大恩と存じ奉りまする。

上人「よう問はせられた。日蓮が今出陣間際の貴殿に教訓することは、唯一言じや。戰ふべくば國の爲め、死ぬべくば道のため、法國の爲めに、潔く一身を捧げて、ゆめきたなき振舞をしたまふな。貴殿は相模國にては名ある武士じや。その上今度法華經の信を起された。進退ともに正を履んで惑ふことなく、勇猛精進せられよ。

重連「千金の御教訓、重連一身の守りとして遵守致すでムりまする。但し主命として強ちに申付けられたる儀に就ては、既に所領を賜はり居る以上は是非に付けて主命に從はねばならぬ羽目もムらば、その時はいかに進退致し申すべきか、此儀を御訓示願ひ奉りま

す。

上人「所領を賜はるも、國用のためなればこそじや。況して尺寸の地も、悉く天子のおん物ならざる所はない。將軍たりとも執權たりとも、此日本の王土に居て、毛筋ほども王威に敵する所爲あらば、それはすべて叛逆じや。鎌倉殿は天下を我物とし、民を自分の所從と心得たるが、抑もの誤り。日本國の道に背き、佛法の正理に外れた非分不當の振舞。武士の道は主人に就くが法とのみ考へ、『國の主』も『國の心』も辨へず、國を私し道を枉げて、只々門地權勢の計らひのみに執するは、忠義の大本に背き、誠の武士の道に戻ッた惡見と申すものでムる。

重連「御明誨により目を醒してムる。重連の如き武骨一點のものは、只鎌倉殿より所領を賜はりたる故、鎌倉殿のおん大事には吾一命を捨て奉公するが、『武士の道』『忠義の心』とばかり心得、一天萬乘の大君は、此國の主にてましますことをも忘却して、心にもなく不臣の邪路に踏み迷ひ、知らず識らず大義を亡するもの數を知らず、おもへば身の毛もよだつ、恐ろしの世の中。上人の御明訓に逢はずば、日本の闇は晴るゝ時なく終りませう。危い事でムりまする。

上人「貴殿天晴の明解、感心致した。その樣に鎌倉殿が目を覺せば、日本は大磐石じや。何分にも日本開闢以來、未曾有の下剋上を行ッて怪しまざる鎌倉殿故、その迷根甚だ深い、恐らく滅亡までも目は醒めまい。

重連「世には『承久の事は、陪臣を以て主上を廢立し奉る段、甚だ不當なりと雖、上のおん所爲御無理にして、罪もなき關東を追討仰せ出されたるは理不盡のおん企、殊に政道の要は、民を治め世を鎭むるに在れば、天下の治平には替へられず、已むことを得ずして、三島の御遷幸を願ッた次第、事の起りは上のおん、とが、とや申すべき』…など、論ずるものも見えまする。此說理ありと申されませうや。

上人「後鳥羽の院、義時追討の宣旨を下したまふことは、源武門の擅横を非とし、王權の回復を計らんのおん思立、其來る事既に久しい。仁科盛遠を院に召出したまへるを、强ちに不當として盛遠の知行を奪ッた義時は、日本を自分の物とした僭上。又白拍子龜菊の所領に就ても、天子の敕賜に對しては、臣子たるべきもの一言の違背を挾むべきにあらず。事の是非は別として、大義はいかなる時も動かすべきでない。世間の學者この義に昧く、『治術』と『大義』とを混じて、國の大本を誤ること歎いても餘りある次第じや。所領知行の進退は鎌倉の掟によると申すは『治術』の上の事、違敕を大罪とするは『大義』の上の談じや。義時頑小にして國本の大道に昧く、叨りに治國理民に託して、妄謂の私を爲す。これ皆天地顚倒の大邪見。かゝる邊土に天皇播遷のおん跡を殘し申した事は、拭ひがたき國の汚辱じや。日本の天子は、天照大神の散體にして、直ちに道の源じや。其を害うて『民よ』『國よ』と申すは、膽を離れて膽を尋ぬる愚にひとしい。見られよ、國家覆滅の禍。この前後の世の壞亂が、論より證據の成行じや。

(ト此時上人は、遙かに、眞野陵を指して、敬虔の態度にて、更に重連に向ひ)

上人「本間殿！あの山陵を何と見らるゝ。畏くも萬乘の至尊のおん墓じや。將軍執權守護地頭の面々、一度でも此れへ參拜した驗しがあるか。それのみならず、偶ま院のおん德を慕うて、參詣を企つる下民までも、不快のさまに取扱ふといふ執權守護等の不心得、

言語に絶した逆意ではないか。これを顚倒の世と申すのじや。

重連「重々の御教導、ます〳〵肝に銘じてありがたく存じ奉る。重連の如き、全く妄昧にして、眼前の皇陵には、左のみの用意をも存ぜず、多年不臣の罪を累ね來り、今日正師のおん敎によツて、君臣の大義を辨へ、そら恐ろしき身の非分を知るに至り、心の闇を除きましたる段、眞に蘇生の思ひ。御高恩言語に盡しがたく、深く感銘仕ります。

（トハラ〳〵落淚して大地に平伏する。並居る人々、今更の如く感悟の色深く、一同痛感の淚にくれる。阿佛房は重連にむかひ）

阿佛「本間殿の御歸正は、この佐渡の仕合せ、展べては日本國の幸ひでムる。尙今又貴殿への御訓示によツて、吾々一同も尊い御敎訓を承はり、限りなく感銘いたしてムる。

重連「重連、後進ながら、各々方の驥尾に附し、これより法の爲め一命を捧げて御奉公の所存。よろしくおん導き下さる樣願ひまする。

（ト此時うしろに控へたる羽黑牛尾の兩人も進み出でて、上人幷に阿佛等に深い敬意を捧げて）

羽黑「吾々兩人も、上人の大慈悲に照され、身心の闇を除き、邪見の雲はれ、今日正法の天日を仰ぐことを得て、ありがたく歡悅致し居ります。

牛尾「ことに此度、新穗おん館の御內に召し具せられ、折柄初度の御奉公に、出陣のおん供。これも偏へに各々方のおん導き、忝くおん禮申述べまする。

（ト至誠あふれて感謝する。日朗法師は、重連にむかひ）

日朗「貴殿の御歸正は衆人の模範、羽黑牛尾の兩人は、邪見卽正の手本。それに魁けた阿佛房御一家の入信。靡かぬ草もなき御法の風に、廣宣流布の花も、やがて咲出でませうぞ。

上人「地頭をはじめ、諸人追々改悔の事は、此上なき悅びじやが、鎌倉殿の目が覺めずば、國難は息む時がない。自界叛逆難の後には、他國侵逼難が來る。一切の大事の中には、國の亡びん事は第一の大事であると、日蓮常に申し諭して、一國を諫曉致すと雖、大聲俚耳に入らずの例か、理非正邪の職に在るもの、卑き幻の名利に惑ひ、邪敎の毒に醉うて、政道の源を淸めんとはせず、常に國土の禍亂を釀して、天下の惱みを增す。是れ併しながら一朝一夕の故でない。その誤りの根源、由て來ること甚だ遠い。佛敎の雜亂によりて國土の正氣を失ひ、偶ま信ずるものも、はかなき眼前の富貴や息災を祈り、非望の爲めに人を呪詛調伏したり、男女の愛法を祈ツて、夢の如き逸樂の介けするのが落ちじや。爾らざれば、ひたすらに此世を厭うて、只後生の營みをのみ佛道と心得、少しも世を安んじ國を安んずるの術を尋ぬる心なく、日蓮が口を酸くして、法華經は現世祈りや後生願ひのみの劣乘にあらず、疾く申さば政道の法なるぞと……、敎へても諭しても、藥は口に苦いと見ゆるわイ。

（ト此時日朗法師は、一同の領解にかはりて）

日朗「源濁れば流れ淸からず。佛敎の雜亂が禍の本となツて、この眼前の國の亂れ、かういふ敎に導かれる日本國の災難。過ぎし承久の國亂も、今度の同士打も、これから來らうずる蒙古の襲來も、禍の根は、皆この正法違背の罪に在りとの御師敎、掌を指すごとく的中致してムります。

上人「國を治むるものは、國の心を正さねばならぬ。國の心の根は天照大神の御心じや、その根幹の結んだ花や實が、佛法の眞髓たる法華經じや。法華經と日本國とは、いづれも世界を救ふために存し、俱に末法の時と契ッた一大事因緣が、王法佛法の冥合を期して、一は經典の法門となり、一は天津日嗣の王道となッて、永く世界を照し、廣く一閻浮提萬國の一切衆生を救ふ約束が結ばれてある。政道の主たる鎌倉殿が、先づ此大義に迷ひ居る今日、邊國ながら此佐渡の人々が、正道に目ざめたことは、火中の蓮華じや。……罪人を置く此孤島に、萬乘の至尊のお墓があるとは、……『いぢらしい譽れ』……とも申さうか。

（ト此時御陵の方より、最前上ッて行ッた農民松塚の兵四郎、御陵參拜を終ッて、下りて來て、先に此林間へ置いて行ッた「せおひ籠」を取らうとして、人々の此に居るに、氣兼がちに輕く會釋し、籠をとッて背負ひながら）

兵四「ハイ、御免下され。

（ト下りかける時、阿佛房は早くも兵四郎を熟視して）

阿佛「おゝ、そなたは松塚の兵四郎じやな、日々御陵參をすると噂に聞いたが、誠に奇特な事じや。上人樣！是なる農民の先代は、忝けなくもしば／＼故院の御幸を賜はり、おん言辭さへ下されたもの。それの倅で、かうして君恩を忘れずお參り致し居りまする、おん目を賜はりたう厶ります。

（ト上人は兵四郎を慰諭する樣に）

上人「兵四郎殿とやらん、おゝ、おん身はいつぞや塚原で、蓑笠を惠まれた御人じやな……。よう御陵參をしなさる、奇特なことじや。

（兵四郎は上人にむかひ、丁寧に會釋をして）

兵四「いつぞやは、誠に篤い御教導に預り、あり難う存じます。私はまだ幼少の時で、はッきりは覺えませぬが、おやぢが常々勿體ながッて居りました。年を取ッて足腰がきかなくなッてからは、毎日庭の松の木のところから拜んで居りました。そのおやぢの心を思ひやりますと、お參りをせずには居られません。毎日かうして山稼ぎの出がけに、屹度お參りを致して、おやぢの分と二人前ををがんで居ります。おやぢが申しましたには、天子樣は此國の主ばかりでない、生きた神さまだと、常に口ぐせの樣に申されました。私どもは仕合せなもので厶ります。

（ト落涙せんばかりに愼ましく語る。一同も今更の如くに感じ入る。上人は兵四郎にむかひ）

上人「ア、お前さんは誠の日本人じや！（次に一同に向ひ）豈と奇特の振舞ではないか、（更に重連にむかひ）……本間殿！ほめてお遣りなされ。

（ト此時重連少し進んで）

重連「おゝ、兵四郎とやら、守護地頭さへも等閑の中、百姓ながらも日々の御陵參、あッぱれ忠孝の振舞。聞けば外にも兩三人稀かに日參の者もありとか申す。美しい心がけ、吾等却て恥入り申す。上人の明教に遭はずば、これすらも心づかずに終るところ。領內の民に此樣な奇特の者ありとは、吾等せめてもの面目……！重連改めてお禮を申す。

（ト兵四郎に輕く頭を下げる。兵四郎驚いて）

兵四「これはお地頭樣、エ、滅相な、勿體ない！

（トもぢ／＼する。此の時山麓なる民家の邊らしく、鷄の聲する。この前後よ

り終りまでに、電氣仕掛にて、度々曙明を染出す）

重連「あゝ、あれは三番鷄。出船の時刻に間もムらぬ。

（ト此の時中興次郎をかへり見て）

重連「其方は、館の留守を預り、萬事政道に粗略なく、御敎の心を得て、民を愛撫する樣心掛けるがよい。又上人御住居の事は、早々大役をあてゝ、一ノ谷へ新居をしつらへ、それへお移し申す樣、御警護萬端、心をつけて御供養申せ。

（トいひ渡す。中興次郎は恭しく）

中興「おん申聞けの旨、委細畏ッてムります。

重連「さらば、これにておん暇申上げまする。

（ト恭しく上人に向ッて拜禮する。上人卽ち重連にむかひ）

上人「めでたき武運をお祈り申す……。モハヤ出船の時刻とあらば、これにて御陵の遥拜を……一同も倶に……。

（ト一同はいづれも御陵の方に向ひ、恭しく合掌遥拜する。此の時恰も正面海上の水平線より、旭日燦々と昇り出づ。一同[illegible]ッて）

日朗「恰も此曈々の日の出！

上人「美しい景色じや……。

（ト阿佛坊は、此の時ハタと膝を打ッて、感悟したりといふ態度にて）

阿佛「昨冬來より此近くに流行致し居る童謠に、『眞野の日の出』……、と申す一句、兎角思案に惱み居りましたが、只今思ひ的り申した。這は正しく上人の御敎に依ッて、日本の魂を回復致す、めでたき國運の行末を、童の口を借りた天の敎訓。眞野の大神のお示しかも知れませぬ。

日朗「シテ、その歌の詞と申すは。

盛綱「霜に枯れても根は殘る。

千日「都忘れの菊の香を。

阿佛「眞野の日の出に匂はして。

沖野「雲の上までことづてん。

阿佛「今思へば、此の日の出！　旭の光を負うた天子の皇陵……。あゝ、法華經と日本！　御陵と上人！　佐渡でなくては得られぬ悟り!!　重連殿！　ありがたいではムらぬか。

重連「入道殿の御述懷。重連が爲めに此上なき首途のおん餞、忝く存じ申す。

上人「首途を祝ふ、折からの日の出、誠によい前表じや。日本は日の國、天祖は日の大神、法華經は日の敎と申す。釋尊の御名は日種と申して日の種じや。人間を『人』と申すは、日の作の義。男を『彥』といふは『日の子』。女を『姬』といふは日の女と申す事。俺の名は日蓮！　日は萬物のいのちじや。『十方佛土の中には唯一乘の法のみありて二もなく亦三もなし』とは佛の金言。『天壤無窮』は天照大神の神敕……。人は東西の別あれども、道は唯一つ！　國は千萬の數あれども、天の日は一つじや!!

日朗「一天四海皆歸妙法！

阿佛「眞野の日の出！……雲の上まで！……

上人「佐渡の空から曙けそめて、やがて世界の闇も晴れよう。……本間殿！　さらば……。

一同「ハ、ア……。

（本間は尤も恭しく手を大地について拜禮、從ふもの同樣。上人は合掌して屹立。日朗法師同じく合掌して後へに。阿佛房以下、上人に向ッて合掌する。此時鶯盛に啼く。同時に山麓の田畝と覺しきあたりに童謠起る。靜かに幕を引く、謠は幕を引いても構はず謠ひきるまで唄ふ。幕引き終らば、出演者も倶に謠ひ、その歌詞終ッて、靜かに相互に敬

禮して退場の事。

聖典の本操

【種々御振舞御書】‥《政道の法》‥

とく申したらんには、政道の法ぞかし。（類纂三九一）

【種々御振舞御書】‥《重連の歸伏》‥

さて皆歸りしかば、去年の十一月より勘たり開目抄と申文二卷造たり。頸切るゝならば日蓮が不思議をとどめんと思て勘たり。此文の心は、日蓮によりて日本國の有無はあるべし、譬ば宅に柱無ればたもたず、人に魂無れば死人也。日蓮は日本國の魂也。平の左衞門の尉、既に日本國の柱をたをしぬ、只今世亂てそれともなく、ゆめの如に妄語出來して、此御一門どしうちして後には他國よりせめらるべし。例せば立正安國論の委しきが如し。かやうに書付て中務三郎左衞門の尉が使にとらせぬ。つきたる弟子等もあらぎかなと思へども力及ばざりげにてある程に、二月の十八日に島に船つく。鎌倉に軍あり、京にもあり、以の外の儀也と申す。六郎左衞門の尉、其夜にはやぶねをもて、一門相具してわたる。日蓮に手を合せ助させ給へ、去正月十六日の御言、いかにやと此程疑申つるに、いくほどなく三十日の内に合候ぬ。又蒙古國も一定渡り候なん。念佛無間地獄も一定にてぞ候はんずらん。（類纂四〇二）

【下山御消息】‥《先代未聞の下剋上》‥

詮する所は實經の所領を奪ひ取りて權經たる眞言の知行と成せし上、日本國の萬民等禪宗念佛宗の惡法を用ひし故に、天下第一先代未聞の下剋上出來せり。（類纂五五二）

【神國王御書】‥《此事の疑ひ》‥

神と申すは又國々の國主等の崩御し給へるを生身の如く崇め給ふ。是れ又國王國人の父母也。主君也師匠也。片時も背かば國安穩なる可らず‥‥乃至‥‥然るに我日本國は一閻浮提の內月氏漢土にも勝れ八萬の國にも超へたる國ぞかし。‥‥乃至‥‥其上天照大神は內侍所と申す明鏡に影を浮べ內裏に崇められ給ふ。八幡大菩薩は寶殿を捨てゝ主上の頂を栖と爲し給ふと申す。佛の加護と申し神の守護と申し、如何なれば彼の安德と隱岐と阿波佐渡等の王は相傳の所從等に責められて、或は殺され、或は島に放たれ、或は鬼と成り、或は大地獄には墮ち給ひしぞ‥‥乃至‥‥然るに日蓮此事を疑ひしゆへに幼少の比より隨分に顯密二道並びに諸宗の一切の經を、或は人に習ひ、或は我れと開見し見て候へば故の候ひけるぞ。云々（類纂五二二）

書簡

歸朝日誌

同志社大學創立記事

辯明書

第二回歐米紀行

新島襄

書翰

解題

新島襄先生が元治元年函館脫奔の時から歸朝の前年明治七年に至るまでの間に家鄕へ送られた書翰其他の文書で、故新島公義君の保藏されたものが、故ありて私の手に歸して居る。公義君は舊名を球彌と云ひ、先生が脫奔せられ、弟雙六君の死去せられたる後、新島家の養子となり、先生の書簡中に屢々記されて居る人である。私は先生の生地上州安中に近き高崎の産で、先生が個人的に管理して居られたブラウン夫人奬學金を與へられて同志社に學び、先生存生中より新島家に出入し、先生の歿後も八重子夫人及公義君と往來した。公義君保藏の文書が私に讓られたのは此因緣からである。

是等の書翰は主として兩親其他の近親に對する情緖を敍べられたもので、頗る人間味が多い。而して其間先生が熱血を注がれたる濟世の壯圖と基督敎の信仰との片鱗を所々に示して居る。又東洋隱遁國の靑年が當時海外の事物を實見して如何なる印象を受けたるかを想見し得るものがある。尙又先生が小事に就ても如何に注意周到であつたかを察することが出來る。素より之れだけで先生の人物、意氣の全豹を判斷すべきではないが、先生の手記は、事の細大に拘らず、先生に親近したものにとつて、特殊の感興があり、而して其內には先生の傳記及び本邦開國史の材料として採るべきものがあるだらうと思はれる。

是等の文書中最も出色なるは脫奔後初めての書信に添へられたる「箱楯よりの略記」であらう。內容に於てのみならず、體裁も亦出色である。隨分の長文であるが、小型の二つ折西洋書翰紙の表裏四頁に、殆んど餘白なく、擴大鏡を用ゆるにあらざれば讀み難き程のペン書細字にて、首尾齊一の行草體を以て認めてある。公義君は別に此の略記の寫本を保藏して居られたから、寫本は他にも傳はつて居るかも知れぬ。然し公義君の寫本には、原書になき漢詩などが挿入されて居る。或は一層詳しき先生の日記からでも採られたものかと思はれる。其他少しく原書と異つた點もある。私の謄寫は、正に宗鄕に送られた原書に忠實ならんことを期して嚴正に校合を努めた。

書翰は種々の西洋紙に認められ、略記程の細字にはあらざるも、華盛頓にて日本使節の用命を帶びられたときの分に聊か匆忙の氣が見えるの外、通じて筆蹟の齊一を保つて居る。

「請願歸朝之書」と「ニコライニ寄スルノ書」とは、內容の興味多きものなるも、私の手にあるのが既に控書又は寫本であつて、原書の現存するものとは趣を異にする。殊に「ニコライニ寄スルノ書」は內容に就いて聊か疑はしき節もあるから、是等は他と區別して看るべきであらう。

大正十二年九月一日の夜、震後の火災が私の住宅の近くに迫つたとき、私は如何にして此の一括の文書を護持すべきかを考へた。爾來萬一其の湮滅に歸するあらんことを慮かり、究極の保存方を考察して居る。先年同志社創立滿五十年に當り、其の謄寫本を作つて先生に縁故深き數氏に頒ち呈した。德富猪一郎氏は新島先生傳記の材料を蒐集して居られたが、是等の文書を、「全く創見」「先生傳中希覯の資料」なりと云はれた。「請願歸朝之書」も其の控書の筆蹟の如何に拘らず、趣旨文章共に如何にも新島先生らしく、先生の作成せられたる文字たることを想見し得ると云はれた。

書簡の署名は色々になつて居るが、「七五三太」（しめた）は先生の幼名、「敬幹」は名乘、「約瑟」（ジョセフ）は米國にて恩人より與へられし名である。ジョセフは親しきものゝ間で略してジョーと呼ばれるから、後年の「襄」は其の音便によつたのであらう。

書簡の公刊は傳記編纂者の裁量を待つのが妥當であらうから、私は之れを差控へて居たのだが、特別縁故者に配布した私の謄寫本は、同志社員編纂委員の希望により昭和五年七月以降の同志社校友同窓會報に連載せられた。此くして、範圍は狹きも、既に公刊せられたのであるから、一層廣く世間に流布することも亦望ましいと思つて、此度改造社の「宗敎文學集」に收錄さるゝことを承諾した次第でわる。

昭和六年十一月　　深井英五

凡例

一、謄寫ハ原書ニ忠實ナルヲ專ラトシ、讀ミ難キ個所ハ之レヲ不明ノ儘トシ、推量ニヨリテ判讀セル文字及ビ原書ノ誤ト思ハル丶ヲ正シタル文字ニハ（？）印ヲ附シタ。

一、固有名詞ノ書キ方ニシテ、一定セザルモノ、及ビ今日ノ用例ト異ナルモノアルモ、凡テ原書ノ儘トシタ。

一、原書ニハ種々ノ括弧ヲ用ヰテアルガ謄寫上ノ制限アルガ爲メ、原書ノ註ニハ『』ヲ用ヰ、編者ノ加ヘタル註ニハ（　）ヲ用ヰルコトニシタ。

一、（　）印ナキモ片假名交リノ説明ハ編者ノ加ヘタモノデアル。

一、各書ノ名題中「箱楯よりの略記」、「[illegible]願歸朝之書」及「函館ニ於テニコライニ寄スルノ書」ハ原文書ニ附イテ居ツタモノデ、其他ハ編者ガ内容ニ據ツテ附ケタモノデアル。

箱楯脱奔ノ際ニ於ケル書簡

一簡奉捧候　向暑の砌御座候處　御祖父様初　御頑健　被成御座候半事大慶に奉存候　随て　私事も　無異勉勵仕候間　乍憚御安慮可被遣候　然は　兩三日以前　私罷在候箱館に於て　寫眞會有之候處　私師匠ニコライ　私に謂ふ男兒苟　四方の　志　をなせば宜しく此身を寫し家郷へ遣すべしと呉々も申聞け候代に寫眞致し呉れ候間　則　捧呈仕候何卒此寫眞を御様ゑ被下　私　事朝夕御膝下に罷在候樣思召決して　私事を御按被下間敷　只々歸錦の事耳御待被下御加養専一と奉存候右得貴意度　如此　御座候　匆々敬白

（元治元年）六月十四日　七五三太　百拜

御大人様　尊下

尚々時候折角御厭可被下候　御祖父様御病氣最早御全快と奉存候へと如何御座候哉奉伺候　御母様には何卒氣を大きに御持可被下様御慰可被下候其上皆々様によろしく傳言奉願上候

米國ヨリノ初信

敬て奉呈鄙辭候　御老太人様初御一統御起居無恙御座候半奉祝賀候扨小子義雖不肖切に國家一分の力を竭さんと存じ成業の爲め箱楯へ罷越候處風説とは雲泥の相違にて格別使る（へ）き人物も無之且つ少年の狂氣業若し成らざれば死すとも不歸と決心仕生命に拘り候半國禁をも恐れず及び義すて難き主君を棄て情わかれ難き親族をも不顧去々年六月十四日夜半竊に港内に泊せし米利堅商船『二本檣にてベルリコンと名く』に乘移り遂に萬里の外に跋渉仕長く擧族をして悲哀に沈ましめん事多罪の至萬方難謝候然し小子竊に謂ふ此擧敢て君父を捐るに非ず且つ飲食榮華のためにあらず全く國家の爲に寸力を竭さんと存じ中心燃るが如く遂に此擧に及び候」扨箱楯を辭してより所々遍歴仕漸く去年六七月十七日無恙合衆國の名港ボストンに到着仕候『箱楯よりの略記別紙にのせり』扨小子茲にあり船番を爲せしに或る日船主ハルディー君『此前の二本ばしらの船主に非ず全く別船にてワイルドロバルと名くる船主にして當港指をりの大穴家より小子支那にて此船にのり移れり』船見聞に參り小子の志如何を問はれしゆへ（　）小子實を告げしかは船主深く小子の志に感じ早速小子をして上陸せしめ小子の爲によき衣類を求め呉アンドワ『此港より北にあたり十一里』縣の大學校に送り盡く雜費を拂ひ呉候故小子今は辛苦の雲霽れ學問專一に仕候扨古人の申せしに乘出せし船再度廻し難し云々にて小子唯々成業をのみ期し居候然し時々大人及び御老大人御母殿定て小子の擧を御歎き被遊候半と奉推察候へば胸中如烈（裂）悲涙袖を濕し候何卒大人如此大膽の兒を御持なされ候は御身の不幸と思召且つ小子の世間の放蕩無頼の兒と向輩同じきかを御比較被遣數年の間小子は無きものと御明

らめ切に御老大人及び御母様を御慰め且つ御身の御保養專一に可被遊樣 奉 合掌 候 扨縷々申上度も臨 書心緒錯雜 泪筆共に下り萬一も難盡 候多罪萬恕

不忠不幸の兒

新島七五三太

敬幹

尊大人

侍史

遲るともとうぞまつへし千代の色

猶以時候折角御厭可被遊候樣奉 神祈候且つ御食用の義は 新鮮にしてこなれ易き者と 奉 願 候

小子＊神の加護によりてや 甚 健康にして日々學問修業 仕 をり候間何卒御安心可被下樣奉 願 候 此神は 日本の 木像金佛とは違ひ世界人間草木鳥獸をつくりし神にて永生不朽實に我等の尊敬祈禱すべき神なり

御老大人樣及御母殿其後如何被爲在候哉 實に心痛 仕 候親族は勿論飯田（？）星野菅沼諸君へ内々御傳言可 被 遊候

雙六殿は 如何 有之候哉 何卒 學問修業のあまり（？）養生專一に 被致候樣御傳言賜 可候

○杉田樣は如何被爲在候哉 宜 御傳言可 賜 候若し御病氣等も御座 候はゞ杉田氏へ御相談被成 決してまじなひ抔に 御迷ひ被 遊間敷候

冬中雪降り 候得と格別の大雪にても無之一尺 或 一尺半を度とす然し寒さは大に江戸とは相違いたし極寒の日に寒暖計零より十七八度下れり去 乍衣服は 盡 毛織ゆへ格別の寒さを覺不申候

おみよ殿は如何有之候哉何卒よきに御なぐさめ被下且つ以前のカンシャクをおさへ御母殿と共に内々のとりしまりを被成候樣御傳言二三の寫眞像 奉 呈 候間小子御機嫌伺に罷越と思召時々御詠め可被遊樣 奉 願上候且つ 箱楯より奉 呈 候寫眞像 御請取被成候哉奉 伺 上候

（日付ナシ 但シ箱楯ヨリノ略記ト同時卽チ慶應二年ナリシナラン）

箱楯よりの略記

元治元 甲子年六 月十二日箱楯の築島に於ける米利堅人の家にて 同國商船の船頭ウイルレムセーウォルなる者に逢ひ彼の國の學問修行いたしたく且つ地球を一週せんとの志願を談ぜしかば彼深く我の 志 に感し遂に小子の志願を遂けしめん事を答へ且つ來る十五日の未明に彼の船當港を出帆せん由にて十四日の夜九ッ時迄に彼の船に乘込むへき由を約束せり其故我早速魯人の家に『此時彼魯人の家に寄宿せり』歸へり所持の書物大小及び衣類をのそき 盡 く不用の物を賣拂ひ早々出帆すべき用意を爲せり十三日家鄕へ遣らんとて一の寫眞像を取れり」十四日家鄕への書狀を認めり此夜四ッ半過に一とからげの荷物を負ひ大小を懷中にかくし魯人の家を去り彼の築島に參り岸に繫ける小舟を掠取り亞國の商船へこぎよせしに曾て試みざる仕事致出（必？）死の力を竭くしようやく其船に乘込む事を得たり此時 甚 勇みをりしが 豫め父母の歎けきを推察し不思も此の一首を得たり

如何にせんあゝいかにせんいかにせん父母のなげきを如何にとやせん

十五日未明に當港揚帆せり」十九日伊豆の諸島を急き遠州灘に來れり。船頭より言付けられし我の役目は 船頭部屋の掃除彼の給仕及茶碗等を洗ひ彼の犬をやしなふ等なり。日々船頭吾に

僅かの英語を教へ呉れり」二十一日三枚の襦袢を洗へり船頭吾に一の筒ぽふ及一の股引を與へり」二十一日より二十六日迄一隻の島を見ざりし然し時々水鳥の飛ふを見たり」二十七日早朝一島を見たり且つ此島より僅かの距りにて一の日本船を見たり此は琉球へ通ふ日本船か又は漂流されし者哉を知らされど一しほ日本の觀を爲し我をして船路の退屈を消せしむ」二十九吾海水の茶色なるをあやしみ或水手に尋ねしかば楊子江より流れる水此色を爲す由を談せり。此日晝後我吾の髮をきり一半を保ち一半を海に抛ち祝して曰く河水源を發し直に大洋に來る他日我が業應に如此なるへし」晦日日暮揚子河口に於ける小府扶桑に落碇せり」七月朔日蒸汽船を雇ひ其船を引き上海港に到る上海に碇せる各國の商船數百を以數ふるに至る就中英船居多且つ支那人の商船は凡百艘よ」同七日吾其船の再び日本へ歸る由をある水夫より聞けり」同九日我の船頭或る船頭を透（誘？）ひ來り我に告げて曰く此船無據き事件有之再び日本へ歸らねばならぬ故に我この船頭をして汝を取らしむ、汝宜しく後に來侍すべし、彼必らす汝の志願を遂げしめん。夕刻に他船の「メートは此船に來り吾を連れ他船に移らしめり。

但此船は三本檣にて長さ三十間ヨ巾六間にしてワイルトロウアルと名つく且つ此船主は合衆國の名港波士頓の貴人アルヒニスハルデー君なる由」船頭はホレースエステーロルと名く、扨此の船頭は甚立派なる人にして恰も畫きたる。翰（鬪？）羽の如し。船頭吾を呼てジョーセフと名く且つ吾に船頭部屋の掃除及び給仕等の役目を言付けり」

十二日船の下方に日本旗と英旗とを閃めかしたる蒸氣船を見たり是は日本使節歐羅巴より英船に乘り茲に到る由。船頭吾に二の上衣二の股引を與へり。吾七ケ日日毎に衣物の洗濯を爲せり」同二十日一値日の後に英吉利日本と兵端を開かん由を船頭より聞及べり、我歎じ曰くなんぞ我州人日をひらき當時の形勢如何を見さるや云々」

八月七日此船福州に至る由にて午後一時上海より揚碇し小蒸氣船にて上海河より引出し午後三時に此河口に落碇す但し風波のあしきによる同八日朝五時開帆す」同十一日夜八時に福州のボダに到著す但し此所より福省府迄は六里よのよし。扨支那人は多く困窮にして格別の數導なき故か人々竊盜に巧みなる由にて船頭吾をして日々支那人の番をなさしめり」十五日支那に於ては鷄肉と飯とを月に備ふる由猶吾の團子の如し。是實に馬鹿らしき事にして其國俗如何を徵するに足る、依て願我州人日をひらき正になすへきと爲すべからさる者を差別せんことを。但し日月星辰は決して人間の敬拜すべきものにあらず。パムエロ（と云ふ？）橙の如き香にて大サ凡十四斤の彈丸位。味恰も味甘の如き者を喰へり。此夜月を詠め且山河の風景の異るを見家鄉如何を思やりて「父母はさて

如何ありけんけふの月

此福州江は上海河の泥色水と違ひ清澤にて味甘く之を吸（汲？）み飲料となすに足る」八月晦福州出帆。船荷は盡く丸太材木にて再び上海へ歸るべき由」九月十三日上海へ到着。此夜船頭吾に告けて曰く汝（の？）先船ベルリヨンの船頭長崎へ參りしかば彼地のコンスル彼れの汝を日本より此地に連れ來る由を聞及び、彼れの日本條約に違へるを怒り彼を其船より放逐して別の船頭を得たる由。日本內海の一諸侯英佛蘭三ケ國と戰爭せし由、且三ケ國の兵船總て十一隻にて其臺場市街等を燒拂ひし由」十月二十六日上海より開帆し十一月五日香港に到著香港（は？）廣東諸島の一にして英吉利の所轄なり。我一日上陸し所々見物せしに洋

人の家所々に有之殊の外立派なり且つ支那人の家も見世かけは隨分見苦しからされど其流し本雪隱のきたなき事實に支那人の懶惰不潔を徵するに足る且つ支那人上向のみ飾り内心野鄙にして更らに敵愾の志なく宜なり英人に輕侮せられ家犬の視を爲さるゝは(?)依て望む我州尊大盲目の人々支那人の轍をふまざらん事を」十一月二十四日朝六時三十分香港出帆。但し此行は交趾の柴棍に到り米を積み再此地へ歸る由。同晦日サイゴン河口に入る。此河口の左岸に於ける小山の頂上に燈明臺ありて佛郞西の國章を閃けり。但此河口の廣さ兩國川の三四倍なれど漸く入れば漸く狹く凡兩國河位或は其より狹き處あり此河の兩岸は盡く泥にして小樹重々と生茂り之を望むに涯なく實に綠色の毛氈を敷かと思はるゝ耳。數多の尾長猿此の茂林中に住めり。小鰐の甲をほすを見たり。交趾船は三本檣にして薄きござの帆なり、而して其形狀日本船に較すれば一しほ勝れりと思はる。此サイゴンは六年以前に佛朗西の所轄となりし由にて佛人茲に駁(礮?)臺を築き土人の侵掠を制する由、但し此砲臺には六斤加農六挺を備へり、而して兵士夜臺上に立ち番を爲せり、此地に備へる佛の兵丁凡三千人ヨの由。

佛のフレガート四〔大軍艦名〕及びゴンボート〔火船〕十二艘サイゴン河内に備へり。サイゴン河口よりサイゴン府迄は凡五十里ヨ。當時日本は寒中なれど此所は凡北緯十度にして驗溫子の昇低(?)八十一度より八十五度に至る。扨此土地の人物を論すれば形狀殆支那人に齊しけれど色尤も黑し而して男子一切髮をきらず只其長するに任せ一束にたばね頭上に卷纏ひ其上に舊ふどしの如き布を被りいかにも見苦しき風俗なり其上齒を黑く染め脣に紅を塗り如何にも柔弱の有樣なり宜なり佛人に其國南方過半を奪取られ空しく其管轄を受くる事。佛の初て此土地を取りし時土人佛人の河水を取り飲料とせしを知り竊に毒を流し多く佛人を殺せし由然し當時は土人大に佛人に歸服し再び毒を流さゝる故洋人此をとり飲料とせり然し少しく鹽氣を含めり。各國の商船此の河内に落碇せる者凡そ二十六艘支那凡九艘。扨支那船は所々に順風得利等の大文字を書ちらし船内は烟草及アヘンの烟にふすぼれ不潔なる事殊に甚し。土人及支那人の家は總て小にして甚見苦しく且つ戶前に赤紙を糊附し樣々の文字を書ちらし實に張この家かと思はる且人物多く困窮にして外行に履を付けず甚憐むべき有樣なり。我詩前の役日は勿論自分の衣類を洗ひ且補綴し空しく光陰を送れり然し餘あれば文を學べり。我重衣の裏を取り筒ぼふ袢料を爲れり。吾茲に於て深く父母眷顧の鴻恩に感じ「昔を帶て知れ親の恩」と云へり」同二年正月元日故鄕如何と感じて

　故鄕のけさは如何なる色ならんつらき勤めて春も知らまし

　且つ衣類を洗濯して

　元日に衣もそゝぐはいかなるぞ去年の舊あか洗拔くとて

同十四日サイゴン揚碇」同十五日我今日より測量を初めたり。但我眼病にて測量し得ざりしが當時少しく癒へし故測量せんことを船頭より許されり」同晦日西曆千八百五(六?)十五年二月二十五日」香港へ到着す。船荷はサイゴンの新米なり。我是より西洋曆を用ふ」三月十日香港出帆」同十五日呂宋の名港マニラ沖へ落碇す此地はイスパニヤの所轄にして名高きマニラ麻烟草砂糖米材木を產するよし但し此船はマニラ麻を積み本國の名港ボストンに歸るよし。但しマニラ麻は甚强くして帆綱及び綱梯子を制(製?)するに尤妙にして天下無雙のよし」四月十日マニラ出帆。船荷は悉くマニラ麻なり」同二十一日クレメント海峽を過ぎ得

たり。扨此所島嶼星々羅列若し不案内にして且精密の海圖なかりせば船を破り海魚の腹中に葬られん事必定なり。日々五六度の驟雨降りて或は無風或は强風或は颶風ありて時々龍まきを出來かせり

(此所に「龍間遇見の圖」ト題スル小畫插入シアリ)

實に恐るべき地方なり。同二十二日赤道直下を經過せり。驗温子八十五度より八十七度に到る」同二十五日ジャワとシュモタラの海峽サンダを過ぎたり。ジャワ人小舟に乘來り鷄仁肉、薯、薩摩芋等を買(賣?)付けり。此人物はマニラの同種にして歯を黑く染め頭に布を卷きたり。雨水を蓄へ飲料と爲し且つ衣類を洗へり」五月三十一日喜望峰を遙かに見たり。長の海路に退屈せしが藍色の山層々としたるを見不覺大聲を發し喜望峰かと呼べり。

六月十八日正午に南緯十八度西經四度の處にありて其走る半時に六七里程なり。此處はシントエレナ島を去る事不遠されど糧食、薪水充分なる故其島による事を要せず恨むらくは英雄拿破烈翁の墓を一見せざるを。但しナポレオン此島に葬られけり。南緯二十三度より直南の貿易風吹し故花旗に歸るには尤便なり而して船の乘組は北亞米利加、及び北亞米利加南部なり」同二十九日午後四時十五分に赤道直下を經過せり但此處は西經三十二度五十六分寒暖計八十七八度の間に昇降せり」七月十九日花旗國マスサチュセッツ邦の東甲コッドに來り或る漁船に逢ひ初て南北の戰爭靜まり且南方の探子ションウイルクスボース大統領リンコロンを砲殺せし由。同二十一日マスサチュセッツ邦の名港波士頓に到着す。波士頓はマス邦の都城にして其の東方にある一府を東波士頓其南方にあれ(?)るを南波士頓と名く。扨此所の家の制(製?)造蒸氣機關の精巧、ガス及び水道の便利車馬の用方實に紙筆を以書盡し難し」同二十四日吾波士頓に上陸し所々見物し魯敏孫クルスーの漂流記を買得たり。船頭吾に船番の役目を言付日々船內の掃除をなさしめり。日々の働にて夜分寐間に入れば早速眠り朝目覺むれば總身いたみ自由に我身を動す事能はず。辛苦のあまり

かく迄と兼て覺悟はせしなれどかくかく
かくとかくは思はじ

東波士頓のある家にて失火せり吾早々に其所に驅付見物せしに格別人力を不用蒸氣機關にて水を引き數多のゴムの水筒にて水を屋上に打揚げ暫時間に甚しき火勢を消沈めり、嗚呼花旗人機關の巧玆に於て見るべし扨波士頓の一貴人ハルデー君は此船ワイルドロウアルの持主にして或日船見聞に參り我の志如何を尋し故我仔細に吾の志願を談せしかば彼深く吾の志を愛し早々上陸せしめ波士頓の船宿に三値日の間逗留せしめ吾の爲に上衣〔價十二兩二分〕中衣股引數多の下衣下股引足袋等を求め同年十月三十日蒸氣車にて我を同邦アンドワ縣アンド(ワ?)府大學校へ送り飲(飯?)衣料は勿論紙筆等の雜費に至る迄盡拂吳候故今は安樂にして學問修行を日々の事務と爲す事を得たり。吾學校にて文法書綴字學讀書術最高の算書を學へり。此國の書生は我國とは違ひ宿屋に寄宿し居り日々學校へ通ふなり。吾の寄宿屋の主ベデン君と云ふて甚深切なる人にして吾を待する猶其弟の如し且其姉子吾を待する其子の如し吾時々少食せしかば丸薬等を吳れ且つ吾夜學せしかば味甘き種々の菓子を吳れ衣類を補綴し且つ洗濯し吳れし事實に我母の我を待するに勝れりと云ふべし。隣家の主人フレント君毎夜吾に最高の算書を解し其妻君は我に文法書を教へ吳れり。但此フレント君は寛大の君子にして我を愛すること殊に甚だし。古人の申せしに精神一到何事不成とて我千辛萬苦を不恐只々

志願を遂げん事を要せし故今は志願の通り安楽に諸學の修業することを得たり是全く在天不朽の眞神吾をして此幸を得せしむるならん

合衆國マスサチュセッツ邦アンドワ縣
アンドワ府にて
新島敬幹書す

千八百六十六年（慶應二年）二月二十一日

弟君ノ訃音ニ接シ尚留學ノ志ヲ渝ヘラレザル事。森辧務使ノ知遇ヲ得ラレシ事等

但狀中の一書は川田先生へ御屆可被下候若し先生の御住所不明に御座候はゞ小林様へ御尋可被成候何卒此書は別に上封し可被成候」ハーティー君の妻の畫差上申候間御落手可被成候

明治四年辛未年二月二十五日付の御芳書千八百七十一年九月四日敬て拜見仕候然は大人様御事益御機嫌克被遊候事奉祝賀候去ながら雙六殿病死の義は存外の事殘念至極言語難堪是迄は右の腕とも思はるゝ雙六事如此成行しは唯々夢の事かと存せられ小子年來の希望空しく春雪の如く消行きしは萬里同情大人に於も御察し可被下候扨雙六事數年の間千辛萬苦國家の爲と申して身の困窮をも不顧學問出精致しに今は空しく墓下の土と成しは當人に對し氣の毒千萬、且大人様御初御母殿御一統の御愁傷如何と御察申候得は唯々涕の流るゝ耳にて何とも申様も無之大人様御事も最早御隱居被成且球彌殿御養子に被成候事承知仕候何卒球彌殿義も學問出精いたし雙六殿の志願を繼ぎ成長の上は國家の御爲に相成候様望居候扨雙六病死の義は兼て川田剛先生より名古屋藩の士人丹羽氏に託して遣はせし書狀にて承知仕候處如何なる病氣に死果しは一切不相分に付兼て川田塾に有之候因州の大參事池田德潤なる者近々アンドワ近傍の都府ボストンへ參候趣聞及候間一昨日當所へ參上（？）仕池田氏に對面し種々雙六の事御尋候處一切病氣の事相分兼候然し彼所にて池田の同藩原長政、薩州佐土原の大公子（？）島津忠亮清水様位『從五位』御嫡子「僅か十五歳に被成候由」「國へ修業に御出被成候」等の御方々へ對顏し殊の外御丁寧の御取扱にあつかり申候一昨日より今朝迄は池田氏の宿屋に逗留いたし今朝（紙端ト此所ト末尾トノ日付突合ハズ多分此書ハ四日ニ認メ始メ六日ニ了ラレシナランカ）小子の親友ハーディー君相尋候處不計も日本よりの書狀彼處にて請取拜見仕候て委細承知仕候扨其委細を承り候得は益痛惜愁傷の至に御座候、右に付小子早々歸郷仕候はゝ大人様の御爲にも成可とそんし候得共小子義も御存の通身の辛苦をも不顧離れ難き父母に別れ辭し難き本邦を去り斷然萬里の波濤を航せしは全く國家の御爲に寸力を竭さんとの志願なり其念日夜難忘如斯も外國に留學仕候故兼て申上候通小子の如きは國家に此身を差出し候間何卒大人には小子は最早戰場に出し者と思召如此國を愛する男兒を御持被成候は御身の御手柄と御樂しみ可被下候若し御了解違にて小子は不孝の兒との思召有之候得は小生に於て甚當惑仕候然し子を知るは親に如くはなし小子の志願大人に於て御存無之に非ず、扨小子も一段（且？）乘出したる船、事を遂ず再び本邦に歸るは國の御爲にならず（ざる？）は勿論大人の御外分に相成候と存候且國家御一新男兒の心力を竭すべき好機、且最近雙六殿事本邦に學問仕居候間小子義天外にあり共格別大人の御難澁とは相成間敷とそんし斯も長く遊學仕居候且つ何レ歸錦の時（？）は何處迄も力を竭し雙六殿の志を遂

候様希望其上彼も小子の相談相手に可相成と樂しみ居候處豈料らんや今度の訃告悲哀痛哭殘念の至兩手を亡ふよりも甚し然なから是は往事にして悔とも難及大に痛哭致すは却て身の爲に宜からず殘念ながらも雙六の事は先々相明らめ向後自身の養生は勿論學問盆出精成就の上少しも早く歸郷可仕候間何卒大人に於ても右樣御心得向後は雙六の事を克く御明らめ小子歸錦の事耳御待御樂しみ被下樣仕度且是迄は私事も日本の出奔生にて朝廷へは内々に相成候處去春亞國の少辨務使森有禮殿の御周旋にて朝廷へ亞國留學の趣委細申上候今度大學よりの免狀と外務卿より外國への通行狀を投下し賜へり但通行狀は外務卿澤從三位、淸原宣嘉殿の御名前有之候扨是迄は色々歸國の事心配仕候此免狀を持歸は一切入港には無差遣事に御座候間何卒大人に於て御放心可被下候何卒右の一條は内々横井大參事及飯田君迄御申上可被下候且亞國辨務使森從五位より度々書狀を下され色々の事件等御相談被成下且折々は御招き被下諸用入費は不殘官より御拂被下候間大人に於て御喜欣可被遣候扨小子事も眞實に身を取詰學問修業仕候間亞國の人々大分好き評判致し呉候間是又御安心可被下候但し此夏の休學中には礦物學（金銀銅鐵を見出す爲の學問）の爲蒸氣車船に乗り所々遊覽二ケ月の内凡そ六七百里の旅を仕候て六七日前に此アンドワ（前段ニヘボストンヲ當所ト云ハレ居レバボストンニテ認メ始メアンドワニテ了ラレシナランカ）と申所へ歸參候但此旅行は保養の爲耳ならず實は學問の爲にして書物上の學問とは違ひ實地の學問を仕候所々見物いたし候處中々紙上に書盡し難く何レ御對面の時を期し候得共其中の名所荒まし相認可申候

ホーサク山行の略記

一、ホーサク山はアンドワより凡百里餘距り殊の外風景の宜しき山なり然し此山は僅海上千二百尺程にして格別の高山には無之候得共近來亞人此山の下を掘通し蒸氣車の路を造る事を始めり然し山を掘るに餘り人力を不用多くは蒸氣機關にて山をくりぬきノミの如きものにて穴を掘り其に合藥をつぎ込み其に火を付て山中の大石を破裂せしめ候故勞を省く事甚し小子義彼所に一日逗留し蒸氣車に乗り半里半（？）程入込候處其中は甚暗くして日中矢張燈火を用候且其中甚寒くして暑中二三枚の上衣を衣其上穴より落る滴水に濡ぬ爲油衣を着せり其レより馬車に乗り山上に行き下の穴中に空氣を通ワせる爲に造れる穴を見物せり但此穴を掘るに矢張蒸氣の力をかり且穴より生する水をかひ出す爲の桶は蒸氣仕懸に上下せしめ候故決して人力を不用申候

（此所ニ工事ノ細圖ヲ挿入シアリ）

小子義も其夜は山中に日を暮らし農家へ參一宿せり翌朝山の西へ下り申候其午時七十五人の支那人に面會せり彼等英語一切不通候故支那字の筆談いたし候扨此アダムス村より三十里程ある一府『トロヘ』と申す所へ參り三ケの日本人『伯書』に面會し其所に三日逗留いたし候

ナヤグラ瀑布の略記

一、ナヤグラ瀑布はアンドワより凡三百里程有之て世界第一の名瀑布なり但瀑布の高さ幅等、及ひ鐵の掛橋等は差上候圖面にて御承知可被下候其水勢實に筆端に盡し難く御座候但畫に向ひ右に在る土地はアメリカ領左は英國の所領にして往還の爲二ケの橋あり一は蒸汽車の爲とし、他は歩行及ひ馬車を用ゆる爲に造れる故亞領より英領へ參る事甚易し但小子英領に參りし時は或る金滿家小子は日本人なる事を聞及其家へ招き二日程留め呉大に馳走いたし呉れたり。

モントリオールの略記

一、モントリオールは英領にしてシントローレンス河の小島なり其より亞領に掛りたるウイクトリヤ橋と申橋あり但其橋は鐵道にして其長さ凡一里但其入費は七百萬ドルの由

扨大人の御手紙に一切御母殿の御事不御申越此は如何の御事に御座候哉奉伺候御母殿御事其後御丈夫に被成候哉奉伺候且何便にも御母殿御姉殿おみよ殿よりも御文通被下度奉願候御文通無之候ては何事か御不快ではあるまじく哉と愚察抔仕候間御便りのときは少々なりとも御文通被下候得ば先々安心仕可候且雙六殿も死去いたし候故何卒御養子球彌殿よりも雙六に代り節々(?)文通被遣候様仕度候但し日本に於ても甚惡しき風俗にて養子と申と兎角不丁寧に取扱候間家内に不睦の事往々有之候何卒大人御母殿御姉殿御養子球彌殿は萬事雙六同様に御取扱且球彌殿も實父の家に有之候樣相心得養父母を丁寧に取扱決して不行作の事致間敷様仕(度?)候扨縷々申上度も倘今は學問中にて寸暇を惜み且臨書心緒多端涙筆共に下る唯願は養生保護　萬恕百拜

千八百七十一年(明治四年)九月六日　兒　七五三太

大人様　玉几下

一、倘以時候折角御厭御保養の事は御身の長壽を得る爲實に專一の事に御座候但日々の御遊行は別して宜しく御座候あまり寒中コタツにあたり或は火の傍に長座する事は甚御健全の爲に不相成申候且御眼の爲に不宜折々肉食を可被成かつ鷄肉鷄卵は甚身體を强むる物に御座候タクワン漬味噌漬は一切身の爲に不成却て害を生ずる物なり

一、何卒横井、江場(?)飯田星野菅沼諸士へよろしく且植栗様は今度御親類に相成候間別してよろしく御傳言可被成候

おみよ殿へ

一、お前殿御事も其後色々御心配被成候事とそんし候實に御氣の毒にそんし上申候何卒以前のクワンシャクを取をさへ御母殿は勿論の事御養子球彌殿を私及雙六同様に思召決して匇卒の御取扱無之何處迄も心切に御世話成下され候て(?)家内睦じく成行く様奉願上候

一、弓削田發様へは一切御懇意不申候得共今度御養子一條の御周旋被下成候事小子に於(?)て萬謝の至に御座候何卒大人より先生へ宜しく御鳳聲

田中文部大丞トノ遭遇等

扨其後は御音信を打絶し實に恐縮の至に奉存候扨今度日本よりの使節亞國へ御到著後森小辨使の御頼にて合衆國の都城華盛頓迄官費を得て罷出候て田中文部大丞と色々教育の義に付議論仕候處田中公と大に議論も合ひ相談にもなる可き人と見込候故先此度は田中公と同道し歐羅巴へ參り各國に於ける教育の仕方を穿鑿可致と決心仕候右に付日々の雜費は五ドルづゝ且骨折料として一年に亞國のドルにして二千四百八十四ドル被下候間先は大人に於て御安心被下候様奉願候但し歐土には少くとも六七ケ月中は逗留可仕と奉存候但し其より再び當國へ歸り(被?)下置候處の金を得て亞國に於ける一齊修了可仕と存候何れ遲くとも一二年の内には歸錦可仕と

存候間何卒御加養其を御樂みに被成御待被下候様奉願上候扨大人様初御母様御姉殿方球彌殿に到る迄御安泰被在候と推察し奉賀候但し當所へ參り候後何分御用多にして寸暇も不得申候且今日當所を出立しアンドワと申所へ罷歸り歐行の仕度を可仕存候右は匆々當御（二字）（不明）如此御座候　臥願加養

（明治五年）四月一日　　新しま七五三太

新島民治様

『櫻井
星野
飯田様へもよろしく』

御姉様へもよろしく

米國教育制度視察、歸郷時期ノ事等

何レ一ケ月の内にて當國の學校の法則を吟味して歐羅巴へ渡海可仕と樂居候田中様も殊の外に御懇意被下候間御大人様も御安心可被下候御母様御姉殿方へよろしく御傳言可被下候

四日以前に合衆國の都城華盛頓を去り田中文部大丞に随行して同日夜半ペンシルワニヤ州の首府ハルリスボルグと（申？）所へ到著其所にて三日逗留其所の學校の法則を取纏（？）其より今午後二時に出立同州『ペンシルワニヤ州』の尤繁華なる市ヒラデルヒヤと申所へ到着し廣大なる旅館へ參り田中様と同部屋に罷在縷々日本話をいたし大保養仕候扨先達て差上候書狀には歸郷の義は兩年程も相かゝり候と申上候得共殊により一ケ年内に歸郷候場合に相成哉と被存候間何卒御大人様初御一統御安心被下間敷（？）何レ歸錦の上にて幾重にも海山の恩を報ぜんと存候間小子歸郷の事御樂しみ御待被下候様奉希候　匆々以上

（明治五年）四月四日　　兒　七三五太

大人様
侍史

兩親へ金子ヲ送ラル、事等

先達て申上候通私義も今度田中文部大丞に随行仕教育事務取調の爲米國中は勿論十日内に蒸氣船に乗込み歐行可仕企に御座候扨右に付前文（？）申上候通今度小生より大人及び御母殿御養老金として二百金小生の米國の友人ハルディーと申人の出見世迄御届置候間第一に此別書を横濱に居る亞人バーラと申人迄御持參其者此手紙を披見の上何レ彼出見世迄御同道申大人の爲に例の金子を請取呉可申と奉存候若し彼バーラ先生留守に有之候はゞ「ドクトル」「ブラウン」『亞米利加人』と（申？）人を御尋例（の？）別書を以てブラウンの御住所を御問其別書を御差出被成候はゞ先生に於て何レ披見の上宜しく御世話可申候且江戸御出張の前小出（？）勇五郎君へ御相談川田剛先生の宅を御聞受横濱行の前一寸面會被成横濱へ參るべきよき手つるを御尋ね可被成候若し蒸氣車に御乗被成候はゞ神奈川にて御出車被成此田中文部大丞より神奈川の縣令陸奧陽之助殿への添書御差出被成候はゞ彼の縣令より案内人を差添へ例の亞人バーラと申者迄御案内可仕候若し縣令に於（？）て何の用向有之哉と尋候はゞ唯々少々用談有之候よし御申上可被成候但し案内の人大人をバーラ氏の家庭迄御連申候はゞ宜しく禮をのべ其者を御差歸可被成候其上例の書狀を差出しバーラ先生、日本語をよく出來候間右金子の一條はよろしく

御世話可申と奉　存候何れ金子御請取の上は何分御用心被成一切他人に相知不申樣可被成候扨色々申上度事も山々有之候得共何分出立前多事匆々難盡萬一唯願養生專一に被成下小生の歸朝を御待受可被下候右の段得貴度如此御座候　恐惶頓首

（明治五年）五月三日　ニューヨルク　七五三太事
新島約瑟

大人樣　玉机下

御母樣御姉殿方球彌殿へもよろしく御傳言可被成下候匆々以上

何れ歐羅巴へ參り候はゞ何ぞよき御土產を求め歸國仕　可候間右樣御心得御樂み居可被成候

但し彼出見世の名前はオーゴステンハードと申候

田中文部大丞ニ隨行英國へ到着ノ事等

横井飯田星野諸君へよろしく御鳳聲可　賜候

且御姉殿方へも

其後音信不通の段御寛免可賜候扨小子義前狀申上候通田中文部大丞の御賴により暫時學を廢し去ル五月十一日亞國ニューヨルク開帆仕、同月二十二日大英國の名港リウアルポールに無恙到着仕候扨渡海の義萬事都合宜しく風波殊に靜にして實に船遊山とや被思申候且其港よりスコットランドと申國へ參十日餘所々に逗留其より再び英國へ歸り唯今は有名なる世界の大都會ロンドンに逗留英國教育事務を探索し二十日以内に佛郞西へ渡航し其よりスウィツルランド、獨乙國、和蘭等の國へ參り教育事務を鑿索可仕扨前條に申上候段定めて御承知に候得共今一度申上度義は乃ち亞國より差上候二百金の一條に御座候但し其金は既に都合も宜しく小子の朋人ハルディー君に託し其者の横濱に有之出店へ差回し候由右樣御心得但し彼の出店へ御出の手づるは前條申上候通相成と存候何卒金子の事故人に知れぬ御取計可　然奉　存候扨小子義渡海以來大分丈夫に相成日々他行仕　候故日に燒け色も大に黑く相成候縱令天外に遊行仕　候とも兎角家鄕の事を心配仕　候間御母樣初御一統如何被　遊候哉承知　仕　度候間幸便次第御返書の事奉　願上　候臨書匆々期餘暇之時候　頓首不具

英國ロンドン
千八百七十二年（明治五年）六月二十一日　新島七五三太

大人樣
參人々御中

球彌殿の學問出精仕　候樣望居候且よろしく

歐洲ニテ教育制度取調ノ事
歸國計畫ノ事等

新年の御祝義遙に歐羅巴より申上候然ば御大人樣御一統御機嫌克御越年被　遊候事と推察奉　祝　賀候次に小子義も無事異國の春を迎候間是又御放心被下度候扨小子義其後御不音仕候段何卒御寬宥の程奉　希　候前狀申上候通小子義昨年中田中文部大丞に隨行歐羅巴各國を遍歷し各國の教育事件を取調べ去九月よりプロイセン國の首府ベルリンにて滯留洋書を譯居　候且傍ら獨逸語を學候故何分寸暇を得

不申遂に如斯も御不音申上候私義も田中公に随行し日本へ可歸趣を一段相窮候處色々と文部事務に付繁宂いたし度事出體仕何分當春の内に歸朝難相叶とぞんし候何レ春さきに相成候はゝ一先アメリカ迄歸り其上歸限の事を委く可申上とそんし候先達て田中公のベルリン御發足の節大人様迄一ケの封物相願候間田中公御歸國の上は何レ御宿許迄御届可被成とそんし候、但し其封物中には手袋五通小刀一本封込候但手袋五通の内革の手袋一通是は大人様へ差上度餘の四通は御母様御姉殿方へ差上度且小刀一本は球彌殿へ遣し度扨小子義より昨年四月アメリカ發足前後御養老金として二百圓程差上候處今に御文通も無之右金子御請取に相成候哉否も一切不相分大に心配いたし居候何卒御書状御請取の上は匆々一書御認右の一條委細御告知可被下様奉　希候田中公御發足の節にも精々願置候間若し小子歸國以前金子に御不自由の節は何時なりとも田中様へ御越御入用次第拝借の義御願被成候はゝ田中様より何なりとも厚く御世話成下さる可くとそんし候間右様御心得可被成候且若し御拝借の上は如何なる證文を御差出し且右の趣を小子方迄御知セ可被下候左候はゝ金子の義は小子より田中様へ匆々御返却可仕とそんし候小子歸國の義もあまり遠き事には無之候に付歸錦の上拝顔を得海山の御恩を報いんと志願し居候間何卒大人御母様方克々御養生なされあまり物に御心配なされず少しも御長命可被成様奉　願候如何となれば心配は命の毒にして兎角心配する人は十年程もいきる命を持ながら遂に五年程も保命し難きに至るは唯無益の心配をなして己れの命を縮むるなり何卒當分の内心配抔は一切度外に置き唯々御保養のみ御工風可被成様奉　希候何レ小子義歸郷の上は何處か宜しき所へ田畑ツキノ地所をかひ御隱居を立て御安樂に御老年を御暮し被成様工風仕居候間何卒其義を御樂しみに思召可被成候御母様は如何近來御丈夫と被成候哉伺度且御みよ殿は如何何卒球彌殿は　私同様に思召決して粗末の御取扱無之様奉　願候且球彌殿も御兩親御姉殿方へ一切御心配相懸間敷様致度候扨御まき殿御とき殿方は如何民五郎よね梅鐵(？)三殿は矢張丈夫に御座候哉伺　奉度何れ御序の節よろしく御傳言の程奉　願上候小子義ベルリン府へ參候より下ヒゲもはやし大分洋人らしく相成候は封中差上候小子の寫眞にて御承知可被成候若し御序有之候はゝ大人様も寫眞御取小子方迄御遣し被下候はゝ千萬難有次第に候且書状と同時に差上候此一册の本は西洋一般に信仰せる耶蘇教中の一册にしてある獨逸人の琉球島に在留して日本語を學び候者の譯したる書物にして所々に少しの間違など有之候得共日本人の助なくして如斯も日本文を綴りしは實に驚くべき事なり故に幾回か繰かへし御讀被成候はゝ耶蘇と云者は如何様(の？)者かは御分りに可相成とぞんじ候扨色々と申上度儀も有之候得共何分寸暇無候間右は何御機嫌旁々匆々相認候間餘は永春の時を可期恐惶謹言

明治六年正月二十六日　　兒　七五三太拜

大人様
　參人々御中

横井様星野先生飯田先生は何處御住居被成候哉不相分然し若し御面會の節はよろしく御傳言被下候様奉　願上候以上

書状中三四の状袋差上候間四月前御文通御差出に相成候はゝ佛國迄の(？)状袋へ御封込め四月以後にはアメリカ迄の状袋に御封し田中様の御宿迄御差出し宜しく御願被成候はゝ田中様より御用使の節私迄

御遣可被成候但し田中樣の御宅は東京淺草御藏前新旅籠町五番地に御座候若し御分りに相成候はずば文部省へ御差出し御頼可被成候

（此書狀ニ「五月三十一日相達」トノ書入アリ）

獨乙ニテ罹病ノ事、家事ヲ心配セラル、事等

明治五年七月朔日同月十五日の御書狀千八百七十三年(?)十七日獨乙國ウイスバーデンにて落掌仕候然ば大人樣御初御一統御淸寧被在候由承知仕喜欣言語に難盡候扨大人樣御義小子華盛頓より奉呈仕候書狀御落掌の上七月二日安中御城下御出立橫濱表へ御出張アメリカより差上候所の金子無滯御請取に相成久しぶりにて江戸表へ御出張且橫濱迄も御見物被成且大人樣の御眞影一葉御授與被下候段實に萬謝の至に不堪小子義も楯館(箱楯?)脫弃以來久しぶりにて大人樣の御寫眞を拜候は夢の如くに思はれ其喜中々筆端に難盡御座候且御母殿御不快の處其後御快方に御趣被成候由是又幸甚扨前狀申上候通小子義此春花の咲候頃には歸朝仕拜顏を可得と樂居候處不料も正月以來ルーマチスムと申候足痛にて田中樣と御同行出來兼無據獨乙國中ウイスバーデンと申有名なる湯治場に參り養生仕居候處逐々快方に趣き當時は最早少しも痛無之候間決して御安(?)し被下間敷且是は唯足痛耳にて別に命に差合は無之候間左樣御心得可被下候扨湯治中消光の爲獨乙學を學居候處最早少々獨乙文も讀初め候間不遠普ロイセンの首府ベルリンへ罷歸少くとも一兩月の間獨乙國中の教育事務取調に相懸可申と存候其上アメリカへ歸例のハルディー君と相談の上歸朝の期限可相定申とそんし候扨小子義久々遊學仕居大人樣御母殿にも色々と御苦勞相懸候は實に小子の本望には無之候得共大人樣にも兼て御存の通小子の遠く波濤を越えて今日に至候は偏に國家の御爲と存し且成業の上歸朝仕候はゝ幾重にも海山の御恩を可報とぞんじ已事を不得如斯も久々逗留仕候且近來日本に於て獨乙學逐々流行可仕とそんし右に付暫時獨乙國に逗留獨文修行仕候へは歸朝の上殊の外の強みにも可相成とそんし日夜心懸學問出精仕候且心懸養生も專一に仕居候間何卒御放念可賜候扨小子長逗留の義に付定て御兩親樣には御不足に思召被在候と恐縮仕居候處小子今度の歐行の義に付殊の外御喜び御勇み被成候事小子に於て實に難有仕合に奉存候何レ小子歸朝の上は匆々安中表に罷こし久しぶりにて拜顏を得縷々をもしろき御話を御申聞可申と指を屈し樂居候御兩親樣を湯治にでも御連可申と心懸居候小子義歐行以來大人樣の御書一切落掌不仕候に付十日以前當所より田中文部大丞樣への御名當を以大人樣へ一書差上候處昨日不料も尊書落掌仕大安心仕候且此度の書狀はバーラ先生へ相願可申とそんし候且先生へも寸書差上御深切に大人樣御兩替の御世話被成下候段厚く御禮可申候若し向後金子等に御差支有之候はゝ田中文部大丞樣に兼て願置候間田中樣へ御相談被成候はゝ如何樣にも御世話可被成下とそんし候何とそ向後うまき物を日々御食用被成御壽命の相延候樣御心懸御儉約の爲とてタン(ク?)ワンナヅケの如き身の害に相成候物は決して御食用被成間敷且安中は山國に候得はあまり新鮮の魚は難得候故鳥類肉類鷄類卵等を度々御食用可被成是(?)自然御身に勢力を増

し御長命の大助とも可相成とそんし候何卒御兩親様小子の丹心を御察し被下今暫時の間御待被下候はゝ小子不遠志を遂げ歸朝仕幾重にも盡力仕御兩親様の御安樂に暮年を過し被成候様可仕候右は貴答爲何御機嫌如此御座候頓首百拜

獨乙國ウイスバーデン

千八百七十三年（明治六年）三月十八日　　新島約瑟

大人様

倍々時候折角御厭可被成様奉願候

何卒御母殿御姉殿方に（?）球彌殿にもよろしく御傳言且御母殿には決して小子の事を御安（?）し被成間敷萬事御氣（?）御持被成候様哭々も御申聞可賜候御近所の御方々様には大分御深切に御世話被成候よし且大和屋ゑびす屋様別して田中様弓削田様厚く御世話被成下候由實に小子に於て万々難有仕合に奉存候別に御禮狀は差上不申候得共何卒皆々様へよろしく御取濟（?）し御禮申上可被下様奉祈候

植村様にはおよねぼふ事新（?）次と見合巳に男子誕生のよし珍重々々何レ御序の節植村様達水様にもよろしく。民五郎（不明一字）三郎は定て成長被致候事と樂み居候小子義はおよねぼふのおぢに御座候處久々天涯に遊歴いたし今に家内も相持不申實におよねぼふに對しはづかしくそんし候去正月下旬田中様佛國より御立の節大人様への一書相託し且同行の士長與氏の荷物中に少々封物を賴み候處田中様御歸朝の上はその封物を大人様迄御屆可被下候但し其封物は別物に無御座大人様に革の手袋一對御母殿御姉殿方へ手袋四對球彌殿へ小き小刀一本差上候但し右の物件は獨乙國のベルリン府にて相調申候

○當所にて貴族ホンツェーメンと申老夫人小子の名を聞及び二日置毎に午飯の御馳走に招き呉れ厚く世話いたし呉れ且獨乙學をも教へ呉れ候」小子の如斯く到る處深切なる朋人を見付候は實に不しぎにして眞神の惠と可申候

獨乙視察ノ事、歸朝見込ノ事等

其後は如何被爲在候哉小子より大分御無音候段御寛免可被下候扨小子義も前狀申上候通昨年冬より少々足痛にて獨乙國の有名なる湯治所ウイスバーデンと申所に參り暫く湯治仕候處近來全快仕候故匆々米國に罷越し米國の朋友ハルディー君と向後修行の義に付克々相談いたし殊により候はゝ米國に一兩月逗留仕其より當年中に日本に罷歸り候哉も難計候間左様御承知被下何卒今數ケ月の間御待居被下候様奉希候扨御母様御義は其後如何被爲在候哉小子出奔仕候より久々御苦勞合懸候は實に小子の本望に無之候得共國家の御爲と存じ如斯西國に留學仕居候は是又已を得ざるの次第に候其後御姉殿方は如何何卒御文通の節は宜しく御傳言可被賜候小子事も數日前よりウイスバーデンを辭し去り當時はオーシンゲンと申處に罷在教官學校の事件を取調居候何レ歸朝の上は不肖ながらも小子の兼て學び得候處の者を以國家の爲に盡力可仕と存居候得共其の規則の嚴なる事且教方の行屆候事は實に感服の至に不堪候且此處は少々安中に相似候て四面山脈有之田畑なども甚行屆大分麥の類を澤山に耕し且山上には樹林陰々と茂候故空氣殊によろしく且當時八月上旬に候得共氣候も殊の外冷和故身體健康の

爲には最よろしきとそんし候扨昨年より小子義大分旅行いたし所々の名所古跡別して大なる市府等見物いたし候間何れ歸朝の上は縷々見物いたし候事を御談申上候はゝ大人の御保養にも可相成と樂しみ居候右は幸便に付取急ぎ暑中御機嫌何として一筆相認候間餘は幸便の時を期候　頓首

新島約瑟

（明治六年）八月三日

大人様

侍史

何卒時候御厭御保養専一に被成候様奉希候御序の節には御姉殿方へもよろしく且御近所の御方々様へも宜しく御傳言可被成下候

何卒御幸便の節は時々御文通可被下様奉希候

米國へ再歸ノ事、歸朝遲延ノ事等

御書状の義は津田様なり田中様なり川田先生なり御願被成候得は無滯小子方迄相屆可申候

其後御不音仕候段何卒御萬恕可被下候扨向寒の砌に候處大人様初御一統無恙被爲在候と存奉祝候次に小子義も去正月下旬文部事務無滯相濟し其後少ゝ不快にて獨乙國中の最も有名なる湯治場へ參りゆるゝゝ加養仕且養生中少々獨乙學をいたし去八月中旬獨乙國發足直に佛郎西の都パリスへ參り十一日程逗留市中の見物をいたし其より英國の都ロンドンへ參り僅六日程逗留其よりリウアルボールと申英國の港より乘船いたし去九月十四日無滯亞國の名港ニューヨルク到着仕其より匆々アンドウアと（申？）所の學校へ再歸勉强仕居候扨着後ワシントンの日本公使館より大人様及（四字不明）様より去年三月付の御書相回哭敬て拜見仕候扨大人御母様初御一統小子の歸朝を御待兼の趣實に御尤の御事と存候乍去昨年四月より文部省理事館に隨行仕殆一年程も休學仕候故又々學校へ歸少くとも來年五六月迄に修行致さねばならざる次第に相成斯も久々御心痛を相懸候は實に心外の事存候得共是又學問の事故且國家の御爲故已むを不得次第然し來年の五月と申せは僅か唯今より六ケ月間に候間何卒暫時御シンボウ可被下様奉希候是迄度々歸朝可仕積の處遂に斯も久逗留相成候然し來年五六月中には必らす卒業歸朝仕可と存候間何卒屆指御待受可被下候兼て田中文部大丞様御歸朝後も殊に御丁寧なる書状被遣下哭々も勉强いたし歸朝の上は國家の爲萬一の力を竭さんと希居候大人様より被仰越候通一昨年より色々御入用引續其後大分御當惑の由然し昨年差上候處の金子にて一兩年の御取續可相叶とそんし候然し若し其後御困窮被成候はゝ田中文部大丞様へ御懸合可被下候然らは田中様に於て必らす金子の御世話可被下と兼て御約束も有之候間左様御心得可被下候扨御美代殿より御文中に球彌殿教育の御世話充分に御出來兼候趣承知仕候何レ小子歸朝の上は私にて球彌殿教育の御世話可仕候間左様御心得可被下候扨中村屋殿より被申越候一條委細申越度（？）候得共總て農具等は甚大仕懸にて何分難記載且大豆をしめ油を取候時も矢張込入りたる機械にて之を細密に記載仕候とも容易に御分りに相成間敷とそんし候然し鶏卵を大になす事は甚簡單なる事にて唯時々卵のからを粉になし之を與へ或は石灰を少々

鶏に與へ候得ば鶏（卵？）の大なる事疑なし然し卵の数を増す事は今に聞及不申候一扨種々と申上候得共何分學業に逐れ寸暇を得不申候間右は小子米國に再歸仕候事を御知せ且時候何旁如斯御座候何卒時々御文通被下様奉願候　匆々敬具

千八百七十三年（明治六年）十一月二十三日

新島約瑟

大人様

何卒時候御厭可被成様奉希候御母殿おみよ殿球彌殿及び御近所の御方々様へもよろしく御傳言且御序の節植村様速水様へよろしく瀧（？）田様よりも甚御丁寧なる御書簡被遣下候」

小子名當の狀袋二ヶ差上申候

歸朝ノ催促ニ應ゼラレザル事

等

昨年九月二十日及十一月十一日付の芳書去十二月二日付（？）落掌致て拜見仕候然は大人様御初一統御清榮御重歳被遊候半と推察奉賀候次に小子も無異重歳且勉強仕候間何卒御放慮可被賜候扨大人様御義兎角小子歸朝の義御待兼にて去年十一月再び東京へ御出張の由甚御尤の御事と奉存候乍然米國再歸の上差上候書狀中に申上候通米國再歸の上例のハルディ君と色々歸朝の義相談仕候處今一年程修業不仕候ては是迄學候處も無に相成候次第にて不得已事再ひ米國に留學仕候然し當月『正月』より來六月の末迄修業仕候得ば先一通の學業可成就候間其上は少しも早く歸省可仕と奉存候小子義若し一昨年歐羅巴へ參り不申候はゝ昨年九月中に歸朝の義可相叶候處歐羅巴にて殆一年半程も自分の學問より遠（？）くれ候故歸朝の義如斯も延引に相及候然し若し一昨年歐羅巴へ參り不申候はゞ例の金子も難差上次第に候間何卒大人此世に於て萬事意の如く參り不申候事を御勘考被成餘り其様に小子の歸朝の事を御促し被成間敷様仕度候小子留學中は如何様に歸朝の義被仰越候とも小子一度決心いたし候修行不相濟内は決して歸朝不仕候間何卒來春（？）中迄は小子歸朝の義度外に御置被下候様奉願上候扨當時少々御差支有之て田中文部大丞様へ拜借の義御願可被成云々承知仕候何卒大人様に於て今日無（？）御差支無之様仕度候去ながら何卒御用心有之候て決して御無益の御費無之様仕度候私事も昨年迄はハルディ君の世話を蒙候處幸に昨年天朝より戴き候處の金子を以て修業仕居候間決して無他遣等は不仕酒も不飲煙草も不呑萬事儉約身を愼み居候間何卒御安心可被下候扨速水植村家族昨年寄留被致候よし承知仕候且速水御兄様より御丁寧なる御書簡被下候處何分學業に取紛別段御返事は差上可（不？）申候間何卒宜御取濟し御傳言可被下候且お美代殿よりも御文（？）被下候處別に御返事不申候間是又よろしく且御姉殿方へもよろしく御傳言可被下候中村（二字不明）より頼越候農具の義は承知仕候得共農具中種々様々の道具有之候故何様の道具を求め候て宜しき哉唯農具と申候事にては一切取留も無之如何なる農具を求度候哉御序の節御聞合可被下候右は貴答如此御座候　頓首百拜

千八百七十四年（明治七年）
正月十一日

新島約瑟

大人様
貴答

近所の御方々様へよろしく御傳言可被下候

請願歸朝之書

此ハ多分森少辨務使ヲ經テ差出サレタルモノ、控ナラン半切日本紙ニ毛筆ヲ以テ認メアレバ當時ノ草稿ナルヤ後日ノ書寫ナルヤ明カナラズ

至愚は素板倉主計頭の家來にて豫て江戸表にて洋學に志し候處何分果敢(?)所難きにより洋人より直傳を得んと存元治元年三月主人より暇を乞ひ江戸表より乘船し箱館へ罷越英學及び航海術等を修業仕らんと存候處彼此にて是ぞと申す洋學生も無之且在留の洋人中には多分利に走る商人耳にて格別至愚修業の爲には相成不申大に失望仕候。去りながら江戸を去りし節は業若し不成は再び家に不歸と決心仕候故志を不遂して空敷家鄉に歸るは一切至愚の素志に無御座耳ならず國を憂へ民を愛する志益憤起し且五大洲を歷覽せんとの望益增進し少年の狂氣何分難壓伏恐多くも國禁を犯し且身の不爲をも不顧同年六月十四日の夜半竊に亞米商船に乘込み翌朝同港出帆仕候。扨其節至愚義格別所持の金も無之により船頭の給仕人と相成傍水夫の役をも勤め種々の辛苦を嘗候得共憂至還憂(?)。憤然不思身。益究すれば益激し半ケ月の日數を歷て無恙支那國の上海港に落碇仕候扨同所にて他の亞船に乘移り矢張船頭の給仕人と相成水夫の役をも相勤め同船にて上海福州府交趾のサイゴン、府呂宋のマニラ港等に參(二字不明)候て支那海に航すること凡八月有半夫より印度海及亞太覽海に航し千八百六十五年七月二十一日無滯(一字不明)合衆國のマスサチュセッツ邦の都府ボストンに到著仕候。扨其船の船頭は甚だ親切なるものにして至愚渡海中は航海術を教呉れ且ボストンへ到着せし後同港の住人ハルディー(其船の持主)と申者へ相賴み學校へ遣し呉候但此ハルディーと申者は頗る寬仁なる者にして至愚の深く本國を愛し厚く學に志すを感し且至愚の甚究せるを憐み衣類等をよきに買齊へアンドワの邑のアカデミーへ差遣し呉候扨同所に留學すること凡二年夫よりアーモストコルレジ『大學校』に入學し此所に留學すること凡三年但右の二ケ所にて文法書、算術、歷史、究理書、本草學、點算、度量、測地術、地理、天文、セーミ、擦地學、礦物學等を攻め去る九月よりアンドワ邑の眞理學館へ入學し當時至大至妙天地萬有の造物者乃獨一眞神の眞理及ハレスティン國の古史をしらべ傍らグリーキ語を學居候

偖至愚の如きは唯に駑馬耳ならず兎角多病虛弱耳眼病を憂へ候故何分成業の義所存の如く進み兼今に碌々書頭に消光仕候。然雖憂國愛民の志益々憤興し縱令不肖の身なりと雖も何れ或業の曉(?)は歸國至愚豫て學び得し學術眞理を有志の子弟に傳へん事至愚の望む所に御座候。近頃聞く國家一新し天皇頗賢明。傑才を擧用し草廬(?)の士に至る迄も盡く其志しを得、其の長する所を伸すを得しは至愚の身縱令天外に在と雖も欣喜躍々せさるを不得是乃千里の馬骨を求め且請隗より初めよの時勢と奉存候。

去りながら若し明朝舊例により至愚の國禁を犯し皇國を脫奔し米國へ渡航せしを以て至愚の身に加刑し賜らは明朝至愚の丹心を不知と可申。若し又幸に明朝の惠憐を得て歸鄉せし後に朝命を以て可東可西と使役し賜らは是亦至愚の甘ずる所にあらず臥て願は明朝一筒の書札を投下し至愚歸鄉の義御許容爲し賜らは至愚に於て喜欣幸甚の至に候、且歸鄉の後は一に草莽の士を以て相接し至愚をして不羈の士とな

らしめ至愚の存意に順ひ東西し豫て學ぶ所の術改むる所の道を以て有志の子弟に傳へ候はゝ至愚に於て足矣。書に臨み萬一を盡し(？)難盡唯願　明朝患憐を加へ賜へ

新島七五三太
敬幹

函館ニ於テニコライニ寄スル書

此ハ書題ノ文字ヲ記シタル封筒ニ納メ新島家ノ所藏タリシモノナルモ本文ノ筆跡體様ニヨリ判ズルニ他人ノ書寫セシモノヽ如ク暫ク疑ヲ存ス

私儀今度江戸表より當地へ參候はよの義に無之外國の人々に交はり、自分の行儀は勿論、國を治むる道などを承らんとそんし、私の主人も親も許さゞりしが、色々と申立、よふやく當地へ參る事を得、はからずも貴殿の御世話に相成候は、實に平生の願ひに相叶ひ、心の喜びいはん方も、無之候、依而日夜學問に出精いたし候はゝ、遂には私の本望も成就いたすべしと樂のしみをりしに、當時折あしく眼をやみ、一切讀書もかなはす只あじきなく光陰を費やすのみにて、心の中は火の燃ゆるが如く、遂に四五日以前より鬱々といたし候、扨人間僅か五十年、事をなす嗚呼幾としぞ、生涯空しく讀書もて送るなら、何にの苦勞もいらざるが、是銘々の所願ありて、專ら國の爲に力を竭さねばならぬもの故、かくも心配いたし候、扨(？)私の西洋學をいたし候は、日本の地は盡く海岸なる故、航海術を開らき無事なるときは諸國へ參り交易いたし、事ある時は海軍をもて敵をふせぎ候は、一としほ國家の爲に相成候半とぞんぜしに、近頃政府の政事益たゝず、國家益々みたれ、物價益高登し、萬民益困窮いたし候、さて國の有様かくなりしは、全く教のたゝすして、國人神の道を知らさるより然らしむるとそんし候、嗚呼國のしか成りませしに、無理おしに兵を練り船を造る共、歐羅巴各國には敵しがたし、歐羅巴各國の强兵も敗り難きは唯一ツの道理なり、然れば航海術は瑣(？)末の事ニ而、私共は第一に「クライスト」聖教を學び己れをみかき、而して後其教書を釋して國中に布告いたし、國人をして盡く歐羅巴の强兵もや(？)ぶり難き獨一眞神の道を知らしめば、政もおのつから立ら、國も自らふるひ候半とそんし候、嗚呼我邦もしかなりませば、私の身はCrucifiedさるゝ共決してうらみず、全と神への奉公「クライスト」への勤めとそんし候、しかし日本にて「クライスト」教を學ばんには、極めてかたかるべし、いかんとなれば、「クライスト」教は國禁のみならず、此地にて學び候は速やかにはまゐり難からん、故にひそかに歐羅巴へ拔け行き、是非とも此の志を遂けんとそんし候、去なから歐羅巴へ參り學問いたすべき用意の金は更に無之候故、途中にては船のマトロス、彼地へ參り候得ば「クライスト」教學校の小使となりてもくるしからず、偏に彼地へ參り充分學問いたしたくそんし候、扨右様の工夫もありしゆへ、いかにも養生いたし少しも早く眼をいやしたくそんし候間、なにとぞ「ドクトル」、「ザレスケー」君へ、療治の義御骨折可被下様、御頼みのほとこひねかひ候、且つ私學問の爲めとて歐羅巴へ參り得べき工夫はいかゝいたして宜しきか臥し而奉伺候

五月

幹　再拜

ニコライ様
玉机下

歸朝日誌

西歴千八百七十四年十月米國ボストン市を去り桑港經由
十年振りにて歸朝

十月十五日　木曜日
ボストン市を發しシードレー教授訪問のためアムハーストに向ひ夕刻八時過同地に着く

十月十六日　金曜日
上杉、神田兩氏、スティヴス教授、ヒックボックル博士等に面會す、午後五時同地發の汽車に投じてニューヘヴンに向ふ　途中ハートフォードに於て友人の招に依り下車して友人の姉妹の家に入り一泊す、此地にて箕作氏に會ふ

十月十七日　土曜日
朝八時發九時過ニューヘヴンに着く、直に大學總長ノアー、ポーター氏の家に入る
ハーデー夫妻は終列車を以て來着、『ニューヘヴン、ハウス』に投ず、玆にて會談す

十月十八日　日曜日
朝ハーデー夫妻と共に『エール』大學内の教會に行き禮拜式に列す、此日予は大學街の教會に於て日本に關し一場の演説を試みたり、ヘーベル氏此教會を牧す、聽衆堂に滿ち廊下に於てすら立錐の地なし

十月十九日　月曜日
ポーター、ハーデー兩夫人に訣別の辭を述ぶ
過去九年の永きに亙り變らざりしハーデー夫人の親切を回顧し感謝の至りに堪へず、予の出發に際しハーデー夫妻が遠くニューヘヴン迄來られしは故あり、即ちニューヘヴンに於て再會し共に安息日を守るの希望を與へて、ボストン出發に際し予が夫人と別るゝの苦痛を幾分なりとも和げんとの好意に出でたるものなり
夫人が最後の接吻を與へられし時迄予は夫人と別るゝを信ずる能はざりき
ノルスロープ教授、ポーター總長、ハーデー氏等は予を停車場迄見送らる、ハーデー氏は列車の發車する刹那予が乘れる車中に留りて予の身邊を去らず
正午頃紐育に着く、イーリー停車場に於て他の列車に乘り替ふ、此間多少の時間あり、之を利用してウォール街百番地タブリュー、ティー、ブース氏を訪ひてヒデン夫妻が予に贈られしジョンソン氏世界地圖を受領す、此時ヒデン氏及びテーラー氏は米貨十弗及び金鎖一個を餞別として予に贈る、ブース氏訪問後パール街一二三、シー、ハーデー氏の許を訪ひたるに氏は親切にも買物案内として店員一名を予に附け吳れたり
ボストンに於てハーデー夫人と別るゝに臨み夫人は何か予の身邊の用に供すべき品物を求めよとて金五十弗を餞別せらる、十年の永きに亙りて恩義を受け之に加ふるに今又更に此好意あり、何の辭を以てか之を謝せん
夕刻七時半、紐育を發す、二弗を支拂ひてバッファロー迄寢臺車に乘る、翌朝七時二十五分ニュージェラシーに着き、午後一時バッファローに到着す、途中ホーネルヴィーユに於て車中より同地を去る數哩の距離にあるポーテージ瀧を望見するを得たり、其美觀

喩ふるに辭なし、此ホーネル村はジェラシー市を去る三百三十一哩の所にあり、汽車バッファローに停車すること僅に二十分を出です、茲にてクリーヴランド市の牧師ウォーレンス氏に打電して同地に向ひ出發したる旨を報ず

十月二十日　火曜日

午後一時三十分バ市發イリー湖岸線經由にてクリーヴランド市に向ふ

（此所寢臺車のスッケチ二頁あり、略す）

バ市より市俄古迄の寢臺車使用料三弗、此日ダンカーク停車場にて夕食す、ペンシルヴェニア州の大都市イリーを通過して、夕刻七時三十五分クリーヴランド市に着く、下車して喫茶したる後牧師ウォーレンス氏を見付けたりしも遂に居らず、氏は予出迎のため停車場に來り居るべき筈なりき

十月二十一日　水曜日

朝八時半市俄古に着く、イリー停車場にて下車、馬車を雇ひて乘替をなす、イリー停車場よりバリントン、クインシー停車場迄の馬車賃一弗なりき、停車場に近き輕便なるマックスート旅舍を選びて之に投宿す、其より市中の見物に出掛けたり、予は先づシー、ダヴリュー、ポーター氏訪問のためラッセル街ブライアンシットブロック第十九號室に行きしが、同氏は不在なりき、午後シー、ジー、ハンモント大佐を訪ふ、大佐は予を携へて有名なる市俄古水道部に行き懇切に案内せられたり

（茲に水道部の説明的挿畫あり。略す）

市俄古水道は市俄古市よりミシガン湖心に向ひ二哩の湖底隧道を開鑿し之に據りて水を市街に導く、此水路の直經凡そ五呎あり、湖中に建てたる煉瓦の塔ありて、其高さ百七十二呎、特別の裝置に依り水は二六時中間斷なく市俄古市に送らる、四個の動力エンヂンあり、第一エンヂンは三千六百萬ガロン、第二は六百萬ガロン、第三は四千二百萬ガロンの水を供給する力あり、燃料として日々石炭百五十二噸を消費すと

（此所挿畫あり、略す）

水道よりの歸途新英州教會の牧師チェンバレン氏を訪問す、氏の教會は曾つて市俄古市大火の節烏有に歸したるものなるが當時災厄を免れたる三個の有名なる石材尚保存しあり、其一個は英國の産、他の一個は和蘭ロッテルダム港の産にして、他の一個は彼の新英州殖民地の鼻祖ピルグリムス、ファザースの上陸地として名高きプリマウスより持ち來りしものなりと、當夜此教會に於て開かれたる祈禱會に出席す、歸路教會の執事コスト氏は親切にも予を旅館迄送り呉れたり

十月二十二日　木曜日

早朝起床出發の用意をなし、其より外出す、今日以後三日間の旅行に必要なる食料品及び雜品購入のためなり、直に一店鋪に入りて買物を調達し之を其所に預け置きて外に出づ、予は組合教會所屬の神學校を參觀せんと思ひたれば路上行人に之を尋ねたれど一人として知る者なし、市俄古市民中神學校なぞの所在を知る者は稀にして、上下汲々として皆金儲のため日も尚足らざる有樣なり、市俄古市民は皆其生活に追はれて何等の餘裕なく其隣人をすら知る者稀なりと云ふ、予は止むなくラントル街の乘合馬車に乘りて其御者に神學校の所在を尋ねたるに彼も知らず、乘り合せ居たる人々中にも亦一人も之を知る人なし、兎角する内に馬車は既に一哩も走りたれど到底神學校の所在を發見するに由なかりしを以て、予は直に下車して今乘りし方向

に歸る馬車に乘り替へて、先の店鋪に來りて預けし品物を受取りて旅館に歸る

市俄古に於ける宿料一夜二弗、相當なる宿賃なり

市俄古市よりヲマハーに至る寢臺車使用料三弗

市俄古市の觀察

云ふ迄もなく市俄古は一大商業都市なり、市民日常の生活は匆忙として恰も火事場に於けるが如し、東に奔り西に走り其活動一瞬も止ることなし、其市區は井然として街路廣く、家屋は皆石材を以て建築せらる、川岸通りに鯨肉販賣店あり、又大規模の菓實市場あり

午前十時バーリングトン停車場出發、汽車數哩を走れば廣寞たる平野に出づ、坦々たる道路此所彼所に見ゆ、其間に蜀黍畑あり、家畜飼養所あり、農園あり、大陸にあらざれば到底見られざるの光景なり、此地和蘭の風光に能く似たり、往年のアムスタダム地方の旅行を追想す、斯くして同じ様なる光景を送りつ迎へつ汽車は既に五時間を走りたれど更に平野の盡くべくも見えず、米國農業の如何に大規模なるかを想像するに足るべし、車中アイヲア州の農業家あり、偶然彼と知己となり互に能く談ず、彼はアイヲアの農業を縱横左右に論じ餘すところなし、彼の曰く、農業はア州に於ては長足の進歩をなし居り、其經營法の如きは最も發達し居るものなり、廣大なる農園の植付をなすに僅に數人の勞力を以て足る、例へば男子一人小兒一人馬數疋を以て一日少なくも二十『エーカー』を耕して之に植付をなすは寔に易々たる業なり、屈強なる農夫一人一ケ月の勞銀は二十弗に過ぎず、地下二十呎にして淨水脈に達す、同州の地質は Black-inock と稱す、地價は一『エーカー』六弗乃至十二弗を保ち鐵道會社は土地開拓奬勵の目的を以て十ケ年の地代支拂猶豫期間を與へて盛に土地の賣り下げを行ひ居る由、一哩平方の四ノ分一の面積の土地は約百六十『エーカー』の廣さに該當すと、彼の談ること一つとして皆予に新知識を與へざるなし

ア州の氣候

冬　零下二十度

夏　八十五度

同州の物價

牝牛　二十弗以上四十弗以下

牛肉

豚肉　四仙より五仙

麥　五十仙より六十仙（但、ブッシェル）

ヲーツ　四十仙

ライ　四十仙

ハーレー　八十仙より一弗以下

麻種　一弗三十五仙

馬鈴薯　五十仙

午後七時ミシシッピー河を渡る、間もなくバッシングトン市に着く、夕餉す、ミシシッピーは河幅四分ノ三哩あり、之に鐵橋を架す、バ停車場に停車すること約二十五分、バ市はミ河の右岸に位置する一大材木市場なり、此大河の舟船の便を借りて、上流より輸送さるる木材の量は莫大なるものあり、皆此地を中繼地とし此地に於て製材せらる、莫大の富源玆にあり

十月二十三日　金曜日

朝八時食堂に到り朝食す、一食七十五仙、可なりの御馳走あり、滿腹せしむるに足る、市俄古出發以來天候陰鬱、清朗の日一日もなし、雲天を覆ひ昨日の如きは多少の降雪すらありき、グレンウッド地方に於ては土地伏起して波狀を形成す、此地の曾つて河底にあり

しこと疑なし、柳樹及びローカスト所々に繁茂す、而して耕地各所に散在す、此地方は概して農業に適せざるが如し、グレンウッドよりカウンシルブロックは程近しとのことなれど停車場よりは見えず、グ市は人口八千を有する小都市なり

パシフィック分岐點はアイヲア州とネブラスカ州との境界線上にある市邑なり、寔に風光明媚の地なり、予の乘れる列車は、カウンシルブロック市に直行したるを以て パシフィック分岐點に於て乘替を要せざりき

カウンシルブロック停車場にて下車して乘替をなす、ミツゾリー河渡河のためなり

間もなくネブラスカ州ヲマハー市に到着す、時に午前十一時、延着すること實に一時間餘なりき

此地方とボストン地方とは標準時を異にす、故に地方時に一時間四十分の差あり

ヲマハ市は僅に十八年以前の創設に係る都市にして、人口三萬、市街は丘上にあり、遠く車中より之を望めば山上の城の如し、甚だ壯麗を極む

ヲマハ驛に於て寢臺車券購入のため意外に長時間を費したり、鐵道係員の不熟練の致す所なり、トランク預替にも亦豫想以外に手間取りたり、こは桑港行旅客の荷物甚だ輻湊し居たるに依るなるべし、旅客荷物用貨車三輛あり、皆トランク及び旅客用箱にて滿載しあり、予は桑港迄荷物を預けたり、停車場構内に憐なる樣をなせる印度人の乞食あり、旅客に物を乞ふ、彼は頭に白褐色の帽を頂き身に粗末なる衣を纏ひ革製の靴を着け赤色の毛布を以て身に纏ひ、手にピストルを携へ弓及び矢は決して之を身邊より離さず、然も其矢たるや玩具に等しく犬さへ殺すに足らず

（茲に此乞食の畫あり、略す）

ヲマハ地方は地地甚だ薄瘠にして不毛の地多し、然れど各所に耕地の點々として散在するを見る

プラット河は河水清ならず、鐵路河身に沿うて走ること延々二百五十哩、此河は其源をブラックヘルに發し流下して遂にヲマハ市の南側に於てミツソリーに合す、此地點はパシフィックジャンコ市の近くにして、聖路易市を去る二十五哩の上流にあり、ミツソリーの清流はプラット河の濁流を受けて河水ために混濁す

十月二十四日　土曜日

朝七時半起床、天氣晴朗天空碧色を呈し、一點の雲なし、汽車は尙未だネブラスカ州を出でず

此地方に於ても地表尙波狀を呈す、プラット河の兩岸堤防上には雜草時を得顏に繁茂す

汽車は、ロッジポール驛に着く、茲には停車場と同名の溪谷あり、其の延長約百哩に亙る、鐵道之に沿うて敷設さる、鐵道線路より程遠からぬ所に米國殖民地時代の遺物なる舊道の荒廢しあるを見る、此地方は地味磽薄何等生產用の供すること能はじ、日出より日沒に至る迄眼界の及ぶ限り際涯なき平野なり、此坦々たる千里の平野此所彼所に人烟虛空に昇るを見る

シドニー市

海拔四千九百十二呎、此所彼所に殘雪を見る、線路の左右に防雪設備あり、

（スケッチあり、略す）

暫時にしてネブラスカ州の市府チェーエンヌ市に着く（此處海拔實に六千〇四十一呎）、時に午後一時半、兎肉及びアンティロープの肉を求む（二十仙）、其味甚だ好かりしを以

て之を桑港迄持參したり

此チェーエンヌ市はヲマハ河流沿岸に於ける最大都市の一つなり、二三の煉火石もて建築せる家屋あり、其他の人家は皆高層ならず、一先づ下車して市中に行き一店鋪に入り、若しデヴィス氏を知る者なきやを尋ねたりしに偶然にも此店主はデヴィス氏の知友にしてデ氏の此地に滯留せられし頃には此店主はデ氏を援けて傳道に從事せられしことありし由を談られ、店頭に出て來りてデ氏の牧したりし教會を指示して予に教ふ、此教會は町の東部の通りにあり

（此所の教會のスケッチあり、略す）

十月二十四日　日曜日

ウイヲミン州グリーン、リヴァー市に着、時に午前十時、三時間の延着なりき、此地はテーブルランドにて曾つて水底たりし形跡あり、丘側の斷面に水線の跡歴々たるを見ても之を知るを得べし、車中より見ゆる小丘の如きは曾つて水底にありしものが水力の作用に依り徐々に凸起して水の去ると共に今日の如き外形を現出するに至りしものなるべし、寒氣凛烈地表一帶に結氷し居るを見る、グリーン、リヴァー驛に着するや天候俄然一變黑雲山丘を覆ひ車外に出づれば飛雪紛々たり、朝食のため驛前の食堂に入る、此日安息日なれば旅行を中止す、朝食代五十仙、一室を特別に借り受けて手荷物を其所に入れ、食事を終へて直に外出す

外出前ハーディー氏に書狀を認む

午後食堂に入れば陳連英なる清國人あり、談話數刻にして彼は予を伴ひて彼の家に導く、其家には彼と共同生活をなす同國人他に十二名あり、家は不潔にして室隅には塵埃積んで山の如く其生活は家の如し、室の一方壁側に赤紙貼附しあり、大吉神の三字を之に認む、予は一名の支那人に傳道を試みたれど如何にせん英語を解せざるのみならず漢字すら少しも心得ず、陳連英を除きては凡て他の十二名に教を說くに術なし、陳は多少英語の素養あり、且つ基督教の心理をも解へ居るが如し、陳は基督を以て彼が心靈の救主と信ずと云へり、予が談話中人品好からぬ四名の支那人は放歌暴言或は賭博に溺れ其樣傍若無人なり、國人の傳道は實に困難なるべきを明白に知るを得たり、其より此地方の黑人に傳道を試みんとて黑人の住居する地方に行けり、先づ一戶を訪れ案内せられて室内に入れば雲烟室に滿ちて瞬時も止るに堪へず、此地方の白人は未婚の男子多し、白人は一日の業を終ふれば喫烟以外何も爲すことを知らず、或は骨牌に耽り或は時に黑人の婦人に戯れ其以外に彼等の能事一つもあるなし、彼等を導いて文明の恩澤に浴せしむるの難き異邦人なる清國人を導くより更に更に大にして更に更に長日月を要すべきなり、嘆ずべきの限りにこそ

此地方に一名望家あり、フィルダ氏と稱す、自ら經營する食堂あり、雜貨店あり、宿舍あり、食堂の給仕には皆支那人を使用す

此地方は地味甚だ好良ならざれども尙多少の收穫なきにあらず、近傍には牧草甚だ多く繁茂す、以て家畜を飼養するに足るべし

フィルダ氏の言に依れば此地方は特に牧草を作るに適す、此地方產の牧草を以て飼養したる家畜は其生育非常に速かなる由、此地に於ては路上に家を放養するを以て馬鈴薯を作るも皆家兒の荒す所となりて收穫皆無なり、家兒放牧の故を問ひしに別に何等の理由なしと答へらる

十月二十六日　月曜日

フィルダ氏の切なる勸に依り程遠からぬ一丘

に登攀を試む、ために特に早朝起床す、然も之に利用し得る時僅に半時間に足らず、故に登路峻徑荒徑を進みて時を節す、前日の殘雪あり、加ふるに地面未だ乾かず、靴底ために軟泥に沒す、木枝を折りて杖に代ふ、攀登甚だ困難を極むるも尙地質學的研究は怠らず、攻學的に有益なる化石珍草の發見に努む、此小丘は高さ五六百呎あり、砂岩及び貝の化石より形成せらる

（山のスケッチあり、略す）

丘頂に達すれば方形なり、止ること僅に數分なり、魚類の化石を採收せんと試みたるも如何にせん採礦用槌を有せず、加ふるに時間に制限あり、丘上左右を彷徨する中に突然遙彼方より汽笛の聲あり、予の乘るべき汽車の溪谷を徐々として停車場に向ひ進みつつあるを見る、時に七時なりき、茲に於て予は集收したる化石珍草を檢する閑もあらず、直に之を携へ急遽停車場目がけて丘を走り下り、汽車の着すると殆ど同時に驛前に着きぬ、時に下車したる旅人の三々五々食堂に入るを見る、予は登丘前出發の用意を全部濟し居たりしを以て朝食のため予も亦直に食堂に入る、然るに計らざりきデイフォーレスト夫妻と茲に於て會遇せんとは、之實に奇遇と云ふべしデ夫妻と朝食を共にす

フイルダ氏への支拂左の如し

五　十　仙　室代
一弗五十仙　三食代金
合計　二弗

朝食後フイルダグ氏の菓實店に行く、鑛物類の見本並に魚類の化石をも求め歸る、價一弗二十五仙

先にヲマハ驛出發に際しヲグデン驛迄の寢臺車乘車券を購入し居たるも昨日グリーン、リヴアーに於て聖日を守るため一日旅行を中止したるを以てグ驛以西は寢臺車使用權を放拋したるなり、然ればクリーン、リヴアー驛發車に際しヲグデン迄一等車に乘り替ふ、然れど幸にもデフォーレスト夫妻が寢臺車に乘り居たりしを以て予は絕えず夫妻を訪れて寢臺車中に留るを得たり

汽車中一青年士官あり、鹽湖市近傍の任地に赴任の途上にあり、之と交を結ぶ

鹽湖市は風光明媚の地にあり、支那移民の住居する者甚だ多し、茲には支那人の經營する旅店すらあり又小屋の如き支那人の家甚だ多し、支那人は同國人の經營する旅舍を東遣偶所と云ふ、而して小屋の如き居宅に附するに甚だ大袈裟なる名を以てす、例へば芳香樓の如し、之を赤紙に書して戸口に貼付く、尙此地方には支那人の妓樓數軒ありと聞く

鹽湖市は寔に風光明媚なり、沙岩及び其他の岩石より、形成さる、或る地層の如きは全く赤色を呈す、恰も猛熱の燒きたるが如き形跡存す、此地方は疑もなく曾つて水底たりし地層の凸起したるものにして沙礫より形成せらる、又柔軟地層と厚質地層と相重疊する所あり、砦岩の絕美なる恐らくは他に比なかるべし

（砦岩のスケッチあり、略す）

又稱してデヴルスライド（悪魔の斷層）と云ふ奇勝の如きは蓋し自然美の結晶とも云ふべき所なり

鹽湖市に至る順路

ヲグデン驛にて乘替ふ、時に午後五時五十時既に薄暮に近し、六時半ヲ驛發車、一時間分、四十分にして鹽湖市に着く、乘車賃ヲグデン驛より二弗、此夜月光清麗、車中より鹽湖を遙の彼方に望むを得たり

此夜尙未だ更けざりしを以て諸所市街を見物す、寺院街と稱する町名多し、寺院に面し

居るより此名あり、例へば

第一寺院街
第二寺院街
第二東寺院街
第一南寺院街
第二南寺院街

の如し、予は谷屋に投宿す

十月二十七日　火曜日

朝バロー牧師を訪問したりしも直に面接するを得ざりしを以て其より馬を驅つてドグラスに行く

鹽湖市に就て

同市は廣大なる地面を占め、市街は規矩井然曲折なく且つ宏大なり、全市は二十の小區に分たれ各區は水路を以て圍繞せらる、此水を灌漑用に供す、每戸に樹木繁茂し、各區の面積十「エーカー」あり、各區毎に一個の學校を設け、又共同販賣所あり、一等旅館はウオカー屋なり、宿料一弗半乃至四弗、新築中の旅舍他に一つありき

（鹽湖のスケッチあり、略す）

鹽湖市は三方丘陵を以て圍らす盆地なり、一方開けて鹽湖に接す、山あり、水あり、風光寔に明媚の地なり、ウオシ山は白雪を頂く、赤陽之に映じて紫色を呈す、其美形容するに辭なし、カンプトンよりの展望は更に佳し、市街は宏大にして、之より鹽湖を遠く望んで特殊の風致あり

予はヤング氏を訪ひたるに微恙の故を以て其祕書役代りて予に面接す、ヤング氏は寺院の十二使徒の一人なるヲルヴルプライト氏に紹介の勞を取らる、ヲ氏は十二使徒中の秀才と稱せらるゝ人にして、氏は予と歷史的事務室に於て面會せられ交驩二時間の長きに亙る、談話中彼は予にモルモン宗教義の要點を說明せらる、午後一時氏の案內にてモルモン大學を觀る、之に要せし時間は三十分

（此所に大學內部の見取圖あり、略す）

大學內の教室最大なるものは能く小兒三十名を容るゝに足る、此校大學の名を附するも其實質に至りては中學校に過ぎず、生徒の年齡の如き年長未だ十六七歲を出でず、然も米國東部の青年の賢に比し大に遜色あり、大學を出でてモルモン宗の大本堂に到る、蓋し世界最大の堂宇なるべし

間口　二百五十呎
奥行　二百五十呎
支柱の數　四十六本
高さ　六十五呎

此本堂に備ふるヲルガンはモルモン教徒の手づから製作したるものにして、ボストン市音樂堂備付の風琴より稍々小なり、イーグルブッシュの草を以て此ヲルガンを飾る、講壇の後方に配置しありし長椅子は、水牛の皮もて作りしものなり、建築物の外部はセージブッシュにて飾らる、又モルモン教創業當時の苦酸と現時の隆盛とを對比し得んがため、種々の趣向を凝したる裝飾物あるを見たり、堂內に四個の水槽あり、其蓋を取りしに槽中の水惡臭を放つ、其用途を尋ぬるに聖餐式の時葡萄汁の代用に充つるものなりと云へり

堂を出でて市廳を訪うて各課を視察す、市廳訪問前ヲルゼンプライト氏はモルモン宗の教書並に其沿革を記載したる一小册子を予に贈られたり

午後三時四十分鹽湖市を發す

ウタ州の鑛山區は各所に散在し鑛物至って豐富なり

此地方に蟋蟀と海獸とに關する甚だ奇妙なる傳說のあるを聞けり

（此所稍々詳細なる說明あれど原文讀み難くして譯するに由なし）

再びヲグデン驛に歸着して寢臺車券を求む

十月二十八日　水曜日

エルコ驛に暫時停車す

バッテルマウンテン驛に於て午食を終ふ、此地には溫泉湧出す、谷間より湯氣の上昇するを見る汽車中にてフレークレー牧師及び夫人に會ふ

十月二十九日　木曜日

此地方は降雪多し、線路の左右に防雪柵あり、延々三四十哩の長きに亙る、即ちシーラネヴァダ越なり、絶頂に達して朝食す、積雪一呎に餘る、四圍の風景全く一變す、撒所維亞繁茂す、巨松甚だ多し　繁茂して天を摩す

午前十時ケープホーン驛に着く、旅客一時車外に出で、溪谷に小石を投じて戲るゝ者あり

十二時過サクラメント驛に着く

午後八時桑港に安着

桑港は菓實豐富にして其價極めて安く葡萄林檎等は形大きく味美なり

「ラスハウス」旅舍に投ず、一日二弗半

十月三十日　金曜日

D氏及びW氏と共に用件のため銀行に行く

ヲークランドに行かんと欲したるも不幸にして其機なかりき

十月三十一日　土曜日

午前十一時宿舍を發しコロラドー號に乘船桑港を解纜す

主よ許し給はゞ三四週間の中に予は愛する故國を見るを得ん

此日天氣淸快、氣候溫暖皆外衣を用ゐず

出帆後二週間は海上至つて靜穩なりき

第一週日に於ける一日の平均走航哩は二百〇八哩

第二週に入りては速度稍々加はる、西風吹き始む

第十五日目の日曜日より逆風激浪起り船大に惱まされ航海困難となる、此日より予は船室に籠り讀書を試みたるも船暈に罹り以後三日間は甚しく不快の感あり

桑港出帆後二週間は主として嚴格なる書物のみ耽讀し又時に船客と交り非常に愉快なる航海をなしたり、博士ヒッククック氏の佛教に關する講演ありたり

予は日曜日毎に博士ハル氏の說教集を讀む、第二週目の日曜日には氣分勝れず、仕事も手に付かず、多少氣候に當てられたる氣味あり、如斯くして航海餘りに不快にして遂に倦怠を感ずるに至る、然れど船客中には予以上に船暈のために惱まされたる者多し、旅の伴ありしならば如斯く徒然を覺ゆることなかるべきにと思へり、船客中には品性ありて交を結ぶに足るべき人なし

一夕佛國人予が船室を來訪す、談偶々彼が曾つて倫敦に於て卑しき婦人と關係したることに及ぶ、予は彼に向ひ如斯き愚にもつかぬ談話を避け何か他に興味あり高尙なる話をせばやと云ひ爾後を深く戒めたりしに彼は感謝して去りぬ、其後更に予の室に來らず、予は如斯き談話をなすを好む者に接近するを欲せず、如斯き人は予の友人にあらじと云へり、然れど予の彼を戒むるや飽く迄親切に飽く迄丁寧に彼の改悛を期せんことを努む

又或る朝一名の獨逸人來訪し日本語にて單語數種を敎へよと乞ふ、水、麵麭、錢、娘等の文字を問ふが儘に敎ふれば beautiful とは何なりやと又問ふ、之を敎ふれば又更に獨逸語にて Ich liebe dich とは何なりやと云ひ、彼は此語を度々用ゆる機會を有すと誇れり、故に予は彼に向ひ君は此語を日本に於て用ゆ

るの意志なりやと問ひしに然りと答ふ、然らば日本の何所に於て之を用ゐんと思ふやと重ねて問ひたるに、日本に上陸し町に於てと答ふ、更に予は彼に對して然らば日本の町の誰に對してかゝ問ひ返したるに彼は曰く日本の美人に對して予は云ふなりと答ふ、茲に於て予は獨逸人を大に嘲嗤したるに彼は鐵面にも又答へ直して曰く日本の茶屋の女中に對して云はんと

予は更に語を續けて汝は故國に家族を有するや

獨逸人　然り

予　日本の茶屋に雇はれ居る女中は尊敬すべき品性を有する者にあらず、如斯き婦人を汝は愛することを得るや

獨逸人　然りと信ず、予は曾つて維也納に於て日本美人の寫眞を見たり

予　我愛する友よ、予は汝を一時的の交を結ばんと欲するものに非ず、乞ふ我言を聴け、汝は上述の語を卑しき所に於て用ゐんと欲する者なり、故に予は之を汝に教ふるを好まず：：

然るに偶然維也納人らしき一青年あり、此問答を立聞きし居たりしと見え匆々下層に行きて予が日本語の生徒なる博士ウィルニッシュ氏の許に走りて Ich liebe dich（予は汝を愛す）なる日本語を聞き來り悦んで此獨逸人に教へ與へければ此馬鹿者は維也納人に教へられし儘予の手帖に「汝を愛す」と認めたり、之を見て予は此二人に其勞を謝して彼等を大に嘲笑したり、間もなく彼の博士昇り來る

予は博士に日本語を教へたるを問責したるに博士は獨逸人が教へよと乞ひしが儘に教へたるなり、他意あるなしと答へ、更に語を續けて曰く

吾人が婦人を愛するは、單に吾人が其缺亡を滿さんが爲なり、例へば空腹時に吾人が食物を取ると何等異ることなし、神は吾人に與ふるに欲求滿足の權利を以てす、異性間の情慾を禁ずるは實に謂なき所なり、天主教僧侶の概して不健康なるは男女間の交をなさゞるに依る、異性間の慾を滿すは實に吾人天與の權利なり

予曰く

然らば問はん、吾人は異性に對する情慾を感ずるが故に不適當なる場所に行きて迄も尚其情慾を滿足せしむる權利ありとなさば、吾人は赤貧にして喰ふに食なき場合には他人の室に闖入して他人の食物を奪ひ吾人は貧なるが故に他人の物を喰ふの權利ありと云ふことを得るや、如斯き理由一つもあるなし

博士曰く

今の引例は前の場合と多少區別して論ぜざるべからず、然れど吾人が食物の供給を受くるは農夫の生産したる穀物に對し相當の代價を支拂ひ以て之を正當に獲得す、吾人が食慾を滿足せしむるは正當なる順序を踏む、吾人が吾人の肉慾を滿足せしむる場合に於て前例と何等異る所なし、即ち先づ吾人は相當なる代價を支拂ひて吾人の慾望を充足す、之を以ても尚不當なりと云はるゝや

予曰く

足下は少しも事實を區別すること能はざる男なり、吾人は吾人の生命を維持するの權利と義務とを賦與せらる、斯るが故に吾人は食して吾人の健康を保持する義務あり、又農夫は吾人に食物の供給をなすが爲には勞働せざるべからず、而して農夫は吾人の與ふる對價を以て滿足を得ると同時に吾人も亦農夫より食物を得て以て滿足を享

くるなり、即ち當事者雙方共に滿足す、然れども足下が不潔の婦人に接し彼女を弄するに於てはそは足下と彼女とを共に辱しむるものなり、己を害して他人を害す、人は先づ己が情慾を抑制するを要す、然らずんば吾人は下等動物と何等選ぶ所なけん、人は人にして動物にあらず、更に足下に問ふ、人と動物とを分つの標準を足下は何所に求めらるゝや

博士答ふ

人と動物とは食慾と色慾との二點に於ては異る所なし

予之に答へて曰く

然らば足下は足下自體と犬猫とを同一なりとなさるゝか

博士答ふ

否、否、吾人は動物とは區別すべき點あり

予曰く

然らば區別すべきの點とは何ぞや

博士答ふ

人間は心を有す

予答ふ

人と動物と異るあるは吾人人類が理性を有するに依るにあらずや、理性と意志とは結合して人類に存すれども他の動物には此事なし、理性は情慾の抑制すべきを意志に命ず、此事能はざる人は最も不幸の者と稱すべし、人が情慾を制し能はずして之が奴隷となり卑しむべき行爲に耽るに於ては一つは己の威嚴を損し一つは他人の肉體及び精神を害す、一度身を賣り貞操を破られたる婦人は身穢れ一文の價をなきものと成り果つべきなり、かくなれば彼女は最早や尊敬すべき職業を求むること能はず、且又尊敬すべき人の妻となることも叶はざるに至る、假りに一歩を讓り、よし彼女にして幸に好き紳士の迎ふる所となるを得るとするも其子孫のことを思へば慄然たるものあり、穢れし母の生みたる子女は母の血を享けて既に純白のものにあらず、其子女の生育するに及び己が情慾を制する意志を缺き、一時の慰を貪りて遂に墮落の淵に沈むことなきを保せず、子女の不幸之より大なるはなし、又其害毒たるや之に止らず、延いては國民全體の上に迄も及ぶ、國民の將來を思ふて茲に慄然たるものあるに至らむ、足下は之を以ても尙人道に適したりと云ふを得るや、足下にして常識あらば必ずや予が意見に贊成せらるゝならむ

十一月二十六日

故國に到着の日にして多忙を極む

午後五時橫濱港着、グリーン氏、ルームス氏等に迎へらる

此日白人の祈禱會に招かれ英米人多數會合す、ルイス氏の家に宿る

同志社大學創立記事

明治十六年一月中、同志社大學設在主意書を認め、四月の下旬に至り濱岡氏に託し、之を上梓し、五月中、襄東上の時、東京府下の紳士に面談し、贊成を請ふヿを初む。

五月中、安中に於て高崎の柏屋六右衞門、倉ケ野松本勘三郎の二氏に面談し、大學贊成のことを委託せしかば、二氏は充分の力を盡さんことを諾す。比は明治十四年〇月中、大和大瀧村の土倉庄三郎氏、立憲黨員兼編輯長古澤滋氏と同道して京師に來られ、氏の二子辰二郎、龜三郎の教育を委託せられし時、古澤氏より大學の必要あるを談じ、且つ同志社に於て其計畫あるを談ぜられしかば、土倉氏は之を贊成し、是非共盡力せられんことを約せられ、其後大阪に於て五千圓の株を二十募らば事容易に成るべし、予は其の壹株として五千圓を出すべしと云はれたり。其後に至り襄は屢ば大和に至り（十五年一月中土倉氏を訪ぬ。十五年十二月大和の土倉氏に至り大學の爲に三萬圓を受負ひ呉れまじきやと依頼に及びしかば前約の五千圓の外今は應じ難しと答へられたり）同氏を訪ひ、彌同氏の篤志ありて大學の擧を贊成せらるゝことを信じ、遂に十六年五月に至り、大學設立主意書を認むるに至れり。

同六月中、濱岡氏に託し、發起人の募り方并に金額募集の方法の草案を稿す。

八月中大聖寺に於て郡長瀧讓君并に大谷陶器會社長飛鳥井淸君等と面會し、大學の事を委託す。

同月下旬、福井に至り松田定一君に面接し、大學設立發起人となり、該縣下に於て募集等に著手せられんことを乞へり。（福井縣下波寄村又福井縣泉水町岡部方）

十月一日の比より濱岡君と合談の上、先づ府下に於て二十又は三十名の發起人を募り、其の上金額募集の方法等を豫定し、然る後近畿より遠方に及ぼし、贊成者を募らば如何と申合せ、府下（京都）に在留する區部郡部の議員に書を呈し、又府下の有志諸君に面會し、發起人とならんことを乞ひ初めたり。

○區部議員

西村七三郎　安村勝二

兒島定七　下間庄右衞門

（十月四日西村氏に面會す）

郡部議員

伊藤熊夫　中[illegible]光之助

田宮勇　吉井省三

奥村新之丞　熊川[illegible]

市田文二郎　河村淸七（辭す）

（十月上旬面會す）

高木文平　磯野小右衞門

十月十一日。富小路四條下る、深政方に於て田中源太郎君に面會し、三週間前より發起人不承諾のことに懇々示談に及ぶ所、敢て發起人加名を辭せらるゝにあらず、近來米價地價の下落、加之當夏の旱魃を以てするより村落は非常に困却、隨て不景氣、不融通を醸し、到底此の實況なれば贊成者を得るに見込なければ、是れ時機未だ至らざるべしと思はれ、斷然發起人加名は辭し度しと云はれたり。依て襄は御尤もには存ずれども、全體大學の擧の如き一朝一夕に好結果を得べきものにはあらざるべし。乍去時機を待つと云うて何時まで待ては時機が來るか、慥かに來年來ると見込あらば必らず其望を以て待つべきも、來年のことは慥かに期し難きことなれば、縱令不景氣故多分の贊成を得るの望みなきも、今玆に發起人を募り、先づ募集の方法決定し、廣く世人にも之を通知

することそ一日も猶豫すべからず、一日後れば一日の損ならんと說きたれども、田中氏は到底見込なきものに加名するは大に心に愧づる所なれは、時機の至り、見込の立つまでは賛成し難き旨申されたり。

此夜中村榮助氏丹波地方より戻られ、來訪せらる。依て田中氏の口上を話し、相談に及びしかば、高木文平君へ行き一應相談しては如何と申せしに依り、同十二日の朝、高木の家に至り(中途讓渡を)同氏の見込を尋ね、且田中君の事は如何せば可ならんと問ひたれば、一應同君に面會すべしと答へられたり。且見込の違ふ所より急には着手はなるまじきに依り、再び依頼して應せざれば不得止事に應するもの丈にて發起人となり、募集法等を定め賛成者を募るの一段落を付くるの外良策はなかるべしと申されたり。募集法も談ぜらる。(寄附と云ふて現金を取らず、抵當を受け年々若干の利子を申受けては如何)歸路堺町御池下ル市川文三郎君を訪ひ、上京區長杉浦氏並に同氏の知人内貴氏に相談ありたき旨依頼に及び、又田中氏の見込に付き談ぜしかば先つ不景氣を不問に置き、速かに發起人を募り、賛成者を得るの法に着手するこそ今日の急務なれと云ふ。

高木君には下京區長に面會し、大學賛成を依頼することを託す。市田君の募集法は月賦に爲し、入れ易き法が必用なりと。

十七年一月十四日

伊東熊夫君より郡部の議員は同氏の外、獨り川勝光之氏の應ぜらるゝことに決せりと通知ありたり。他は辭退し又は未決の由。

辯明書

明治七年十月の事なりき、嚢米國滯在の末、最早歸朝せんと思立折柄耶蘇信徒の大集會ありし、嚢も辭別旁出席し、その座にて衆人に向ひ、歸國の上日本に一の學校を設立致度宿望を吐露し、且つ微力にて到底確立の見込もなく、協力の人は無き哉と觧陳せしに演説未だ了らざるに、友人博士パーク氏、忽ち颺聲して五千金を寄附せんと呼べり、繼でウェルモンド州の舊知事ページ氏も亦千金を寄附し、その他或は五百金、或は三百金、二百金、百金、以て五十金、三十金、二金、一金の微に至り、五六分時を出でずして積んで數千の額に上れり。因て學校建築の費用は畧備れり。然るに教師は如何にして支給すべきやの談に及びしに、爾後繼いで寄附金も可有之に付、悉皆アメリカンボード教會社に委託し、該社に集め、友人ハーディ氏之を預り置き、西航の教師に支給すべきに決したり。歸朝の翌年即ち明治八年十月を以て文部省の許可を得て、同志社を設立せり。本社の費用は固より米人の寄附に出るものと雖も、既に寄附したる以上は、社の取り物にして、米人の私する所にあらざるは論を待たず。故にこの社金は往時東京銀座邊に外國人が財主となりて日本人の名前を出して商賣し自己の利を射るものとは全く類を異にするものにて、現今支那人の飢饉のために日本より救助を受くるものと類を同すと謂ふべし。如何となれば銀座商人はその國に歸る時は悉皆貨物を運びされども同志社の什物は假令故障ありて、米國教師その國に歸るとも、一物として携帶し去るを許さず、猶救助米の既に支那人の手に落ちたる以上は日本人恐くは之を左右するを得ざるが如し、方今我日本は未だ學問の飢饉を免れざるなり。故に同志社は假令悉皆米人の寄附金に成立したるにもせよ既に社有に歸したる以上は決して米人の左右する所にあらず。況や多少日本國内同胞の寄附金も加りたるに於てをや。又況や永く米人の寄附を仰ぐの趣意に非るに於てをや。故に同志社は決して米國人の同志社に非ずして即ち日本帝國内の同志社なる事固より辯明を待たずして明かなり。向後何等の原由ありて政府の障害を生ぜんや。我政府に於て決して懸念を要せざるものに似たり。

（右は明治十一年四月廿七日附の辯明書で原稿は湯浅治郎氏の手にあり、後ち獨立問題の時も引用されたものである。）

第二回歐米紀行

(明治十七―八年の內)

九月二十八日 安息日

予は十日間の航海を終へて紐育港に無事到着す、稅關に於ける檢査は何の支障もなく通過したり、稅關吏に五十仙を與ふ、是は彼の所望ありしに依る

第三十一街シャーマンハウスに宿泊す、一夜一弗二十五仙、當夜寢具何となく不愉快なりしために眠らんと欲して能はず、依て夜十一時同宿を立ち去り、ホテルグレートユニオンに轉宿す、ニューヘブン線停車場前の宿舍にして一夜一弗

九月二十九日

ニューヘブンに向ひ出發、ポーター教授を訪問し同教授の家族より懇なる歡待を受く、同夜教授と基督教的教育の題目の下に快談、夜の更くるを知らざりき

九月三十日

予はエール大學學生祈禱會に列したり、同大學に日本留學生中島力造氏在學すとの由を傳聞す、中島氏は大學附屬の牧師及び總長の斡旋にて予と面會し、予は中島氏の室に同氏を訪れ二時間に亙りて快談したり

午前十一時半同地發、四時半ボストン着、車中ボストン市の光景遙に吾眼前に橫りし時の吾欣、言語に盡す能はず、州廳及び教會の高塔中空に聳ゆるを見たり

十月七日

一日より今日に至る一週間は恩人ハーデー氏夫妻の家に留り大に歡迎せらる、ボストンの懷しき古き家に迎へられし時の予の悅何に比ぶるを得ん

予は米國傳道會社大會參列のためヲハイオ州コロンバス市に行けり、ハーデー氏に伴はれてアルバニー停車場に行きしに其所にて傳道會社と關係ある數名の紳士に會遇したり、エリス氏は寢臺車券を購買し予に與へらる

八時同地發、翌日正午目的地コロンバスに到着す

十月八日

午後より大會開かる

十月九日

大會中今日は最も重要の日なり、クラーク博士は自ら扶けよとの題目を提へ、ヲルデン博士は基督教徒の獻物なる題目の下に報告する所ありたり、總長ホプキンス氏主會せらる、此日予はアンデレー大學總長エングル氏に會ひたるが同氏は予の宿舍に予を訪問せられたり、予が今回コロンバスに旅行し且つ同地に滯在するを得たるはタムソン博士の助力に負ふ所大なるを告白す、ヴァンバデールのバズ氏も予に對し少からず盡し吳れたり

十月十日

夕刻の會合に於て予は五六分時演說するの機會を得たり、予は州立盲目院に於てケーリ氏の姉君スミード夫人より饗應をうく

十月十一日

今日を以て大會終了

十月十二日

午後ボストン歸還

此日予は一つの覺書を草し傳道會社に提

出したり、大會參列以來著しく疲勞を覺ゆ

十月二十八日
予はマサチュセット州デヴァースポートにテーラア夫人を訪問し二夜同地に留る

十月三十一日
メーリーヒデン孃及び其令弟ヒデン氏を訪問

十一月二日
パーク教授の許にて午餐の饗應をうく、夕食はスミス教授の許にてなす、教會堂にて聖餐式あり之に列す、ハリス教授の愛兒及び他に六名の青年洗禮を受く、此日朝は南教會の禮拜式に列す

十一月三日
此日訪問をなし夕刻ボストンに歸還す

十一月十一日
午後クラーク博士と會見、日本の教化を一日も速かならしめんため一つの計畫書を博士に提出したり

十一月十三日
予はアイヴス牧師に書翰を贈り同志社の爲め寄附せられんことを乞ひたり
此日幼稚園を訪問す、教師は小兒をして予に對し自由に質問をなさしむ、小兒の年齡は三歲より六歲、朝登校に際し小兒は各自の教師を接吻するを例とす、手工につきては大に注意する所あり、粘土細工、針仕事、紙細工、綴字、讀方、實物教育等を授く

十一月十四日　木曜日
此日より病に罹り臥床二週日に及ぶ、デンニー博士の來診あり、膝關節の疾病なりとのことにてクラーク博士は予に勸むるにクリフトン溫泉の養生園に行くべしとのことを以てす、デンニー博士は同溫泉醫フォスター博士に紹介狀を吳れたり

十二月四日
クラーク博士と共にボストンより出發す、アルバニー停車場にて乘車、ハーデー氏は馬車を以て予等を送らる

十二月五日
朝六時シラキュースに着、十時迄待つ、此間予等は製鹽場を見る
（繪あり、略す）
木管を以て海水を鍋に導き、石炭を以て之に熱を加へ水を蒸發して鹽を採取する裝置なり
此日午後一時クリプトン溫泉に着き直ちに午餐の食卓につく

十二月十日
伊勢氏より來翰

十二月十五日
予はスミス博士に書翰を送り、小崎氏よりの來狀の主意につき博士の助力を求めたり、
（小崎氏の書翰は伊勢氏の譯文を添へたり）

十二月十六日
此日同志社のために五萬弗の寄附金を受く

十二月十九日
小崎、伊勢、松山の三氏に日本傳道の件につき書翰を認む

十二月二十五日
今日日本の事に關し演說す、獻金を集めて予に日本傳道のためとて寄附せらる、其額二十弗に達す

一月八日
クラーク博士出發に當り予は博士に助言を贈りて曰く日本北部の傳道は先づ仙臺、若松、米澤をも包含せざるべからざるを提議したるに、博士は予の提議に對し謝意を表され、直ちに其地の傳道の實行に着手すべきを約さる
博士は出發に際し、予に接吻を與へたり

一月十日

クラーク博士に地圖を添へたる長文の書翰を送りたり

一月十二日

第二の書翰をクラーク博士に送る

一月十三日

予はゴルドン博士及び其傳道會社に書翰を送りて仙臺地方の傳道を直ちに擴張せられんことを以てせり、即ち六七名の米國宣教師は六ケ月内の旅行券を所持し、東京の長谷川、拓植、長田氏等と共に直ちに仙臺地方に趣き、福島、米澤、若松等の地方を巡遊して傳道に從事すべきを奬勵せり

一月二十日

予は京都の市原氏に對し書翰を送り、東北傳道を仙臺迄擴張すべきことを勸む、其理由として認めたる所は左の數件なり

一、好個の傳道地なること

一、安中教會の如き孤立の域にある教會は姉妹教會を要す、即ち教會及び教區を集中すること

一、此等の地方は鐵道線路に沿ひて連絡を保ち居るを以て遂には京都迄も延長することを得べし

一、天主教は仙臺地方に於て傳道上深き根柢を有するを以て此地方に傳道して天主教の撲滅を期すること

長谷川氏は福島に、辻氏は米澤に、淺田氏は老母と共に若松に於て傳道に從事すること、而して此等の三地方には各聖書販賣店を設置すること

伊勢氏は熊本と福岡に行くこと、市原氏と森田氏は廣島に行きて新に傳道を開始すること、但し後に至りて岡澤氏此二人に代ること

高知よりの學生を留めて同地より多數の學生を同志社に遊學せしむる樣板垣氏に依賴すること

予は濱岡、高木、田中の三氏に書翰を以て京都に於ける學校の事業に熱心努力せられんことを要求せり

一月二十三日

市原氏に書翰を以て京都第二教會設立費用の概算を通知せられんことを申送りたり

一月二十四日

デヴィス氏にも亦同樣の意味の書翰を送れり、予はベリー博士に書翰を送り、札幌に行かるべきを以てせり

一月二十五日

今夕西班牙傳道に關するゴールド博士の説教あり、予に向一ケ月間滯在を延期せよとのゴールド博士等の勸ありたり

一月二十六日

東京在留のタナー氏の友人なる一夫人に會へり

一月三十日

ボストンの友人等は予に向一ケ月間逗留を延期するも差間なしとの件を通知し來りたるを以て予は當分當地に在留するに決す

此日伊勢氏に長文の書翰を發送したり

二月四日

クラーク博士より返信あり

カルツーム陷落の報あり

ゴルドン將軍行方不明となる

（バルク博士の書翰の一節あれど原文讀み下し難し）

同志社補助に關する件

此日氣温零下十四度

二月十一日

先週來食慾減退の氣味あり、去る金曜日より頭痛あり、逆上して頭熱を覺ゆ、一時讀書を廢す、激しき憂鬱症に陷る、日本を去る當時の病症と選ぶ所なし

予は一時悲觀したり、然れども暗雲の上には尙光あり、雲晴れなば希望あり、光は必ず雲間より洩れ來るべきを確信したり

二月十四日

ギューリック氏に託してマサチュセッチュ州ノルスフイルドのムーデー氏に書翰に送り、倉原氏の入學許可をヘルモン山少年學校に乞へり

此日ボストンに手紙を送る、最後の便より十四日目なり

今朝は大氣淸らかにして理想的の冬の日なり

二月二十日

クラーク博士は夫人、令息と共にキャロライナ州キテレルホテルに赴かれたり

デヴィス博士、グリーン博士、望月氏より來翰

二月二十二日

ニューヘヴン、アイヴス夫人は日本傳道のため五百弗寄附せらる

二月二十七日

午前九時アンバルンに向ひ出發

予は出發の際學院に行き田村氏に面會せり、又ホプキンス博士、ハーケンクトン博士にも會ひたり

博士ウェルシュ方に於て早朝食事を終へ六時シラキュース驛に向ひアンバーンを發す

シラキュース驛よりは、夜行汽車に投ず、旅費、寢臺車二弗、汽車賃四弗半

二月二十八日

午前七時パーマー驛着、同九時アムハーストに着く

シーレース總長宅に於て驩待せらる、總長の子女の長育したるに驚く

三月一日

シーレース氏日曜日の說教をせらる、午後聖餐式あり

予は總長宅に於て小谷野慶三なる日本の一學生に會ふ、氏は此秋を以てエール大學神學部に轉ずる由

三月二日

クラーク博士を訪ふ

三月三日

アムゼン、ナース教授の家の茶に招かる

三月五日

ボストンに向ひ出發の筈なり

此日眼及び身體の檢査を受く（シーレー博士より）

午後十二時十五分アムハースト發、同四時五十分ボストンに着く

ハーデー夫妻は恙なし

アムハースト大學シーレー總長は予の要求を容れて、拉典希臘、及び數學を修得したる學生にして予の推薦狀を有する者は十二名迄多少の學費をも補助して同大學に入學を許可すべしと約さる

三月九日

小崎氏より先週來狀あり、氏は自ら主宰する每週新報を日本基督教會に讓渡する意志あり、既に同新報編輯助手として二名を日本基督教會より新に入れたる由、然れども米國傳道會社にして彼に助力を與ふるに於ては新報讓渡を斷念すべしと

小崎氏の手紙に對する予の勸告

（一）一度日本基督教會に新報讓渡の申込をなして後に至り米國傳道會社に金錢上の助力を求めて新報讓渡を斷念するは兒戲に等しき行爲なり

（二）小崎氏にとりて望ましきは新報の所有權を留保するにあるも經營は日本基督教會と共同にすること

（三）雜誌經營を共同にするためには日本基督教會のみならず美以教會をも招

致之に加はらしむること

（四）三派共同して發行せば新報は益々其趣味を發揮し實用の程度を増すこと

三月十七日　火曜日

ベーカー夫人の招により今日より一週間同夫人宅に逗留す

三月二十一日

夫人と共に花見物に行く、草花培養の妙極點に達す

三月二十二日　安息日

ドルチュスター教會に行く、牧師の教話は最も好かりき

三月二十三日

牧師ハ氏來訪す

ボ氏亦來訪、夕刻迄留る

三月二十四日

午後牧師ハ氏を訪うて氏より傳道上の實話を聞く、數年前氏はイリノイス州イヴアングストン市に於て一教會の牧師たりし際グリーン博士は其教會の信者にて我友人澤山氏も當時來教會にありてハ牧師より神の道を聞き受洗せられたる由

ベーカー夫人は隔日三度宛予に投薬せらる

（ノース、ベネト[illegible]入しあり、其他詳細なる説明あり）

三月二十五日

ボストンに行きクラーク博士に會ふ

ブルクス氏を訪ふ

ハーデー夫人の家にて日本に渡航希望の一婦人と談る

今を去る百有九年の昔將軍ハウは九千の健兒千二百の市民の將となり海軍提督シエルダムは七十八隻の艦隊を率ゐてボストン港を出でてより讎敵英軍の兵力は一歩たりともボストンの地を侵すことなかりき

四月七日

ドルチエスターより歸りて第四ジエー街に入る

此日ベーカー夫人は自用の馬車を以て予を停車場迄見送らる、同夫人宅に滯留すること約三週間なりき

逗留中夫人より種々の話あり、夫人は黒人、亞弗利加、ビルマ、印度、支那、日本、布哇等の傳道事業に關し非常に興味を有せらることなど語られたり、又羅馬、巴里に於ける傳道事業に關しても少なからぬ趣味を感ぜられ居る由

又夫人の住宅内には誠に安靜なる寢室あり、隱退せる教役者異境の宣教を終へて其晩年を故國に送る同胞のため美しき居室を設けて彼等のために常に開放しあり、夫人住宅の門戸は曾つて閉されたることなし、主の御名のために貴き働をなしたる人は常に夫人の歡迎して措かざる所なり、夫人の趣味は多方面なり、凡そ善き名のために働ける人にして夫人の接せざる者一人もなく此方面の人に接する機會を多く有する、夫人に勝る者なし、蓋し夫人の周圍には全世界ありと云ふも敢て過言に非ざるなり

夫人は毎日多數の人に接し數通の書翰を認め其餘暇を利用して予に英語の讀み方を教授せらる、予の下手なる發音を正されしは予が夫人に對し深く謝する所なり、又夫人の予を遇するや其家族に對するが如し、食事の如きも愼重の注意を拂ひ三食共必ず肉類を副へらる、又麥粉を以て調理したるもの常に予のために食卓に上らざるなし、其他食餌療法の一つとして麥より摘出したる植物酸を與へらる、天氣清朗なる日にありては郊外に馬車を驅るを常とせり

逗留十日にして予のボストンに歸らんとするや夫人は之に應せずして曰く、夫人が予に對し

し倦怠を覺するに至るにあらずんば去る勿れと、其より數日にして予が辭せんとするや又曰く、否、否と、更に語を加へて『凡そ予の善をなさんとするや半途にして之を放棄するを好まず、只仕果げて後に止まんのみ』と

夫人は曾つて醫師よりエーテルの手術を受けたることありしが其時醫師の過失よりして手術の中途、半、昏睡狀態に陷りたり、其時夫人は細き聲もて『神と醫師とに感謝す』と呟かれたりと、エーテル療法の發見者にして其時の手術者なるモルタース博士は夫人が正義の觀念に滿てるに驚き夫人を激賞して止まざりしと云ふ、以て夫人の人爲とを知るに足るべし

又曾つて夫人は予に告ぐるに『吾家にて享けたる好意は我家内に於てのことなり、我家を出でて決して之を口外する勿れ』と、(恩人の家にて見たる所を其戸外に於て談ずべからず)

予は夫人の家に逗留中ハンシュリン博士に面會するの機會を得たり、博士は經緯儀及び蒸氣機關に用ゆる特殊の螺旋を發明したる人なるが講演の報酬を得て衣食の途に充て苦心慘憺以て發明を成就したりと自ら談られたり、博士は其發明をボルティーレ大學に賣却して百貳十弗を得たり

博士は英國の對土耳其政策を評して英國の政策は英土兩國の憎惡を增加して遂に兩國を驅りて敵視せしむるに至るを恐ると云はれたり

四月五日　復活日曜日

ルイ氏と共に三一教會の禮拜式に列す、牧師ブルークス氏の說教あり、予は教會より歸りベーカー夫人に此日の說教に關して左の如く談れり

ブルークス牧師の說教は我精神を養ひ我を高きに導き遂に我をして朝日の如き光明を望み見ることを得せしむるに至れり

此日伊勢、小崎、不破、デヴィス氏等より來信あり

伊勢氏よりは二通の來狀あり、書中に氏の熊本行の件並に德富一家の上に偉大なる機會の與へられたることを認めありたり

不破氏の來信、同氏の克己心は感ずべきものあり、月十二圓の收入を以て教會のために活動し居る由

予は此旨をベ夫人に談りたり

四月七日

ボストンへ出發する日の朝、食事の際ベ夫人は不破氏の教會のために金百弗を寄附すべしと申出でられたり、而して予は他に金貳百弗を勸進することを得たり、不破氏の克己心、其熱心は能くベ夫人を動かして此大金を集むるを得たり

此日ボストンに歸りハーデー夫人の家に入る

四月九日

日本傳道の件につきてクラーク博士に書翰を送る

又札幌傳道の件につきアムハーストのクラーク博士に書翰を認め田村氏には寫眞を送りたり

又アムハースト大學總長シーレー博士に書狀を認む

四月十二日　日曜日

朝ヲールドサウス教會の集會に行きゴルドン牧師の都市傳道に關する說教を聞く

午後は聖保羅教會に行き信仰なる題目の下にカンスラリー博士の說教を聞く、聽衆僅に二十名

四月十三日　月曜日

紐育に向ひボストンを發す、汽車賃五弗、時に午前十一時、急行列車なれば、午後六時紐育に着く(ニューヘヴン、スプリングフィ

ール卜經由）
第六街近くの第十通り西三九番ブース氏宅に投ず

此家にて若年の婦人コクラン氏に會ふ、婦人は小柄の人なれど精力旺盛に見ゆ、近々波斯に向ひ出發する由なり

婦人は波斯着の上はウルミアに留り傳道のため病院事業に從事する希望なる由、ウルミアには傳道本部あり、之を中心として四五哩の所に四五の教會ありて皆米國プレスビテリアン傳道會社の傳道地なり、此地方には既に四世紀頃教會ありたる由なるが、米國傳道會社が傳道に着手したるは僅々五十年以前のことにして傳道開始五十年祝典を擧げたるは纔に昨今のことなり、二十の教會中五個の自給獨立教會あり、此他五六十名の學生を有する學校ありて英語の教科書を用ゐずして之をシリア語に譯して用ゆ、是に四名の教師あり、醫學部には他に三名あり、其他三個の高等學校三個の村塾あり、又教會と宣教師との合同になる傳道局教育局あり

近頃ハマダン及びテヘラン（首都）にも傳道開始せられたり

外國宣教師以外に土着の教役者三四名あり、信者は各其收入の一割を割きて教會に獻金す、又各人は每週必ず一錢以上を傳道のため教會に寄附するを要す、其他隨時鷄卵葡萄等を喜捨して、一部は教會維持のために他の一部は傳道補助のために用ゆ、土地の婦人等は村々戶々を訪問して個人傳道をなし、又教會は各々分擔して傳道に從事す、學校にては教科書少なき故聖書を代用す、小兒の如きは聖句を能く暗記し居りて首句を讀めば全章を暗誦することを得る程なり

聖書は土語譯あり、皆シリア語を用ゆ

シェッド博士は一學校の校長にして土着の人を教師に用ゆ、此中には英語を解せざる人あり、教役者は時々一村に集りて會を開き聖書を讀み一名の者說教す、說教後聚集は其說教の批評をなすを常とせり

四月十四日

予は荷物の送狀を檢せんがため第四街聖書館に行き其よりジョシ、アール、ライヴモーア氏を訪うてジェンクス氏の作成せる送狀を檢したるに不完全極りて皿八ダース內銅製三個紛失しあるを發見せり

午後三時アレキザンダー博士の教會に於て婦人のため一場の演說をなす、此日は同教會創立三十三年記念日なりき

四月十五日

マイケル博士及びエレンウッド博士をセンツラル街プレスビテリアン傳道局に訪うて小崎氏より送付せし覺書をエレンウッド博士に差し出したるに博士は小崎氏の擧に大に賛成して米國傳道會社と共助せんことを申し出でられ且つ第四街に於ける美以教會本部をも訪問すべきを勸奬せられたり

一　ユニオン神學校
一　講義室三
一　修辭學講義室一
一　圖書館一
　圖書館はアンドリュー神學校附屬圖書館より宏大なり
一　學生の數約百五十名
一　學生室百二十個
　各室共一個の寢臺を備へ蒸氣煖爐あり、室內裝飾は皆單純な
一　プレスビテリアン病院
一　醫務室

一 寢室
一 便分析室
一 既往症の概略は醫師自ら認む
一 病理學博物館
一 入院料
　一週間三十五弗乃至四十八弗、但し此内には附添看護婦料をも含む
一 婦人患者
　二階の左右兩側の室を用ゆ
一 自費及び施療の二種あり
　イ 寄附金制度
　ロ 寄附者優遇法
　　a 三千弗以内の寄附者は何時にても入院料免除
　　b 四千弗以内の寄附者は寄附者並に其相續人の一生無料入院の特權あり
　　c 五千弗以内の寄附者は永久無料入院し得
一 入院を許可せざる病症
　イ 傳染病
　ロ 治療又は全治の見込なき病症例へば慢性症の如し
　ハ 肺病患者も收容せず

一 電氣治療法を用ゆ
　イ 外科用
　ロ 内科用
一 外科用には電氣治療室一室に十二名を容れ、内科用には一室十六名を容れたり、然れど收容患者の數を減じて十六名を十二名となしたるに全治に要したる日數を三分一早むるを得たり
一 患者は各室にて食事をなす
一 二階の各室に食事を運搬するには昇降器を用ゆ
一 各室に熱氣室附屬しあり
一 消火器備附室（火災の節に用ゆるヅックの管あり）
一 塵埃投棄口
一 衣類投下口一室一個宛
一 便所
一 賄所
一 肺量計室
一 外科室（手術室）
一 器械室
一 男子患者
　イ 自費患者一日二弗乃至三弗
　ロ 施療

一 下層
　イ 蒸氣室
　ロ 喞筒室（水上器）
　ハ ボイラー
　ニ 石炭貯藏所
一 病院は紐育市の各部と連絡あり、例へば巡査派出所より通知あれば數分を出でずして救護者は直に運搬車を出して應變出張し得る準備あり
一 洗濯所
　イ 一週間中四日間使用す
　ロ 石鹼製造室
　ハ 洗濯品煮沸室
　ニ 洗濯室
　ホ 蒸氣乾燥室
　ヘ 鐵火熨斗室
　ト 水分離器（洗濯したる衣類乾燥のため）
一 食房
　イ 食餌室
　ロ 食物計量器
　ハ 馬鈴薯貯藏室
　ニ 食堂
　ホ 料理人室

へ　補助料理人あり
ト　皿洗ひ人
チ　冷藏室
リ　藥品部
ヌ　會堂　患者は夕刻の禮拜式に列する義務あり、患者の半は加特里教信者なり
オ　消火器室
ワ　待合室
カ　大食堂兼應接室
ヨ　病床日誌保存室

紐育に於て無數の新聞配達人(小兒)が新聞社前に寄り集り競うて新聞を得んと焦心る樣は見物なり

又紐育市第四街の各隅には教會の建物あり、而して同市建築物の高層なるは驚くに堪へたり、チェルシーホテルの如きは、宏壯なる十一階の建物なり

紐育に於てテイラー博士に會見す、同博士と會談の要は、京都に大學設立の件並に之が基本金募集のことに關してなりしが、博士の云はるゝに目下商業界不振にして大打撃を蒙り居る折柄なれば基本金募集には最も不適當なる時期なり、然れば暫時延期して好期の至るを待たれよと、當時同博士の下に來り居る日本人學生あり、又支那人六十名のために聖書研究會あり

此日アレキサンダー博士の教會に祈禱會あり、長老の選擧ありたり

四月十六日

午前九時紐育發、ハーリントンに到る

ハドソン河の東岸に於て切符を求めたるを以て渡船に依り對岸に行きて乘車す。費府を經由してデラウエーヤの商業市なるウイルミントンに到り、其よりウエーヤの首都ドーヴアーを經て、ハーリントン市に着、汽車乘換のため二時間の餘裕あり、此時一エーカー八弗の割合にて三百エーカーの沼澤地の競賣に附せらるゝを見たり、此市の人口一萬三千餘、待合中午食をなす、四時四十五分發、六時十分ミルフオードに來る

デヴイス氏の第三の令弟は停車場にありて予の着驛を待たる

此地製材業盛なり、水車を以て動力となす、又草苺を入るゝ籠の製作盛なり、先つ護謨樹を伐りて之を蒸氣にて蒸すこと約五時間にして外皮を剝きとり之を平面に開きて箱形となし各緣に三個の釘を打ちて製作す、半ば機械力に依るも一名の女工は一日に能く六百個乃至七百個を作るを得、此籠は盛に苺の生產地なる南部諸州に輸出せらるゝものなり

此地には美以教會一、浸禮教會一、プレスビテリアン教會一、監督教會一あり、製材用水車二個、デラウエーヤ灣より水路の便ありて此を利用して輸出品發送せらる、二三の船舶の碇泊せるあり、プーレン氏は當地の樹木培養業者なり(護謨樹の植付業)

本月二十日此地に火災あり、製材工場燒く、損害一萬八千弗、其内被保險高僅に八千百弗なりき、當市は人口二萬五千を有する都市なるに一個の蒸氣喞筒すらなく消防隊の組織もなし

ハーリントン停車場にて汽車待合せ中當地に果樹園を所有する新英州の一農業家に會へり、氏の言に曰く當地農民の多數は讀書力なく、一萬三千の人口ありて尚土地は十分に開拓せられず、草林檎、桃は當地の主要產物として數へられ、其產額增多にして一年少なくも一千萬ブッシェルの輸出高あり、而

かも産地に於て鑵詰其他の製造品として消費せらるゝ額は輸出高を超過すと、半ブッシェルにつき五十仙の純益あり

一　桃には三種類あり

一　梨も三種類あり

一　林檎には大小二種ありて其内にも數種あり

一　苺には三種の別あり

四月二十一日

煉瓦製造所を參觀す

粘土を採掘して水と混ず（馬を使用す）

一日職工一人の生産高二千五百個、燃料として松三分の一樫三分の二を混用す

煉瓦の價格千個に付き十弗より八弗、窯は十二萬七千五百個を同時に燒く事を得べし

四月二十二日

果實乾燥場を見る

四月二十三日

デヴィス氏と共にミルフォードに至りトーマス氏を訪ひ夕刻歸宅

四月二十四日

夕刻美以教會に於て演説す、此日の獻金全額を以て予の旅費支辨の途に供せらる（八弗五仙）、聽衆堂に滿つ

四月二十五日

九時半華盛頓へ向つて出發、ウィルミントン分岐點に於て列車を轉ず、四時半合衆國首府に安着、荷物は通運に託して發送す、運賃五十仙

四月二十六日　日曜日

フーバー氏に伴はれて博士ニューマン氏の教會に出席す、有益なる説教あり、博士は予に教會にて一場の説教をせん事を乞はれけれども予は斷りたり

四月二十七日

フーバー氏の案内にて馬車を驅りて華盛頓を見物す、市街の兩側には楓樹を植ゑ有り

此日九鬼氏を訪ひ三浦氏とも會し談笑數刻に亙る、午餐を饗せらる

午後博士パーカー氏を訪ひ大に語る、博士夫人は予が滯留中同家に起臥せんことを勸められたり

四月二十八日

博士夫人の案内にて議會及政廳の見物をなす、議會内には無數の歴史畫有り、皆米國建國當時の事實に關するもののみなり

四月二十九日

スミソニアンインスチチュート見物

博物館國立

紙幣發行局

一枚の一弗紙幣製造に幾多の順序を經るを以て四五十日の日數を要す

郵便切手の印刷も又此にてなす

此日パットン孃に伴はれ大統領官舍に行き白館に於て大統領クリブランド氏に面會して握手す

四月三十日

ハーヴァード大學見物

豫科、師範科、專門部、神學部、醫學部、法學部

寄宿舍を參觀す

アムハースト出身のロビンソン氏に會ふ

イートン將軍に會見す、氏の談左の如し

一、英獨兩國に於ける高等教育

一、學校管理法

一、教育及學校

一、道德的訓練及教育制度

一、道德教育

一、基督教的高等教育

印度人教育に關しイートン氏の説明

英人は印度人の良心を尊重すること、佛教徒及び婆羅門教徒を教師に用ゐたる結

生、多數の印度人は小學校の教師となりて遂に……擾亂の參加するに至りたり、其時より英國政府は斷然佛教徒を學校教師に採用することを廢し基督教の教科書を用ゐ又聖書をも用ゆるに至れり、其結果は、精神上の健全なる效果大に現るゝに至れり

印度人教育の方針としてイートン氏の述べたる三點（我羊を飼へ）

一、教育學を教授すること

二、産婆學校の設立

三、醫學校の設立

ボストン市ホーレー書店發行教育學雜誌第十六號參照

フーバー氏等と共に、馬車を驅りて華府市郊外一哩の所にある兵士の家庭を見物に行く

土地四十又は五十エーカーを占む、壯麗なる圖書館讀書室附屬病院等あり

五月二日

ルイ、シンサバー氏を華盛頓に訪ふ、華盛頓府第一の煉瓦製造所を見る

五月三日　日曜日

ニューマン氏の教會に行く、聖餐式に列する筈なりしも牧師ニューマン氏突然發病のため聖餐は延期のこととなれり

當日は組合教會の一牧師代りて說教す、同氏は米國西部の新開地に於て傳道の任に當り居る基督教役者の事業の偉大なるを賞贊したり

五月四日

パーカー博士の子息と共に再びスミソニアンインスチチュートの鳥類魚類人類學部標本製造室等を見る、標本用動物は凡て酒精中に浸し有りたり、魚類の保存には酒精に浸したる綿を用ゆるが最良方法なるが如し、又魚類の脊髓を中心にして之を左右に兩斷して其の一方を以て標本を作成す、又時に天然色と同色の色彩を施すことあり、故に作成したる標本は形狀並に外部共全く天然のものと異らず

アダム、アレー、チャーレス、フスック社發兌、カンター氏著魚類の研究

深海魚類捕獲法

（挿畫あり、略す）

將軍華盛頓の軍服及彼れの家庭にて用ゐし諸調度の類は硝子器中に保存しありたり

スキシナン教授の丁寧なる案內にて海軍天文臺を見る、望遠鏡に用ゆるレンズの直徑六十六吋、價格二萬弗、望遠鏡全部の價格五萬弗

ニューコム著天文學參照

メイゾン教授と會談す、日本人は米飯を廢止して之に更ふるに麥飯を以てせんことを勸めらる、又割烹學校設立の急務なるを說かれ、寢具、空氣流通法、小兒取扱法等の科目を教授すべきことを教へらる

五月五日

パーカー博士の家を去る

バルチモーアに來り、中央停車場前の粗末なる旅舍に投じて夕刻市中を見物す

五月六日

ジャンスハップキンス大學總長ギルマン博士を訪ふ、午餐の饗應あり、博士トーマス氏、キング氏、後藤氏、太田稻造氏あり、政治學科の學生も之に招待を受けて列席せり

太田氏の案內にて大學を見物せり、同大學附屬圖書館の書目は題目別に分類し有り

アダムス教授の歷史の講義あり

五月七日　雨

公會堂に於ける朝の禮拜に出席、總長ギルマン氏の話を聞く、總長は一同と共に主の祈を唱したり、會する學生は甚だ少數なりしも宗教的感化の少なからざるを看取す

るを得たり

化學部哲學部生物學部をも見る、又化學器具製造室を見たり

又光線屈曲試驗器の最大なるを見たり

レムゼン教授　化學擔任

マスケン教授　生物學擔任

ローソン教授　物理學擔任

本大學に備付の機械は皆斬新技巧を極め居るを以て予の筆力之を記載するに由なし

シャンスハプキンス大學歷史經濟科（別紙附錄）

一　新聞學
一　教育學
一　書史學
一　傳記學
一　宗教學
一　米國史
一　世界歷史
一　歐洲政治史
一　米國政治史
一　社會學
一　政治學
一　經濟學
一　雜誌索引
一　埃及學
一　獨逸法
一　羅馬法
一　歷史は政治の一部にして政治は亦歷史の一部なり
一　統計學
一　地理學

大學附屬圖書館

一　圖書館
一　哲學科圖書館
一　教育學科圖書館
一　物理化學科圖書館
一　文學科圖書館
一　一般圖書館
一　讀書室／參考書室／新刊書室

以上

ギルマン氏夫人は予に市外華盛頓記念碑に到る道を示さる

此時大學學生及び軍隊の連合運動あり、總長夫人の案内にて大學生物學教室より見物す

ジョンスハプキンス大學の體操は強制的に課せず、體操器具を用ゆ

學生は一ケ月一回必ず體格檢査を受け身體の各部の圓滿なる發達を期する爲め醫師の指導を受く、其時醫師は必ず學生に運動方法を授く

（續あり、略す）

太田氏は予の來費を内村氏に豫報し置きたり

夕刻費府着、停車場より數步の旅館に入る

バルチモーアに於て太田氏は予に告ぐるに、内村は近來元氣勝れず、甚だ鬱々として樂まず、如何にして好きや殆んど當惑し居ることを以てせり、予は直ちに内村に電報を發したり

五月八日

早朝未だ朝餉を終らざるに内村氏の來訪あり、快談、時の移るを知らず、聖書を讀み且つ祈る、内村氏は罪の告白をなし、遂に故國に於て傳道に從事すべき事を堅く約されたり

午後内村氏と共に弗府の近傍ヲヴァーブルークに住するモリス夫人を訪ひトーマス氏にも

會過して快談したり

モリス夫婦は日本人の好友なり

内村氏は此日曜にエルヴィンへ歸りたり(博士ケルリン方)

五月九日

朝は市内の見物に出掛けたり、フェッツ氏に會ふ

氏と共に予の旅館に歸り、予の室にて十五六分快談、直ちに又氏と共に氏の友人を訪はんため外出したり

同市に於て最も壯麗なりと稱せらるゝ浸禮教會會堂を見る、禮拜堂宏大にして千人を容るゝに足るべし

同市公園に開催中の市創立百年記念博覽會に行けり、公園内に高塔あり、蒸氣力を用ゆる昇降器を備ふ、觀覽料一名十仙、塔頂より費府全市を展望するを得べくペンシルヴァニア大學一眸の中にあり、ライツ氏より午餐の饗應にあづかる、午後フランクリンの記念碑見物に行き、其よりレキシントン街のペリー博士の宿所に來り、九日より十三日迄滯留す、此五日間は殆ど無爲にして暮す、旅行の疲勞を治せんが爲なり、此宿の下宿料一日一弗

ペリー博士は看護婦學校設立及び施療院設立計畫に關し予と相談する所ありたり

五月十日

朝ブルークリンに行く、ストア博士の說教を聞かんが爲なり、午後はティラー博士の話を聞き、其より動物園美術館等を觀る

五月十四日

エッディー夫人を訪うて一泊す

五月十五日　金曜日

朝はウイン氏の許に行き、午後はベーレント氏を訪ひ、祈禱會に出席して十五分間の感話をなす

ベーレント氏は教會より一年一萬弗の俸給を受くる由

ポンド氏は圖書館の件に關し金百弗を寄附せらる、ポ氏は費府に於ける有力なる實業家なり

五月十六日

ストラートフォルト氏來訪す

五月十七日　日曜日

アイヴィス氏の教會にて說教す

五月十八日　月曜日

アイヴィス氏と共に學友ダーレンポスト氏をブリッジポート市の教會に訪ふ

同市に於て彈薬製造所を見たり、凡て機械の裝置によりて製造行はるゝに依り人力を用ゆること少し

五月十九日

ニューヘヴンに來る

エール大學總長ポーター氏懇に迎へらる

アイヴィス氏と共に組合教會俱樂部に催されたる同教會組會に出席す、座長はウオーカー博士なり

此日宏大なる州廳を見る、此建築費は三百萬弗にして土地購買費六十萬弗を要し用地は舊三一神學校敷地を買收したるものなりと云ふ

ツランブル氏はコンネティカット州最初の知事にして米國獨立戰爭當時在任したる人なるが、氏は絶對の禁酒家にして基督教的人格を具へたる士なり、氏の銅像あり、此日氏が獨立戰爭に用ゐたりし軍旗を見たり

彼の口碑に傳はりて有名なる殖民地特許狀(英王ジェームス二世の下附したるもの)を隱匿したりと稱せらるゝ樫木は千八百五十六年の暴風に倒壞して其跡だになく只其木を用ゐて作れる記念椅子のあるのみ、英王ジェームス二世の時コンネティカット州特許狀還

納の命に遭ひて州氏は特許狀を樫木內の空洞に隱匿して能く州たるの特權を保持するを得て今日に及べりとは人の知る所なり、此記念椅子には鷲樫木の葉及び實の見事なる浮彫刻あり

費府圖書館に於てコ州最古の法律を見る、一千六百七十三年マサチュセッツ州カンブリッジにて印刷せられたるものにして此法律文は聖書の頁邊に記載しありたるものを集錄したるものなりとの事なり

又千六百五十一年代の通貨をも見たり

組合教會俱樂部の組會は三時間にして終る、此間予は僅に十分間に過ぎざる感話をなしたり

午後ポーター總長の午餐に招かる

アイキン氏は當夜淸國派遣傳道師に命ぜらる、ア氏はエール大學神學部出身の人なり

五月二十日

午後舊譯聖書改譯の討議ありたり、ティー博士は聖書改譯委員事業の進步甚だ遲々たるを攻擊せらる、其他數名の演說あり、予も呼び出され、日本の傳道事業に關して數言を述べたり

ポーター總長は予を圖書館に案內せらる、此圖書館は主として學生參考用圖書のみを集む

此日招かれて總長宅に一泊す

五月二十二日　金曜日

アムハーストに來る

シーレー總長宅を訪問す

此地に留る事五日間

シーレー總長に小判及び一分金を贈る

アムハーストより歸りし時は殆んど疲勞しきつて居たり

ハーデー夫妻は數日間逗留の目的を以てバーハーバーに行かる、予は獨り遺さる

此日カンニング夫人來訪して不破氏の教會のため金五弗寄附せられたり（教會建設費）

五月三十一日　日曜日

雨天、監督教會に行けり

六月五日　金曜日

予はハーデー夫妻と共にエドワード、ハーデー夫人に招かれ一泊旁々同夫人を訪ふ、然るに主人ハーデー氏は嚴父病の故を以て家にあらず、夫人は予等のため特に知人を多數招きて茶話會を開かる、カルチス夫人の開會の挨拶に時間を取りて予は僅に數分間の感話をなせしに止りたり

午後九時の汽車に投じハーデー夫妻と共にボストンに歸還す

予は日本の地圖一葉をバーンス氏に貸與せしに氏は該地圖を汽車中に紛失せしを以て予に金拾弗を代償せられたり、故に予は其金を倉原氏に送り同氏を其困難なる境遇より救濟する一助となせり

ハーデー夫人の子供等は皆可愛らしくチャーレスは殊に美し、ネリーは惡戲子なれど怜悧なり

ハーデー氏の住居は美しくして便利に建築しありたり

宗教の衣裳

志と信仰

急がば迂回れ

祈の標本

生命の曙

死と死者

杜鵑一聲

黒谷の上人

植村正久

宗教の衣裳

一

斯てイエスを十字架に釘しのち鬮を拈て其衣を分これ預言者の言に彼等互に我が衣を分わが裏衣を鬮にすと云しに應へり……日くれてイエスの弟子なるヨセフと云るアリマタヤの富人きたりてピラトに往イエスの屍を請しかば、ピラトその屍を付せと命ず、ヨセフ屍を取て潔き枲布に裹み、之を磐に鑿たる己が新しき墓におき大なる石を墓の門に轉して去、マグダラのマリアと他のマリアと墓に對て坐し其處に居り

（馬太傳第二七章三五節、五七節――六一節）

此は耶蘇の死なれた時分に起つた出來事の中で最も不思議な興味の深い對照である。一方にはアリマタヤのヨセフが其の愛した師の屍を知事から貰ひ受け丁寧に此の新しい潔い布に裹んで、磐に鑿つた己が新しい墓に納め、其上に侚念を入れて大きい石を墓の入口に轉ばした。實にヨセフが耶蘇の死後に之に對する愛情濃かなるを現はして居る。彼は其屍を大事にしたのである。又他の一方には兵隊が磔柱の下で耶蘇の着物を鬮取にして居る。此方は耶蘇の身體を大事に護り、彼方は其の身體は如何でも宜い、其着物が必要であると言つて之を鬮取にして居る、此章を讀むと、恰も此處に一幅の意味の深い油畫が懸つて居るやうな心持がされ、人間の愛情と人間の殘酷が如何にも善く對照されて居る。

之がために種々な思想も促される。其所で、宗教の衣裳と云ふ說教を遣つて見る考へも起つたのである。兵隊は耶蘇の着物のみに目を着けてアリマタヤのヨセフと反對に之を鬮で取つて居る所は恰度今日宗教上の事にうまく當嵌まる樣に思はれる。古い書物に赤裸々と云ふが有る。此は大阪の或人が佛法が種々の衣服を着て居るので分り惡いから裸かに引剝いてやらうと云ふ意味で書いた小さい本である。元來宗教には着物が有る。赤裸々は惡い意味で佛法を論じたのであるが、善い意味なのもある。パウロが羅馬書第十三章第十二節に『夜すでに央て日近けり、故に我儕暗昧の行を去て光明の甲を衣べし。』十四節に『唯なんぢら主イエスキリストを衣よ。』又哥林多前書第十五章五十三節に『この壞る者は必ず壞ざる者を着死ぬる者は必ず死ざる者を衣べし。』加拉太書第三章二十七節に『そは凡そバプテスマを受てキリストに入る偏曹はキリストを衣たる者なれば也。』といひ四章二十四節にも同じ意味の言葉が有る。斯の如くに宗教には身體と其れを裝ふ所の着物が有る。其れは善い意味にも使はれ又惡い意味にも使はれる。善い意味の着物が忽ち變じて惡い意味になる。其變化する所などに注意すれば吾々の爲めに大なる教訓となるのである。

宗教の衣裳は時としてごまかしが多い。動もすると餘り飾り過す所が多いので、着物と身體と調和を缺くと云ふ弊害を免れぬ。着物は矢張りそれ相應のものを着るやうにしたいと思ふ。宗教は卽ち最も其の着物の恰好や釣合に注意せねばならぬ。或は宗教が着物ばかりになつて居るのもある樣に見える。先達て死んだ團十郎が德川家康をやる時に舞臺の上では眞成の家康

になつた積りであつたと聞く。俳優としては感心だが、併し實に憐れな家康ではあるまいか。十五分か二十分間の家康、唯着物ばかりの家康である。宗教も随分着物だけを着て、心はそれに成り済さないで、唯舞臺に上つて居る暫くの間のみ宗教を持つて居ると云ふことがあるだらう。丁度金庫に正貨の準備もせずに濫發した紙幣見た樣な宗教の無いことは有るまい。其れ故吾々は宗教の衣裳と云ふことを大いに考へなければならぬのである。

世に種々宗教を論ずる人が有る。昨今は又誠に宗教らしい言葉が多く使はれるやうになつた。今日基督教を公然と信ずる者ばかりで無い、随分理窟から――自分の研究した哲學邊りから割出して神の存在とか何とか言つて居る人も有る。獨逸邊りへ行つて宗教學を研究して來たといふので神秘的とか何とか云ふやうなことを賢氣に立派に説く人も有る。實際日本には信者の間ばかりでなく、世間普通に追々宗教の衣裳が方々に見えて來た。或は無限とか、絶對とか、或は靈的とか、向上主義とか、或は神とか、犧牲獻身とか、信念とか、雜誌や小さい書物に書いてある文字だけを見るならば、日本は決して偶像國ではない。或は佛教の人か作つて居る所の「精神界」と言ふやうな雜誌を讀んで見ると、此れは如何に、佛教だらうか基督教だらうか、一寸分り兼ねるやうな文字が澤山見えて居る。或は羊頭を掲げて狗肉を賣る奴等もあるだらうが、兎も角も基督教の衣裳が方々に懸けられて居る。是は一方に於ては賀すべき事である。然し善く考へて衣裳に瞞着されぬ用心が肝要である。凡そ宗教と云ふものには禮拜が無ければならぬ。禮拜が無ければ宗教とは言はれまい。又人の心に慰安を與へることもなく、其の死ぬる時に希望を與へることも無い位では宗教とは言はれまい。今日多くの人の唱へて居る宗教らしい言葉、文句、或は大學の講座から、或は書物の上に於て、甚だしきは基督教會の講壇から聞える種々の言葉は眞實宗教の體を具へて居るか。其の神は拜まれ得べき性質のものであるか。其の説く所に眞の慰安があるか。失望に沈んで居る寡婦や、露命旦夕に迫れる病人、牢獄に泣いて悔改の芽を胸に萌せる放蕩兒、凡て此等の人々に眞の光を與へることが出來るか。彼等は來世に就いて如何なる信仰を有つて居るか。彼等には禮拜すべき神が無いのである。感謝の出來る、讚美の出來る神が無いのである。苦める者を慰める力が無いのである。死と云ふ大問題が來る時には、狼狽して爲す所を知らないのである。彼らは神の人格――生ける神、それ等に就いては何も考へて居らない。成程中には神は父であると云ふことを説いて居る。父と云ふは人間の耳には誠になつかしい言葉であるが、其れは如何云ふ意味で神に適用されるのであるか。神は父である、愛であると盛んに説いて居るが、之に伴ふ信仰は何所にある。試みに問ひたい、神は父になつたのであるか、將た父であるのであるか、父になつた神と、父である所の神とは大變な違ひである。今日多くの人は新約全書よりも餘計に父と云ふ言葉を唱へて居るかも知れぬ。神を父と唱へるに至つては自分等に專賣權でも有るかの如くに説く人が有る。併しながら若しそれに向つて、君は頻りに父と云ふが、神は父になつたのであるか、父であるか、と問うたらば、多分其人は人間に對して嘗て父になつた所の神である、天地の無い前から、人の生れない前から本來父であるのではないと答へればなるまい。然るに基督の説かれたのは本來の父である。初から父であるのである。一體耶蘇基督を神の子と信じないで、耶蘇基督の十字架と其教を信じないで、約翰傳の第一章に書いてあるやうな意味に於て基

督を信じないで、神の世をいつくしみ給ふことは其の獨子を與ふる程なりと云ふことを信じないで、唯漠然と神に對して父呼はりをし、漫りに神の愛を唱へるとは、無理な合はない話である。ヨハネや、ルウテルや、ウェスレイや、其の他眞に基督教の信仰を有つて居つた人々が唱へて居つた信仰の着物だけを直ぐ借りて、或は損料も拂はずに借りて來、之を巧く着飾つて、之が眞の基督教である、神は父である、神は愛であると言つて居る。其衣裳を引剝いで見ると内は藁人形である、身體は無い、十字架の無い父である。永遠の子の無い父である、初は父でなかつたけれども後に父に成上つた所の神である。其の根本思想は哲學の絕對だ、無限だ、不可思議玄の又玄だ。之に少々宗教的辭令の胡粉を置き、信仰らしい金箔を捺り着けたやうな意味に於て神は父であると云ふに過ぎぬ。或は來世に就いても種々議論をする人が有る。基督教で謂ふ所の來世は取るに足らない、己はもつと道理に適つた來世を見付けた、即ち、一個人は亡ぶるけれども社會は續く、人類は永續する、人類の永續すると云ふことが即ち眞の來世である、とコムトは論じた。先達ても日本の或る先生は自分獨創の意見だと言つて小さい本を印刷して方々に廻した。其れを讀むと斯う書いてある。人間の來世と云ふものは恰度身體に於ける細胞と同じ樣な關係の者である、細胞は新陳代謝するけれども身體は依然として元の儘である、個々の細胞死んでしまつても何かあらん、身體は依然として存す、是れが眞の來世觀であると。此の人は矢張りコムトの弟子である。其の話を一寸聞くと來世もあり、永遠の望みも繫つて居る樣に思はれて立派な宗教らしいものである。慰めもあるやうに見える。けれどもそれは言葉だけで、體裁は如何にも宗教らしいが正體は無い。身體は皆無である。彼の兵隊が目を着けた基督の着物見たやうなものである。身體は既にアリマタヤのヨセフの手に入つた。斯樣なものだらうと思ふ。之を極く平く近い喩で批評すれば、此處に一人の若い女がある、近頃其人の蝶よ花よと愛した子供が死んだ、其處へコムトが出掛けて行つて、お前さん餘り心配しなさるな、さう悲むものではない、御宅の子供は死んだけれどもお隣家の奧さんが子供を生んだから安心なさいといふ樣なことで、人類は永遠であるから個人は幾ら死んでも亡びても差支ない、といふ亂暴な說を以て人を慰めようと云ふのは、實に麵麭を求むる者に石を投與ふるやうなものである。誠に詰らない話である。

二

斯う言ふ風に段々數へて見ると世の中には宗教らしい言の衣裳は澤山あるけれど、其の實宗教の體を具へて居るのは少ない。基督教らしいことを唱へて居るが、其の實は基督教では無い。神は父であると言つて居るが、其の實は基督教で言ふ父でない。神は愛であると言ふけれども、其の實は基督教で言ふ愛でない。唯着物に惑ふのである。餘り着物が綺麗であるから着物に負けて了ふ。餘程是は大切なことである。其の衣裳と言ふのは芝居掛りで大變に立派に源家の公達の衣裳であるが、着て居る本人は馬の脚だと言ふやうなのは愚の極であらう。今日の宗教思想は餘り言葉の末に目を着け過ぎて居るが、吾々は着物は如何にと問ふのでない。着物を着て居る其の本體、其の正體を現はしたいもので有る。赤裸に引剝いて見たいもので有る。如何かすると洋服屋の店に飾つて有るやうに、内は木の枠である。世には基督教の教理を輕んじて其の道德ばかりを重んずる人がある。三位一體、基督の神であると言ふこと、贖罪などに

至つては輕々に之を看過し、只親切に人を愛することを努めて、基督教の道德が實行さるれば宜いではないか、と言ふ。其れも詮ずる所、矢張り衣裳の話になる。山上の垂訓は、基督教の道德ばかり唱へる此等の人の一番大事に思ふ所である。パウロの書翰は廢せ、贖罪の話、罪の赦、三位一體、神の子のインカルネーションと言ふ樣なことは一切御免である、唯山上の垂訓が欲しい、「敵を愛する」、「忍耐する」、「己を呪ふものを祝する」だけが欲しい、基督教は聖徒よりも寧ろ品格ある紳士を作るのであると主張する。けれどもよく御覽なさい。山上垂訓の道德は、神と其の性質や、神と人間との關係に就いて明かなる信仰を根本として居る。矢張り天父と其の造られた世界との關係に就いての確實なる信仰が其の根據となつて居る。神及び人類の人格が其の根據である。教理が土臺であつて其の上に道德が立てられた。此の信仰を無にして道德だけを取らうと言ふのは矢張り兵隊が耶蘇の着物だけを鬮取にしたのと同じである。

或は社會的基督教などと言つて、專ら社會改良を唱へるものがある。今日其れが大分流行つて來た。確かに社會主義に眞理も有る。吾々大いに貧乏人を救はねばならぬ。勞働者も善くして遣りたい。孤兒院も庇ふべしだ。其れは爲なければならぬ。吾々は社會に對する務がある。基督教は社會を清めるに於て確かに大いなる勢力である。併し眞に人の靈を重んじ、人間の罪を救ひ、根本的に人を救ふの精神、即ち全世界を得るとも靈を失はゞ何の益あらんやと言ふ信仰が無くては、慈善も、博愛も、本當には何も出來るものでない、靈を深く重んずる所には身體も大事にされる。人の値打は全世界にも代へられぬと言ふ確信が無ければ、社會主義の正しく行はれることは出來ぬ。

神を父とし、神が世を愛んで下し給へる其の獨子基督を標準とせる値打から打算して考へねば、人類の値打が本當には分るもので無い。天地の根本は大いなる正義であるか、全能力が天地萬物の根本であるか、或は父たるの心を有つて居るものであるか。若し天地萬物が大きい力——人間には迚も敵はぬ力であると言ふのみならば、世の中は、即ち所謂優勝劣敗は、唯勢力是れ正義と云ふ風に間違ふかも知れぬ。けれども若し天地の奥底に父なる心が有り、父に成上つた心ではなく、初から父である所の心があると考へる時には、優勝劣敗の意味が大變異つて來る。即ち「吾れ若し擧げられなば萬民を引き寄せん。」と言ふ十字架が、眞の神の精神を現はす力となる。十字架が神の心を現はすのである。斯く信ずることは世人に認識されない善事を行うて何所までも辛抱の出來る最大動機である。

もう一つ考へなければならぬことが有る。日本の教會を見るに外國人の資本で立つて居る教會と、日本人の資本に依るものの二種がある。外國人の資本で遣つて居る教會と言ふものは、多くは不健全に流れ易い。其の信者に犠牲獻身の精神が無からうとも、一文の獻金をせずとも、如何に祈禱をやらずに居らうとも、聖書など怪我にも讀まない風であつても、ちやんと會堂は維持されて居る。日曜日の禮拜も繼續される。傳道もされる。讃美歌も遣る。オルガンの音もする。是は健全であらうか。又基督教主義の學校にも此の種類のものが有る。若し他の普通の學校なれば科目が惡かつたり、教師が惡かつたりすれば、生存競爭の上から自然と潰れて了ふのであるが、官立學校と同じもので、外國から補助さへ受けて居れば人が來ようが來まいが、教育の値打が有らうが有るまいが、學校はちやんと立ち行くのである。實に何

たる事であるか。日本の基督教に就いて非常なる問題である。値打が無くても着物だけ飾ることが出來る。幽靈が衣裳を着て居る。或は敎會に基本財産を造らうと云ふ人が有る。或る程度まで、即ち會堂の修繕とか、臨時の費用とか言ふやうなことの爲めに幾分の基本金も必要うであるだらと思ふが、併しながら若し此の一番町教會が金の利子だけを以て立行く程に資本が出來たと假定したら如何であらうか。實に危いものである。それでも信仰が盛んになつて行けば、其は餘程信仰が豪いのだ。

一體教會と云ふものは信仰の有る時には立つて、信仰が無ければ潰れるが宜い。信仰が無くても立つて行く教會は要らない。信仰の潰れた教會はドン／＼潰れるが善い。或は外國の資本を以て、或は名簿だけ信者になつて居る人の寄附金を貰つて、ヤット教會の外觀を飾つて居るかも知れぬ。實に是れは危險であるまいか。昔スポルジョンは決して教會に基本金を造るな、其れは滅亡の根本である、唯信仰一つで行け、信仰が滅すれば維持が出來ぬ、信仰一つで昇り降りを爲るやうにして置くが一番宜いと言つた。信仰の實質及び其の精神がぼんやりとして、唯形體上の制度、儀式などばかりを立てて置くやうで有るならば、寧ろ教會が無い方が宜い、彼の兵隊が耶蘇の身體を一向顧みずして、十字架の下で其の着物だけを鬮引にしたと同じでなからうか。今日多くの教會の經營や、事業は、語を換へて言へば着物の鬮取である。

今日の佛法を御覽なさい。全く信仰は無いのである。彼等が辛うじて命を保つて居るは葬式が有るからである、法事が有るからである、墓の番をするからである。若し佛法から此等の習慣と遺風を差引いたならば、佛法と云ふものが無くなる。命なきものが制度の力、習慣の力、行掛りの惰力で露命を繼いで社會の邪魔をなし、新しいものの入つて來る席を塞いで居る。是れ實に害の甚だしきものではないか。併しながら耶蘇の教會も亦自ら顧みねばならぬ。精神一つで存在すべきものが、色々と支へ棒をかつて着物ばかりを以て維持され居るならば、眞個の善いものの邪魔をすることになる。吾々は洗禮を受けて居る、教會に集つて居る、聖晩餐を守る。確かに宗教の衣裳を着て居る。此の衣裳は十分盛んなものである。燦爛目を奪ふ程かも知れぬ。而して此衣裳と靈の本體と、眞によく釣り合うて居るか、或は藁人形の振袖着たやうで有るか、よく考へねばならぬ。

此の問題はまだ是れだけで了らない。アリマタヤのヨセフは着物を鬮取にした兵隊よりも優つて居る。併しパウロが我れ最早肉に從つて耶蘇を知らずと言つたのを見れば、ヨセフよりも善い遣り方がある。マグダラのマリアが耶蘇の復活されたのを發見した時、喜びの餘り縋り付かんとした所、主は之を禁めて、我に觸る勿れと言はれた。茲に深く考へねばならぬ眞理がある。

（一九〇三年一二月——四年一月）

志と信仰

『學は志を遜り務めて時に敏すれば其の修むること乃ち來る。』此所に志を遜るとは、其の心を卑遜にして、有りと雖も未だ有らざるが如くするのである。自ら未成品たることを意識し、其の積りで萬事を計畫し、少しも現狀に安んずる所がない。所謂謙虚益を受くるのである。時に敏なりとは進修日に新たにして又日々に新たなるの氣、内に充滿して努力止む所を知らぬを意味す。慎むべきは現狀を足れりとして驕慢に陷り、志盈ちて、其れ以上に進み入り難き有様となり、懈怠して力を盡くさんともせず、氣弛み業廢ることである。之を基督者の生活に就て言へば、ルウテルが既に完全なる基督者は基督者に非ずと喝破したのも、即ち此所である。

吾人有るがまゝにては其價値見るに足らぬ。而も之を將來の可能性に置く。實在に於て卑しく、理想に於て高い。既に得たる所甚だ小である。將來に期待する所多くあらねばならぬ。此の意氣込みを志と云ふ。朱子が陽氣發する所金石も亦透る、精神一たび到らば何事か成らざらんと激勵したは、此の志を振はしめんと試みたのである。パウロが信仰に由りて義とせらるべしと説いたのも、其の意味の一面に於ては、基督に於ける期待、即ち『基督と偕に神のうちに藏れ居る』生命が、基督者の價値で、たゞ之有るが爲に神に容れらると云ふことであらう。斯く見來れば信仰は志なりと云つても差支がない。信仰は基督に於ける志である。

『夫れ志は氣の帥なり。人の命なり木の根なり水の源なり。源濬からざれば則ち流れ息む。根植ゑざれば則ち木枯る。命續かざれば則ち人死す。志立たざれば則ち氣昏し。』と云つて王陽明は立志の必要を説きて、其の弟を訓戒した。國民でも、個人でも、志無くば命が無い。決してものに成らぬ。朽ちたる索如何とも爲ることが出來まい。然し志を尚ぶからと云つても、餘り多く鞭を與へられた馬が、無暗に跳ね廻ると同様、たゞ氣が苛立ち、野心勃々、何でも關はぬ、行つ着けろと云ふ様な事では困る。其れでは身を滅し世を害ひ、天下に災を及ぼすに至る。亂臣賊子此所に生ず。我々から云へば、獨逸の今日が最も好く此の弊を表して居る。精力主義の餘毒、ニイチェの病癖、勢力是れ正義の左道、ベルンハルデイの飽くまで行つ着けろ主義の戰爭論などの如きは詮ずる所豆を食ひ過ぎた馬で、志に取り締り無く、無責任に意地張り、理不盡に野心を逞しうせんとした結果に外ならぬ、たゞ獨逸皇帝やネブカデネザルばかりではない。普通の一個人の身の上も同じである。發奮努力のみで往くものでない。支那人の古典に『君子終日乾々。夕惕若。厲无咎。』とある。乾々とは自彊息まざるの義で、惕若とは畏れ慎むを意味す。即ち君子はエネルギイ一杯で、何でも行り捲くる氣象、天に沖るばかりで、所謂終日乾々と云ふ風がなければならぬが、其のみでは甚だ厲い。其所で夕に惕若たりで、即ち畏れ慎む所あるを要す。頭の抑へ手が無いと往かぬ故、敬ひ惶む所の者を上に戴き、野心などは檢束して置かねばならぬ。此の謹慎の心のうちに存する。諸事取締りあらば始めて安全である。之を厲けれども咎無しと云つたの

である。實に人心の病に適應した教訓と思はれる。
　然らば如何にすれば、此の檢束を行ひ、惕若の態度を維持することが出來るか。人生の大問題である。支那人は之に對して一つの考案を提供した。曰く、『父在せば其の志を觀、父歿すれば其の行ひを觀』よと。註解者によつて異る所もあるが、最も正しき解釋は、吾人が父の志を標準とし、之を軌範として身を修め、事を行ふべき旨を敎へたものと見るものであらう。父存命なれば親しく之に質したり、其の心の向ふ所を察したり、總べて彼の志を承くることを忘れぬ樣にすべきである。父の世を去りたる時は、外に致し方もなきゆゑ、切めては彼の行つたことなどを推究して其の志の在る所を尋ね、其れを軌範として世渡りをすべきである。成程父は尊いに相違ないが、其れでも神ならぬ身の隨分過失もある。見當違ひもある。一々之を標準としては、決して安心が出來ぬ。罪惡の御相伴をすることもあらう。然るを父在せば其志を觀る云々と云ふに腰を据ゑねばならぬに至つたのは、窮餘止むを得ぬ結果である。眞正の宗教なき時は何時でも斯う云ふ風になる。遣り繰り算段の甚だしきものである。例へば今の獨逸國の如く四方に敵を受けて、然るべき方面に物資を仰ぐことが出來ぬ時は、止むことを得ず內國だけのもので遣り繰りを付けねばならぬ。パンも一々目方に掛けねば食ふこと能はず。其の外多くの不自由を忍ばねばならぬであらう。支那の道德がそれだ。天明かならず、神を正しく識ることを得なかつたから、止むことを得ず、人間同士の內輪のみで道德の遣り繰りを付けねばならぬ始末になつた。資本の無い商人が無理な工面をして、店を飾ると一般、屢々無理な遣り繰り道德を以て一時凌ぎをせねばならぬのである。何れの時代に於ても同じことである。日本の德育問題を見ても然うではないか。

　故に夕に惕若たりと云ふ方面を適當に修行して、其利益を正しく收めようと謂ふには、人間以上に手を伸ばし、天を畏れ神を敬するの道を學ばねばならぬ。即ち宗教が必要になる。信仰の側から之れを言へば、人の志以上の志がある。世道人事は總て人間以上の志に由りて支配せられる。歷史はその展開である。吾人は大いなる經綸の中に織り込まれたる生命を營みつゝある。其方針に從ひ、その意志に依り、之に悅服して進まば即ち善人となる。之に逆ふ時は惡人となる。同じく神の經綸には洩れぬけれども、ユダの如く自ら滅び、天下後世の警めとなりて、その惡を救世の目的に善用せらるゝのみ。世には神の志が確に徧く貫通して居る。卜筮者は甚だ幼稚な方法で此の志を認め、天意を窺ひ、その機微を穿ち、その經綸と調和せんことを圖る。古より聖賢の志皆此所に存す。御鬮判斷を依賴するものも、迷信の所爲とは云へ、その方向は間違つて居らぬ。人間以上の計畫あることを認め、その經綸のうちに自己と其の生命とを編入したしと思ふからの所爲である。

　天に從ふものは榮え、天に逆ふものは滅ぶ。事實に於て然り。其の理昭々として疑ひを容れぬ。然れども天は卜筮者の占ふが如き、靈覺なき禽獸の機嫌を取るが如き、數學的に割り出すが如き、全く機械的のものであらうか。將た途方途轍も無き氣紛れものであらうか。然ある場合に於て一々其の機嫌を窺ひ、事ごと之に屈服するは、過失を屢々する父の志を觀て標準とするよりも、更に險難で、甚だ辛いことである。

　然し天は靈覺なく、機械的なものでは無い。最も完全なる人格である。人の靈性之に發源

す。其の責任を負ふも之に對してのことである。其の審判に畏れ戰きて身の措きどころを知らぬのである。如何しても神を人格として待遇はねばならぬ。無意識の間も神の前に敬服したり、畏れたり、愧ぢたりして、宛ら師父朋友に對ふときと同じやうである。

『エホバよ汝は我を探り我を知り給へり。汝は我が坐るをも立つをも知り、又遠くより我が念を辨へ給ふ。汝は我が歩むをも我が臥すをも探り出し、我が諸の途を悉く知り給へり。そは我が舌に一言ありとも、視よ、エホバよ汝悉く知り給ふ。』(詩篇一三九の一—四)其所で神の『御前には暗も物を隱すことなく、夜も晝の如くに輝けり。神には暗も光も異ること無し。』斯く思ひ續くれば『神よ、願はくは我を探りて、我が心を知り、我を試みて我が諸の念を知り給へ。願はくは我に邪惡なる途の有りや無しやを見て、我を永遠の途に導き給へ。』と祈らざるを得ぬ。靈覺醒め來るに及びては必ず斯くの如く經驗するに至る。

『エホバ宣はく我が思は汝らの思と異り、我が道は汝らの道と異れり。天の地より高きが如く、我が道は汝らの道よりも高く、我が思は汝らの思よりも高し。』(以賽亞書五五の八—九)故に神を畏れ敬ひて、其の志を尊み之に鑒みて、總べて言行思慮から出所進退までを正しうするが當然で又必要である。此の外に安全の道は無い。

『神其の善き旨を行はんとて汝らのうちに作用き、汝らをして志を立て、事を行はしむ。』(腓立比二の十三)パウロの語の如くば、神と我らと沒交渉には非ず。常に人の良心を刺激し、其の志を昂進せしめ、或は奬め、或は斥く。神の感化鼓吹絕え間がない。志を興すのも、神の刺激に出づるものと覺ゆるのである。

故に主耶蘇、『聖旨の天に成る如く地にも成させ給へ。』と祈ることを敎へられた。結局神の志を尊みて、之に我が志を投じ、身を獻げて努力すべしと云ふ意味である。我らは己の志を先きに立てず、神の志を仰ぎ、之を觀て進退すべきである。耶蘇ゲッセマネ園中の祈りにも『我が父よ若しかなはゞ此の杯を我より離ちたまへ。然れど我が心の儘を爲さんとするにあらず聖旨に任せ給へ。』とある。此れは己が志を述べて、切に求むるところありしにも拘らず、敢て之を抑し徹さんとはせず、神の志に據り、之に訂正を加へ、如何にもあれ、甘んじて從はんと欲する精神である。信賴、謙遜、從順、剛勇の氣象溢れて居る。世の中に神の志を負ひて立つほど勇ましく強きものはない。浩然の氣漲れるを覺ゆるのである。

基督者の祈りには此の志を立つると云ふことが最も緊要な點である。讃美、感謝、懺悔、謝罪、皆志を興すまでに徹底して居らねば役に立たぬ。要するに肅しみて神の志を觀、何事も之に從はんと欲するが祈りの本旨である。我が志すところ神の意志に非ざるを覺らば、惜し氣もなく斷じて之を棄つ。神の喜ばるゝところとあらば水火と雖、甘んじて之に身を投ずべきである。祈りは基督者が神に依りて志を磨き、其の同志となりて、進退するの機關である。君子終日乾々、夕べに惕若たり、厲けれども咎无し、の訓戒は基督者の祈りに於て、最も善く實現せられ得るのである。

祈り會は神の前に志を述べ、之に訂正を加へ、之に允許を與へられ、互に誓ひを立て、結束して、事に當ると云ふ氣風盛んなるところでなければならぬ。たゞ感情一片に終るやうでは其の趣意が立たぬ。泣いても、呻きても、志の伴ふもの無くば祈りは不具である。無責任極まる。不敬も亦甚だしと云はねばならぬ。祈り會の振はざるは感情の昂まらざるよりも、

寧ろ其の志の緊張せざるが、其の原因である、病此所に在るを知るが今日の急務であると思ふ。

祈り會のみでない。教會のこと總べて此所に注意せねばならぬ。研究を事とし、解つたかと問ひ解つたと答ふるにて能事盡くるやうに心得、疑團氷解、理義瞭然たるが萬事の結局とありては困ることである。其所に志の問題が起らねばならぬ。教會は基督に於ける同志の集團、或る敵を征伐し、或る命令を實行し、或る目的を遂ぐることを心掛くべきである。會員は互に志を奬勵して共に主の事に當らねばならぬ。洗禮志願者に對ひて要求するにも、たゞ或る事柄を解釋し、基督教の思想を會得し、其の趣味既に基督教化せられたりや否やのみでなく、志果して神の國に存し、義を見て之に遷り、不善之を改むるの志と其の勇氣とを證明し得るや否やの問題を主とすべきである。之を怠るが爲でもあらう、教會はたゞ薄志弱行なる者の寄り合ひに過ぎず、消極的にも積極的にも、世道人心に貢獻するところが少く、基督教の趣味と感情とを有しつゝ身は滅亡に陷る可き輩の多く出入する所となるかも測られぬ。

信仰は基督に於ける志である。教會は此の志を同じうするものどもの集團である、此の眞理を記憶して、基督者と其の教會の本領を發揮するが、目下の最大急務である。

（一九一五年四月八日）

急がば迂回れ

羅馬書一の二五に『彼らは神の眞を易て僞りとなし、造物主よりも受造物を崇め奉りて之に事ふ。神は永遠に頌むべきものなり。アーメン。』とある。此れは神が限りなく頌美むべきものなるを念ひ、其の盛んなる榮光の前に畏れ惶む意を表したものである。實に深き敬虔の念を持つた人の語である。斯る神の實在せるにも拘らず、世間多くは、神の眞を其のまゝ受け入れないのである。神の眞とは神其のまゝの御姿である。神を其のあるまゝに受け入れず、似もつかぬ怪げなる考を以て誤解をする。神ならぬ者を神として拜するに滿足す。天地萬物の創造者なる眞の神を忘れ、人は固より、甚だしきは、其れよりも卑き者をまで拜するに至る。たゞ偶像を拜するのみではない、慾に耽りて神を忘るゝものもある。尊むべき神を捨てて鄙きものを恐れる。或は身を殺して魂を殺すこと能はざる人を懼れ、魂をも身をも滅ぼし得る神を懼れぬ。

此のことをエゼキエル二二の二六には斯う書いてある。『その祭司等はわが法を犯し、わが聖き物を汚し、聖きと聖からざるとの區別をなさず、潔きと穢れたるとの差別を敎へず、その目を掩ひてわが安息日を顧みず。我はかれらの中に汚さる。』豫言者はエルサレムの有樣の輕薄なるを嘆いたのである。彼らは神らしきものと然らざるものとの間に區別を立てず、皆一緒にして了ふ。勿體ないと云ふ心はない。容を改め、肅然として、嚴なる心持にならない。豫言者は此の墮落を極めたエルサレムの狀態を慨いたのである。

創世記のエサウとヤコブとの話を看よ。彼らは同じ腹の兄弟である。一寸見るとエサウは愛すべき人、ヤコブは嫌な男と思はれる。然し其成行きを見れば大變に違ふ。其は何處から起つたか。エサウは神を畏るゝ態度なく、形以上の事に心を注めず、物事を呑氣に輕く考へる。敬虔の念がない。ヤコブは一癖ある人物であるけれど、敬虔の念に富み、深き所に目が着く。神の惠に對しては濟まぬ、恐れ多いと云ふ感じが直に起る性質の人である。斯くて運命に非常な相違を來した。此れが聖書の解釋である。間違ひの無い解釋である。性格の醜美は此の點に注意して考へねばならぬ。

此れを聖書の他の記事に當て嵌めて考へると了解し易い。ペテロは耶蘇の指圖で、人間業に出來ぬやうな大漁をした。其のとき彼は他の漁師などと異ふところに目を着けた。大漁ばかりに氣を呑まれず、耶蘇の人格に目が着いて、其所から自己の罪を識るやうになつた。路加傳一二に富める愚者の話がある。此の男は豐年で大いなる收穫があつたので、其を收れるために今までの倉を毀ちて建て直し、左團扇で樂に暮さうと思ひ、又靈魂に向つては「靈魂よ多年を過すほどの許多の貨物を有ちたれば安心して食ひ飲み樂めよ」と言つた。其の輕薄、卑俗、淺陋で、唯だ地上にこびりつき、高尙なところに目の着かぬと云ふ點などは誰が目にも卑しさが映る。世の中には此愚者の如くになり易い人と、ペテロの如くになる人とがある。我らは何れの部に屬するか。此の邊大いに考ふべき所である。

災を怖るゝと神々しき德あるものを畏るゝとは非常に異る。滿足して恐悦がると之につ

いて責任を感ずるとは大いに異る。例へば蒔繪の道具を見て感心しても自ら蒔繪師にならうとは感じない。然し偉人を見る時は我も斯くならねばならぬと云ふ責任を感ずる。自分を省みて愧かしく殘念にも思ふ。世の中の嬉しいことや愉快なことに遭遇したときは、ペテロの如く恐れをなし、責任を問はれた樣な思ひをする。斯く恐縮して、心も容も改まり、餘程眞面目になることを敬虔の念と云ふ。此の心のあると無きとは大變な相違である。其處からエサウの如き運命も來れば、ヤコブの如き立派な終りを遂ぐる樣にもなる。悲しむときや愉快なる場合に、我等の心は何れに屬するかを此處に再び問ひたいのである。

先日北京に遊んだ時孔子を祀つた所謂文廟と云ふものを觀に往つた。門を入ると左右には上野や芝の徳川氏廟の石燈籠を見る樣に、石碑が林立して居る。其の表面に進士及第者の名前が刻してある。其の最も古きは元朝時代に屬す。又李鴻章の名も一つの石碑に讀まれた。古柏鬱然として、杜子美の詩などに見えて居る柏森々の氣色に何となく氣も締る心地せざるを得ぬ。堂内に入つて見ると、正面に「至聖先師孔子神位」と題した赤色の位牌が設けられてある　顔回、曾子、孟子其の他の位牌などもある。孔子の位牌の上には、故總統袁世凱が儒教を以て德育の基本となす旨を天下に諭告した檄文が立派に扁額になつて懸つて居る。支那のことを書いた書物などには此の孔子廟に參詣し『聖靈彷彿として咫尺の間に在す、敬虔の情油然として起る。』などと書いてあるが、堂内に入つた四五の支那人の一人忽ち孔子の位牌の眞下に仰向にふんぞりかへり、穢しき胸を開け、膏汗を拭いて風を入れた。同行者は別段異なものを見たとも感ぜぬ樣子、極めて平氣である。實に興が醒めた。然し此が支那人の氣風を表したものでもあらうか。孔子は常識の豫言者で、現世主義生活の教師であるから、弟子たる支那人が斯くの如き無禮を働くも或は汝に出でて汝に返ると言つた樣な譯かも知れぬ。兎に角支那人には敬虔の念が極めて少い。人格を重んずる心が乏しい。自他の人格を重んじないから自然と生命をも粗末にするのである。斯く支那人氣質の恐ろしく墮落した有樣を見聞し、此のまゝでは終に國も亡びるだらうと考へた。斯ることは何處から起つたか。其れは支那の人が神の事をあまり考へざるに依るものではあるまいか。彼等は凡てのことを現在の世界だけで止めて了ふ。其の注意も努力も目前の世界に限局されて居る。其よりも深きところ、高き所には目が着かない。人間同士は高が知れて居る。見たり難く弟たり難しである。彼何人ぞ、我何人ぞと云ふ樣な語は善き意味で用ゐられて居るが、然し惡き意味にも取れる。或る事件の起つた場合にも、控訴や上告に至るべき事柄と、内濟で結了するものとは非常に違つて居る、人間の世は示談内濟の世の中であるか。或は控訴上告にまで進むべき次第であるか。内輪同士の關係であるか。外國の代表者をも相手にせねばならぬ性質であるか。支那の人生觀は神に遠慮がない。神の御聽きに達すると云ふやうな方面を考へぬ。只人間同士の關係とのみ思つて居る。天と云ふ字も用ゐられぬでは無いが、大體の勢ひから言へば右云つた樣な氣風である。

臺灣の北港と云ふ所だと聞いて居るが、媽姐と云ふ神がある。年々幾十萬と云ふ參詣人が出る。然し其の信心の工合を見ると敬虔の態度ではなく、金貨に利息を安くして貰ふ爲丁寧に禮を施すと同樣で人格を重んずる氣分は少しもない。支那人の信心は、斯んなものである。德を敬すと云ふ言はあるが、其の德とは罰が當ると云ふ如きもので、道德的又は精神的の意味は淺

い。恰も病犬を恐るゝ如き意味で、狼が神であるやうな事に當る。斯く如く萬事が卑俗く、唯物的で、現世主義で、内濟的で、偉い人に對しても、彼奴が何だと云ふ様なことに終る。斯る社會に敬虔の念は盛んにならぬ。勿論孔子には敬虔の念屢動いた樣子である。けれど其の弟子になると全く然うでなくなつて來たものらしい。

　斯くの如く人間同士と云ふ考だから怪談、神話、例へば瓢箪から駒が飛出した様な話や、文福茶釜の如き事は有るけれども、眞の超自然的のことは少い。なるほど仙人の樣なものはある。列傳中の人物などを見ると其の灑脱な垢脱けのした有様には感ずるが、結局人間に限局された話に過ぎぬ。生梅と梅干との差に外ならぬ。普通の人は生梅で、仙人は梅干である。仙人は皆梅干爺である。天使、復活後の耶蘇、第三の天に上つたと云ふパウロとは勿論大いに異る。彼らはたゞ現在の生命を延長させたに過ぎぬ。支那は大國であつても人の心は小さい。歴史は長くとも其の規模は短い。結局路加傳一二にある如くになつた。又斯くなり易いのである。斯る世の英雄と基督教の英雄とは甚だ異る。プルゥタァクや史記列傳にある英雄と基督教の英雄とを比較すれば面白い相違を見出すであらう。基督教は新しき生命、氣風、文明を造る。之を考へるとエサウとヤコブの相違が甚だ面白い。現在吾國の状態や人情について省みると氣味の惡いほどである。是で往くのかと氣遣はるゝ點が多い。

　吾人は大漁のときにもペテロの如き心持を抱き、戰に捷てばまづ天祐を思ふ様な氣風を養成したい。又失敗の時もユダの如く自ら縊れずに、耶蘇と共に十字架にかけられた盜賊の如く、我らは當然なれど此の人は然らずと云ふ樣になりたい。斯る敬虔なる心持や萬事を眞面目に考へる風が、教會の中に充つる樣にしたい。我が國は神國と云はれ、峠（たむけ）と云ふ趣味深い文字もある位で古來敬虔な氣風がある。然し今日の世の中は如何であるか。從來の氣風を舊のまゝには保ち難い。それは丁度小兒の衣を大人に着せんとするやうなもので、無理な話である。神社を拜ませようとしても、唯物論を唱へ、無宗教や無靈無神主義で、信仰を輕蔑する世の中には役に立たぬ。日本古來の美しき氣風を保ち、之を意義あるものとし、より善きものとして、いつまでも敬虔の念を保たせるものは基督教である、基督者の責任である。此のことは秋風の吹き初めて人の氣の引き締る此頃、胸のうちに深く藏むべきことである。

　現在の生活のみに凝り固りて、天を忘るれば、現在の世界が却つて疎になる。迂遠な様でも矢張り神を中心として往かねばならぬ。急がば迂回れと云ふが此のことであらう。或人の話に先日臺灣海の大暴風雨で、五六十時間日の目見ずに漂ひ、位置を測定することも出來ず、爲に船を安全に進行せしむることが不可能で、船員も乘客も大弱りに弱つたと云ふ。たゞ船の中ばかりに目を着けては、船員が幾何活動しても役に立たぬ。世の中は萬事斯くの如くである。現世主義は到底失敗に終らねばならぬ。

（一九一六年九月）

祈の標本

天に在ます我儕の父よ、願くは聖名を尊崇めさせ給へ、聖國を臨らせ給へ。聖旨の天に成るごとく地にも成らせ給へ。我儕の日用の糧を今日も與へたまへ。我儕に負債ある者は我儕がゆるす如く、我儕の負債をも免し給へ。我儕を試探に遇せず惡より拯ひ出し給へ。國と權と榮とは窮りなく爾の者なればなり。あーメン。路加傳一一の二）

祈は齋み宜りの約りたる詞なり。人の口頭より發する言にしてこれ程貴く高尚なるは無からん。祈は之を行ふ人の最も大いなる光榮なり。父なる神既に在さば之に祈をなすが自然にして、人の歩むべき道なるべし。

之を學ばんと欲する人は前に掲げたる祈禱文の内容を研究するに如かず。此れは耶蘇其の弟子に教へられし所にして主の祈と稱す。即ち祈の標本なり。

天に在ます

神は地上の卑俗平凡なるものと異りて之を仰げば彌々高く、實に勝れて貴き聖姿にぞある。之を見上げまつりて肅然心をも容をも改むるに至る。即ち天に在ますと云ふ所以なり。

吾らの父

神の至聖至愛にして、吾らの父、天下萬民すべて同胞兄弟たる吾らのもろ倶に事へ奉るべき父なることを思ひ、如何にも慕はしく、賴もしく感じて、讃歎歸依、措く所を知らず、奉仕の志いとゞ切なる態度を整ふるを意味す、神に對ひて斯く聽え上ぐるが既に齋み愼き精神の溢れ居る良き祈なりと謂ふ可し。

聖名をめ崇させたまへ

神の聖徳此くの如く宏大無邊なるがゆゑに、(1)心を盡して極力之を愛し、之に信賴し、之に齋き事へんものをと志し、(2)周圍の人はもとより天下普く然爲さんことを希ひ、(3)神の聖徳涯りなく、人の之を認識すること甚だ淺く、罪のために其の感覺も太く鈍り、實行も不徹底なれば、聖名を崇めんための努力は片時も之を弛むること能はず、刻々新たにして日々進步せずんばあらず。微力之に耐へず、上よりの佑を獲、努めて怠らず、大いに徹底する所あらんことを期す、約めて言へば吾も人もより正しく、より深く神を禮拜するを得るに至らしめたまへと祈るなり。

聖國を臨らせ給へ

基督の道は要するに神は父、人類は其の子たりてふ意義を表彰し、一家團欒の狀態を成すに至るを意味す。また之を國に擬ふることを得べし。神は君主なり。吾人は其の臣民なり。君臣一體、天意人道を實現し、一人の心より延いては社會全般に至るまで、忠厚神に從ひ、愨謹みて其の聖旨を奉じ、愛の聯絡秩序美しく調ひ、奉仕の關係四肢五體の相俟つが如くになりて、神の王道根本的に行はるゝが、即ち基督の道、人生の正しき歸趣、世界終極の大目的なり。芥種の成長する如く、パン種の膨脹るゝが如く發達し、基督の親政萬民に遍く、其の身にも心にも貫くに至るを以て神國の本旨とす。聖國を臨らせたまへと祈るは、現在の事實として、また世界の趨勢として、基督の聖國萬々歲を歡呼し其の永遠無窮なるを讃美祝謝し、再臨の時節を俟つ宛も暑の雨に於ける如く、延いて福音の一日も早く世界に普及せんことを熱

望し、眼前の世しば〳〵修羅の巷なるかの如く見ゆるにも拘らず、此の宿昔の抱負、庶幾くは皇天上帝、父なる神の佑助に依りて、實現するに至らんことを祈るなり。

聖旨の天に成る如く、地にも成らせ給へ

上に記せる如くに祈りて、神を瞻仰げ其の聖德に志を傾倒し、世界に於けるその經綸を欣戴し、其の實現を待ち望み、先づ神の國と其の義とを覓むるの念轉た切なり。此に於て聖旨の成らんことを祈るは、聊かにても世界大なる此の鴻圖に與りて、奉仕の誠を竭すの光榮を辱うせんと欲し、あはれ微力をも之に獻げんものをとの意思、夙夜息むときなく、神よ吾人の薄志弱行なるを憫み扶けて、之がため何ごとをか爲さしめたまへ、如何なる勞苦をも決して回避せざるべし、たゞ命ぜらるゝを待つのみと禱え上ぐるなり。

吾らの日用の糧を今日も與へ給へ

世界は斯の如き意味のものなり。而して人生は神の國と其義とに奉仕するを得べき機會なり。たゞ重きを負はしめ、難局に當らしめて、人を扶けざるは、天の父の心に非ず。之がために必要なるものは必ず之を供給したまふ。小より大に及び、卑より高に進むる順序に依りて、先づ奉仕勤務の期間、吾人が身を保ち、天壽を全うするに必要なる糧は、缺なく之を供給したまふなり。生計につきてはすべて神の攝理と保護とに委任し、心を安んじて可なり。決して思ひ累ふべからず。

吾らの

他人の上をも思ひ遣り、ともに神の扶助を受け、相携へて、神の國の共同作業に從事せんと心懸く。決して自己中心主義に依るまじきことなり。

日用の糧

貪りて、愈貪りて飽くことを知らず、驕奢に耽ることなく、質素節儉、單純生活を營みて、聖國に奉仕し、神の子にして其の臣民たる人格を遂ぐることをだに得なば、名聞や、地位の如きは其の强ひて爭ふ所に非ず。謙遜に、且つ靜かに活動するが、凡そ基督者たるものの志たらずんばあるべからず。

今日も與へたまへ

今日もと言ふ間に、各自の過ぎ來し方を顧みて、神の惠深き保護を記憶し、感謝の念湧くが如く起り、將來をも實に賴もしと思ふ意自ら表れ居るを認むべし。

斯の如く、日用の糧につきて祈るときは、衣食住を求むることの意義も道理も明白になりて、牛馬の如くならず、靈的の人類らしく飲食起臥することを得べし。斯くて單なる動物の食物も、靈界の化學的作用にて人間のものとなりなん。人類に相應しき品質の食物は、斯く祈らざる人の到底味ひ得ざる所なるべし。

吾らに罪を犯すものを我らの赦すごとく、
我らの罪を赦したまへ

以上說き來りし如く、第一、神を瞻仰げ、退きて自身を省れば、吾人の罪惡その醜狀を暴露し來り、神よ我罪人を憫みたまへと哀訴せざるを得ず。第二、聖名を無視し、之を褻瀆し、聖德を蔑如し、己が心の邪曲なるにより見れども見えず、聽けども聽えず、神有れども無きが如き有樣にて年月を重ねたる罪、甚だしく、世を擧りて皆其淵に沈淪せるを認て恐懼身を措くに所なきを覺えずんばあらず。第三、神國の經營は人間最大の目的にあらずや。之に與りてこそ人は生き甲斐もあるなれ。然るをたゞ自ら營み自ら利することにのみ汲々とし、全然地上の生活に絆され、娛樂名利權勢に繫がれ、徒らに飮食の問題にのみ狂奔するのほか餘念なく、神と聖國とを忘れ果てたる恥しさよ。神の聖旨を蔑視し、閑却し、之に違背し、之

に逆行し、之を蹂躙せる罪惡の怖しさよ。今更聖旨を成らせたまへとは祈り難き心地なきを得ず。況んや天に成る如く地にもなどと、極めて高尙なる理想を標榜せんことは、吾人の企て及ぶべからざる所なり。到底人間並の所爲をさへ期待するほどの勇氣も有らざるべし。加ふるに日用の糧を常に賜はり、補給少しも足らざるところなく、保護の道至れり盡せりと謂ふべし。神國の經營に從事するの刺衝、激勵、機會、便宜、能力を裕かに與へられたるにも拘らず、天物を浪費し、尸位素餐、宛然果を結ばざる葡萄樹や無花果樹の空しく土地を塞ぐ如くなりしを慚ぢ、實に不忠にして無益なる僕なりしとの自覺を抹殺すること能はざるなり。此に至りては縱令盜みはせずとも、人は殺さずとも、或はまた世に善人君子と稱贊せらるゝほどなりとも、何人か罪を犯さざらんや。如何なる人も神の前に我は罪人なりと自白せざるを得べからず。

或は云ふ、神は愛なるがゆゑに如何なる罪をも之を咎め給ふまじ、之あればとて人を棄て、之を罰するが如きことなからん、常に人の罪を赦したまふ、今更之を請ひ求むべき必要有るべからずと。然れども此は神の愛を誤解したる考方なり。善人を悅び、其の義に滿足するは、神の愛なり。然らば如何で其の反對なる惡に對して快からず思し召さざるを得んや。不義に無頓着なるものは、義にも無頓着なるべし。善と義とを悅ぶものは、必ず惡と不義とに其の心を痛め、之を厭ひまた之を憤るに至らざるを得ず。義を行ふものに對して、『善且つ忠なる僕なるかな、爾の主の歡樂に入れよ』と言はゞ、不義なるものに對して、『汝惡を行ふものよ、我を離れ去れ』と告ぐべく期待せらるゝが當然なるべし。神は愛なり。然れども其の愛は淸し。惡を不問のまゝに措くこと能はざるなり。故に神は愛なればこそ、罪あるものは、其の赦しを獲ざれば、片時も心を安んずるを得ざるべし。然ればこそ古より己が罪を深く認むるときは、たとひ人の知らざることなりとも、身を措く所を知らず、我救はれんために何を爲すべきやと叫び求めて、其の赦しを祈らずんば有らざるなり。

我らが他人の罪を赦す如く

然れど如何で罪の赦さるゝを知らん。罪を天に獲れば祈るところ無し。因果覿面、罪惡の應報は之を如何ともすべからず。遮莫れ世の親子夫婦朋友の間に罪を赦すの事實あり。人情の美、慈愛の誠、其のうちに形る。只小說の興味屢此所に存するのみならず、實社會も罪の赦しの行はるゝによりて、其の價値甚だ昂騰るを認むべし。人間既に然り。獨り神に此事無からんや。慈愛深き親に有り得る所、神に於てはより完全に其實現せらるゝを期待すべきなり。『汝ら惡きものながら親にして此事あり、況んや神に於てをや、』と言はれたる耶蘇の論理は確實なるべし。故に我らに罪を犯すものを我らの赦す如くとあるなり。

然らば人と人との間には罪如何にして赦さるるや。基督曰く、『若し兄弟汝に罪を犯さば、之を諫めよ。彼若し悔いなば赦せ。』と。此れ罪を赦すの道なり。誠實痛切に悔いて之を謝ぶれば、罪も赦さるべし。神の人を赦さるゝ、亦之と同じき條件に據るの外あるべからず。然れども赦罪に必要なる悔改は徹底的のものならずんば有るべからず。眞に新たなる生命の出發點にして、將來の保證とも見做され得べき性質のものなるを要す。人間相互の關係にては、悔改の保證は到底全きを望み難し。神ならぬこと故、心意の底まで洞察すること能はず。將來の成行を豫知して萬一の誤りなからんと欲するも得べからず。故によき程にして赦すが

通例なり。三日坊主に欺かるゝこともあらん。故に赦すとても、屢其の表面のみにて心の底まで達するに至らず、形式や辭令に過ぎざるもの頗る多し。眞の赦罪は容易に之を授くべからず。また輙く之を受くること能はず。眞個の赦罪は神爲なり、神にあらで誰か能く罪を赦さんや。赦罪は神の特權なり。人間の赦罪は其の甚だ微なる模倣にて、辛うじて之を模倣せる程度に屬す。神は品性の機微を透視せらる。千年猶一日のごとし。三日坊主は三日坊主の有りのまゝに評定せらるべし。我何處に往きて神の聖靈を離れんや。我何處に往きて神の御前を逃れんや。天に登るとも神彼處に在す。幽界に床を設くるとも、視よ神は彼處に在す。曙の翼を藉りて海の極に住むとも、神の御手我を導く。暗きも物を隱蔽すに足らず。夜も晝の如く輝く。神は誠を心のうちにまで期待み、吾が隱れたる所に智慧を知らしめ給ふ。斯ては如何に悔い嘆くとも其の甲斐なからんを恐る。萬行の血涙に咽べる痛悔も、其の心術、其の動機、其の志、其の執着力、其の耐久力等に於て破綻と汚點とを以て充たされたりと覺しく、以て罪を赦さるべくもあらず。吾等の悔改は神を尊み、罪の責任を負擔し、其の結果たる苦痛を味ふの態度を整へず。新たなる生命の起點、將來の保證として其の價値見るに足るものなし。如何に悔改めなば、罪を赦さるるを得べきや。

主の祈は此問に對して答へを與へざるなり、主基督の十字架を仰ぎ、其の苦痛の意義を覺り、其の態度と志とに感激し、是れ正しく己が受くべくして然も味ひ能はざる苦痛なるを識り、其の志は已に有るべくして未だ有ることを得ざるものなるを認め、現在の我を否定し、之に愛想を絕し、之を拒絕して、基督に現れたる眞正の我にひたすら歸依し、之に充滿せる活力に一身を投じ、もはや我に非ず、我に於て活動したまふ基督に賴むのみと歡呼して、主耶蘇を信ずるものは、罪の赦しの經驗甚だ鮮かにして、新生命の起點確に定まり、一點一畫も遂行げ盡さでは息まじとの將來の保證は毫も之を危み懼るべき理由なきに至るべし。神の御赦しは斯くてのみ之を獲、斯くてのみ各自の身に之を實驗することを得るなり。然れども基督の贖罪は主の祈の問題に非ず。題目を更めて他日之を說明せんと欲す。

斯の如く痛悔しておのが罪惡を告白し『手に[illegible]の有たてたゞ十字架に寄り縋りて、神のみゆるしを受くるものは、自然他人に向ひて寬容の態度を抱くに至るべし。決して人間相互の關係を於て獨り苛酷なること能はざるなり。吾人は十字架の下に在りて、眞正の愛を學習し體得することを得ん。

我らを試みに遇はせず、惡より救ひ出したまへ

新たに沐するものは必ず冠を彈き、新たに浴するものは必ず其の衣を振ふ。主耶蘇を信じ、其の十字架の下に立ちて、罪を覺り、親く赦しの恩寵を驗知え、博愛衆に及ぼし、進んで敵をすら赦すの心ともなり得たらん人は、意馬心猿狂ひ易く、道德上の危險世に滿ち、惡きに陷れんとする誘惑前後左右に蔓れるを看破するものから、世の中氣味惡く感じて、少しも油斷せず、常に警戒を加へて、漫りに危きに近寄らざるなり。世は實に斯くの如く危險なりといへども、また此れ天父の照覽せらるゝところなれば、如何なる魔力も其の監視の眼を掠めて、恣に吾人の身に危害を加ふること能はざるなり。世界は敵國に非ず。如何なる危險ありとも、吾人が神の領土なるを記憶すべし。天父は吾人を敵の手に委するものに非ず。必ず來り援けらるゝなり。我らを試みに遇はせたまふ

勿れと祈るは、卽ち此の意を以てするなり。世を氣味惡く感ずる一方には賢君明主の國に生活して安堵する良民の如き想ひを懷くことを得べし。之を基督者の世界觀とす。斯る間には常に戒愼して、敵を禦ぐの志を弛むることなく、隙に乘ぜられざらんと欲する用意周到なり。故に曰く我らを試みに遇はせたまふなかれと。

惡より拯ひ出したまへ

危きを避けんと欲して、我らを試みに遭はせ給ふなかれと祈るは、暴虎馮河の勇を忌み、畏れ肅みて己が拯救を全うせんと心懸くる基督者の尙ぶところなれども、すべて祈は此の方の求むるが如き形式に於てのみ聽かるゝものに非ず。我安きを求むれども神は反つて之を危きに追ひ去り給ふ場合なきにしもあらず。此の盃を避けしめたまへと耶蘇はゲッセマネに祈らしかど、天の父之を主の口にさし寄せたまひしに非ずや。戰は好もしき所爲に非ず。然れども神の聖旨に依り、屢戰ふことを餘儀なくせらるべし。基督者は惡魔の誘ひを避けんと欲すれども、屢之と接戰せざるを得難き場合に置かるゝなり。斯る折には挺身奮鬪敵を破らずんば息まじとの氣分を保つべし。努め臆病風に誘はるまじきことなり。唯自ら憑ひに過ぐべからず。彼を知り、また神を識るがゆゑに、天よりの援助を請ひ求めずんばあらず。謙虛、抑損、深沈自重、倫理的敵愾心を發揮し、神に於ける勇を鼓して、罪惡と戰を交へて一步も退かず、彼の本據に衝いて、全勝を獲んことを期すべし。

國と權力と榮光とは汝の世々保有ちたまふ所なればなり

此れ後人の插入せる一節なり。蓋し然らん。祈りてまさに終らんとするに臨み、神の威光燦然として輝き、讃嘆の聲自ら揚り、眞正の『君が代』を唱へざるを得ず。誠に相應しき結末なるべし。

アヽメン

眞實無妄、少しも欺かざるの意なり。吾人の祈は徹頭徹尾誠實ならずんば有るべからず。

（一九一九年二月）

生命の曙

今日の題は『生命の曙』である。一口に生命と云ふが其れには種類が色々ある。パウロは哥林多前書一五に於て、『凡ての肉おなじ肉に非ず、人の肉あり、獸の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、天に屬けるものの形體あり、地に屬けるものの形體あり。』と謂つて居る。吾人斯うして生きて居るが、此の生命も亦年齢によりて種類を異にして居る。嬰兒のとき、小學の頃、或は中學や大學に居る時分、學校卒業後と謂ふ風に考へると其れ〴〵相違して居ることを發見するであらう。子供の時はつまらぬ物を喜び、自己本位で、少しも深いことや大きいことには頓着をせぬ。子供は可愛らしいが精神上から見るならば低いものと謂はねばならぬ。吾人は斯る時を經て今日に至つたのだ。然し考へて見ると御同樣尙ほ幼少ではあるまいか。多少の智慧や學問はありても、大きい所から見れば、矢張り幼稚園の子供ぐらゐに過ぎぬであらう。吾人は今日いくら威張つたところで、其の生命は微弱で、程度も低く、甚だ淺薄であることは爭はれぬ。精神界の偉人に比すれば等級の甚だ低いものである。其の差は子供と成人と異るよりも甚だしいと謂はねばならぬ。此所を考へると、誰でも自ら省みて現狀に滿足するものはあるまい。嬰兒を以て成人であると强辯して之に安んずるものはまさかあるまい。此のことは既に學校を卒業して人を指導する地位にあるものでさへ感じて居る。況して學生には此の感じが強くあるであらう。自分は尙ほ進まねばならぬ、或る時機を得て更に高き所に上る必要があると云ふことを深く感じて居るであらう。

其所で第二回の誕生が必要になつて來る。決して幼稚園に滿足は出來ぬ。自ら嬰兒同樣のものであるとの自覺を明かにして、大いに志を高め、鋭意熱心求むるの精神を旺にせねばならぬ。此の二度の誕生個人に必要である如く、亦社會にも必要である。イザヤ書五の一三に『斯るが故にわが民は無智にして虜にせられ、その貴顯者はうゑ、そのもろ〳〵の民は渴きによりて疲れはてん。』とある。此所にある貴顯者とは社會の上層に生活して民の指導者であるべき筈の人々である。所が彼らも民も悉く行き詰りの狀態に陷つたことを描いたものである。今日の時代に就いても吾人は同樣の感じを懷いて居る。昨今我が國に於ける政治上の變動にも、此の自覺が何所かに蠢いて居ることを發見するのである。斯くの如く社會も亦二度の誕生を要しつゝある。歐洲の戰爭も其の文明が二度の誕生をなさんとして產の苦しみをなしつゝありしものと見ゆる。然し此の問題に對しては單に社會問題として取扱ふのみでは不可ぬ。如何しても之を各自の人格問題として考へねばならぬ。多くの學生諸君は新たに大奮發を以て都に來られた。各此から志す道を辿つて大いに遣り出さうと云ふ其の出發點に於て、生活を一段高くし、嬰兒から成人に移るやうな經驗を味はれたいものである。たゞ身體が鄙から都に上つたのみでなく、其の靈魂が幽谷を出でて喬木に遷る如き感じの起るやうにしたい。其の有ると無いとは諸君の將來に大關係のある事柄である。

私は先日臺灣に行つた。往復の途次船中に於て如何か十分に日の出を見ようと思ひ、每朝

甲板に出て見たけれど、天候に種々差し障りがあつて、此れはと思ふやうに見ることが出來なかつた。海上の曙でも圓滿な日の出を見ることは中々六ケしい。靈魂の變り目もさうである。其の變化の圓滿玲瓏玉の如く眞に模型的とも謂ひつべきものは多く見當らぬ。パウロやアウグスチヌスやルウテルなどは靈魂の曙を最も鮮かに經驗した人々である。斯くの如き滅多に見られぬ實例を心ゆくばかり見物し、其の靈魂の變化した跡を辿るならば、餘程利益になるであらう。然し今日は之を略せざるを得ぬ。たゞ諸君の參考にも致したく二三の事項を申上ぐるに止めたい。

近頃或る少女の強盜をしたといふことが新聞に出て居つた。彼女は如何して斯くなつたのであらうか、豫審の模樣で見ると人の姿や宜しくない種類の女などが奢つたり、派手な風をしたりする樣子を見て、自分も眞似をしたいと云ふところから強盜になつたやうである。彼女も始めから然うでは無かつたらうが、好からぬ印象を受けた爲に強盜の魂が彼女の胸に生れたのである。人は場合に由り斯く墮落して惡しき方に進み得るものである。然し斯くの如く惡しき方に進むならば、また善き方にも進む筈である。時として魔がさすならば、神もさす筈である。此の點一面は恐ろしく感ずるが、他の一面は希望に充たされるのである。

先頃ニイチェの傳を讀んだ。彼がスヰスで哲學問題を考へ居つたときは、丁度普佛戰爭の最中であつた。一日プロシアの騎兵が勇ましく進行して往くのを見た。其の時彼は勇ましく力に充てる其有樣に心を打たれて、世の中は總て力である、力に限る、力こそ世を救ふものに相違ないとつくづく感じたと云ふ。此の時にニイチェが新しく生れたのである。今日の會衆のうちに曾て或る田舍の小學校の手傳ひをして居た青年、陛下行幸の鹵簿嚴に供奉の騎兵の如何にも勇ましく立派に見えたのを目撃し、急に軍人になりたいと云ふ氣になり、其れから志を立てて東京に上り遂に將官の地位にまで進まれた紳士が出席して居られる。此れは至極結構な話であるが、ニイチェのことはそれに似寄つた、然も甚だ危險な思想家が其の間に生れ出でたのである。彼の勢力崇拜の思想は今回の歐洲大戰亂を惹起するに就いて與つて力あるものであつた。斯くの如き恐ろしい二度の誕生を經驗するものもある。又多くの學生のうちには平將門が伊豫掾純友とともに比叡山から都を俯瞰みて野心を起したやうなことを下宿屋に於て考へて居るものもあらう。これは誠に恐ろしい生れ方であると謂はねばならぬ。

マグダラのマリアは、七つの惡鬼に憑かれて居たと記載いてある。英國の或る美術家はマリアが宜しからぬ職業に從事して居つたとき、不圖したことから耶蘇の面影を見て、世のものならぬ氣高い姿に感じ、忽ち打つて變つて高尙な生涯に入つたと云ふ意味の名高い油繪を作つた。斯う云ふ工合に變る人もある。此の敎會の或る人は或る大きな學校で今年はキイツの詩を講じて居られると聞いた。キイツは子供のとき馬屋の小僧であつた。主人の息子に導かれて書物を讀むやうになり、一日圖らずもスペンセルの『フェヤリイ・クヰン』を讀むに至り、今まで潛んで居た詩の天才が忽ち呱々の聲を上げて生れ出でた。馬屋の小僧は終に有名なる詩人となつたのである。

斯くの如く人は善かれ惡しかれ皆周圍から印象を受けて居る。之によりて變化を來すのである。故に如何云ふ印象を受くるかと云ふことが大問題である。兎に角吾人は現在の儘では居られないのである。乘るか反るか何れにかならな

ければならぬ。吾人は如何か善き生命に誕生したいものである。人皆堯舜たり得べし。此の善き生命に誕生することは決して不可能なることでない。今日此所に集會せられた學生諸君も二度の生命を善き方に發達せらるゝやうでありたい。現在の生活に齷齪せず、永遠の世界に目を着け、神を愛し、其の御旨、其の經綸、永遠無窮など云ふ方面に心を潛めて、世の中のとは異つた大きな生命と其の仕事とに生れ出でられんことを望む。

近頃米國の一新聞に左の如き興味ある記事が出て居つた。マサチュウセッツ州の知事少年の時小舟で或る川を渡つたが、途中其舟が轉覆して了つた。其處で彼は一生懸命岸へ泳ぎ着いて家に歸つたのである。彼が其の顛末を母に物語つたところによれば、如何かかうか泳ぎ了せて一命を拾つたのは、母のことを思つたからであると言つたさうである。全く母と云ふ考へが彼にそれ程の勇氣と力とを與へたのである。基督教は之よりも深い徹底した意味に於て人を浮き上らしむる宗教である。神の慈愛、意旨、經綸など云ふことが各自の心に深く徹するならば、新しい志が湧いて來る。斯くて靈魂二度の誕生を遂げて、永遠の世界に生れるやうになるのである。

一九一八年、九月二十二日、富士見町教會の學生禮拜の説教大意を筆記せるなり。

死と死者

一

死に對しては、何人も不平に堪へない。最愛のものに死に別れた場合は殊に然うである。何だか有るまじき、不自然な出來事のやうに思はれてならないのであらう。生あるものの死するは、生物界の常例で、已むを得ざる、豫て期待せられることである。然るにも拘らず何處までも之を問題にして、これ何故ぞと質さねばならないのが不思議である。これ人間が永遠を期待するからである。其の愛の關係も、實現を望む志も、現在限りのものでなく、永久的であらねばならぬと思ふからである。他の動物などは、其の定まりたる壽命にて、萬事盡きて居るが、人に於ては然う行かない。永生が其の本領であると、自ら思はねばならぬやうになつてゐる。そこで其の愛するものは何故死んだか、吾は志を抱きつつ何故にこの世界を去らねばならないのであるか、此のままうち過ぎては道理に適はないと思はざるを得ないのが、人情の自然である如く見える。

朝に紅顏の美少年たるも、夕には既に白骨となる。斯くの如く組み立てられたる體軀の建築物が、土崩瓦解して蛆に食はれ、火に燒かれて、塵となり灰となつて了ふ。何うしても二目と見るに忍びない狀態である。

樂しき自然界、愛する人間と絕緣し、生命の快樂に別れを告げ、有爲の才能を伸ばすべき機會を全く奪ひ去られたが如き心地なきを得ない。

宿昔の志半途にして夢となり、品性を築きあげ、人格を全うせんと欲する理想も水泡と消えるかと疑はる。就中少くして死にたるものの場合には、此の怨一層切なるものがあるであらう。

道德上の努力半途にして其の進路を遮られ、愛情の連鎖あへなく中斷し、千代八千代と祝ひたることも、影を追ひ風を捕ふるの類に過ぎざるを嘆く。死は實に悲慘な出來事である。

假令死は斯くの如く滅亡を意味するものであると斷言するを憚るべしとするも、死しては如何なる情態に移るのであるか、死後尚ほ愛の關係を繼續することが出來るか、死後尚ほ活動することが出來るか、陰府に於ける存在は陰鬱極まつたものでなからうか、白日青天であらうか。ヘブル民族は陰府に入りてエホバの御顏を仰ぎ見ることなかるべきを甚だしく氣遣つたやうである。死は假令生命の消滅を意味せずとするも、未見未知甚だ危疑まれる暗黑裏に身を投じ、例へば舵もなく、羅針盤もなく、帆も切れ、櫂をも失ひたる小舟を何處ともなく暴風怒濤の中に乘り出す如き心地する場合である。

加ふるに死は過ぎ來し生活を點檢することを餘儀なくせられ、良心の感覺醒め來つて、道德上の醜さを暴露され、赤々裸々寒天に吹き曝らされるが如き心地せざるを得ない時である。所謂死は吾ら總てを臆病ならしむる一種の物凄い魔力を有つて居る。

死は斯くの如く怖ろしき形相を以て人間を脅かしつつある。愛するものが之と苦闘を續け、然はさせじと悶躁きつつあるを見、殊に堪へ難きは、あな無念、死のために仕てやられ、全く彼の虜となつて了つたので、氣も消え、膽も潰る場合は、煩悶悲嘆遣瀨なく感ずること

であらう。自ら死を宣告されて、其の黒き影が刻々迫りつつあるを覺ゆる時の胸中如何であらうか。野蠻の境涯に慣れ、人格の眞意義をも解せず、僅かに猛獸に等しき生活を保つ程度のものには、死も然ほどの苦味を呈せざること或は可能的であらう。されど常識に依り、人情に訴へて之を判斷すれば、死ほど恐ろしきものはあるまい。鬼を欺く勇士も之には避易するであらう。然し死には之以上にも更に深刻なる意味がある。

二

先日或人其の愛するものを葬つたとき、神に見放された如き心地して、堪へられなかつたと語られた。信仰の經驗稍や深きものには、死につきて、斯る感想を催すこともあるであらう。死は日の照る世界、愛するものどもの顏、賴もしき聲など、すべて自然界や人間と離れるのみならず、結局は其の大本であるところの神とまで遠ざかる事實とも見られる。死其のものが既に罪惡の報いであると解釋する考へ方もある。よし然うまでなくとも、所謂『死の刺は罪なり』で、若し神と人との間を離隔する罪を身に負うて居るならば、肉體の死は少くとも神の御怒の象徵で、其の御前より遠ざかると謂ふ物凄い意義を表示するものと解せられるやうになるであらう。自然界や人間と永く別れるですら堪へ難きを、まして此はすべての本源、萬物の基礎と絕緣することであるから、全く寂寥孤獨の狀態に陷り、少しも賴むところ無きものとなるのである。日の全く蝕するとき、鳥や獸は慌て惑ひて、哀しき聲を立てると聞くが、死に際して人間の苦惱は、其れよりも限り無く甚だしきものであるべく想像することが出來る。之を要するに死は少くとも神と離隔することの象徵、罪に對する神の御怒の反映、最も恐るべき意味のものである。

死のうちに此らの嚴なる意味あるを覺らず、頑是なき兒童の之に對する如き態度を示し、生命の觀念淺薄なる未開人の之を取扱ふ如き有樣ならば、餘り思ひ悶えることもなくて瞑目することも出來るであらう。或は禪僧や豪傑の如き最期を遂ぐるものもあらう。或は必然のことと斷念めたり靈魂不滅の信念によりて些か慰められる場合も見出されるか知れない。然し此らは死を深く理會しないのが僥倖で、辛くも然う謂ふ風に行くのである。死の如何なるものであるかを會得し、全く神の生命に遠ざかると謂ふ恐ろしき意味と解するならば、死ほど恐ろしきものは世にあるまい。馬可九の一に『死を味はぬものどもあり。』と言ふ語がある。希伯來書二の九には耶蘇『神の恩惠によりて萬民のために死を味ひ給ふ。』と言つてあるのも同一の點に歸着すると思はれる。死の何ものであるかを深く味ひ知るに至らないから、靈魂不滅ほどの解釋で姑息の安心をすることが出來るのである。或は甚だ低級で盲人蛇に怖ぢざる類のものも生ずる事由である。

聖書には死ぬることを眠ると言つた例もある。ステパノが石で打ち殺されたとき彼は眠つたと記してある。然し此は死の意味を會得し、其の苦痛や恐怖の要素を明かに知りつつも、基督の救に與りて、苦痛の最も恐るべき要素であるところの罪を救はれ、既に其の刺を取り除かれて居るがため、死を見る歸るが如く、『世を去りて基督と偕に居らんこと遙かに勝るなり。』と言ひ得るのである。然らずんば十字架上の基督の如くに死を經驗し、『日光を失ひ、地の上遍く暗くなり』、遂に『吾が神、吾が神、何ぞ我を見捨てたまひしや。』と叫ばれたときのやうな心の狀態で、而も全く、絕望の淵に沈淪せねばならぬであらう。然るを、兄弟よ、既に隱れる

もののことに就きては、汝らの知らざるを好まず、希望なき他の人のごとく歎かざらんためなり。』とパウロとともに斷言することの出來るのは、第一、古の武士道が死と謂ふ事實あるを常に記憶することを以て其の教育の一つとなした如く死の道德的訓練を味ひて精神修養の功を積み、第二、生物進化の道程に於て死の此に貢獻するところ多大なることを認め、第三、人生れて死の免れ難きを覺り、是れ必然の出來事如何ともし難しと諦め、第四、吾らの死するは、智と力と愛とに滿ち溢るる神の意志に出で、死者は實に其の御手に歸するものであることを信じ、第五、人の生命と其の志とは決して現在の世界のみでなく、より善き他界を望むことを教へられ、第六、基督の十字架を仰ぎ其の意義を會得して死の刺であるところの罪の問題を遺ちなく解決することが出來、第七、基督に於ける愛の關係すべて全うせられて永遠無窮なるべきを期待することを得るので、然しも此の物凄き事實に對し、パウロのやうに生と死との孰れを擇ぶべきか、其の二つの間に挾まれて迷ひつつある如き心地し、『吾が願は世を去りて基督とともに居らんことなり。此れ遙かに勝るなり。』と言ふことが出來るのである。

罪に對する神の御怒の反映とも見らるる死は、基督十字架の上に死なれたので、其の刺最早名殘なく取り去られたものならば、何ぼ基督者の死ぬるは無意味でないか。一種の犬死になりはすまいか。

三

『今や基督耶蘇に在る者は罪に定めらるることなし』（ロマ書八の一）。死も既に其の刺を拔き去られたから、もはや罰の意味は消えて居る。神の恩寵の充ち溢るる基督の死に由りて斯く成つたことを思はせられて、たゞ感謝の題目を提供するに至るのである。死其のものは凶徴であるが、基督者に取りては、其の性質一變して休徴となり、一つの聖典を形成つて、吾が人格を向上せしめ、罪惡を根絕し、潔め別たるるの德を全うし、愈よ深く基督と結合する媒介となり、永遠の生命を充實せしむるの效力を有つて居る。吾らの靈魂は、肉體の死によりて『乳をたちし嬰兒の如く』（詩一三一の二）、より善き、より深き生活關係と、其の狀態とに進むことが出來る。毒藥變じて藥となつたやうに、信仰無きときの罰も信仰に入りて後は、微妙の意味となり、吾らを導き進むるの手段に供せられる。固より教育の道であるから、眞面目に之を應じ、謹んで之を通過し、見ごと及第せねばならぬ。死は斯くて永生の門である。

其れゆゑたとひ基督の救を獲たるものにても、通例は死の路を經ねばならぬ。例へば特赦の惠に浴したるものも、或る場合に於ては、其の健康を保ち、無事出獄し得るまでに攝養すべく、之をして舊のまま獄窓に寢食せしむるの必要ある如く、基督者も他の人々と同じやうに、然し根本的に變つた意味に於て、死の路を行かねばならないのである。死の床が耶蘇の十字架の如き精神的大活動の場所になる。主の恩寵に沐浴したものは死も既にいみじき道德で、靈魂の一大飛躍を意味する。遠ざかりたる子の吾が家に歸るが如くである。實に十字架の上に『父よわが靈魂を汝の手に託す。』と叫ばれたやうな思ひを有つて、靜かに神の懷に身を寄せるのである。第三六三の讃美歌に『耶蘇きみにありて、寢ぬるぞやすけき。』とあるが其れである。斯の如き信仰が無いならば、『いくるにみちなく、死ぬるもおそろし。』と言はねばならぬ。

基督教信仰の見地から見れば、死は此れ程の深い意味を含んで居て、其れ自身既に取りもな

ほさず深妙なる生命であるがゆゑに、之を重んぜねばならぬ。フランスのルウサウが少しも慎重な態度なく、戯言を吐きながら、死に臨んだのは、其の心に敬虔の素養なく、人生の眞意を味ひ知らなかつた結果である。通を装ひながら寧ろ其の識見の不徹底なるを暴露したのである。吾ら死に臨みては、勇士の戰場に出づるが如く、志士の大節に臨むが如く、敬虔なる人の神の聖殿に昇るが如き態度を持すべきである。孔子の所謂「出レ門如レ見二大賓一使レ民如レ承二大祭一」と言つたやうに心懸くるが肝要なことである。

死の意味と之に處するの態度が然やうであるならば、パウロが哥林多前書三の二二に喝破した如く、死もまた吾らの有となるのである。忌はしき死其のものが、基督に在るものの光榮ある且つ極めて豐富なる得分、嗣業となることが出來る。眞に不思議なる變換である。還銀術の妄想が事實となつたよりも驚くべきことである。

故に基督者は自己の死を慎みて大賓を見るが如く、大祭を承くるが如くせねばならぬと同時に、親子夫婦兄弟姉妹の間にありても、彼らをして死に處するの道を遵奉せしめ、其の責任を盡し、其の道を行はしむるやう深く志し且つ大いに努力せねばならぬ。武士の母其の子の出陣を送るが如き心ばえ無くては叶はぬ。母猫の子猫に於ける如く、ただ之を撫で舐りて、淺薄なる愛に溺れ、口や腹の快きを第一として、餘命をたわいもなく過さしめ、動物の死を取扱ふ如きのみに止まるならば、眞に人間の道を盡したものと言ふことが出來ぬ。寧ろ營業的看護婦の所爲にも劣るであらう。親しきものに死なれたとき、之を自己の單なる損失と考へて掌中の玉を失つたにも擬へ、甚だしきは山の上に消ゆる雲霧に比べて、口惜しくのみ思ふは、死を輕んじ、死者の人格を侮蔑し、其の價値を無視し、或は價高き骨董を取扱ふと同じやうな意味にも陷り、之に對して甚だ心無き無禮を働くことである。人の死は、其の自他何れに關するを問はず、もつと鄭重に之を取扱はねばならぬ。切て斯る時にこそ眞の愛の道を行ひたいものである。

四

前にも言つたやうに世には死を眞實に味つて居らぬ人が多い。然しながらヘブル書には基督死を味はれたと言つてある。死を味ひ得るは人格の發達を意味する。基督者の中にはたとひ不十分でも、此の死を味ふと言ふことが、何ほどか實現されて居る。中には鵜の眞似の烏、之を學びそこねて、妄りに死を輕んじ、殊に他人の死んだ場合などに事もなげなる擧止に出づるものもあらう。餘り平氣なので、喪にある家の人などに好ましからぬ感じを與ふる例もあるであらう。其の必要もなき場合に、死者のことを眠つたのであると言ひ、甚だしきは永眠したとまで言ふ。永眠は不祥な詞である。永く眠つて居るやうでは爲様がない。無考へに斯る詞を用ゐるのは慎むべきことである。普通の場合には死と謂ふ詞のみで足る筈であるのを、必要もないことに故ら眠つた眠つたと言ふのは面白くないことである。其れはともかく、或る基督者は斯の道の精神を誤解して、死者に對する人情を無視するやうな過失に陷るかもしれぬ。此の邊の事情からでもあらう、基督教は死者に對して冷やかであると想像し、甚だしきは基督自らが稍や淡薄に死を取扱はれたであらうと考へる人もある。此れは大いなる間違ひである。

ナインの寡婦の子の死んだとき、耶蘇之を如何に取扱はれたか。またヤイロの女や、ベタニヤのラザロの死んだときの事を見るならば、

就中後者の墓に詣づるとて、耶蘇の涙を流された事實など、決して死者に對して冷淡でなく、同情と慈愛とに滿ちて居られたことを認め得るであらう。

『一週のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリア、墓にきたりて』とヨハネ傳の一節に讀むものは、死者に對する人情の溢るるばかりなることを感ずるであらう。ステパノがエルサレムの城外に石を以て打ち殺されたとき、『敬虔なる人々ステパノを葬り、彼のために大いに胸打てり。』(行傳八の二)とあるのは、輕い語調で死者は單に眠つたのであると漫然言ひ慣れんとして居る或る基督者の誤りを規した語とも解せられる。吾らは死者に對して人情の常習なる哀惜を催さざるを得ない。然し『希望なき他の人のごとく歎かざらん』ことを心懸くるのである。此れ『哀んで傷らざる』ものであらう。

『願くは主オネシポロの家に情憫を賜はんことを。彼はしばしば我を慰め、又わが鎖を恥とせず、そのロマに居りし時には懇に尋ね來りて遂に我に逢ひたり。願くは主彼の日にいたり情憫を彼に賜はらん事を。彼がエペソにて我に仕へしことの如何ばかりなりしかは、汝の能く知るところなり。』(後テモテ一の一六―一八) オネシポロは、パウロの親しき友であつた。其の羅馬に捕はれしとき彼は其の鎖を恥とせず、友情を盡して、懇ろに之を訪れた。此れより先エペソに在りしときも、彼はパウロのために多くの親切を盡したのである。苦樂を偕にする朋友の關係實に温かかつたが、オネシポロ遂に他界の人となつたので、パウロ懷舊の情に堪へず、彼が世に遺した家族を思ひ遣り、且つ『主かの日にいたり』云々で、他の世界に於ける彼のために祝福を祈り求めたものと見える。世を去つたものに對して如何なることを爲すべきかの問題に就き、パウロの語は確かに健全なる方針を示したものであらう。

青島に獨逸人の設けた有名な屠牛所がある。其の結構設備殆ど完全で、眞に模範的と謂つてよからう。日本人の手に入つてから、既に幾頭の牛を此所で屠殺したであらうか。之を想像すると何となく氣味惡く感ぜざるを得ない。其れかあらぬか、日本人の手で其所の入口の邊りに牛の靈を祭つた塚がある。香や花が手向けてあつた。此れは滑稽の甚だしきものであるが、死者を祭る習慣は屢〻之に類した迷信に流れ、不合理な結果に陷るのである。死者の靈に祟られんことを怖れて、魔除けでもするやうな祭祀も少くあるまい。或は生けるに仕ふる如く死に仕へんと欲する人情の誠を表したものもあらう。或は魂よ享けよなどとて、施餓鬼のやうな趣意で供物をする場合もあらう。或は亡き魂を慰めんとて種々な物を供することもあらう。甚だしきは青島の屠牛所の如き笑止千萬な事例もあらう。然し此らは五十歩百歩で、等しく不合理の非難を免れまい。生死の區別を無視し、死者を宗教禮拜の對象とする如き嫌もあり、虚僞の儀式に流れ易き弊も伴はれる。少くとも兒戲に類して居る。未開人の習俗を其のまま踏襲したので、餘り感心は出來ぬ。大人の飯事遊び、噴飯を價するのみである。

然し吾らは死者に對する道義を守るべきである。之に對して忠實と信義とを盡さねばならぬ。其の齎しながら死んだ志をも成すべく心懸くべきである。

『とこしへのあけぼのとなりなば、世に
てなごりをしくも、わかれしとものかが
やくかほは笑みつつわれをむかへん』

と歌つて再會を期し、望を天の一方に懸けることも愛の道であると思はれる。『われ汝らに告ぐ、不義の富をもて、己がために友をつくれ。然らば富の失する時、その友なんぢらを永遠の

住居に迎へん。』(ルカ傳一六の九)とあるではないか。

吾ら死者には祈らない。然し死者は吾らのために神に祈りつゝあるであらう。其の效力たとひ冥々の間にせよ、たしかに此の世に在る人たちの上に顯はるべきを疑はない。從つてまた吾らも死者のために祈りを捧ぐることが出來る。然か爲るが當然であらう。祈りの黃金の鎖を以て、現界と他界と幽冥相繫るを得るならば大いなる慰藉と力とを與へるであらう。『然らば、われ第一に勸む、凡ての人のため、王たち及び凡て權を有つものの爲におのおの願ひ、祈禱、とりなし、感謝せよ。』(前テモテ二の一)之を他界まで延長するが自然で、道理で、愛であらう。

親しき死者を記念して、誠を盡さば、之に由つて精神的氣分をも養ひ、眞面目なる生活を排することも出來るであらう。家庭の敎育や親族の關係、さては他の友人の親しみにまで善き結果を持ち來すに相違ない。たゞ虛禮に陷らず、迷信に流れず、誠實を宗とし、自然に出づるを尙ひて、單純、質素、殊に出來るだけしめやかに、靜かに、之を實行したいものである。無論すべてが基督敎の信仰を中心とせねばならぬ。斷ることは宗敎的に行はるべき筈である。

(一九二三年二月)

杜鵑一聲

—ピッパの歌—

詩人ブラウニング一日英國ダルウヰッチに程近き林に、唯一人逍遥しつゝあつたが、忽ち心に感じけるは、若し世の中を、今の我と同じく、唯一人通過するものがあると假定せば如何であらう。地位も名も無き人物故其の通過した痕跡をも遺して居らぬが、無意識ながら一歩毎に感化を永く及ぼすことが無いにも限らぬ。斯かる人の存在せば如何に床しきことであらうと。斯くて其の想像が頻りに胸中に往來した結果、『ピッパ通過す』の詩が出來たのである。

ピッパは無論詩中の人物に過ぎぬ。然し詩人は、之を北伊太利のアソロと云ふ所に住んだ少女に取りなした。早くより兩親に別れて、世にも頼りなき身の上、アソロの製絲工場に絲巻きに傭はれて、一年三百六十五日少しも暇のない體であつた。今日は元日で、一年一度の休日を與へられた。せち辛き世の中に、樂園に入りたらん如き心地せしむべく、神の惠まれた吉日、何とかして最も益あるやう之を利用したいものと、寢床に居るうちから考へを凝らした。起き出でて支度もそこ／＼出懸けたが、豫て心に定めた其の日の次第は斯うである。此のアソロに於て最も幸福なりと覺しきものを四人ほど算へ上げ、朝、晝、夕暮及び夜の四回に分ちて、彼らの住ひ居る所に行き、自ら其の人々になり澄ました積りになつて、今日一日を樂しく暮さうと考へた。彼方なる山腹に華美を極めた家が見ゆる。其所の主婦オッチマは、夫ある身を以て獨逸の音樂者セバルドなるものと道ならぬ關係を結んで快樂に耽つて居る。ピッパは先づオッチマの家の邊りに行きゝ自ら彼になつた氣取を裝ふ積りであつたが、何分其の愛が高尚でないので、其れよりもつと善きものを求めざるを得なかつた。其所で次に目指したのは、美術研究のため、此國に遊學せる佛蘭西人ジュウルと、今日しも之と結婚すべきフヰネとである。晝の頃彼らは目出たく會堂から歸つて、オルカナの谷に對へる新宅に入るであらう。然し若夫婦の關係必ずしも安心の出來るものでない。生命あらん限り變るまじき兩親の愛の頼母しきにはとても及ぶまい。此の夕暮には、ピッパが宿所なる家の樓上の一室に佗住居するルヰギが、其の母と二人して睦じく物語りするであらう。戀人の關係よりも靜かに穩健で、又朋友の間よりも情愛が濃かい。母の顏も記憶せず、父親も見たことなし。願くはルヰギの身になりたや。然れども更に好きは神の愛である。會堂の塔に接近せる邸宅には、今宵ぞ信德氣高き監督の來らるゝと云へば、せめては一夜なりと、彼の神聖なる祭司になつて見たいものである。

斯く思ひ續けつゝピッパは、朝まだきにオッチマの家に來た。不義の關係は愈ゝ增長し、兩人謀し合せて、昨夜老いたる夫ルカを殺害した後である。屍は眼のあたりに横はつて居る。セバルドは良心の咎めに氣も弱くなりて、恩人を手に懸けた罪の恐ろしさに、後悔の色が見えた。然れどオッチマが或は勵まし、或は賺して、不義の快樂を貪つた昔の夢の記憶に訴ふるなど、頻りに其の氣を引き立てたので、セバルドも心を取り直して、毒を食はゞ皿までも、互に變るな變らじと言ひ交して居る途

端に、外にはピッパ無邪氣に聲も清らかに、謳うた。

　年は春、日は朝、朝は七時、山腹は
　眞珠なす露ぞ濡ふ、
　雲雀は飛び立ちぬ、蝸牛は荚が上に在り。
　神其の天に在り——世界はすべて是なり。

と聲を遺してピッパは通過し去つた。•••••

神其の天に在りの一句はセバルドの耳に雷の如く響いた。其の良心は覺醒した。今まで戀に曇れる目が明かになつて、オッチマの醜惡なる人格を看破して全く愛想を盡かして了つた。

セバルド曰く、

　彼の田家の少女一聲を以て能く我を正しきに反らしめたり。我亡びたりといへども、今は善と惡、清潔と汚穢、自然と狡計、何れか優れるを知りて、少しも惑ふ所なし。我れ己が爲せしことを知る。今は全く之を知りぬ！　我れ斯の如き苦悶を感ずることを誇りとす。——世界は宜しく之より名譽を擔ふべし。——我れ我が惡事を行ひたれば、また其の代價を拂はんとす！……神其の天に在り！

斯く叫びつゝ間もなく彼は自殺した。姦婦オッチマも其の後を追ひ、『神よ、我にはあらず——彼に憐みを垂れ給へ！』との聲を遺して死を遂げた。

　少女ピッパは、此の家のうちに斯ることのありしとも知らず、其の歌の力惡人を覺醒し得たりとも覺るに由なく、歩を轉じ、オルカノの谷を越えて、ジュウルが家に着いた。新郎ジュウルは、親婦フキネと相連れ立ちて宿所に歸り來り、今しも内に入つた所である。新夫婦の間に忽ち一つの悲劇が演ぜられた。伊太利に遊學せる外國の美術家數人、深くジュウルを恨むることありて、毒惡極まれる奸計を運らし、フキネの書翰なるもの數通を擬造して、彼は文學に秀でて、世にも稀なる才女であると思ひ込ましめ、遂に之を結婚せしむるまでに計り了せたのである。新婚の式場から歸つて來ると間もなく、二人のなかの話に、奸計の次第が全然暴露した。フキネは無教育な賤しい身柄の美人、趣味などは少しも養はれて居らぬ。不釣合なる夫婦であつた。其所でジュウルは烈火の如く怒を發し、彼ら十五名の兇漢ども其まゝには置かれぬ、死を決して恨みを報いんものと思ひ立ち、若干の金をフキネに與へて絶緣を宣告した。折しも窓の外にはピッパ、昔或る宮中に仕へた小姓が、女王を戀ひ慕ひ、何にもあれ赤誠を表はして、其の愛を促すに足るべき理由を作り出さんと苦心したれども、何一つ不足なき御身分であるから、手段の施すべきやうも知らず、力なく〳〵憂ひ悶えたと云ふ話を骨子とした歌を、何心なく謳つた。

　之を聞いたジュウルは、忽ち胸の開けた如く新たなる思想を浮べ、其の暗黒なる生命を照せる一條の光明を認むることを得た。即ち思へらく、女王危險にも陷らず、貧しくもなり難きため、小姓は之に力を假し、身を致して赤き心を證明する機會を得ざるに苦んだのであるが、小姓の如き身分のものにのみ斯る苦心を一任すべき道理はあるまい、何故に其の苦心を顚倒することを容すべからざるか、フキネに對しては此身宛も女王のごときものである、フキネは我が愛に由・既に新たなる生命を萌したらしく見ゆる、我無くば彼の女は實に行き立たないのである。我にして之を愛し、懇に之を勞りなば、彼の女は覺醒し、感覺し、活動するに至るであらう、若かじ一つの新たなる靈魂を我がものとなさんには。と彼は八重の汐路を越え遠き島根に渡り行きて、可憐なるフキネの靈魂

を喚び起すことに決心した。ピッパの歌は夫婦の赤縄を繋ぎ止めたのである。

伊太利は當時日本の維新時代に於ける如く、有志家なるもの横行して、陰謀を企つることが續出した。彼らは愛國の義士を以て自らを標榜し、祕密結社を組織して、過激なる企てに腐心し、屢ば暗殺を行ひ、此所でならば大逆罪とでも名を付くべきことを謀ることもあつた。血氣盛んなるルヰギは此の連中の一人であつた。アソロに臨める小山の斜面に建てられた家の樓上、穴の如き一室に、彼は今しも母と密々話の最中である。澳國の皇帝を暗殺すべき陰謀に加擔し、之を實行すべく出立の時機が今宵に迫つて居ることを打ち明けた所、母は大いに驚き、其の無謀なるを戒め所謂愛國者の共に謀るに足らざるを說き、果ては其の子の愛し居る女子のことを言ひ出でて、暴擧を思ひ止まらしめんと、百方言を盡して諫めて居る。ルヰギは之がために志氣挫けて少くとも出立を明る朝まで延期せんかとも思案しつゝあつたとき、ピッパは古の賢き王を賞揚せる歌を謳つて、其家の前を過ぎた。其意中を知る由もなき彼は、斯る目的を以て謳つたのではないが、之を聞いたルヰギは、愛國の熱情再び奮ひ起りて、其所を飛び出し何處ともなく去つた。豫て探偵が尾行して居つたから、其の夜合圖を定めて之を逮捕すべき手筈になつて居つたけれど、出立が遙かであつたので萬事が手違ひになり、折角網を張つて獲物を取り逃がしたのである。斯くてルヰギは運好く其の自由を全うし、また多分其一命をも全うすることも得た。皆ピッパの思ひ懸けぬ救ひを受けたのである。

夜に入りてピッパは、監督の宿れる邸宅の邊りに遣つて來た。中には神聖なる監督臺下が、人拂ひして、執事と商議最中である。神聖なる監督臺下實はピッパの叔父である。其の父親の死んだにも何か深い關係があるらしく、死後には遺産を悉く横領して、不義の富を恣にして居る。執事と云へる男も甚だしき惡漢、容易ならぬ犯罪者である。執事は監督のためにピッパを亡きものにして、後ろ安くするの謀計を提議した。彼は一人の兇惡なる英國人を語らひ、甘言を以てピッパを不義淫奔の道に墮落せしめ、羅馬に誘ひ出して之を花柳界に沈め、惡しき病を得せしめて、三年がうちには其の生命を斷つべしと云ふ世にも恐ろしき惡計を巧んだ。殊勝なる監督臺下は、同意しさうな面色で、之に耳を傾けて居た。すると忽ち夜の寂寞を破つてピッパの謳ふ聲が聞えた。

頭上には樹々の梢相交る、足下に花は咲き草も萌え出づ。

上にあるものも、下にあるものも、皆な我が幼きときより親みたるものぞかし。

鳥の聲、獸の聲も我らの解する語にあらずや。其の異るは我らのに彌や増りて優に面白きことならずや。

此の趣味は、我が生命とともに始まりぬ。

…………

突如として神我を執へたり。

ケレイ此の歌を解して曰く、傲慢で世俗的な、また奢侈に耽つた監督も、其の宮中に坐して居る、其の靈魂は暗黑に包まれ、虛僞に溺れた。彼は將に恐るべき惡事を行ふべく今誘惑されつつある、端なくも年若き朗かなる一聲か、樹木、花卉、禽獸、日、月、星、總て自然界の天眞爛熳にして單純、藹然として和氣掬すべく、忠厚にして僞りなき風情を謳ふを聞いて、宛も雲間を破る月影に、眼前に横はる物凄き深淵を認めて、あなやとばかり、驚いてあと退りするが如く、罪惡の懸崖から飛び退かんとするに至つた、と。ピッパの歌は良心を覺醒して道德

上の反衝を催起したのである。

神より之を見なば總ての奉仕其の位置に於て同一なり。
最も善きものも最も悪しきものも我らは神の操縱する所のみ。
後のものもなく前のものもなし。

ピッパの物語を味はゞ、普通に解せらるゝ人生の價値は顚倒せざるを得ぬ。王公必ずしも貴からず、匹夫匹婦もまた賤むべきにあらず。前者の力思ひの外小さく、後者の影響を及ぼす所驚くべきほどに大いなる場合もある。「神其の童兒の聲を聞き給ふ。」(創世記二十一の十七) 少年イシマエルの泣く聲天に聞えたのである。『汝ら此の小子の一人をも愼みて輕視るなかれ。我れ汝らに告げん、彼らの天の使者は天に在りて天に在す我父の面を常に觀ればなり。』(馬太傳十八の十) 基督教は形の偉大なると位置の高貴なることには重きを置かぬ。人格其のものを重んず。サマリヤの婦人の落魄せる生涯にも無限の趣味は滿ちて居る。レプタを納めたる寡婦の行爲は其の日の大事件よりも深く耶蘇の注意を惹いた。基督教は平穩なる事物の價値を天にまで引き上げ、其のうちに含蓄せられたる意義と趣味とを目撃するを以て、生の象徴として崇め、少女

ピッパが一日の休息は意外にも大いなる詩題となつた。平凡生涯の趣味及び其の價値頗る妙なりと云ふべきである。

分けて面白きは無意識なる感化力である。花を促するにも機械づくめなる溫室の如きがあり、或は、春風の如きもある。露骨なる教育もあれば、溫として玉の如き庭訓もある。律法と恩寵、文字と人格的薫陶、兩者の距離甚だしく、其の效果相隔たり、其の徹底する淺深甚だ異つて居る。美しき人格が無意識の間期せずして其の周圍に及ぼす感化こそ最も尙ぶべきである。マホメット教の經典に、天女は麝香を發汗すと云ふ話がある。人格は美妙なる力を以て、其の接觸するものを薫陶す。此のピッパを見よ。無邪氣なる少女は、其れとはなしに、多くの人を感化することを得た。其の無邪氣なる歌は、鬼の如き心をも動かし石の如き靈魂をも溶解し去つた。若し信仰篤く美しき靈魂を修養することが出來たならば、總て其のことが力ある傳道大いなる事業である。ピッパの如く天眞爛漫、無邪氣にして清き靈魂を有つて居るならば、世界に非常なる教訓を與へ廣く天下に化育を及ぼすことが出來る。人格の同化力ほど不思議なものはない。稚けなきものの一顰一笑に、

罪を悔いて、過ちを改めた事實も多くある。果して然らば、吾人は善きにつけ、悪しきにつけ、精神界の發電所で、知らざる間に世の益となり、また其の害ともなつて居る。斯く考へて來ると、如何なる賤業を營みても、また世に全く顯れざる地位に在りても、生命の力ほど恐ろしきものはない。

惡事千里を走り、好事門を出でずと云ふが、是は淺薄なる考へと謂はねばならぬ。神の主宰せらるゝ天地に、其んな道理は無い。神は善きことを助けたまふ。『人の子己れの榮光をもて諸の聖使を率ゐ來るときは其の榮光の位に坐し、萬國の民を其の前に集め、羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを別つが如く彼らを別ち、綿羊を其の右に、山羊を其の左に置くべし。斯くて王其の右に居るものに言はん、わが父に惠まるるものよ、來りて創世より以來汝らのために備へられたる國を嗣げ。蓋は汝ら我が飢ゑしとき我に食はせ、渇きしとき我に飲ませ、旅せしとき我を宿らせ、裸なりしとき我に衣せ、病みしとき我を見舞ひ、獄に在りしとき我に來ればなり。是に於て義者かれに答へて言はん、主よ、何時汝の飢ゑたるを見て食はせ、また渇きたるに飮ましゝや。何時主の旅したるを見て宿

らせ、又裸なるに衣せしや。何時主の病み、また獄に在るを見て汝に至りしや。王答へて彼らに言はん、我まことに汝らに告げん、既に汝らわが此の兄弟の最微者の一人に行へるは卽ち我に行ひしなり。」（馬太傳二十五の三十一―四十）天は隱れたる至誠を看過せぬ。天來の種萌え出で、秀で、また實るを期待して忘れぬ。衣裳も窶れた貧しき少女ピッパの品性は、少しも無效に了らなかつた。却つて驚くべき勢力を多くの人に及ぼしたではないか。エネルギイの保存は物質界の法則のみでない。精神界に於ても一層嚴重に行はれて居る。因果觀面、道德は響きの音に應ずるが如く、秋毫も違はない。此の意味に於ては佛說も決して誤つては居らぬ。深山の躑躅人に知られざる君子の人格、其の名を竹帛に止めずと雖も、其の品性は、神の緻密なる保護の下に指導せられて、意外なる點に其の果を結ぶ。神は善を空うせぬ。

ピッパは朗かなる一聲を遺して忽ち過ぎ去つた。實に瞬間時の出來事である。然れども既に永遠を其内に胚胎した。窮り無き生命が發揮された。詩人キイツは嘗て己が生を死も波の上に文字を劃する如くであると譬へた。然れども無常迅速、電光石火の如しと雖も、吾人の一擧一動は永遠の關係を有す。假令束の間の事業なりとも、其影響する所は期間の長短には因らぬ。一代の事業瞬間にして成ることもある。一場の演說に終を告げしステパノの生涯も不成功とは言へぬ。朝に道を聞きて夕に死すとも可なり。人は必ず事業の長きに亙るを要せぬ。『一聲は唯だ有明の月ばかり』。然れど既に人の心を其の根柢から動かして居る。己れの意識し得る效果に眩惑せず、神を信じて大膽に美しき品性を發揮して世に立つことを心懸く可きである。

然れど世界はピッパの過ぐるのみならんや。耶蘇も亦屢吾人を通過せらる（路加十八の三十七）。

（明治四十四年五月「宗教及び文藝」）

黑谷の上人

（眞宗聖教大全『黑谷上人の傳』、須藤光暉の『法然上人』、望月信亨の『法然上人正傳』、木下尚江の『法然と親鸞』）

其の弟子は彼が宗旨を建てて、遺跡を後世に傳へんことを願へり。然れども其の人自身は之を拒みて曰く、「跡を一廟に占むれば、遺法遍からず。源空が遺跡は諸州に遍滿すべし。故如何にとなれば、念佛の興行は、愚老一期の勸化なり。然れば念佛を修せん所は貴賤を論ぜず、海人漁人が苫屋にても、皆な是れ源空が遺跡なるべし」と。此の豫言空しからず、法然上人の勢力日本全國に遍くなりぬ。其の教義を相續せる親鸞の創設せし眞宗諸派の勢力を合すれば、近頃明照大師と諡せられたる黑谷の上人源空の如く宗義傳播の上に於て成功せしもの少なからん。

彼は大藏經に心を潛め、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經などを根據とし、信仰の熱烈と崇めたる支那の善導、道綽、曇鸞、懷感、小康等の諸說を栞とし、惠心僧都の『往生要集』を指南としたるなり。其の唱道せる念佛往生の信仰は、素と彼れ自身の創見に非ず。然れども其の熱烈なる信仰の實驗無かりせば、淨土宗は興起することを得ざりしならん。日本佛教の二大宗派は實に法然の人格より生れ出でたりと謂はざる可らず。

父は美作國久米の押領使漆時國、母は秦氏。長承二年四月七日作州久米南條郡稻岡の庄に生る。卽ち基督紀元一千百三十三年の誕生なれば、此の佛門の聖徒は聖ベルナルドに後るゝ四十二年、之と時代を同うすること二十一年、アシジの聖フランシスに前だつ四十九年、之と時代を同うすること三十二年なり。彼は又西行法師及び鴨長明らとともに源平盛衰の悲劇を觀、人生の激變に觸れたり。是れら五人を比較し來らば興味深き研究の題目を見出すことを得べし。

漆時國が獨り子、幼名を勢至丸と云ひしが、其の九歳なりし頃、父は、稻岡の庄の預り所源内武者定明なるものに夜襲せられ、重傷を負ひて世を去りぬ。勢至丸健げにも小弓に矢を番へて、當の敵の眉間に射あてたれど、之を斃すに至らざりしを遺憾とせり。然れども父は臨終の際之に遺言して曰く、「汝更に會稽の恥を思ひ、敵人を恨むこと勿れ。是れ偏に前世の宿業なり。若し遺恨を結ばゝ其の讎世々に盡き難かるべし。如かじ早く俗を遁れ、家を出で、我が菩提を弔ひ、自らの解脱を求めんには。」と。是れ決して君父の讎と倶に天を戴かざるを主義とせる武士道の言に非ず。佛教が其の慈悲忍辱の教を以て日本國民の間に、少くとも或る方面に於ては、如何なる感化を及ぼしつゝありしやを見るに足るべし。

勢至丸は父の遺言に基き、十五歳の時遂に叡山に上りて佛門に入り、久安三年十一月八日剃髪して法師の數に入りぬ。彼が初めの師を肥後阿闍梨皇圓と言ひき。其の弟子法然は煩悶苦修、後に至り念佛往生の安心を得たれども、師の阿闍梨は年久しく平和の道を見出すこと能はず、自ら思惟すらく、我れ容易く生死を出づるの望無し。若し屢々生を更めなば、隔生

即忘して佛法を忘るゝことあるべし。偶々人身を享けながら、依然として生死の間に輪廻せんことは遺憾の限りなり。何とかして長命の報を得、佛再び世に出づるの機會に遇ひて、究竟の救ひを得んと欲す。思ふに命長きものは蛇に過ぎたるは無し。願はくは大蛇の身を享けんものと念じ、遠江國笠原庄櫻の池を領主より申し受け、放ち文を取り、臨終の時水を乞ひ、掌に之を得て氣息絶えたり、時の人彼は果して蛇となり、池の底に棲めりと信じたりとかや。法然は後に至り、彼の地に臨みて先師の志を憫み、懇ろに之が爲に後世を弔ひたりと云ふ。話頭稍岐路に入るの嫌あるをも憚らず、之を記すものは、以て人生の問題切迫して、其の解決を促すこと甚だ急なるを見るべく、迷信とは云へ、池中の蛇とも化して解決の機會を待たんとす。豈斷腸の懷に堪ふべけんや。蓋し法然の時代は人の心極めて眞面目に、人生の疑題を誠實に研究して、傍目もふらず、假し全世界を獲とも、靈魂を失はゞ何の益あらんやとの念猛烈なるものありしなり。歐羅巴中世紀を支配せる精神も思ひ合はさるべし。公家も武門も相率ゐて他界の利害に支配せられたるを想見すべきなり。

少年僧法然斯る時代に生ひ立ち、剰さへ其の出身と境遇とに刺戟せらるゝ所深く、左なきだに天成の宗教的傾向禁す可らず、渇けるものの水に於けると一般、求道の志燃ゆるが如くにてありき。師友は彼が山門に光榮を輝かさんことを期待し、且つ之れを慫慂して止まざりしかど、靜かに隱れて修養するの志金剛の如く、十八歳西塔黑谷に移りて專ら密教を學び、戒を修することを努めたり。彼が名を改めて法然房源空と呼ばれしは此の頃のことにてありき。生死の道を明かにせんと欲すれば此の機を逸すべからずと覺悟し、之が爲に一切經を讀破するの志を起し、黑谷の報恩藏に出入して佛家の諸經典に眼を曝すこと五年、二十二歳にして之を讀み了りぬ。然れども彼は未だ解脫の道を得ること能はず、煩悶從前と異らず。さて止むべきにあらざれば、北嵯峨の清涼寺に參籠して釋迦牟尼佛に祈誓を懸くること一七日に及ぶ。結願の曉、今日までの如く天台止觀の修行のみにては安心立命覺束なし、諸宗派の大家碩學につきて廣く學ぶの外あるべからずと決心せり。彼は先づ奈良の興福寺に赴きて法相教の玄底を敲き、居ること二年なりしも其の甲斐なかりき。復た黑谷に歸り、轉じて應保元年九月と云ふに、年二十九にして醍醐の寛雅權律師につきて論集を學び、三十二歳の時、仁和寺の慶雅に華嚴經を受けたり。斯の如く西に往き東に去り、苦心慘憺、胸には燃ゆる如き叫喚の猶ほ止まず、彼は出離の要津を得ざりしなり。是れより前き、彼は惠心僧都の往生要集を讀み始め、之を繙くこと數回なりしが、一日また圖らずも有り合ふ彼の書を繙き其の序文を讀むに、曰く、夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也、道俗貴賤誰不レ歸者、但顯密教法其文非レ一、事理業因其行惟多、利智精進人未レ爲レ難、如レ予頑魯之者豈敢矣、是故依二念佛一門一聊集二經論要文一、披レ之修レ之、易レ覺易レ行。彼は此の數十文字の中に一道の光明を認め、渡頭に舟を得たる心地して歡喜漸く胸に滿つるを覺えたり。宛もルウテルが羅馬書、若くは加拉太書を讀みて福音の光に接觸し、玆に新時代の門戶を啓きたるにも似たり。法然は尙ほ他の一點に於てルウテルを聯想せしむ。彼は此のアウグステヌス派の獨逸修道僧が妻を娶りて、修道的禁欲主義に止めの刃を刺したる如く、月輪左大臣兼實の求めに由り、其の弟子の中より親鸞を拔擢して公の女婿たらしめたり。彼は自ら娶らずと雖

も、實際に於ては要帶主義の首唱者にして、其の實行は彼の勇猛なる決斷に基けりと謂はざる可らず。

『往生要集』に依りて其の方針は確定したり。彼は惠心僧都に依り、尙ほ遠く溯れば善導和尙らの指示せる線路を辿り、曾て五たび研究せる一切經を繰り返して讀むこと三回、此の浩澣なる經典を閲覽すること前後八回、念佛往生の根據、經典の上に確實なりと斷定することを得たり。爰に一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故の文に至りて、末世の凡夫彌陀の名號を稱せば彼の佛の願に乘じて確かに往生を得べかりけりと云ふ道理を思ひ定め給ひぬ。（黑谷上人傳六卷第一段）彼をして當時の實驗を自ら語らしめよ。「法相三論天台華嚴眞言佛心の諸大乘の宗、遍く學し悉く明むるに、入門は異りと雖も、皆佛性の一理を悟顯することを詮す。所詮は一致なり。法は深妙なりと雖も、我が機すべて及び難し。經典を披覽するに、其の智悟り難し。行法を修習するに其の心[illegible]に昧し。徒らに定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕々に出離の緣の闕けたることを悲嘆す。茫々たる[illegible]には[illegible]に[illegible]を失ふが如し。朦々たる憂には闇に道を迷ふが如し。嘆きながら如來の教法を習ひ、悲みながら人師の解釋を學ぶ。黑谷の報恩藏に入りて一切經を披見すること既に五遍に及びぬ。然れども尙ほ未だ出離の要法を悟り得ず。愁情愈よ深く、學意益す盛んなり。爰に善因忽に熟し、宿緣頓に顯れ、京師善導和尙勸化の八帖の聖書を拜見するに、末代造惡の凡夫、出離生死の旨を判定し給へり。粗に管見して未だ玄意を曉めずと雖も、隨喜身に餘り、身毛爲に立つ。とりわき見ること三遍。前後合せて八遍なり。時に觀經散善義の一心專念彌陀の名號の文に至りて善導の元意を得たり。歡喜の餘りに聞く人無かりしかども、予が如き下機の見法は、阿彌陀佛の法藏因位の昔、豫て定め置かるゝをやと、高聲に唱へて、感悅髓に徹し、落涙、千行なりき。」法然も親鸞も阿彌陀佛は衆生に代りて願と行とを圓滿して我らが往生を已に認め給ふなり。十方衆生の願行圓滿して往生成就せしとき、機法一體の南无阿彌陀佛の正覺を成じ給ひしなり。斯るが故に佛の正覺の外には凡夫の往生はなきなり。（安心決定鈔）と信じたり。「今の他力の願行は行は佛體に勵み功を无善の我らに讓る。」とは彼らの贖罪論にあらずや。彌陀は自ら勵みて願行を遂げ、正覺を圓滿に成就せり。其の功を无善の人類に讓りて之を救ふと說きしなり。讓るとはカルヴヰン主義者のイムピウテエションとさも似たり。基督者念佛往生の佛學に於て他山の石を見出し、其の信仰を發揮するの材料を與へらるゝことあらんも、之を怪むに足らざるべし。

法然及び其徒の斯の如く信賴せる阿彌陀佛は願行を成就し其の積みたる功德を人類に讓與すべしと云ふなど、其の他力て彼らの信仰態度は人格的なる佛を認めたるものなり。彼らは確に法本尊の宗教家に非ずして人格本尊的なるを疑ふ可らず。彼らは汎神者流のエサウの如くなれど、其の聲は屢々人格的有神者のヤコブに似たりけり。法然の如く人生の大問題に煩悶し、靈的希求燃ゆるが如き心胸は煩瑣なる佛教哲學の汎神的態度に滿足すること能はず。茫々たる天地、之に同情を寄せて救ひの憐みを垂るるものもやあらんとの本能的想像を禁ずること能はず。是れ[illegible]一種の價値判定にして、信仰に進むの津梁なり。惡く言へば願は思想の父なりと言はずや。彼らは鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如き必要に其の眼を開かれ、何時しか愛滿るが如き慈顔を認め得たる心地ぞせる。彼らは「多く

の區別をなし、多くの方法をもて豫言者により列祖らに告げ給ひし『神を不十分ながらも垣間見しものならん。神は果して彼らを孤兒として棄てざりしなり。佛教者は非佛教的眞理の一端を看破し得たるが爲に、强ひて往生の素懷を遂げしものならん。彼らは其の『識らざる神』に依りて祝福を得たり。

盡く書を信ずれば書無きに若かず。然れども佛教者は存外に文字の崇拜者なり。彼らは其の依據を經典に求むるに熱するの餘り、批評も無く、識別をも加へず、漫然經典を渉獵り、何れも如是我聞と默頭きて、紛々相矛盾せる文章に拘泥して八宗十宗幾多の宗論を鬪はせつつあり。法然が一切經を渉獵すること八回なりしと云ふも、其の動機は斯る病毒に感染し居たるより來りしならん。若し基督者の、有神論に於けるが如く、基督學に於けるが如き態度を取りたらんには、假ひ三部經に如何なる文字のありたればとて、直ちに彌陀の願行を認むることは容易なる業に非ざるを感ずべかりしなり。彼は餘りに深く文字を信じたり。文字卽涅槃とも云ふべき結果に、危くも其の安心の綱を打ち懸けしなり。

彼らの阿彌陀信賴は、總て佛教の禮拜が、印度古代の神話及び雜駁なる多神的迷信と纏綿化合して識別し難きと同じく、一面は笑ふべき神話に其の根據を置けり。法然の所謂『阿彌陀佛の法藏因位の昔』(上文參看)とは何を云ふか。是は阿彌陀が法藏比丘とて未だ佛果を得ざる因位てふ菩薩の地位に在りて頻りに向上の道を辿り居たる其の昔を指して然か云へるなり。(村上專精著『佛陀論』四三四頁以下參照)。・乃往過去久遠無量不可思議無央數劫の往古に當り、定光如來と號する佛陀の出世あり。其れよりして五十三佛前後相繼續して出現し、其の最後に出現せる佛を稱して世自在王佛と號す。時に(是れ何れの時代ぞや)國王あり、深く此の世自在佛の懿德に歸依し、終に國家を棄てて其の佛弟子となり、其の名を法藏比丘と稱したり。法藏比丘出家して世自在王佛の弟子となるや、自ら意志の所在を世自在王佛に告白すらく、我が出家は固より尋常一樣の佛陀たらんことを欲求するにあらず、須らく、我れ一切諸佛に超絕せる最極無上の佛陀となりて一切衆生を救濟し、之に一大安樂を與へんとするにありと。斯くて法藏比丘は遂に此の大願を成就せり。而して今や大覺圓滿の阿彌陀如來となれり。云々。印度人の囈語に非ずや。然れども法然等は阿彌陀如來法藏因位の其の昔とて、此の神話的比丘の修行に感泣し、佛身に血と肉とを添へて之を擬人化するの便に供し、我が佛を尊くも作爲せる觀あるなり。彼ら或は言はん、阿彌陀の信賴は法藏比丘の神話と離れ難き關係を有するものに非ず。獨立して眞如の佛身に阿彌陀の慈容を認め得べしと。然れども原始佛教釋迦自身の信仰は言ふも更なり、總て印度宗教の根本義たる汎神說と、阿彌陀如來の人格的性質との關係離合は如何。彼らは基督を崇拜せざる有神哲學の困難と等しき疑惑の濃霧に包まれざるを得ざるべし。然らざるも其の本尊は餘りに恬淡無味、理想境に揮散し去りて、猿猴水中の月に於けると彷彿たる事實を遺すの外無からんとす。村上博士曰く、『神にあれ、佛にあれ、絕對にあれ、無限にあれ、大日にあれ、彌陀にあれ、すべて其の名稱の如何に係らず、又其の意味の如何に關せず、基督其の人を以て眼鏡となし、彼に依りて之を觀んとする者は卽ち基督教なり、又釋迦其の人を以て眼鏡となし、彼に依りて之を觀んとする者は卽ち佛教なり。又之に反してその所說の如何を問はず、基督その人を通じて考へざる者は總て非基督教なり、又その所談の

如何を論ぜず、釋迦その人を通じて考へざる者は總て非佛敎なりとす。然り、其の名を神と云ふも佛と稱するも、釋迦其の人を通じて觀たるものと、基督の人格を通じて瞻仰せるものと、其の間に天淵啻ならざるの間隔あること論を須たず。基督に依れば其の父なる神に接すべし。鎌倉の大佛像の如き釋迦を師とせるものは、假ひ或る意味に於て「神に醉ふ人たり」得んも、スピノウザの如きに過ぎず、懺悔錄の聖アウガスチンたらんことは得て期すべからず。多くは眞如の理體のみを認むるのみ。決して神の愛と自己とを聯結することは能はざるべし。故に念佛往生の信者は、釋迦の範に基督敎の神と幾分か相類似せる人格を附會せんと試みしものなり。彼らに對する批評は、信實に大日如來を崇拜する眞言の徒にも、日蓮の刹那にも(若し日蓮宗を人本尊主義と解すれば)、其の他の佛徒にも適用すべし。彼らは佛敎自然の系統を離れて岐路に入り、釋迦の說法よりも寧ろ靈的希求の必要に驅られ、價値判定の指南車に乘じ、宗敎の發展の論理に導かれて、個人化せる本尊を崇拜するに至りしたり。恰も鶩の育ひたる鷲の雛、河水に遊泳して彼の女を驚かせしに非ざるを得んや。此の事實は斯る順序に從ひて發展せる佛敎徒の中に、基督敎の眞理を以てするに非ざれば、當然に滿足せしめ難き希求饑ゑ渴く如きものあるを證するに足らん。

左るにても念佛往生の徒が、神話に依りて其のせめてもの飢渴を癒すべき手段を得んと試みたるは、耶蘇譬喩中の蕩兒落魄して豚の豆莢に飽くこともがなと煩悶せると稍々相似て、テニソンの所謂『言呼吸をなすに至り、人類の手を以て、完全なる事業の愛らしき形狀に於て、信條中の信條を實際に行へり。』てふ歷史の必要を明白に立證するに足るべし。ナザレの耶蘇の性行事業、其の十字架上の死及び第三日の復活を根據とせる信仰は健全なる宗敎生活の心臟なりと謂はざる可らず。姉崎博士の『現身物と法身佛』及び其の『根本佛敎』等を讀まば、歷史的なる耶蘇基督及び其の事實に根據を有せざる佛敎者が、此の點に於て如何に苦惱を感じつゝありや、如何に不自然なる迂路を覺束なげに辿りつゝあるやを示すならん。阿彌陀若くは觀音に於ける信仰は、或る程度にまで人を滿足せしむべき資格の幾分を具へたりと雖も、到底思想の上に於て鞏固なる地位を維持し難きものあらんとす。基督者は法然らの信仰に發揮せられたる宗敎生活の要素を研究するに由り、基督學、三位一體論、贖罪の敎義などの方面に於て辯證の好材料を發見することを得ん。此の方面には尙ほ開拓して收穫の多かるべき見込ありと謂はざる可らず。

上に說き來れる難題を輕減し得たりとするも、佛敎の信仰は小乘の厭世臭味を脫すること到底望む可らざるのみならず、大乘佛敎、殊に其の宗敎的趣味最も富贍なる信仰に至りても、其の底深く蟠屈せる汎神主義、多神主義、其の他幾多の惡因緣纏綿して、執念くも其の累を爲すべく、佛敎たるの範圍にありては、到底快刀亂麻を斷つが如く、人格的の神を認め、其の窮り無き慈愛に健全なる慰安を全うするの望みなし。彼らは罪に就きて正しき態度に復することと能はざるべし。從つて其の救拯論にも缺陷多きを免るゝことを得ざるべし。人面獸身像が其の獸的半身を土中に埋められて、一面人の如くなるにも拘らず、盡未來際浮ぶ瀨のあらざる如くならんのみ。佛敎の中に存在せる眞理は基督敎に於て、より十分に、より健全に全うせらるべし。また佛敎の所說基督敎の眞理を發闡するの效力無きに非ざるべし。然れども之れを改革し、純粹なる有神的精神を、其の荒廢せる跡に樹設して、其の生命を長く持續せんこと

は結局不可能なりと論斷せざるを得ず。植物をして動物の如く自由に活動せしめんと試みなば、必然之れを枯死せしむるの外なきと同一なる運命は佛教の免れ難き數に非ずや。

法然は斯の如く兎にも角にも念佛往生の基礎を其の胸中に固めたり。學修二十三年、專心一意阿彌陀を自ら念じ、また人をして然かせしむるに熱中し、安元元年、歳四十三、四明嶽を出で、西山の廣谷に下りて念佛を興行し、吉水に庵を結びて淨土門の宗教を宣傳したり。其の教化朝野を風靡し、至尊も其念佛に隨喜し、月卿雲客之に歸依するもの頗る多く、坂東武士も法然の説法には羊の如く柔和なる信者となりぬ。甘糟太郎忠綱が戰場に臨むとき、法然の教に依りて信心を起し、合掌禮拜十念を授かり、弓箭身を亡す時なりとも、十念成就せば往生疑ひ無しと諭され、喜び勇みて坂本の戰場に赴きしが、戰死を遂ぐるに當りて念佛三百遍ばかり申して呼吸絶えたるが如き、一の谷の戰に「目指す敵の安德天皇、之に從ふ平家の奴原。」と怒號して武名を轟かしたる熊谷次郎直實が、法然の「唯だ念佛だに申せば、其功德に依りて往生するなり。」と教ふるを聽くや、鬼の目に大粒の涙潸然たりしを怪みて其の故を問へば、答へて「手足をも切り、生命をも捨ててぞ後生は助からんずるぞと承はらんと、疾くに學悟を定め、太刀をも研いで候ひし者を、唯だ念佛をだに申せば往生するぞと、易々と仰せを承はり侍れば、餘りの嬉しさに泣かれ侍る。」となりて其弟子となり、名をさへ蓮生房と改めたるが如き、平重衡が、土肥の次郎が館に幽囚の身となりて其の傳道に暗中の光を得たるが如き、平維盛が潛かに紀州粉河寺に落ち來りて、圖らずも其の念佛の慰安を與へられしが如き、法然の傳道は多くの回心實歷談を以て滿たされたり。耳四郎と云へる盜賊が法然の説教に悔悟して、遂に心も圓き僧侶と成りし如き美はしき事實もあり。就中面白きは法然が耳四郎の教阿彌陀佛に授けたる最後の教訓なるべし。彼れ將に故鄕なる相模に歸り住まんとするに臨み、法然の一言を授かり、生涯の記念に供へんと欲すと言ひ出でたり。法然は之に念佛の法を示し「早い話が泥棒ぢや、他人の寶に思を懸けて忘るる間とてはなけれども、平氣な顏して少しも人に氣付かれぬやう仕向ける。此の盜み心は全く他人に知られねば、飾らぬと申して可い。決定往生の心も是れで、其のときの念佛は佛樣の外は誰れも御存じない。」と告げたり。右の手に爲す所を左の手に知らす勿れと教へ、密室に祈禱を勸め、人に見られん爲に義を行ふ可らずと諭されし耶蘇の言も思ひ合さる。ルウテルの信仰がアンチノミヤニズムなりと誤解せられし如く、また今日の基督教徒が日本の國粹と敬神主義とを蔑視すとて非難せらるゝ如く、法然も迫害の的となりぬ。然れども彼れは其の禁止せられたる念佛と其の宣傳とを廢止せず。弟子の僧ら危みて諫止せんと試みしかば、法然嚴然言ひ放つて曰く、「假し殺さるゝまでも念佛申さにやならぬぞ。」と。斯くて遠く流罪に處せられしが、途次船は播州室の津に着し、夕日波に沈む頃、若き美人舟を漕ぎ寄せて突然法然の教へを乞へり。彼は浮川竹の遊女にてありき。法然其の懺悔を聞きて曰く、「如何にも輕からぬ罪障ぢやで……速かに今の稼業をお捨てなされ。ぢやが別の道も見當らず、又身命に代へる程の道心未だ起らないなりや、今の儘でよし、專心念佛を唱へなされ。……往生疑ひなし。」斯くて美人は感涙を催して舟を漕ぎ戻しぬ。西行の「江口の遊女」に於けると一般、佛教道德觀の本質、其の罪惡論の缺損等、自ら斯る事實に顯れて意味深きを覺ゆ。弟子のうちに其の口授を受けて文章を整頓するものあり

しが、其の才に慢ずるの氣色あるを見て、斷然彼れが筆記の勞に當ることを禁めたり。法然は時として峻嚴なるを得たりしなり。彼は天晴れ人中の將帥にてありき。建久九年病に臥すや、遺言せる一個條に曰く、「予の歿後には各宜しく別に住ふべし。一所に共居すべからず。共同は和合に似ると雖も、又た恐くは鬪爭を起さん、靜處に閑居して獨り念佛を行ずるに如かざるなり。」彼は亦常識の豫言者なりと謂はざる可らず。此の訓戒を守りしならば、幾多の爭鬪は未發に防止せられたるならん。眞宗の開祖親鸞曰く、『たとひ法然上人に賺され參らせて地獄に墮ちたりとも後悔すべからず候。』之を崇拜するの篤き、以て見るべきなり。黑谷の上人は人を引き着くる人格的勢力の盛んなりし英雄カアライルの意味に於てゝにてありき。

(明治四十一年三月「宗教及び文藝」)

夜間の訪問何の意ぞ

由來ニコデモの如き氣風の人は耶蘇のもとに引き着けられたがる。因循姑息總じて保守に傾く流義では基督の道に近付くことが六つかしい。ニコデモは何事をか爲出したい、此のまゝ老朽ちてはならぬと、同志とも相議り、自ら之が代表者となり、大いなる問題を提げて耶蘇を訪問しだ。然し其れは夜間であつた。何故夜間を擇んだのであるか。僅かに餘力を之に與へたのであるか。人生の大事を解決し、宗教の問題を釋かんと欲するものは、之がために最善の機會を提供し、能ふ限りを盡すの覺悟を有つて居らねばならぬ。或ひは世を憚り、人目を避けて、夜陰密々に來たのであるか。其れでは到底大いなる獲物を手に入れることは出來ぬ。精神界のことは勇氣を要す。徒らに平和をのみ思ふことを容さぬ。時としては劍をも出すと辭し難いのである。また或ひは耶蘇事多くして夜間のほか面會を求め難き理由であつたか。若しくは深き談話は靜かたる夜間に如かずと考へたからであらうか。何れとも斷言することは出來ぬ。何にせよ彼が夜間來たのは一考を値ひすることである。

天縱の師

彼は先づ言ひ出でた。『ラビ我ら汝の神より來る師なりと知る。神もし偕に在さずば、汝が行ふ此らの徴は誰も能はぬなり』。其の耶蘇の人格を觀察せるところ、未だ肯綮に中つて居らぬ。然し着眼既に非凡で、敬服すべきものがある。玆に神より來る師とあるは、門地や學閥に關係なく直ちに神の教へを受けた天才の人、天縱の師と謂つた樣な意味である。ラビと言へば學校出身の人で誰のに學び、如何なる學歷を有するかなど甚だ面倒なる時代にありて、然かも北方の僻地ナザレより出で、木工の子として世に知られたる耶蘇をラビと稱し其の天來の人なるを認め、學閥に拘はらざる權威に推服し、進んで之に道を問はんとするに至つたと言ふことは實に見上げた精神である。ニコデモは既に格式に拘泥せず、通常の系統以外に人を求め、思ひ懸なき方面より人物を迎へ來りて、之に師事し、共に大事を圖らんとしたのである。彼は當時の民本主義者であつた。基督教は斯の如き氣風を尊ぶ。耶蘇が此の人と數刻の談話に感興を覺えられたるも道理である。學者も可なり、研究者も可なり、然れども天錫の師なる豫言者は更に尊ぶべきものである。

隴を得て蜀を望む

世人は基督の奇蹟を見て其の物理的に意外なる出來事であるに驚き、或は疾病を癒やされんと期待し、甚だしきは肉體の食物を獲んと欲するに過ぎなかつた。然れどもニコデモは耶蘇の所爲を見て之を、徴と解釋し、其の單に物理界の出來事にあらず、靈的の意味深かるべきを思ひ漸く根本的の問題に觸れ、國民の宿志たる神國の實現すべき時節到來せしにやと雀躍の心地もせられ、倚ほこれに就きて教へを受け、所見をも述べて見ばやとて耶蘇を訪問したのである。其の傾向は頗る健全であつた。志が正しき方向を指して居た。所謂一を聞きて二を知る。出來事の皮相から其の神髓にまで入らんことを心懸けたのである。其の造詣益々深く、漸く進んで佳境に入らんとした。道を學ぶもの皆斯くありたきことである。

（『祈の生活』の「如何で斯のことあらんや」より）

悲哀の快感
耶蘇教問題
當今の衝突論
宗教の究極的證據
和歌に宗教なし

大西操山

悲哀の快感

（心理並文學上の攷究）

人は喜ばしきをのみ悦ばず悲しきをも悦ぶと云はゞ一見事理に反したることの様なれども少し思へばこは却て常に我等の耳目に觸れ常に我等の經驗し居る事實なり何故小説家はあはれなる話を書き綴つて讀む者に袖をぬらさしめんとする乎何故婦女子は泣きに芝居の愁歎場觀に行く乎悲しきことわざと語り出でて只だ落涙するをば一の愉快とする者さへなきにあらず是れ皆畢竟悲哀に幾分の又特別の快感の添へばなり世間若し生者必滅會者定離の歎きなくんば「あはれ」てふ感情は絶えてなからん秋の夕をあはれと思ひ散りゆく花をあはれと見るは是れ獨り悲哀の情のみにあらず其悲哀の情に着き纏ふ一種の快感の存するあり世は不如意なることのあるにこそ又一の面白味の加はるなれ「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」と兼好法師の云へりしは此れが故なり

右の如く悲哀の快感は世間實際の事柄若しくは天地自然の現象に對して廣く吾れ人の經驗する所なるが殊に此快感の作用の著しきは文學上の悲哀とす戯曲の悲壯なるものは云ふも更なり諸種の詩歌小説に至るまで好んで悲哀の情緒を陳ぶるは是れ蓋し讀者がその悲哀の陳述を悦べばなり文學上の妙味はそれらの悲しき陳述に於て殊に濃かなる境に入るの趣あり英國の詩人シェリーは「吾れ人の最も美はしとする歌は最も悲しき思ひを陳ぶるものなり」とさへ云へり今此事實に對して必ず我等の胸裡に浮び來る問題あらん如何なれば吾れ人は悲しきことを悦ぶかと云ふ是れなりシルレルの文集中「悲壯なる事柄に愉快を感ずるの理由」と題する論あるは此問題に答へんとしたるものなれども然れども只だ其一小部分に答ふるに過ぎず何となれば其論ずる所は專ら戯曲の悲壯的なる處にありて而して又吾れ人が其悲壯なる處に愉快を感ずるの理由を求むるにも專ら道德的感覺の上にのみ着目したればなりシーレルが其書「ポエティーク」に論ずる所はシルレルに比すれば頗る細し然れども亦其所論は只だ幾多の個條に列擧したるに止まりて却て煩雜を起すの嫌なき能はず其個條の順序又分類の如きも多少亂雜に陷れるの缺點なき能はず由りて思ふに今一層個條の分類に注意し又殊に問題解説の心點とすべき所に着目し來らば一層簡明にして而も整頓せる説明を爲すことは出來ざる乎是れ予の茲に試みんと欲する所なり

そも文學者が悲哀の陳述を爲すには種々の目的あり又種々の關係あることなるが予輩は可成これに關する別殊の問題を避けて只だ何故吾れ人は悲哀なる事柄に快感を覺ゆるかと云ふ一點にのみ就いて論ぜんとす今此一點をのみ論ずるも其解説として提出し來るべき吾れ人の心的作用は決して只だ一様一轍のものにあらず即ち悲哀の事柄に對して吾れ人の快感を感ずるの理由は決して單純唯一なるものにあらず從つて其理由を可成遺す所なく揭げんには予輩の陳述は自ら數個の個條に分れざるを得ず而してその中斯問題解説の最要點となすべきものと又自ら第二等のものとの差別ありて予が次に揭ぐる初の三四個條は寧ろ後の種類に屬するものなれども而も斯問題の解説上矢張り別個獨立の理由として存し置くべきものなり予の陳

述は重に文學に關し又固より文學の上に於て斯問題の最も著明の例證を見ることなれども強ち文學にのみ限るべきにあらず其他一般吾れ人の經驗する所にも同じく應用し得る解説を試みんと欲す故に予輩の問題とする所を再言せば吾れ人が悲哀の快感を覺ゆるの理由如何と云ふにあり

一　何故悲哀なる事柄をも全く忌み嫌はずして却てそを好んで見もし聞きもし又思ひもするかと尋ぬるに其最も見易き理由の一は對照の作用なり繪畫の光彩明なる所は其傍に墨色の暗き所を置きて益ゝ明なる如く又音樂の調子に幾分の亂調を交へて却て其調和の影響を高むる如く凡そ何物にても其反對のものに照されて一層其特質を表はすは是れ我等の日々經驗する所にしてその作用の波及影響する所甚だ廣しと謂ふべきなり今予輩の問題たる悲哀の事柄を悦ぶの理由も亦幾分か右對照の作用に基ける所なくんばあらず固より此作用によれば悲哀の情それ自身に就いて快感を覺ゆるに非ず心識の他の部分と相對比して其部分の快感を高むるに外ならざれども然れども其高まりたる快感は悲哀の感情の上に反射し來りて幾分か其感情を取り圍むが如き趣なくんばあらず蓋し常に對照の作用のみならず如何なる作用によるも心識の他の部分と相關係せずして只だ悲しき感情それ自身が愉快なる感情となるべき樣なし悲しき感情それ自身は固より悲しき感情たるに相違なし故に茲には單に悲哀の快感と名くれども其快感は悲哀それ自身のみから生ずるにあらずして吾れ人の心識に於ける或關係によりて生じ來ること明なり　今對照の作用に就いて考ふるに其悲哀の快感を喚起するの趣一にして足らず先づ小說や戲曲の人物の悲哀に就いて云ばゞ半ば無心識にその人物の悲哀の有樣と自分の悲哀なき有樣とを相比較して知らず識らず我有樣の上に快感を覺ゆるの趣あり此比較的の作用は他人の悲みを見て自分の悲なき有樣を悦ぶの心識なれば餘り明にその心識を浮ぶる時は殆ど無情無慈悲の境界に近くの恐ありて正善優美なる心情を懷く者は却て不快の感覺を覺ゆるに至るべし小說戲曲等の假造の人物にあらで實の人間の悲哀を見る時に於ては殊に然りとす故に此對照の作用によりて得る快感の第一例として茲に揭げたるものはそが却て不快の感覺を惹き起さざる程に止まるには餘り明に心識に浮ばざるを要す即ち其快感は概ね半ば有心識半ば無心識の境界にあるものなり然れども何人も多少冥々の裡に其如き快感を感ぜざるにはあらざるべし又殊に或性質の人に取りては隨分著しき程度に迄其快感の到達することもあるべし

右は他人の有樣と自分の有樣とを相對比したる時の例なるが他人同士の有樣を相對比しても亦同樣の作用によりて快感を覺ゆることありこは殊に文學の上に於て見る所にして例へば戲曲又小說中の或人物が他の人物と競爭して遂に勝ちおほせたる有樣を見る時は我等そを見る者は勝ちおほせたる人物に假りに我身を合體せしめて其人物の位地に立ちて悲痛落膽に沈める他の人物を見るの心地あるべしその如き場合には矢張り對照の理に從ひ其人物の悲哀の樣を見て却て幾分の快感を覺ゆるなり此快感は前第一の例と同じく他人の悲哀の有樣に對照して得る感覺なれども其有樣と相對照するものは（此第二の例に於ては）自分の有樣にあらずして矢張り他人の有樣なれば此場合の快感は隨分明に心識に浮ぶこともあるも前第一の例の如くには無情無慈悲の境界に近くの恐なきが如し　加之此第二の例に於ては競爭勝利の念又他人と我身とを合體せしむる同情的の作用も雜り居れば單に對照的の作用とのみは見る

べきにあらず但し此對照外の作用に就いては後に別の個條を立てゝ論ずる所あるべし

右第一又第二の例に於ける快感は他人と自分との有樣を對比し若しくは他人同士の有樣を對比するによりて生ずるものなるが只だ自身一人の有樣(卽ち自身の過去と現在との有樣)を對比しても矢張り同樣の快感を生ずることあり曾て我遭遇したる千辛萬苦悲痛落魄の狀境を思ひ浮べて轉た今昔の感に堪へざることのあるは固より種々複雜なる又高等なる心的作用の相結ばりたる結果なれども其中往時の痛むべき有樣と今の打て變りたる有樣とを比較する對照的の作用もありて此作用によりて得る快感も亦其時の心識の一部分(或時には頗る著しき部分)となりて存し居ること明なり故に何よりも過去の經驗殊に其苦難を思ひ浮べてそを面白がる人少きにあらず　今陳べたる所は直接には文學に關係の點なきなれども文學上間接に此種の快感に訴へ得るの道は決して少しとせざるなり

上に陳述したる所は自分の有樣と他人の有樣とに拘らず皆悲哀の情態と其悲哀を離れたる情態とを比べて正反對のものを相對照したるの例に外ならざるが今亦悲痛不快なる事柄を同じく悲痛不快なる事柄と相對比するによりても矢張り一種の快感を生ずる事あり卽ち甲なる悲痛不快の感情を乙なる悲痛不快の感情の傍に置く時は前なる感情は後なる感情と相對比して殆ど無きが如きの有樣となることありて而して其の如く一の悲痛なる感情が他の新しき悲痛なる感情に所を讓ることに亦一種の快感を生じ來るなり然れども此快感の生じ來るは單に對照の作用と見るよりも寧ろ新奇なる感覺が有りふれたる感覺を押し退くるの作用と見るを至當とす右甲乙共に同じく悲痛不快の感覺なるに何故一が他を押し退くることに一種の快感を生じ來るかと問はゞ對照的作用の外に是非とも他の作用を求め來らざる可らず

二　何故一の悲痛不快の感覺が去つて他の悲痛不快の感覺の來ることに快感を生ずるかと問はゞ其理由は毫も見難きにあらず卽ち變換の作用によりて然るなり新しきことは只だ其新しと云ふ一點に於ても既に幾分の快感を與ふるものにして例へば同じく机に憑つて讀書するにも只だ同一の書物をのみ繙き居るよりも二三の書物を取り更ふれば永く讀書に堪ふるが如し凡そ一の仕事に倦み疲れたる時休息する事のみが精神を爽快ならしむるの道にあらず其仕事を取り更ふるも亦同樣の結果を生ずることのあるは衆人の常に實驗して知れる所ならん悲痛不快の感覺が甲乙相更代する事によりて一種の快感を生じ來るの理由も亦思ふにこの作用に外ならざるべし或種類の不快不如意の事柄にからまれて倦み果てたる時それと全く異變りたる悲痛辛酸の事柄を想念するは多少精神の慰みとなるものなり悲壯なる戲曲を見又は小說中一語一淚とも云ふべき悲慘の條を讀んで心中形容し難き淸涼の感を催すことのあるは是れ一は日常齷齪たる世間の俗務を打忘れて壯大異常なる悲哀の中に我心を埋沒せしむればなり例へばあこやの琴責若しくはオフィリアの發狂して俚謠を謳ふの段などは其悲哀の感情の痛切なるに於ては平生身に纏ふ些々たる不如意の出來事の比ひにあらず然れども其壯大なる悲哀の感情に接する時は恰も區々たる無趣味なる平常の生活より救ひ出されたるが如きの心地なくんばあらず

啻に一の悲哀の感覺が他の悲哀の感覺に所を讓るの場合のみならず其所を讓りたる感覺が敢て悲哀的のものにあらず又敢て積極的に不愉快なるものにあらずとも若しそれが有りふれたる珍らしからぬ感覺なる時は却て珍らしき悲哀の

感情を浮べたる方幾分の愉快を生ずるの氣味なきにあらず是れ全く右陳述する吾人の心的作用の生命とも云ふべき變換の理の然らしむる處なり何事も目なれたるは面白味を失ひ何物も新奇なるには多少の愉快あり故に怖いものは見たいと云ふに非ずや此新奇を求むるの心より見れば他人が非常なる苦難に遭遇して天地に號泣する有樣を傍觀するも隨分只だ其珍らしきの故を以て面白く思はるゝの心地なきにあらず殊に現實の人間ならで小說界の假造の人物に對しては其如き心地の一層起り易き趣あり然れども此心地は若し或程度を越ゆる時は道德上不快の感覺を起すの緣由とならざるを得ず

若異常なる悲哀に接し若しくは悲壯なる演劇を觀たる時の心は只だ變換の作用によりて一の有樣から他の有樣に移りたりと云ふのみにあらで驚駭奮慨痛哭嘆歎等種々心的活動の程度を高むるの作用ありて此作用の邊よりしても亦一種の快感を憶ゆるなり故に此點に就いて見る時は又自ら別の個條に移りて論ぜざるを得ず

三　異常の出來事に遭遇して驚駭し悲壯の活劇を見て奮慨し又は千軍萬馬の間を橫行せし名將勇士の風采を追想して感激措く能はざる時の心には諸種の心的作用の奮起激昂衝動し居りて而してそれと同時に心中何となく一種の快感の蟠るが如きを覺ゆるは是れ一は興奮の作用によりて然るなり獨り一室の中に閉ぢ籠り居て心氣何となく鬱陶としたる折しも屋外に出でて活潑なる運動を試むるか若しくは知友を訪うて議論を上下する時は前の鬱陶としたる心地は何處にか逃れ去つて毫も其痕跡を止めざるに至ることは固より生理的作用の影響もあることならんが兎に角精神の興奮には直接に一種の快感の伴ひ來ることを知るに足らん故に落魄悲愁の慘狀を見る時には心的作用の刺戟さるゝこと頗る激烈にして其作用の興奮は平常の程度を超越し而して其興奮より生じ來る多少の快感は右の慘狀を見る時の心識の一部分（時としては頗る明瞭なる一部分）となりて存することあるなり殊に悲慘なる事柄が只だ哀れさ一方にのみ止まらずして多少勇壯なる競爭の分子を含む時は其心的作用を興奮せしむるの程度も從つて強く又快感を催し來ることも從つて多かるべし常に然るのみにあらず多くの場合に於ては悲哀なる事柄が興奮的の快感を惹き起し得んには多少、競爭異常奮激等の分子を含み居るの必要あり何となれば若し全く夫等の分子より離れて哀れさ一方にのみ陷る時は（若し其哀れさが或程度を超ゆれば却て心的作用を緩漫ならしめて彼の所謂餘りに打濕りたる心地を生じ來ればなり　斯の如く悲哀の事柄が興奮上の作用によりて快感を生起し得んには概ね之に種々の事情の伴ふを要すれども然れども悲哀の快感には場合によりて頗る興奮的作用の與つて力あることは右論じたる所によりて明ならん

既に上にも云へる如く茲に揭ぐる初の三四個條の理由は予輩の問題を解說するに取りて寧ろ第二等のものなる故夫等の個條は可成簡單に說明することとし此第三個條も其論述を茲に止めて直に第四個條に移るべし

四　或事柄に關する陳述を見てそを成程と思ふには其陳述が我等の實驗する所若しくは想像する所若しくは推理する所と相符合せざる可らず而して其如く相符合するものは我心識に幾分の快感を與へ符合せざるものは幾分の不快を與へざるなし故にヘルバルトは吾れ人の心識中の一想念と他の想念とが相和し相爭ふの點によりて快不快の感覺を說明せんと試みたり今若し筆意周到物情の眞に迫るの畫幅を見る時は噫善い哉との嘆聲を放つべし是れ畫工の妙腕を

以て我等の曾て實見又は想像せし景色人物を宛ら目に見るが如くに寫し出せばなり吾れ人が眞正の詩人又美術家の所作に接する時は我が將に言はんと欲し將に想像せんと欲したる事柄が恰も電光の如くに我心識に發出し來るを覺ゆるなり若し詩歌彫刻繪畫音樂が吾れ人の經驗する所若しくは冥々の裡に觀想せんと欲したる所と毫も相符合する所なくば何の快味も何の效力もあらざるべし吾れ人の心性に素より絶えて存せざる觀念を製造し出すが眞の詩人又眞の美術家の妙技にあらず彼等が凡人に卓越せる所は凡人の言はんと欲して得言はず思はんと欲して得思はざるの觀念を言ひ出で思ひ出づるにあり我等は全く其觀念を知らざるにあらず又全く知れるにもあらず知れる知らざるの中間に彳み居れり譬へば一時失念したる知人の姓名を思ひ出でんと力むるが如きの有樣にあり全く其姓名を知らざるにあらず何となれば其ならぬ姓名を聞いては直にその我が思ひ出でんと欲する姓名にあらざることを覺知すればなり我等は半ば眠りながら觀念を見哲人又詩人は全く覺めて之を見る若しプラトーンの思想を假りて云はゞ凡百の人は素より觀念を有ち居らざるにはあらざれどもそを忘れ居るなり詩人哲人はそを思ひ出でたるのみ故に眞の詩人又美術家の所作に接すれば我が將に言はんと欲して言ひ得ざりしことを豁然として言ひ出だし得たるが如きの思あり其所作は我が言はんと欲することと妙に相符合するが故に我心中言ひ難きの愉快を感じ來るなり

啻に高雅美妙なる觀念を發表する文學又美術上の傑作に止まらず單純卑近なる哀別離苦の陳述と雖も若し克く吾れ人の經驗する所に契ひ又想像する所に符合せば其陳述は必ず幾分の快感を喚起し來りて吾れ人は其作者の妙腕を稱して措かざるべし是れ卽ち（少くとも其大部分は）想念の符合より生ずる快感なり詩人又は小說家の名著傑作を讀みて愁歎悲哀の陳述に至る每に成程我身も其場合にあらば斯の如き悲愁の情を起せしならん斯の如き嗟歎の辭を發せしならんと思ひて恰も我が心情の有樣を見るが如きの心地せずんばあらず　啻に悲哀の陳述のみならず又啻に詩歌小說上の陳述のみならず凡そ古今の歷史を讀むにつけても我が經驗又は理想する所に照らし見て其歷史上大小の出來事の我心と相契合する所に其讀史の深き味の存するなり故にエモルソンは吾れ人各〻古今の歷史を悉く我一生涯に經過するものなり世界の歷史は我が一心の經驗の中に存し我が一心の經驗を申ぶれば則ち世界の歷史となる此覺悟を以て讀みてこそ始めて史を讀むの眼ありと云ふべけれ此史眼を具へて讀まざるの歷史は一塊の死物に異ならずと云へり凡べて我心の思ふ所察する所感ずる所と妙に相符合するものは殆ど魔術的の力を以て我心底に徹し來るなり殊に我恰も觀念せんと欲したる所を喚起してそれに一致和合し來るものは更に我心に一層の感動力を振ふなり此に由りて觀れば觀念符合の作用は其及ぶ所甚だ廣遠にして文學美術上の快味の此作用に因由するもの頗る多く予が玆に悲哀の快感を論じて右觀念符合の作用に其緣由の一を歸するも決して不當のことにあらざるべし

五　右第四の條に於ては我等が解說の頗る要點に入りたる如きの觀あれども然れども前四個條のみにては尙ほ問題の支部に止まりて未だ其中心に入らざるの憾なき能はず對照の作用と云ひ變換の作用と云ひ興奮の作用と云ひ若しくは觀念符合の作用と云ひ未だ以て吾れ人が悲哀の事柄に快感を覺ゆるの理由を全く說明し了したるものとは見る可らず尙ほ何處にか大に足らざる所のあるは情感の濃かなる讀

者の已に業に覺知し居れる所ならん今予が此第五の個條に於て云はんと欲する所を若し幸に予の望む程明瞭又完全に陳述するを得ば恐くは此問題の解說に關して讀者に滿足を與ふるを得ん

今迄予輩の陳述したる所を見れば凡べて一切の不快の感覺が對照變換興奮等の作用により一種の快感を生起すとは論ぜざりき予輩の論じたる所は專ら悲哀の感情なりき然れども若し只だ對照變換等の作用に就いて云へばそは啻に悲哀の感情にのみ應用さるゝにあらずして同じ程又同じ意味にて凡べて一般の不快の感覺に應用さるゝなり然るに殊に悲哀の感情にのみ就いて云ふは是れ蓋し悲哀の感情と至つて緻密なる關係を有して殆どそれと相結んで一個體を爲すが如きの觀ある一の性情の存するありて而して此性情に悲哀の快感の主大なる因由の存すればなり試に婦女子が芝居の愁歎場を見に行いて淚を流して悅ぶ時の心を想像せよこは如何なる性情の作動に基ける乎他の悲哀を見て落淚して憫れがるは是れ惻隱の心より出づるものにあらざる乎是れ他人と共に哀樂する同情同感の性に出づるものにはあらざる乎他人の悲哀を想念してそれが爲めに一滴の淚をだも灑ぐ時は我心は恰も或壓束を脫したるが如く譬へば堰かれたる水の其堰を取り去られたるが如きの感なくばあらず此感覺は即ち吾れ人の性情（此場合に於ては同感又惻隱の心と名くる性情）の其發せんと欲する所に發して滿足を覺えたるの心識なり此同感又惻隱の心は是れ即ち社會的の性情と名くるものにして而して此性情の滿足する所に一種高等なる快感を生じ來るなり彼の他人の悲哀を想うて自らも共に悲哀する所に一種無類の快感の存するは即ち主として此社會的性情の滿足に起因するものにはあらざる乎

第一條の例に於て既に同情的の作用のあることを指摘し置きたるが彼處にては勝利者の欣喜歡樂する方に同情を表するを云ひ此處にては全く其反面の作用即ち失望落膽悲愁痛哭する者に同情を表するを云ふなり同情の作用は其一面は喜樂に向ひ又一面は悲哀に向ふ喜ぶ者と共に喜ぶは一の高等なる快樂に相違なく啻に我が想念する事柄が喜ばしき事柄なる故に快感を生ずると云ふのみにあらで同情の性を滿足せしむる處にも亦別に一の快感を生じ來りて云はゞ喜ぶ者と共に喜ぶ時は二重の愉快を覺ゆるなり然れども吾れ人の性を顧るに喜ぶ者と共に喜ぶの心は悲しむ者と共に悲しむの心よりも遙に薄弱なるが如し是れ一は社會的の必要に出でて所謂社會的の練習によりて同悲の性情が同喜の性情よりも其發達完全なるによるならん然れども亦一は快樂を享受する者を見る時は吾れ人の性情として抑へ難き嫉みてふものが大なる妨害を爲すにもよるならん故にジャン・パウルは他の喜を喜ぶは天使の心其悲を悲しむは人間の心と云へり予が茲に云ふ所はこの悲を悲しむ人間の心にして此心を滿足せしむるものは我性の强大なる要求を滿足せしむるものなり

故に予は思ふ小說若しくは戲曲を讀んで可憐なる少女の悲哀に泣くを見て我も共に泣く時の心の中に言ひ難きの快味を覺ゆるは是れ我社會的の性情を滿足せしむるによるならんと我れ他の爲めに泣く時は我狹隘なる窮屈なる利己の壓束を脫して我心は人類の大なるが如くに大に社會の廣きが如くに廣きを覺ゆ是れ我心の一時の救にはあらざる乎狹隘なる利己の心は是れ我本眞の性にあらず他人の爲めに淚を流して他と我との差別を忘るゝの時は是れ我本性の光明を放つの瞬間なり吾れ人は其本性に復らんことを求む是れ之れによりて假

我を去つて實我を得ればなり是れ眞に我に復るなり彼の所謂社會的の性情は（若し其根本を云へば）卽ち此復我の一片のみ詩歌と云ひ美術と云ひ皆此大目的に向つて進むものにはあらざる乎

見よ弱肉强食の無情界に側匐する陋巷の愚夫愚婦が義人の不運を悼み佳人の薄命に落涙せんとて一日の閑を偸んで演劇場に入り來るは是れ知らず識らず利己の狹きを脫して同情一致の廣きを求めんとするにはあらざる乎我本眞の性に契ふの喜びを求めんとするにはあらざる乎我若し我身を忘れて他人の爲めに落涙する時は我心は恰も敵視世界の塵埃を洗ひ去られたるが如きの感なくんばあらず他人の悲哀をもて我心を充たし其悲哀と我とは別物にあらざるが如くに思ふの瞬間は自らこぼす涙によりて我諸惡を洗ひ去られたるが如きの思あり譬へば天然界の眞美景に接するか若しくは人間界の眞美人に接せば（若し其眞美を見るの眼あるものならば）只だ恍惚として其前に直立して我を忘れたるの有樣に陷るべし只だ唯だ其美しさに見取れて慾も思もなきに至るべし此境界に至りてこそ始めて眞に其美を嘆美すとは云ふべけれ此境界に至れるの瞬間は（ショーペンハウエルの云へる如く）殆ど一切の煩惱を打忘れて我心が一時の淨樂に入れるの有樣と云ひて可ならん他人の悲哀に我身を打忘れて熱き涙を流す時も亦右と同じく一時の救（サルヴェーション）に入れるが如きの思あるなり

今陳べし所は他人の悲哀を想念する上のことなるが他人の悲哀のみならず自身の悲哀を想念するにつけても亦同樣の快感を覺ゆることあり我身の不運を思ひ我れ程世に哀れなるもののあるべきやと嗟歎することに一種の愉快を求むる者なきにあらず我身偶〻不幸に逢へば直に昔の不幸なりし人に擬へて歌詠み詩作りなどして我身の上を哀れがることに一種微妙の快感を覺ゆる人少からず是れ何の故に然るぞや是れ他なし我身を假りに客觀的の目的物と見做してそれに向つて同情を表しそれに向つて惻隱の心を起せばなり一言に云へば自身に自身を憫めばなり他人にふびんと思はるゝは悲憂ある身に取りては頗る心を慰むることとなるが自身に自身をふびんと思ふことも亦一種微妙の快感を生ずるものなり若し他からやさしき語をかけられて「あゝ、おいたはしい」とか「さぞ、おつらからう」とか云はるゝ時は獨りでは泣かでありし時も思はず泣き出すことあり其泣き出す涙には只だ唯だ悲しいと云ふ感覺のあるばかりでなく何とも形容の爲し難き一種の快感を含み居れり是れ他からやさしき語を懸けられ同情を表さるゝ時は自身に自身の悲しさを猶ほ一層明に我心の前に描き出すことを得て而して其如く我悲しさを我心の前に描き出す時はそを客觀的に見て幾分かそれに向つて同情を表するの氣味あればなり彼の感情（センティメンタル）に耽るとも稱すべき性質の人が切りに我身の悼ましさを思ひ出すことを好むも是れ亦我と我身を憫むの心が其大部分を占め居るにあらずや和歌には此の如き感情の發表せるもの少からず古人が罪なくして配所の月を見たしと云ひしも亦幾分か我と我身の不運を悼むの愉快を感ずるが故にはあらざる乎

右論ずる所によりて見れば吾れ人が悲哀の快感を覺ゆるは（其悲哀の我身に屬すると他人に屬するとに拘らず）重にそを我心の前に置いて客觀的に想念したるの時にあり然れども我身又他人の悲哀に快感を覺ゆるはそを客觀的に見てそれに同悲の情を表すると云ふより外に倚ほ他に因由の存することあり例へば我は此程の悲憂にも忍耐し居ると思ふ時は我心が其悲憂に充たされて居りながらそを持ちこらへ得るの力を覺えてそこに又一種の快感を生じ來るなり

家の憂に先ちて憂ふと云ひ又人生百に充たず常に千載の憂を懷くと云ふが如き思の中にはそれ丈の事をも爲し得ると云ふ靈能のあるを覺ゆる所から何となく快感を催し來るの氣味なくんばあらず百年に足らぬ身を有ちながら千載の憂を懷き得るとは是何處にか偉大なる所のあるからにはあらずや此偉大なる所を悅ぶの心識は一の高等なる快感にして此快感は吾が人性の品價道徳の觀念の上より生じ來るものなれば予は此文の結末に當り尙ほ此道徳上の點に就いて一言し置かん

六 吾れ人の感覺する悲哀の情が若し道徳的の觀念又感情と相團結する時若しくは其悲哀の情のあるが爲めに尙ほ一層道徳的の觀念又感情の活力光輝を表はす時は其悲哀の情は多少道徳的の愉快を來すの緣由となるべし例へば高節廉潔の士が堪へ難き艱苦の中にありながら尙ほ克く其節操を守るの様を觀れば一方には固より悲痛辛酸の状あれども然し却てそれあるが爲めに又一方には(即ちその艱苦悲痛にも尙ほ克く耐へ得ると云ふの點に於て)道徳的心識の滿足を發揮せしむ故に悲壯なる戯曲の主人公が正義公道を守つて終にそれが爲めに非命の死を遂ぐるの様を觀る時は悲痛惨澹の状は固より是れに過ぐるものにあらざれども然れども其惨澹たるが中にも尙ほ一種高等なる快感の存するを覺ゆるなり天然の盲力世間の魔力は其主人公を死に致すことを得れども其主人公の正義公道の念は遂に亡ぼすを得ずとの心識は是れ實に道徳的の觀念をして其最大なる滿足を得せしむるものにはあらざる乎シルレルが其文に論じたる所は即ちこの意に外ならず啻に道徳的の觀念が世の不幸苦難と相爭ひて遂に勝利を得たるの場合のみならず悲哀の感情それ自身に幾分か吾れ人の心をして世の虚榮汚樂を脫離して眞面目なる淸淨なる思に立歸らしむるの效力あり即ち多少の道徳的感化力のあるなり「悲しむ者は福ひなり」との語あるも亦此れが故にあらずや 前段論じたる所の惻隱の心より起る悲哀の快感も亦頗る道徳的の心識と相關する所なきにあらず尤も悲哀は吾れ人の心情を弱からしめ又餘りに其悲哀の快感を悅ぶの性質は吾れ人をして柔弱不斷膽力を要するの大事に堪へざらしむるの傾ありて道徳上多少の缺點を生ぜしむるの恐なきにあらざれども然れども兎に角道徳的心識を滿足せしむるの邊よりして種々の場合に於て悲哀の快感を生じ來ることあるは明なり

人は悲哀に訓練されて眞正の樂境に至るの途を知ることは固より人生の一の悲しき事實に相違なし然れども其の事實なるを如何せんや

(明治二十四年三月發行「國民之友」第百十三號)

耶蘇教問題

此頃耶蘇教が、教育勅語の旨意に反せざるや、我國家に害なきやに就きては、頗る爭論のあるが如し。此の如きは、惟ふに予輩の自由に、眞面目に討究すべき問題ならん。只だ左右を顧みて默するが如きは、眞心ある者の爲すまじき所なり。何れの世か、爭のなからざらん。爭を解くの道は、默するにあらず、思ひ切つて爭ふにあり。如何に其見る所を異にするも、心から眞理の爲に、國家の眞福の爲に爭論することならば、互に胸襟を宏うして、說く所を聞くを要す。默して一致を裝ふ者よりも、語つて反對に立つ者が、眞に敬すべく、愛すべく、貴ぶべき友ならずや。予は爰に詳論するを得ざれども、只だ一通り予の見る所を告白するは、亦今の論爭に益なきにしもあらずと考ふ。或は予の云はんと欲する所を誤解する者あらんかなれども、誤解さるゝを恐れて默止するは、予の好む所にあらざるなり。此頃の論爭を見るに、種々の問題の混雜せるが如し。問題の雜合せるは、徒らに論爭を不明ならしむと考ふ。耶蘇教と云ふ事が、是れ既に宏漠たる事にして、只だ之を攻擊すと云ふも、其攻擊の的とする所に、種々の差別あり。現今我國にて、耶蘇教家と自稱する人々の氣風に、面白からざる所あるを攻擊すると、耶蘇教理を攻擊するとは、全く同一事と思ふ可らず。又同じく耶蘇教理を攻擊すと云ふ中にも、從來歐米に行はれたりし神學說を攻擊すると、バイブルに記しある所を攻擊するとは、其間おのづから差めなかる可らず。歐米に行はれたりし神學說の中、何程がバイブルに說ける所と相合し、何程が後世の學者の附加せる（或は誤解せる）所なるかを、爰には固より論ずるの暇なし。但だ彼れと此れとを同一視す可らずと云ふことを注意し置くのみ。又耶蘇教理を駁するにも、哲學上の位置よりして論ずると、我國體の上よりして論ずるとは同一事にあらず。宗教哲學の上より見て耶蘇教理を維持す可らずと云ふと、現今の政治教育の上よりして（政略上）之を抑壓すべしと云ふとは、同日の論にあらず。又耶維教に社會道德を改良する效能のあるを拒否するにも、耶蘇教家がしばしば吹聽する如き、萬金丹的の效能あることを否むと、多少の效能あることをさへも否むとは、別論なるべし。又歐米の耶蘇教（即ち西洋の風俗に浸染せる耶蘇教）と然らざる者との區別も立て得られざるにあらず。歐米の耶蘇教と、昔猶太に起りし原始の耶蘇教との間に、差別のあるも勿論なり。耶蘇教を日本的に化す可らずと云ふも、日本的に化したりとて耶蘇教は矢張り無用有害なりと云ふと、その如くに化したる耶蘇教は最早耶蘇教と名く可らずと云ふと、又耶蘇教は到底日本的に化す可らざる者なりと云ふとは、同日の論にあらず。（固より日本的に化すと云ふ意味に就いても論あるべし。）耶蘇教なる者は、遂に永く文明國の宗教として存す可らざる者なりと云ふも、そを目して一日も早く刈り除くべき者、又到底痕跡もなく滅し去るべき者なりと云ふと、耶蘇教は今日の如き一大宗教として何時々々迄も文明人民の信仰を繋ぐ能はざるも、亦決して磨滅す可らざる、忘却す可らざる所の貴重なる遺物を人文の上に殘す者なりと云ふとは、固より別論なるべし。又現今の耶蘇教會組織と耶蘇教の活力精神とを混同すべきにもあらざるべし。

予をして、爰に予が思ふ所を、極く簡單に表白せしめよ。予は從來耶蘇教家と自稱する者の中、妙なる氣風を有する輩ありて、此が爲めに國家てふ觀念を重ずる人々に惡感情を懷かしめたるを知る。耶蘇教家の中、國家の統一てふ事には、餘り注意せざりし者のあるを知る。近年に及んで、都下の牧師會は、天長節紀元節等には、相集つて、天皇陛下の萬歳を祝するを知る。然れどもこは近年に始まりし事なりと知るべし。要するに此點に於ては、輓近耶蘇教家の中、著き變化のありしを認むべし。此變化は彼の所謂國粹保存論に刺戟せられて、起りたる者なりと云ふ事は、否む可らざる事實ならん。如何に耶蘇教家が、此點に於て、彼等の心得とする所の前後少しも變更せざることを主張せんとするも、そは到底主張し得べきことにあらず。又彼等の中、物のわかりたる輩は、その如きことは主張せざるべし。彼等の中、公平なる者は、多少かの（或點に於ては甚しく謬れる）國粹論に對して感謝すべき所あるを認むるなるべし。然れども、こは啻に耶蘇教家にのみ限れることと云ふ可らず。一時西洋の文物を欽慕したる者は、擧つて無闇に西洋風を吹かしめたるにあらずや。今は耶蘇教を非國家的なりなどと大聲疾呼する人々の中にも、非國家的と嘲らるゝ耶蘇教家にも劣らざる程に、西洋に心醉したりし人もあるべし。久しく米國に滯留せし者は、何となく米國の戀しき心地のすることもあらん、永く獨逸に遊びし者は、時々には日本の社會よりも、獨逸の社會に住み度く思ふこともなきにあらざるべし。故に此點に於ては、一口に耶蘇教なる者を排斥するよりも、寧ろ懇々耶蘇教家に諭す所あるを要す。然れば彼等の中、彼の妙なる氣風は、今よりも益々減少するならん。耶蘇教家の先達も、亦此には力めざる可らざるなり。惟ふに彼の敕語を拜する如きことに、故障を唱へし者あるは、一はかの妙なる氣風に基く所あらん。然れども亦誤解に基く所もあり。彼等が宗教上用ふる所の禮拜なる語とその意義に於て混同さるゝの恐あるよりして、彼等は誤解に陷りし所あるべし。若し幾分にても、宗教上の意義を含めて、彼等が神とする者より外の者に向つて、禮拜を加へよと云はゞ、彼等は憲法を楯として、その如き不條理なる請求に抗するなるべし。彼の禮拜なる語に、彼等自ら宗教的の意義を附して、而して彼等自ら誤解に陷りしことは、全く彼等をのみ咎むべきにあらず。然れども今日に於ては、彼等は宜しくその如き誤解を棄つべきなり。（學童をしてしば〳〵敕語を禮拜せしむることが、果して敕語の主意をして實益あらしむる道なるか否かは、おのづから別論なるべし。）

耶蘇教家の中、弊風のあることは事實なり。然れども之を攻擊すると其教理を攻擊するとは、全く同一の事にあらず。今日僧侶の中墮落せる者の多きを見て、直に佛教理を攻擊するは、耶蘇教家の中にあり易き習ひなるが、此れが不條理なると同じ意味にて、耶蘇教家の弊風に對するの攻擊と、耶蘇教理に對するの攻擊とを混同するも不條理なるべし。固より其弊風と其教理との間に必然の關係あるやも知る可らず。然れども亦無きやも知る可らず。予は西洋より渡りし所の耶蘇教を信ずる者が先づ西洋風に振舞ふを見て、耶蘇教理なるものそれ自身が、その如き弊風と必然の關係を有すと斷言するは、大早計の譏りあらんと考ふ。予は耶蘇教理を窮め得たりと云はず、然れども十餘年間、バイブルを讀みて、發見したりし限りに於ては、其中首肯し得ざる事柄のあるに拘らず、其教理は必ずしも我國家を危うするの弊風を生じ來る者なりと云ふべき所以を知らざるなり。詩歌的の開闢説を始として　默示錄の東洋的想像に至る

迄、種々雜多の事柄の記しあるを知る。啻に些細なる點に於てのみならず、重要なる個所に於ても、解釋說明の區々なるを知る。バイブル全體の見樣さへも、耶蘇教家の中に頗る異論のあるを知る。バイブルを以て信仰行爲の標準となすなどと稱ふるも、到底一致の期し難きを知る。一言一句を前後の關係より、大體の主意より、引き離して論ずれば、隨分勝手次第の議論の出來べきを知る。バイブルなる者は、要するに猶太人民の宗教的生活の記錄に外ならざるを知る。耶蘇教と名くる者も、是れ只だ人類の歷史に於ける一宗教的現象に過ぎざるを知る。然れども其教理の中、殊更に我國家を危うすべき者あるを見ず。若し之れ有りと云はゞ、同じ意味にて佛教理の中にも、之れ有りと云ふを得と考ふ。予は哲學上より見て、(固より予が見る所の哲學に外ならず)、耶蘇教理を悉く辯護し得べしと考ふる能はず。バイブルにある所に就いて云ふも、又從來の神學說に就いて云ふも、哲學上酷しき非難を受くべき所ありと考ふ。然れども其教理を見て、我國家を危うする者也として、之を現今我國に於て窘迫せんとするは、決して其當を得たる者にあらずと考ふ。宗教並哲學に於けるの爭論は、多くは未だ終極の結着に至らざる問題に關する者なり。故に可成自由の討究を許さざる可らず。敵と味方の兩立して相爭ふが是れ社會の進步に缺く可らざることならずや。學術宗教の自由も、國家の安寧を害せざる限りに於て保護すべき者なりとて、何ぞと云へば直に國家の安寧をかつぎ出して、學術宗教の自由を束縛せんとするは、決して策の得たるものにあらずと考ふ。上に在つて政權を執る者は、此點に於ては、宜しく其眼界を大にせざる可らず。然らずんば、予は我國家の前途を見て多望なりと云ふ能はず。然らずんば、ショーペンハウエルの哲學などを嫌ふ輩の中には、その厭世的なるの故を以て、我國家の進步に害ありとて、之を說くことを禁ずべしなどと唱ふる者も出で來るならん。佛教が我國の人心に益したる所ありと云ふを得ば、耶蘇教は又新分子を注入し、新活力を附加し、以て我社會の生活を富贍ならしむる所ありと考ふ。耶蘇教會なる者は、何時迄其組織を維持し得るかは、一問題ならん。予は固より、之を永遠なるべきものと云ふの根據を發見せず。耶蘇教會のみならず、今日歐米の文明なる者が、彼の古代希臘の文明の遭遇せし運命に遭遇せずと云ふ可らず。然れども耶蘇教會なる者が人文の進步に益する所なしと云ふは非なり。恰も希臘文明を益なしと云ふの非なるが如し。(羅馬教會並に希臘教會に就いては、論ずべき所あれども、茲に省く。)又假ひ耶蘇教理を非國家的と評する所ありと云ふも、佛教理に比して、殊更に國家の統一を害すと云ふべき理由を見ず。我國體の今日の如くあるを見て、一に之を佛教若しくは儒教に歸するは、思はざるの甚しきなり。佛教又儒教の行はれたりし他の國は如何ぞや。且又非國家的と云ふも、殊更に國家的なる傾向を有せずと云ふことと、全然國家的に反すと云ふこととを、區別せざる可らず。無しと云ふと反すと云ふとは、同一義にあらず。無き者は他の者によりて、補ふを得可し、反する者は相合せしむ可らず。耶蘇教理を目して、特に國家的なる傾向なしと云ひ得とするも、(これは佛教に就きても云はるべし、是は幾多の哲學に就きても云はるべし)、國家の統一に反すとは云ふ可らず。耶蘇教家が、往々忠孝は耶蘇教によらずば眞實行さるべき者にあらずなどと云ふは、固より嗤ふべきことなり。然れども教育勅語にある忠孝と相反すと云ふは、耶蘇教理を誣ふるものなり。予の考ふる所は概ね斯の如し。

(明治二十六年三月發行「教育時論」第二八四號)

當今の衝突論

（其一）

予は本誌(教育時論)二百八十四號(即ち前掲の論文)に私見一束と題して、教育敕語等に關する問題に就きて聊か予の見る所を陳述し、爾後其稿を續がんと欲したれども、業務に妨げられて果さず。此頃少しく閑を得て筆を執らんと欲したるに際し、本誌前號に元良博士が宗教と教育との關係に就いて其意見を陳ぜらるゝに遇ふ。予は元良博士の如き名譽ある獨立の思想家が此問題に關して其議論を表白せらるゝを賀せずんばあらず。そは予が私見一束の中に云へる如く「何れの世か爭のなからざらん、爭を解くの道は默するにあらず、思ひ切つて爭ふにあり」と信ずればなり、而して有益なる爭は元良博士の論法の如くに嚴格沈重なるを要すと信ずればなり。斯く信ずるが故に、予も此か云ふ所あらんと欲す。而して幸ひに元良博士の議論に接するを得たるを以て、先づ博士が論點の何の處にあるかを討究し、併せて少しく予の考ふる所を陳べんと欲す。此問題に多少の益する所あらば、予の寔に幸ひとする所なり。

當今所謂教育と宗教との衝突は素と井上博士の論文によりて喚起せられたる(若しくは其氣焔を高められたる)ものと云ひて可ならん。此衝突論は曳いて他人の私の心事を臆測揣摩して浮說を傳へ、又論者の人物をまでも事々しく新聞に廣告して評せんとするに至れり。予は此の如き鄭重なる問題に此の如く鄭重ならざるいさかひの附着し來りたることを悲む。此いさかひに就いては予はこゝに云ふの必要なし。元良博士が此爭論の由來なりとて辯ぜられたる所は、果してよく雙方の事實を盡したる者なるか否かと云ふことに就きても云はざるべし。但だ井上博士が學長の位地を得んが爲に云々せられたりと云ふが如きことは、予の辯解を待たずして、井上博士を知れる者の誰れ一人として信ぜざる所なり。(猥りに此の如き邪推を逞しうしたる者は其罪を免れずと云ふべきなり)。予は井上氏を知れるが故に、此點のみは元良氏と共に井上氏の爲に一言の辯じ置く所なきを得ず。他の點に就いては予は云ふを欲せざるなり。

(一) 當今云ふ所の衝突は宗教と國家教育との衝突なるか、將た耶蘇教と國家教育との衝突なるか。井上博士の論は題して「教育と宗教の衝突」と云ふ、然れども其論の一端を窺ふに(予は通讀せしことなし)凡そ宗教たる所が教育の教育たる所と衝突するの趣意にはあらずして、單に耶蘇教が我國の教育と衝突すとの意に外ならざるが如し。元良博士の着眼の點はこれに異りて、總じて宗教と稱する者と教育と稱する者との關係を論ぜらるゝにあるが如し。故に井上博士の如く單に耶蘇教をのみ引き來りて、是れが教育敕語の趣意に反すとは、元良博士は論ぜられざるなり。それのみならず、井上博士が耶蘇教を以て非國家主義として論ぜられたる所は、悉く同意を表する能はずと明言せらる、然れば則ち井上博士が單に耶蘇教を指して非國家主義とし教育敕語の趣意に反すとせらるゝ點に對しては、元良博士は其鋭利なる論鋒を向けらるゝに相違なし。尤も元良博士も本誌に載せられたる文に於ては重に耶蘇教と我國の教育との關係に就いて論ずと云

はれたり。然れども其の耶蘇教に就いて論ぜらるゝ所は、凡べて宗教と稱すべき者に就いて均しく云はるべきことなるが如し。（是れ予の後に説明せんとする所なり。）元良博士の着眼の點と、井上博士の着眼の點との間には、おのづから差別のあることを忘る可らず。

（二）元良博士の着眼點は廣きが故に、凡そ宗教と稱せらるべき者の特質よりして論起せらる。元良博士以爲らく、世に宗教多しと雖、要するに其特質とする所は、宇宙を主宰する神ありとし而して其神を見て人類と等類にして完全なる智と情とを有する者とし此神に吾人は調和するを要すと説くの點にあり、若し其神をして人類の如く智情を有する者とせずば、或は形而上理學とは名くべきも、宗教にはあらずと、是れ元良博士の宗教の特質を論ぜらるゝ要旨なり。宗教てふ者の何たるかに關しては、種々困難なる論點に觸れざるを得ず、故に茲には詳論するを得ざれども、但だ予は元良博士の論には容易に同意するを得ずと云はん。元良博士は飽く迄も宗教に云ふ神は人類に擬したる者ならざる可らずと主張せらるゝに似たり。然らば擬人の神なしとする所には、宗教は其跡を絶つと云はざる可らず。予は宗教的と名けらるゝ者の多くが元良博士の爲に其名を剝奪せられん事を恐る。若し博士の言の如くば、プラートンも遂に其哲理の根柢に於て宗教的ならず、スピノザも遂に其世界觀の本義に於て宗教的ならざるべし。唯だ擬人の神にのみ向つて吾人は心情を傾け得ると云ふは誤りなり。又縱令擬人の神ありとなすも、其神は宇宙を支配するに足る程のものにあらずとせば、是れ亦宗教にあらずと云はざるを得ず。それ程の神を想ひ浮べ得るに至つて始めて宗教心ありと云ふを得べきか。予はその如くには考へざるなり。固より宇宙の大原として吾人の如くに智情意を具ふる者ありやなしやは大問題にして、此問題の解釋の如何に宗教のみならず道德の運命さへも懸ると思ふ者なきにあらず。其如き「ペルソナル、ゴッド」の有無によりて耶蘇教理の耶蘇教理としての運命は或は定まるやも知る可らず。然れども是れ決して宗教その者の運命の盡くる所にあらずと考ふ。斯の如き神を信ずることが人類の宗教史に於ける一大現象なるには相違なし。然れども是れ唯だ其一現象にして其發達の全體を蔽ふ者にはあらずと考ふ。予は茲には宗教なる者の定義を下さんと力めず（論じ樣によりては唯だ名稱上の爭に陷るやも知る可らず）。但だ元良博士の云はるゝ所には容易に同意し難しとのことを表白するのみ。宗教の定義の如何は、予が後の論には左迄の關係なければ也。

（三）「基督教青年」と題する雜誌は曾て論じて曰く「教育と宗教とは其根據を異にせり、一は國家の上に立ち、他は宇宙に橫はる、其衝突の有無を論ずるは既に論理に反す、信仰の自由の憲法に赫々たるは是れが爲にあらずや」と。元良博士は教育と宗教との關係を説かんが爲に此「基督教青年」の語を引き來りて曰く「是其要領を得たりと云ふべし。實に衝突の有無は論ずるに足らず。然りと雖、憲法を楯として宗教の自由を論ずる是れ大に矛盾する所なきか。蓋し憲法は國家の憲なり。宇宙に橫はりたるものが國家の憲法を以て自分を保護するは予の解するに苦しむ所なり」と。宗教と教育との衝突の有無は論ずるに足らずとは何の意ぞ。何が故に論ずるに足らざるか。此兩者の衝突せざることは一見明瞭なるが故に、論ずるに足らずとの意か。衝突すとも衝突せずとも云ふが既に非なりとの意味にて論ずるに足らざるか。將た衝突することはわかりきッたる事なる故に論ずるに足らずとの意か。「基督教青年」は、右兩者は其根據を異にするが故に、其衝突の有無

を論ずるは既に論理に反すと云へり。而して元良氏は是れ要領を得たりとて之に同意を表せらる。然れども「基督教青年」の云ふ所の意味は如何。宗教と教育とは、恰も甲なる一物を尺にて度りて乙なる一物よりも長しと云ひ、又秤にて度りて乙よりも輕しと云ふが如く、其立旨の根據を異にするが故に、衝突せざることは一見明瞭なり。若しくは衝突すとも衝突せずとも比較の出來ざる者なりとの意味にてはなきか。然らずんば何ぞ「既に論理に反す」とは云はんや。又右兩者の關係は斯の如くなるが故に、憲法は信教の自由を許せりと論じたるには非ざるか。予は「基督教青年」の云ふ所を明に解せず。然れども若しその云ふ所、右の如くならば、元良博士が「是れ大に矛盾する所なきか」と難ぜられたるの點は當らずと謂ひつべし。「基督教青年」の云ふ所は兎もあれ角もあれ、元良博士が「論ずるに足らず」と云はるゝ理由は如何。博士の理由は右兩者の衝突することはわかりきッて居ると云ふにあるが如し。然らば何故にわかりきッて居るか。

（四）　元良博士は曰く「抑も基督教は人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むるなり。日本の教育は將來はいざ知らず今日に於ては日本人をして日本帝國の良臣民たらしめんことを以て目的とす。兩者豈衝突なきを得んや」と。又博士は「基督教青年」の語を假りて、耶蘇教は宇宙に横はり教育は國家の上に立つ者なるが故に、其衝突は免れずと論ぜらるゝに似たり。宇宙に横はるとは如何なる意ぞ。其眼界が宇宙の廣きに亙るとの謂ひなるか。然らば何ぞ獨り耶蘇教をのみその如きものと云はんや。又諸々の宗教をのみその如きものと云はんや。哲學も科學の全體も亦均しく宇宙に横はると云ふべきなり。若し耶蘇教を見て宇宙に横はると云ふべくば、佛教も同じく宇宙に横はると云ふべきなり。哲學の如きは倚ほ更に宇宙に横はると云ふべきなり。物理學の如きも其着眼の點は唯だ一國家に限れる者にあらず、宇宙に存在する一切の物界に就いて攷究する者なるが故に、是れ亦宇宙に横はると云はざる可らず。故に若し宇宙に横はると云ふの理由を以て日本教育の精神に矛盾すと云はば、耶蘇教のみならず佛教も哲學も物理學も皆矛盾すと云はざる可らず。要するに「宇宙に横はる」と云ふのみにては餘りに漠然たり。

元良博士が耶蘇教を目して宇宙に横はると云はるゝの意は、其教が「人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むる」の點を指すに外ならざる乎。若し此點より見て、日本教育の精神と矛盾すと云はゞ、獨り耶蘇教のみならず、元良博士が凡べて宗教と名けらるゝ者は皆矛盾すべきなり。元良博士によれば、苟しくも宗教と名くべきものに於ては、宇宙を支配する有智有情の神あることを信じ而して吾人をして其神に和せしめんと力むるなり。神の民となると云ふは要するに其神に和するの謂ひにあらずや。然れば世界的宗教にてある以上は、何れも「皆人種の區別をなさず世界萬國の民をして等しく神の民たらしめんことを求むる」ものにあらずや。元良博士は佛教を宗教と見らるゝか否かを知らず、然れども若し之を宗教と見ば、是亦元良博士の意見にては基督教と共に日本教育の精神に矛盾すべきものなり。神の民たらしむると云ふことが、佛教に取りては言語上不都合ならば、人種の區別を爲さず世界萬國の民をして等しく佛に歸依する者たらしめんと力むるが、佛教の精神なりと云ひつべし。而して人種の區別を問はずして何人をも神の民たらしめんとすると、佛に歸依する者たらしめんとするとは、元良博士の論に取りては、何の差別かある。予はその差別のあるべき

所以を發見せず。故に予は言へり、元良博士の所謂衝突は單に耶蘇教にのみ關することにあらずと。

予は一歩を進めて問はん、耶蘇教が我日本に於て我國民をして神の民たらしめんとすると、我國の教育主義が我國民をして日本帝國の良臣民たらしめんとするとは、元良博士の云はるゝ如くに必ず衝突すべきものなるか。耶蘇教の目的とする所は實に萬民をして其謂ふ「神の國」の民たらしめんとするにあり、此點に於ては分毫の疑なし。然れどもその謂ふ神の國の民たると日本帝國の良臣民たるとは衝突すべきことなるか。若し一國家の良臣民たらしめんとすると、神の民たらしめんとするとが衝突せば、是れは我國に於てのみのことにあらず、西洋に於ても等しく衝突すと云ふべきなり。而して一時の(又或部類の)慣習の上より云はゞ兎も角も、耶蘇教理その者が何故に殊更に我國の教育と衝突するかを元良博士は說かざるなり。蓋し博士にそれが殊更に衝突すとは思はれざるが故ならん。

然らば我國に於てのみ殊更に、衝突すと云ふ可らずば、何れの國家に於ても等し並みに國家的教育の精神と耶蘇教の精神とは衝突すと云ふを得べき乎。耶蘇は曰く我國は此世の國に非すと。蓋しその謂ふ神の國の民たると、此世に於ける一國家の臣民たるとは、其意義に於て相異れることを示せる也。若し耶蘇教に云ふ神の國が日本帝國と云ふが如きの一帝國にして而して互に相對峙する者ならば、彼れの國民たらしめんとすると、此れの國民たらしめんとするは、固より衝突するならん。然れども彼れと此れとは全く別の意義にての國なることを記憶せよ。(元良博士とても之を混同せるにはあらざるべし)。全く別の意義にての國民たらしめんとすることが、何故に相衝突するか。何故に同一人にして等しく彼れと此れとの民たるを得ざるか。恰も同一物を長しと云ふと共に輕しと云ひ得るが如きにあらずや。或は云はん、吾人の心身の力には皆際限あり、故に神の國の民たると日本帝國の民たるとは別種の事とするも、一方に力を盡すはおのづから他方に力を減ずる所以にあらずや、然れば多少の衝突は免れざらんと。然れども二者全く別義にての國民なりと云ふは何の意ぞやと尋ぬるに、一に於て戴く帝王と他に於て戴く帝王とが全く別義を有すと云ふの意味に外ならず。彼れの國民として行ふべき所と、此れの國民として行ふべき所とが、必ずしも相異ると云ふにはあらず。耶蘇の謂ふ神の國が未來にあらずして現世に於て成就さるべき者なることは、バイブルを解する者の皆知る所なり。「此世の國にあらず」とは、現世の事にあらずとの意にはあらず。若し現世に於て耶蘇教家が教會堂に入りて神を拜するとが、國民としての行爲の中より宜しく除き去らるべきものならば、彼れに力を用ふる程が此れに力を減ずべし。故に是れ程の衝突は免れざらん。然れども宗教家として禮拜し念佛することは、國民としての行爲より除き去らるべきものなるか。清閑を得て、時に俗塵を脫し心を幽冥の界に遊ばしむることは、忠良なる臣民として爲す可らざることなるか。若し又或人々の如くに神の國の民たることをば甚だしく厭世的に考へて、只だ〳〵未來を待ち望むの外なきものとせば、その國の民たると此世の國家の臣民たるとの衝突は決して免れざらん。然れどもこはその如くに耶蘇教理を解するからのことなり、此解釋を指して直に耶蘇教理なりとは云ふ可らず。耶蘇の教ふる所は、此世の罪惡に對しては固より厭世的なりと云はるべし。然れども此世に在りて其罪惡を退治し世態人心を改造せよと教ふる所は決して厭世的にあらず。苟しく

も宗教にして今云ふ程の(又今云ふ意味にての)厭世的分子を含まずば、宗教としての效力いづくにある。耶蘇の弟子等に至りては、其中耶蘇の實際教へし所よりも更に厭世に傾けりし事を說きし者あるは蔽ふ可らざる事實なり。(世に學者と自稱する者の中、耶蘇も保羅も初代の教父等をも同一視して論ずる者あり。其非なることと云ふまでもなし)。

神の國の民としての行爲には、君父に對し兄弟に對し朋友に對する日常の行爲は含まれざる乎。耶蘇教に所謂神の國の民としての行爲は、唯だ教會堂に集合して神を讃美し祈念を凝らしバイブルを讀み說教を爲すに止まる乎。若しその如くに考ふる者あらば、是れ耶蘇の云ふ神の國をいたく誤解したる者なり。請ふ尙ほ少しく此點に就いて論ぜしめよ。

(五)耶蘇十字架に磔せらるゝに先ち公廳に引かる。時の方伯ピラト問うて曰く、爾はユダヤ人の王なるやと(斯く問ひしは、耶蘇を嫉惡せし猶太人等彼を陥れんため、彼みづから王なりと云ひしとて此言を捕へて訴へしによる)。耶蘇曰く、我國は此世の國に非ず、若し我國此世の國ならば我僕われをユダヤ人に付さざる爲に戰ふべし、然れど我國は此世の國ならざる也。ピラト彼に曰ひけるは、然れば爾は王なるか。耶蘇答へけるは、爾の言ふ所の如く我は王なり、我これが爲に生れ之が爲に世に降れり、そは眞理について證を爲さんため也、凡べて眞理に屬く者は我聲を聽く、ピラト彼に曰ひけるは、眞理は如何なる者ぞ。此事を言へる後また出でてユダヤ人に曰ひけるは、我は斯人(耶蘇を指す)に罪あるを見ずと(約翰傳第十八章)。

此處を讀む者は、耶蘇の云ふ「我國は此の世の國にあらず」との意味を察知するに難からじ。

世人往々云ふ、耶蘇教には君父の上に天父あり耶蘇ありと說く、故に忠孝に反す我國體に反すと。眞實如何なる點に於て相反するか。(天父と耶蘇との關係は耶蘇教家の中にても神學上の議論紛々麻の如し、此點に就いては茲に云ふの必要なし)。耶蘇教に云ふ神の國は如何なる地にても耶蘇教徒の見て以て全智全能至善至正と信ずる神の意の行はるゝ處に存在する者也。神が此無形の國の無形の王なりと云ひて可ならん。而して耶蘇教徒は此王を宇宙の主宰者なりとし、幽冥の中に吾人を支配する者なりとし、此れより以上の者なしと思惟す。然れども斯く神を以て宇宙に於ける最も尊き者なりとするの點を捕へて、直に以て我國體に反すと斷ずるは、恰も釋迦の「天上天下唯我獨尊」と云へる語を捕へて、我皇室をなみする者なりと云ふと等しからん。一國家が若し宗教の上に於て其國家の元首以上に尊むべき者なしと云はゞ、其如き國家と耶蘇教とは矛盾することは勿論なり。(其如き國家には信教の自由は毫末もなしと云ひて可ならん、國家の安寧を害せざる限りと云ふ條件附きの自由なきのみならず、絶對的に信教の自由なしと云ひて可ならん、何となれば宗教に云ふ神と國家の元首とが同一體なるか若しくは同位地にあらざる限りは、一宗教に於て本尊とする所は、自ら其宗教上の事柄に於ては國家の元首の上に立つべき者なればなり)。

然れども宇宙に於て最も尊むべきは神なりと云ふと、國家の元首は國家の至尊なりと云ふとは、必ずしも衝突すべきものにあらず。但し形式上若しくは假設上には衝突すと云ふを得べけん。何となれば若し國家の元首の命ずることと耶蘇の神の命ずることとが衝突すと假設せば、宇宙の神を信ずる耶蘇教徒は國家の元首の命に逆らうても宇宙の神の命に從ふべければなり。彼等の剛膽なる、水火を踏むも辭せざるべし。然れども若し忠君愛國が取りも直さず宇宙の神の命ずる所なりと見ば、彼等の剛膽なる、死を目しても國に盡し君に忠なるべし。宇宙の神を信ずることと國家の元首を敬ふことと

が假設上衝突すと云ひ得べきのみならで、事實上衝突すと云ひ得べきか否かは、何事を實際宇宙の神が命ずるか、何事を實際國家の元首が命ずるかを判知せでは決す可らざる也。假設上相衝突すとは啻に耶蘇教に就いてのみ云ひ得べきことにあらず、他の宗教に就いても云はるべし、否な學術に就いても云はるべし。若し一哲學者の大眞理と信ずる所を非眞理とせよと命ずる如き國家の元首あらば、其哲學者は縱令斷頭臺上の露と消ゆるとも其信ずる所を枉ぐ可らざるにあらずや。是れ眞理の爲に其身を獻げたる學者の本分ならずや。少しく世人の攻擊に遇へば安からざる思を爲す如き腰弱き學者の多きをこそ歎ずべけれ、我身を賭しても己が信ずる所を主張する學者のあることは、少しも歎かはしきことには非ず。一國家の元首の實際命ずることに一宗教の神の命ずることが衝突する場合なきにあらざるべし。國家の元首が學者を坑にしたる例さへもあり。然れども何故に、何の爲に、我日本に於て(聖天子を戴ける此立憲國に於て)その如き衝突の起らざる可らずと唱ふるか。耶蘇教はみづから好んでその如き衝突を招く者なるか、その然るか否かは、耶蘇教の神が實際何事を命ずるかと云ふことによりて定めらるべし。

耶蘇教家に向うて、汝の神は何を命ずるか、汝の神に事ふるの道如何と問はゞ、我神は至善至正の神なる故に、凡べて善なる事凡べて正なる事を爲せと命ずと答ふるの外なかるべし。彼等は耶蘇の言を引いて「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞とをもて之を拜すべきなり」と云ふならん。而して何事が其神の命ずる正事善行なるかと問はゞ、彼等は要するに其時々々の最も進歩したる道德心と彼等の思ふ所のものによりて判定するの外なかるべし。天に向つて、神よ何が正事善行なるかを教へ給へと叫ぶも、神は天上より聲を放つて答へざるべし。其時々々の道德心を外にして神の聲を聞かんとするも、神の聲は聞えざるべし。バイブルを繙くも、神を愛せよ人を愛せよ基督に從へよと云ふ語は見るべきも、如何にせば神を愛し人を愛し基督に從ふに當るかと云ふことは各自の道德心が個々の事柄に就いて指し示す所によりて判知するの外なかるべし。バイブルの文言によりて、凡べて實際上の善事正行を判知せんとするも豈に爲し得べき事ならんや。バイブル豈にその如き重寶なる者ならんや。但だ神を愛し人を愛する精神又傾向を養ふの道具とはならん。然れども如何なることを爲すが一の場合に於て神人を愛するに當るかは、バイブルによりて知らるべき事にあらず。故に神に事へ其命を聽くと云ふも、要するに抽象の語なり。只だ神てふ觀念を以ては、實地の場合に何が正事善行なるかを判知するを得ず。耶蘇教に云ふ神てふ觀念を以て倫理道德の問題を解釋せんとするは爲し得べきことにあらず。正事善行とは何ぞやと問はゞ、神の命ずる所なりと答ふるならん。何が神の命ずる所なるかと問はゞ、至善至正の神たる故に正事善行を命ずと答ふるならん。要するに、價値なき循環の論に陷らざる可らず。耶蘇教家が神に聞けりと云ふことも實は其道德心に聞けるなり。是れ近來或人々が耶蘇教を評して道德的宗教と云ふ所以なり。神てふ觀念によりて道德上如何なる行爲の正善なるかを規定せんとするも遂に爲し得べからず。但だ既に如何かの行爲を正善なりと知り居らば、其後楯として神てふ觀念が耶蘇教家の心には働き來るなり、正事善行を爲すに當りて是れ神の命ずる所なりと念ふの動力が添はり來るなり。カントの語を假りて云はゞ、道德を神の命ずる所と見るなり。正善を爲すに當りて、神てふ觀念の後楯を有することが、孔子の道德說に天てふ觀念の存す

ると均しく、實際の徳行を喚起する上に如何なる效力を有するかは玆に論ぜず。又倫理學上その如き道徳説を如何に評すべきかも玆には云はず。兎に角耶蘇教には君父以外に神てふ者ありとて、直に之を以て君父を尊敬するの心と衝突するとは云ふ可らざること明なり。「若し我は神を愛すと言ひて其兄弟を憎む者は是れ謊者なり、既に見る所の兄弟を愛せずして未だ見ざる神をいかでか愛せんや」（約翰第一書四章二十節）。見ゆる君父を君父とせずして如何で神に事ふと云ふべけんや。故に國民としては國家の統一を重んじて其元首を敬することが、其國家にありての正事善行に缺く可らざる事と解せば、何ぞ耶蘇教に於て神を宇宙の至尊者と見ることが、國家の統一に反すと云ふべけんや。否な、その如き正事善行をこそ宇宙の至尊者なる神は爲せよと命ずるなれ。故に予は私見一束の中にも云へり、耶蘇教理その者を以て直に國家の統一に反すとは云ふ可らずと。（予は哲學上耶蘇教に云ふ如き神が宇宙を支配すと論じ得と云ふにはあらず、哲學上その如き神の有無を判ずるは、おのづから別論なり）。但し西洋の風俗慣習に深く浸染せる所の耶蘇教をば其儘我國に移し植ゑんとせば、種々の事柄に於て衝突を來すべきは固よりその所なり。然れどもこは獨り耶蘇教にのみ就いて云ふべきことにあらず、凡べて西洋の文物を輸入せんとするに當りてはその如き衝突あるべし。（耶蘇教なるものは獨り歐米に特殊なる風俗習慣に浸染せる底の者に限らざることは論ずるまでもなし、こは西洋ならぬユダヤに耶蘇教の起りし以來の歷史に通曉せる者の皆知れる所ならん）。

予が井上博士の論を見たる限りに於ては、バイブル中の文句を其前後の正當の關係より、其眞實の精神より引き離して、此れが忠孝に反す此れが敕語に反すと論ぜられたる所あるを見る。予は博士の爲に惜まずんばあらず。何となれば此の如きの論は淺薄の譏を免れざればなり。予は井上博士が「高等批評」なる者に目を閉ぢてバイブルの文句を論ぜられたるを深く惜む。予は「國民之友」に出でたる高橋五郎氏の駁論の調子には毫末も同情を表し得ざれども、井上博士がバイブルの文句のあちこちを引き捕へて之を論ぜられたる點に對する高橋氏の辯駁は有力なりと云はざる可らず。予は更に是等の點は論ぜざるべし。但だ若し耶蘇教には萬人皆神の前にて互に兄弟なりと說くを以て、其意は吾君父をも他國人をも如何なる點に於ても同一視するにあらざる可らずと論ずる如き者あらば、予は元良博士の語を假りて、其如き論者は共に「論ずるに足らず」と云はん。耶蘇教に云ふ愛は無差別の愛なりと云ふに就いても、予はその根據あるを見ず。バイブルの中には其云ふ愛は凡べての點に於て無差別なりとも有差別なりとも說きあるを見ず。父子君臣親戚他人を見ること毫も差別ある可らずと云ふ程に判然たる觀念にはあらず。唯だその云ふ愛は（予の見る所にては）他愛的性情を擴ぐるの傾向を代表せる者に外ならず。故に此傾向に反する者とは相反すること勿論なり。若し他愛的性情を擴ぐるに反對せば、一視同仁の佛の慈悲心を何とか云はん。

（六）今少しく他の論點より見ば、耶蘇教の精神と日本教育の精神との相衝突する所はなきか。元良博士は曰く「敎育と宗教は其精神に於て相反する者なり。宗教は各個人の自由に放任して心情の發達と共に漸々尨雜に進むべき也。修身教育は尨雜中に統一を求むるを以て其主眼とす。換言すれば宗教は個人的のもの教育は社會的の者なり。故に宗教と教育との衝突は個人と社會との衝突なり」と。若し元良博士の云はるゝ理由を以て宗教と教育とは衝突する者なりと云はゞ、是れ亦獨り耶蘇教にのみ限

れることにあらず、凡べて宗教と名けらるべき者は皆教育と衝突すべきなり。否な、宗教のみならず哲學も衝突すべし、詩歌も衝突すべし、何となれば哲學も詩歌も皆各個人の自由に放任すべき者なればなり、一社會を通じて同一の哲學を取れ同一の詩歌を嗜めとは命ず可らざればなり。且又若し一社會を通じて同一の宗教の行はれて一人として異りたる信仰を懷く者なき場合には、元良博士の論ぜらるゝ所は必ずしも當れりと云ふ可らず。中世紀に於て羅馬教會の歐洲に隆盛を極めし頃は、實に「一信仰一國家」と唱へしなり。予はその如き狀態の永く續くべきものなるか、又文明の進步と共に信教の一致はますます難くなりゆくべき者なるか否かに就いては玆に論ぜず、只だ如何なる場合に於ても如何なる社會に於ても、宗教と教育との必ず衝突すべしとは元良博士の云はるゝ理由を以ては論じ得ずと考ふ。然らば則ち衝突と云ふべきことは一切無き者なるか。豈に衝突のなからざらん。現に耶蘇教なる一宗教の我國に入り來りて種々の事柄に衝突し居るを見よ。豈に衝突のなからざらん。然れども其眞相を洗つて見ば、實は何と何との衝突なるか。

（明治二十六年六月發行「教育時論」第二九六號）

（其二）

（七）吾人の如く圓滿ならざる者の組織せる社會に於ては衝突の皆無ならんことを願ふも豈に事實上望み得べきことならんや。否な、反對の傾向の相摩して始めて社會は進步するにあらずや、吾人は事物の調和せんことを願ひ其不調和なるを嫌ふ、故に衝突の存する限りは之を除いて以て衝突の存せざりし以前に勝れる所の深大なる一致を求めんとす、貧相なる一致に代ふるに富贍なる一致を以てせんとす、卽ち多くの反對の傾向の妙に相融會せられたる所の一致を渴望す。然れども有りとあらゆる傾向の全く相融會したる窮極の一致は、吾人の現實に達し得べき所に非ず。吾人の現實の生活は一狀態より他の狀態へ昇りゆく不休の活動に外ならず。スペンサー氏も云へる如く、吾人の知識の範圍の擴がるに從ひ其周邊の觸るゝ所の未知の區域も擴がるべし。傖父野人は知ることも少き代りに、知らずと思ふことも少かるべし。反對の傾向を融會せしむるは更に深大なる反對の傾向を發見するの段階となる。高等なる調和（殊に其調和の眞味）は衝突を通過して始めて得らるゝ者なるが如し。衝突は調和を生み、調和は更に衝突を孕む。ヘーゲルをして言はしめば、矛盾が是れ理性の進步の動力なりと云はん、理性の妙義は矛盾によりて動かされつゝ演じ出さるゝ所の全法界の進化の道行に現はると云はん。衝突は或意味にては厭はしき者なれども、又厭ふ可らざる者たる所以を知るべし。

元良博士は曰く、人の精神は論理器械に非ず、所謂活物にして論理的矛盾に超越したる者なり、論理的矛盾恐るゝに足らず、兩者を善く調和せしむるは裁智の作用による者にして、苟しくも裁智を有する人焉ぞ其調和に汲々として成し能はざる所に論理的調和を求むるを須ゐんやと。察するに、元良博士の意は一社會一國家に於て幾多の反對の傾向の衝突することは免れず、否な、其如き衝突は決して恐るゝに足らず、國家なる者は宜しく其如き衝突を包含許容して但だ國民精神の裁智的作用を以て調和的活動を爲すを要すと云ふにあるが如し。予は元良博士の云ふ國民精神の裁智的作用の何たるを明にせず。然れども若し博士の主張さるゝ所は、我國に於て幾多の（例へば耶蘇教的傾向と他の傾向との）衝突の起るに際し、猥りに其一方をのみ排斥せずして宜しく反對の傾向

をも相融會せしめたる富贍なる一致を圖るべしとの意ならば、予は博士に同意を表するに躊躇せざるべし。若し右の如き意ならば、是れ耶蘇教なる者が我國家の成立に矛盾すとの論にあらずして、但だ其國家の包含許容すべき他の傾向と相衝突すとの意に外ならず。而して其如き反對の傾向と共に耶蘇教も均しく我國家に包含許容さるべき者たるなり。

元良博士の意は正に斯の如くならんと信ず。甲乙二個の傾向は相衝突するも、共に均しく國家の中に包含さるべき者ならば、衝突は其傾向の一方と國家との間に存するに非ずして、但だ甲と乙との間に存するなり。國家は宜しく雙方の傾向を包含して、其相互の衝突研磨によりて、みづから益し、みづから進む如き富贍なる活動を有する者ならざる可らず。斯かる活動を有せずして、但だ一方の傾向にのみ自らを合體せしむるによりて始めて己が命脈を保ち得る如き單調子なる殺風景なる貧相なる國家ならば、其將來は決して多望なりと云ふ能はず。我國家をしてその如き者たらしめんとするは、是れ決して其隆盛を圖るの道にあらざる也。

一社會の包含する反對の傾向の相衝突する時には、其衝突の犧牲となる者なきを得ず。其如き犧牲の流す所の血によりて、其社會なる活物は培養せらるゝに非ずや。ソクラテスも犧牲となれり、耶蘇も犧牲となれり。人類の歷史は實にその如き悲劇を演じ來りたる又將來にも演ずべき者に非ずや。啻に一國家の安く包含すべき(故に其國家に對しては毫も撞着せざる)幾多の傾向の相衝突することのあるのみならず、また時には其國家全體の一時代に於けるの狀態と或傾向とが相衝突することなきにあらず、而して其如き傾向をも一概に有害なりとて排斥すべきにあらず。其當時の國家は實に之を排斥するに相違なし、之に負はしむるに亡國不忠等樣々の惡名を以てすべし。然れども其國家の永久の利福と進歩との上より見れば、一旦は其傾向の之と(卽ち其一時代に於けるの國家と)相衝突する事あるを要す。其時代の國家の狀態と相衝突する者なるが故に、其如き傾向を代表する人々は其國家の爲に排斥せられざる可らず。彼等は此が爲に其生命を棄つるに至るべし。國家は國家としては彼等を亡さざる可らず。其國家を刺激して當時の狀態を脫せしめんが爲には、彼等は其國家の爲に亡されざる可らず。彼等の云ふことを一時に、急激に、直に聽かば、變動の過大なる、遂に其國家の存立を危うすることあるべし。故に彼等は當時の國家に對しては矛盾する位地に立てる者と云はざる可らず。然れども彼等の憤激猛進するなくんば、國家は長く其舊陋なる狀態に遲々として、一時の安寧を買はんが爲に遂に千歲の大患を釀すに至るべし。此大患を除かんには、彼等は當時の國家に衝突せざる可らず、故に彼等は國家の爲に亡されざる可らず、國家は國家の爲に彼等を亡さざる可らず、彼等は其時代に於ける社會の不平家なり、當時より見て治安を妨害すと謂はるゝ如き者なり、又實に當時に取りては治安を妨害する者たるなり。故に彼等は囹獄に繫がれざる可らず、遂には水火を踏んで死せざる可らず。當時の國家は彼等を窘迫するの義務あり、彼等は當時の國家に窘迫せらるゝの義務を有す。窘迫するも、窘迫せらるゝも、共に均しく人間社會の進歩の上に於ける約束也。是れ人生の最大悲劇ならずや。彼等は當時の社會に在りては最も忌むべきの汚名を擔うて地下に入る。彼等死後の社會は彼等を尊崇して、或は先覺者と名け或は偉人と名け、或は志士と名く。己が祖先の殺したる先覺者の爲に國民は靑空に聳ゆる頌德碑を樹つるにあらずや。人間

の社會は斯の如き者なるが故に志士をして苦心多からしむる也。何故に吾人の社會の進歩は斯の如き高價を以て買はるべき者なるかは、哲學者の頭腦を勞すべき大問題ならん。然れども其何故に然るかに拘らず、其事たるや人生の大事實なり。

（八）前段陳ぶるが如き衝突は、詮ずれば、何と何との衝突なるか。是れ人の常に口にする所の保守と進取との衝突にあらずして何ぞや、惰性と動性との撞着にあらずして何ぞや。而して一國家一社會の眞個の福利（其の存在の目的）は保守と進取、惰性と動性との宜しき釣合を保つによりて得らるべきなり。一社會が一狀態を取りし以上は、其の狀態に靜止するの惰性なかる可らず。然れども活物なる吾人の組織する社會は又永久に一狀態に靜止すべき者にあらず、變化せざる可らず、生長せざる可らず。何の點に於て何程に變化するが正當なるかは時によりて異るべし。但だ靜止と變化との傾向の互に時に取りての宜しき釣合を保つを要することは何人も爭はざる所ならん。斯の如くに言ひ表はしたる眞理は偏頗なき眞理ならん。然れどもこは抽象の眞理に過ぎず、此眞理に實地問題の衣を着けしめんとする時には人によりて其見る所を異にす。蓋し如何なる釣合が當時に取りて最も宜しきかと云ふことに問題の解答の懸ればなり。而して此點に於ては人によりて其意見を異にすべし。進取主義を取る者と雖も、適當なる程は保守の傾向をも許容すべしと云はざる可らず。蓋し一狀態に達せば、その狀態を維持するの性能なくては進取と曰ふことそれ自身が出來可らざるものとなればなり。保守なき進取は恰も記憶なくして物を知らんとするが如くなるべし。然れども適當なる程と云ふことの實際何の處にあるかが實地問題の懸れる點なり。進取主義を取る者は進取に重きを置くを以て時務に適切なる者となす。保守の傾向を取る者も全然進歩を拒否するを得ざるべし、但だ保守に重きを置くを以て當世の務となすなり。然るに當世に最も適切なる方策は其實二途あるにあらず、但だその完全なる方策を一人にして完全に看取することの難きが故に、相異る人々が相異る方面を見て相摩し相補はざる可らず。眞理は唯一なり、然れども吾人の限り有る心には散裂して映じ來る。散裂するが故に、衝突なきを得ず。吾人の識見は到底完全を期す可らず、然れども一社會の一員として生れたる以上は（又特に其社會の中層若しくは上層に位する以上は）何の邊にか我見處を定めて以て當時に盡す所なかるべからず。斯くせざれば社會の活動は停止すべければなり。而して何の邊かに我見處を定めば、他人の見處と衝突する事のあるは素より覺悟の上ならざる可らず。八方美人たらんとするは、遂に八方醜婦たるに終らずや。是に於てか世に保守と進取との衝突の遂に其跡を絕つことなき所以を知る。

（九）現今我國に耶蘇教の入り來りて種々の事柄に衝突し居るは、詮ずれば、進取と保守との衝突に非ずや。耶蘇教に說く所の新觀念を我人心に注入せんとするは、是れ進んで新しきを取る者、即ち進取の傾向にあらずや。耶蘇教は我國古來の風習を破壞する者なりとて之が浸入を拒まんとするは、是れ（此點に於ては）保守にあらずして何ぞや、故に予は云ふ、今日の所謂衝突は宗教上の事柄又それより曳き來る他の凡べての事柄）に於ける進取と保守との衝突なりと。耶蘇教が我國家に對する若しくは我國家の教育に對する衝突と云ふよりも、寧ろ我國家內の一傾向（即ち教育等に於ける保守主義）に對する衝突と云ふを當れりとす。今日に於ては耶蘇教は進取主義の旗幟を飜せり、然れど

も今佛教家が耶蘇教家に對して保守主義を取る如くに、耶蘇教家も亦他日我國に於て新觀念の注入に反對する保守傾向を取ることなしと云ふを保證し得んや。（佛教が始めて我國に入り來りし時に於ては佛教家は進取主義の代表者たりしと云はるべし）。耶蘇教なる者は何の時代に於ても進取主義を取る者なりとまでは（今日我國の耶蘇教家は多くは斯く云はんと欲するかは知らざれども）予は云ふべき所以を發見せざるなり。夫れ進取主義なる者が一時代に於ける一國家に對して矛盾するの位地に立つことなきにあらず。然れども今日の我國家は宜しく保守と進取との兩主義を其自體內に包含許容する者たらざる可らず。是れ我國家をして最も健全なる最も高尚なる生活を遂げしむるの途たればなり。國家なる者は如何なる場合に於ても進歩的傾向と衝突すべき者なりと云ふべき所以はあらざるなり。而して耶蘇教理なる者が我國家の今日の成立と相衝突する者にあらざることは、予の曩に論じたるが如し。然らば耶蘇教が今日に於て進取的傾向と相結び來れりとて、此を以て直に我國家又我教育に衝突すとは云ふ可らず。但だ我國家又我教育を保守主義の上より見んとする人々の傾向と相衝突すと云ふべきなり。

若し耶蘇教が我國の古來の風習を打破せば、是れ卽ち我國家的教育の主義と衝突する者にあらずやと云ふ論者もあらん。然れども我國の古來の風習とし云へば一も二もなく之を打破することを以て耶蘇教理の耶蘇教理たる所なりと云ふが如きは、固より妄論の甚しきものなり。耶蘇教なる者が新觀念を注入して我人心に變動を來すと共に、また遂に我國家のものと化す可らざるの理由何處にある、耶蘇教は全然我國家と相容る可らざる者也と斷ずるは、要するに耶蘇教に對して宗旨敵の位地に立つ輩の論のみ。予は二三年前、我國の耶蘇教會內に於ける傾向を論じて、現に我國の耶蘇教を日本的耶蘇教たらしめんと力むる者あるに同情を表したり（「六合雜誌」第百十九號を見よ）。我國の從來の經歷に毫も頓着する所なくして新觀念を注入せんとしたればとて、容易に爲し得べきことにあらず、又爲し得しとて眞に我國を益するの途にあらず。新知識を與へんには、之を舊知識に聯絡せしめざる可らざることは、教育學上動かす可らざる眞理なり。今迄の經歷を地盤とせずして新觀念を植ゑ附けんとするは、是れ吾人の心性の理法を知らざるの致す所たり。然れども亦新觀念を注入して從來の觀念に毫も變動の起らざらんことを望むは、愚昧の論たるを免れず。新觀念は舊觀念に受け容れらるゝと共に、その受け容るゝ舊觀念に變動を起す。受け容れらるゝ觀念は受け容るゝ觀念に化せらるゝ所あると共に、又受け容るゝ觀念を化する所あり。是れ能受觀念の團體と所受觀念の團體との關係なり、耶蘇教に於ける新思想新精神を我國の人心に注入せんとするに於ても亦斯の如くならざる可らず。耶蘇教は日本化すると共に日本を化せざる可らず。然らずんば之を注入するも何の益かあらん。然れども耶蘇教は何程に日本化すべく又何程に日本を化すべき者なるかに就いては、異論なくんばあらず。是れ保守的傾向と進取的傾向の相分るゝ所たり。此點に就いては耶蘇教家の中にもまた保守と進取との區別を生ずべし。然れども兎に角耶蘇教は日本を化せんとすると共に（全然我從來の文物を破壞して國家の存在に危險なる急劇の變動を來さんと欲するにあらずして）亦日本化すべきものなりと說く以上は、その保守たり進取たるに拘らず、我今日の國家は之を安らかに其自體內に宿すべき者なることは明ならん。予が此文に於て論明せんと欲する所は此點にあり。

此點を論明し得ば、予が目的は達せりと云ひつべし。

予は但だ茲に一言せん。右の如き立脚地を取りて耶蘇教を我國に注入せば、是れ益ありて害なきことを信ずるなり。耶蘇教は我民心に附與すべき新元氣新精神を有すと考ふる也。是れ予が全然耶蘇教を嫌ふ者と意見を異にする所なり、予は耶蘇教家が動もすれば吹聴するが如くに、其教を以て萬金丹的效能のある者とは思はず。其教をさへ布かば萬事終れりとは考ふる能はず。其教とても要するに人心を維持涵養する一勢力たるに過ぎず。然れども予の見る所にては今日我國は此勢力を宜しきに用ゐざる可らざるの位地に立てり。佛教をしてそれ自身の成行に放任せば、以て我國の精神的發達を完うし得べきか。予は如何にしても其如くには考ふる能はず、僧侶輩は、若し彼等の宗教に拮抗する大宗教なくば、復前日の放逸と無氣力と腐敗とに陷るべし。彼等は耶蘇教の浸入に遭うて、漸く其惰眠を醒し、今日少しく自家の腐敗を洗除するの必要を感じたりしにあらずや。且又今にして假令耶蘇教を我國に於て撲滅せんと努むるも、豈に爲し得べきことならんや。事實はその如き愚策の行ふべからざるを證せん。寧ろ耶蘇教を容れて、之を同化するの勝れるに如かず。之を同化し得ざる程の胃弱の國民は、縱令耶蘇教及其他のものの浸入するなくも、其將來は甚だ多望なりと云ふ可らず。斯の如き胃弱的收縮策を取るは、是れわざと自らを弱うする者にあらずや。是れ決して進歩の氣運に向へる我國今日の良策にあらざるなり。予は耶蘇教と佛教との混合より生ずる宗教的現象にも頗る注意を置く者なり。予はハルトマンが將來の宗教は耶佛兩教の和合より來らざる可らずと論ずるは意味なきことにはあらずと考ふ。有效なる一宗教的勢力たらんには佛教は佛教たらざる可らず、耶蘇教は耶蘇教たらざる可らずと云ふべき所以を發見せず。予は一見微弱なる如き、而して耶蘇教家よりも佛教家よりも熱き同情を表せられざる、宗教的現象を輕視す可らずと考ふ。兎に角我國の將來をして全然一宗教の支配下に立たしめんことは、到底望むべくして行はる可らざる所なるが如し。一宗教を奉ずる者は其宗教の下に全國民を住まはしめんと力むべきは勿論なれども、實際は佛教耶蘇教又其兩者の衝突若しくは和合より生ずる新宗教的現象等の相研磨して始めて各自健全なるを得べきにあらずや。相磨するが故に、到底宗教界は四海波靜かなりと謠ふを得ざるべし。然れども豈に强ひて波靜かなるを願はんや。佛教なる一宗教に我國の將來を託せんとするばかりの愚策はあらずと考ふ。

（十）予は序でに今少しく云ふべきことあり。近來教育敕語を說明して、其道德主義は斯く斯くなり、其倫理的根據は云々なりと、サモ誇り顏に唱ふる者あるを聞く。予は其如き論旨の非なることを本誌第二百八十四號に掲げたる私見一束の中に辯じ置けり。後に三宅雄次郎氏が哲學雜誌第七十五號に文學博士井上哲次郎氏の敕語衍義を駁せらるゝを見るに、井上博士が敕語に就いて其「何故」を解し得て古人に一歩を進めたりと公言せらるゝを、痛く非難せられたり。敕語の「何故」を論ずるは、三宅氏の云はるゝ如く容易ならぬことなり。天子に代りて倫理を講ずる者なり。寧ろ我倫理說として世に出すの穩當なるに如かず。故に予は私見一束の中に云へり、「假令全く註釋を附するの必要は無しと云ふにはあらざるも、可成手近き解釋に止めて、倫理說上根本の所に迄は論じ及ぼさざるが、却て敕語の趣旨にかなふ者ならんと考ふ、要は專ら實例に照して以て實行を勵ましむるにあり」と。其後又本誌第二百九十二號を

讀むに澤柳政太郎氏も大日本教育會に於て此點に就いて井上博士を難ぜられたるを見る。本誌の報道に曰く「勅語の德行に就き何故に某の行爲(例へば忠孝の如し)が德行と稱すべきや其理由を說くは却て勅語の旨に戾る者なり、然るに井上文學博士の勅語衍義は、是を以て得意とするは誤謬なりとて、井上博士を駁したり」と。予は井上博士の勅語衍義を讀まず、故に予が嚮に私見一束を草したる時には、殊更に井上博士を駁せんと欲したるにはあらず。然るに澤柳氏並に三宅氏の云はるゝ所によりて考ふるに、予は此點に於ては井上博士と爭はざるを得ず。井上博士を難ぜざるを得ず。予は澤柳氏並に三宅氏に同意を表する者なり。

(明治二十六年七月發行「教育時論」第二九六號)

宗教の究極的證據

去(明治三十年)六月二十日發兌の英文國民之友「極東」にアーサー・ロイド氏の筆になれる一文を載す其の趣意とする所日本國民に基督教を提出するの道奈何を論ずるにあり(The Presentation of Christianity to Japan)基督教がまさに如何程の理由を以て我國に宣傳せらるべきかを論ずるもの此のロイド氏の文の如く偏僻の少なきは稀なりロイド氏は素より教役者たる資格を有し一般宣教師等と共に基督教の我が日本に傳布せられんことを熱望する一人なるが而も其の所論尋常一樣の宣教師の口より予輩のしばしば聞く所とは其の趣を異にせるものあり己れが奉ずる宗門を如何に他人に提出すべき奈何なる證據を以て之れを宣傳すべきと云ふことの如きは之れを言ふ者大抵我が田へ水を引くの誹を免れず從つて他を首肯せしむるに足るものの稀なるが常なれどロイド氏の論の如きは先づ最も此の弊の少なきもの慥かに一讀を價すと思惟するを以て玆に其の趣意を紹介し而して之れに關する予輩の意見をも附せんとす

ロイド氏は先づ日本人が決して宗教心に乏しきものに非ざるを論じ此の故に元來宗教に冷淡なる人民なりと云ふことを以て日本人間基督教傳道の遲々として進まざるの理由と爲す可らざるを言ひ而して其の理由は其の教が斯國民に提出さるゝの仕方に在るべきかと問ひ起せりロイド氏以爲らく基督教の日本人に提出さるゝや獨り所謂宣教師等の說教に於いてするのみならず歐米より渡來する文學は皆其の道とならざるは無く又日本人が歐米に渡行して或は其の大學に遊び或は其の家庭に勞働する是れ皆基督教を日本人に提出する所以の道にあらざるは無し此等の種々なる經驗が寧ろ斯國民に基督教を提出することに於ける最大要素を爲すと云ふも必ずしも過言にあらざるべしと

さらば基督教は如何なるものとして斯國民に提出さるるぞロイド氏曰く之れを提出するものの思ひ思ひに因りて其の道一ならず或は專ら基督教を以て道德上の事として基督の德性を稱揚し使徒等の道德的教訓を稱讚することに力を用ふ惟ふに其の道德的教訓には佛者も儒者も必ずしも反抗を呈すること無かるべけれど彼等は必ずや問うて道德的教訓として佛教及び儒教に全く存在せざるものの如何程基督教に在りやと云はん道德上の教訓を陳列し而して之れを以て基督教を傳播せん十分の理由となさんは難し或は基督教を其の哲學的方面より視而して神學上の議論を根據として其の教を證せんとす然れども實際不信者に向つて神の存在を論證せんことの如何に難かるべきかは自ら試みて之れを知るべし佛學者は其の哲學を主張せん爲に多くの議論を提出するを得基督教家が日本を教化せんには哲學的理論に優るものを以てせざる可らず或は基督教の歷史的方面を根據とし教會の歷史を以て其が證憑となさんとす然れども是れ佛教家又は回々教家の等しく爲すところ殊に日本人に取りては其の自ら經過したる自國の歷史より得たるものの方歐洲國民の又は基督教會の如何なる時代の歷史よりも趣味あるべく效力あるべし若し歷史と哲學と道德とを併用せば玆に基督教の信仰の爲に頗る堅固なる基礎を形づくり得んも尙以て日本を教化するには足らざるべし此等假令證據となるも畢竟唯學問ある人々

に對してのみ效力あるべし基督教を提出するに他の道あり其の超自然的方面を以てする是れなり其の道德其の哲學其の歴史と共に其の超自然的方面を提出せずば未だ十分に耶蘇基督の價値を世に發揚したりと云ふ可らず然れども超自然と云ふに二種あり一は過去に於けるもの一は現在に於けるもの是れ也過去に於ける超自然とは基督の化現其の奇蹟其の復活等凡て「正說」（オルソドキシー）を守ると謂はるる基督教徒が其の信仰個條として奉ずる所のものを謂ふ然れども此の種の超自然は實際若し現在に於ける超自然即ち現に我等の中に神の手の働けるものあるを證明せざる限りは多く其の效力を有するものに非ず唯其等をのみ提出するは畢竟死せる正說を說くに外ならずブシュネルの論じたる如く現在に於いて超自然なる事柄の起るを信ぜざるの結果は遂に過去に於いて其の如き事柄の起りしを否むに至らざる可らず凡そ人不思議なる事柄を事實として信ずるの度は其の事柄が時を隔つるに從うて減却すべし所謂過去に於ける超自然を承認することは現在に於けるものを承認するに依りて懸る若し基督教會に於いて現在超自然の事の行はれずば其の過去に於けるものを說くも畢竟無益なるべし現在に於ける超自然とは現實教會にある者が其の中に靈なる見るべからざる力の働けることを其の品性と所業とによりて證するを謂ふと斯く論じてロイド氏は其の一例として露西亞の一僧セルギエフ（Sergieff）を擧げたりセルギエフの行く所民衆之れを圍繞して其の祝禱を得んことを求め其の面を仰ぎ其の聲を聞くや彼等は一種異常の力を授かりたるが如く艱める者の其の艱みを忘れ病める者の其の病を癒さるること甚だ多しと云ふ

予輩はロイド氏の論を以て條理頗る明瞭なりと云ふに躊躇せず若し基督教にして眞實廣く我が國民を教化し得ば其の依て以て力あるの證據は畢竟ずるにロイド氏の謂ふ所の外に出でざるべし宗教の感化の廣く民衆の間に行はれたりしは凡そ斯くして行はれたりしなり他の證據は寧ろ附屬物たるの位置にあり啻に基督教のみならずロイド氏の云へる如く凡べての宗教の究極的證據は之れに外ならじ然れども予輩のここに問はんと欲することは斯かる現在の證據は唯基督教にのみ限れるものなるかと云ふことなり若し現在に於ける超自然は唯基督教會にのみありて他になしと云ふ意味にて其の證據を說き而して之れを以て基督教を證せんとせばこはロイド氏が單に道德又は哲學又は歴史を以て基督教を證することを難事とせると少なくも同じ程の難事なるべしロイド氏は固く神の働きは國民的區劃を以て區劃せられずと予輩はロイド氏の此の言の意を以て予輩の謂ふ所と同じき意味に解すべきか否かを知らず唯予輩の見る所にてはロイド氏の揭げたるセルギエフの例の如きを以て基督教會にのみ限れるものと思ふ能はず近くは我が國に於ける黑住宗忠の性行及び事蹟の如き畢竟は同種類に屬すべき者ならずや若し一を以て眞とし他を以て僞とせば是れ遂に我が田へ水を引くの譏を免れじ現在に於ける超自然を以て基督教の證據となすを許したる上にて再び遡り來る問題は他の一切の宗教に全く無き如何なるものを基督教は能く與ふるぞと云ふことなり基督教に在る道德的教訓は頗る美なれども是れ亦佛教及び儒教の有する所なりと答ふる者ある如くに現在の超自然は基督教の證據となるべしと雖も佛教も亦同じ證據を有すと云ふ者あらば如何に歸すべき詰まる所團栗の丈くらべとなるに非ずや予輩は遂に基督教も亦人類に於ける宗教的進化の一段階一現象たるに外ならずと云ふ結論を免るゝ能はず若しロイド氏の此の論旨が獨り基督教を他の宗教的現

象の列より拔いて之れを絕對的に完全なるものと爲さん目的を有するならば余輩は其の論を失敗せりと云ふに躊躇せず

ロイド氏が現在に於ける超自然の一例として揭げたるセルギエフの性行の如きは予輩の見を以てすれば決して珍しきことにあらず又必ずしも自然以外の事と云ふを要せず寧ろ斯かる事は如何なる時にも如何なる處にも宗教界に一大人物の起る毎にしばしば行はるゝものにして恰も美術的天才の所作の自然なるが如くに自然なり美術的天才の所作に驚くべきものあるが如く宗教的天才の行ふ所にも亦驚くに堪へたるものありと雖も是れ畢竟自然の所爲（Nature's work）の一部分なりと見て何の不可かある予輩は斯かる事件のあるを否みて自然界を云ふことの狹きに過ぐるを思ふと共に又特に斯かる事件を超自然と云ふの必要を見ず予輩は斯かる事件の現實生起することを否まざると共に之れを以て到底自然科學の說明し得べからざる所となすの理由を認めず生理上及び心理上セルギエフの事蹟の如きを說明し得べからずと云ふ必要なし自然科學的說明を與へ得るか否かが宗教的天才の所業の價値を增減せざるは恰も其れが美術的天才の所作の價値に係はる所なきが如し

予輩はロイド氏の云ふ如き現在の證據を以て豫め何々教に限れりと云ふべき理由を見ず何教にても可なり若し之れを現はさば予輩はそれに從はん我が國民はそれに從はん所詮宗教的人物の出づるか否かが其の教の生死を決すべし法は人によりて重しとは蓋し是れをいふ也

（明治三十年七月發行「六合雜誌」第一九九號）

和歌に宗教なし

断巖絶壁の上に位したるホイットビーの寺院にありて下に激浪の響、聞き天涯遥にジョルマン洋を打眺めつゝ昔彼のケドモンがイギリス最古の詩を綴りて天地の由來を歌ひイスラエル人の史事を詠じたりしより近世ウォルヅウォルス、テニソンの高雅美妙なる詩歌に至るまで分明に其間を貫ける一線あり宗教的の思想即ち是なり一著述家あり其著書なる英國文學小史に曰く英國文學の衰頽するや必ず詩歌に再興す而して其再興當初の詩歌は必ず宗教に關するものなりと是れ苟しくも英國文學史を通讀したる者の皆許容する所ならん今試に我國在來の和歌を英詩の傍に置き見るに予輩は和歌に宗教あるなしとの不快の辭を發せざるを得ず『古事記』『日本紀』の古歌より近世最も愛すべき香川景樹流の和歌に至るまで其中幾何か宗教的の思想ある固より萬葉以前古代の和歌に於ては神を祭れる歌なきにあらず又八代集中神祇歌てふものなきにあらず然れどもそれらの神祇歌中宗教心を養ふに足るものゝあるか、試に新古今集、神祇歌の部を開き見よ先づ如何なる歌をか見る其最初の歌に曰く「知るらめやけふの子の日の姫小松おひむ末まで榮ゆべしとは」此歌の意に如何なる宗教心の分子を含める予は如何に之を分析しても一片の宗教思想らしきものだに發見する能はざる也『後拾遺集』『千載集』の神祇歌亦おしなべて此の如きものなり且つ神祇歌の外にも神の事をば插める歌なきにあらずされどそれらも神祇歌と異りたる所なく剩さへ中には吾人が感情を害ふ歌などもあり例へば『古今集』の歌に

　手向にはつゞりの袖も衣るべきに紅葉にあける神やかへさむ

とあるを讀む毎に其所謂神に關する思想の子供らしきをかしく思はずばあらず此の如き歌は眞實宗教心に出でたるものにあらず只だおもしろをかしき歌人の想像を陳べたるのみ又『後撰集』に女の男を厭ひてさすがにいかゞ覺えけんいへりけると頭書きせる歌に

　千早振神にもあらぬ我中の雲ゐ遙になりもゆくかな

とよめり此歌に引ける鳴神のみならず凡べて如何なる神をも忝なき事に引事するが和歌の常なり甚しきに至りては神垣にかけたる我戀の願し若し成らずば神もあるの甲斐なしとまで歌へるもあり此の如き歌を讀みて敬神の念を起す者焉にある

人或は曰はん我等が祖先は百八萬の神を拜みし者なりされば和歌に於ける神の思想の子供らしきは毫も異しむに足らずと此説固より一理あり然れども我國人從來の神の思想の卑しくして且つ子供らしきに限りたるにあらず中には隨分高尚なるもののなきにもあらず例へば左に引用する語の如きは其宗教的の思想を含有する事遙に佛教の上に出でたりと謂ふを得べし

玉勝間に曰く

上は位高く一國一郡をもしりて、多くの人を從へ、世の人に敬はれ萬ゆたかに樂くてすぐし、下はうゑえに食ひ、寒からず着、安く居る、これ皆君のめぐみ、先祖の惠、父母のめぐみなる事はさるものにて其本を尋ぬれば件の事どもよりはじめ、世にありとある諸々の事みな、神のみたまにあらずと云ふ事なし、然れば世にあらん人、神を尊までばえあらぬ事なるを、平日にな

りぬる事はさしも心にとめず、忘れ居るたらひにて、君の恵先祖の恵をもさしも思はず、固より神のみたまなる事は皆わすれはてゝ、思ひもやらぬはいと／＼かしこくあるまじき事なり、然るを世の人さることをば知らず思はず、神をばたゞよそげに思ひ奉りて、たま／＼さしあたりて祈る事などかなはねば、その神をうらみ奉りなどするは、いと／＼かたじけなき事なり、生れいづるより死ぬるまで神の惠のうちに居りながら、いさゝか心にかなはぬ事ありとても、之を怨み奉るべき事かは、又祈る事聞き給はねば、神は偸みてやくなき者のごと思ひなすは如何なる事ぞや

又玉匣別本に曰く

神事に物入多きは無益の費のやうに心得る者もあるは皆甚しき僻事なり、何事も神の御恵御守あらでは世によき事はなし、困窮して苦しくばいよ／＼神をば厚く祭るべきなり、又神事に風流俳優抔をなし或は酒を飲み樂しみ遊ぶを無益なる事と思ふも大に僻事なり、神に物を供じて祭るのみならず、人も同じく飲食し面白く賑はしく樂しみ遊ぶを神は悅び給ふ事なり

右の言を吐露せしは固より希有の達見家なる本居宣長にしあれどもその如き思想は彼一人の腦中にのみ浮び出でしにもあらざるべしせめてそれ程の思想なりとも和歌にあらばと思へどもそれさへも見當らず故に吾人は斷言して曰ふ我國古來の神道は和歌に宗教の生命を吹き入るゝの力なかりきと

佛教の和歌に及ぼしゝ影響は如何其影響太だ大なりされど其大なる影響も殆ど一言にして盡すを得曰く人世のあぢきなきを悟り之を厭ひ脫るゝの一思想是なり此思想は萬葉時代の和歌より降りて近世の和歌に至るまで飽ける上にも尙遭遇する處にして吾人は殆ど其思想をば厭ひ脫れんと欲するばかりなり『古今集』卷の十八の如きは右佛法の思想を以て充滿せりと謂つべし尤も其卷中には秀逸の歌少からず吾人はそれらを愛吟すれども古今以後の撰集には右に類する歌のうち見るべきもの至つて少し試に『千載集』釋教歌の部を開き見るに其最初の歌に

こゝに消えかしこに結ぶ水の泡の浮世に
めぐる身にこそありけれ

『後拾遺集』『新古今集』中釋教の歌少からねども右の一首を讀まば餘は推して知るを得べしされば佛法の和歌に注射せし唯一の思想は何程我國人の宗教心を養ひたる予は其思想をば宗教的の思想といひて可なるかをも疑ふ佛教的の和歌は之を讀む者をして佛に歸依せしめ涅槃を樂しむる力ある乎吾人は太だ之を疑ふ彼の佛教的厭世の思想は何程我國人の元氣を養ひたる吾人は其思想の却て我國人を不活潑にせしめしにはあらざるかを疑ふ悠々閑々日月を消費したる彼の俳優輩の手ずさみとなりしが爲に和歌は幾何の高尙美妙なる思想を得たる吾人は其甚だ少きを恐る吾人は斷言して曰ふ佛教は力ある宗教的の思想をば和歌に注瀉することを得ざりきと

今試に印度の詩歌をもて和歌に比較する時は其間に大なる差異あるを見るべし和歌に宗教なしと謂ふも決して過言にあらざるを知るべし

左に載せたる歌は印度の南部に住めるタミル民族の國風（フォークソング）とも謂ふべきものなり

一、吾神は刻める石にあらず、白き光ある大理石にもあらず、また磨き潔めたる青銅の像にもあらず

二、吾は此等を拜する能はず、吾は金の

光ある神の御足をば吾心に置く者なり、吾は之を榮譽とす

三、吾若し神を我物とせば、他に何を求めんや、我神は在さゞる處なく、人の言の中、人の言の外、いづこにも神は常に在すなり

四、聖き書のうちに、闇き夜のうちに、茫々たる空のうちに、眞理を知れる人のうちに、世間少き誠實の者のうちに、

五、總て此等のもののうちに、神は在し給ふなり、神は如何でか石や銅の像となり給ふべき(以下略)

又左の一歌も同種類のものなり

神は一にして凡べてを含めり、無極なる神、如何でか我等が外形の祈禱と讃美を受け給はん、爾若し彼を拜せんならば、爾の心を揭げ、靈もて彼に事ふべし、或者は身を屈め若しは地に平伏して、苦心の中に日々を過すめり、彼等は珠數をくりつゝ祈禱をなし、或はしば〳〵香經し、或は神殿に奉納物を獻ぐれども、是れ何の益かある、外物一も益するなし、若し外物にたよりなば却て害物の便とならん、若し内心を顧みば生命と無限の幸福は必ず爾の物とぞならん(以下略)

（チォールス・イー・ゴーヴォル氏英譯『ゼ、ファーク、ソングス、オヴ、ソヾルン、インデア』より譯出、譯文は力めて英文の儘を保存せり）

右の歌は明に汎神敎的の思想を歌へるものなるが是れ印度人の常なり其の思想の高倘なる且宗敎的なるは其東北なる隣國人の企て及ぶ所にあらず和歌又支那の詩に之と匹敵するものある乎

和歌は宗敎的ならぬのみならず哲學の思想にも太だ乏し是れ其著しく支那の詩に劣れる一點なり例へば左の如き高倘なる風韻と思想とは和歌中絕えて見ざる所なり

閑來無事不從容　睡覺東窓日已紅
萬物靜觀皆自得　四時佳興與人同
道通天地有形外　思入風雲變態中
富貴不淫貧賤樂　男兒到此是豪雄

又左の一首は著し佛說の影響をうけたる者なるが亦決して凡調にあらず

人生無根蔕　飄如陌上塵
分散逐風轉　此已非常身
落地爲兄弟　何必骨肉親
得歡當作樂　斗酒聚比鄰
盛年不重來　一日難再晨
及時當勉勵　歲月不待人

吾人は左に載する。古今集の一首を以て和歌中最も哲學的なるものと思惟す

世の中は夢かうつゝか現ともゆめとも知らず有りてなければ

此歌は吾人をして彼の希臘の哲學者ヘラクライトスが萬事萬物死生の間にさまよひ有無の間に徘徊すと云ひたるを思ひ出さしむ

和歌の宗敎的ならず且哲學的ならぬ事略ぼ既に論じたるが如し和歌の云ふ所は月をあはれ花をあはれ戀しき人を戀しといふ外殆ど他に何もあらざるが如し和歌の中心骨子とも稱すべきものはあはれといふ一の思想に過ぎざるべし此一あはれてふ思想は如何なるものなるか說明し易からねども試に之を分析せば二個の分子あるを見る曰く美を愛するの分子曰く美のうつろひ易きを歎くの分子是なり水月花卉鳥獸各ゝ其美あり萬物に長たる人間また太だ美はし此の如

く天地萬物皆美なりと雖も其美は一も永存するものにあらず「うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見し間にかつ散りにけり」とはよく事物の榮枯盛衰の樣を詠じたるものなり我國の歌人は此あはれてふ感情を以て天地萬物を觀察したり

和歌は宗教上大に缺乏せる所ありて我國在來の神道及佛教は共に其缺乏を補ふこと能はざりしは既に云へるが如し近來我國に西洋の制度文物の渡來したると共に基督教亦傳來して將に大に爲す所あらんとす向後和歌の缺乏を補はんものは夫れ基督教ならんか我國の文學に宗教的生命を與へんものは夫れ基督教ならんか由て以て社會を一新せんものは夫れ基督教ならんか是れ將來の日本文學史に屬せる問題にして我儕は未だ之を判斷する位地にあらざるなり蓋し之を判斷し得んものは我儕の子孫ならんか然れども當今我儕をして將來を預言せしむる兆候はあらざるか

和歌は其精神を改良するのみならず其體調をも一新すべし五七の句調みそぢあまりひともじの歌體のみにてば何程の事をか言はるべき和歌は古びたりと謂ひつべし眞正の歌想(ポエートリー)は所謂和歌にあらずして却て市間のはやり歌にありといふを得べし方今我國眞正の歌人(ポエット)は彼のテニハを並ぶる和學者先生にはあらずして寧ろ彼の市井に謳歌して老若男女を悦ばしむる端歌都々逸の作者にありと謂ひつべし我國の文學は天稟の詩人現はれて新機軸をば工夫し出す事を久しく待てり彼の腐陳せる和學者の如く萬葉古今の歌體をのみ墨守する輩は固より歯牙に懸くるに足らずされども在來の和歌を研究するも敢て無益と謂ふにはあらず吾人は却て今日の學者輩が和歌に疏遠なるを嘆息す堂々たる學士にして『古今集』を讀みし事なき輩も或はあらん

功利に走る世のならひとて詩歌の如きは概ね棄てて顧みざる有樣なり世間生活の調子には雅調(ポエテカル)なる趣至て稀也其調子概して平調(プロゼイク)なり此弊風は文物美を爭へる歐米諸國も亦免れざる所なりウォルヅウォルス當世の流俗を歎じたる詩に曰く

世事我を累はすに過ぎたり、夙夜損益の爲に我力を消費す、天地を觀ても其中に我に屬せるものを發見せず、我等は卑劣なる贈物として我心を棄てたり、月に對して懷を露はす海を觀ても、常に好んで咆哮する汐風の、今は眠れる花の如く、打しづまれる風景にも、我等は毫も感動せず、噫、皇天よ、我は斯の如くあらんより寧ろ陳腐せる信仰に育ちたる異教者たらん事を願ふ、我は寧ろ異教者となりて、此美はしき野邊に立ち、我憂を慰するの影を見ん、彼のプロチュース(譯者註、希臘神話にあり)が海より上る形を見ん、彼の老いたるトライトンが鼓角を吹く音を聞かん

吾人は此高妙なる詩を讀む每に萬感胸に湧き來るを覺ゆ吾人は此詩を讀む每に我國現今の流俗を顧みて竊に感慨に堪へざる所あり今日の商業家若しくは政治家の生活は高雅なる調子に乏しき事はなきか學者若しくは教育家を以て任ずる者は少しくウォルヅウォルスと其感慨を同じくすべきにあらずや予は今時の教育を品評して無風流なりと云はざるを得ず。

(明治二十年四月發行「六合雜誌」第七十六號)

宗教的眞理の性質　悲哀の高調
一家言　秋の力
苦痛と解脱　心のたどり
病閒錄　心響錄
偶思錄　心の一ふし
驚異と宗教　予が見神の實驗

予は見神の實驗によりて何を學びたる乎
二聲錄　神子の自覺
如是我證　自覺小記
斷光錄

信仰と理性　大西祝先生を弔す

綱島梁川

宗教的眞理の性質

自然に生命ありやてふ一問は、客觀的解釋にて盡くし得可らず、人あり若し我れは自然の生命を感ずと謂はんか、此に件の問題は始めて肯定の解答を得たるなり。科學の刀を取つて、隈なく自然の一木一草をあさり盡くすとも、そこに生命の影は宿らずして、翻つて自家意識の一隅に、神秘なる自然の生命は見出ださるゝなり。されば自然に生命ありてふことは、自然の生命を感ずといふことに歸著すべく、此くの如き感情を外にしては、自然に生命ありや否やの問題はつひに解き得らるまじきなり。故に自然に生命有りてふ眞理は、自然の生命を感ずる吾人の主觀的事實になり立つ眞理なり、而かも其の主觀的事實たるの故を以て、一毫其の確實性に累あるを見ず。

吾人神を知るといふ、而かも嚴密には、寧ろ神を感ず若しくは味ふ（語や〻穩正を缺けども）とこそいふべきにはあらざる乎、神とは詰まり、吾人至極の感情の總量にあらずや、束ねにあらずや、合歸にあらずや。如是感情以外の神は、剩すところ唯だ、第一原理の概念のみ。理觀の神は、宗教の神にあらず。宗教上にいふ神は、理觀を第二義とし、慧解を奴婢とす、神は、たゞ情もて感じ、情もて觸るゝを容すのみ。是の故に神を感ずるものに取りては、神の存在問題は既に氷釋し盡くされたる問題なりといふべく、神を感ぜざるものに取りては、神の存在問題は、永恆不釋の謎語として存すべし。むしろ此かる人は、宗教問題に干るの權利なしというて可なり、要するに、こゝにては感ずといふ意識上の事實が、やがて神の存在の唯一の根據なり、感ずることが即て在ることの別名なり。神を感じ、神を味ふものに取りては、この意識上の一事實が、神の實在の唯一論證たるべくして、他にまた何等の客觀的論證を藉るを要せず。もし眞に神を感ずることなくして、神を知ると言ふものあらんか、こは思ふに宗教分内の神にあらずして、哲學上第一原理に關する知識の事なるべきのみ。

以爲へらく宗教的眞理の特質は實にこゝに存す。宗教の界にては、すべて意識上の事實が、唯一の眞理たるなり。若しこゝに、神と自己及び全人類との間に、親子相愛の關係あることを切實に感じて、神は愛なりと叫ぶ一宗教的天才、耶蘇の如きあらんか、何物の權威か、よく來つてこの事實を打消し、この眞理を否定し得るものぞ。哲學若し之れを迷信と斷ぜんか、哲學はいづこよりして、此く斷ずるの權利を得來れる。神は愛なりといふことの、果たして迷信なるか、否かは、躬ら切實に意識上の經驗を經ざる限りは斷定しがたき底の事にあらずや、自ら砂糖の味を嘗めて、その感覺を經驗せざるものには、砂糖の味の、甘きか否かは理もて解せらるまじきと同じく、神の愛なりや否やは、自ら此の一境の意識的實驗を有せざるものに取りては、不可解の事なり。之れを一直に、迷信と斷じ、不合理と斷ずるが如きは、理性の僭越なり、獨斷なり。所詮、趣味は趣味をもて會すべく、意識上の事實は意識上の事實をもて迎ふべく、宗教上の眞理は宗教上の經驗をもて照らすべきなり。而して宗教的經驗に徹めるものに取りては、神人相愛の一義は、實に天地人生の最深奧の眞理と響くものにあらずや。而してこはまた實に、宗教的向上心を有

てるものの、躋り到らんと努力する最高意識にあらずや。

此くの如く意識上の事實が、取りも直さず宗教上の眞理なるが故に、理性の客觀的見解をもて、其の理非を叩かんとするは、空を打つの類といはざる可らず。若し神に愛ありとするは、一種の擬人觀にして、客觀的眞理にあらずといふを楯に、件の眞理を否まんとするものあらんか、是れ未だ宗教的眞理の特質を解せざるものなり、客觀的に神てふものありやなしや、神の愛てふ者ありやなしやの一事は、毫しも宗教的眞理を撼かすに足らず、何となれば神は愛ありてふ事は、神は愛なりと感ずる意識上の事實に成り立つ宗教的眞理にして、此の事實を覆さざる限りは、理性の客觀論は何等の權威をも有すまじければなり。「曾て涙をもて冷たき麺麭を割きながら、悲しき一夜を泣き明かしゝ事なき者は、上天の力を知らず」と詩人の歌ひし如く、宗教上の眞理は意識の實證をもて近づくの外、道なきなり、意識の實驗なきものは、西行法師の「かたじけなさに涙こぼるゝ」の單純なる宗教的消息をだに不可解と速斷し去るなるべし。

人或はまた、神は主觀の産なり、理想の影也といふの理由をもて、動もすれば其の確實性を傷けんとす（フォイエルバッハの如き其の好代表者なり）。されど如是見解は未だ宗教的眞理の特質を領せざるものなり。神は實に主觀の産なるべし、理想の影なるべし、而かも、此くして既に意識の要求に迫られて、姿を現じたる以上は、其は夢にあらず、幻にあらずして、一個儼然たる實在たるなり。吾人が之れに歸依渇仰の至誠を濺ぐは、一片輕浮なる數奇心に出づるにあらずして、眞の實在に對する崇拜のこころなり。嗚呼、深いかな神の意識。吾人、神を造るか、神、吾人に現はるゝか、語は兩様にして、意は些かも差錯する所あるを見ず。若し、人、神を造るといはんか、此に意味する所は、はかなき一時のすさび、若しは出來心の所造の義にあらずして、わが本性必至の要求の然らしむる所の義なり。されば、われ自ら神を造りて、我れ自ら其の權威に服するなり。我れ自ら主觀的に神を造り出づると同時に、自ら儼然たる客觀性を之れに認むるなり（認めざるを得ざるなり）。われ自ら神を祈り出だしながら自ら實在の下に跪拜するなり（跪拜せざるを得ざるなり）。こゝにては、造ると在ると、やがて一也。驚くべきかな宗教的天才の意識。耶蘇、至愛の天父を說く、或は之れを耶蘇自身の理想性の所造なりといふも可、而かも彼れは之れを造ると同時に、之れに客觀的實在性を認めて、之れに跪きぬ、否、實に此く認めて跪かざるを得ざりし也。宗教的意識は自ら神を造ると同時に、之れに確實性を與へて、之れを空想と別ち、之れに實在の極印を附するなり。されば人よく自ら神を造ると同時に、此く造られたる神は、同時に永劫の實在性を帶びたる一個の權威として、吾人に莅むなり、而して何物も亦この權威を褫ふものあらざる也。さるを、主觀的産物なるが故に、理想の影なるが故に、神を不確實性のものとするは、是れいまだ宗教的知識、延いては一切價値意識の性質をも解せざるものといふべし。されど、一歩を深うして考ふるに、吾人、よく神を造るといふ語に僭上の嫌あり。嚴密に論ずれば、如何なる天才も全く新たなるものを創りいだすこと能はず。造るといふもの、實は發見なり、直觀なり、seeing なり、penetration なり、神といひ、神の愛といふもの、吾人が理想の衣を或物に被らしめて之れを客觀視せる者、畢竟は主觀の産物に過ぎずと言はんか、此の解毫も宗教的意識の眞理を累するに足らざること、前論の如し。され

ど尚ほ一段切實深奧の解ありとせば、そは人、神を造るにあらずして、神、人に顯はるとの解なるべし。一切の創造は、一切の發見也。創造の底には深奧の實在あり。吾人が理想を神に加被すといふもの、その實は神の中に吾人の理想を見いだせるなり。人よく何物をか創り得んや。吾人自ら僭して創れりと思ふもの、實は天地永劫の懷ろにある眞理の大珠小珠が、吾人の意識鏡上に落ち來れるのみ。そは直觀なり、發見なり、受納なり、感得なり。人まことに心を虛しうして、はじめて神の姿を仰ぎ得べきなり。

世に「合理的信仰」もしは「理性の宗教」てふ語あり。されど此等の語の、果たして如何程の意味にて是認せらるべきかは、須らく一考を要すべき者あるべし。精しくは、理性は宗教的意識の中にて如何なる位置職分を占むる者、又占むべきものなるかといふこと、論の要點なれども、委曲は姑く別論として、こゝに少しく辯ふべきは、宗教上の信仰は、理性の根據にのみ依屬するものにあらずしておのづから理性とは別なる一境、即ち非理性的方面に據を託するの一事なり。理性は意識と事實とを造る能はず、又意識と事實とに先だつ能はず(意識と事實とを材として組織することはあるべし)。隨つて天才が一種の新宗教的意識を開展し來るに方りてや、理性は其の驚くべき創造的天才の前に跪かざるを得ず、理性は宗教的意識が立し來る事實を打消し、もしくは左右すること能はずして、唯だ之れを新事實として、打ち仰ぎ、且つ迎ふるの外なきなり、意識を給し、事實を與ふるものは吾人の非理性的方面にして、理性は之れに與らず、理性は要するに事實を趁うて走る者也。かくはいへど、吾人は全く理性の權能を否むものにあらず、吾人の宗教的意識の中には、しば〳〵理性を傭って芟除せざるべからざる不合理の分子の混ずることあり。此くして理性の醇化と批評とを受けて、古來宗教的意識の次第に淸淨純粹となり來れる進化のあと、歷々として指すべきものあり。されど理性の職の要する所消極的の一側に出でざること、つひに否むべからず。即ち其は唯だ吾人の意識に不合理の分子の混淆せる場合に、之れを掃蕩して、吾人の理性の要求と背馳せしめざるまでの事にして、此れ以上の事、非理性的方面の事に關しては、理性は一指の批判だに插むの能なきなり。こは理性とは交涉以上の境、而して宗教的意識の本領は實にこゝに存するにあらずや(こゝに謂ふ理性はむねと論理的、推論的理性を斥せり)。

宗教的意識、若し此くの如く主觀的のもの、人さま〴〵のものなりとすれば、我れしか感ぜず、しか意識すといはゞ、其れやがて究竟至極の事實にして、是非の爭論は一切茲に息むべく、個々萬殊の信仰、紛として歸一を見ざるの虞れなきにあらざるが如し。されど此の疑ひは必ずしも當らず。美の標準、趣味の判斷にも、おのづから一定の客觀的規定あるが如く、宗教的意識にも、おのづから一種の客觀的判斷のあるなり。吾人はよく高しと感ずる意識をもて、卑しと感ずる意識を批判することを得るにあらずや(二者の關係を比較する點に理性の力を要することあるは否むべからずとすとも)。されば同じく神を感ずと云ふ中にも、其の感じ[illegible]に卑きあり、高きあり、薄きあり、厚きあり、小なるあり、偉なるあり。而して耶蘇の如きは、歷史上少くとも最も深奧に又最も切實に我れ等卑き意識に低迷へるものより見れば、殆んど詩歌的表白と思はるゝまでに)神を感じ且つ味へるものにあらずや。

(明治三十五年十一月)

神を感じ、神の力を感じ、神の愛を感ず

るは吾人の非理性的方面にあること本論の如くなれども、此く感じたる神と自己との恆久の關係を定むるには、理性の力に須つ所多き、否むべからざるに似たり。されば予は、宗教的意識に於ける理性の位置を蔑視するものにあらず、唯だ此にては其の價値の第一義的ならざるを道へるなり。倘ほ宗教上に於ける理性の意義職分に關しては『梁川文集』四三六頁「信仰と理性」、同書四四五頁「迷信とは何ぞや」、及び本書『病閒錄』中の「理性」の一章等を參照せられよ。

悲哀の高調

啻に歡樂聲きて哀情の生ずるのみならず、高歌盛舞の歌吹海の中にありてだに、吾人は時として、中心無限の寂寞に泣くことあり。吾人は時として瀾漫の花に泣き、又得意滿盈の幸運にさへ泣くなり。而してこの悲哀は、時としては、俗にいふ「嬉し涙」のたぐひとは異なりて、人生其者の如く深きことあり。思ふに如是意識は、必ずしも厭世家ならざる人の屢ゝ經驗する事實なるべし。

この悲哀の意識は何物ぞ、極めて漠然として、而かもさしも深く、切に人心を動かすこの悲哀の意識は何物ぞ、こは勿論種々の解釋を容るべき者なるべし、こゝには、そを一種の宗教的衝動より來るものと見て解釋を下さんとする予は少くとも、こゝに有力の一解あるを信ずるものなり。

吾人の有限、缺陷、小弱、あさましさ、wretchedness を意識して、そことも知らず、一種我以上のもの、有限以上のものを向慕渴仰する、これ卽て吾人の悲哀の湧きいづる主源頭にはあらざるか。こは勿論漠然たる意識なり、されど反思一番すれば、吾人の悲哀が、時として此かる一種の對照、一種の無限渴仰の意識に深く根ざせることあるは、否むべからざるに似たり。この一種の意識の失せざる限りは、悲哀は永へに失せ去らざるべし、悲哀は實に人生の根調なり。この悲哀は必ずしも虛無寂滅を感ずる消極的悲哀にあらず、そは寧ろ無限者慕はしさの悲哀なり、神を求めて得ざる悲哀なり、たとしへなき要求の歎きなり、言ひ知らぬ心情の祈りなり。されば吾人は、かのミトラや、バアルや、甚だしきは木石、鰯の頭に對してだに、一心の誠を籠めて、合掌持念する姿の中に屢ゝ高調の詩を見るなり。固よりこれに理性の解剖刀を入るれば、當の人の動機、及びその崇拜を對象に、さまぐの迷信不經の混在せるを見ることあるべく、中には、迷信の塊其者と見るべきものさへあるべけれど、而かも唯だ一事、その有限小の身を擧げて、超有限者に打まかせ、依りすがりて、自己を大靈の前に燬き盡くさんとする歸依の眼、敬虔の姿は、吾等が至深の要求の影をこゝに認めて、覺えずこれに同感の掌を合せ、同心の祈願を捧ぐるを禁ずる能はざらんとするなり。もとより惡むべき利己一偏の神いぢりさへ、世には多かれど、所詮、彼等は求むべきものを知らざるなり、見誤りたるなり。我等はこの迷謬の意識の中にだに、人生根本の悲哀の髣髴として動けるを見ずんばあらざるなり。

悲哀の最も沈痛なる特殊相は吾人之れを人生の道德的戰場に見る。何人か此にては、罪業の深手に鮮血淋漓たらざる、何人かこゝにては、しばく尊者ポーロと共に「あゝ惱める我かな」の歎なきを得ざる。人の理想を追ふことの無限なる限り、新たなる罪業の血痕は常に絕えざるべく、而して尙ほ誰れか、我は神を要せず、佛を賴まず、我れに理性のあるあり、以てよく我が瘢痕を裹みて之れを痊やすことを得るとは言ふものぞ。我等は曾て理性に向つて、罪業の瘢を痊やさんことを求めき、而して理性は輙ち、「爾の善業を積んで之れを賠へ」と、いと峻嚴に應へたり。我等は奮然起つて、再び健鬪の途に上れり。再び傷痍を被れり、再び理性を呼べり、而して理性の應ふること故の如し。鳴

呼、嗚呼、人は理性の自恃以外に、何物をも要せずと言ひ得るほどに、至醇なりや、至彊なりや。至大なりや、至大、至醇、至彊のもの、我れの裏にありとは自知す、而かもそは現實の我、經驗の我を超ゆること常に百歩す、我一歩を擧ぐれば、彼亦一歩する也。現實の我は、依然として蹌踉たり、蹣跚たり、依然として躓く也、傷く也。嗚呼理性の力は偉也、されど理性は果たして、我等が罪業の血潮を名殘なく拭ひとる程の力を有する乎。理性の聲は嚴厲なり、そは正義の聲なり、そはエホヷ神の聲なり、そは目もて目を償ふ公正律の聲なり、我等は屢々涙を以て理性に訴へたり、されど理性は涙を以て之れに應へざるなり。されど我等は果たして、我等が性の脆弱より來る無限の罪業をば、ことごとく善業もて償ひ得べしや、理性は依然として、「然かせよ、然かせざるべからず」と命ずる也。その峻嚴一歩を假さざる超現象的權威に面するもの、誰れかカントと共に、粛然として襟を正さざる、げに、この莊嚴なる聲に起つて、無限に煩悶しゆくところに、沈々として聲なき人生の大いなる戰はあるなり。我等は「完全」を望んで何處までも向上すべし、何處までも "Streben onwards" すべし、我等は、ポーロ、アウグスチヌース一流の贖罪説の祕義を賴みの綱と打縋らざるべし、我等は羅馬舊教ぶりの聖權主義を力の岩と賴まざるべし、これ實に男らしき丈夫の態度なり。されど我等は尙ほ、罪業の深き痍に泣かざるを得ざるなり。これ何が故と問ふこと勿れ。これ實に、理性の理解する能はざる悲哀なり、理性の同感以上に超する悲哀也、誰れかこの涙を女々しとはいふ。天眞の悲哀を神に打出して泣くは、勇士の態度にあらずや。

「世に義人なし、一人もあるなし」、釋迦、孔子、基督の偉を以てするも、疑ふらくは、玲瓏一翳を著けざる境にありきとは言ふべからざらん。基督無罪論の如きは、畢竟我等に對しての比較論たるべきのみ、されば、まして我等庸人をや、何人か果たして、其の道德的理想に罪を負はざる、勿論、我等は、善業を積んで、之れを賠はざるべからず、何處までも賠はんとして進むべき也、これ吾等が道德的要求の聲也。されど、假しこれを償ひ得たりとするも、これにて自ら足れりとせんには、尙ほ餘りに深き要求あり、餘りに深き涙あり、我等が胸臆の深處には「我等が他の罪を恕すが如く我等の罪を恕したまへ」との、かすかなる叫び聲さへ、聽取せられざる乎。是くの如くして、我等が根本の悲哀は、實に倫理に宗教の高調を帶ばしめずんば已まざらんとす、こゝにては、向きの道德的理想は吾等が限りなき悲哀を訴へ、限りなきは歸依の涙を打そゝぐ神とはなりぬ。理想を神とするは吾等が至情の結論なり。

一切の成立宗教の中にて、禪の如きは、特に自己即神の光耀の一境、即ち悟に重きを置く。されど、悟豈容易ならんや、こゝに到るまでには、神人無限の離隔を超越し盡くさざるべからず、所謂豁然頓悟は、極めて壯快なるべし、されど頓悟の底には、思ふに不盡の悲哀あるべし、まして悟の意識、超越の意識は、長久に持續せず、蘧然として我に歸れば、依然として、神はかしこにあり、我はこゝにあり。依然として、我は神（眞如、法性、自性）との離隔の悲哀を味はざるべからず、依然として茲に歎きあり、悃求あり、向上あり、祈願あらざるべからず、依然としてこゝに一種の感應道交の消息なかるべからざる也。吾等はどこまでも一面有限者也、隨つて又有限者以上の實在上との感應道交なかるべからざるなり。一切感應道交を要せざる程の超人的無限者となり了するは、吾等の分にあらず。されば吾等をして祈らしめよ、

感應道交せしめよ。而してこれ即て、單なる自力以上の消息を含めるものにあらずや、こゝに神（佛）の恩寵の語をさへ、まじへ加ふとも、緣遠き語にはあらざるなり。但だし禪の排情觀は、知的超越の一境、即ち「寂然照著」をいふに壹らにして、その玆に到る根柢の悲哀を言はざるのみ（禪は理性の力をのみ賴むが故に、ともすれば高慢なる野狐禪となる）。或は云はく、禪には、悲哀の涙を打そゝぐ人格神なしと。この言當れり。されど、人格的の神、まづ客觀に存するなくば、吾等が悲哀を訴ふる所はなき乎。然らず。見よ、吾等が宗教的要求は、その觸るゝ所、隨處に春温を生じ、生命を現じ、感應の力無限なる對象を造り出づるにあらずや。則ち造るといふといへども、其は主觀のすさび以上也。それ至深の要求は、同時に實在也、至深の主觀は、同時に客觀也。世俗謂ふ所の人格神の有無は、こゝに問はず、たゞ人生の根柢に潛める神人離隔の悲哀感は、吾等をして無限の感應應化力を有する實在者に觸れしめずんば已まず、而してこゝには復た、神の人格非人格の稱謂如何を問ふに遑あらず、心靈の事實は一なり。

宗教は感應也、而して感應は悲哀より來る。理性の自力自悟を特色とする禪だに、又實にこの一種感應の關係を全く疎外する能ふまじく、而して、これ即ち單なる自力以上の消息を語るにはあらざるか。感應道交なくして、一切の宗教はあらず。悟とは畢竟、神人離隔の悲哀に打ち勝ちて、之れを超越したる刹那の意識を斥す言葉にあらずや。

人の性の偉大は、この世界大の悲哀に觸るゝにあり。吾等が神に對して打灑ぐ祈りの涙、世にこれほど深奧なる時と實在とを一にしたる高調の涙あるべしや、吾等はこの涙の中に神と相見るなり、吾等はこの涙によりて、自衿自大の小我見を解脫することを得るなり。げにかかる悲哀を有するは、人生の不幸なるべし、されどこの不幸を和げ慰藉するものも、亦この悲哀也、涙也。如何なれば今の世は、强ひてこの涙を抑へて、矯飾自ら高うせんとはする。寧ろこの至深の要求を打出して、これに適當の位地を與ふる所に人性の赤裸々露堂々たる天眞の姿をば見るべからざる耶。

我等衆生をして、この漠然なる悲哀を明かに意識せしめよ、而してこの中に無限の慰藉を見いださしめよ、これ實に、世の仁人、君子、宗教家、先覺者の慈眼愛腸に須たざるべからざる也。

（明治三十五年一月）

一家言

詩を讀みて當然起り來る美意識以外、心はいつしか、一歩その奧を辿りて、覺えず實在と撞著して、嗚呼神よと叫ぶことあり。神に一念の誠をさゝぐる刹那、心はいつしか歎美の態度にすべりて、あはれ〳〵と風月の情そゞろなることあり。詩よりして神に之き、神よりして詩に之く。是くの如きは、辿りふかき人の經驗する事實也。意ふに詩と神と、太源一也。有象有形に執する詩人、もし一たびその根柢に深潜せば、粛然としてその權威にぬかづくべし。宗教家もし神の姿を分明に描出せんとせば、則ち彼等が機根さま〴〵に、如來と現じ、天父と顯はれ、慈悲と垂れ、光明と輝き、あるは天上清輝の星とさゝやき、あるは籬落微韻の花と點ずべし。詩を無限に繙けば、實在の神となり、神を有限に織りいづれば縹緲の詩となる、詩は直ちに神に薄り、神はおぼろに詩を返照す。げに詩人と宗教家とは、宇宙を家とする最も親しきはらからなりけり。この二人を一身に合はせ纏めて優なるもの、プラトーン、ダンテ、ミルトンなどを始めとして、世に鮮なからず。耶蘇のごとき、その最大の一人也。

芭蕉は一俳人也。されど、五十年の生涯を自然の渇仰にさゝげて、あるは奧羽象潟の時雨に腸を絞り、あるは佐渡北海の荒波に魂を削りて、一樹の假の宿りにも、とく〳〵の雫結びもあへず、旅魂そゞろに枯野の風雲を追へりし彼れが姿をしのぶもの、誰れか、その魂に鏤られたる實の一字を否むべき。彼れは自ら謙して、花鳥に情を役して、この一すぢに繋るといへり。しかも、行々しば〳〵大自然の幽玄の一路に分け入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ、彼れは趣味の門より入りて、趣味の太源に道交しぬ。かくの如くして彼れの俳はじめて俗ならず、浮ならず。こゝに芭蕉の宗教ありといふ、これをしもわが好める筋に佞したる言なりといふべきか。更に想ひいづるは、彼れが同じ風雲に思を碎ける及門一味の友と、淺からぬ心情を汲みかはしゝ一幅の景なり。古希臘哲學者の秘密結社、あるは印度初代佛教徒の僧伽の熱情の片影さへ、こゝに見ゆる也。

傳ふる者曰はく、今の美術家中、雅邦は丹青以上の活機に神交せりと。この言もし眞ならば、雅邦亦技よりして道に入れるもの又以て卓然たるものと稱すべし。吾人は、必ずしも詩人に迫りて神を見よといはず、唯だ詩魂の雄なるものは、この一境、本地の風光に見到せざるを得ざるをいふ。言ふ勿れ風流三昧と。大詩魂の風流三昧の奧龕には、嚴肅なる實在の、不斷の燈を點ずるありて、その一刀一筆は、直ちに一跪一禮たる沈痛の消息あるなり。その Work は直ちに Worship 也。是くの如くにして、詩歌ははじめて全人と渉る。是くの如くにして「美術は始めて實在其者と觸るゝことを得」。崇いかな詩人の位地。吾人は詩歌以外にいゝ本領ありと傲語せしバイロン一流の識見を淺しとす。

吾人は又、神を拜してその詩的一面を閑却する宗教的意識を淺しとす。今人の神は餘りにモノシーステック也、リゴリステック也、嶮峻の相、勝ちて、詩的渾醉の韻缺けんとす、彼等は率ね、神を倫理的に見るに偏して、その詩的一面を見ず、むしろ神を美的に見るを不敬冒瀆の事となすなり。曰はく、神豈月ならんや、花

ならんやと。今の教壇に立つて神を説くもの、唯だ其の聲を大にして、勢ひ猛にのゝしるのみ。知らずや、神には、世の所謂宗教家の雄辯宏辭をもて説き去り盡くす能はざる無限の詩趣の、氣海香國と漂ふものあるを。われは、しばしば今の宗教家がその神を説くを聽きぬ。そは譬へば、張子の虎の如し。嗚呼神豈説き易からんや。神には實に、絶倫の詩才を以てするも、尙ほ歌ひつくしがたき神祕の詩趣あり、微韻あり、含蓄あるなり。われは今人の枯瘦の神に與みせずして、むしろそのむかし、ガラリヤ湖畔の夢の如き牧歌的風色の中に、おりたちましゝ神をしのぶなり。げに耶蘇は、偉なる宗教魂と詩魂とを倂せたり。耶蘇の神は、倫理的正義の神にして、又ソロモンの榮華を羞かしむる野の百合花の美しき神なり。「なほ見たし花に明けゆく神の顏」。プラトーンは、かくの如き美しき神に、その戀をさゝげにき。

嗚呼、詩と神と、詩人と宗教家と、最も親しかるべきはらからにして、而かも今日の如く睽離反目せるはあらざる也。

（明治三十五年九月）

秋の力

「あれこれをあつめて霞む春の朧ろ」を、人生の夢とも見ば、秋は直ちにこれ覺醒也、事實也。蔦紅葉の中より露はれいづるふしくれたちたる樹身、枯芝生の底より躍りいづる偃蹇たる雲根、いづれか秋は人に迫るの事實たらざる。中にも秋の力を最も強く贍かに言ひいづるものは、黄柚也、赤柿也。一美術家語りて云はく、われ曾てひねもす秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會ゝ、夕空鮮かに結び出でたる赤柿の纍々たるを見て、始めて秋こゝにありと叫びきと。げにも、秋の姿をさながらに具象にして描き出だせるものありとせば、そは碧落の空に躍如として結び出でたる赤柿を措きてはまたとあらじ。秋は實に個の纍々の赤柿、其の全幅の表現を得たる趣あるにあらずや。そのむかし、蕪村、抱一などいふ畫家が、寥々たるこの一物に、大膽なる落想をこめて、一幅の秋のこころを勁く隈なく淋漓揮灑し出だせる、詩眼流石に凡にはあらざりけり。見よ、秋の潭に淵默の智あり、秋の空に剛明の象あり。月は清輝を帶び、星に聲あり。落葉に埋もるゝ枯井の水、なほ鬢眉を鑑すべく、夢を歌ふ滿園の蟲しぐれ、人の深省をいざなふ。空際きはやかに走る波濤の山、極目鮮かにくねる一河の帶、樹間の聲の錚々として勁き、天籟地籟の砰湃として厲しき、あはれ、秋の萬象、何物かすべてこれ空明、照徹、剛克、雄健の一氣を以て貫かざる、何物かすべて、哲人の雄姿、道士の風岸を以て人に迫らざる。秋は夢に非ずして、事實也。人は秋に立つて、直ちに事實と面相接する也。秋は何等の天文地釆の形式を藉らざる、裸體のまゝなる思想也。其は如々たり、故に明瑩也、澄徹也、而してまた充實也、豐贍也。春草の紗、夏木の衣、すべて名殘なく脱ぎすてゝ、あらはなる葛蘿の筋、樹幹の骨、健くもまた雄々しき丈夫神の面影は、げに秋にこそふさはしけれ。もし、秋に一味の文采ありとせば、白蘋紅蓼の裳裾、蘆花淺水の帶、桔梗、刈萱、尾花が波の、袂も輕き姿なるべし。あはれ、其の澹如たるすゞしさは、かの哲人道士の婆娑たる一衣の高風にも似たるかな。至竟、秋の力は、其の衣にあらずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。

(明治三十六年一月)

苦痛と解脫

（病鷄を傷みて）

我が家の一羽の庭鳥いとたくましきが、偶〻劇しき熱を病みて、秋の一日の華やかなる庭面に、黯澹たる影を投げぬ。彼れは刻々潮し來る焦熱の勢に抗し得で、尾羽打ち枯らして、悄然庭の一隅に立てり。如何なる緣のあればか、藥爐の室にわが世の秋のわびしさを觀じつゝある我は、そゞろに庭上の孤影に心動きぬ。あはれわが友、淺ましうも打衰へたるかな。昨日までも光榮の華冕打翳して、曙の歌勇ましう、洋々乎として、王者の德、文明の盛を聲らしつる雄姿、今何處にか認むべき。昂かりし頭は俛れ、麗しかりし冠は折れて、燃えのぼる滿身の炎に、土の如き黝色傷ましく、嵐を嘲りし兩翮は萎みて影の如く、敵を挫きし爪嘴は拳曲して力なし。生氣光澤、人に迫るの力ありし渾身の羽毛も、空しく枯藁を束ね、雙の清眸は一たび萬有より閉ぢてまた還らず。昂然濶步の疇昔の姿、永へに庭上に消えて、身邊唯だ見る死影の蹣跚たり、蹌踉たるを。嗚呼、汝傷心の姿かな。さはれ友よ、苦痛は汝一人の事實なりと思ふこと勿れ、われまたこゝに、日夕枯瘦の影を撫して、秋に泣く身ぞ、誰れかいふ毛翮の物と。觀ずれば同じ法界一味の汝と我と、やがては色身の籬、撤して語るべき身の、げに免れがたきものは三界の生死流轉也。さればわが法界の友よ、悲哀は汝一人の有ならず、我にも、所詮は飮み干さでかなはぬ悲哀の杯あるものを。汝と我と、人生の悲哀をこゝに集めて、我は汝の中にわが悲哀を見、汝は我の中に汝の苦痛を見る。嗚呼々々、かくして汝と我と、刻々死といふ大魔王の威力の前に、屈服しつゝ、跪きつゝ、喘ぎつゝ、苦しみつゝ、歩一歩暗黑無邊の底に沈みゆくなり。見よ「生卽苦」の三界の大事業はこゝに我等が前に、一切の後景として、火の如く躍現せるにあらずや。冷かなる「死」の遍在力は、今や一粟の有情物に、其の宇宙大の威力を集沖し來りて、直ちにその存在の根柢を衝破し粉韲せんとするならずや。哀れむべし、我等が衰殘の友は、此の大勢力に抗して今一たびを戰ひぬ、されど其の眼は再び開かず、其の首は再び矯らず、其の冠は再び耀かず、其の兩脚は再び砂を蹴ず。苦痛は一切を默せしむ。我等が前には大地消え、萬有失せぬ。垣根に笑ふ花、庭面に戯るゝ狗兒、晴をよろこぶ鳥聲、露をたのしむ蟲語、日光、樹影、空色、水聲、すべて一樣何の有る所ぞ、在る所は、生死大海の流轉のみ。苦痛のみ、悲哀のみ。唯だ〳〵此の沈痛なる一事實あるのみ。友なし、親なし、君なし、神なし、國土草木なし。嗚呼、汝と我と、かくして遂に滅びゆかんとする乎、つひに滅びゆかざるべからざる乎。

見よ、わが有情の友は、遂に此の自然の大破壞力の一擊下に脆くも沈みぬ。同時に我が自覺は忽然として此の恐るべき同感的苦痛の威壓より反跳しぬ、覺醒しぬ。我れは叫びぬ、嗚呼我等も亦かくして竟に冷かなる自然力の暴殄の下に、寂寞として墳墓に下らざるべからざるかと。されどわが自覺は、斷乎として答へたり、曰はく、死の苦痛と共に、其の自覺を有せざるものは、解脫なくして眠るを得べし、されど苦き〳〵死の苦痛の自覺を有する我等は解脫

なかるべからず、又實に解脱の權能あるべき也と。嗚呼これ何等天來の福音ぞや。わが有情の友は、解脱を要せずして今や逝きぬ、されど我はつひに解脱なかるべからず。解脱あるべき也。嗚呼これ何等祝福のおとづれぞや。

誰れか、死に面して苦痛の崇高を感ぜざる、而して誰れか亦、死の解脱力の吾等にあるを自覺して慰藉の崇高を感ぜざる。"sublime sorrow, sublime reconciliation!"げに人の脆きは、風にも傷むもとの葦也。而かも其は「考ふる葦」也。嗚呼「考ふる葦」の一語、世に是れよりも人の偉大と高貴とを道破し得たるいみじき言葉あるべしや。それ自然は、其の彊大を挾んで眇爾たる吾等に臨む、而かも、吾等は、むしろ、吾等の小弱其物を光榮とし、誇らしとする一個の或物を有するならずや。パスカルは更にいふ、「人の孱弱其者その偉大を證す。そは無冠の帝王の孱弱也」と。げに、古へより千載の士は、自家の弱きを頼みて帝王たり、死を味ふ勝利を叫びたり。此に至りては、彼の希臘の古哲人をして神怒よりも尚ほ怖ろしと感ぜしめたる自然法因果律の冷酷無慈を以てするも、尚ほ能く何爲るものぞ。吾等の解脱は、能く吾等をして因果を甘しとさへ味はしむる力を有するならずや。因果の鎖は解脱哲學を縛る能はず、生死巖頭の自在を奪ふ能はず、因果は一葦の我を殺すべし、つひに一葦の自覺を殺す能はざる也。因果は曰はく「生は即て死也」と、自覺は曰はく「死は生の術也」と。因果は曰はく、自然は我汝は自然の一粟也と、自覺は曰はく、自然は我心の一波一浪也と。因果は曰はく、自然に從はざるを得ずと、自覺は曰はく、當に自然に從ふべきなり、これ即ち上智也、最勝善也と。此くの如くにしてマホメットは、「イスラム」即ち一切服從主義を樹てて、神に冥合し、此くの如くにしてスピノーザは、萬物靜觀の法悦を享受しぬ。「我れ法王となつて法に於いて自在なるもの」彼等在焉。彼等の解脱力は、よく因果そのものを我が當行の則となし、萬法善也と叫びぬ。彼等は因果以上の原理に躋攀して、因果の枯野に祝福の花を開かしめぬ。彼等は因果に死して神に生きたり。

嗚呼わが法界有情の友。汝は苦痛といふ因果の下に永へに沈みゆきぬ。されど、解脱を要せざる汝の一死幸か、解脱を要する吾等の一死幸か、すべて神ならぬ吾等の如何で知るべき、唯だかりそめならぬ緣の一日を、我が進修の機たらしめし汝の一死こそ、貴き善知識にはありけれ。ねがふは平和の神、永へに汝の眠を護れかし。さらばなり、我友。

（明治三十六年一月）

心のたどり

倚ほ記す、半夜夢をなさざりし枯坐默照の折々わが小さき魂の、一種不可言の恐怖の急湍に渦まき込まれしこと幾そたび。げにその恐怖よ、われをして幾たびか我が生誕の日を詛はしめけん。さはれ、我れ今、我が生のやゝ光輝ある一峯に立つて、經來りし心の淵瀬の目くるめく洄波のさまをかへりみするぞ、大神の恩みなる。

闃として群動聲を斂めたる夜半枕上、死よりも黑き恐怖の翼擴げて、冴えに冴えたる我が意識を襲ひ來るは何物ぞ。見よ、流るゝもの、峙つもの、耀くもの、破くもの、蓬々として行くもの、滃々として湧くもの、すべて兩閒に群然たるもの皆「存在」てふ大事實となつて我が心頭を壓し來る。理に於いて自ら惑ふところなしと信じたる此の「存在」の事實よ、奇しきかな、今や茫々無涯岸の恐怖となつて我れに迫り來る。われは唯だ〳〵「存在」てふ事實の前に戰ひ慄きぬ。あらゆる「存在」夢なれかしと念ずる我が果敢なき願ひを嘲りて、見よ、天寂々、地寞々、永遠を貫く「存在」の大事實は、わが心を千萬仞恐怖の谷に蹴落す也。「存在」の事實何が故に此くも恐ろしきか、知らず、唯だ知る、其の何故なるかを問ひ辯ふる遑なきほどに限りなくぞ恐ろしき。其は「存在」そのものの養ひはぐくむ深奥不可測の恐怖也。曾て一たびは虛無の恐れに襲はれたる我れ、奇しきかな、今は森然たる天地の存在を想うて心ほと〳〵狂はんとす。げにや一切諸法の存在は、如何なる無宇宙哲學を以てしてか能く之れを空じ得べき。理は能く理上の存在を空じ得べし。獨り情上の權威ある存在を如何にせんや。我れこれを念うて心摧折す。嗚呼諸法の存在は恐ろしき事實也、而してこの大事實の前に戰ひ慄く我れの存在も亦恐ろしき一個の事實ならずや。我れの何ものたるを知らず、唯だ知る、戰ひ慄く者としてこゝに存在するの事實なるを。我が存在の消えて跡なき一夢たれかしと願ふ心を仇にして、見よ、我れてふものの「存在」の事實は、炎の如く、屹として心上に聳ゆるならずや。我が入る息、出づる息のそよとの生命のゆらぎも、今は茫々たる恐れを孕みぬ。此くの如くにして我れ天地の閒に在り、此くの如くにして天地、無窮の閒に在り、而して兩つながら相對して其の閒何の交渉かある。彼れは峙ち流れ、我れは恐れ慄く。彼れ森然として彼處に在り、我れ耿々として此處に在り。彼れ沈々として眠り、我れ惺々として覺めたり。彼れ何物ぞ、我れ何物ぞ、唯だ知る、この千古萬古常闇の如く默々たる天地の閒に、我が意識の一點光のみ熒々として冴えに冴えたる一個の事實を。而してこの事實こそは何等深奥なる恐怖を產みいだす無底の淵なるぞや。

我れは「存在」の恐怖と寂寞とに得堪へずして、我れに似て我れに優れる者を呼び索め、尋ね出だしてこれに倚らんとしぬ。されど萬有の何處に我が呼び索むる大能の有情者はあるか、我れと萬有との閒には依然として長江天塹の永へに隔て流るゝを見るのみ。げにや大觀の哲人は、萬法唯識の所造と喝破したれど、此の大觀の眞理も、今のわが深奥なる恐怖と悲哀とに對して何の詮かあるべき、曾て得たりしわが多少の哲學的超詣の見識、今將た何爲る者ぞ、我が靈覺の自ら開き出だして自ら打ち仰げる此

の森然なる萬法の何處にしも、我が慕ひ求むるものはありや。悲しいかな我れ心傷めども自然はわが爲めに胸打たず。此くして我が渇慕無限の靈魂は山阿水涯を翔り遍らして、復び寂寞として疇昔の孤影に還らざる可らざる乎。此くして我れは水の如き鐵衾の上にわが半夜の瘦影を投げ盡くして、永へに

"Little we see in Nature that is ours"

の詩人歎を累ねざるべからざる乎。

我が友は哂ひぬ、是れ豈眞詩人の聲ならんや、わが眞詩人を見ずや、彼れは能く流るゝ水に生命の文を織り、峙つ山に慰藉の力を賦す、花は彼れに美しき戀を語り、星は彼れに高き祕音をさゝやく。露華月光、暮色江聲、何物か詩人溫情の一分身たらざる。汝それ詩歌の國、「自然」の鄕に入りて、そこに汝が慕ひ求むるものを得よと。嗚呼友よ、乞ふ復た語ること勿れ、我れ曾て詩人と共に、詩歌が飾れる「自然」の花野に美しき夢を拾ひぬ、さはれ、そは竟に美しき夢なりき、貴きそらごとなりき。覺めての後の峻酷なる事實は、更に一倍の苦痛と反映し來りてわが中心を咬みぬ。ゆら／＼と絲遊靑む昨の野邊に、けふ霜枯の落莫の思ひ繁く、蘆荻と波に漂ふ月の埠頭に、忽ち見る因果萬疊の黑浪高きを。嗚呼わが新たに得たる一味の自覺は、竟に我れをして「自然」の鄕に、詩歌の國に、美しき安住の夢を結ばしめざるを如何にせん。詩歌の衣を剝ぎ去れる「自然」畢竟何の剩すところぞ。

既に大自然の存在を空じ去るの力なく、又其の美しき詩境の中に我が渇慕の對境を見出づる能はず、我れは依然たる恐怖と寂寞とを抱きつゝ冷かなる「自然」に眼を閉ぢたり。

我が眼は大自然に閉ぢて內世界に開きぬ、何等廣大なる世界ぞや。觀念の世界也、思想の國也。見よこゝにも河嶽流れ峙ち、日星耀き麗き、燦乎として更に潤澤あり、光輝あり、曾て大默々の「存在」として我れに對峙したりし大自然、こゝにては一切の隔ての籬を撤したり。この國に在るもの、何物か我れと親しきものならざる、何物か我が一分身たらざる。我れはこの國の王者也。我れ一たび笏を把つて麾けば、空想の翼自由の大野を翔け、理想の車靈光の天を馳す。我れ一嘘すれば大千幾生滅し、祇劫幾翕闢す、この國の住者は、何物か我が頤使の下に奔り且つ僵れざる、彼等は皆わが臣良也。嗚呼我れは是れ觀念國に於ける無冠の帝王ならずや。我れ庶幾くは逍遙乎として不朽の樂しみをこゝに享けんかな。自ら惟へらく、優なるかな游なりと。

爾時、われ一個深奧なる聲を聽きぬ。曰はく、爾無冠の帝王の心果たして安きか。爾は自ら僭して觀念國の帝王と稱すれども、知らずや爾の國には爾の權力の左右する能はざる幾多爾以上の對立者、權威者あることを。爾聽かずや、義務の觀念の莊嚴無上の聲を。爾一たびこの聲の前に立たば、川邊の葦の如く戰々自ら持する能はざるにあらずや、又見ずや、善惡、眞妄、美醜の幾多標準的觀念は、爾に律せられずして却つて爾を律する客觀獨立の權威たるにあらずや、爾は竟に其の笏を捐て此等權威の前に跪拜せざるべからずと。我れは戰慄せり。我が自ら造りぬと思へる觀念の王國にしも、我が力の撓揉し得ざる獨立不屈の權威あるか。げにや我れ其等觀念の權威を視るに、わが塵の心に染まぬ新鮮の色あり、わが慚愁の姿に似ぬ金剛の力あり。我れより出でて我れをしも支配せんとする彼等不遜の觀念、そもそも何物ぞ、將た何處より來れる。嗚呼彼等も亦默々永へに我に對峙する異形の「存在」たる乎、何ぞ其の岌々自ら持して我れと開つるの甚しき。寂寞は我れに還りぬ。あはれ已むなくん

ば我れは我が如意自在にし得べき忠良なる空想的觀念の臣僕の上にのみ、君手として囊きの榮華の笏を揮はむ乎。否〻、我が中心の願ひは復び我が自在にし得べき空想的觀念の奴僕を支配して暫且の安きを貪るにあらずして、我れに似て我が無限の渴愛を灑ぐべき倚信の對境を得んことなり。而して此くの如きもの我が觀念の世界のいづこにかある。こゝにあるものは消えやすき空想的觀念の奴僕にあらずば、來つて我れを縛らんとする獨立不屈の客觀的觀念のみ。わが超人的帝王の果敢なき夢は破れぬ、涕涙滂沱として流れたり。

我れは心傷みて仆れぬ。爾時、われ優しき囁きを聞きぬ。曰はく、此くの如くにして恐れ悸き、此くの如くにして心傷つき仆るゝ者、爾一人のみにあらず、智慧の果を喰うて一たび流轉の世界に墮したる者、何人か爾の運命を分たざる、爾の運命は一切の運命也と。あはれ限りなき優しき聲にしもあるかな。我が痛恨の腸を剜りし刃は、又我れと同じ生命の一波を汲める諸人の腸をも剜りし刃なるか、あらず、又偉大なる靈魂を永世の星と羅ねたる世〻の聖者の腸をも剜りし刃なるか。我れはこの貴き刃の一種甚深の慰藉力を感じぬ。さきに毒沸々を吐きたる刃、今は優しき同情の手となりて我が痍を裹み、我が苦き涙に諧奏のしらべを賦しぬ。嗚呼我が傷痍未だ痊えず、我が涕涙未だ乾かず、我が中心の渴慕未だ充たされざれど、一たびこの新自覺の境に達しては、我が願ひはこれ、はかなきすさびごころにあらずして、權威ある願ひとなりしにあらず、我れ一人の私心に佞する要求にあらずして、普遍の生命海を横絕する一道の客觀的要求となりしにあらずや。我れはこの新たなる權威の自覺に立つて我が限りなき悲哀の要求を叫びぬ。

反響は來りぬ。今ぞ我れ聽く。遠く近く我が靈魂の汀を拍ち來る永劫の潮の聲を。曰はく、「爾恐るゝ勿れ、我れは爾の索むる者ぞ、爾の要めは我が要めなり、爾の歎きは我が歎きなり、爾の愛は我が愛を分けたる一波の愛ぞ、我れは是れ爾と共に爾が軛を輓くものぞ、我れ爾にあり、爾我れにあり、我れは爾の爾、心の心ぞ」と。夢に非ず、幻に非ず、窈たり眇たる中に、物あり來つて我が靈魂の礎を震撼し、我が底ひ知られぬ感情を、潮の如く涌きに涌かしめ、泉の如く溢れに溢れしめぬ。我れは奇蹟の奇蹟を見、人格の人格を仰ぎぬ。我れは大光の裳裾に觸れ、其の氣息を聽きぬ。我れは我が一切の窮愁顚倒、悲痛苦悶を通じて曾て不斷に我が裏に働ける大恩寵の自覺に心躍りて、覺えず其の大悲の御手に打ちすがりぬ。法涙淋漓として兩頰を下りぬ。

噫、我が觀たる所未だ洞然たらず、終に來んこの日を想うて我が心躍る、さはれ此の薄明なる人生の行旅に於いて、一歩を大明に轉じたる我が觸發の喜びは、何を以てか之れに譬へん。ねがふはこの喜びの、我が無窮向上の光輝ある一道標たれかし。ねがふはこの喜びの、短かるべき我が殘生の一日〳〵を結ぶ聖なる緣たれかし。

我れ再び大自然に眼を開きぬ、而して路の邊の石にも熱き涙に餘るこゝろを見たり。我れ再び觀念の世界に入りぬ。而して其處に親しき一味同光の法悅を得たり。

(明治三十七年七月)

病閑錄

知己

何人も他に知られたしの念あり。千萬人の徒なる羣衆に動かざるものも、尙ほ其の一人の友に知られんことを求め、一代の盛譽をあなかまと聞きすつるものも、尙ほ知己を千載の後に期す、人は已れを知るものなき生活に堪ふる能はず。曠野を家とし、岩洞を居とし、世を無きものと住みわぶる寡欲枯禪の徒も、尙ほ中心いづこにか知己を求むる聲あり。人に知られんことを求めざるものも、尙ほ吾れと同じ心持てらん何物にか知られんことを求むる、是れ實に人の社會的性情の自然の發動にあらずや。

他に知られんことを求むといふ、而かも吾人は人の私心私情に知られんことを願はず、其の朗かなる公明の心に知られんことを願ふ、こゝに訴ふるものは、他の個人意識にあらずして、遍通意識也、主觀意識にあらずして客觀意識也。かくして吾人が他に知らるゝを求むる心の眞實なればなるほど、其の知己たるべき人の標準を高らし醇化し、竟に其の一切の徒なるうつろひ易く、搖き易き一時性、偶然性を抽き盡くして、之れを常恆不易、正確無謬の人となす。されば人に知らるゝを求むる心は、之れを究竟すれば、やがて神に知らるゝを求むる心にあらずや。極めて實際氣質なりし孔子だに、知已を人以上の境に求めて、知我者其天乎と言へり。

吾人は神に何を知られんことを願ふ乎。吾が價値也、眞情也、眞要求也。吾が價値に對する自信あり、吾が眞要求に對する自覺ありて、吾が心始めて神に嚮往す。神に知られんことを願ふものは先づ吾れに神に知らるゝ要求、自信無かるべからず、神を呼び求むるものは、先づ吾れに神を呼び求むる權威無かるべからず。吾れに抑遏すべからざる旺盛なる要求若しくは自信ありて、則ち神を仰ぐの一念切也。

吾れ自ら吾が價値、要求を自覺自信す、この自覺と自信とありて、尙ほ何爲れぞ神に知られんことを願ふぞ。答へて曰はく、吾が價値、要求の自覺自信といふもの、是れ吾が私心に媚びて得たる浮誇矜驕の沙汰にあらずして、吾が心の客觀的、遍通的方面に訴へたる意識也。一言すれば、吾が心之天に知られたるの意識也。眞の自信は、畢竟ずれば、吾れ自ら吾が心之天に知れたるの意識にあらずや。何人か吾が心之天を敬せざる、何人か吾が心之天に知らるゝことに、至高の滿足、窮極の安心を見出でざる。絕對的懷疑白眼の徒は言はず、苟くも嚴肅なる一念を以て、人生を觀じ、其の眞摯なる努力を泡沫の夢となさざる限り、何人か暗々の裡、吾が心之天に眞認識、眞評價の知己を求めて、こゝに究竟の安立を託せんとはせざる。自家妍媸自家知。而して吾が心之天に訴ふる心ぞ是れ取りも直さず神に知らるゝを願ふの心なる。神に知られんと願ふ心は、吾が心之天に知られんと願ふ心と同じ心の根柢より吹き出でて、其の一層調べ高く光强く震動煥發せる者にあらずや。自己の價値及び要求に對する眞自覺と、神に知られたる心とは所詮離れたるものにあらず。一は主觀に偏し、他は客觀に溢れたる也。古人が浩然天地の間に塞がると言ひしは、此の主觀信の客觀信に溢れたる

心也。彼のウォームスの大會に無前の自信を發揮して「神吾れを祐けよ」と叫びたる健兒の聲を聽かずや。大なる自信は神に之く。されば又孔子が知己を一種の靈智ある天に求めたるも、一直に支那三代の因襲的信仰の片影とのみ見るべからず、少なくとも彼れが之れを發したる刹那には、寧ろ其の盛大なる道德的自信の、客觀的に發展し煥發せるものと謂ふべき也。

價値

價値は之れを評價する自覺と、相錯り相待つ。一切の價値は、之れに價値を附し、之れを價値ありとする自覺者の在るありて、始めて之れを言ふを得べし。若し人生に眞善美の實在するを許さば、同時に復た眞善美その者の價値の、評價者、自覺者あるをも許さざる可らず。されど謂ふ所の自覺者を以て、個人覺のみとは見る可らず。個人覺には生滅あり、而して眞善美には生滅あらざれば也。天地の破壞、人類滅亡と共に、個人覺の全く地上に跡を絕つ時ありとも、眞善美は尙ほ永へに其の光輝ある實在をいづこにか有すと思はざるを得ざれば也。吾人は一切の個人覺を考へ去るを得べし、無きものとするを得べし。竟に眞善美の理想組織そのものを考へ去る能はず、拂拭し去る能はず、無きものとする能はず。眞善美は吾が一心の所產にあらず、吾れは之を左右する能はず、むしろ吾れは其の客觀的權威に左右せらる。眞善美の來るや、吾人は時として、唯〻之れを打仰いで個人覺に受け納る〻外なきが如き觀をなす。この消極的納受の一種微妙なる機關を有するもの、是れ特に天才と稱せらる〻者にあらずや。驚くべきかな眞善美の現前。誰れか能く其の深祕なる來路を繹ね窮むる、吾れ眞善美を作ると言はんか、吾れ實に之れを作りぬと惟へる刹那にも、尙ほ吾れは外より與へられたる則に從へることを意識す、意識せざる能はず、吾が自ら新たに踏み固めたりと思ふ道は、是れ既に太初より坦々として走れる大道にあらずや。されば眞善美は外より來つて吾れを縛すと言はんか、極めて然らず、其は寧ろ來つて、吾れを釋放し、吾れを自由にす。吾れの其の姿、其の聲に於けるや、宛も懷かしき古里の月を觀、古里の物語を聽く思ひあり。かくばかり吾れ親しくして、而かもかくばかり吾が個人覺の力に須つこと少なき眞善美は、そも〳〵何物の力に須つて能く自ら在りとするの客觀的權威を有するぞ。若し、吾人個人覺を超越し、若しくは其の根柢に深處遍在する大覺の在るにあらずば、人生に唯一の意義を附する眞善美の實在は要するに個人の、主觀の、空華幻影に過ぎざるべし。天地に遍滿せる大覺の、其の根柢となることなくして眞善美は能くその實在を保ち得る乎。眞善美若し、個人覺の生滅を超すとせば、吾人は須らく謙讓敬畏の心を以て其の實在の根據を大自覺者に歸すべき也。眞善美は單なる主觀の理想にあらず、眞善美は人生の中空に淡く浮べる虹霓にあらずして、堅く、旺んに燃えのぼる不盡の太陽也。眞善美の光明を慕ふものは、又その由つて發し來る太源の大自覺者に渇仰の思ひを騁せざるを得ず、眞善美の爲めに戰ふは神の爲めに戰ふ也。

理性

宗教上の信仰が感情分內の事にして理性と相涉らざるは、少しく實驗あるものの否まざる所なるべし。宗教は神祕なる個人の感情に根ざせる事實なり、言說すべからず、分析すべからず、概念組織に構成すべからず、猶ほ感覺てふ具象的事實の、竟に理知の分析說明を容さざる

が如し。然らば宗教の信仰は全く理性と相渉らざる獨立者なる乎。世の多く宗教家は、是くの如き見に住して、信仰を全く理性の權能以外に立たしめんとす。信仰果たして全く理性の權能以外に立つものなる乎。之れに答へて然りと言ふものは、是れ畢竟理性を以て論理的若しくは推論的理性と解したるなり。是くの如き理性の職とする所は、唯ゞ既存の事實と事實との關係を辿りて、之れに條理あらしむる也。自家撞着なからしむる也、論理あらしむる也、所謂理窟に合はしむる也。而して事實そのもの、理想そのものを立するの一事は、竟に與らず。理性若し唯だ是くの如き意義職分を有するに止まらんか、其の信仰の究竟相と觸接の點なき、辯を須たざるなり。信仰の極處が、個人神祕の感情に根ざせる事實なること、嚮に言へるが如し。所謂理性の是くの如き事實に對する、唯ゞ之れを所與の事實として打仰ぐあるのみ、攝受するあるのみ、其の意義及び價値を理解し、批議し、評價する如きは全く不可能とする所也。誰れか美意識の究竟相に是くの如き理性の力與れりといふ。誰れか宗教的信仰の極處に、是くの如き理性の容喙ありといふ。

されど理性の義これに盡きず。前言の理性は、唯だ特殊なる、而して寧ろ狹隘なる一義の理性を指斥したるに過ぎず。信仰と理性とを睽離すと見るは、要するに是の狹隘なる一義の理性をのみ眼中に置いて、之れを信仰と對せしむるがゆゑ也。されど若し理性を解して、唯だ之れを論理的、推論的のものとせず、更に之れを以て是くの如き論理、推論を行るの基礎、根據となるべき究竟の原理、理想其者を立する一性能と見做さんか、此には信仰對理性の關係は新たなる面目を著け來る。この一義の理性、是れ吾人全人の理想を與ふる立法的、統一的、直覺的理性にあらずや、この一義の理性、是れ唯だ吾人の心の知力的方面のみならず、更に意志感情の要素の大いに與る所ある、一言すれば、深く吾人全人要求に根ざせる所ある理性にあらずや。而して又この一義の理性、是れ取りも直さず前解狹義の理性と並びて、古來慣用せらるゝ所にあらずや。

信仰の究竟相は毫も理性の力に須たずとは一の理性に即いては言ひ得べし、他の理性に即いては言ふべからず。夫れ信仰は全人の理想と調和して、始めて充實すべし。信仰の煥發するや、全人格の根柢よりす。信仰若し全人の理想と調和を缺き、若しくは中に人格の二元的分裂を藏せんか、忽ち無限の空虚を生ずべし、光なく、力なく、萎靡枯槁、能く信仰として存立するなかるべし。而して是くの如き全人の究竟理想を吾人に附與するもの、謂ふ所の直覺的理性に外ならずとせば、信仰亦竟に理性の權威の下に立つことを否むべからざる也。何人か有意又無意に、自家信仰の窮極の理由根據を此の意義の理性に訴へざる。之れに訴ふる所なしと言ふは、是れ自ら欺けるのみ。信仰若し此の理性の直覺に參する所なからんか、其の全人に占むる一要素としての正當なる位置を失ふべく、其の活潑なる全人的交涉、はた此に杜絶すべし。信仰その者の吾人の全性情に占むべき不動の位置を指示するもの、即て理性究竟の直覺を措きてあらざれば也。何物か信仰を信仰そのものとして存立せしむる、理性の究竟の直覺のみ、其の直覺の揭ぐる理想のみ。直覺的理想は能く全人の理想を揭げ來りて、吾人一切の要求に個々正當なる意義と價値とを附して、互ひに相調和統一する所あらしむ。理性は是れ至高の法庭にあらずや。信仰亦實にこの至高の法庭に參して、自家存立の權利を要請する外はあらず。

若し古人と共に「不條理なるが故に信ず」と言

はんか、其の謂ふ不條理なるが故に信ずることの窮極の理由もしくは根據を與ふるもの、是れ亦竟に右いふ理性の力にあらずや。若し又信仰は理性(狹義の)を超すと見て、之れを理性以外の境に護らんか、此く信仰を理性(狹義の)の畛域より別ちながら、尙ほ其の相當なる存在權に是認の印を捺するもの是れ亦竟に右いふ理性の評價指導に須つにあらずや。謂ふ所理性の直覺の內容なるもの、人々萬殊なるべし、而かも何人か竟に能く理性最高の統一的指導以外に立ち得る。頑信迷溺の徒、尙ほ自家分上の理性に自ら是とする究竟の根據を託すべし。感情としての信仰は自家に局する所あり。自家以外に眼を放ち、自他の關係を較して其の全人組織に占むる位置を見定むる如きは其の能くせざる所、而して是れ惟り理性の能くする所にあらずや。狹義の理性は唯だ能く事實と事實との閒の論理上の關係を定むるを得、而かも能く事實そのもの(信仰、原理、理想)を立すると共に、其の事實相互の閒の價値上の位置、有極的意義を規定するもの、是れ惟りこゝに謂ふ直覺的理性の權能にあらずや。信仰は不斷に理性の感化を受く。信仰は不斷に理性の大氣を呼吸す。理性の大氣は、人により、時によりて極めて稀薄なることあるべし、極めて不透明なることあるべし、極めて淺陋狹局なることあるべし、而かも猶ほ信仰はこの大氣を呼吸して其の不斷の感化の中に生活せざる能はざる也。

愛

擾々たる人の世を眼下に瞰て、無限に高く獨立軒擧する、是れ吾が一の願也。一杯の水をだに、熱き心をこめて世の哀れなる同胞に頒ち與ふる、是れ吾が他の願也。曠達と細心と、白眼と熱誠と、是れ吾が兩つながら獲んと欲する所也。吾れは無限に我を擴大すると共に、無限に我を縮少し、無限に我を肯定確立すると共に、無限に我を否定抛擲せんことを願ふ。自家實現を理想とする希臘意識と、克己獻身を理想とする基督敎意識と、共に攝めて吾が一心の有とせんこと、是れ吾が本願にあらずや。何ものか能く此の矛盾を結ぶ緣の絲たる。吾れ之れを暗默の淵に索めて獲ず、之れを深祕の海に尋ねて會はず、吾れ之れを索めて竟に愛の姿にその面影を得たり。竊かに惟ふに、愛こそは獨りこの名を負ふに堪へたれ。夫れ愛人愛神は、廣く一切の矛盾を藏めて、深く之れを一樹の根柢に培ふ。我を殺してやがて活かすものは愛にあらずや。我を棄ててやがて獲るものは愛にあらずや。我を卑うしてやがて高うするものは愛にあらずや。愛は人生に於いて最も廣き波紋を描くと共に、又最も深く其の水心を點破す、又譬ふれば、愛は猶ほ高く天翔ける雲と、低く下ゆく水と、末の姿を隔てながら、心一つに澄み通へるが如き乎。古の神人が、一氣高く天地の實在に迫りて「吾父」の意識に躋れると共に、卑く身を世の無告者の閒に下して、其の罪障に淚を灑ぎ、其の弟子の足をさへ躬ら洗へる、是れ豈愛の大統一力にあらずや。愛を外にして、かゝる莊嚴なる矛盾を結ぶもの、復たあるべしや。

人ありて、愛は無私ならざるべからず、全く己れを獻ぐる純愛ならざるべからず、若し愛そのものに依りて得る心の喜びをだに一毫計較の中にまじへなば、純愛の全德既に玷けたるもの也と言はむ乎。されど、誰れか是くの如き純乎たる無私愛が吾人の性情に最高滿足を與ふる事實を否むものぞ。而して又誰れか愛に籠まれたる如是甚深の悅びを獲んとは願はざる。己れを獻ぐるは愛の一面のみ。愛は己れを獻ぐると共に、復た己れを獲。吾人は吾が全熱愛を

鍾むる者の中に、眞生命を見出だし得べきにあらずや。死之術と共に、生之術を併せ教ふるものは愛也。愛ばかり己れを遠く拋ち去つて復び遥く己れに還らしむるものはあらず。無我と我と、無限に袂を分ちながら、左右頭原に逢ふ者、是れ愛に非ずや。法律の蹄係は膚寸の我を捕ふるのみ、良心の聲は我を慘ましき二元に剖く。それ唯だ愛乎、我に迫らず、我を剖かず、裏より密かに我を煦め養ふて、潤澤の一氣、渾然徹せざる所なからしむ。愛は外より法を揭けずして、中より自ら之れを成就す。愛に依りて己れを捐つるは、是れ中心喜びて己れを捐つる也。而して中心喜びて己れを捐つる、是れ眞に己れを獲るものにあらずや、義務に依りて己れを捐つるものには未だ中心の喜びあらず。其の喜びには一味の空虛あり、凝滯あり、深からず、周からず、最も富贍なる生命は、吾人之れを義務に於いて見ずして、愛に於いて見る也。

幾多の慘烈なる人生の矛盾に、最も深く且つ豐富なる總合點を與ふるものは、夫れ唯だ愛乎。眞に愛の意を描くものは是れ[illegible]壤天地の至高者を描くものと謂ふべき也。

(明治三十七年十月)

心響録

悲哀の祕義

吾人は時として、漠然たれども極めて旺盛なる、朧げなれども極めて光輝ある、一種無類の感情に襲はるゝことあり、その來るや、風の如く、光の如く、無邊際より來りて無邊際に去る。而かも其の刹那の意識の中には、如何なる知識も、觀念も、想像も、詩も、哲學も得て言ひ盡くす能はざる豐贍無限の內容を藏する也。そも〳〵この一種の感情は何物ぞ。吾が過去一切の經驗をして顏色なからしむるこの感情は何物ぞ。そは夢か、夢にあらず、空か、空にあらず。そは却りて吾等が實在の經驗をして、夢よりも淡く、霧よりも薄からしめんとす。而して吾れはそこに彷彿、全實在の大海原を横絕して現實の岸邊を拍ち來る大潮音の響きを聞く。

この漠然たる衝動、感情は、やがて限りなき悲哀也。そは實に歎くべき所を知らざる歎きなり。祈るべき所を知らざる祈りなり。而して一たびこの悲哀の自覺に立たん乎、我、我と面相接して、其の間一髮を容れず。見ざる能はず、回避する能はず、掩蔽する與はず、ごまかす能はず。嗚呼我れ如何なれば是くの如き悲哀の運命を荷うて生れ來れる。而かも其の最も嚴肅なる事實なるを如何にせんや。悲哀は最も深き我の實相に非ずや。我れ昨は我れの眞實相に觸れずして、僞の我、假裝の我、膚寸の我と婆娑して喜べりしが、一たび悲哀の自覺に觸れてよりは、樂しかりし我が世の影は馳せて、嚴肅なる大事實は、天火の如く我が頭上に墜ち來りぬ。悲哀の毒箭は、ひしとわが魂の胸板を貫き破りぬ。我れは如何にかしてこの毒箭を拔かざるべからず、然らざれば永劫の死あるのみ。生死一機に會まりぬ。こゝに至りて我れは復た悲哀を弄ぶ能はざるなり。悲哀は事實也。事實は事實を以て戰はざるべからず。美しき空想の夢はた何爲る者ぞ。

吾れは血潮流るゝ心情を懐きて、唯だ戰ひぬ、進みぬ。熱き涙を以て、祈りぬ、求めぬ。而して我れは一種の貴き感應を得たり。感應はいづこよりか來れる、天よりか、地よりか。あらず實に悲哀そのものの中よりぞ來れるなる。天地の經綸に含まれたる智慧は遠くして深いかな。我れは無限の歎美と感謝とを捧げたり。見よ、悲哀を超越する解脫の鍵は世の永劫の初めより竊かに悲哀そのものの中に置かれたるにあらずや。

悲哀は其れ自らが一半の救なり。全く神を見ざるものに悲哀あるべからず、又全く神を見たるものに悲哀あることなし。我儕が有する一種の悲哀は、ほのかに打見し神の面影を、白日瞳々の裡に見んとする已みがたき要求の聲にあらずや。神はまづ悲哀の姿して我儕に來る。悲哀のうち、空ずべからざる一味の權威あり。我儕は悲哀を有することに於いて、悲哀そのものを通じて、悲哀以上の或るものを獲來る也。譬ふれば、悲哀は猶ほ冬枯れしたる我儕が靈魂の野邊に、既に竊かに萌しいでたる天地の春温の如き乎。悲哀はそのもの既に一恩寵なり、神人感應の一證果なり。カーライ　曰く、

"Man's Unhappiness comes of his Greatness; it is because there is an

Infinite in him, which with all his cunning he cannot quite bury under the Finite."

眞に悲哀に面したるものは、これ既に人類の偉大性を分有したるものにあらずや。

かくて悲哀によりて得たる一味證悟の力と喜びとは、吾が自覺に根ざしてまた拔くべからず。全宇宙もこの自覺の發達を壓止する能はず。其の證悟の力と喜びとは、吾がもの也、何物も之れを奪ふこと能はじ。吾れにこの新自覺あり、而してこのありといふ自覺以外に、このありといふは自覺を證するものあらず。されば吾れ個中の消息を何と言はんや。前途を望めば法界の靈峯、いやが上に重疊せり。吾れは限りなく進まざるべからず、されど同時に自ら經來れる個中山川の景を、如何に至難の事なりといふとも、我が力の及ぶ限り描かざるべからず。これわが分也、願也。

心性の要求

神といひ、佛といふもの、或は客觀的に實在するものにあらずとすとも、之れをして自己其のものの實在よりも尙ほ遙實なる客觀的實在を有せしめでは已まざる吾人主觀の根本要求は、そも〳〵何物ぞ。かの懷疑白眼の巨人ヲルテールをして、神もし存せずば、人、神を造ると言はしめたる此の根本要求は何物ぞ。（ヲルテールの一語は、實に彼れ自らが發せんとしたる所のものよりも遙かに幽玄なる祕義を含む。彼れは自ら發したる此の一語の奧義に躓けり。世に人、神を造るといふばかり含蓄深き語はあらざる也。）吾人が知識といひ、眞理といふもの、亦畢竟吾人心性の根本要求と其の實現とを離れては、其意義を語る可らず。彼の自ら稱して個々の經驗的事實其のものを唯一研究の對境とすといふなる一派の自然科學者等をして、尙ほ個々の經驗的事實以外、又以上に、理法といひ天則といふが如き種々の超經驗、超事實を附加せしめ、若しくは原子といひ勢力といふが如き彼等自然科學者等自らの立脚地よりしては理當さに極力拒斥すべき一種の形而上學的、實體學的槪念をさへ備ひ來り、之れを根柢的假定として一切の事實を統一說明せしめんとするもの、是れ亦要するに吾人心性の本具せる知識の理想てふ根本要求の然らしむる所にあらずや。吾人は知識の境に於いてだに、客觀の事實にのみ其の成を仰ぐものにあらず、寧ろ客觀の事實そのもの（其の分析の極する所は、竟に感覺てふ材料そのもの、更に一步を進めては感覺そのものを成り立たしむる或外來の刺激もしくは徵號そのもの）を吾人本具の知識的理想の圖式の內に統攝して、其の混沌を秩序界とし、其の闇昧を光明とし、其の婆々和々を言ひ整へたる言語となす。知識構成の標準は、外に非ずして我れに在り、我れ必ずしも件の標準を常に懸空に持すといはず、唯だ其の外より來る感覺又は感覺の徵號と觸接するや、件の知識標準は、主觀暗中より躍り出でて、妙に之れと交涉し、抱合し、之れを組織し、解釋し、乃ち知識といひ眞理といふ者忽然として就る。（驚くべき事實なるかな、瞑想し來れば唯〻妙法といふの外なき超絕駭絕の現象はあらずや。）眞理は外より來らずして內より發す。吾人本有の知識上の理想もしくは要求を外界に實現發展して客觀化したるもの、是れ即ち森然として章ある眞理の王國にあらずや。眞理といひ知識といふ、亦これ竟に吾人の主觀理想が叫び出づる要求の聲を外にして在るべからず。そも〳〵此の根本要求の本性は何ぞ、此の根本要求の意義本性に深く游泳せんもの、やがて見性の堂に躋り、見神の奧に入る。

心機縱横

我れに拘する勿れ。吾れ一人の生命の事實に執する勿れ。我れを環繞せる森然たる普遍の生命を見よ。吾が生命の一波を載せて渾浩流轉する天地の大波に同ぜよ。淵默して雷聲する宇宙の大音律に調べ諧せよ。天地の生命と一樹の枝に昌ゆく心を厚うせよ。萬有と倶に我れを展べよ。空虛なければ生死なし。雲を衣とし、露を裀とし、或は孤松峯上の寂寥に嘯き、或は波間浩蕩の心に分け入る。「見る所花にあらずといふ事なく、思ふ所月にあらずと言ふ事なし」。樂意隨處に動きて、人間また枯槁の鄕ならず。春は心の朝霞、名もなき山に搖曳し、秋は尾花が戀袖に、懷かしき遠情を馳す。かくて神は世のはかなき運命に泣く人の子にも自ら救ふべき靈し力を與へたまふなる。心機縱横是の如くに活くるは是れ美はしく活くるなり。

自力信と他力信

自力信の信念一たび煥發し來らんか、凡夫と雖も尙ほ古の聖者が「天上天下唯我獨尊」といへりし崇高なる意識の一角に參するを得べし。げにや自力信の大を言はん乎、美を言はん乎、權威を言はん乎、能く因果の世界を脚下に踏み、能く時空の六合を翕闢し、能く宿命の大縈縛を解きて更に之れを溫かなる永劫の法衣として身に纏ふことを得、自力信の煥發する所、天地萬物を吾が一心に統攝し、山河大地草木國土をば、皆動き〳〵て休まざる一念影裏の物と觀ず。自力信の意識の前には、萬物皆心靈の光と融けて流るゝなり。透明の世界也、光流の世界也。一物も得て我がこの流るゝ如き獨往獨來の大自在の意識を碍ぐるものはあらず。

さはれ、吾れは尙ほ他の一つのいと微かなれども極めて力ある心情の聲をぞ聽く。これ吾が譬ふるに物なき寂寞と悲哀とを藏する小弱無限の意識に胸拊つ聲にあらずや。大慈の力に打すがりて、その優しき恩寵の蔭に庇はれんと願ふ中心の歎きにあらずや。唯だ〳〵涙のみ、口意ふ能はざる祈願のみ、思慕のみ、嚮往のみ、而して又歸依のみ、讚美のみ、信樂のみ。驚くべし、曩の天地獨闢の大自力そのものが、こゝにては優に美しき大慈の恩寵にてもあるかな。されば爾が虛驕矜夸の一念を去れよ。人誰れか「何の受領はざるものを有つか、若し有たずば、何ぞ受領はざるがごとく誇るか」。我儕に一の所有なし。一切は惠也、賚也。我儕もし誇らば、我儕が弱きを誇れ、大悲の力を誇れ、自力ならぬ自力を誇れ。

如何なれば自力信は他力信を、他力信は自力信を撃つぞ。自力は神也。他力は神也。神と人と相抱きて、相即不二の法門をなす。自力は他力の涙に育てられ、他力は自力の光を須つて發越宣著す。「羅馬書」の著者又曰はく、「艱難にも喜べり、そは艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は恥を來さざるを知る、こは我儕に賜ふ所の聖靈によりて、神之愛我儕に漑げばなり」と。曾ては殆んど風馬牛とのみ看過したるこの一語、今は異しうも吾が心靈生活の深き寂しき一隅を優に燭らし暖むる光とはなりぬ。げに吾が枯槁の魂は、神より來る恩化の露によりてぞ日新の生命を得るなる。自力向上の覺悟と、他力恩寵の信念とは、深く味ひ收めてこの一語のうちにあり。

（明治三十八年二月）

偶思錄

（ヂョップとポーロ、希臘的意識と基督教的意識）

舊約に見はれたるヂョップの道徳的自信の盛大なるは、何人も驚歎する所なり。ヂョップは、かの神を擁護して彼れを言ひ伏せんとて出で來れる三人の友よりも、尙ほ深く神の測る可らざる大能大知を知れるもの也。然るに尙ほ一片自家の道徳的自信に立つや、宛ら無畏の獅子吼の如くに、きほひにきほひて、飽くまで自ら是として神の不法を譴めて已まず。あはれ、世にわればかり無垢淸淨の義人はあらじを。見よ、神われを試み給はば、われは金の如くにして出で來らむ。わが生涯のいづこに、いかなる一點のしみ、穢れはあるぞ。何とて爾は無慈悲なる鐵の笞をば、骨も折れよとわが頭上には打ち下したまふ。嗚呼、神よ、乞ふ、理あらばわれに答へたまへ。乞ふ聽かん、乞ふ應へよ。」夫れヂョップは、なほ幼稚なる時代の思潮に限られて、未だ人間人格の尊貴を知らざりしもの也。彼は神を常に天上に在まし、人を地上に匍ふ蛆蟲の如くに觀たりしもの也。而して其の一たび自ら是とする道徳的自信の上に立つや、浩々の一氣、神に薄りて、直ちに彼れと曲直爭はんとす。わが無上の道徳的標準を揮りかざしては、逆しまに神其者に批判を加へんとす。かくて、煩悶、苦惱、怨恨、不平、呪詛、嘲罵、讒謗の噴火、炎々騰上し來りては、かの義に頭振りつゝ賢しがりたる三人の友の「辱の慰め」は、復た一片の春雪よりも力なかりし也。偉なるかな、ヂョップの道徳的自信。されど聽けよ、世にはヂョップの聲よりも尙ほ偉いなる聲あるを。

ポーロ曰はく、「われ自ら顧みるに過あるを覺えず、然れども是れによりて義とせられず、われを評るものは主也」と。何等の自信、而して何等の謙遜。ヂョップの道徳的偉大を見たる吾人は、ポーロの一語に、更に別様、更に深奧の偉大を見る。ヂョップの偉大は未だ救はれざる者の偉大也。ポーロの偉大は救はれたる者の偉大也。彼れは神を見ざるものの聲、是れは神を見たるものの聲。彼れは天空に迫る峨々たる山の力を現はし、是れは星を涵し月を沈め、萬類を深藏せる洋々たる大海原の平和を歌ふ。自ら是として讓らざるヂョップは竟にポーロの結論に來らざるべからず。ヂョップを救ふものはポーロなり。思ふにヂョップが遂に一たび面りに神を見て達したりと思はるゝ解脫の内容は、ポーロが件の一語にいみじくも言ひ表はしたるものと同じかりしなるべし、否同じからではあるべからず。

自ら顧みて疚ましからざるの一念ほど、人をして强からしむるものはあらず。自ら是とし、自ら恃み、自ら重んずるの意氣、こゝに旺然として生じ來る。されど、吾人は是くの如き道徳的自尊心の橫溢せる折にだに、時に瞿然として深き罪障の意識に襲はるゝことあり。自ら是とする心の底に、空虚の深淵橫はりて、われらが性の脆弱に泣かざるを得ざる、これ何の故ぞ。吾人はわが道徳を自ら是とするには時に餘りに深き歎息ある也。世の道徳學者等、動ち是くの如き心狀態を不健全もしくは不正常とす。されど彼等が見て不健全、不正常とするもの、やがてわれらが宗教的生活の高き一ふしにはあらずや。道徳上の自尊は、男らしき、

公明なる、自然なる態度なるべし、されどそは未だ人心の聖域に觸れたるものとは謂ふべからず。

古希臘人は自ら是とするの心に富みたり。彼等は憚る所なく自己の徳行を誇りたり。われ自らの理性を働かして辛勞努力したる結果として得たる徳、これをしも重んじ、尊び、誇るに何の非かある、自尊は美徳なり、何ぞ謙々として自ら卑うし、自ら小とせんやといふもの、是れ實に彼等が不斷の自覺なりし也。セネカが「唯だ一つ賢者は神に優る、神の何物に對しても畏るゝ所なきは、其の性に負へるなれど、賢者は之れを彼れ自らに負ふ」と言へる者、希臘人の自力的自尊的道徳を道破し得たりといふべし。然るに轉じて基督教(殊に初代、中代の)の道徳的意識に見んか、こゝには自ら是とする自尊心を罪惡視するに憚らず。基督教徒は、自恃自尊の道徳を惡魔外道の道徳と見たり。彼等の貴ぶ所は謙讓也、卑下也、抑損也、自小也、無力もしくは孤弱の感は、彼等を支配する根本の氣分なり。彼等は常に痛歎の胸を打つて、自家の罪業を神に訴ふる也。彼等は常に自ら言ふにも足らぬ「無益の僕」と思ふ也。彼等は希臘人の所謂方正之人よりも、智慧も力もないと哀れなる罪人こそ、なか〳〵に救の門に入るに適はしき者なれと見たる也。總じて希臘的道徳と基督教的道徳とは、事毎に兩端の觀をなしたる中に、自家の徳を自家、是とする件の自尊的意識の如きは、その最も著き者にあらずや。希臘人は自家の理性をもて情欲を調御訓練する所に誇るべき徳行華さくといふ。基督教徒は是くの如きは寧ろ罪惡にして徳にあらずといふ。その美徳と見らるゝだけに一層の「大惡」なりといふ。尊者オーゴステンの見の如き、正しく之れを代表す。曰はく「靈魂の身體を支配し、理性の惡衝動を統一するは、稱すべきに似たれども、而かも靈魂及び理性そのものが、神命を奉事するにあらざれば、其は斷じて能く身體及び衝動を調御する能はじ。神を知らず其の鑑照の下に服せずして、諸惡の源たる惡魔の腐敗に浸潰せる心が、身體及び不徳の主たりとは、そは果たして如何なる主なるべき。徳若し神と何の交渉もなからんか、そは眞の徳に非ずして寧ろ不徳也……。かゝる徳は矜大にして傲岸なるもの、隨つて徳にあらずして不徳と見るべし」と。オーゴステンの見の一端に騁せたる、言はず、唯だ彼れが自力自尊の意識をもて勝れる希臘道徳を痛擊せんとしたるの意、吾人をして反思せしむるに足る。自ら是とする希臘的意識是なる乎、自家罪障のしげきに泣く基督教的意識是なる乎、こは今斷ずべき限りにあらざるべし。吾人は唯だ自家至深の要求に忠ならんがために、希臘的意識に最後の宗教的總合を加ふるの已むべからざるを思ふ。而して飜りて思ふ、ヂョップ(煩悶中の)の道徳的偉大は、要するに希臘的偉大を出でずと。吾人がヂョップと共に達すべき究竟の解脫地は、ポーロが前の一語に證示せるの位地ならざるべからず。一切衆生は、自ら是とする自家の徳行によりて、神に義とせらるゝ能はざる也。

(明治三十八年四月)

心の一ふし

法友

わが心の窮極に願ひ求むる所は、又彼れの心の窮極に願ひ求むる所、わが裏なる深き悲哀は、又同じく彼れが至深の悲哀なりと觀じて、こゝに我れから心の調べを合はせて、一切の人に打割はんか、何人か皆第二の吾れならざる。性情や、傾向や、年齒や、門地や、器量や、材幹や、職業や、學問や、德行や、此等すべてのものの相違は、この眞の人としての眞實なる抱擁には何の妨げともならざるべし。是くの如き心情の高調をもて相抱きたる友、之れを法友といふ。

白眼の友は言はず、青眼の友あり、「心胸の友」あり、斷金といひ、刎頸といふ、皆わが心を取つて他の心に置く赤心相許の義ならざるはなし。わが所謂法友の義は、尙ほこれらと相殊なり。思ふに、わが心の底に深く潜める一種の願ひと悲しみとを凡ての人の中にも觀じて、此に同情の中心點を置く、これ取りも直さず慈眼視衆生の菩薩心にあらざる乎。苟くも常にこの心を體して、彼れ我れに乖くとも、我れ彼れに乖かじとの一念だにあらんか、縱令我れを呪詛し、嫉視するものありとも、我れは尙ほ彼れが、内人眞人に分け入りて、倶に偕に歎き祈るの法涙なかるべしやは。（これ實に聖者尙ほ到り難しとするところ。）此く觀じて、吾人は所謂罪過と人とを別つことを得。如何なる罪過の醜惡相の底にも、尙ほわれと同じ要めと歎きとの動ける見れば、嗚呼彼れにも亦人生の大哀なきには非ず、唯だ未だ中心誠に其の歎くべき所、祈るべき所を知らざる也との感、溫然として湧生すべし。「われに惡を仕向けんものをば寧ろ憐れめ、彼等が罪過は、畢竟無知より來る」とは、是れ羅馬ストア派の賢人の誥ぐる所にあらずや。かの十字架の上にありて、「父よ彼等を赦し給へ、其の爲す所を知らざるが故也」との世にも比ひなき崇高無上の祈りをなしたる基督は、取りも直さず彼れが人類を一如根本の悲哀と要求との上より觀じて、其の一切の偶然の過誤、皮相の罪障を放過し去りたる神心そのものにあらずや。

野邊に生ふる若草の滋きを見れば、吾れも一つ緑に萌え出でんの思ひあり。夕べの空を淋しげに徂く孤雲のゆくへを眺めては、轉たわが身世のゆくて覺束なき心地ぞする、こゝにも一種の同情と感應とあり、さはれ、こは要するに、折ふしに過ぎゆく景情の奇と織りなせる詩觀の彩なるのみ。吾人はこの詩觀以奥に尙ほ深く自然萬有と結縁すべき恆久眞實なる或者を觀じ得ざる乎。吾人は、自然」の中に「人」を見得ざる乎。Man vegitative を發見し得ざる乎。一言すれば「自然」の中に、われらと同じ悲哀と要求とを分てる法友を觀じて心跳らざる乎。傳へいふ、アシシの大德フランシスは、己が飼養せる籠中の小鳥をも常にわれらが兄弟と呼びて説教をなしたりと。彼れにありては、禽獸も亦人類一味の悲哀を分ちたる假りそめならぬ法友なりけるなり。彼等も同じ一神の都に旅だつ法界有縁の同行者なりけるなり。かくして吾人は詩觀以外に一眞實觀を有す。眞實觀とは、則ち一切の有情無情の中に「人」を觀、法友を觀ずることにあらずや。

恩惠の生活

心の雨風繁き折ふし、ふと夜半の夢さめて、恩惠の月影いとさやかなるに、しみ〴〵とうれしく、衷より喜びの杯溢るゝの思ひせしこと幾たびなりし。今や圓かなる恩惠の月は、わがいぶせき蹉跎生活のいかに雲濃く立ち蔽へる間をも洩れ來らずといふことなし。恩惠はわが恆常の所有とはなりぬ。感謝す、わが一切の自力、向上、奮勵、努力は、神の惠の河床に打沿うて、日ごと夜ごとを澱みなく流るゝなり。神の惠に依るなる平和信樂の意識は、わが心の不斷の背景とはなりぬ。この背景の前に又上に、わが自力の手は大膽に伸び、わが自由の足は活潑に動く。

自ら顧みるに自由もしくは自力の意識、儼として我れに在り。否むべからず、抹すべからず。この意識は、如何なる科學上の必至論、宗敎上の定道論を以てするも、尙ほ且つ撼かしがたき光輝ある意識直接の自證也、自信なり。誰れか神の恩惠を必至的に絕對なりとは言ふ。他力絕對觀や可し。さはれ、神の他力恩惠は、われらが自力自由の意識を存在せしめざるほどに狹く貧しきものなる乎、決して否らず。自力の意識の高く盛んに潮さし來るほど、他力感恩の優なる意識も、亦盛んに高潮し來る。われ知る、すべて奇しき妙なるものは、直ちに上天の賜として來ることを。眞に自由といひ、自力といふものの靈しき力の存在を味ふものにして、始めて深く强く神の他力恩惠に觸るゝことを得べき也。われらが受け得たる他力の意識は、自力を包みたる他力の意識なるなり。

われは世より我れを救ひ出だし給へとは祈らじ、世に勝つ信を與へ給へと祈らん。かくして神より得たる自力の信念を以て世にある限りを戰はん。戰うて若し破れんか、ます〳〵わが力の弱きを知りて神を仰ぎ賴むべし。戰うて若し勝たんか、われをして勝たしめたる神に感謝して、倍〻其の大悲恩寵の力に打すがるべし。敗るゝも感謝なり、勝つも亦感謝也。これわれが調べ高き恩惠生活の一ふしにはあらずや。

思ふに他力は神祕なる恩惠の雲に冲る高峯の如き乎。其の末廣がりに下降して地平に近づくや、見るべし。自力の裾野の遠くして廣きほど、吾人は倍〻他力恩寵の峯を打仰ぐこと高し。古人曰はずや、「我れは植ゑアポロは漑ぐ、長つるものは惟だ神也」と。われらは神に長てられながら、尙ほ自ら種ゑ自ら漑ぐの自由を有てり、而してこれやがて神の惠なるが故に、われ之れを神に感謝す。

（明治三十八年四月）

驚異と宗教

古人が驚異の念を以て哲學研究の始めなりと道破したりしが、これは獨り哲學に於いて然るのみにあらず、宗教に於いて特に然り。否、驚異の感情は、宗教的意識の初、中、終を一貫して、其の不易の要素をなすといふも不可ならず。古より、個人に於いても團體に於いても、宗教的信念の、新鮮活潑を失うて、抑塞し、滑滯し、固結することあるや、そこには必ず驚異の感情の涸渇し、闕如せるあるを見るなり。吾人の宗教的信念をして、常に火の如く燃え、水の如く流れて息まざらしむるものは、この驚異の情が一分其の有力なる原因をなすが故にあらずや。驚異の感情は直ちに天地の奥なる永劫の神火を把み來りて、吾等が信仰の樹根に灑ぐ、悟道の上の信念の底には、常に一種の調べ高き驚異の情の流るゝあり、以て能く其の大をなし、新をなし、充實をなすなり。若しそれ悟前について言はんか、一たび驚き、二たび驚き、三たび驚き、四たび五たび驚き驚きて已まざれば、如何なる鈍根の機といふとも、尚ほ且つ豁然として徹すべし。驚異の感情の高潮する所、凡夫をして覺者たらしむ。曾て或法話類の書を讀みたる中に、眼に一丁字なき一農夫が、能く其の鈍根に打ち克ちて、見性の大事を做し遂げたることを記したる一節あり。其の意に云はく、禪僧農夫に打向ひ、問うて曰はく、「汝は何時生まれたるか」、農夫直ちに應へて曰はく、「如來と同時に生まれたり」、曰はく、「汝は當年何歳なるか」、曰はく、「如來と同歳なり」、是に於いて禪僧また問ふに如來は何處に居るかを以てせしに、彼れ直ちに手を動かして、此處にと應へたりければ、禪僧も感に入りて、其の證悟の透徹なるを允したり、云々と。思ふに、此くの如きは往々實際にあり得べき事例にして、別に奇とするに足らざるべし。但だ吾人をしてこゝに深省を發せしむべき一事は、此くの如き無學無識の一凡人をして、一朝徹底して此くの如き宗教的天才たらしめたるものは何ぞといふことなり。而して是れ唯だ唯だ彼れが、人類通有の、深根の、天賦たる驚異の感情を活潑に働かして、其の科を盈たしたるが故と見るべきにあらずや。彼れ豈一たび蘧然として自己に對する驚異の情に打たるゝ所あるや、之れを再びして棄てず、三たびして放たず、竟に驚き驚きて如是崇高なる三昧地に達し得たるものならざらんや。宗教の事その眞諦に立ち入らば、復た知識學問と何の關りなきこと是れにて知るべし。げにや凡夫も亦皆生まれながらにして如來の智慧德相を具へたり。而してこの隱れたる深き寶珠を掘り出だす有力なる器ありとせば、そはやがて驚異の一念にあらざる乎。超絶の驚異ありて徹底し、絶超の驚異ありて見性し、超絶の驚異ありて歎美景仰し、超絶の驚異ありて歸依信樂す。カーライルなどが、屢ゝ驚異を宗教の基礎根本なる如くに道説せるは、人類不拔の實驗に基づける眞理として吾人の想起せざるを得ざる所なり。

尚ほ記す、予の幼かりし折、路邊の磊々たる岩石を打眺めて、屢ゝ一種の埒なき默想に耽りたることありしを。かゝりけるをりは、いつも手もて其の石を押し動かし、或は其の硬きかどかどしき面に觸りなどして、何心なく半ばは衝動的に、其の石の實在性を確め、さて後にかゝる物の無窮に天地の間に在るの不可思議に

撞著して、子供心の解くよしもなき不可言の驚異に充たさるゝを常としたりき。今より憶へばこの心これ幼稚ながらに存在の驚異を經驗せるの心なりけるなり。われに取りては物の在りてふことは、一種無限の寂寞と不安とを含める驚異の太源たりし也。（こは思ふに「存在」の自性または實相の何たるかが一切不明なりしに因れるなり。）存在は天地の第一事實也。予はこの第一事實に對して、無限の驚異を感じたるなり。而してこの幼かりし驚異の感情は、後年予が明瞭なる自覺を以て宗教的生活に入らんとする所謂新生活の首途に於いて、復び深奥幽玄なる形を以て激烈に襲來せり。爾時、予をして一面に混迷、懷疑、不安、恐怖、孤寂、闇黑の大海に漂はしめたるものも、亦實にこの驚異の感情なりける也。この驚異は、今は打勝たれたる姿ながらに尙ほ一種の形にて予が心の奥深く流れつゝあり、この後も亦思ふにしかあるべし。驚異なき所、宗教は其の活生命を失ふべし。

基督が、心の淸きもの、貧しきもの、空しきもの、單純なるもの、謙遜なるものを以て、最も宗教的祝福を享くるに堪へたりとなせるの意義を稽ふるに、是れ一つは、少なくとも此くの如き者のみ、能く偉大なるものに驚異し、崇高なるものを歎美し、善美なるものを渇仰することを能くするが故にあらずや。心の淸きものは、己が心の鏡を打開いて、如實に天地の高大と美妙とを寫し出づるが故に、こゝには新鮮なる驚異の一念絶えず岩間の水とも湧きぬべく、而してやがて其の念ひの溢れに溢れて、超絶無限の相を著け來るや、彼れ蘧然として見性見神の人となる。世に嬰兒ほど心空しきものはあらじ、而して又嬰兒ほど驚異の念の新鮮なるものはあらじ。人あり、若しこの嬰兒の如き新鮮なる驚異の情を有して、更に之れを博厚、深邃、豐富ならしめんか、彼れは一草一木を見て、直ちに實在の祕奥に見徹すべし。かるが故に、驚異は僞善と容れず、驕慢と容れず、頑梗と容れず、成心と容れず、傳說と容れず、有無形の一切の偶像と容れず、而して又形式儀文と容れず。基督限りなき感謝の念に溢れて天を仰ぎて曰はく、「天地の主なる父よ、此の事を智者と達者とに隱して赤子に顯したまふを謝す」と。彼れは赤子の如き空しき心を有し、隨つて其の心一種の純粹博大なる驚異歎美の情調をもて常に充ち盈てりき。

何事をも心得顏に立振舞ふもの多きは、いつの世にも見る常相なり。彼等の國には新たなるもの珍らしきもの、驚異すべきもの、一もあるなし。支那の古賢人は喟然として歎じて曰はく、「五情の好惡は古猶ほ今の如きなり、四體の安危は古猶ほ今の如きなり、世事の苦樂は古猶ほ今の如きなり、變易治亂は古猶ほ今の如きなり、既に之れを聞きたり、既に之れを見たり、既に之れを更へたり、百年猶ほ其の多きを厭ふ、況んや久生の苦をや」と。世の一切に新たなる者あるなし。驚異すべきものあるなし。人生の花は褪せ、歷史の幹は朽ちたり。因襲制度の枯葉病葉徒らに堆うして、人は永へに其の中に老いんとす。而して彼等は人生本來此くの如きものぞと心得、「さるからさぞ」と、萬づ事もなげに言ひ去る也。彼等は一たび驚きて再びせず、再び驚きて三たびせず、彼等の驚異は僅かに事相一膜の上を走りて已むなり。超絶無限の驚きは、彼等の曾て知らざる所。否彼等はむしろ一切驚かざるを以て其の信條となすなり。以爲へらく、眠食し、勞逸し、冠婚し、葬祭す、人生竟に何の奇ぞ。雲行き、雨施し、春發き、秋脫つ、天地竟に何の不可思議ぞと。彼等は、曈々としてとめづらしくさしのぼる曙の大光を仰ぎても、曾て眼を拭

ひしことあらざるなり、彼等は、春の野川の水に優しき思ひを宿せる夕星を見ても、曾て心動きしことあらざる也。彼等の花に神祕の匂ひなく、彼等の月に寂照の光なし。彼等の「自己」は、曾て一たびも其の自覺自觀の對境たりしことあらざる也。彼等の國の眞善美は名徒らにいかめしうして、曾て一たびも彼等が心靈の扉を啓きしことあらざる也。彼等は人生の寂寞を知らず、人生の大哀を知らず、人生の大歡喜を知らず、彼等は世の所謂一切價値を倒錯觀することを知らず、隨つて竟に眞實を知らず、彼等が人生の舟に載せたるものは活きたる自覺にあらずして、死にたる夢也。彼等は死夢を載せていづこよりか來り、死夢を載せていづこにか逝く。嗚呼彼等は永へに若く、清く、新たなるべき心靈の眼を天地人生に對して閉ぢたり、哀しむべし、彼等は視ても見ず、聞きても聽かざる「閉明閉聰」の人となれるなり。天上の星に無聲の樂音を聞き、野邊の草花に王者猶ほ及ばざるの榮華を驚きたる曇りなき心のしらべは、あはれ一たびも彼等の胸に宿りしことはあらず、而して以爲へらく、天地人生は是くの如きものなり、一の奇なく、一の新なく、一の驚異なしと。嗚呼何物か彼等の眼を塞ぎ、聰を閉ぎたる。文明也、祖師也、習慣也、傳說也、制度也、其の他一切の偶像權威也。吾人は知らず識らずして この積重の威ある機關の絲に操らるる木人たらんとす。いと淺まし、いと恐ろし。吾人は屢ゝ勇敢なる態度を取つて、此等一切の成心、偶像、權威の外に超脫し、赤子天眞の心に立ち還りて天地人生に打對はざるべからず。是くの如くして始めて吾人に驚異あり、宗教あり。「智を得んが爲めに吾人は書を讀むを要せず、書籍の數は限りなく、而して其は唯だ吾人を果てしなき虛榮に導くに過ぎず、寧ろ凡ての人をしてアダムの如く唯だ獨り世界にありと想像せしめ、而して唯だ世界を世界そのものの相に於いて觀ぜしめよ」とは、是れ神祕哲學者ニコラウス・クザーヌスの吾人に警告せる所ならずや。

天地は驚くべし、天地に驚く我は更に驚くべし。而して我に驚く我は更に又驚くべし。かくて吾人が我に驚く深さに際限あるべからず。人もし此の驚くべき我に其の一念を鍾めんか、其處に一切の祕義を包める無量の法音の、沈々として横に天地に亙り、縱に人生を貫くを聽取すべし。げにや、そは、「天淵」也、「靈臺」也、「祕府」也、否、生命と光明との大海也。吾人もしこの「我」てふ大海の岸邊に立つて、其の限りなき驚異の眼を開かんか、道は最早吾人を去ること遠からじ、「邇く汝の口にあり、汝の心にあり」。唯だ飽くまでも問ふことを要す、「我」とは何ぞやと。一切萬法を一念の上に構へ出だす底の大產出力を有するの「我」、眞善美の理想を自ら揭げ出だして之れを實にしゆくの「我」、文明を造り、歷史を編み出だすの「我」、無限に向上自彊して永遠に足ることを知らざるの「我」、一切現實の經驗を以てして尙ほ且つ塡むるに足らざる超自然の要求を有するの「我」、如何なる靈魂の傷手をも自ら醫し得るの確信を有すると共に、心情の深き惱みと傷みとに泣くの「我」、天上天下獨尊の自覺を有すると共に、賤しき垣根の草花にも見ぬ世の緣の、夢かと辿らるゝ思ひする「我」、そも〳〵如是「我」は何物ぞと。一たび是くの如く眞面目に我に面接するに及んで、誰れか限りなき驚異の一念に打たれざるべき。この時退轉せず、不斷に一念の氣合を弛べず、進み進んで滿を引くの弓の如くすべし。やがて機熟しぬれば、件の一念驚異の弓は、心弦强く彈じ去つて、鏗然としてあやまたず實在の的に稀有の法音を撞き出づべし。驚くべきかな、今の我は最早昨の我にあらず、咄々、

我、神乎、神、我乎。我、神に躋れるなり、神、我に格れる也。現實と超自然と、我と神と相抱きぬ、相觸れぬ、相照らしぬ、相道交しぬ。神を見たるなり、神の聲を聽きたるなり、神の子たるを證したるなり、神の愛に分け入りたるなり。不可思議なるかな、現實は「超絕」となりぬ。すべてこの刹那の意識、筆にも言葉にも盡くされず。この自覺、これ自然界の意匠より讀み到りたるにもあらず、因果の關係より溯りたるにもあらず、「完全」てふ觀念よりして實在そのものを演繹し出だしたるにもあらず、道德上の要求より迫り出だしたるにもあらず、釋迦の意識を摹倣し、基督の信仰に依傍して得たるにもあらず。顧みれば、唯だこれ、我れが我れ自らに對する一念やみがたき驚異の念の獨立に產み出だしたる偉大なる事實にはあらずや。そは直識也、直覺也、自證也、面接也、見よ「こゝに」、「こゝに」と叫ばざるを得ざる端的の事實也。このをり、一種寂寥の意識の中に、大歡喜の情、ひた湧きに湧くべし。嗚呼われ、事を鋪張して說かず、わが自ら經たりし稀有微妙の心證に基づきて、自ら揣らず世に向つて道說する也。人よ聽け、是くの如くにして吾人は神を見、是くの如くにして吾人は一期の大事を成し遂げ得る也。感謝せよ、一切人生の祕義を啓くべき唯一の鑰は、かくて吾人手中の者とはなりけるなり。

宋儒の推理勃窣を以てして、尙ほ且つ人心の靈明に驚き驚くや、一念の誠敬を不斷の燈として其の聖壇に獻げたり。敬の一字は、宋儒爲學の根本の工夫及び精神にして、又實に一種の宗敎的情調の宿る所にあらずや。唯だ彼等が自己を通じて見たりし神の、竟に天理といふが如き抽象神にして具象神たらざりしは、其の根本の排情觀、之れをして然らしめたる也。

所謂驚異の情は、悟前と悟後とに於いて、其の內容に多少の差あるべく、殊に悟後に於いて其が寧ろ歎美感謝の情もて織りなさるゝの多き、これはた否むべからざる事實なるべしといへども、兎も角もこの一念が、偉大なる宗敎的生活の一貫の根調をなして、常に其の新鮮なる活動の一源泉たるは看過すべからず。未だ悟らざるものは悟らんが爲めに偉大なる驚異あるを要し、既に悟れるものは悟後の生活に常に光輝充實あらせんが爲めに深奧なる驚異あるを要す。驚異せよ、眞面目に驚異せよ、超絕的に驚異せよ、驚異は宗敎の母也。

（明治三十八年五月）

予が見神の實驗

この篇は世の宗教的經驗深き人に示さん爲めにはあらずして唯だ心洵に神を求めて宗教的生活に入らんとする世の多くの友に薦めんとて也。

予は今予みづからの見神の實驗につきて語る所あらんとす。この事、予に於いては多少心苦しからざるに非ず。されど、予は今、世の常の自慮や、心配ひを一切打遣てて、出來るだけ忠實に、明暢に、予が見たる所を語らでは已み難き一つの使命を有するを感ず。あながち己が見證を將て世に吹聽せんとにはあらず。唯だ吾が鈍根劣機を以てして、尙ほ且つこの稀有の心證に與ることを得たる嬉しさ、忝けなさの抑へあへざると、且つは世の、心洵に神に憬れて未だその聲を聽かざるもの、人知れず心の憔みに泣くもの、迷ふもの、煩ふもの、一言すればすべて人生問題に躓き傷きて愴痛の涙を嚥へるもの、凡そ是等・味の友にわが見得せる所を如實に分ち傳へんが爲めに語らんとはするなり。あはれ、上天も見そなはせ、予は今この一個の貴き音づれを世に宣べんが爲めに此處に立てり。

わが見證をさながらに世に傳へんといふ。事や、もと至難なり。嗚呼吾れ一たび神を見てしより、おほけなくも此の一大事因緣を世に宣べ傳へんと願ふ心のみ、日ごとに強くなりゆきて、而かも如何にして之れを宣べ傳ふべきかの手段に至りては、放焉として闕けたり。如何にしてこの目的を達すべき。顧みれば、わが見證の意識の、超絕駭絕にして幽玄深奧なる、到底思議言說の以て加ふべきもののなからんとす。人の世の言葉や、思想は、其の神祕的、具象的事相の萬一をだに彷彿せしめがたき概あるにあらずや。吾れ之れを思うて、幾たびか躊躇し、幾たびか沮喪せり。而して今にして知りぬ、古人が自家見證につきて語る所の、每々徒らに人をして五里霧中に彷徨せしむるの感ある所以を。彼等が心血を瀝盡して其の見證の內容を說くや、時に發して煌々たる日星の大文章をなすことあれど、而かも其の辭愈々繁くして、指す方のいよ／＼天上の月を離るゝが如き觀あるは如何にぞや。彼等が悟を說くや、到底城見物の案內者が、人を導きて城の外濠內濠をのみ果てしなく廻り廻りて、竟に其の本丸に到らずして已める趣きあるなり。古人にして然り、今所證の淺き予にして悟を說かんとす、說く所、或は其の一膜を剝ぎ、更に其の一膜を剝ぎ、かくして永久竟に人をして其の核心に達せざらしめんことを虞る。されば、予は竟にこの一事を抛たざるべからざる乎、否、否。神はわが枯槁の殘生に意味あらせんとて、特にこの所證を幾分にても世に宣べ傳ふるは、吾が貴き一分の使命の存する所にあらずや。げにや悟といひ見證といふもの、所詮は言說の傳へ得べき限りにあらざるべし。しかはあれど、わが滿心の自覺を一揮直抒の筆に附して、尙ほ能く其の駭絕の意識の、勦然たる光の穗末をだに傳へ得ざる乎、その微かなる香氣をだにほのめかし得ざる乎。能と不能とすべて神にあり。吾れは唯だ自ら見得せる所を如實に語り出づべきのみ。

神の現前若しくは內住若しくは自我の高擧、光耀等の意識につきては、事に觸れ境に接して、予

がこれまで屢々躬ら經たる所なりしが、而かもその不磨の記憶となりて永く後に殘る程の奕々たる觸發の場合は、幾んどあらざりし也。その是れありしは、昨三十七年の夏以後の事なり。今後は知らず、昨一年は予の宗教的生活史に於ける、謂はゞ、光耀時代、啓示時代なりきとも見るべく、予は實に昨一年間に於いて、不思議にも三たびまでもこれまでに經驗したることなき稍々手答へある一種稀有の光明に接したるなり。而して其の最後のものを以て最も驚絶駭絶とす。

最初の經驗は昨年七月某日の夜半(日附を忘れたり)に於いて起りぬ。予は病に餘儀なくせられて、毎夜半凡そ一時間がほど、床上に枯坐する慣ひなりき。その夜もいつもの頃、目覺めて床上に兀坐しぬ。四壁沈々、澄み徹りたる星夜の空の如く、わが心一念の翳を著けず、冴えに冴えたり。爾時、優に朧なる、謂はゞ、歸依の醉ひ心地ともいふべき歡喜ひそかに心の奧に溢れ出でて、やがて徐ろに全意識を領したり。この玲瓏として充實せる一種の意識、この現世の歡喜と倫を絶したる靜かに淋しく而かも孤獨ならざる無類の歡喜は凡そ十五分時がほども打續きたりと思しきころほのかに消えたり。(本書(三)病間錄(二)一七九頁「宗教上の光耀」(本集は之れを缺く)と題する一篇のうちに、感情的光耀につきて記したる一節は、この折の經驗に基づきて物したるなり。予は從來とても多少これに類したる經驗を有せざりしにはあらざりしが、此の夜のに於けるが如く純粹にして充實せるは無かりき。)予は未だありしこの夜の經驗の深きこゝろを測りつくし、辿り盡くすこと能はず。今なほ折々當夜の心狀を朧に想起しては、天上生活の面影をしばし地上に偲ぶの感あるなり。

今一つは昨年九月末の出來事に繫れり。予は久しぶりにて、わが家より程遠からぬ湯屋に物せんとて、家人に扶けられて門を出でたり。折りしも霽れ渡りたる秋空の下、町はづれなる林轡遠く夕陽を帶びたり。予はこの景色を打眺めて何となく心躍りけるが、この剎那忽然として、吾れは天地の神と偕に、同時に、この森然たる眼前の景を觀たりてふ一種の意識に打たれたり。唯だこの一剎那の意識、而かも自ら顧みるに、其は決して空華幻影の類にあらず。鏗然として理智を絶したる新啓示として直覺せられたるなり。予は今尙ほ其の折を回想して、吾れ神と與に觀たりてふその剎那の意識を批評し去る能はず。

終りに語らんとするもの、是れ實に驚絶駭絶の經驗と言ひたるものにして、これまで予が神の現前につきて經驗せるもののうち、かくばかり新鮮、赫奕、銳利、沈痛なるはあらじと思はるゝ程なり。予は今なほ之れを心上に反覆再現し得ると共に、倍々其の超越的偉大に驚き、倍々其の不動の眞理なるを確めつゝあり。左に掲ぐるは、當時の光景を略敍してさる友に書き送れる書翰の大旨なり。

藪から棒に候へども、いつぞや御話しいたし候ひし小生あの夜の實驗以來、驚きと喜びとの餘勢、一種のインスピレーションやうのもの存續いたし候て、傍にも多少の影響なきを得ず候ひき。

彼の事ありてこのかた、神に對する愛慕一しほ強く相成申候。如何にすればこの自覺を他に傳へ得べきやとは、この頃の唯一問題にて候也。一面にはこの自覺、人に知られたしとの要求有之候へど、他の一面には、更に眞面目に、嚴肅に、世の未だこの自覺に達せず又は達せんとて惱みつゝある多くの友に對する同情を催起いたし候。この事によりて、小生

幾分か、釋迦の大悲や、基督の大愛を味ひ得たる感有之候也。

本年のうち小生はこれと併せて三たびほど觸發の機會を得申候。他の二つの場合(前に陳べたるものを斥す)も今憶ひ出だし候てだに心跳りせらるゝ一種の光明、慰藉に候へども、先日御話いたしゝ實驗は、最も神祕的にして亦最も明瞭に、インテンスのものに候ひき、君よ、この特絶無類とも申すべき一種の自覺の意をば誰れと與にか語り候ふべき。げに彼の夜は物靜かなる夜にて候ひき。一燈の下、小生は筆を取りて何事をか物し候ひし折のことなり、如何なる心の機にか候ひけん、唯だ忽然はつと思ふやがて今までの我が我ならぬ我と相成、筆の動くそのまゝ、墨の紙上に聲するそのまゝ、すべて一々超絶的不思議となつて眼前に耀き申候。この間僅かに何分時といふ程に過ぎずと覺ゆれど、而かもこの短時間に於ける、謂はゞ無限の深き寂しさの底ひより、堂々と現前せる大いなる靈的活物とはたと行き會ひたるやうの一種の[illegible]、[illegible]、驚喜の意識は、到底筆舌の盡くし得る所にあらず候。唯だ兄の直覺に訴へて御推察を乞ふの外之れなく、今はその萬一をだに彷彿する能はず候。

兄よ、如何にか思ひ給ふ、小生の如き一面隨分批評的、學究的精神をもてるものに、このやうな東洋的、中世紀的とも申すべき神祕的實驗あるべしとは如何にもあり得まじき不思議事と思ひ給はずや。小生自身にも其の後兩三日の間は、何だか狐にでもつまれたるやうの心地いたし候ひしが、程たつに從ひ、件の自覺は漸々明瞭確實と相成、其の驚絶の事實は、不壞金剛の眞理となつて光明を放ち來り申候。今日は最早一點動かすべからざる疑ふべからざる心靈上の事實となり、力と相成申候。(下略)

これ實に昨十一月の某夜、十一時頃に起りたる出來事なりとす。予はこの實驗につきては、最早言ふ所なかるべし、そは如何なる妙文辭を備ひ來るとも、最早こゝに書き記したるより以上の事を説き明かし得べくも思はれざれば也。眞理は簡明也。眞理をして眞理自らを語らしめよ。言詮の萬重は眞理の累也。

さはれ予は件の見神の意識につきて、今一つの言説すべき者あるを感じたり。そは他にもあらず、予が嚢に「我が我ならぬ我となりたり」と言ひ、「靈的活物とはたと行き會ひたり」と言へるが如き言葉の、尚ほやゝ錬雜の用法ならざるかとの疑ひ、讀者にあらんかとも思ひたれば也。されば、予をして今一度最も嚴密に件の意識を言ひ表はさしむれば、今まで現實の我れとして筆執りつゝありし我れが、はつと思ふ刹那に忽ち天地の奧なる實在と化りたるの意識、我は沒して神みづからが現に筆を執りつゝありと感じたる意識とも言ふべき歟。これ予が超絶、駭絶の事實として意識したる刹那の最も嚴密なる表現也。予は今、これ以上、又以外に、この刹那に於ける見證の意識を描くの法を知らざる也。予は如是に神を見たり、如是に神に會へり。否見たりといひ會へりといふの言葉は、なほ皮相的、外面的にして、迚もこの刹那の意識を描盡するに足らず、其は神我の融會也、合一也、其の刹那に於いて予みづからは殆んど神の實在に融け合ひたるなり。我即神となりたる也。[illegible]す、予はこの驚絶、駭絶の意識をば、直接に、端的に、[illegible]より得たり、一毫一絲たに前人の[illegible]を[illegible]とし、若しくは其

の意識に依傍したる所あらざる也。（彼等が開接なる感化は言はず。）

顧みるに、予が從前の宗教的信仰といふもの、自得自證より來れるは少なく、基督其の他の先覺の人格を信じ、若しは彼等が偉大なる意識を證據として、其れに依り傍うて幻げに形づくりたる者、その多きに居りし也。半ばは他の聲に和し、他の意識を襲うて、神をも見たりと感じ、神の愛をも知りぬと許したりし也。即ち開接に他より動かさるゝ所、其の多きに居りし也。後深く内部生活に沈潛するに及びては、一切前人の證權を抛ち去つて、自ら獨立にわが至情の要求に神の聲を聽かんとしぬ。わが要めは空しからず、予はわが深き至情の宮居にわが神在しぬと感じて幾たびか其の光明に心跳りけむ。吾が見たる神は、最早向きの因襲的偶像、又は抽象的理想にはあらざりし也。されどかく端的に見たりと感じたりしわが神の、尚ほ一重の薄紗を隔てたる如き感はあらざりし乎、水に映りし花の、朧のこゝろを著けざりし乎。予は過去の幼稚なる朧げなる經驗をば、一切虛謬也、又は無意義なりとするものにあらず。予は過去一切の經驗を貴ぶ。それら皆其の折の機根相應に神を見たる眞實無妄の經驗として、わが宗教生活史の一鎖一環をなす者にあらずや。謝せよ、これ皆上天の賜也。但だ、予は從來の一切の經驗を以て、わが不動の信念の礎とせんには、尚ほしかすがに一點の虧隙あるを感ぜざるを得ざりし也。予が從來の見神の經驗なるもの、謂はゞ、春の夜のあやなき闇に、いづこともなき一脈の梅が香を辿り得たるにも譬へつべし。たしかにそれと著るけれど、なほほのかに微かなりき。而して今や然らず。わが天地の神は、白日瞳々、驚心駭魄の事實として直下當面に現前しぬ。何等の祝福ぞ、末代下根の我等にして、この稀有微妙の心證を成じて、無量の法の喜びに與るを得べしとは。

夫れ見と信と行とは、吾人の宗教生活に於ける三大要義也。三者は相濟し相資けて、其の價値に軒輊すべき所あるを見ず。たゞ予は、予みづからの所證に基づきて、見の一義に從來慣視以上の重要義を附せんとす。人動もすれば見と信とを對せしめては、信の一義に宗教上千鈞の重きを措くを常とし、而して見の一義に至りては之れを說くもの稀也、況んや其の光輝ある意義を推揮するものに於いてをや。されど、予は信ず、偉大なる信念の根柢には、常に偉大なる見神あることを。眞に神を見ずして眞に神を信ずるものはあらず。基督の信は、常に裏に神を見、神の聲を聽けるより來り、ポーロの信は、其のダマスコ途上驚絕の天光に接したるより湧き出でたり。菩提樹下の見證や、ハルラ山洞の光耀や、今一々煩はしく擧證せざるも、眞の見神の偉大なる信念の根柢たり、又根柢たるべきは了々火よりも燎かなり。見なき信は盲信となり、頑信となり、他律信となり、外堅きが如くして内自ら恃む所なきの感を生ずべし。我等が神を信ずと言ひて、尚ほ自ら顧みて、どことなく其の信念の充實せざるを感ずることあるは、是れ尚ほ未だ面相接して神を見ざるが故にあらずや。「見ずして信ずるものは幸なり」、「信仰は未だ見ざる所を望んで疑はず」などいふ古言もあることなれど、是れ未だ眞理の兩端を盡くしたるものとは言ふべからず。見ざる所を信ずる信をして信たらしむるもの、是れ即て既に幾分か見たる所の或物を根柢とせるが故に非ずや。勿論詮議を嚴にしていはゞ、見は竟に信に歸著すべし。信の尖鋭照著なるもの、即て見なりともいふべし。されど、こゝには唯だ普通謂ふ所の信の一義を取つて言說せるなり。されば予は將さに言ふべし、見ず

して信ずるものは幸也、されど見て信ずるものは更に幸也と。而してこゝに謂ふ見るの義がかの基督の一弟子が手もて再生の基督の肉身に觸れて、さて始めて彼れを見たりとせるが如き官覺的淺薄の意味ならざるや、論なき也。夫れ眞に神を見て信ずるものの信念は、宇宙の中心より挺出して三世十方を蔽ふ人生の大樹なる乎。生命の枝葉永遠に繁り榮えて、劫火も之れを燬く能はず、劫風も之れを僵す能はず。

予は予が見神の實驗の、或は無根據なる迷信ならざるかを疑ひて、この事ありし後、屢ゝ之れを理性の法庭に訴へて、其の嚴正不假借なる批評を求めたり。而して予は理性が之れに對して究竟の是認以外に何等の言をも插む能はざるを見たり。予は又この實驗の、予がその折の腦細胞の偶然なる空華ならざりしかをも危みて、虛心屢ゝ之れを心上に再現して、前より、後ろより、上下左右、洩らす所なく其の本體を正視透視したり、而して其の事實の、竟に儼然として宇宙の根柢より來れるを確めたり。されど、予は尙ほこの實驗の事實が、萬が一にも誇大自ら欺きしものにあらざるかを虞れて、其の後も幾度となく之れを憶起再現し、務めて第三者の平心を持して、仔細に點檢したりしが、而かも之れを憶ひいづる毎に、予は倍ゝ其の驚くべき事實なるを見るのみ。そは到底如實には言ひ表はしがたき稀有無類の意識也。今やいよ〳〵一點の疑をも容れがたき眞事實とはなりぬ。但だ予は、予が今日の分として、この實驗の意義、價値の幾許なるかを料り知る能はざるのみ。眞理の體察、豈容易ならんや。予は唯だ所謂「悟後の修行」に一念向上するあらんのみ。

嗚呼、予が見たる所、感じたる所、すべて是くの如し。或は餘りに自己を說くに急なるふしもありしならん、或は辭藻やゝ繁くして、意義明瞭ならざるふしもありしならん、いづれは予が筆の至らざる所と諒し給ふべし。予は今尙ほこの事の表現に心を碎きつゝある也。但だ予は此くの如くに神を見、而してこれより延いて天地の閒の何物を以てしても換へがたき光榮無上なる「吾れは神の子なり」てふ意識の鬱として衷より湧き出づるを覺えたり。われは宇宙の閒に於けるわが眞地位を自覺しぬ。吾れは神にあらず、又大自然の一波一浪たる人にもあらず、吾れは「神の子」也、天地人生の經營に與る神の子也。何等高貴なる自覺ぞ。この一自覺の中に、救ひも、解脫も、光明も、平安も、活動も、乃至一切人生的意義の總合あるにあらずや。嗚呼吾れは神の子也、神の子らしく、神の子として適はしく活きざるべからず。かくして新たなる義務の天地の、わが前に開けたるを感じたり。されど顧みれば、吾れ敗殘の生、枯槁の軀、一脚步を屋外に移す能はざるの境に在りて、能く何をか爲さん。吾れ一たびはこの矛盾に泣きぬ。而してやがて「世にある限り爾が最善を竭くすべし、神を見たるもの竟に死なず」てふ強き心證の聲を聞きぬ。新たなる力は衷より充實し來りぬ。それ吾が見たる神は、常に吾れと偕に在まして、其の見えざるの手を常に打添へたまふにあらずや。

(明治三十八年五月)

予は見神の實驗によりて何を學びたる乎

拙著『病閒錄』に於いて、予が「見神の實驗」を語りたるは、讀者諸君の記憶せらるゝ所なるべし。予はこの見神の實驗によりて何を得たる乎、何を學びたる乎、何を悟りたる乎。

見神の實驗その事、既に末代下根の我等に取りて、絶大の恩寵也、所得也、光榮也、感謝也、平安也、解脫也、法悅也。而かも眞理は孤ならず。一の眞理は他の多くの眞理を暗藏す。眞理の光は勦然として永し、その光に觸るゝものは、一二の貧しき概念もて括る能はざる許多の事相を想ひ出づるなり。眞理はその至れるものほど、卽ち其の具象兼普遍の性を著すること多きものほど、多くの暗示力を有す。是くの如き眞理はそのいと微さきものだに、倘ほ草頭の一露の、湛然として萬有を涵し育む潤澤を有すべし。今夫れ神は眞理の最大なるもの也。されば、神を恐るゝは智慧の始にして終也。われ神を見たりと稱して、若しその富贍なる眞理の萬一をも髣髴せしむる能はずんば、是れ畢竟神の空名を攫みたるに過ぎず、悪魔も倘ほ是くの如き神を有し、僞善者も倘ほ是くの如き神を語る。さればわれ何をか語るべき。げにや、予れ一たび大慈の御手に導かれて、眞理の萬水、滾々と流れいづる實在の太源に立てりき。何等の光耀、何等の祝福。而かもわが有限の眼は、是くの如き眞理の萬水の遙かなる行くへの末を測ること能はず。予は予の見神の實驗が、わが身世に齎すべき將來の光景如何については、その十一をだに語ること能はず、否此くの如きは我等分內の事にあらざる也。能ふべくば予は唯だ見神の光耀の刹那の意識を分析的に回顧して、そこに見證したる一味の新光景を語らんか。見神の意識の如實の相は、所詮不可說なりとせんも、其の刹那の意識に於ける富贍なる內容の一分をなすものとしての或種の眞理を語るは、必ずしも不可能の事にあらず。そは見神の意識に當然含まるべき、若しくは其の內在必至の結論たるべき眞理也。かゝる眞理を語ることに於いて、予は予が見神の實驗その事を一層確實のものとするを得べきにあらずや。一の眞理は能く他の眞理を觸發し、而してかく觸發することに於いて、一の眞理そのものが一層その確實性を增し來るなり。

之れを語るの前に、今一つ讀者の注意を乞はんとするは、謂ふ所の見神の實驗が、決して全く因果の理法と違背せる超絶的不可思議の出來事にあらずといふ一事なり、勿論、神の現前は、一面吾人の自力沙汰を以て力索强求すべからざる驚絶駭絶の神祕天來の恩寵なりといへども、而かもかゝる恩寵を恩寵として納受感得する相應の準備、心構への、先づわれに存するなくば、これはた詮もなき事なり。神は猶ほ地中の水の如く、洋々として當處に充ち盈てり、唯だ世に眞實無妄の心を以て之れを鑿り當つるものの鮮なきを病ふるのみ。一尺を穿つものは一尺實在に觸れたる也、一丈を穿つものは一丈實在に觸れたる也。かくして穿ち穿ちて休まずんば、豁然として眞理源頭の活水に汲むの大歡喜に參與すべし。眞理みづからには發達なしといへども、その吾人の意識に現はるゝや、嚴に發達の理法を履む。悟れば卽ち佛なりといふ、然れども悟るその事に段階あり、發達ありと知らずや。眞理は奇蹟にあらず、神は一躍を容さず。唯だ一息不斷に向上の

功夫を積み積みて、機縁おのづから純熟するに至りぬれば、こゝに始めて一期の光耀事あり。そは過去一切の經驗の結果也、頂點也、Culmination 也。予の見神の實驗また實に是くの如きのみ。「宗教進化論」の著者、ケイアドは曰ふ、

“The Development of man is one continuous process, by which he is brought to a consciousness of the world, of himself, and of God, and *every step in that process is equally essential to the ultimate result.*”

と。吾人の宗教的意識は發達の理法を離れたる奇蹟にあらず、過去一切の經驗は、悟に達する一段階として、皆不可拔の意義あり、價値あり。されば吾等をして向上の功夫を舍て神を見るの恩寵を誣ること勿らしめよ、吾等神に近づかずば、神は吾等に近づきたまはざる也。

予は見神の實驗に於いて、先づ天人父子の關係を實證することを得たり。基督が其の絶倫の天才を以て、如意に直覺し、自在に游泳したる天人父子の意識は、秋毫も詩的表現を以て見るべからざる最眞實、最嚴肅なる客觀的眞理なることを自證することを得たり、吾この意識は、かゝる人的比論の言葉をもて寫し出づる以上に、更に豐富にして深邃なる内容を有す。少なくとも予みづからは實驗の刹那しか感じたる也、唯だ外にこの無類の意識を表する適當の言葉を見出ださざりければ、乃ち最も適當の表現に近しと信ずる件の父子てふ語を藉り用ひたるのみ。げに基督は、いしくも萬古不易の詮表形式を擇びつるかな。予も亦唯だ基督の言葉を襲ぎて見神の意識に含まれたる天人の關係を表現するの外なき也。されど、嗚呼深いかな見神の意識(予は今尚ほ當時を回憶して無限の驚喜に打たるゝなり)。その刹那、予自身は全く神の中に融け込みたる如くに感じたり、筆を動かして物書くものは、今までの予にあらずして、天地の深底より堂々と躍り出でたる神自身なりけるなり。(この驚絶の意識は、予の客觀的要求と合したる最眞實の意識也、予は今尚ほ明瞭にこの意識を再現し得るなり)。見よ、この刹那、唯だ大いなる靈的活物の、予の全意識を領するありて、予みづからは復た在らず。予はこの大いなる靈的活物の中に還沒せり、予即神となれり。されば予の個人格としての存在は、この時全く神の實在に泡沫と消え失せたりと謂はん乎、而かもかく謂はんは是れ未だ精確に如實に予の其の折の意識狀態を寫したるものにあらず、何となれば、予は一面に於いて全く神の大實在に還沒し解體したるの感を有したると共に、他面に於いては、不思議にも又予は意識のいづこかの一隅に在りて、一種驚喜と敬畏との念を以て目のあたりに件の神の現前を覩たるの感を有すれば也。神は現前せり。予は神に沒入せり、而かも予は尚ほ予としての個人格を失はずして在り。驚くべきかな、この融會相卽の一境、父子有親もしくは Sonship の言葉を以て寫さんには、この一境餘りに深く、餘りに切に、又餘りに透徹也。かゝる形容辭は唯だ能く其の萬一の相を髣髴するに足るのみ。而かもこの一種の辭を藉り用ふるの外に、この靈交相卽の境を寫し出づべき言葉、復た人の世にはあらざる也。

「新人」第六卷第九號に於て、中島氏が其の見神の經驗を語られたる中に「神の内に我れが溶解こんだやうな感じがして神と自分との間が明瞭でなくなつた、寧ろ差別が無くなつたとでもいふ方が良からうか、けれど差別なき所に差別がある、其の喜びのうちに敬虔といふ様な一種の感も強くあつた」とありし一節は、予の

意識經驗と相類似したるもの、如何にもかゝる刹那に於ける精微なる意識狀態をよく寫し出でられたりといふべし、予は予の實驗により中島氏の實驗の眞實を證し、而して同時に又予の實驗そのものの眞實を一層確かめたるの感あり。

是くの如くにして予は「我れは神の子也」てふ自ら欺かざる不壞金剛の自覺を握り得たり。基督の絶倫なる人格と事業との祕訣は實に繋りてこの一自覺に存したるにあらずや。感謝せよ、劣機下根の子にして、今又彼れと同じ自覺(其の內容の深淺は措き)の祕鑰を握り得たるは、何等の神恩ぞ。嗚呼我等は神の子也。神を模範として活き、神の經綸を亮けて勵みいそしまざるべからず。かくてわが世の一日は光榮の一日也。われはこゝに人生最崇高の意義を發見し、解脫と新生とを併せたる大悅を得たり。

次ぎに予は見神の實驗によりて神の精神的人格性 Spiritual Personality を自證することを得たり。神は人格なりや否やの問題が、純然たる理論的、客觀的研究に因りて到底釋き得べき性質のものならざるは、何人も想著すべき點ならんが、予は見神の實驗に參じて、今や渙然としてこの一問を釋盡するを得たるの思ひあり。夫れ神は宏大無邊、唯だその實有てふ以外、到底人智の把握を超越す。佛者の所謂非思量底の一語、以て神の不可知的實相を盡くすべし。嗚呼神豈竟に知り得べきものならんや。無邊の風月、不盡の乾坤、われらは唯だ顧みて人智の小を歎ずるのみ。但だ予輩の實驗上、こゝに一事の確實として許さざるを得ざるものあり。何ぞや。是くの如き超越不可知の神が、吾人の精神的人格を通じて吾人に顯現すといふ一事是れ也。神の來格するや、吾人の精神的人格に於いてす、是に於いてか精神的人格は單り吾人主觀の有たらずして、又神の客觀の有たることを知る。精神的人格たらざる、少くとも精神的人格の一面を有せざる神が、吾人の精神的人格に顯現來格すべき謂はれあるまじければ也。靈のみ能く靈に格り、靈のみよく靈を拜す。この一境、透明通徹、また一翳の著くべきなし。これを主觀の結びいだしたる迷ひといふ乎、予の理性は斷々として其が吾人の客觀的要求と合するを是認したるにあらずや。所詮、この一點に關しては、實驗即ち萬能也。而して予の實驗は如是に神の來格を見證したる也。神は靈也、而して靈の神是れ唯一の活ける神にあらずや。

神を見るは詰まり神の幽靈を見る也、まぼろし vision を見る也と解して、世には見神の客觀的確實性を疑ふものあり、笑ふに堪へたり。懷疑の心勝てるルナンだに、神の幻影を見ることと內なる神に接はることとを別ちて、後者を迷信視せざりしにあらずや。

永生の確信、是れまた予が見神の實驗によりて得たる一證果也。永生問題につきては、予は曾て一己の解釋を有したりしが、見神の實驗によりて倍々この信念を鞏固ならしむるを得たるは何の幸ひぞ。予の所謂永生は時間的に死後の生活を續け行くことにあらず。まことや、未來生に對する渴慕の一念は、拔くべからざる我等が要求の一なるべく、過現の有力なる宗教にして、この一要求に重大なる宗教的意義を認めざるは幾んど稀なる有樣なれど、而かも竊かに自ら思ふ、この一要求は、果たして宗教の要諦に觸れたるものと謂ふべき乎、そは寧ろ或一層根本的なる要求によりて打ち克たれ、若しくは成就せらるべきものにあらざる乎と。何をか一層根本的なる要求といふ、曰はく永生の自覺是れのみ。我が所謂永生の自覺を有するものは、時間の制約を超越して、常に「大いな

る現在」に生活す。達者に生なく死なしとぞいふ。彼れが一念の充實は、能く三世の因果を踏斷す。今日是くの如くに生き、明日是くの如くに生き、千萬年亦復た是くの如くに生く、何が故ぞ、是れ神に在りて生くれば也。夫れ神に在りて生くる者は、常住に生くる者也、眞個に生くる者也、彼れは莊周の所謂「無遯の常存」に游ぶ者乎。こゝには復た生死流轉の時劫の累を受けず、いづくんぞ未來生に憬るゝがごとき一念の迷執を著けんや。吾等若し寔に神に在りて生くるの自覺無からんか、所謂死後の未來生活を千億萬年續くるとも、是れ尚ほ依然として神なきなり、依然として永生なきなり、依然として悟達なきなり、依然として生死無明の迷ひに流轉せざるを得ざるなり。かくても尚ほ吾人は未來生活を追躡して息まざらんとする乎、そもそも是くの如き生活、吾人の眞生活と何の交渉かある。神に生きずして時に生きんとするものは禍なるかな、是れ豈眞個の永生ならんや。吾人をして是くの如き神なく光明なき淺ましき無意義の未來生活を呪詛せしめよ、吾人をして是くの如き恐ろしき長夜生死の夢より覺醒せしめよ、古聖も「朝たに道を聽けば夕べに死すとも可也」といへり。道是れ眞の生命にあらずや。吾人をして道なく、光なく、神なき不朽生活を愧ぢしめよ。大いなる光を觀ば又小なる光を要せじ。眞に一たび神に生きて永生の鍵を握れるもの、復た曷すれぞ拘々として未來生活に一念の迷ひを繋がんとはする。眞の永生なき未來生活、吾人に取りて竟に何の要ぞ。神に生くるものは是れ未來生活以上の無價の摩尼球を有するものにあらずや。達者是くの如くに教へ、吾人も亦こゝに宗教の眞諦を見出ださんとす。但だ吾人の性の脆弱なる、しばしば生死流轉の波に蕩かされて、神なき寂しさに泣かざるを得ざることあれど、しかも一たび得たる自覺は永へに失せじ、刹那を神に生くる者は是れ永劫を神に生くる者にあらずや。かくて我等、役々たる世途の塵に埋もれはつる折にも、尚ほわが深き自覺に刻まれたる本地の風光に心躍りて、感恩の涙油然として下るなり。我等は絶えまなくこの世の生死時劫の波に搖られつゝ脅かされつゝある間にも、尚ほ常に悠々として「大いなる現在」てふ不死の一境にあるの感を有するを得るにあらずや。而して予が見神の實驗によりて、この「大いなる現在」を最もさやかに具象にし得たるは、何等の祝福ぞ。

所謂來世有無の問題は、人心の要求として永へに繰り返さるべし、而かもそが到底一個の閑是非にして、吾人が宗教的生活の眞諦と何のかゝはり無きこと、是れ予が見神の實驗により て益〻明かに證し得たる所也。「永生」てふ自覺の中には、過去も未來も參滙きて唯だ一個常樂の「今」あるのみ。之れを達人常住の家となす。

中島氏また見神の刹那を描きて、死生といひ未來生活といふ如き問題を考ふるの必要全く無くなりて、唯だ〳〵「たのしい」といふ一念を以てのみ充たさるゝに至れりと言はれたる、是れ即ち謂ふ所の「大いなる現在」の自覺にあらずや。思ふに吾人が死を怖れ、未來の生活を慕ふが如きは、畢竟是れ未だ神に在りて常に生くるの眞自覺なく、隨つて一念に或空虛を藏するが故のみ、神に生くる自覺の、常に活潑なる所、法悦、内に充實して、また一念の空虛を著くるの餘地なかるべし。既に空虛なし、故に又生死なく、未來なし。こゝには唯だ「有りがたい」、「忝ない」、「嬉しい」、「樂しい」、といふ如き一念の「大いなる現在」

あるのみ。「大いなる現在」に生くるものは、喜び常に衷に足らへり。また外慕の遑あらざるなり。彼れが敬虔魂は、過去を顧み未來を慕ふを以て寧ろ不敬事と思惟する也。嗚呼悠々たるかな、如是達人常住の捷遲、而してこれ我等の到り得べき境地なるが故に、神恩常に我等に餘れり。

予が見神の實驗より得たる證果、必ずしも以上に盡きたりと言はず。唯だ今は煩を避けて、その主要なる二三を擧ぐるに止めたり。讀者之れを諒せよ。

（明治三十八年十一月）

二聲錄

(一夜の瞑想)

今宵は月いと明かければ、病の床を縁端にうつさせつ、久しく負きたりし天上の友と心往くまで物語せんとてなり。夏も半ばを過ぎて遠近の蟲の聲と、秋のこゝろは早やわが月前の庭に通へり。庭の繁葉を見越して、彼方にやゝ低う芋畠の露のさらめき、それを距てて一むら竹あり、樹立あり、草葺家根あり、瓦家根あり、參差として皆夢の裡なる月下の景に入る。見よ、今し千々の木草、皆一つ光に濡れて、醉ひて、あるかなきかの樣に漂ひぬ。仰げば明光、唯一つの心に融けあひて、おのづから吐く模糊の薄絹に、大地の卑く穢きをも包む姿の、あはれ、秋の月の己れ一人を高う澄み上りたるとは殊なりて、その氣高さ、優しさ。げにや、蟻のとわたりをも隈なく照らしぬべくて、尚ほ深き心の傷手に泣くこの世の罪の子らをも庇ふ慈ごころの今宵の月こそは、わが銷魂の戀にもあるかな。やがて、月と人と、形釋け心凝りて、見渡すかぎり漫々と、唯だ一味慈光の潮渦なして打ひろごりぬ。わが天眼の華開けて靈しき翼もてる天つ使や、世々の貴き聖だちの讃美の歌聲の、大空の光の波と搖らぎたゞよひて仄かに打開かるゝ淨嚴の世界を見たり。しばしを夢に辿る心地して、一念いつしか瞑想の境に入りぬ。

この境また月なく、我れなし。さはれ、まことの月を見るものは月に面はずして月を見、まことの我れを見るものは我れに對はずして我れを見るとぞいふ。一砂一塵、一草一木、觀念の懷に游ぐ。何物か是れ月ならざる、何物か是れ我れならざる。法月永へに無邊世界の砂を照らし、法我限りなく不盡乾坤の波を揚ぐ。何等淨嚴の一境ぞ。

曾てしば〳〵涅槃實相の一義に惑ひにき。その寂然たる大死の涯なし海を望んでは、幾たびか怖き畏れたりし。されど曾てまことの涅槃を見ざるものは、誰れか涅槃の眞相を説き得んや。されば許せ、我れをして且らく今宵の月のこゝろを材として、わが主觀景裡の涅槃の一義を説かんとするを。げにや、涅槃は死也、消極也、否定也、虚無也、寂靜也、拂拭也、無色也、無相也、無聲也、無臭也。さはれ、これら一切の消極の底より、法音おのづからさやかに強く浮かび出づるは、己が姿の萬有を寂かに打眺めて一切不捨の大悦に入れる涅槃淨樂の景にはあらざる乎。差別の萬法を一味の光に抱き和げて、寂然として觀照する朧ごころの今宵の月こそは、正しく涅槃の眞姿にはあらざる乎。寂に死して照に生く。寂而照は、これ涅槃を兩端より盡くしたる實相にはあらざる乎。されば、わが所謂寂靜涅槃は即て寂照涅槃也、而して寂照涅槃は即て是れ觀美涅槃にあらずや。如是に觀じて、涅槃は最も強くわれらの要求と結び來る。あゝ美はしいかな觀美涅槃の月。曾てわれ涅槃を知らずして涅槃を怖れ、今はわれ涅槃を見て涅槃を戀ふ、今宵の月と一つ慈の光に融け合ふを樂ふわれの心ぞ、やがて涅槃淨樂の境に分け入るを樂ふ心なる。涅槃に月なし、法の月あり、涅槃に我れなし、法の我れあり。法我と法月と一つ心に寂然として萬法を觀照する美的淨樂はやがて涅槃本地の風光にあらざる乎、美しきは、觀美涅槃の

久遠の月の姿なるかな。客塵煩惱の涙しげき我等衆生をして、每にこの一景本地の月に憬れしめよ。あゝ我が心今切に死を願ふ、鹿の溪水を慕ふが如くに死を慕ふ。涅槃はわが故里なり。

やがて月雲に入りぬ、我れは美はしき瞑想より還りたり。意識惺々、見よ、こゝに我れ在り、こゝに現實の我れ立てり、こゝにわれ、白日の事實として立てり。我れは夢にあらず、幻にあらず、五蘊の影にあらず、因緣の鏈にあらず、あらず、我れは恆有自性の自覺なり。我れは我れなり、天地の間に鏗然として占むる自覺の單元なり。是くの如くに我れ天地の間にあり、而して天地の間、またこの我れありてふ一自覺を傷くる何物もあらず。神もわれを空ずる能はず、佛も我れを抹する能はず、魔も我れを拂ふ能はず。浩然、凜然、湛然、居然、是くの如くにして我れ在り、而して是くの如き我れは三世十方を蔽ふ全法界に、復たと同じ二個なく反覆なき唯一特殊の限りなき貴き意義と價値とを有する自覺的實在にあらずや。さらばわれ何をか願ふ、曰はく唯だ我れたらんこと也。我れをして永へに我れたらしめよ、我れは一個特殊の自覺として、どこまでも向上し、活動せんことを願ふ。われは夢みることを欲はず、醉ふことを欲はず、眠ることを欲はず、休むことを欲はず。あはれ涅槃とや、そは美はしき癡人の夢なり、われは寂照涅槃の月に憬れてわが自覺を稀薄ならしめ、茫漠たらしむることを欲はず。わが自覺をして常に中天の白光の如くに堅く、燃んに、勁く、燎かなる事實として燃えしめよ。わが酬酢の環境をして、花を隔つる春の水の朧ごころを著けしめずして、雪を戴く秋の山の呼べば直ちに應ふるが如くならしめよ。わが環境をして觀美的ならしめずして道德的ならしめよ。無窮にこの道德的環境を支配しつゝ征服しつゝ、進ましめよ。「安息とや、吾等は安息の爲めの全永劫を有てるならずや」否、われはかの「常精進菩薩」、「不休息菩薩」の勇姿を蹤うて、唯だ〳〵無窮に働きつゝ、戰ひつゝ、永劫の天の階を攀ぢ躋らんことを願ふ。われは無窮に目ざめて、無窮に精進せんことを願ふ。これ實に吾等が至深の要求にあらずや。無窮の活動、是れ我れの我れたる本性也、實在也。されば我れをして戰はしめよ、克たしめよ、われは戰ひの子也、克捷の子也、戰ひと勝利と、これわが生命なり、我れにこの二つを與へよ、然らずんばわが生は落莫として永へに枯れ果てなん。あゝ安息とや、觀美とや、寂照とや、死とや、涅槃とや。神よ、この一類の言語文字を永へに宇宙以外に驅逐せよ、われは活動不息の權化なり。

我れは詐りならぬこの二個心奧の聲に耳傾けぬ。偉大なるかなこの聲。そは天地人生そのものゝ如くに深き聲なり。一の聲は寂照涅槃の月に眠らんことを願ひ、他の聲は煌々たる白光の日に目ざめんことを願ふ、一は萬法を靜觀せんとし、他は萬有を征服せんとす。一は美的享樂を願ひ、他は道德的健闘を願ふ。一は永劫の安息を望み、他は無窮の精進を望む。一はあはれ〳〵と打眺めんとし、他は一氣無間斷に働きいそしまんとす。一は平等界の法我たらんことを欲ひ、他は差別界の個我たらんことを欲ふ。一は「在るものは一切善也」と觀じ、他は「すべて善なるものこそ在るべきなれ」と觀ず。一は充足圓現の天地に逍遙し、他は向上不滿の天を仰ぎて躋る。一は自覺を沒せんことを願ひ、他は自覺を立せんことを願ふ。嗚呼、この二我の要求は矛盾の聲なる乎。決して然らず、この壓すべからざる二つの聲あるの故をもて、我れ知る、吾等人の子はやがて神性に與る實在なることを。夫れ神は寂然としておのが姿の

萬法を靜觀して不斷の大悅に優游せると共に、一面また常に天地の經綸に心を碎きて息むことなし。神は無限の充足にして、又無限の向上也。人この二個の神性を分有して、一面には法我として久遠の懷に萬法寂照の美的淨樂を享受し、他面には個我として天地人生の經綸を亮けて不斷に理想の實現に自彊す。神と共に樂み、神と共に働く。かくてぞ吾等はまことに神之子なる。あゝ神之子。世にもこれほど、吾等人類が宇宙の閒に占むべき位地の自覺を敎ふる最深切、最崇高の言葉あるべしや。人まことにこの一自覺を有して、始めて天地の閒に生まれたるの大悅あり。されば世の偉いなる靈魂の要求は、竟にこの二大意識の調攝に達せずんば已まず。彼等はスピノーザの寂靜觀と、ライプニッツの向上觀と、エマルソンの瞑想觀と、カーライルの勞働觀とラスキンの安息觀と、ブラウニングの奮鬪觀と、而して又佛敎の觀美涅槃觀と、基督敎の生々發展觀と、實相一如之神と、差別進化之神と、この二大意識、二大信念を闡じて立てるものなり。崇いかな如是の人。彼れは內に「大いなる現在」の海を湛へて、外に無窮の「時」の流れを測る。彼れは悠々たり、又嚴々たり。彼れは超然として達觀し、又惕然として勞謙す。かの靜中動を觀じ、動中靜を觀ずてふ古來一派の道學者流の功夫なるものも、亦おのづからこの一側の消息に觸れたるものある耶。非耶。

やがて雲破れて月出でたり、滿天の慈光は春の潮の華かとばかり、わが癯せたる膝、枯れたる顏に、さと打かゝりぬ。多謝す、こよひ一夜の瞑想、いとはかなきすさび草なりけれど、是れわが生の光也、柱也。さらば天上の友よ、また逢ふまでの懷ひでに、汝が今宵の美はしき面影をわが世の戀といつき護らしめよ。さらばなり、天上の友。

（明治三十八年十一月）

神子の自覺

曩きに小著『病閒錄』に於いて「予が見神の實驗」を說くや、道に篤き諸君子の大膽なる（この語を許せ）批評を辱うしたるもの二三にして止まらず。但だ予をして忌憚なく言はしむれば、概ねこれ局外の紛々のみ、而かも飜りて思ふ、理固より然るべきなりと。それ親しく見神の三昧に實參せる予みづからにして、之れを說き之れを傳へんとするに方りては、尙ほ且つ口を盤となし燭となすが如き繆戾河漢の辭を累ぬるの外なかりしを、況してかの門外に立つて他が場裏紅紫の光景を揣摩品評せんとするものに於いてをや。其の說明のやゝ實を得たるに近しと思はるゝものだに、尙ほ且つ具象の肉を抽象の骨に削りなし、而して草々として人猿畢竟同彙のみと說き去るの類に過ぎざるをや。諸君子の批評果たして是乎。嗚呼眞理證明の事、決して容易にあらざる也。

予は必ずしも自家の見證三昧を將て他に强ひんとするものにあらず。眞理の海は浩渺として橫に際涯を絕つ。予をして自己の信念を敬すると共に他の信念を敬せしめよ。勝機劣機といひ、正信迷信といふ、詮じ來れば同じ天上妙光の影向のみ。機に應じては魚頭また光を放つ。一切不捨は大慈大悲の本願にあらずや。予をして予の見たる所を予の方法にて宣べしめよ。かくて若し幾分眞理の暗示をだに他に傳ふるを得ば、予の使命や空しからず。見證の事、所詮は機根上の事なり。予は予の信念を他に强ふるを厭ふ。信念界の黃茅白葦は慶ぶべき事にあらざる也。

予が見神の意識內容は、極めて明瞭にして又極めて神祕也。極めて明瞭なり、そは意識直接の自證なるが故に。極めて神祕なり、そは一切の思議言說の相を絕したるが故に。意ふに輓近に於ける諸科學、殊に精神科學の發達は頗る驚くべきものあり、而かも其の一切の精銳を集め來つて、之れをして見神の自覺の一孤壘に薄らしむとも、尙ほ能く如何ほどの效果をか收め得べき。三千年來築きあげられたる科學哲學の大寶藏は、げにわれ等人類の誇るべき偉大なる建物なるべし。（予はかの頑然として强ひて學問の勢力に盲ならんとする宗教家に與せず。）さはれ、今之れを取つて予が見神の意識に比す、此れの、限りなき深祕久遠の大潮音の心耳に鞳たるものあるに對して、彼れや、さながら實在の淺瀨に騷ぐ小波の聲とも聽き倣されざる乎。

或は予が見神の自覺內容を說きて自我の超越といふ乎、恍惚といふ乎、はた自我の擴大若しくは光耀といふ乎、他をして任意の言語文字を拈出し來らしめよ。如是一類の說明三昧、究竟何の爲す所ぞや。予は今尙ほ（この筆を運べる閒にも）當時の大光景を靜かに且つ明かに回想し得て、唯だ心跳し、唯だ歎美し、唯だ驚喜し、唯だ感謝す。謂はゞ天地の奧底より火よりも燎かに予を通して眼前の事實と動き來れる大いなる靈的活物の稀有妙法の相は、何を以てか其の萬一を髣髴せしむべき。唯だ神と予みづからと、二個の自覺者を措きては、兩閒茫々、復たその刹那無類の光景を知る者あらざる也。理性の權能を謂はん乎。然り、予は理性の權能を敬するを知る。予は曾て（少くとも意識して）理性の要求を黜したることあらず。理性の要求を壅塞して纔に立つが如き信念は、堅實なる信念と謂ふべからず。信念は正に全人上の事なるべき

也。眞個の信念は自家人格の分裂を賭して贏ち得べきものならず。爾の全機根を提げ、爾の全要求を打ち出だし、かくして爾の信念を得よ。誠ある所、則ち活潑なる感應あり。吾人の信念是くの如くにして始めて光輝あり、充實あり。予は予の理性の光をして常に倍ゝ活潑に堅實に發越照著せしめんことを期す。是れ予が一貫の態度也、又態度たるべき也。見神の場合に於ける、予は亦復た嚴にこの態度を取つて點檢數滌せるにあらずや。(予は予が見證の眞理を天下に發表するまでに幾多時の單思精慮を經たるなり。) 爾時予の理性は十二分の自覺を推揮して、一擧してこの秘密の神髓に肉薄したりき。されど驚くべし、さしも鋭かりし予が理性の鋒刃も、段々に折れてけし飛んだり。嗚呼理性の權能や大いなり、何人か能くその神聖なる批評圏外に立つことを得べき。しかも見よ、理性の電光は、唯だ事實の堅岩を繚り照らして、而かも竟に之れを透破すること能はざりしにあらずや。そは竟に難入なりき、難透なりき。理性は謙して自家正當の地位を自覺し初めぬ。而して歎じて曰へらく、稀有なるかな、微妙なるかな、絶言亡慮の德相なるかなと。是くの如くにして予が見神の意識は、正に全人上の事たり。一閒の罅隙を容れず。

或は見神の事、畢竟藝術上の神來に擬へして說くべしと謂はん乎。さなり、二者その事態の形式に於いて略ゝ相殊なるふしはあらず、唯だその內容に於いて一は美的妙想の滾々として興來し、他は天地の實在の咄々として現前するを見るのみ。神來と默示と、同じ一念の思慕を湛へて感應の對象を寫し出づるもの。彼れは美を抱き、此れは神を抱く。共におなじく戀して戀を得たるものにあらずや。之れを主觀の創造といふ乎、客觀顯現の權威の枉ぐべからざるものあり。之れを客觀の顯現といふ乎、主觀創造の自由のこゝろも與りぬ。創造乎、顯現乎、我れより見て創造といふべく、彼れより見て顯現といふべく、創造と顯現と、所詮は一にして二ならず、之れを合して唯だ妙法といふ。神來は妙法なり、見神は妙法なり。

さはれ、嚴密にいへば、神來と默示とは、意識の形式に於いてだに到底差別あるべし。前者の場合に於いては、自由創造の意識饒かなれど、後者の場合に於いては、さる意識は殆ど無く、寧ろ客觀なる眞理(神其他のもの)が不可抗的に我れに薦み來るの意識をもて勝れり。少くとも予が「見神の實驗」の刹那の意識は、是くの如くなりき。「天地の活物とはたと行き會ひたるやうの感」云々と記したるもの、正しくこの客觀的意識の寫實なり。或は「予が見神の實驗」を以て詩的表現に過ぎたりとなすものあり。果たして然る乎。神に接しては凡夫も金口の佛たり。絶言の境は詩語燦として華さく所にあらずや。予は寧ろ顧みて予の詩語貧しきを歎ずるもの也。

予や神を見たりといふ。而かも神や蕩々無方、到底智量を絶するの大海たり。われや唯だその靈しき一波の滴りを歸依淺き心の小貝に汲み得たるものなるべきのみ。峯上の峯、燈外の燈、誰れかは所詮辿り盡くせぬ實在の寂しさに孤獨無限の思ひを抱かざるべき。されど感謝せよ、我れには我れの見得せる神あり。わがみづから見たる神、是れ活ける唯一の神にあらずや。こゝに平和あり、歡喜あり。一念の裡、春風永へに蘼蕪を吹く。われは神を見て神の子たるを自覺し(神子の自覺は予が徑ちに神に接して神より得たるもの、前人の意識を襲取したるにあらず。但だ見神の意識に含まれたる予と神との相卽微妙の關係は、予をして父子といふ如き詮表形式を藉り用ふるの外、他に適當の語なきを感ぜしめたり。この點に於いては予

は先覺殊に基督に負ふ所多きを自白す。）而して神の子の自覺を得て人生の意義白光の如くに耀くを見たり。わが解脱三昧は成りぬ。乃ちわが靈魂は起つて神を讃美し、而して「爾の自覺を爾の同胞に傳へよ」との貴き使命の聲を聽きぬ。予れは正に第一の產みの苦しみを做し了へたり、今や第二の產みの苦しみを做すべき也。

あゝわが見神の眞理は、わが冷靜なる幾番の回想、幾番の省察、幾番の批評の鋒に研ぎ磨かれて、今や精金美玉と輝きぬ。時は到りぬ。われ今おほけなくも此の一大事因緣を天下に宣べ傳へんとす。われこれを今の世の自大聰明の學者先生に說かず、又之れを眞理の實驗饒かなる覺者先達に傳へず、唯だ中心の悲哀を抱きて、謙虛、神を慕ふ世の未見の友に之れを頒ち傳へんとはする也。あはれ、世の神に憬るゝ未見の同胞よ、爾の心を喪ふこと勿れ、爾の心を強うせよ、雄々しかれ、喜び勇めよ、平安と生命と光明との太源なる天地の父を見たるもの、こゝに立てり。われはいと小さきものなれど神の子の一自覺者也。來つてわが見たる光榮の神を見よ。若しくはわが言を通じて之れを信ぜよ、而して爾の生命と平安と光明とを得よ。

予は予が見神の自覺を必ずしも希有の出來事として世に宣播せんとするにあらず。（予は常識上よりも見神の自覺を甚だしき希有異常若しは不可能の事なりと惟はず、況して之れを迷信視するが如きことをや。若し斯く見る人あらば、是れ餘りに人類を蔑視し、人性發展の可能を局限せるもの、若しくは人生の神祕に驚くの官能を缺けるものと評すべし。）わが今日の靈界には、この類の實驗に沈潛游泳する自覺の士、思ふに多々なるべし。彼等をして彼等たらしめ、而して予をして予たらしめよ。彼等と予と何の關りあらんや。予は彼等に對つてこの眞理を瀆告せんとするものにあらず、唯だ世の悲哀煩悶の友に、予が見たる喜びの福音を傳へんとはする也。予の要請は極めて謙遜也。

又思ふに、予は眞理の播種者也。之れに培ひ之れに灌ぐものは、感應ある諸君也。而して之れを長つるものは神也。予と諸君と何の誇るべき所かあらんや、讃むべきものは唯だ神也。

嗚呼われいと微き神の僕の一人にしあれど、神はわれをして世にも妙なる眞理の醍醐味に醉はしめたまひぬ。わが語るはわが衷なる眞理の語るなり。この眞理を世に宣べ傳へんがためには、わが枯槁の殘生、抛ち去つて復た惜しからず。若しわが宣ぶる所、能くこの淺ましき流轉の海に漂へる同胞の一人をしてだに、一歩を安立の岩根に寄り近づかしむるを得ば、一期の歡喜何を以てか加へん。嗚呼われ自ら僭して眞理の證明者たらず、われは心謙りたる神の傳燈者の一人也。自ら省みるに、われは決して自大の宣言者ならず。われ病めりと雖も心眼瞭かに、われ弱しと雖も神に在りて強し。たとひ世を擧げてわが所證を無みすとも、われは尙ほ自家心證の權威に立つて、神と共にこの眞理を宣すべし。希はくは我等をして、常に我執と偏見と氣習と驕慢と教權とを超脫し、虛心にして我等が胸臆の底なる天地の法音に參ぜしめよ。夫れ眞理は常に我等と偕に在れど、我等之れを覺らず。自覺せよ、今は自覺の秋也。

重ねて曰はく、見神といひ、神子の自覺といふ、談まことに容易にあらず。王陽明の所謂「千古聖々相傳一點滴骨血」の語、移し來つて必ずしも、失倫ならず。人の若し、この類の眞理を一場の閑話頭と做し了ふる者あらん乎、われまづ起つて彼れに三十棒を快喫せしむべき

なり。されば、われを以て奇矯世を驚かすの言をなすものと思ふ勿れ、若し一毫さる心のわれにありもせば、神斧森然、立ろにわが頭上に下るべきなり。われはまた古來幾多の先覺に對して、敢へて一家の異を樹てんとするものにもあらず。唯だ先覺の所證を述ぶるよりも、神より直接に得たる予みづからの自覺を宣ぶる方、一段明確にして予が良心の指示に適ふものあれば也。わが世に屬ける常識は、わが態度と主張とを狂として笑へど、わが眞の常識（靈識）は「爾の所證の權威に立つて之れを世に宣べよ」と嚴かに命じぬ。われ今此命に從うて起たんとす。呼われ狂せる乎、決して然らず、われは「神の子」の權威に醒めたる者の一人なり。わが衷心の願ひは、われと同じ心に目醒めたる他の一人の同胞をだに得んこと也。顧みれば、我れ敗殘の一病客、世味すべて夢よりも淡きが中に、猛烈已みがたき望みは、唯だこの一事のみ。若し一人眞に「神子」の自覺を有するものあらば、誠に人類の力也。若し二人以上この自覺を有するものあらば、そこに「神國」の實現あるべし。眞理は究竟して極めて單純也。人生一切の問題に對する最根本的解釋は、唯だ繋りて「神の子」の一自覺に存するにあらずや。われは如是の信あり。かるが故に、われ憚らず起つてこの眞理を天下に宣す。

（明治三十九年一月）

如是我證

「神と偕に樂しみ、神と偕に働く」。是れ「吾れは神之子也」てふ一個の眞自覺に立てるものが、開花流水の、おのづから到り得べき悟境にあらずや。竊かに自ら信ずらく、宗教の極致、信仰の要諦、究竟して唯だこゝに在りと。「神と偕に樂しみ、神と偕に働く」。是れわが當下唯一の生活態也、稱名也、祈禱也、讃美也。

「神と偕に樂しむ」。予をして先づ此の一句義の消息を述べしめよ。

直觀すれば、吾等衆生は皆神の子、如來の子として、同じ妙なる天地の調べに心跳るべきものならずや。而かも世の多くの同胞は常に色身の迷執に縛られて、天地の太源を仰ぐことを打忘れたり。詩人の所謂「宿習の霸威」に、戀しき天なる故里の父を慕ひ求むるの心を閉ぢ塞がれたり。哀しむべし、彼等は全世界にも換へがたき天地の嫡子たる自家本來の權威ある榮座を抛つて、蟲蛄螻の如く淺ましき運命の穢土をさすらふなり。されど見よ、彼等は天なる父を忘れ、無みし、打遺てたるに、彼等が天なる父は、恆久不易の愛をもて、彼等が運命を導き護りたまふにあらずや。彼等は「彼」に負けども、「彼」は彼等に負きたまはず。彼等は彼れを自覺せざれども、彼れは束の間も彼等を忘れたまはず。彼等の迷へる時、彼れはその慈光の燭をさし向けたまふにあらずや、彼等の喘ぎ苦しむ時、彼れはその不可見の手をそと其の重荷に打添へたまふにあらずや。悲しむ時彼れ亦悲しみ喜ぶ時彼れ亦喜びたまふ。一切事、一切所、彼れは每に我等と偕に在まして、所謂蔭になり日向になりて、その親ごころの大愛を打灑ぎたまふ也。謂ふこと勿れ、是れ詩的形容の辭と。あらず、是くの如きは不斷に神の大愛に生くるものの實證語也。釋迦といはず、基督といはず、古來の先覺は、皆この一自覺、一心證を下土に宣べんがために世に出でたり。あらず、彼等が同胞衆生の爲めに打そゝぎたる慘痛の血と涙とが、やがて天地の大愛そのものの火の如き發現實證にあらずして何ぞ。かくて神は、我等が胸臆の裏より、常にその不可見の手もて我等を招きたまひつゝ、「こゝに來よ、而して爾の眞の父を見よ」と宣ふ也。しかも我等は、この雷の如き無聲の聲を聽かず、潮の如き無言の感化を得覺らず、われとわが世の榮えと幸とを打すてて、定めなき運命の嵐に、蓬髮亂鬢の姿淺ましう、人生の荒野を左迷右行するにあらずや。覺者之れを見る、眼底涙なからんや。乃ち叫んで曰はく、「自覺せよ」と。自覺者畢竟如何の光景をか見る。

それ一切は神に在りて生く。一塵一砂、神に在りては、皆久遠の大光明也、大法輪也。神之國には死なく、否定なく、破綻なく、空虛なく、不調和なし。詩人乃ち歌うて曰はく、

"Spite of pride, in erring reason's spite,
One truth is clear—whatever is, is right."

「在るもの皆善し」。是れ實に本地の風光に參したるものの發する游泳歎美の語にあらずや。

「在るもの皆善し」。之れを萬有の相關上、形式上より見るを其の一義とす。見よ、宇宙の間に在るもの、何物か皆おのがじしなる不易の位置を「全一」の大有機系中に占斷せざる。細纏た

る黄鳥は丘隅に止まるとぞいふ。止まるを知つて止まるは、おのづからなる物の性也。一絲縈まず、一石錯まらず、我等が見て縈めりとし錯まれりとするもの、神に在りては、やがて無限の充實也、調和也。かくて萬法渾然、皆己れを正して神に嚮ふ。

「在るもの皆善し」。之れを實相所含上、内容上より見るを其の他義とす。こゝには、在るもの皆實相合理のこゝろ深きを謂ふ也。山色谿聲も佛陀金口の眞實語ならずといふことなく、一香一色も實相中道の轉法輪ならずといふことなし。この甚深の理を觀じて、關尹子は曰はく、「一物も天に非ること無し、一物も命に非ること無し、一物も神に非ること無し、一物も玄に非ること無し」と。莊子は曰はく、「道は螻蟻に在り、稊稗に在り、瓦甓にあり、屎溺に在り」と。ポープは曰はく、「神は一髮裡にも心情に於けるが如く充ち且つ完し」と。この類の辭、一々擧げ來らば、卷をもなすべく、庫にも滿ちぬべし。げに、一微塵裏にも全法界に充實せる神の姿と悦とを圓かに寫し湛へて、當處洋々たるもの、やがて諸法實相の光景なるかな。

この實相上の二意義を括りて、我れ再び叫是の觀をなして曰はく、「在るもの皆善し」と。夫れ我等が僞也、醜也、惡也と觀ずるもの、やがて神に在りては皆眞也、美也、善也。我等また無常迅速を悲しみ、生滅變化を歎くこと勿らん。無常迅速や、生滅變化は、是れやがて神が依りて以て常に働く自性内在の則也、道也。一切轉化の事相、詮じ來れば、神が自觀の姿也、自交の語也、自運の跡也。そこに何の無常と生滅と虛妄とあらんや。柳は散り〳〵常住の姿美しう、花は咲き〳〵實相の意圓か也。一切の事觀じ來りて、猛き河波の暫しも止まらざる姿を其のまゝに、湛然として「大いなる現在」の愛の懷に游ぐ也、休らふ也。微塵も曾て失せず、萬法攝取の光遍照せり。あはれ、前影後影、取次に送り迎へて、自家の面目自ら圓現するなる、かの廻り燈籠の姿こそ、やがて實相不盡の燈の光景にもあるかな。物皆還り旋りて、恆寧不變の神の意ぞ著るき。天地は一個の大廻燈也。森羅色を染めて、永へに大劫の柱を旋る。吾人をして神と共にこの自然と人生とを繞り彩る無限の大燈影を靜觀せしめよ。「物と與に春を成す」萬法の樂意に相參せしめよ。一切は即て妙也、眞也、道也、神也。鳶飛び魚躍る、復た何の按排ぞ、何の計較ぞ。

活機縱橫、而して之れを貫くもの唯だ一誠あり。吾人は則ち羅馬の古哲人と共に讚美の辭を揚げんかな。

嗚呼大宇宙よ、爾に調和するものは凡べて吾れにも調和す、爾に適はしき「時」は、復た吾れにも早からず晩からず。嗚呼大自然よ、爾が四季をり〳〵の生産ものは、凡べてまた吾れの有なり。萬有は爾に出で、爾に保たれ、又爾に歸る。嗚呼愛しきかな神之都。

と。

吾人は如是に圓滿自足の神を描きたり、彼れは一切を束ね、括り、結び、充たして、當處に洋々たり。嗚呼美はしくも又樂しきは神が萬法自觀の光景なるかな、而して何の祝福ぞ、吾等も亦神の子たるの權能に於いて、不斷にこの天地の大悦に參與するを得べしとは。吾等は神にあらず、吾人をしてこの自大冒瀆の語を呪詛しせめよ、あらず、吾等は神之子也、如來之子也。神の子てふ一自覺は、人類が自己の眞地位を最も明瞭適切に直觀したる語にあらずや。神の子は全能にあらず、彼等に不盡の悲哀あり、されど喜びたのしめ、「吾が天なる父の家には第宅多し」。吾等は神の子たるの光榮に

於いて、不斷に神の懷にありて、悠々として一切を眺め樂しむを得るにあらずや。神は、吾等最も罪障しげく、迷執多き者のために、其の最愛の嫡子長兄を殺したまふにあらずや。吾等は神にあらず、されど吾等は神と偕に在りて、一切の王者也、所有者也、支配者也。「唯我獨尊」といふ乎、これ吾等が神之子として、神と偕に天地の榮座を分つの意に於いて眞也。「萬物吾れに備はる」と謂ふ乎、これ吾等が神之子として一切を彼れより受領し分有する意に於いて眞也。「吾等は何の受領はざるものを有つ乎」。一切は恩寵也。されば感謝せよ、吾等に人生無量の涙あれど、そは凡べて神に在りて拭ひ淨められたるにあらずや。吾等に不言の要めあれど、そは凡べて神に在りて充たされたるにあらずや。噫、爾悲哀之子よ、仰いで天なる父を見よ。天なる父の光榮の國を見よ、爾が渴仰要求せる一切は久遠劫の昔より、一髮も虧けず崩れず、既に業にそこに備へ完うせられたるにあらずや。大愛の父は、吾等が欲し求むるの前より、既に吾等がために一切を充たしたまへり。吾等之れを憶ひて、一念踊躍す。謂ふことを得べし、吾等は未だ得ずして既に得たりと、未だ見ずして既に見たりと、未だ會はずして既に會へりと。「盡日尋春不遇春、春在枝頭已十分」といふもの、移して以て這般靈界の消息に擬すべき也。

されば眞に神を見て神之國を吾が有とせる偉いなる靈界の勇者に聽け。曰はく、「爾曹恐るること勿れ、我れ既に世に勝てり」と。こはこれ堪へがたき人生の重荷に喘ぎ苦しみつゝ向上の一路を辿る世の悲哀の子等に開示せられたる未顯の眞實にあらずや。何等恩寵の語ぞや。げにこの語を發したる勇者には、現實の世の一切の障碍は、復た喪心の源とならざりける也。深く未顯の眞實に游泳せる彼れは、既にそゝに久遠劫の初より光榮ある勝利と充實と法悅とを縱まゝにし得たりければ也。むしろ彼れは、この未顯の眞實を世に宣して、一切衆生を救はんが爲めにこの土に來れる也。基督然り、釋迦然り、世の偉大なる自覺者皆然り。彼等の使命や決して空しからず。彼等は神之人也。かるが故に、彼等は人生最慘痛の死の淵に莅んでだに、尚ほ法音朗々、「我れ世に勝てり」と謳ふを得るにあらずや。嗚呼我等は既に世に勝てり、我等は神と偕に一切の王者也、享樂者也、一切は神の大愛の懷に、諸法實相の花と開きて、老いせず、朽ちず。されば我等復た何をか歎き、何をか悲しまん。我等をして涙の中に笑はしめよ、苦しみの中に樂しましめよ、蹉跎顚倒の中にありてだに、未見の法悅に悠々たらしめよ。我等の涙をして甘美の涙たらしめよ。それ「在るもの皆善也」。そは神と偕に之れを樂しめば也。

「神と偕に働く」。予をして次ぎにこの一句の意を味はしめよ。

「在るもの皆善し」といふ。されど吾人をして輕々にこの語に躓くこと勿らしめよ。それ「在るもの皆善し」とは、畢竟ずるに吾人が通常謂ふ所の「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙を實相一如の光景に融會せしめて見たる時の語、他語もていへば「現在」と「當在」との高低階を、更に「大いなる現在」てふ一平面に押しならしたる時の語なりと知らずや。夫れ一たび絕對峯上に立つて實在の千波萬波を瞰おろさんか、一切は皆唯だ「現在」の眞あるのみ、美あるのみ、善あるのみ、そは皆絕對善也、絕對眞也、絕對美也。煙波萬里、蕩々として横に諸法實相の海を開けり。こゝに一不完なし、一罪障なし、隨つて「當在」なし。自足の神也、圓滿の神也、充實の神也、大現在の神也。一切は皆在るがまゝにて善也。不老常住の月、圓

かに諸法の花を照らして、淨樂永へに解くるの則あらず。されど翻りて諸法實相を差別發展の現實界に織り出づれば、こゝには「在り」と「在るべし」と、「現在」と「當在」との對峙鏗然として現じ來る。之れを一念の迷とすること勿れ、是れ常識自證の眞事實也。現在と當在、卽ち事實と理想との戰を外にして、人生の意義あらず。人生無窮の戰也、向上といひ、進步といふもの、皆こゝに源を發し來る。横より見て實相一如の海と開くもの、縱に仰げば理想の峻峯永へに天を摩して、分け登る人生の一路、常に崎嶇たり。何が故に實相一如の海が、理想現實の險しき峯と聳え來るかを知らず。唯だこの事實に面しては何人も之れを得否まじ。吾人乃ち觀ずらく、吾等は弱し、當さに强からざるべからず、吾等は完からず、當さに完からざるべからず、吾等は迷執之子也、解脫徹底の人たらざるべからず、人生は穢土也、淚の谷也、之れをして安養淨樂の土たらしめざるべからず、現在の社會組織は不備也、須く之れを改善すべし、現在の國際關係は非也、須く之れを平和人道の關係たらしむべしと。詮じ來りて人生一切の事、皆この「在り」と「在るべし」との一商量に歸まる。不可思議なるかな、我等が見て在るべき理想となせるものは、卽ち深き意義に於ては久遠劫の太初より旣に在るの事實たり、究竟して旣に在るの事實が吾人現實の意識に發しては、未だ在らずして當さに在るべき理想たり。いかなれば、この大いなる矛盾(矛盾と言ひ得べくば)を營まざる可らざる乎を神に問はんは我等が分ならず。唯だ現實の世の營みを一夢と觀ぜざる我等は、飽くまでも迷はず、疑はず、旣に在りて未だ在らざるこの理想の一途を無窮に蹤ふべき也。故に曰はく、「神と偕に働く」と。

「吾が父は今に至るまで働き給ふ、われも亦た働く也」。世界は神の大工場也、大田園也。天意流注の痕、歷々讀むべし。我等、神之子の自覺に立つて、大父の經綸に參し、謂ふ所「世界之進行」に一轉步の力を貢するを得る、何等の光榮ぞや。達者卽ち歌うて曰はく「帝生萬物靈、使之亮天功」と。我等はこれおの〳〵自家分上の天功を亮くる一個の天子にあらずや。但だ天功を亮けて働くといふ、卽ち歸する所は竟に理想と現實との嚴肅なる戰ひならざるべからず。而して現實の世に百缺陷あり、百罪惡あり、これ事實也。誰れかいふ、現實の事、在るがまゝにて善也、美也と。罪惡は在るがまゝにて善ならず、殺人は在るがまゝにて善ならず、戰爭非也、帝國主義也、產業組織非也、文明亦非也。現實に百非あり、百不完あり、誰れかいふ、世事一切在るがまゝにて善也と。若しかいふものあらば、私欲も、利己も、我執も、癡妄も、瞋恚も、顚倒も、亦復た一切あるがまゝにて善也と見るべきか如何に。何が故に世界は煩悶し、人類は精進する、他なし、不斷に現在を不滿として無窮の理想天を慕ひ躋るが故にあらずや。世は初めより完からず、人は不斷に理想に躓く(神ならぬ吾等、誰れか亢顏吾れに罪なしとはいひ得る)。世界と人世と、詮じ來りて大いなる理想發展の歷程なり。誰れかいふ、一切は在るがまゝにて善也と。若し依然として之れを眞面目に主張する者あらば、そは强ひて一切の事實に眼を蓋へる者なる乎、然らずんば未顯の眞實(予が曩に神と偕に樂しむの方面として描きたる諸法實相、平等一如界の光景)に游泳して發すべき信樂の語をば、漫然この現實の差別界に移して發したる混亂の見なるべきのみ。諸法實相の神の國に見たるもの、やがて必ずしもこの現實界の光景そのまゝなりとはいふべからず。現實には缺陷あり、迷妄あり、隨ひて戰ひあり、進化あり、發展あり、

これ事實也。吾人は、かの漫然として、この現實界に於ける「在ること」と「在るべきこと」と、事實と理想との嚴肅なる對峙を沒却し去り、而して一切は在るがまゝに善也と謳歌する一派の淺薄なる非事實的樂天家に與みせず。彼等は概ね發展進化の思想を闕如せり。彼等は嚴肅なる人生の事實を餘りに輕視せり。（宗教家の思想にこの弊殊に多し。）夫れ「在るがまゝにて善なり」てふ語は、一切の理想の實現し盡くされて、永へに不老常住の「大現在」となれる實相一如の世界を觀じてこそ發すべき達觀の語なれ、信念の語なれ。これ事實也。されど之れと同時に理想と現在との對峙を有するこの差別現實の世界も亦事實ならずや。彼れ固より否むべからず、此れも亦沒すべからず。但だ彼れに於いては、平等に顯現せる神が、此れに於いてはその顯現に高下大小の差別ある也。道は佛にありて一毫を增さず、凡夫にありて一絲を減ぜずとは、これ我等が未顯の眞實を達觀したる信念上の語にあらずや。現實の事相界に立つていはゞ、凡夫に於ける佛性、神性の顯現は、明かに佛陀覺者に於けるそれよりも貧少なりとせざるべからず。ポープが、神は一髮の中にも心情の中にも同樣に充實せりと觀じたるはむしろ信念の語也。事實に於いては、神が二者に於ける顯現の內容に、多少厚薄の差あること、誰れか否まんや。基督に顯はれたる神はイスカリオテのユダに顯はれたる神よりも大い也。釋迦に顯はれたる佛性は提婆に顯はれたる佛性よりも大い也。是くの如くに觀じて、現實界に於ける一切美醜善惡の價値、森然として其の色を別ち來る。漫りに美醜善惡の價値を拂拭し去ること勿れ、價値は畢竟現實の一切物に於ける佛性顯現の多少、神性發展の高下より發し來る眞實無妄の差別に非ずや。吾人は信念の世界に於いては、一切の價値を超越し（統一的に）、事實の世界に於いては、萬殊の價値別を認識す。彼れも眞實無妄、是れも亦眞實無妄。信念を以て事實を空視し抹殺すること勿れ、寧ろ吾人をして信念を以て事實に勝たしめよ。信念に立つて事實と戰ふは吾人の態度也。漫りに善惡の價値別を輕視すること勿れ、價値の色彩ありて人生一切の事、始めて意義あり、向上あり、發展あり。

嗚呼誰れかいふ、人生一切の事在るがまゝにて善也と。一切は在るがまゝにて善ならず、之を善ならしむるは吾人の信念也、理想也。古人もまた、神を信ずるものには、一切の事、皆働きて益をなすといへり。事實は信念に打勝たれてこそ始めて善美の光を放て。我等に、世に勝てり」の信念なくして、いかでか「一切皆善」の大觀あることを得んや。吾人は吾人の理想信念に立つて、事實と戰はざるべからず。戰つて後にこそ善あれ、在るがまゝにて善なるにあらざる也。故に曰はく、神と偕に働くと。

予は更に上來の觀を一、自覺に攝して以爲らく、吾人の活動には常に大安息あり、吾人の戰には大平和あり、何が故ぞ。吾人は神と偕にこの世の理想現實の最嚴肅なる戰に參すると同時に、又神と偕に未顯の眞實に游泳して、「萬法皆善」の法悅を分有することを得れば也。內、常に充實の樂を湛へて、外、常に健鬪の誠を有するは吾人が理想的態度也。實相之神（法身佛）と偕に悅樂し、理想之神（報身佛）と偕に勞謙す。彼れはスピノーザ、婆羅門等の神にして、此れは正義一貫之力を見たるマッシュー・アーノルドの神、若しは世代を通じていやのぼりゆく一大目的を觀じたるテニソンの神、乃至は「人は一部に於いてあり、全部に於いてあることを望む」と歌へるブラウニング等の神にあらずや。一を觀美的といふべくば、他を倫理的といふべく、一は常樂の大現在を湛へたる

法性之神、他は火の柱、雲の柱となりて、不斷に吾人を彼岸に導きたまふ理想之神、進化之神也。而かも究竟して、誰だ實有一乘の神の、二面の世界に顯現して、我等衆生が渇仰の標的となれるものに外ならず。吾人の神は、尊者オーゴステンの所謂「常に働きつゝ常に息へる」神也、「常に求めつゝ而かも一切を有てる」神也。

この意味に於いて吾人の神は一體二面の神也。一面の神に參しては、悠々として樂しむ、わが世の春は永へに寂しからず。他面の神に參しては、堂々として働く、われらが氣力則ち倦まじ。故に日はく、神と偕に樂しみ、神と偕に働くと。

夫れ未顯の眞實を達觀して、「一切皆善」の信念を有するものにありては、人生に於ける理想現實の戰そのものが、佛者の所謂自然法爾の發動也。彼れにありては、偉大なる積極的活動そのものが、やがて大慈恩寵のおのづからなる流露也。こゝには最早自力も他力もあらず、我が行ふ所が即ち神の行ふ所、我れ生くるにあらず、神我に在りて生くる神我一如の自在境也。如是の人も、尚ほ時には理想の一路に躓くことありぬべし。世に在りては、誰れかこの苦き淚なからん。されど神を信ずるものの淚には、常に光輝あり。彼れは敗ると雖も、常に勝てり。神と偕に樂しみ、神と偕に働けば也。而してこれ實に理想を單に理想としてのみ追求する倫理道德の解し得ざる所也。

（明治三十九年一月）

自覺小記

「天地は失せむ、されど吾が言は廢らじ」。
爾の見たる所、信じたる所を憚らず同胞に頒ち傳ふべし。

觀ずれば吾等一切衆生は久遠劫の始めより神の懐に抱かれたる神の子也、如來の子也。自覺すると自覺せざるとに論なく、事實に於いて皆然り。吾れ劣機下根、而かも何の幸ぞや、この惠み深き自覺の一日に入ることを得たりしは。一期の歡喜抑へあへず、乃ち起つてこの自覺を天下に傳ふ。

吾れは一切の教權、形式、習慣、常識、偏見、我執の束縛を脱して、方に纔にこの一自覺を得たり。見よ、久遠劫來の天地の法音は、靜夜の大空を流るゝ無碍の星光の如く、いとさやかにぞわが心の緒に響き傳はりたる。それわが見たる神は詩人の描く賦彩形容の神にあらず、世の哲學者の考ふる概念抽象の神にもあらず、世の所謂宗教家の主よ〳〵と呼ぶ名目の神にもあらず、科學者の所謂腦細胞の空華にもあらず、異象、幽靈、化佛の類にもあらず、はた又ルソー等の衷心の寂しさに得堪へで其の存在を念じ出ださざるを得ざりし單なる主觀要求の神にもあらず。吾が見たりし神は、事實の神也、意識の直接の自證の神也、當面現前の神也、咄々、こゝにと驚きて叫ばざるを得ざりし神也。何等の新鮮、何等の光耀、何等の活潑、何等の靈動。爾時實に神は天地の奧底より躍り出でて、端的に吾れに格り、吾れを捕へたるなり。その刹那、吾れは世にも希有不可思議なる神の虜となりて、浩々として禦ぐべからざる神の靈しき働きの一機關とはなりけるなり。(誰れかこの意識を描き得んや、覘ひ得んや、評し得んや。)吾れは驚喜と敬畏とに心溢れて、わが神の光榮と權威とを打まもりたるに、げに全く人の世の言語に絶したり。不可稱也、不可説也、不可思議也。吾れは正しく天地人生の神祕の太母に接したるなり。

天地に大靈あり、大靈一夜小靈に言葉を傳へて(この現前の意識は予の一生忘るゝ能はざる所也)吾れをして天人父子の微妙の消息に心躍らしめぬ。人よ喜べ、思へば吾等は皆世の始めより天地の大靈と共在せる神之子、如來之子なりけり。われ多年、朧げながらにこの幽玄なる消息を摸索百端して、憬れごころ已みがたかりけるに、今や洞然としてこの奧義に徹することを得たり。われ自大の夢に自ら欺き他を紿かず。わが語る所は眞理也。(而して眞理を知る者は唯だ眞理なり。)但だ父子といふ一類の語、餘りに人間的なるの嫌ひあるに似たれど、わが自ら經たる所によりて、神と吾れとの關係の萬一の相をだに寫し出でんには、いと〳〵覺束なき輪線ながらに尙ほかゝる一味人的、比論の語を用ふるの外なきを感じたるなり。かくて吾れは基督其他先覺の毎に用ひたりし件の語を襲用するに至りぬ。予は漫然として無用意に前人の聲に和したるにはあらざる也。

吾等は久遠劫來の神子也。あゝこれ何等の偉大なる福音ぞや。吾等人類は偶々逝波に點じてやがて音もなく消えゆく白雪の、はかなきたぐひにはあらず。蘧然として自覺し來れば、吾等

は是れ進化といひ發展といふ一種の形式、方法に因りて、堂々との現實界に顯現しつゝある法身一味の金枝也、玉葉也。吾等が家は即て三世常住の神の家にあらずや。

哀しむべし、吾等は三世實相の父の家を迷ひ出でて、遠く無明客塵の巷に淺ましき一日の生を貪る。習性の薫ずる所、竟に父を忘れ、家を無みして、空しく乞兒狗奢の群に墮せんとす。慈眼の天父、乃ち吾等を捜し索め、高く聲を擧げて、吾等を招還し給ふ。吾等がその折々の機縁に觸れて、そこともなく天なる父を慕ひ索め、憬れ惑ひ、而して竟に一朝豁然、父子本來の關係を自覺するに至るは、畢竟この親ごころの感應にはあらじか、神の本願力の吾等が心情に通徹したるにはあらじか。（說きかた極めて詩的なれども、かく說かざるを得ざる最深奥の事實なるを如何にせん。）われは今更のやうに『法華經』の長者窮子の譬喩、乃至は『聖經』の放蕩息子の譬喩の甚深の意義に玩味し到るを禁ずる能はざる也。『易』に曰はずや、『鳴鶴陰に在れば其の子之れに和す』と。嗚呼吾等、今は飄然神の子てふ光榮あり權威ある自家本來の自覺に立還りて、天父の大愛に應和すべき時にあらずや。

基督この自覺を握りぬ。その他多くの先覺亦復た然り。吾等はたいと微きものなれど、一たび面り神に接して神子の自覺に入ることを得たり。思ふに一切の同胞皆等しくこの自覺に入るべき權能あり、入るべき筈也。かくてぞ吾等は皆天なる一人の父の愛に連なる兄弟なる。いかなれば世の碌々の徒、特り釋迦、基督をのみ人類以外の聖なるものとし別ちて、永へに之れを神秘龕中の偶像とは做し了らんとはする。天分の高下は言はでもあるべし。さはれ、彼等若し神の子ならば、吾等も亦ひとしく神の子ならずや、彼等もし神を、如來を父と呼ばば、吾等も亦しか呼び得るならずや。吾等迷ひに迷ひを重ねたれど、悟ればやがて神子也。彼等もし假りにこの土に肉身を化現したる久遠の語、道、乃至應身佛ならば、吾等にも亦久遠劫來神の懷にあるの自覺あるに非ずや。はた又彼等は裏に不斷の神在の自覺を存しきと謂はん乎、吾等も亦同じ自覺に、一念の踊躍禁じがたきものあるにあらずや。げにや彼等は所謂「人中尊」なるべし、而かも彼等は竟に吾等が同胞ならずや、然り、彼等は所詮吾等が自覺の長兄なる也。吾等が眞の父は、高きに在ます一人のみ。

それ渺茫たる眞理の王國は、吾等が直覺のいゝ新啓示に依りて、不斷に開拓闡明せられつゝあるにあらずや。想うてこゝに到る、誰れか崇高の一念に打たれざるべき。直覺は事實を創造し、理知は唯だ之れを解析し、推演す、直覺は新眞理を啓示し、理知は唯だ之れを排列し、比較す。理性や知力は到底直覺の前に跪きて其の材を仰がざるべからず。思ふに知と言はず、情と言はず、意と言はず、吾等の全人が、事に觸れ縁に接して、わが内在の佛性、神性を實現する所、そこに新眞理の啓示はあるなり。かくて吾人に直覺の存する限り、眞理の啓示發展は無窮なるべく、理知は唯だ永へに其の事實の後を趁うて奔るべきのみ。されば世の所謂學者をして、說明し批判する前に、先づ事實と眞理とを直覺せしめよ、之れに觸れしめよ、之れを味はしめよ、之れを感得せしめよ。かの曾て一たびも神に對する思慕、要求、煩悶の經驗を存したることなく、況して之れに觸れたることもなく、其の神秘なる人格的感應の消息に接したることもなく、而して嘵々として神の有無を論じ、神の人格性を難じ、乃至は宗教的信仰の合理性を評せんとするが如き、是れ、いさゝかも美術上の趣味のたしなみなく、鑒藻力なき徒が、喋々として、雪舟、ラファエルの繪

畫を品評すると擇ぶ所なきなり。所詮かゝる輩は、この一境に容喙の資格なきものなり。其の言説の空疎、力なき、また異しむに足らざる也。

之れを約するに、眞理の應用は極めて複雜多端なりとするも、眞理の原理は極めて單純、自明、而して又極めて深奥也。「神之子」の一自覺の如きは、正しく是くの如き眞理の資格を具へたるものにあらずや。神子の一自覺を握れる者は、是れ一切の德教問題、社會問題、人道問題の最根本的解釋の祕鑰を握れるものといふべきなり。嗚呼この眞理よ、一見極めて迂遠なるが如くにして、而かも思を覃うして其の意義を味へば、世にこれほど沈痛深奥の解釋を人生一切の問題に與ふるものはあらざる也。平和、光明、活動、發展、進歩の福音、一に萃まつてこの自覺にあり。美術といひ文藝といふ、其の立脚の根柢は竟に亦こゝに見出だし得べきなり。救はれてこそ文藝の花も愉しけれ、自己存在の眞意義を自覺せずして、文藝の絶對價を説くものあらんか、われは其の絶對價てふものの内容の餘りに貧しきを疑はずんばあらざる也。吾等は何をさし措きても先づ眞に生くる所以の道を講ぜざる可らず。眞生命なくして何の美術かあらんや、何の文藝かあらんや。或は文藝そのものこそ吾人に眞生命を與ふるものなれと謂はん乎、予は所謂文藝の貴ぶべきを知る、その一時的解脱の縁を供するを知る、而かも所謂文藝は竟に吾人の靈魂を救ふの器にあらざる也。或は吾人は哲學又は文藝等に因りても安立し得ざるにあらずといふ。されど予を以て見れば、吾人は到底哲學又は文藝等に因りて、眞の空虚なく矛盾なき充實徹底の安立を得る能はず。少なくとも、予が實驗は、かく斷言するに躊躇せざる也、然らば何物か眞に吾人を救ふの力なる、曰はく、神子の自覺、是れのみ。少なくとも予は信ず、この一自覺は人の靈魂を救ふ最有力の眞理也と。若し之れを宗教と謂ふべくば、是を宗教と呼ぶ亦可也。（トルストイは信仰とは人をして因りて以て生きしむるものなりといへり。）されどこの意味の宗教は、今の一派の人士によりてかの哲學、倫理、文藝等と同列に、之れを人性完成の一方面、乃至は趣味教養の一要素と見做さるゝ類の宗教とは、大いにその内容を異にせり。宗教は吾人の全人を最根柢より生き且つ動かしむる神祕力也。今人の多くが思惟する宗教は、必ずしも予の所謂宗教にあらざる也。

神子てふ自覺の中には、基督の所謂愛神愛人の大義も籠もりぬべく、ヘーゲルの「人格たれ、而して他の人格を敬せよ」てふ倫理上の最高原理も含まるべく、はた又本我實現の主義、生々化育の理想等をも包みて餘りあるべし。之れを演繹し、之れを應用しもてゆけば、多々益々辨じて、眞理源頭の活水、永へに涸るゝことなき概あるにあらずや。

「神と偕に樂しみ、神と偕に働く」。これ神子の自覺よりおのづから達し得べき人生的一原理なり、一モットーなり。それ吾人は、世の始めより神に在りて一切の所有者也。未だ得ずして既に得、未だ見ずして既に見、常に貧しけれども常に富み、常に滿たざれども常に足らへり。花は散りつゝ且つ美しう、月は虧けつゝ常に圓かなり。一塵も神に在りては永劫失せじ、生死彼岸の實相の春永へに老いざれば也、故に曰はく、神と偕に樂しむと。それ天地の神は、流るゝ水の生々活潑、一息の間てもなく、働きて曾て休まず。吾等も亦神の子として、神を亮けて其の化育の大業に參すべきものにあらずや。何をか化育の大業とはいふ。一切衆生をして天人本來の關係の自覺に立還らしむる是れのみ。人をしてこの自覺に安立せしむる、世に

是れほど崇高なる事業あるべしや。これを措きて復た眞の意味にていふ事業はあらじとこそ覺ゆれ。一切の社會的分科の事業は、達觀し來れば、吾人をしてこの一自覺一開悟に到らしむる第二義的事業のみ、若しくはこの自覺、内容を豐富深邃ならしむる補助的要素のみ。世の所謂一切の事業に開眼するものはこの一個の自覺也。この自覺と伴はざる文明は、寧ろ無意義なる沙上の樓閣とやいはまし。故に曰はく、神と偕に働くと。事業以上の事業也、義務以上の義務也。

眞に神子の自覺に游泳せんものは、その一切の事、靈動無礙の概あるべく、而してこゝには又、世の自力他力といひ自愛他愛といひ、我無我といふが如く拘泥一味の言語は、春雪の消えて痕なかるべし。吾等鈍根、尚ほ遠きにこの境を望むものなりと雖も、今や未見の新天新地は開かれて、未だ曾て得ざりし自由と平安と光明と無所畏とを證し得たるぞ忝なき。乃ちこの喜びの音づれを天下の同胞と共に頒ち汲まんと欲する所以也。

（明治三十九年一月）

斷光録

苦痛の祕義

苦痛の刹那、人は往々默して聖者となる。苦痛の前には一切の煩惱、薄きこと霧の如く、眼中の山河大地も幻の如くに漂ひ去らんとす。一念卽一切、一切卽一念は正しくこの境の光景なり。この時吾人は往々一種淸涼の感を覺ゆることあり。

大いなる苦痛の刹那、人に誇るべき何ものありや、恃むべき何ものありや、その好む所は何ぞ、その願ふ所は何ぞ、彼れはた何をか戀ひ慕ひ、何をか思ひ煩ひ、何をか恐れ惑ひ、何をか跪き惱むぞ。凡そありとある迷執薰染の源なるわれらが心の小壺の古黴は、一念淸淨の水に跡なく洗ひ去られて、中に燃ゆるは唯だ沈痛嚴肅なる苦痛の焔のみ。苦痛の焔は畏るべし。而かもそは往々にして能く百煩惱の結縛を解く。苦痛三昧は屢々淸涼三昧なり。

苦痛は必ずしも恐れ詛ふべきものにあらず。苦痛は時に吾人を神を詣でしむる試煉の聖殿たり。嗚呼人生の行路に慘痛の涙あり、而かも吾人はこの涙に煉り淨められて屢々赤子天眞の心に立還るを得るなり。是くの如きは實にこの不可思議なる神の世界の一祕義なり。これ浮泛語にあらず、われはわが病床に於いて曾て屢々この祕義を味へり。

謂はゞ生命の柱を嚙み傷るともいひぬべき一種劇甚なる肉の苦痛に襲はるゝ刹那、われはわが人生に對する多少の希望、多少の計畫、多少の執著、多少の努力向上をば幾んど跡方もなく抛ち去るなり。かゝりけるをり、予は屢々意氣地なくも死の手に一攫し去らるゝ如くに感じたることもあれど、又屢々右に喪ひたるものを左に取り還すの喜びを得たり。何の謂ぞや。大死一番のうちに眞生命に觸れたる一味の悅び、是れなり。肉に死して靈に生きたるなり、路窮まりて海開け、人苦しみて神を仰ぐ。見よ、この刹那、苦痛てふ岩根こゞしき周りに、ひしと一筋に大慈の力に依り縋る優しき歸依の眞淸水、湧き出でて、いと溫かなる意にぞ之れを潤したる。辿り深き信樂の士の苦痛の涙は、感謝の一念に輝きぬとぞ聞きし。

苦痛は人をして至誠ならしむ、眞面目ならしむ、我執我慢を脫せしむ。而して又時に神祕の靈力を直覺する大勇の道士たらしむ。諺に曰はく、苦しい時の神賴みと。人、疾痛慘憺に會して未だ曾て天を呼ばずんばあらずと、古人も道ひぬ。これむしろ人情の至極なり。而して人情至極の煥發、これ實に神の最も近く在まし給ふ宮居にあらずや。孔子の極めて實際氣質なるだに、尙ほその陳蔡の野に苦しむや、天てふ超自然力に我れの存在を結びて、以て自ら彊うし自ら勵ましたり。苦痛に祕義あり。「我が神〳〵何ぞ我れを捨てたまふや」の基督の一語、嗚呼世にも是れほど深奧無量の苦痛の祕義あるべしや。この一語、唯だ〳〵われらが一代の血涙を灑ぎつくして味ふべき也。語る能はず、說く能はず。

最も單純なる信念

「吾れは神の子也」。宗敎の極致、詮じ來れば唯だこの一自覺、一信念を發揮するにあり。

この一個の眞自覺を神に得て同胞に傳ふるは、何等の單純にして、偉大なる事業ぞ。世の事業といひ天職といふ、其の窮極の意義を達觀し來れば、唯だこの一事に歸著す。一念この事に及ぶ、われらが枯槁の殘生、復た抛ち盡くして惜しむに足らざる也。

「愛神愛人」の教義や、「神と偕に樂しみ神と偕に働く」の規箴や、其の他あらゆる問題の解釋の祕鑰は、皆藏められてこの一根本自覺の中にあり。卷けば方寸に藏れ、開けば六合に彌るもの、唯だこの一眞理乎。安心の法門もこゝに叩きぬべく、生存の要諦もこゝに尋ねつべし。唯だ世の之れを口に唱ふるもの、多くは未だ眞の自覺者ならず。

吾人の人格の趣味の内容は、及ぶべきだけ豐富なるべく、複雜なるべし。但だ之を約する主觀的信念の形式は、及ぶべきだけ單純且つ深奧ならんを要す。博學約信は教養の一大要義也、而して「神之子」てふ一自覺は、最も能くこの約信の要求に副ふものにあらずや。

眞に「神之子」の自覺を有するもの二人以上集まる所、そこに眞の意味の社會あり、國家あり。之れを稱して「天國」といひ、「神之國」といふ。

自大自矜の一念を儆めよ

吾等をして自大自矜の一念を愼ましめよ。吾等にして若し絕對無上の眞理を摑めりとも、吾等は竟に是れ神にあらず、如來にあらず。基督だに曾て自己を神也とは宣したまはざりしにあらずや。吾等は竟に神にあらず、吾等は神の子也、神の大愛に連なる一分身也、一個識也。神人合一の刹那の境に於いてだに、吾等は全く神とはならず、唯だ一息開てなき靈交の自覺に入れるのみ、我れは神の溫かなる懷に抱かれながら、依然として尙ほ我れたり。嗚呼こゝに吾等が永へに居るべき眞地位はある也。而して權威と光榮と、亦實にこゝにあり。吾等をして漫りに自悟自覺の一念に思ひあがらしむる勿れ。吾等悟れりといへども尙ほ神にあらず、否悟りそのことが、神よりの恩寵なり。われは世の絕對の眞理を悟れりと稱する自覺者の態度に、歸依敬虔の一味なきをいと〳〵惜しとするもの也。

われは谷間の白百合花なり

われは谷間の白百合花なり。謙の谷深ければ、虛榮の風に吹かるゝ虞れなく、操の匂ひ高ければ誘惑の波に搖らるゝ憂ひなし。人訪れねども、峯の松風、夜な〳〵の夢に通ひ、日影ささねど、岩間の淸水、思ひの絃をしらべあふ。富貴の花と誇りて心の眞を戕ふことなく、文明の花と唱へて形の皓きを失はず。日を趁って不斷に轉ずる雄心われには燃えねど、外を慕はぬ一念の鏡に、高き碧空の影も親しみ、人を魅するなよび姿の、われにはなけれど素き心の一すぢぞ、歸依信樂の誠なる。あはれ、われは大神の惠みの充ち足らへる小さき僕の、花の白百合なり。白きはたゞわが裝ひのうへのみかは、身も白く、魂も白く、夢も亦白し。白きは一切の色の源にして、衆德の流れいづる愛の徽號とぞ聞く。われ浮世の譽れを求めねども、心醒めたる眞の友の感應おのづから寂しからず。かくて夢ならぬわが世を夢と過ぎぬれば、見よいやはてのひと日、われは愛に輝く白妙の羽衣さして、光榮の天門高く打仰ぎつゝ、慕ひつゝ望みつゝ、彼方の故里へと歸りゆくなり。

自然

春は歌ひ、夏は働き、秋は考へ、冬は徵す。

徹して而して歌ひ、歌うて而して働き、働きて而して考へ、考へて而して徹す。大河の水と流れ、梵音の響きと續きて、一氣貫穿、自彊しばらくも息まざるもの、是れ「自然」てふ大いなる靈魂の呼吸にあらずや。

歌ふや充實す、春潮洋々たり。働くや充實す、夏雲滃々たり。考ふるや充實す、秋の野に千里空明の觀念平かに、徹するや充實す、冬の空に涅槃實相の姿圓かなり。

自然の運行は歩々節々悉く充實して、一瞬やがて三世を渦まき盤る。「古池」に「蛙飛び込む水の音」は、聲々やがて久遠に響き連なる轉法輪にあらずや。鳶飛び、魚躍り、風吹き、水流る、自然の何物か、これ一氣の充實ならざる。充實は卽ち誠也、誠は卽ち天地の大悦也。

神を信ずるものは人を信じ、人を信ずるものは「自然」を信ず。かくて我等は熱き涙を頑石の面に濺ぎ、優しき念ひを荒海の胸に抱くを得るなり。

後者に與みせむ

天地の間の事、一つとして我が明瞭なる頭腦の光に照らしもて知り得ざるものなしといふやうなる態度いかめしげに、何事をも自家理性の俎上に載せて、心得顏の、事もなげに解釋し、說明し、批判し、斷定する自大聰明の學者あり。眼に一丁字なくして、事每に驚異し、歎美し、崇拜して、敬虔の一念常に已みがたき無智迷信の野人あり。予れは情に於いて後者に與みせむ。

祈禱

或は曰はく、瞑想は獨語也と、加へて曰はん、獨語は祈禱也と。祈禱をして常にわれ知らず心の底より迸り出づる天眞の獨語たらしめよ、かくてそは如何ばかり美はしく、且つ力あるべき。かくはいへど、予は又かの一切の儀式的、器械的、職業的祈禱を排すと謂ひて、放心慢意、竟に祈禱の眞風光に參じ得ずして已むものあらんを悲しむ。形式の祈禱、時に吾人を導いて道交の奥龕に參ぜしむることあり。かの始めは殆んど無意義、器械的に稱名念佛するものが、聲々次第に光明を帶び、精彩を著け來りて、一念いつしか打成一片の信三昧地に躍入することあるの理を想ふべし。

無念無想の祈あり、言ひがたき歎きの祈あり、涙に餘る思慕の祈あり、一言の祈あり、千萬言の祈あり、奮鬪向上の祈あり、感謝平安の祈あり。すべて眞心より出づるものは皆祈也。

密室の祈もとよりよし、堂々たる天下の廣居に立つて、億兆民衆と偕に一心の誠を天地の大靈に聽えまつるの祈に至りては、崇高のこゝろ極まれるかな。

『極數道德』の著者に

仙醉齋木君足下。曩には御書及び高著『極數道德』の一篇御惠贈に相成り、且つ之れに對する批評の辭を求めらる、僕に取りて甚だ光譽の事と存候。極數道德の名、既に奇警、頗る人の心を惹く。乃ち披見一番。されど悲しいかな、僕の頭腦は此の書に含まれたる一乘無等の眞理を理解するの資格なきものにて候ひき。批評など思ひも寄らず。我れながら技癢さ、意氣地なさの極みに候へど、今は唯だ默して差控ふるの外無之候。眞個透徹の眼を以て此の書を評するもの、世にその人鮮からず候べし。冀くは彼等をしてこの書の眞價値、眞光明を發揮せしめよ。僕の如きは遺憾ながら明かに此の書に躓ける門外漢にて候也。

足下が一切の教權、祖師を排斥し去り、自家

直接の意識の實證を以て、徑ちに眞理の堂奥に參ぜんとせらるゝ淸々の意氣抱負は、頗る僕の心を得たるものに候。眞理を慕ひ求むるものは、何人もこの意味に於いて個人主義者たらざるべからずと存候。個人直接の判斷と證得とを外にして、眞理に參するの道はあるまじく候。但だ足下がかゝる一種の抱負と用意とを以て證得したまへる極數道德の眞理の內容を僕の十分に領會し得ざるは、遺憾千萬に候也。僕深く之れを恥づ。

尚ほ僕をして一言を添へしめよ。極數道德に如何なる無上眞理の含まれ居り候にもせよ、數理といふが如き抽象的、知力的のものが、果して吾人の全要求を滿足せしめ得べきものに候べしや。或は足下の謂ふ數は、かのピュタゴラス派が其の所謂數を一面實體的に解し、若しは易哲學が數其者の關係以外に「生々存々」の元氣を說きたるやうの觀法と似通へるもの、乃至は儒教やストアの誠といひ道といふものと略々同位置を有するものに候や。若し實に然りとするも、かゝる豐富なる具象的、實在的意義を有するものを數理の關係てふ如きものにて、遺憾なく標現し得べしや否やといふこと、是れそもゝゝ重要なる一疑問なるべく候。伊藤仁齋は、宋儒の所謂理を評して、氣中の條理のみと喝破致し候ひしが、此の評の當否は姑らく措き、兎に角、數理上の關係に含まるゝ眞理は、如何に深遠精微底のものに候にせよ、其は到底或具體的活物中の一關係、一屬性、一條理たるを免れずとこそ存候へ。數そのものには衝動性なく、活動性なし。我等は數理に向つて淚をそゝぐ能はず、祈る能はず、自家中心の要求を訴へいづる能はず候。少なくとも僕の要むるものは、數理その者にあらずして、數理の章を具へて活動する靈的活物にて候也。（されど是れは勿論貴著に對する批評にては無之候。）

神、神子の自覺、神國の實現、この三つのものを外にして、究竟ずるに天人に通じ、三世を貫く常恆不易の眞理はあらずとこそ存候へ。而してこの眞理を最も沈痛深切に證得せるもの、古今、耶蘇基督を推し候べし。基督を自覺の最長兄とせる天國の實現は、我等が此の世に於ける最嚴肅の義務には候はじ乎。

貴著の批評に躓きて、はからずも僕みづからの信念の陳述と相成申候。事の禮なきをも咎めたまはで御教示に接するを得候はゞ、幸甚に候也。不盡。

（明治三十九年二月）

「神子」の辯

「神之子」の一語、やゝ打惑はるゝふしなきにあらず。わが所謂「神之子」の語はキリスト即ち救主の意義を帶ばせたるにもあらず、又神の生みたまへる獨子てふ意義を含ませたるにもあらず、況して神其のものといふ意義をや。皆非也。わが所謂神之子の語は、唯だわが見神及び神人道交の實驗上、おのづから得來れる父子有親てふ一種微妙なる靈的關係を詮表したる語に外ならざるなり。わが所謂神子の意義、之れより多からず、又少なからず。玆にはこの一意義を外にして、復た何等の歷史的、傳說的意義をも有せざるなり。思ふに、かゝる意味に於いての神之子（如來之子）てふ一語ほど、世にも最も適切深奥に天人の關係、隨うて吾等人類の眞地位を指示確立する語はあらじ。吾等一切衆生は、最も正當なる意味に於いて、本來皆ひとしく神の子たるにあらずや。我等衆生をして、この光輝ある一自覺に立還らしむるが、取りも直さず神の大慈の本願にあらずや。「神子」の一語、これ決して自大の語にあらず、冒瀆の聲にあらず。直觀の語也、靈覺の聲也、而し

て又公明平正の事實也。吾等人類は、本來皆この自覺に入るべき權能あるなり、入るべき筈也。一たび天父の大愛に觸れたるものは、明かにか朧げにか、皆神子の自覺に入るものといふべく、若し世に神を我が父と呼びながら、心誠に神子の自覺を有せざるものあらば、そは疑ふらくは僞善の徒乎。個の神子の自覺、豈基督の獨占ならんや、彼れは唯だ最も沈痛深刻にこの靈覺に游泳自在せる人中尊也、模範人也、最長兄也、最大代表者也。

神之子てふ自覺は吾等人類の自然の衷情より流れ出づる聲なり。吾等若し眞實に神子の自覺に入ることを得んか、之れを言語文字の形式に詮表すとも、せずとも、將た之れを詮表するの言葉が、「神之子」なるも、「人之子」なるも、是れそも〳〵何の關する所ぞ。自覺そのものの中心内容を餘所にして、拘々として文字言語の形式を詮義だてするは達觀者の事にあらず。基督は常に自ら謙して「神の子」てふ言葉を用ひしこと稀れなりといふ乎、而かも彼れは、一面堂々として憚る所なく自己がアバラハムの在らざりし世の始めより神の懷に抱かれたる獨子にして而かも世を救はんが爲めに特に神より遣はされたりてふ自覺を隨處宣傳したりしにあらずや。されば、眞に基督を觀んとするものは、直ちに彼れが自悟自覺の中心内容に分け入るを要す、彼れが個々の言語の跡に拘泥するは斷じて非也。

たゞわが所謂神の子の意義は、上に陳べたる如し。讀者乞ふ、わが神子の一語に躓くこと勿れ。

負けじ魂

人として大志大望なきはあらず、あるべき筈也、あらざるべからざる也。スピノーザは、大望心の定義を下して、權力に對する異常の欲望也と曰ひ、更に之れを說明して曰はく、「大望心は一切の感情が依りて以て培はれ且つ牢うせらるゝ欲望也、かるが故にこの情は極めて制しがたきものなり。その故、人は何等かの欲望に結縛せらるゝ限りは、同時に又必然に、この情に結縛せらるればなり。シセロ曰はずや、上士は殊に名聞に誘導せらる。哲學者だに名聞を難ずるの書を物して、尙ほ之れに彼等の名を署するにあらずや」と。說き得てよし。人誰れか大志大望なからん、人苟も世に出でて何等かの欲望を有する限りは、この欲望の滿足を求めて、それ〳〵の聲譽圈内に第一流の位置に立たんことを冀はざるは無かるべく、是くの如きは、古希臘人の見し以て誇るべき一美德と做せるもの也。如是大望心はやがて謂ふ所の負けじ魂なり。思ふに、個人と社會と、その雄大なる負けじ魂を振り起して始めて向上あり、發展あり。社會と人生、觀じ來れば、個人おのおの負けじ魂の調和也、平均也、壓し合ひなり。森の木枝の張りつ、壓しつ、おのがじしなる負けじ魂の、姿勇ましう蒼空高く打揃うて喘ぎ上るを見ずや。但だ眞個の負けじ魂は、人を對手の負けじ魂に非ずして、神を對手の負けじ魂ならざるべからず。人を對手の負けじ魂は、動もすれば克伐となり、競爭となり、猜忌となり、躁進となり、勝心慢氣となり、自是病となり、名聞餓鬼となる。神を對手の負けじ魂は、然らず、不斷に無限の向上ありて、而かも謙々の心しばらくも退かず、敗れて感謝の聲を絶たず、勝つていよ〳〵勵みいそしむの緣しげし。スピノーザ亦、唯だ理性に基づく名譽心、自尊心をのみ眞の德とは見做したり（彼れは眞理は人の名を帶ぶべきものにあらずと唱へて、其の大著「エーティカ」の出版を匿名にせんことを其の友に囑したりき）。人に勝たん

の負けじ魂は、磽々たる小丈夫の小望也、神に劣らじの負けじ魂は、浩々たる大丈夫の大望也、所謂直を以て養うて天地の間に塞がるもの也。かの森の萬木の、互ひに競ひて日指す所、蓊々として直ちに天日の耀く所にあるにあらずや。

不斷の神在

われわが裏に大いなるもの在しますと感ず。我が思ふ事、語る事、爲す事の一切を通じて隱約として動く者あり。われ之れを見ざる能はず、感ぜざる能はず、觸れざる能はず、嗚呼我等人の子は餘りに習性の我れに縛められたり、餘りに我れの果敢なさ、甲斐なさ、つまらなさに思ひ慣れたり。而して日夕役々たる常途の生活に埋もれ果てて、徒に神なきを喞ち、人生の杯の苦きを打嘯くなり。起てよ、起つて勇猛無限の心を鼓して、十重二十重に縛められたる「凡習を斷除し」、而して爾が清新なる直覺の眼を瞠開し來れよ。希有なるかな、この時、吾人の「我」は、最早曩の生命の光なき日常凡習の「我」にあらずして、久遠劫來の神祕の大潮音に濡れひたりたる一種堂々たる超現實の「我」となれるにあらずや。我はこれ光榮ある天國の鍵を握れる家督相續人にあらずや。（法華經の長者窮子の譬をよく思ふべし）。こゝに吾人は「我」ならぬ「我」、「自然の超自然」てふ尊嚴無上の自覺に撞著して「我れ父に居り、父我れに居る」靈交一味の消息に入りぬるなり。げにやこの境、語らば白露の珠とも消ぬべき妙にいみじきこゝろかな。あゝ深いかな基督の自覺。われは今にして基督が「父の外に子を知るものなく、子の外に父を知るものなし」といひ「我れ父に居り、父我れに居る」といへりし悠々たる不思議甚深の法音の一角に相參することを得たり。我れは裏に不斷の神在を感ず、而して之れを證するものは基督也。

「誰人の菰衣てゐます花の春」

狗子にも佛性ありとぞいふ。われ不思議なる法緣を得て、一たび神子の自覺に入りてよりは、何物を見ても假りそめならぬ本來の權威と光明と、躍々と我れを撲ち來るものあるを切に感ずるやうになりぬ。曾ては人間の竹頭木屑なんどのやうに思ひ下したりし乞兒の群を見ても「誰人の菰衣てゐます花の春」の、一種犯すべからざる本來の美しさと貴さとに、わが頭おのづから下りぬ。あはれ、かくてぞ旅は道づれ世は情、一切の有情と無情と、皆一つの貴き靈界の枝と連なり、葉と茂りて、倶に敬し、倶に愛し、倶に助け、倶に働く。誰れかいふ人生空なりと。

人と石

路傍の頑石、もし一朝人語を發して、妙辭を吐囑し、法音を流宣することあらば、吾人は愕然としてそこなる靈異の神にぬかづくべし。こゝに人の形したるものありて、語り、歌ひ、考へ、驚く、而して吾等はこれを平常當然の事象と見做して曾て驚異せず、嗟歎せず、況んやそこに靈異の神の現前して不斷の法輪を轉じつゝあるの一事に想ひ到るが如きことをや。むしろ大怪事と謂はざるべけんや。石の形したるもの語り且つ考ふれば、驚き異しみ、而して人の形したるもの語り且つ考ふれば、驚き異しまず。其の理由を問へば、唯だ石は默し人は語るてふ後天經驗の事象に見慣れ聽き慣れて敢て之れを不思議とせざる吾人習性の然らしむる所といふの外はあらず。甚だしいかな、習

性の人心を梗塞し壅閉することや。夫れ神の前には、人、石となり、石、人となる。神は能く石をして叫ばしめ、人をして默せしむ。心靈の事實は一如洋々として當處に充ち盈てり。我等如何なれば、人の形したるものの語り且つ考ふるの事象に執して、石の形したるものの語り且つ考ふるの合理に見到らざる、如何なれば又、石の形したるものの語り且つ考ふるの合理に驚異見神して、人の形したるものの語り且つ考ふる事象に驚異見神せざる。古人曰はずや、「君子は理を見て形に局せず」と。彼れ驚異すべくば此れ亦驚異すべく、此れ合理ならば彼れ亦合理也。かるが故に達者は能く石女の舞ふを見、能く木人の歌ふを聴く。

先後本末

ダギデは曰はく、「われむかし年若くして今老いたれど、義者のすてられ、或はその裔の糧乞ひありくを見しことなし」と。基督は曰はく、「爾曹何を食ひ何を飲み何を衣んとて思ひ煩ふこと勿れ、爾曹まづ神の國と其の義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるべし」と。孔子は曰はく、「學ぶや祿其の中にあり」と。法然上人は以爲へらく、「念佛は本にして衣食住は助業也」と。二宮尊德は曰はく、「若し能く一人の心田を開拓することを得ば、百萬町の荒地も亦憂ふるに足らず」と。古聖賢の言、炳として符節を合せたるが如し。常に怡然として色樂める或盲按摩の曾て予に語りけらく、「私は年壯き屈強な體をした漢が、人の門前に立ちて物貰ひするを見るごとに、一度もふびんと思つた事はありません、人間は正直に働きさへすれば、今日樣が決して棄てはなさりませぬ」と。一文不通の彼れ亦、この古今一貫の眞理を色讀して、毅然として曾て惑はず、疑はざるなり。

古人或は「衣食足りて禮節を知る」といひ、或は又「恆產ありて恆心あり」などともいへり。是れ衣食の充實が道德の先行條件なるを道破せる一面の眞理なり。この眞理を高唱する者は以爲へらく、先づ麵麭を與へよ、而して後道德を與へよ、生存の安固の擔保なき所、人焉んぞ仁義道德の器たるを得んや。人皆、曲肱水を飲んで名教の樂みを渝へざる孔子顏淵の徒にあらず、窮して濫するは古今の通情なり。かるが故に恆の產なくして恆の心なきを譏むるは謬れりと。吾人は心なくこの一面の眞理を排し去るに忍びず、物と靈と、食と道と、相依り相濟うて、いづれをか重しとし、いづれをか輕しとせん。されど吾人は何ほ一家の所信に從うて以爲へらく、謂ふ所恆產を得るその事が、既に道德的條件に須つ所あり、正直に自家の額に汗せずしては一片の食をだに得る能はざるが自然の大法にあらずや。窮して濫するはいかにも悲しむべき人心の脆弱なれど、人をしてこの窮境に立到らしむるもの、やがてその恆心なきの致す所と見るが多くの事實ならざる乎。人、至誠なくして、一片の瓦をも積むこと能はず、一穗の粟をも斂むること能はず。爾が全良心を爾が事業に運用せよ、衣食問題の解決おのづから其處に存せん。孔子は曰はく、「君子は道を謀りて食を謀らず」と。之れを以て單に道學者流不通の語となすこと勿れ、陳くして新しき眞理こゝに在り。

衣食の一念に煩はさるゝものは未だ悠々たる天地の大愛に生くるの幸福を味ひ得ざるものといふべき也。

融會力、妙法力

自力乎、他力乎、寧ろ之れを合して融會力と

いふべく、妙法力といふべし。石、塊然として横はる、之れを斥して純他力の發現といふべき乎、あらず、止まるを知つて止まるは、石みづからの本具なり、不靈の頑石尚ほ且つ神の威力を以てして、揻ふ能はざる一味自力のところを含めり。水は神と共に流れ、花は神と共に開く。一切の物、何れか自他融會の妙法力の發現ならざる。夫れ神は萬有を造りて、之れを縛せず、錮せず、之れをして無限におのがじしなる個性を展べ啓かしむ。「それ〴〵の朧ろのなりや梅柳」。一切に個性あり、個性のある所、自力のある所、而して自力のある所、やがて又他力のある所也。自由と法則と、自力と他力と、この二大樂音の相融會して、妙法のしらべ高く脈うつもの、やがて自然界の大景にあらずや。見よ、一水縱まゝにおのが姿をくねり流れて而かも大野の景色おのづから整ひ、一鳥高く自由の翼を搏つて、而かも美しき輪形の道、おのづから碧落の鏡に泛べり。自ら歌うて神の調べと合し、自ら行うて神の則を辿る。此くの如きは惟り藝術的神徠の場合に於ける事實なるのみならず、一切普通の事實なり。融會力といふべく、妙法力といふべし。

眞人と神

スピノーザは曾て「人に最も有用なるものは人なり」といへりしが、われは曰はく、人を救ふものは人也と。蓋し以爲へらく、人のうちの眞の人は神也、吾人が神を慕ふの心はやがて眞の人を慕ふの心也。眞人唯だ吾人を救ふ唯一の生命也、神也。眞人以下の神に跪けば迷信に墮ち、眞人以上の神を仰げば空蕩に入る。吾人至深の要求は、法身佛（眞如、絶對）を引き下げて報身佛に具體結象せしめ、應身佛（現身の釋迦、基督）を引き上げて報身佛と醇化神化せでは已まず。報身佛は即ち眞人也。眞人は即ち神也。

（明治三十九年三月）

信仰と理性

（宗教の本質は何ぞ）

歐洲の哲學及び宗教思想史上に於ける最も趣味ある問題の一つは信仰對理性の問題なるべし。久しいかな信仰對理性の論爭、離合幾たびか之れを反復して、尙ほ其の歸著を見ず、今や此の問題は更に新たなる意義を帶びて吾人に面接し來らんとするなり。

中世紀のスコラ哲學が此の問題に關して吾人に敎へし所のものは何ぞ。理性を信仰の僕とせんとして却つて二元の破綻を現じたるの一事にあらずや。

スコラ哲學者等は其の發途點に於いて一種の假定を有したるなり。以爲へらく、吾人は旣に宗敎的信仰といふ無價の寶珠を有せり、理性は唯だ之れを燭照して其の哲學的根據を明かならしむるに過ぎざるなりと。此くの如き假定に立つて論を行る、其の羅織百端して附會に流れ、詭辯に陷らんとせるは自然の數なりといふべし。かくしてスコラ哲學の冠華たりしトマス・アクィナスの大組織もスコートスの一擊に仆れたりき。スコートスは向きに褫はれたる理性の獨立權を取り復し、さて斷案を下して曰はく、宗敎は實際的にして哲學は理論的なり、二者は明かに其の界域を異にせりと。オッカムのウィルリヤムは、更に一步を進めて以爲へらく、信仰と理性とは啻だに其の範圍を異にせるのみならず、又相矛盾するものなり、前者は到底後者によりて論證し得らるべきものにあらざるなり、信仰を取つて理性の光明に照らさんとせば却つて信仰其のものの根據を傷るの虞れあり、如かず之れを理性以外の境に移して其の累ひを免れしめんにはと。此に至りては信仰と理性とは分明に二元的破綻を現じたるものといふべし。

かの第十八世紀時代に於ける英國の自然宗敎(ディーズム)の此の問題に關して吾人に敎へたる所のものは何ぞ。信仰を理性の根據に歸せしめんとして、竟に冷索なる機械觀を贏ち得たるの一事にあらずや。

ディーストの徒は當時新興し來れる自然科學上の影響を受け、理性を最高無上の權威となし、之れによりて以て宗敎の唯一の根據を說かんとせり。彼等は以爲へらく、吾人の理性の自然之光が認めて以て眞理となすものにあらずば、眞の宗敎となすに足らざるなり、而して此くの如きは唯だ原始の自然宗敎あるのみ、後世の宗敎は畢竟僧侶の揑造せしもの、隨うて種々の迷信を混ずるを免れずと。かくして彼等は宇宙を一個の大いなる合理的機械の如くに視て、神を世界以外、萬有以外の境に驅逐し了りぬ。

スコラ哲學者は信仰より發途して理性を之れに唱和せしめんとしたる結果、つひに二元の破綻を生じ、ディーストは理性を唯一權威として信仰を之れに從屬せしめんとしたる結果、つひに一個の偏理的機械觀をなすに了りぬ。一は信仰を主として理性を客とし、他はむしろ理性を主として信仰を客としたる觀あるの差ありといへども、理性と信仰との調和を計らんとして蹉躓するに至れるは要するに二者相同じ。信仰と理性と、是くの如く既に其の步趨を同じうするものにあらずとせば、如何なる新たなる根據を傭ひ來りてこの問題を解釋すべき、之れに答へて、スコラ哲學者の如くに、單に信仰は實際

的にして理性は理論的なり、信仰は天啓及び教權により吾人に與へられたるもの、理性とは本來其の境を異にせり、とのみ斷じ去るは、いまだ吾人の眞要求に答へ得たるものと言ふべからず。此くの如きは、麺包を求むるものに蛇を與ふるものにあらずや。理論と實際とは、さしも劃然分別せらるべきものなるか、天啓もしくは教權は、さしも全く理性の插嘴を容れざる超批評的のものなるか、要するに信仰と理性との各〻に相當なる位置を與へんとせば、吾人は倘ほ一段確乎たる根據を備ひ來らざるべからざる也。而して此の要求に應じて少くとも一光明を投じ得たるものはディースト以後の學者なり。

ディースト等の宗教を語るや、一個の理性、則ち彼等の所謂自然之光（ルーメン、ナチュラーレ）に照らしてのみ當頭に之れを律し去りしが故に、其の所謂宗教は、偏理的となり、機械的となりて、つひに吾人の宗教的意識の深處に觸るゝに至らずして已みたり。此の缺陷を看破して更に意味ある別方面に宗教の新根據を見出さんとせるもの、ヒュームあり、カントあり、更にシュライエルマヘルの如きあり、ヒュームは以爲へらく、宗教的意識の源頭は理性にあらずして、寧ろ恐怖、希望、驚異等の感情にありと。カントは宗教上の信仰を以て吾人の道德的意識の實踐的要求より出づるものとなし、而して此に宗教のために理性の侵害を受けざる獨立の一境を開拓せんとせり。以爲へらく、因果的機械法の流行は現象界以内にとゞまる、實體界は自由の境なり、道德宗教はこゝに其の獨立不壞の根據を託せりと。シュライエルマヘルも亦云へらく、宗教は人の絶對的依頼の感情に其の源を發すと。而して又近世の不可知論者（Agnosticism）が人智の對待性をいふや、單に其の所謂「不可知」を唱へんがためにあらずして、むしろ理性の攻撃を受けざる不動の境に宗教もしくは倫理の信仰を安置せんが爲めに、實體のことは吾人の對待知の得て知るべからざる所なりとやうに言はんとせるを其の本來の動機とはする也。之れを總ぶるに、右諸學者の說ける所必ずしも歸一ならずといへども、其の宗教の源頭もしくは根據を見る根本の思想に於いて相合するふしあるは何人も看取する所なるべし。其の要に謂はく、宗教、倫理の事は必ずしも理性に訴へて解せらるべきものとのみは言ふべからず、前者は後者と沒交渉なる獨立の境を有せり、宗教、倫理は思索にあらずして生命なり、乾枯なる知識より來らずして、感情の溫味、意志の活動より來る、意志及び感情としての吾人の生活は、理性の生活とはおのづから別面目を具ふと。見るべし、近世の學者等はスコラ學者等が天啓もしくは教權を宗教の源頭と見んとしたるに對して、寧ろ直ちに人心内部の要求に信仰の根據を求めんとしたるを。

按ふに、信仰と理性とを全く沒交渉とするの謬れるは論なしといへども、二者が其の根柢に於いて岐頭を有する、これはた否むべからざる也。理性を信仰の僕婢とせんとするスコラ學者と、信仰を理性の下に羈束せんとせるディーストと、共に一端の見に馳せたるの失あるは竟に否むべからず。信仰は以て理性を掩ひつくす能はず、理性は以て信仰を掩ひつくす能はず。二者は相合する境あり、相合せざる境あり。しかも相合せざるの故を以て直ちに信仰を不合理もしくは迷信と斷ずるは非也。宗教に於ける不合理もしくは迷信の分子は須く理性の光明に燭らして之れを除却すべし、除却し盡くして倘ほ理性と別なる或物の殘れりとせば、吾人はこゝにはじめて理性と信仰との分水嶺に達したるなり。此くの如くして宗教其者の本來の面目が始めて看取せられ得るにあらずや。

然らば理性と信仰との分水嶺は何處ぞ、何を以て宗教の本質とはなすべき。此の點に關しては上に擧げたるヒューム、カント其の他不可知論者派の所說は吾人に尠からざる光明を與ふ。彼等が宗教に對する見解の必ずしも一樣ならざるがなかに、唯だ一つ、宗教上の信仰を以て吾人人性の最も內的方面なる情意の源より發するものと見て、こゝに理性以外の獨立の一境を拓かんと試みたるの點は、信仰對理性の問題を解釋せんとする者の看過すべからざる點にあらざる乎。

月を一土塊と見るを假りに吾人の理觀なりとすれば、之れを嫦娥と見るは吾人の情觀なり。二觀おの〳〵獨立の境あり。理觀の境に立つて、月は一土塊に過ぎざるが故に之れを嫦娥と見るは誤れりと言ふことを得ば、之れと同一の權利を以て、情觀の境より、月は美しき嫦娥なり、之れを土塊と見るは誤れりと言ふことを得べし。同じく一個天上の月、或は之れを一土塊と見、或は之れを嫦娥と見る、共に是れ人心の實在に根ざせる要請にして、一を是なりとし他を非なりとする權利なき也。美意識と理意識と、假りに今之れを信仰と理性との關係に比擬して說かんか、理性は天地の實在を絶對もしは無限もしは全一などと觀ずべし。されど吾人が之れに對して又之れとは別なる一種無類の宗教的意識を覺し來るも事實として許さざるべからざるなり。此の場合に於ける宗教的意識の中に、理性の活動を含めるは否むべからずとするも、其の心核をなすものは、寧ろ一種價値之感にはあらざる乎、冷索なる理觀の對境たる絶對に一種無限の價値感を加へて此に所謂宗教的といふ特殊の意識を覺し來るにはあらざる乎。而してこれやがて宗教的意識の理性以外に占むべき正當なる獨立の一境にはあらざる乎。實在を理的に觀ずるも、はた宗教的に觀ずるも、共に人心の要求に根ざせる一種の觀法なり。如何なれば一を以て他を打たんとはする。或は宗教的感情には迷信を混ずること多きを以て之れを非すべしとせんか、吾人の理性の作用にも種々の過誤を含めるにあらずや。迷信の纏綿多きは、以て迷信ならぬ宗教的感情そのものを非するの理由とはならざるなり。

理性と信仰とを全く沒交渉とするの誤れるは既に之れを道へり。吾人は又近世の學者等が宗教的意識に於ける吾人の理情の二要求を餘りに一端に分割し過ぎたるの觀なきかをさへ思ふなり。さあれ、理想と信仰と、其の究竟相に於いて相岐るゝ節あるは到底否むべからざるに似たり。而して吾人は此の岐頭に立つて、徐ろに宗教的信仰の不動の根據を開拓せんとするなり。但だし、信仰と理性との相交涉せる範圍內に於ける二者の關係および宗教的意識に於ける理性の位地、職分の委しくは如何なるものなる乎等の問題につきては、倘ほ筆を洗うて論ずるの要あり。是等すべて他日を期すべし。

（本論の不備なる點につきては次ぎの「迷信とは何ぞや」の一篇に於いてほゞ補論せり。乞參照。）

（明治三十一年十一月）

大西祝先生を弔す

去ぬる二日午後五時、友人中桐確太郎君より一葉の急報あり、曰はく岡山なる大西先生危篤の報に接し、この夜の列車にて、急行岡山に向はんとすと。嗚呼、萬事は已みぬるか。過ぎにし日、某雜誌紙上にて先生危篤云々の文字ありしを見、友と共にその筆の率易を咎めんとしたりしが、今や實事となつて耳を打ち來らんとは。この痛心無限のうち、尙ほ強ひて自ら寛うして一縷の望を繋けたりしに、明くれば天長の佳辰、世と與に聖壽の無疆を祝ぎつゝ傍らなる一葉の報知新聞を披けば、大西博士逝去の六字、直ちに紙面の一隅より眼を射來りぬ。幾たびか瞳を瞠して視き。されど眼花の迷にはあらざりき。しばし忘れし悲痛の情は、再び迫りて言ふ所を知らざらんとす。されど予は尙ほ先生の物故を信ずる能はず、他の二三の新聞を捜るも、其の記事の見當らねば、先生尙ほ在ませり。噫は耳底に繰返されて、殆んど無間地獄の底ながら纔かなる一條の現し世の光の通へるが如きを感じたりき。

夜は再び明けたり、先生の兄君よりの訃報まづ來り、つゞいて島村抱月君が先生を弔ふ痛切の辭、讀賣新聞に出でたり。嗚呼先生は眞に眞に逝きませる乎、予は涙を呑みて三たび四たび抱月君の至情の文字を繰返せり。

先生危篤の報に接してよりこゝに三五日、心徒らに焦躁懊惱して、而かも顧みれば、身は褥に在りて事毎に意の如くならず、痛恨の涙を灑ぎしこと幾たびなりしぞ。

何故に徒らに泣くか、愚癡か、私情か、前途有爲の學者を失ひしが爲めか、識あり德ある溫容の君子人を失ひしが爲めか、我が寂寞たる學界の爲めにか、はた世界の文壇の爲めにか、すべて自ら裁するに惑ふ。唯だ〳〵先生生前の姿を描けば涙あるのみ。

人生は果して無意義乎、解くよしもなき禍德の矛盾は、尙ほいつまでか人を苦しめんとはする。先生の死は大いなる矛盾なり。大悟の眼より觀れば、この矛盾は意識の深處に最高の總合を得て一芥蔕をとゞめざるものあるべし。先生或はこゝに安んじて大眠したまへる乎。さはれ、予は尙ほ先生を懷うて限りなき感傷の涙を禁ずる能はざる也。謹んで記す。十一月五日。

（明治三十三年十一月）

人を動かす春色多きを用ひず

（明治三十七年十二月）

鐘の音霞む花の雲に、ひねもす人の山分けまどひて、さて歸りて、わが家の一本櫻に春のまことのあはれを知るならひぞかし。

ことし、秋は初めの垣根の蕣花、朝な〳〵の露にすゞしきころ、庭の片隅に打すてられたる古鉢の、去年の生命の一粒を辛くも宿したるが、いつの間に萌え出でけむ、一尺ばかりなる蔓莖の、やう〳〵力なげに青空にあこがれそめて、青黄色したる薄葉二つ三つ著きたり、もとより心にもとゞめでありけるが、ある朝ふと起き出で見れば、さばかりわびしかりし蔓莖に、白き大輪の花たゞ一つ、あはれ美しうも、け高うも咲きつる哉。生命の通ひぢいとくるしきこの蔓莖にして、天つ日影の惠み、いと薄きこの病葉にして、思ひきや、白一點、精彩奕々、露に輝き、光を含み、靈しき天地のこゝろを優に咲きいでなむとは。折からを垣根に咲き盛れる花のいろ〳〵皆けおされし心地して、われはこの花一つに心動きぬ。

これもことし、秋の暮れつかた、掌ばかりの淺き鉢に、星月夜とかやいふ野菊數株まばらに植ゑ込みたるを、さるかたよりおくりこしぬ。黃なる小輪の花七つ八つ、頭そろへて、何ごとをか打さゝやくさまの、いとしをらし。鉢に盛れる土にはおのづからなる野良なんどのやうに蒼苔ところ〴〵に生へるが、佇ほ視れば、そこにもさゝやかなる草花の一むら、自然の一廓を造りなしたり。われはこの一撮土に生ふるはかなき草花に打むかふ折々、秋の花野の風情おのづから千里の外に動くを覺えたり。さて又夜はそのほのかなるかをりに屢々淸冷の夢を織りなしぬ。

萬馬の蹄の下に泥海なんどのやうに蹈みあらされし曠野の中にして、ある日ひそかに大いなる自然の力を綠深う萌え出でて、色香もたへに咲きほこりたる一本小草の花を見いでたる、誰れかはその大膽にして歸依の心一すぢに高き姿を慕はざる。あるは山路の闇に行き暮れて、草枕わびしき旅人の、何やらゆかしき菫草の一本に、たま〳〵心躍りては熱き淚も下りぬべし。ソロモンの榮華を競ひし花のふるごとは、さらにもいはず、この世を夢と悟りすてたる達觀の一俳人をして、何の木の花とも知らず匂ひかなと、優しき心の一ふしを奏でいでしめたる花のこゝろの今更問はまほしく、さては西の國なる高調の一詩人をして、路のべのいともあやしき草花だに淚に餘る深き思ひを湛ふると、詠み出でしめたる言の葉ぞ、想ひ出でらるゝ。

山高きが故に貴からず、花驕れるが故に妙ならず、籬落に著き、流水に漂ふ名もなき小草の花にだに、われらが拾ふべき力と榮と詩と惠とは、いとさはにはあるをや。

（『[illegible]川文集』より）

乞食(こじき)

木下尚江

乞食

序

自ら存する所の生が眞の生に非るを知る、自ら存する所の死が眞の死に非るを知る、之を知りて且つ之に迷ふ、明の知らざるが爲めと雖も、實に志の弱きに依る也、記して自ら鞭つ、

千九百八年六月梅雨に入るの日

三河島の村舍にて

木下尚江

第一

年中で日の一番短いと云ふ冬至の朝、僕は日暮里の停車場から前橋行の汽車に乘り込んだ、昨日の開院式で衆議院は來月の二十日まで休會だ、代議士連も大抵旅行する、僕の受持方面はこゝ當分閑散だ、僕はドウしても此の間に我が運命を決定して仕舞はねばならぬと思つた、其れには此の東京に居ては駄目だ、何處へか一つ高飛びせねばならぬ、と言つた所で羽が無い、足が無い、天の時と同じく我が懷中日に愈々寒さを增すばかり、斯かる時狩野孝一君の手紙が來た、狩野にも久しく逢はぬ、彼も餘程奇妙な生活に入つて居るらしい、逢つて見たい、話も聽いて見たい、我が運命の發展に何か機會を與へて呉れでもするやうな氣がする、丁度新聞社が年末の賞與金を呉れた、そこで下宿料を拂つた、書肆の借りを拂つた、洋服屋へ夏服の殘金を拂つた、折角の年末賞與が零になつて仕舞つた、こんなに皆な拂ふにも及ばないのであつたが、是非拂つて仕舞はねば氣懸りでならないのであつた、ほんの十五日か二十日の旅行、只一日で優に行ける旅行、旅行などと大袈裟な文字を使ふ筈でない旅行だが、ドウしたものか、僕には再び歸らぬ旅へでも出るやうな氣がして、借金など一文でも殘して置いては、死んだ後の恥晒しだと云ふやうな聲が、切りと腹の底から聽える、で、借金は拂つた、死んでも迷惑を懸ける心配は無い、所で肝腎の旅費が亡くなつて仕舞つた、

如何したものかと机の前に腕を組んで考へたが、忽ち手を拍つて、「然うだ、賣り拂つて仕舞へ」

夜具も着物も書物も本函も、最早何も要らない、殘して置けば下宿屋が迷惑だ、然うだ皆な綺麗に賣り拂つて仕舞へ、斯う決心して出掛けようとすると、下宿の細君が急に呼び留めて何處へ行くかと問ふ、別に祕す程のことでも無いから、斯れ〳〵だと話した、長火鉢の中に細君は、僕の顏を穴の明く程見つめて居たが、

「石田さん、貴郞、如何かなすつたんぢやありませんか」と、顏さし寄せて力の籠つた小聲で問ふ、

「否や、別に如何もしない」と僕は平氣で答へたが、僕の平氣なだけ細君は尚ほ心配らしい、

「だつて、そんな心細いこと仰しやるぢやありませんか」

「別段心細いことを言やしない、實際人間は何時死ぬか、知れないからね」

「そりや、もう、然うですけれど」と細君は考へて居たが「石田さん、お願ですから、今度の旅行は止して下さいませんか」と思入つて言ふ、

「何故」と僕は問うた、

『貴郎は戰爭にさへも平氣に行らしつて隨分劍呑な場所へ行らしつたと云ふお話ですけれど、其れでも御故障なくお歸りなすつた方でせう、つまり貴郎の氣が勝つて居らしつたからです、其れを何です、高が上州あたりまで一寸行らつしやるのに、死ぬかも知れないなんて、そんな時には、魔と云ふ奴が付け込んで、飛んでも無い變事が起るものですから、何卒石田さん止して下さいましよ、何年と云ふことなく斯うしてお心易くして見ますと、私の性質として、然うですかと知らぬ顏して居られませんもの』

『否や、お細君、そんなに心配するにや及ばない』

『否え、私やほんとに心配ですよ』

『死ぬかも知れないと言つたのは、理論上の話だ、が、道具を賣るのは、旅費を調達の爲めだ、別問題だよ』

『旅費だけのことですなら、何も蒲團や着物までお賣りなさるにや及ばないでせう、一體、何程御入用で居らつしやいますの』

『然う』と言つて見たが、僕にも判然とわからない『まあ、五圓もあつたら可からう』

アハヽヽと細君は笑ふ『五圓や六圓なら、私どもにだつて御用立て出來ますよ、お賣りになりますなら、何時でも出來ます、此の年の暮になぞ、お棄てなさるも同じものぢやありませんか』

僕は返に事窮して仕舞つた、空しくお茶の御馳走になつて、悄然と自分の部屋に引つ込んで、又机の前に坐つて見た、

僕の下宿と云ふのは本當の下宿屋では無い、藤三郎と云ふ植木屋の座敷を借りて賄をして貰つて居るのだ、

夕方に藤三郎が歸つて來た、僕の部屋へ來た、多分細君が話したのだらう、藤三郎切りに僕の顏を見ては遠廻しに意見がましいことを言ふ、何でも僕が自殺でも謀つて居るやうに思ひ取つて居るらしい、

『そんなに心配せんで呉れ給へ、僕は未だ死なないよ、僕にや未だ死ぬなんて勇氣が無いよ』と僕は言つた『それよりも、先刻お細君に願つて置いたが、少し旅費を貸して呉れ給へ』

細君が茶を入れて持つて來た、三人茶を啜つて雜談に暫し浮世の年の暮を忘れた、

其の翌日卽ち冬至の朝、僕は宿から借りた聊かの金を懷中して、日暮里の停車場から前橋行の汽車に乘り込んだのである、

矢張り何となく、是れが東京の見納めのやうな氣がする、厭で〳〵堪らなかつた東京を今一日見たいやうな氣がする、何か友人に一言言ひ遺したいやうな氣がする、

僕はヂッと眼を閉ぢて何事も思ふまいと抑へて居た、

汽笛が高く寒空に響き渡つて　汽車が徐ろに運轉し始めた、

すると、不思議にも此の胸が忽ちスウと輕くなつて、不安の重い雲が一時に消え失せたやうな感じがした、『最早自分の力で如何することも出來ない』と云ふことが明かに目に見える、汽車の運命が卽ち我身の運命だ、汽車が轉覆するかも知れない、衝突するかも知れない、仕方が無い、我身の力で其れを如何することも出來ない、最早汽車に任せた體だ、危い運命だ、併し誠に安氣な身の上だ、

『寧ろ汽車が衝突すれば可い、猛烈に衝突すれば可い、車も人も粉々になつて死んで仕舞へば可い』と僕は腹の裡に考へた、腰を掛けた儘、眼を閉ぢたまゝ、微動だもせずに、無造作に安氣に死ぬことが出來るのだ、自殺せよと言はれても僕には駄目だ、自殺しようと考へても僕には駄目だ、此の駄目だと云ふことが、僕には一倍苦痛であるが、今は既に全く汽車に任せた身

だ、自力で如何ともすることの出來ない身だ、汽車の衝突が目に見えて居ようとも、僕の力は其れを如何することも出來やしない、腰を掛けたまゝ目を閉ぢたまゝ、無念無想、其の衝突の結果を受けるより外に道が無い、斯う考へると、胸が實に淸々と朗かになる、何となく腹の底から打ち笑まれる、身は宛然溫かな光明の春の世界に、搖籃に搖られて居るやうだ、

不圖目を開いて見た、汽車は今何處を走つて居るのか知らない、何方の方角に走つて居るのか知らない、窓の外は見る限り荒れたる寒枯の寂しき原野だ、遠い山には雪がある、原の路を風に吹かれて馬を引いて行く人の後影が、如何にも哀れに寒さうだ、其の自分の力で世を渡つて行く辛苦の色がアリ〳〵と見える、

汽車はやがて何處かの小さい停車場に入つた、二三人の田舍人が上車した、車內の舊客にも、今來た新客にも、皆な寒い影が眼の邊、脣の邊に懸つて居る、他が見たら僕の顏にも同じものが漂うて居るのだらう、

僕は又腕を組んでヂッと眼を閉ぢて、彼の光明の世界に再び入らうと苦心する、所が墓場のやうな野の色や、亡者のやうな馬子の影が眼頭にチラついて仕樣がない、汽車の響や、車內の話聲が耳について仕樣がない、あゝ何の刑罰で目など開いたかと、むしやくしやと腹が立つ、腹を立てては駄目だと觀念して、堅く石のやうに身を縮めて、一生懸命に深く、彼の幻の迹を尋ねた、何時とは無く人の話聲が遠く〳〵消え行きて、先刻の光明の世が見えて來た、我の外なる大なる力に任せた身だ、其の運命の弄るに任せた身だ、如何とも勝手になつてやらう、如何とも勝手にするが可い、如何とも勝手になつてやらう、何處までで も行つてやらう、そして願くは何時までも永遠に此の何とも正體の知れない手の上に乘つて居たいと思つた、若し此の手から下されれば、又本の自分の力で迷はねばならぬ厭な境遇に墮ちて仕舞ふのだ、願くは斯う眼を瞑つたまま、永遠に無限に腰掛けて乘つて居たい、そして此の車が駈け廻り〳〵して遂に世の果にまで乘り付けた時、此の車と我と共に底なき奈落の谷に落ちて行かう、まるで霧か霞の上でも走つて居るやうだ、最後の最後まで再び此の目を開くまいと思つた、

* * * * *

何かガタ〳〵と騷々しい、人の罵り合ふ聲がする、其れが遠い下界から響いて來る、寒い風がスウと襟元を襲ふ、忽ち耳元を「前橋々々」と頓狂な聲で呼んで行く、ハッと驚いて目を開くと、汽車は既に前橋停車場に橫つて居る、僕は無上に厭な氣がするも、仕方が無い、下りた、風が寒い、豫て聞いた上州の空ッ風、足がフラ〳〵して地びたと下駄との間が千里も離れて居るやうだ、押され〳〵して出るともなしに改札口を出た、人力車夫がガヤ〳〵云うて勸める、が、僕は返事もせずして停車場の前へ出た、停車場の直ぐ前に玩弄具のやうな馬車が立つて居る、是れが狩野の手紙にあつた鐵道馬車と云ふのだらう、是れに乘れば又澁川とか云ふ所までは、他力まかせに走ることが出來るのだ、と僕は直に乘り込んだ、續いて種々な人が乘り込む、何れも今汽車を下りた人だらう、大きな旅鞄を提げたり、重さうな風呂敷包を抱へたりして居る、狹い車にギシ〳〵と詰め込まれて微動も出來ない、立つてブラリと革紐にぶら下つて居る婦人も見える、婦人を立たせて男子が腰掛けて居ては不都合かとも考へたが、併し僕は腰を掛けて居らねばならぬ體だ、どんなに窮屈でも可いが、腰だけは是非掛けさして置いて貰はねばならぬ體だ、だから僕は車掌が切つて呉れ

た切符を受け取ると共に、御免蒙つて目を閉ぢて仕舞つた、

間も無く馬車は動き出した、ガタ〳〵と切りに搖れる、隣りの人の腰と腰と打ち合つたり、肩と肩と打ち合つたりして、なか〳〵空想に耽る餘裕なぞがない、空氣が左右から壓へつけるやうに感じて、人の聲が車の外に幽しい、多分前橋の町の眞中でも走つて居るのだらう、

程なく馬車が停つて、皆な下りて呉れろと言ふのである、此處は馬車會社の本店で、此處で乘り替へて貰ふのだと云ふ、仕方が無いから又下りる、

此處はもう市の端らしい、店屋の樣子、人の風俗なぞ、早や何となく田舍らしい色合が見える、道の眞中を軌道が通つて居て、貨物の馬車が三四臺も軌道の上に並んで居る、彼方から來た二臺の車も此處に停つて、客がゾロ〳〵と下りる、直ぐ歩いて去るもあり、腕車を雇うて飛ばすもある中に、汽車場への客であらう男女四五人、今僕等の乘つて來た車へ乘り替へた、馬も取り替へた、御者は方針を一變して、彼の貨物の馬車と一列を作つて、再び今來た方へ飛び去つた、が、僕等の澁川行の發車には未だ殆ど三十分も間がある、待合室の硝子戸の中には色々な顏が退屈さうに腰掛けて居る、僕も默つて其の群に加はつた、寒い室の眞中に大きな爐が切つてある、爐は大きいが火が無い、火の無い爐ほど寒いものは無い、僕は戸を明けて會社の裏へ出た、

煤けた小屋の柱に「車掌控室」と言ふ札が打ち付けられて、破れ障子の裡には、粗い黒羅紗の外套の車掌等が火にあたつて、何かガヤ〳〵罵り合つて居る、

其の横を行くと廐へ出た、蓬のやうに亂れた髮の馬丁が、表の方から疲れた馬を引つ張つて來た、馬は廣い入口を入つて、奧の方へ連れて行かれた、だ廣い廐の兩側に柵を結うて、其の暗い中に幾十頭の痩馬がボリッ〳〵と音立てて藁を食んで居る、臭氣で鼻も曲りさうだ、が、此の入口の側が馬丁の寢起きの室だ、「馬丁控室」と大きな字で記してある、

斯う云ふ所を覗いて見ると、僕等の毎日不平を言うて暮らして居るのが、切りに罰當りのことのやうに思はれて堪らなくなると同時に、又僕等の生活と云ふものが、如何にも意味の無い、譯のわからない、眞にクダらないものだと云ふことを、ツク〴〵と感じる、今僕はお客樣だ、此の中の何の馬かが僕を乘せて引つ張つて行つて呉れるのだ、其の馬の世話を此の馬丁先生が遣つて居て呉れるのだ、が、此の馬は何も此の寒い風の中を僕等のやうな無用な長物を引つ張つて走る必要は無いのだ、此の馬丁君も斯樣な鼻持ちのならぬ暗いじめ〳〵した所に寢起きして、馬の世話なぞ爲る必要は無いのだ、面白くも可笑しくも何とも無いのだ、何の必要も無いことを、面白くも可笑しくも無く、毎日々々只馬鹿な面だと思ひながら遣つて居るのだ、馬の額にも、馬丁の顏にも「死」の燒印が深く打ち込まれて居るのが見える、死は必然だ、能く會得されて居る、クダらないのは、お互に生れて來たことだ、

こんなことを又考へながら、僕は會社の横から斜に街道へ出た、軌道の上には車臺が二つ並んで居る、僕等を乘せて行く用意だらう、

僕は天を見廻した、右と左に丁度同じ高さの、同じやうな恰好の山が向き合つて居る、其の山の間に遠く眞白な雪の連山が見える、僕はヂッと瞬きもせずに見つめて居たが、不圖一つの考が涌いた、未だ此の汚れた人の世にならない昔、此處が天堂の入口であつたのであらうと云ふ想像が、不意と涌いて來た、此の左右の山の恰好を考へると、是れはドウしても大きな門

柱の土臺石だ、此を基礎にして、太い高い二本の天柱が雲の上に建てられて居たのだ、そして彼の雪の連山邊に天堂の大建造物が在つたのだ、天堂は壞れて仕舞つた、天柱は折れて仕舞つた、只門の基礎のみ罪の世の今に殘つて空しく懷古の悲哀を催させるのだ、

考へながら眺めて居ると、十四五の小娘が、赤ン坊を古褞袍に背負うて、赤い絲で何か編みながら來た、

『何と云ふ山だね』と僕は指して尋ねて見た、

『此方が赤城、彼方が榛名』と小娘は子守歌の口を止めて敎へて吳れた、

『右が赤城、左が榛名』と僕は口の裡で繰返した、客が何時か車に乘り始めた、發車の時が來たのであらう、

前の車は既に一杯だ、僕は後の車へ乘つた、僕は左側の入口へ座を占めた、

馬も付いた、御車臺には御者が手綱を取つて車掌の合圖を待つて居る、車掌も何か大聲に笑ひながら、上つた、僕は彼の天門の間へ乘り込んで行くのかと思ふと妙に何となく胸が踴るのである、蒼い〳〵と輕蔑される僕の面にも、必ず多少血の氣が潮したであらうと思ふ、同車の客のことなどは忘れて、只玻璃窓から交々左右の山に心を配つて居た、

車掌が悠然として發車の鈴を鳴らした、御者の口笛の音がして、靜に車が動き出した、僕は目を張つて頭後の窓から赤城の峯を仰いで居る、

すると「待つて吳れやあい〳〵」と、アワたゞしい聲がして、車掌が鈴を鳴らして車を停めた、

振返つて見ると、婦人を乘せた一輛の腕車が飛び付ける、

第二

扉を開けて女が入つて來た、鼠色のコートに、小豆縮緬の頭巾を眉深に被つて居る、僕と向ひ合ひに五十ばかりの田舍爺が、淺黃木綿の大きな風呂敷包を腰掛に置いて、スパリ〳〵と煙草を吹かして居たが、女はチョイト小腰を屈めて席の融通を求めた、爺は澁い顏して包を股の間へ下した、女は僕の眞向ひに腰を掛けた、

顏は見えないが、何せよ、色の白い、鼻筋の通つて好い恰好だ、目は半ば頭巾に隱れて居るが、瞬く每に濃い長い睫毛の先が動く、年は最早餘り若くもないらしいが、容子が頗る婀娜だ、僕のやうなものの目にも素人で無いだけは直ぐ鑑定が付いた、女は手巾で輕く鼻を押へた、隣りの爺の惡強い煙草と、此の女の衣の香とが、こんがらかつて車内に擴がつた、

女はどうやら切りに僕の顏を見つめて居る鹽梅だ、どうも熟と僕の面を見つめて居る鹽梅だ、僕も聊か競爭心を起して、暫しは同じく睨み返して居て見たが、僕が睨めば睨むほど、女の方も殆ど瞬きもせずに見つめるらしいので、到頭僕の方が顏を背向けて、元のやうに赤城の峯を眺めることにした、

馬車は町を出はづれて、ドン〳〵走る、道の兩側は皆な桑畑だ、

目が疲れて來たので、僕は瞼を合せて又空想の世界を辿り始めた、田舍人の大聲で話すのが、ガタ〳〵騷がしい車の響の中から聽える、稅が增して困るだの、物が高くなつて困るだの、所詮百姓は行き立たないだの、小作の者などは夜逃げでもする外ないだのと、何れも戰爭後の惱み、年の暮の苦みの、心細いことばかり、其れが遠い夢か何ぞのやうに聽える、半ばウツラウツラと好い氣持に聽いて眠つて居たが、「國は强くなつたか知んねえが、俺達はやり切れねえ」と、怒を含んだ絕望の聲が、直ぐ耳元で鋭く響いたので、丁度戰場で初めて大砲の音を

聴いた時のやうに、喫驚して目を醒ました、聲は僕の直ぐ隣りの四十恰好の、矢張り百姓體の男の口から出たのらしい、

目を上げて見ると、眞向ひの女は頭巾を取つて、白い面を現はして居る、其の黒目勝ちな派手な眼をして矢張り僕の面を見つめて居る、

其の面其の眼を見た瞬間、僕は「誰だつたらう」と疑問に打たれた、

「あゝ、誰だつたらう」と焦るやうに思つたが、其の名が何分にも直ぐ浮んで來ない、

すると、女は嫣然と笑くぼを寄せながら「誠に失禮で御座いますが、貴郎樣は若しや、あの、石川さんでは――」と小首を傾けた、

「は、然うです」と言ふ時までは、未だ思ひ出せなかつたが、左の目尻の小さなホクロに忽ち舊き記憶が蘇生つた「貴女、濱さんですか」

「は」と女は再び嫣然と金歯を見せながら「どうも久濶――」

言ひつゝも目をば僕の面から離さない、其の目の邊に、ポッと紅く血の氣が潮した、此の美しき頬の色を見た時、僕は初めて此の女が彼の濱さんに相違ないことを信じ得た、

あゝ、十年の歳月、變れば變るものと、僕は實に胸轟かして彼女を見た、

僕がまだ十六七、錦町の裏長屋の二階、此の濱さんの家の屋根裏に、小田垣と一所に借間して、英語學校へ通つて居た時代がパノラマのやうに浮いて見える、彼女はたしか僕よりも二つ下であつた、最早學校も中途で止して仕舞つて、三味線と踊とのお稽古にのみ逐ひやられて居た、所で濱さんは三味や踊よりも讀書の方が好きであつた、お稽古から歸つて來ると、唄の本の包を抛り出して置いては直ぐと僕の屋根裏へ上つて來る、「石田さん」と階子の口から可愛らしい顔を出す、桃割とか何とか云ふ髪に結うて居たが、頭髪なぞにも餘り身を入れないので、髷が何時も壊れて、其の白い額や頬へサラ／＼と亂れ下つて居た、此れが又母親の不斷小言の種であつた、僕が振返ると、『可くつて？』と小首を傾ける、濱さんに來られるのは僕に取つて常に勉強の邪魔であつた、が、又何とも言へぬ樂しさであつた、其れで邪魔だとは思ひながらも、其の邪魔に來て呉れるのを内々は待つて居た、僕が首肯くと濱さんは胡蝶のやうに飛び上つて來て、机の横に坐る、其れは疊の六ひらばかりの狹い部屋で、其處に僕は小田垣と机を並べて居た、小田垣は僕の伯父の妻の親類先きで、其頃醫學校へ通つて居た、年は僕よりも六つか七つも上で、つまり僕は此の小田垣の監督の下に伯父夫婦から預けられて居たのだ、學校へ行くのか何處へ行くのか知らないが、小田垣は外出ばかりして居る、部屋には大抵僕が一人で居た、

濱さんは僕の机の横へ坐つて、本箱の上の讀本を取り出す、昨日の所を復習ふ、それが濟むと、僕が其の先きを教へて遣る、英語の教授が濟んでもナカ／＼濱さんは下りて行かない、小田垣の硯箱取り出して無駄書きなどして居る、書物も能く覺える、字を書いてもウマい、壁に掛けてある羽織だの、其下に散つて居る足袋だのを寫生する、形が出來て、線の工合など何處となく趣味がある、僕は常に實に惜しいものだと思つた、是れに學問させれば必ず上達するだらうと腹立たしく思つた、唄だの踊だのを稽古させて如何する積りだらうと腹立たしく思つた、

「お浚ひをしないと、又お母さんに叱られます ぜ」と僕が言ふと、「叱られたつて構はないの」と平氣な顔して何か書いて居る、やがて階下で「濱や／＼」と母の鋭い聲がする、すると濱さんは舌を出し首を縮めて、嫣然として僕を見る、左の眼尻の小さなホクロが、黒目勝ちの眼に一きは派手に光を添へて、言ふに言はれぬ可愛い

美しさである、二聲三聲呼んでも返事がないので、母親は何かブツ〳〵口小言を洩らしながら、階子の下から「石田さん、濱は居ませんか」と刺すやうに言ふ、

『私、こゝでお手習してゝよ』と濱さんはワザと大きな聲で答へて不承々々下りて行く、母親が何か言ふ、濱さんが何か口答へする、其れからペン〳〵と三味線の調子を合せて、唄の復習を始めるのだ、長唄とか言ふのだと云ふことであつた、僕には少しも解らなかつた、が、只如何にも好い聲だと思つた、美しい、引きしまつた、其の顔に應つた如何にも好い聲だと思つた、小田垣は常に其の技術を賞めちぎつて居た、『濱さんは天才だ、惰けないやうに、世話燒いて勉強させなさい』なぞと、盛に母親に言うて居た、是れが爲めに小田垣は母親から非常に信用せられて居た、小田垣は兎角部屋代や食料を不拂であつた、折々僕の分まで使ひ込んで仕舞つて拂つて吳れなかつたが、此の母親の信用で別に嚴しく催促もされなかつた、此の家は畢竟母親の天下であつた、父親と云ふのは額の禿げ込んだ、無口な、一見如何にも人の好ささうな男であつた、濱さんの兄があると言ふことだつたが、其れは家には居なかつた、惣領の姉娘と云ふのが、其頃最早二十六七でもあつたらうか、亭主の男と二人して厄介になつて居た、二人ながら病身で、姉と云ふのは蒼い顔をして、常に帶の間へ手を挾んで、眉を顰めて俯いて居た、笑つた顏なぞは遂に見たことが無かつた、亭主と云ふのも生氣と云ふものの無い顏をして、朝出ては晩に戻る、職業が見當らないので、一日探して歩くのらしかつた、此の病人夫婦の爲めに家内に毎度波風が荒れた、母親は聲を荒らげて『お前さんが甘いから、こんなことになる』と父親に食つてかゝる、姉娘は泣く、私が死んで仕舞へば可いのだと言うて泣く、斯う云ふ時には必ず小田垣が呼ばれる、小田垣が下りて行く、入り代つて濱さんが上つて來る、濱さんは何處を風が吹くかと云ふやうな顏して、僕の洋燈の蔭で、編物をし始める、小田垣は如何な技術を持つて居たのか、忽ちにして風波が收まる、喧嘩が濟む、小田垣が戻つて來る、すると母親が續いて禮に上つて來る、折々は燒芋などお茶に添へて持つて來る、其時は僕も餘澤に預るのだ、母親は無職の婿に對する不滿の餘焰を洩らす、小田垣は此の母親の主張に對して『否』と言うたことが無かつた、如何なる我儘勝手な言分に對しても『然うですとも〳〵』と相槌を打つた、小田垣は自分が修業中の醫學の話などして、『お磯さんの病氣もつまり御亭どんの爲めですよ』と說明した、『娘を病身にせられた上、野郎まで食はせて置くなんて馬鹿な話が小田垣さん、ありますかね』と、母親は言ふ、長い間の話の斷片を繼ぎ合せて考へて見ると、濱さんの姉のお磯さんの亭主と云ふのも、元は相當に暮らして居たものらしい、其の頃には此の家でも相當に恩澤に預つたものらしい、父親は元世話になつたのだから、困る時には世話をし返すのは當り前だと言ひ、母親は金のあるものが無いものを世話するのは當り前だ、其の約束なればこそ彼樣な男にも言ふなりに娘を吳れてやつたのだ、此方が世話する約束も無ければ、世話する義理も無いと云ふ、

『だが、畢竟お神さんが惡いのだから仕方が無いね』と小田垣が言ふ、

『なぜです』と母親はムキになる、

『娘を皆な綺麗に生みつけたのは誰だね』と言つて小田垣は笑ふ、

ホヽヽと母親は只笑つて『だつて、小田垣さん、あんな意氣地なしに生みつけた覺えはありませんよ』と言ふ、

『男親にだつて似た所が無けにや氣の毒だか

られね』と小田垣は眞面目なもの、

母親の機嫌がスッカリ直つて『濱や、お邪魔しちや可けないよ、石田さん、叱つて下さい』と、僕にまで柔しく言うて下りて行く、

『濱さんは如何なお婿さんを取るね』と小田垣が言ふ、

『私、お婿さんなぞ取らなくてよ』と濱さんは、編物から目を放さない、

『何故』

『お婿さんなんて、私、嫌ひだわ、ねえ、石田さん』と、明日の下調べして居る僕の鼻先きへ、顏を差し寄せる、其の亂れた髪が僕の五分刈の額を掠めて、書物の上へハラ〳〵と落ちる、

『良いのを世話しようと思つたが、厭なら止さう』と小田垣は尚ほも揶揄ふ、

『小田垣さんの、お世話になんぞ、ならなくつてよ』と濱さんも負けずに爭ふ、

僕は火のやうな熱い顏を、兩手に支へて、書物の上を只睨んで居た、

あゝ、皆な十餘年の昔のことだ、

僕は眞向ひの女の面を孔の明く程眺めた、

『どうも石田さんだと思ひましたけれど、あの頃とはスッカリ御樣子が變つて居らつしやいますので』と濱さんは微笑む、

僕は何んと挨拶して可いのか解らない、が、まるで默つて居るのも變である、

『今は何處です』と極めて無意味に僕は言つた、

濱さんが何か言はうとした時、馬車が停つた、僕の隣りの男が箱の重ねた包を重げに提げて下りて仕舞つた、

鈴が鳴つて馬車が再び動き出さうとする時、濱さんは席を立つて、今明いた僕の隣りへ坐り替へた、が、腰を掛けるか掛けないに、ガタリと車が動いたので、ヨロ〳〵と僕の肩に倒れかゝつて、僕の膝に手を突いて、『おゝ、怖』と僅に身を支へた、髪の油がプンと匂ふ、僕はフイと横を向いた、

第三

不愉快にも感じたが、又何だか無上に懐かしくも感じた、彼の清淨な濱さんが、到頭こんな旅藝者にまで墮落したかと思ふと、自分が墮落させでもしたやうに感じて、何だか謝罪でもしなけりやならぬやうな氣がする、

『あの頃のことを今でも折々思ひ出すんですよ』と言ふのを聽くと、相濟まんと云ふ思ひが益々切になる、

『生きて居れば、何時何處で、お目にかゝれるか知れませんわねえ』と細くシンミリと響く、

『御兩親は御變りも無いですか』と僕は手持無沙汰に尋ねて見た、

『はい』と言うたが、濱さんは一寸行きつまつた『あんなにお世話樣になりましたが、父は五年前に亡くなりましたさうです』

此の『亡くなりましたさうです』には僕も冷りとした、

『お母さんは』

『如何なりましたか、一向に――』

『東京へは、折々行くのですか』

『否え、もう、出たつきり參りません、――貴郎矢張り、東京？』

『然うです』

『然う！』と言つて、又暫し俯いて居たが『ほんたうにお恥かしくて、お目に掛つても、お顏向けも出來ないんですよ――』

何んと言うて可いか解らぬので、僕は默つて居た、

『小田垣さんと仰しやいましたつけね、お醫師樣の修業して居らしつた方』

『然うです』

『あの方は如何なさいまして？』

『小田垣ですか、可哀さうに死にました』

『然う――どうして』

『つまり放蕩の爲めです』

『御病氣？』

『否や、自殺したんです』

『あら！』と驚きの目を見張つたが『ですけれど石田さん、要らない人間なぞは皆な早く死んで仕舞ふ方が可いと思ひますわ』

『左樣』と僕は目を瞑つた『僕も折々然う思ひますが、なか／＼死ねないです、考へて見ると、小田垣なぞは豪いですね』

『石田さん、貴郞なんぞソンなこと仰しやつて如何しませう』と濱さんは摺り寄つた『失禮ですが、石田さん、只今、何のお勤め？』

『勤めも何もあるものですか』と僕は目を開いた、

『冗談ばつかり仰しやつて』と微笑む、

『本當です』

『ぢや、如何して居らつしやいますの』

『然うですね、まあ、浪人ですね』

『浪人は可いぢやありませんか』

『然うですか、無頼漢です』

『貴郞も面白いこと仰しやるやうに、おなり遊ばしたのね』と嫣然する、

『否や、本當です、早い話が乞食です』

『へえ、乞食が二重外套着て、中折帽子被つて車で歩くんですか』と寶石の指輪を脣にあてて可愛く笑ふ、

『然うですとも』と僕は怒氣が柱のやうに立ち上つた『金モール着けて馬車に反り返つた泥棒や乞食が、東京の眞中を威張り散らして居りますよ』

『本當ですね』と言ひながら、濱さんは膝に目を落した、

僕は無暗に湧き返る憤激を呑み込んで、ヂッと見つめて居た、コートの下を行きかふ血しほは知らないが、見て居る中に頰の邊が凄く蒼味を帶び來りて、鬢がユラ／＼と搖れて、手巾をギッと嚙み〆めた、其の手が震へる、其の全身の震へが、コートを透し、僕の外套を透して、一つ／＼に僕の心臟に響く、若し二人のみであつたならば、僕は力限りに濱さんを抱いたに相違ない、

馬車は又或る停車場に停つた、同車の一組は皆な此處で下りた、車内には僕等の外に斜向ひの老爺一人となつた、老爺は股の間の風呂敷包を提げて、御者臺の扉口に引き越した、

馬車は又驅け出した、

向ひ側の玻璃窓から見ると、見渡す限りの桑の枯野、其の間に森がある、人家がある、榛名の山の大傾斜が、信州境の山々に連つて、武州甲州と長へに南の方へ走る所に、こんもりと圓く眞白な雪の峯が一段高く聳えて、荒びた空にムク／＼と薄茶色の煙を噴いて居る、あれが淺間山であると云ふことは、後に聞いて初めて知つた、多分汽車の窓からも見えたのであらう、が、眼を瞑つて通つて來たので知らなかつた、此の寂しい、まるで大きな墓場のやうな天地の間に、地の底深く渦卷く火焰が、雪の頂をかき分けて噴き出るのかと思ふと、どうしても只山が煙を吹いて居るとのみ見て居ることが出來ない、偉大な人の心に宿る無限の不平、無限の疑問、無限の苦悶が、知る人なしに永遠只其の痛苦を訴へて居るのだ、山の頂にも風があると見える、煙は眞直に立ちも得ずして、一片、二片の斷雲となつて虛空に飛んで散つて仕舞ふ、其れが凝つて雨となり、雪となり、霰となつて人の世を逆襲する、けれど誰も知らない、只だ雨だ雪だ霰だと言うて除けて仕舞ふだけで、是れが世を呪ふ人の子の、血汁の成れの果だと氣の付いて呉れるものは無い、

腹の立つ話だ、實に腹の立つ話だ、

見つめて居ると、此の腹の底から熱鐵のやうなものが渦卷き上つて、天地も裂けるやうな聲し

て叫びたくなる、馬車のガタ〲動いて行くのが、腹が立つて、腹が立つてならぬ、こんな馬のやうなものに自由に支配されて居るのかと思ふと、生きて居るのさへ馬鹿々々しくて仕方が無い、大地が裂けて、無機物も有機物も、一切のものが、一時に皆な死に盡して仕舞へば可いと思つた、

「本當に、石田さん、私、厭になつて仕舞ひますの」と、濱さんは面を擧げた、其の目は燃えて、涙も何も乾いて居る「私、何故、女になんぞ生れて來たんでせう」

「女だつて、男だつて同じものだ」

「否え、女ほど詰らないものはありませんよ、私のやうなものでも、若し男でしたら、まさか是れまでには落ちぶれませんものね」

「男でも僕のやうな奴もある」

「僕のやうな奴つて、おや、貴郎が何か惡いことを遊ばして？」

「何の彼のと云ふよりも職業其物が惡い」

濱さんは又僕の職業を尋ねる、僕は隱して言はなかつたが、切りに尋ねる、逃げ切れなくなつたので、新聞記者だと云ふことを低聲に答へた、

「然ね、石田さん」と濱さんの眼には俄に微笑の光が映した「新聞なら結構ぢやありませんか、私も時々、一日でも可いから新聞屋さんになつて見たいと思ふことがあるんですよ」

「何でソンなに新聞屋が可いんです」

「可いぢやありませんか、思ふことを自由に書き拂つて、嘸胸が晴々するだらうと、私、本當に羨ましいんですよ」

如何にも羨ましさうな色が其眼に讀まれる、成程、然う思ふのも無理はない、若し思ふことを自由に書きつ拂ふことが出來たなら、胸の晴々することもあらう、自分も實に然う考へた、だから種々と人頼みして入れて貰つた、新聞社の標榜は急進主義――入社の希望の成就した時は、正直の所、僕は天へでも登つたやうな氣がした、天へ登つたも同じだと考へたが、記者の筆に何の自由がある、

僕は思はず苦笑した、

「何新聞？」と濱さんは問ふ、僕が返事をしないので「聞かして頂戴な」と身を摺寄せつゝ、甘え調子にシツこく問ふ「私も貴郎の新聞を見たいんですもの」

「否や、もう、僕は新聞記者を止すんです」

「何故？」

「あんな商賣は、ツク〲厭になりました」

「何をなさいますの？」

「何に成るか、わかりません」

危險と云つたやうな眼の色して、シゲ〲と僕の面を見上げる、

「今少し眞面目な身になりたいと思つて居るんです」と僕は言ひ足した、

「然うですか」とは言つたが、未だ能く呑み込めない顏色であつた、

話は暫し途切れた、

淺間の峯の煙を眺め、濱さんの俯いた横顏を見やり、自分の過去現在將來を思ふと、餘りに物が入り亂れて、目茶苦茶になつて仕舞ふ、

何を考へてるのか、濱さんはヂツと俯いたまゝだ、其の細い首を垂れて深き思ひに沈んだ姿を見ると、僕は實に可哀さうで堪らなくなつた、

何とか言ふ華族の隱居の妾奉公の目見えに行つたのは、たしか彼女が十五歳の春であつた、

濱さんは極めて手際よく反ねつけて、戻つて來た、母親は火のやうになつて怒つたが、彼女は凱旋將軍の如く意氣揚々と二階へ上つて來て、其日の顚末を詳細に物語つた、其の華族の隱居と云ふのは最早五十の上の老人で、周旋の老婆に連れられて孫のやうな濱さんが其前へ出ると、隱居は頗る恐悦の體で、綺麗な菓子を自

ら取つて呉れたさうだ、すると濱さんはプイと横を向いて仕舞ふ、老婆が側から取りなすと、又プイと他を向いて仕舞ふ、最初の中は隱居も却つて興がつて、にこ〱しながら機嫌を取つて居たが、餘りに付け上つて無禮を働くので、隱居も到頭怒つて仕舞つて、まんまと落第して歸つて來たのだ、『何の爲めに丹靑して仕込んだと思ふ、恩知らずが、罰當りが』と母親は眞赤になつて怒つて居たが、濱さんはキウ〱と酸漿を鳴らして一向平氣なものであつた、日見えに行つたことは、濱さんが歸つて來ての話で初めて知つたので、僕は實に自分が蘇生つたやうに力を得た、其年の冬の初め、今度は新橋の藝妓屋へ雛妓に遣られることになつた、其れを聽いた時、僕は實にギョッとして驚いた、僕は前々から斯うした時の來るのでは無いかと云ふやうな氣がして居たが、愈々到來した、此の無垢の花を蕾ながらに泥の底へ踏み込んで仕舞ふのかと思ふと、恐ろしくて、口惜しくて、悲しくて、寂しくて、堪らなかつたが、濱さんは相變らず平氣なものであつた、此の春の姿の日見えの時と同じく、勝利を占めて歸つて來るものと信じて居た、年に似合はぬ利發なシッカリした濱さんのことだから、又直ぐ凱旋して來るかとも思ふが、何だか不安で堪らない、よしんば再び凱旋することが出來るとしても、何せよ大敵だ、何時かは生捕られて殺されて仕舞ふに相違ないと思ふと、我れ自身のことのやうに思はれて堪らなかつた、愈々其日となつた、僕は書物を革嚢へ入れて學校へ行く用意をして居ると、濱さんが上つて來た、綺麗に髮を結うて、眞白に化粧をして、何と云ふものか知らないが、派手な長い袖の着物に眞紅な帶を背負つて、『私、是れから行つて來るのよ』と嫣然した、『可いですか』と僕が念を押すと、『大丈夫よ』と言ひ棄てて、匆々と下りて行つた、あゝ是れが彼女と會話の最後であつた、

午後に僕は例の通り學校から歸つて來た、濱さんは首尾よく戻つて來たであらうかと其事をのみ考へながら歸つて來た、濱さんは未だ戻つて居ない、日が暮れかゝる、戻つて來ない、夜になつた、何の音沙汰が無い、階下では母親が上御機嫌だ、其夜、僕は妄想に驅られてトロリとも眠らなかつた、

翌日になつても濱さんは戻つて來ない、翌々日になつても戻つて來ない、如何したんだらうと僕は獨りで心を痛めた、母親に尋ねた所で、どうせ碌なことを言ふものぢや無い、父親に尋ねて見ようと幾度も思つたが、何だか變に氣が咎めて口に出せない、小田垣に聞くのも厭だ、結局腹の中で彼か此うかと獨り氣を揉んで居たが、如何にも世の中が寂しくて仕方が無い、すると丁度六日目の朝だ、僕が革嚢を肩にして宿の格子戸を踏み出すと、其處へ濱さんが戻つて來た、『濱さん』と言つたが、彼女はフイと袂で顏を包んで逃げ込むやうに、格子戸の裡へ隱れて仕舞つた、僕は呆氣に取られて立つて居た、『如何した』と云ふ母親の棘のやうな聲がしたが、同時にワッと濱さんは泣き倒れて仕舞つた、

あゝ濱さんは殺されて仕舞つたんだと考へながら、僕は學校へ行つた、授業の間も斷えず此事のみ考へて居た、此日の課業が終へて歸宿の時が來た、僕は歸つて濱さんを見ることを恐れた、が、早く歸つて見なければ安心ならぬやうな感じもした、フラ〱と歸つて來た、濱さんは火鉢の側に俯いて坐つて居たが、僕が格子戸の外に見えると、フイと背ろ向きになつて仕舞つた、僕は此の刹那にも彼女の目の眞赤に泣き膨らして居るのを見た、濱さんは再び僕の屋根裏へ顏を見せない、學校へ行き掛け、學校からの歸り掛けに不圖見合ふことがあつても、濱さ

んは直ぐに背ろ向きになつて仕舞つた、僕も其の後姿を見ると、既に此世の濱さんでは無くして、死んで葬られて爛れ腐つた屍體か何ぞのやうに思はれて、遠く隔てたやうな、何か穢いもののやうな氣がしたのである、同時に才はじけた美しい濱さんを失つたと云ふ悲哀の情、寂寞の念は此の胸に充ち滿ちて居た、

妙な風體のものが出入りしては切りに何かコソコソと話して居た、そして濱さんが戻つてから半月程經ちて、彼女は再び見えなくなつた、一たび破れた彼女は、遂に自ら進んで藝妓を志願して、水戸の町へ買はれて行つた、其れから十年餘り、何處を何う流れ廻つてか、斯樣な山の中に相變らず泥水に泳いで居るのだ――

見ると、彼女は矢張り俯いた儘である、何か考へて居るのだ、矢張り僕の考へて居るやうなことを、思ひ出して居るのでは無いかなぞと想像すると、如何にも其姿が痛々しくて堪へられなくなつた、成程、濱さんも變つた、が、自分は如何した、新聞記者――藝妓、新聞記者、同じものだ、

斯う思つた時、濱さんと僕との間が非常に親しき關係あるものになつた、

僕はコートの上から輕く撫でながら、「濱さん濱さん」と極めて低聲に呼んで見た、

『は』と奥の方で答へたが、濱さんは泣いて居る、

「如何しました』と僕は覗くやうに顏差し寄せた、彼女の頰は熱かつた、

大きな川が見える、利根川だ、

やがて馬車は箱田と云ふ所に着いた、右は赤城の裾で、山を削つた崖の下を曲りくねつて道が造つてある、左は利根の大河を隔てて榛名の峯々が直ぐ眼の前に立ち並ぶ、

風が寒い、濱さんは手巾で眼を拭いて、頭巾をキリヽと頸に卷いた、

停車場の女房が馬を引いて垣根の間を出て來る、こゝで馬を取り替へるのと見えた、

車掌も御者も皆な下りて焚火にあたつて何か大聲に話して居る、

前の御者臺の扉が開いて、黑の二重外套、黑の山高帽子、生來か寒氣の爲めか、ブンド色した鼻の下に不行儀な髭を茂らした四十恰好の男が入つて來た、先づ郡會議員とでも云ふ先生らしい、

『やあ、才六』と濱さんを見て、煙草で汚れた大きな齒を見せてニヤリと笑つた、

『あら』と濱さんも嫣然と笑窪を見せた『此頃は久しくお顏をお見せになりませんのねえ』

『何處行つて來た』

『ちよいと前橋まで、――何方へ？』

『俺か』と、まだ切りに何か言ひたげに見えたが、僕の顏を見て、口を閉ぢて、威儀を作つて扉口に腰を下して仕舞つた、

才六と云ふのだなと、僕は首肯いた、

僕は此時まで濱さんが何處に稼いで居るのか、尋ねなかつた、只漠然と前橋あたりに居るのだらうと思つて居たが、今の問答で見ると、然うで無い、で『何處に居るんです』と尋ねて見た、

鈴が鳴つて、馬車が動き出した、

今の男が切りに、横目でチョイ〱と此方を睨む、馬車の響で、二人の會話には却つて好都合だ、

馬車は狹い間道を廻りて、長い鐵橋へかゝつた、

『あの、澁川に居ますの』と濱さんは小さい聲で答へた『貴郎、何方へ？』

『僕も其所へ下りるのです』

『然う、澁川は何方へ？』

『否や、澁川に用があるんぢや無い、勢多の横野と云ふ所まで行くんです』

『横野へ、横野は何某？』

『狩野と云ふんです』

「彼の狩野は何某？」

『狩野孝一と云ふ男です』

『あの、孝一さんですか』

『知つてますか』

『はあ、否え、只、あのお顏だけ』と云つたが、其の調子が少し亂れて居た『御懇意で居らつしやいまして？』

『學校の友人でね』

『然うですか』と言つたまゝ、何か考へて居た、

橋を越えてから、山は左右に愈々近くなつて、周圍の氣持も何となく變つて來た、

『貴郎、お急ぎ？』と突然、濱さんが問うた、

『否や、別に急ぐと云ふこともないです』

『是非今日中に狩野さんへ行らつしやらねばならないんですか』

『然う、今日行くだらうと言つてやつて置いたから、多分待つてるだらうと思ふんです、如何したんです？』

『私、石田さん、お願がありますの』と言つたが、頰に美しく紅を潮した、

僕の胸も轟いた、

『本當に、石田さん、こんな所でお目に掛るなんて、夢ぢや無いかと思ふんですよ、此のまゝお別れ申すのが、私、悲しくて仕樣が無いんですもの、――決してお手間はお取らせ申しませんから、お茶一つ召しあがつて行つて下さいませんか、身分をもワキまへない厚皮な女と御立腹遊ばしませうけれど――』

正直を言へば、此のまゝ別れて仕舞ふことは、僕に於いても甚だ不滿であつた、

『然うですね』と僕は首を傾けて考へた、

『お車で行らつしやれば、横野は直ぐなんですもの』と彼女は肉薄る、

遂に澁川で暫し昔語をすることになつた、濱さんの面には、まるで處女時代のやうな、無邪氣な羞かんだ微笑が溢れた、僕も此の十年餘の出來事をば一切打ち忘れて、錦町の屋根裏で讀本を教へた時の心持になつた、

『狩野さんには何時頃まで』と濱さんが問ふ、

『來月の中旬まで』

『ぢや、奧樣が、お寂しくて居らつしやいませうね』と僕の顏を見る、

『奧樣？』

『はあ、何故、御一所にお連れ遊ばしません』

『奧樣つて何です』

「奧樣は、奧樣でございますわ」

『連れるにも連れないにも、其樣なものは無いんだ』と慳貪に僕は言つた、

『おかくし遊ばさなくとも可いぢやありませんか』と微笑む、

『無いから、無いんだ』

『然う？――何故お貰ひ遊ばしませんの？』

『何故貰はないつて、僕等の所へ來るものが、ありますか』

『貴郎もウマイこと仰しやいますのね、餘り澤山あつて、お困り遊ばすんでせう』

『僕は細君なんぞ、嫌ひです』

『あら、何故で御座います』

『他の結婚するのさへ、牢屋へでも行く人を見るやうに、何だか氣の毒で堪らないものね』

斯う言ひながら、顏を見合せたが、濱さんの眼には異常な光があつた、僕は嚴めしいやうな、寂しいやうな、眞に此の冬の夕暮のやうな心になつた、

馬車は薄暗い森の下蔭を行く、

眞直な一本道の彼方に町家が見える、

前橋から同車の老爺は風呂敷包を結び直して下車の準備をする、

偖ては彼方に見えるのが澁川か、僕は下りるのが、何だか馬鹿に厭になつた、只何時までも斯うして居たいやうな氣がして仕方が無い、

が、馬は無遠慮に走る、ピシリ〳〵と御者は鞭を振ふ、

濱さんは櫛を取つて鬢のホツレを直す、

馬車が停ると、彼の老爺も紳士も前の扉口から下りる、僕等は直ぐ側の後の口から下りようとすると、濱さんが突然僕の外套の袖にムシリ付いて『孝一さんが』とサヽヤく、成程、向側の茶屋の前に、茶屋の女房らしきと並び立つて、下車の客を一々點檢して居るのは狩野だ、

『私、孝一さんには、少し都合の惡いことがあるんですよ』と觸れるばかりに頰を摺り寄せた『石田さん、私、一生のお願があるんです、人一人助けると思召して、お歸りに一寸寄つて下さいな、私は叶屋の才六と申します、決して御名譽に關はるやうなことは致しませんから、一寸で可う御座んすから、お顏を見せて下さいな、ね石田さん、後生ですから』

『可し』と僕は何の思慮なしに言うて仕舞つた、

本當ですか、急度ですかと、濱さんはヒタ〳〵と迫る、

『虚言は吐かん』と僕はキツと濱さんの手を握つた、

『有難う、石田さん、きつとお待ち申して居りますよ』と、濱さんも力限りに幾度も握り返して、衣紋を正して、急に方角を變へて、前の扉口から下りて行つた、

第四

僕の顏を見付けると『やあ』と滿面に笑みながら狩野が僕の方へ歩を向けた、僕は先づ驚いた、相見ざること僅に四年、五年、が、まるで別人のやうに變つて仕舞つた、彼は元何れかと云へば、柔形の男であつた、細くスラリとして色の生色い弱々しい男であつた、家の豊かなので、衣類なども自然贅澤であつた、然るに全くの別人のやうに變つた、顏は日に燒けて赭黑く、肉の堅さうな生々した額に髪が長く生ひかゝつて頭を露出して帽子も被つて居ない、手織木綿とも見える筒袖の着物の裾を高く引つからげて、淺黄の股引に紺足袋、藁草履、誰が目にもまるきりの土百姓だ、其の巖丈な體を大股に歩む様を見ては、是が曾て文學に耽り、戀に溺れて、身を悶えて聲を揚げて女々しげに泣いた男だとは、信ずるものがあるまい、僕は濱さんの變化にも驚かされた、が、濱さんに逢つたのは、偶然の事件だ、狩野のことは豫期して居たのだ、美の空想を生命とした男が、忽ち歸つて百姓に變つたのだから、必ず著しき變化を起して居るだらうとは、僕も豫て想像して居たが、餘りの變りやうなので、實に驚いた、

夕暮近き風の中を、今二臺の馬車を下りた人達が首を縮めて行く、僕の同車した老爺の、彼の大風呂敷を背負つた後姿も行く、彼の田舎紳士も行く、濱さんも行く、車夫の勸める呼び聲が寒く聞える、

『能く來たねえ』と打ち笑みながら、狩野がムツと手を握つた『實は如何かと思つて居た』暖かい堅い掌に力を籠めて振る、

僕は何だか妙になつた、濱さんの曖昧が浸みて居る上を、今狩野に握られた、

彼は僕と同年だ、が、學校に居る間、僕は兄分氣取りで居た、狩野も亦僕を兄分に立てて甘んじて居た、併し今久し振りにて彼の顏を見た時、僕は竊に其の力に壓された、彼に手を握られた時、僕は何とは知らず和らかな空氣の裡に包まれた、濱さんに縋られた時には、僕は自ら强者の感を持つたが、狩野の前には覺えず畏敬の情を捧げたのである、

『變つたぢや無いか』と言つたまゝで、僕は暫し彼の面を見つめて居た、

ハヽヽヽと朗らかに笑つて、彼は先きに立つて

又茶屋に入つた、

『まるで、君、變つて仕舞つたぢや無いか』と僕は同じことを繰返した、

『然うかねえ』と無邪氣に笑つて『本當に、君、能く來て呉れたねえ』と彼も矢張り同じことを言ふ、

彼方の座敷では、前の馬車から下りた洋服の紳士が、横柄な調子で沼田までの腕車を命じて居た、彼の食事を命ずるのを聞くと、僕も俄に空腹を覺えた、晝飯を忘れてしなかつたのである、

『まだ君、餘程あるか』と僕は言うた、

『否や、最早一里半ばかりだが、君、車を頼まうか』と狩野が言ふ、

『否や、車ぢや無い、飯を食ひたいのだ』

狩野は振り向いて飯を註文して呉れた、

火鉢にかざす二人の手を見くらべて、僕は實に我手を棄てて仕舞ひたいやうな氣がした、僕の手なぞ、都會の眞中では不細工な下等なものと言はれて居るのだ、人は皆な其手の白く華奢なのを誇り合つて居る、狩野の指なぞも以前は細い折れさうな、柔弱なものであつた、然るに今は太く逞しく節くれ立つて、堅く手厚い爪の下には鮮かな血汐の漲つて居るのが透けて見える、古い手紙を抱いて、心變りした女の爲めに『あゝ雪さん、雪さん、神よ、彼女を長へに護つて下さい』と泣き叫んだ時の狩野を思ふと、まるで譃のやうだ、

『ヒドイものを引つ張つて行くぢやねえか』と土間の爐を圍んで居た車夫が大きな聲で言ふ、

『さんざ、お役を勤めたものだ』と他の一人が言ふ、

振り向いて見ると、街道を一匹の裸馬を牽いて行くのである、成程ひどい、首も肋も細く痩せて、歩くたびにピクリ〳〵と跛引く、實に殘酷に使ひ枯らしたものだと、僕も憤怒の念が湧いた、すると、『俺達も今にあれに成るだよ』と一人の車夫の言ふのが聽えた、其れが針のやうに膽を刺す、

馬はピクリ〳〵と引かれて行つて仕舞つた、狩野も柔しい眼を凝らして馬の方を見て居たが、然し彼の面には、何處にも苦惱の影も死の影も見えないのだ、憎いやうな羨ましいやうな氣がする、濱さんのことが矢張り思はれる、すると又濱さんがひどく狩野を恐れて居た樣子が目に浮ぶ、今の狩野が遊蕩する筈も無い、藝妓に關係する筈も無い、狩野と濱さんとの間に何の關係の在るべき筈も無ささうだが、然し濱さんは慥かに甚く狩野を恐れて居た、

『併し君、本當に能く來られたねえ』と狩野は又同じことを、如何にも興味深く繰返す『年の暮は、新聞社も矢張り忙がしいんだらう』

『忙がしいつて言へば、忙がしい、閑だと言へば閑さ』と僕は苦笑した『其れよりも態々迎へになぞ來て呉れて、甚た氣の毒したね』

『なに、態々と云ふ程でも無いが、矢張り一刻も早く顏が見たかつたものだからね』と微笑む、

飯が來たので食ふ、

奥座敷の客は肥つた體を重たさうな外套へ包んで、大きな旅鞄を股にはさんで、車上に反り返つた、瀕死の病馬に我身の行方を歎息した倔強な車夫は、元氣よく綱つ引にて驅け出した。

僕等も勘定をすませて出た、

僕は何も荷物が無い、狩野は何か買物でもしたのか、風呂敷包を頸玉へ背負つて行く、

澁川と云ふは家造りの大きな、店の賑かな立派な町だ、榛名の裾なので爪先上りの町筋に、屋根が次第に重なつて、なか〳〵に趣がある、

高崎から沼田への縣道と云ふのが腰の邊を北へ貫いて、大きな辻が出來て居る、僕は狩野のまにまに其の辻を北へ折れた、

年の暮の忙がしさは道行く人の姿にも、兩側の店の樣子にも歴々と讀まれる、

大きな料理屋が道傍に見える、するとと濱さんのことが直ぐ氣になる、若しや此のあたりに居るんぢや無いかと、其れとなく四圍に眼を配る、左の狹い小路からブラリと若い島田の女が現はれた、荒い縞の派手な羽織をダラリと懷手して、土を掃くばかりに、だらし無き裾に、ジャラリジャラリと、大道を横切つて、向ひ側の料理屋の長暖簾を物憂さうに掻き分けて入つて仕舞つた、あれも何吉とか何太郎とか、浮名を此處らに歌はれる、濱さんの同輩かと思ふと、又濱さんが急に厭にもなり、可哀さうにもなつた、

すれ違ふ人達が僕等に眼を注ける、人が見たらば何と思ふだらう、斯う並んで行く所を凡俗の目やすで鑑定するならば、僕が旦那樣で、狩野がお供だ、馬鹿な話だと、僕は自分で我身を嘲つた、

狩野は平氣なものだ、額の髮を向う風に弄らせながら、切りに此のあたりの地理を僕に說明して呉れる、行く手に見えるのが子持山と云ふので、子持と赤城との山峡が利根川だの、利根に付いて上ると上杉の歴史に知られた沼田へ出るだの、子持の左の麓に吾妻川と云ふがあつて、其の水上に草津があるだの、伊香保はこゝから僅か二里でツイ其の山蔭だのと、まめ〳〵しく敎へて呉れる、

フム〳〵と鼻で返事はして居るが、僕の心は其處には無かつた、『人の心ほど不思議なものは無い』と僕はツク〴〵考へた、曾ては狩野の思想を、やれ不健全だの、空想的だのと、叱責した僕が、今は全く際涯なき廣野の霧の裡に迷ふ身となつて、何處へ行くのか、歩いて居るのか、其れすらも自分に解らない、

前橋で初めて榛名と赤城を望んだ時、あれが上古の天門の跡かと思つたが、今身は既に半ば天門の中へ迷ひ込んで居る、

人家なき道をフラ〳〵と辿つて居る中に、急に激しき瀬音が聞えて白塗の釣橋が目の前に聳えて居る、是れが先刻狩野の說明した吾妻川だ、高い崖の上に古い寺の屋根が見える、越後の謙信即ち長尾の城跡ださうだ、白井城と云ふのは何かで讀んだことのあるやうな氣もする、

欄干に凭れて物を思ふと、吹き上げる川風に氷つてでも仕舞ひさうだ、どうも寂寞なものだ、あゝ寂しいことだと僕は思つた、山を見ても死んで居る、川を見ても死んで居る、あゝ濱さんは如何したらうと、遠く澁川の方を眺めたが、只一面の夕暮の色――矢も楯も堪らなく戀しくなつた、飛んで行つて、引張り出して、しつかり抱き合つて、此の黑い水底へ飛び込んで仕舞ひたくなつた、

第五

『君、少し急がう』と狩野に言はれて、僕はフッと我に返つた、彼は包の端を夕風に吹かせて、先へ立つて行く、何の心配も無いらしい後姿、僕は其れを見て小憎らしくも、又小恥かしくも思つた、

橋を渡ると戀澤とか云ふ町家だ、其處を右へ細い坂を田圃へ出た、

狩野は歩きながらに、切りと東京の近況を尋ねるのである、其れが僕には如何にも辛い、可い加減に返事しながら、今度は僕の方から問ひ掛けた、

『君、新家庭は如何だい』

斯う言ひながら僕は狩野の樣子に目を注けた、

『新家庭か』と笑ひながら狩野は振り向いたが、鮮かな紅味が頰に潮して居た、

『其れも君に來て貰ひたかつた一つの問題さ、批評して貰ひたいと思つてね』と彼は靜かに眞面目に言ふ、

『矢張り衝突があるのか』
『ウム、古い衝突は少しも絶えないが、又新しい矛盾が起つて惱んで居る』
『何だい、新しい矛盾つて？』
『生活の不安さ』
『生活の不安？ 君にも其樣なことがあるのか』
『ひどいね、君、僕は何で生活して居ると思つて呉れるんだね』
『君は地主ぢや無いか』
『然うさ、だから實に苦しいんだ、――考へて見ると、戀の惱みなどは山の麓さね』
『えらく悟つたぢや無いか』
『然う言はれると、困るがね、まあ一個の男子として考へる時には、夫になつた、父になつた、けれど、一個の人として考へる時に、僕は依然として權力者であり、××者であるものね、能く其非を知つて居ながら、其の非を棄つることが出來ないものね』
狩野の言ふ所を聽いて居ると、何だか腹の底から冷汗が湧くやうだ、
赤城の山は目近くなり、夕暮の色は地を掩ふ、風は次第に寒い、
瀬音が高く響く、坂を下ると、利根の大河が物凄くドウ／＼と流れ行く、

『おゝい』と、岸に立つて狩野が一聲長く呼んだ、
遠き彼岸の松林の間に見ゆる一軒の小家には夕食の火が、あか／＼と燃えて居る、やがて黑き人影が火の前に動いて、汀を差して出て來たらしい、忽ちビヽンと一聲頭上を響き渡る、彼岸の松から此岸の岩に架したる太い鐵線の鳴るのである、渡守が船を此方へ漕ぎ出したのだ、
茫然として何思ふともなく、暮れ行く川の面を眺めて居る中に、船が來た、乘り移つた、渡守は又ビヽン／＼と鐵線を鳴らして、浪を横切つて、綱を手繰る、狩野は船頭と、村の近頃の出來事を話して居る、僕は矢張り川の面を茫然と眺めて居た、
船が着いた、
石の上に十五六の少年が待つて居た、其れは由十と云ふ狩野の奉公人だ、
『迎ひに來て呉れたのか、氣の毒な』と狩野は柔しく言つた、
『若奥樣が、お客樣のお荷物を擔いで來いと仰しやりました』と少年は言ふ、
『然うか、其れは御苦勞だつた、お客樣は何もお荷物は無いよ』と狩野が言ふ、
『然うでやすか』と少年は拍子拔けの體、

『姉が非常に君を待つて居るので』と狩野が振り向いた、
若奥樣と言ふのは、狩野の姉さんのことかと、僕は初めて合點した、
船頭は小屋へノソ／＼と戻つて行く、焚火が何と無く懷かしい、
『先きに行つて、お客樣が直ぐお着きになりますと、言うてお呉れ』と狩野が言うた、
『へえ』と少年はお辭儀をして、手を寒さうに胸に組んで、飛んで行く、
砂地をザク／＼と松林を出拔けて、薄暗き坂路を辿る、四日月ほどの銀色の細き光が一きは寒さを添へる、僕は外套の襟を立てて、足許に全身を注いで狩野の後に從ふ、色々のことが、心に往來する、濱さんの身の上が見えたかと思ふと、狩野の古い失戀の騷ぎが浮んで來る、其頃の狩野の姉さんの邸の樣が現はれて來る、――
狩野の姉さんと言ふのは、最早三十の上を一つ二つ越して居る筈だ、名はたしか君代さんと言つた、狩野に連れられて遊びに行つた頃は、駿河臺に居た、良人は内務省の役人で、何せよ、高等官の奥樣と云ふので、大した權式のものであつた、其の良人と云ふ人にも二三度逢つた、役所の方では遠藤と云へば、餘程幅が利いて居

るとか聞いて居たが、淺薄な輕卒な男だと僕は思つた、自治制度や慈善事業などのことに就いて、自慢話を聽かされたこともあつたが、僕は少しも感服しなかつた、其頃僕は大分社會主義の思想に感染して居たので、「日本では社會主義などの芽の出ない中に、慈善事業の奬勵をしなければならぬ」などと、例の役人口調で、役人思想を振り播くのを聽くと、僕は寧ろ輕蔑の念が起つた、「目の前に社會主義が居るのも知らないで」と思ふと、其の得意に葉卷をくゆらす顏が馬鹿に見えて仕樣が無かつた、が、君代さんは其頃盛な亭主自慢で、日本の政治は遠藤の指一本で自由になると云ふ見識であつた、僕は君代さんから、自分が隨意に遠藤を動かして居ることの祕密の手柄話を聽かされた、君代さんは自分の亭主の品行方正を自慢して居た、そして亭主の品行方正は、妻たる自分の學識と、實家の財産家である爲めだと云ふ論法らしかつた、君代さんは、東京の或る女學校を卒業したので、自分では才色兼備の新婦人と云ふ見識であつた、成程、君代さんはナカ／＼氣の勝つた婦人であつた、ハラ／＼するやうな間違つた理窟を臆面なく雄辯にまかせて滔々述べ立てられるので仕樣が無いから默つて仕舞ふ、すると君代さんは自分が勝つたと思つて安心した、何時でも綺麗に化粧つて居たが、美人だとは思へなかつた、「孝一は氣が弱くて」と常に君代さんは氣を揉んで居た、樂器も色々飾つてはあつたが、一度も其の御手なみを伺はなかつた、然しお手製の西洋料理は毎度御馳走になつた、音樂を解しない僕には、此の方が餘程好都合であつた、其れが如何して離緣になつたらう、――遠藤も決して君代さんの信じて居たやうに品行方正では無かつたと云ふことだ、然し遠藤は役人としては着々立身して居る、如何して離緣になつたのか、其の事情は知らないが、兎に角氣の毒なことには相違無い、

『姉さんは、君、如何だい』と僕は問うた、

「姉かね」と言つたまゝ、狩野は暫し默つて居たが「相變らずでね』

「然し、君、お氣の毒なことだつたぢや無いか』

「實際、氣の毒でね、僕も心から同情はして居るんだがね、矢張り相變らず氣が合はないのでね」と狩野は言葉を切つて仕舞つた、

「君が來て呉れると云ふので、姉も非常に元氣で居るんだ」と、狩野が、やがて言ふ「話相手と言ふものが無いのでね』

坂路が段々急になつた、やがて木立の深い一構が見えた、高い門が早や扉を閉てて眞夜中のやうに靜かに立つて居る、成程堂々たるものだと、僕は思つた、

門の前には先刻の少年が待つて居た、彼が明けて呉れた小門をくゞつて入ると、其處は廣い庭で、土藏の壁が白く目立つ、杉の黑い中に冬枯の大きな槻が其の手を張つて高く聳えて居る、茅葺の高い屋根、其の大きな建家は雨戸に固く封じられて、サヤ／＼と音する凄き天地に、さながら古きピラミットの如くに寂しく立つて居る、只三尺ばかりの狹き障子口に、内から燈火の映して居るのが、何のことは無い、黄泉の戸口のやうにも思はれる、ガタン／＼と何か蹴る音がした、人の呻るやうな響がした、其れは土藏の横の厩であつた、

敷石を拾つて、彼の障子口に歩み寄る、ガラリと開けて狩野が先きにくゞり込んだ、僕も續いてマタぎ込んだ、煤けたやうな蒸れたやうな、田舍の臭が鼻を打つた、

其處は廣き暗い土間で、誰か人が立つて居るらしかつたが、僕の目は先づ上り框の明るい方へ向つた、其處には洋燈を照らして三人の婦人の顏が並んで居た、僕は先づ僕の知つて居る人を認めた、洋燈の反射に面を輝かして眞中に笑ま

しげに坐つて居るのは、卽ち君代さんだ、僕の顏が洋燈を受けるや否や、君代さんは早くも脣を開いた、『まあ、石田さん、さぞお寒う御座いましたでせう、ヒドい山の中で、喫驚なさいましたでせう、さ、何卒お上り下さい』
僕は其の雄辯に壓されて、返事も直ぐに出なかつた、
『馬車？ 腕車？』と君代さんは狩野の方へ眼を轉じた、
『歩きました』と狩野は腰を屈めて足の埃を拂つて居る、
『お歩ひ？』と君代さんは、さも喫驚したやうな眼を張つて、狩野と僕とを、キヨロ〳〵と見廻した『ほんとに孝さん、貴郎は仕様がありませんね、だから私が念を押して上げたぢやありませんか』
『でも、石田君は歩く方が可いと云ふんだもの』と狩野は言ふ、
『たとひ石田さんは然う仰しやつても、貴郎が氣を付けてお上げ申さにやならないぢやありませんか、東京の方に、田舍道のお歩ひが出來ますかね』
狩野は何にも言はない、僕も默つて君代さんを見て居た、
『ほんとに石田さん、相變らずで困るんで御座いますよ』と君代さんは眉を顰めて僕の方を見た『どんなにお疲れなさいましたでせうね』
『なあに、何ともありやしませんよ』と、僕も餘り大仰な君代さんの挨拶に、思はず心中冷笑つた、相變らずだなと僕は思つた、が、若いには驚く、駿河臺で見た時と少しも變つて居ない、束髮も東京風の新式に綺麗に結んで、着物なぞも、何と云ふ物かは知らないが、大分金目の重い物らしい、何處までも高等官の奥様の格式を崩さぬ心掛けと見えた、相變らず活潑な女王で、想像した寡婦の寂寞なぞは影も無いやうだ、
『さあ、何卒』と君代さんは一人で急き立てる、
『さあ、何卒』と傍に控へた老女も柔しく言ふ、是れが狩野のお母さんだと云ふことは、直ぐに解る、其の面の稍々圓味がかつて、眼の中に溫かな光の沈んで居るあたり、狩野其の儘だ、此人の性格氣質に就いては、以前狩野から聽いて居たので、顏を見るのは今が初めてだが、自分の心には何となく古い知人のやうな感じがした、『さあ、何卒』と兩手を支いたまゝ、溫和な目で見上げられた時、僕は心の底に一種の懷かしさを覺えた、
臺洋燈を捧げて、脣を結んで式部官が外國の皇族でも出迎へる時の鹽梅にキチンと控へて居る十八九の娘が、鶴代さんとか云ふ狩野の末の妹だらう、疑ふやうな輕蔑するやうな風に人を見つめる眼つきが、君代さんに能く似て居る、狩野はお母さん似だ、女の方がきつと親父似なのだらうと僕は思つた、

第六

僕は上つて、廣い臺所で、一應の挨拶をした、君代さんには久し振りの、お母さんと鶴代さんには初對面の挨拶をした、鶴代さんは前橋の女學校に行つて居るので、此の二三日前に冬の休暇で歸村したのださうな、
お母さんは『孝一が、誠に一方ならぬお世話さまになりましたさうで、兄のやうな氣がすると始終申しまするので、私も一度是非お目に掛つて、お禮を申上げたいと念じて居りやしたに、能くまあ、こんな邊鄙な山の中へ來てお呉れやした』と溫和な顏でシミ〲と言ふ、『あゝ、狩野は、こんな良いお母さんがあつて羨ましいことだ』と僕はツク〴〵思つた、
狩野は莞爾々々して坐つて居る、鶴代さんは通例の挨拶をした後は、威儀を損すまじとやうの

面地で、上目づかひに、ジロリ〳〵と默つて見て居る、

『お母さん、此處で其樣な御挨拶はお止しなさい』と君代さんは、お母さんを制して『何卒石田さん、此方へ』と襖を開けて次の間へ立つ、

『ほんとに然うだつたの、では何卒彼方へ』とのお母さんの言葉に從つて、座を立たうとした時、僕の後ろ脇の薄暗い方に、何か動く氣はひのしたので、振り向いた、一個の若き婦人が手を突いて小さくチョコンと坐つて居る、僕が振り向いたので、婦人はピッタリと頭を下げた、立ちかけた膝を坐り直して僕も無意味に頭を下げた、

『僕の妻です』と狩野が紹介した、あ、是れが然うかと、僕は改めて初對面の挨拶をした、婦人は只鄭重に幾度も頭を下げる、何か言うて居るやうだが、聲が細いのに平伏して居るので、聽き取れなかつた、

君代さんが急き立てるので、僕も匆々に立つた、鶴代さんは最早居なかつた、

幾つもの座敷を越して、僕は奧の廣い立派な座敷に案内された、一見大家の奧座敷と云ふことが知れる、古代の色の火鉢に火が盛られて、新樣の洋燈が陸く照らして居る、女郎形の縮緬の派手な座蒲團が、如何にも不調和に感じられた、是れはきつと君代さんの嗜好に相違無い、駿河臺の邸にも、こんな樣子を見受けたことがあつたと思ふ、座蒲團も不調和だが、此上へ僕が坐るのは更に不調和な話だと思つた、が、僕は勸められる儘に一向構ひなく坐り込んだ、

『孝一が相變らず氣が着きませんので』と君代さんは、又僕が車に乘らなかつたことを、心苦しげに言ふ、

『狩野君は車のことを心配して吳れたんですが僕が好んで歩いたのです』と言つてやつた、

『ですけれど、孝一が、ちやんと支度をして置かないと云ふことがあるものですか、自分が彼樣な風をして居るものですから、貴郎までも矢張り書生さん時代の石田さん扱に致しまして』と君代さんは、狩野が僕を歩かせたことを、狩野一家の大恥辱らしき口調で言ふ、

『矢張り書生時代の石田ぢやありませんか』と僕も少し皮肉な調子に言つた、

『あら、厭な』と君代さんは權のある眼に嫣然笑ふ『もう、立派な新聞記者さんで居らつしやるんですもの』

僕は厭な顏して橫を向いた、

『こんな田舍に居りますと、石田さん、新聞の外に樂しみが無いんですよ、妙なものですね、知つてる方がお書きになるんだと思ふと、一きは懷かしいでせう、私は每日待ち兼ねては、一番に貴郎の新聞の封を切るんですよ、貴郎のお名前の出て居る文章ですと、何度も〳〵繰返して、其の度每孝一と論じますの』

鶴代さんが茶と菓子鉢を捧げて入つて來た、其れを規則正しく置いて、又例の式部官式にジロリと偸み見る、「東京の新聞記者」と云ふものを見てやらうと云ふ見識らしい、

『布衣の宰相だと言ひますが、ほんとに然うですもの』と君代さんは言ふ、

鶴代さんは澄まして出て行つた、殆どすれ違ひに狩野が入つて來た、『君、疲れたかね』と莞爾々々坐る、

『お疲れもなさるわね、慣れない田舍道をお步きなすつたんだもの』と君代さんが又腹立たしげに言ひ出した、

僕は茶を飲んで默つて居た、

『稀には姉さん、可いですよ』と狩野はアハ〳〵と笑ふ、

『だから貴郎のやうに成つて仕舞ふと、何も解らなくなつて仕方が無い』と君代さんは餘程立腹氣味だ、

『僕だつて毎日、二里や三里は歩いて居るんだから、何ともありませんよ』と餘り馬鹿々々しいから、僕も中腹で言つて退けた、

『そりや、然うでせうけれど、お車なんですもの、孝さん、新聞屋さんは皆な手車でお歩きになるんですよ』

『新聞屋さん』は恐入つたと、僕も思はず苦笑した、

『いや、全く僕の不念でした』と、狩野は笑ましげに頭を掻きながら『君、風呂に一つ入りませんか、其れから御飯にしよう、ね、姉さん、其の方が可いでせう』

『あ、其れが可いでせう』

『ぢや、君、此方へ來て呉れ給へ』と狩野は直ぐに立つて行く、

僕も續いて座敷を出ようとすると、『生憎、石田さん、上の風呂が破損して居りまして』と君代さんが、さも面目なさげに言ふ、

上の風呂だの、下の風呂だのと言ふものが、あるのかと思つた、

再び臺所を通つて、土間へ出た、

廣い土間の暗い隅に小さな洋燈が、ぼんやりと點いて、湯氣が切りに立ち上つて居る、一つの大きな鐵砲風呂が据ゑてある、風呂桶の横の火口から、ボウッと紅く火の氣が其の邊に映つて居る、

『菊さん、湯の加減は如何だね』と狩野は足駄を穿きながら言うた、

『可かろと想ひやんすが』と暗い隅に美しい若い聲がした、

『一つ試てやらう』と狩野は湯氣の中に半身のしかゝつて、ガブ〳〵と湯をかき廻す、石田君、君は温湯好きだつたねえ』と振り向いた、

僕は框に倚ほ立つて居た、『僕は温いのは、水の如く温くても可いんだ』

『熱い〳〵と言つて、能く湯屋の三助と喧嘩したつけな』と笑ひながら彼は、細君の方に向き替へた『僕には丁度良いが、石田君には熱い、手桶に一杯うめたら可からう』

『はい』と温柔しく答へて、カタリと手桶の音させて、草履バサ〳〵と裏口の方へ出て行つた、

寒い風が何處からかスゥと入つて來る、風呂場の洋燈の火が動く、

僕は履物を引つかけて土間へ下りた、

風呂の側に筵を敷いて脫衣場が設けてある、

『君、お菊さんと言ふのか』と僕は低聲で聞いて見た、

『うム、菊野ツて言ふのさ』

『菊野！　好い名だな』

『然うだらうか』と狩野は笑つた、

草履の音、小きざみに菊野さんが水を提げて來た、先刻は臺所の薄暗がりで能く見えなかつたが、今大きな手桶を提げて洋燈の前に立つたのを見ると、體軀はやゝ小造りだが、肉が引きしまつて、ふつくりとした頰のあたり、健かな自然の色が如何にも美しい、パッと黑い大きな目を上げて、僕を見た、

『お氣の毒でしたね』と僕は言つた、

『否え』と言ひながら菊野さんは、其の大きな手桶を輕々と持ち上げて、ザアと水を注ぐ、

狩野はガイ〳〵と掻き廻して居たが、『君、一寸試て呉れ給へ、未だ熱いか如何か』

菊野さんは空手桶を提げたまゝ立つて居る、

僕は手を入れて見た、僕には未だ少し熱いやうな氣がするが、『大丈夫だよ』と言うた、

『可いかね』と狩野が念を押す『未だ熱くはないかね』

『否や、大丈夫だ』と僕は背後向きになつて帶を解き始めに、

『ぢや、今一杯汲んで來てお置き』と狩野が言ふ、

『はい』と菊野さんは又手桶を提げて出て行つ

た、如何にも、シヲらしく僕は感じた、
『君、幾歳だい』と僕は襦袢を脱ぎながら問うた、
『二十三だ、今に四になるんだ』と狩野が言ふ、
『美だな』
『然うかね』
『美だよ、本當の美だよ』
『然う言はれると、有難い』と狩野は微笑みながら『ゆるりと浴り給へ』と言ひ捨てて行つて仕舞つた、
湯は未だ餘程熱いが仕方が無い、全身の力を腹に集めて、呼吸を凝らして沈みかけて見たが、一日、寒風に荒らされて居る所へ、新湯の少しく採めて居ないのが浸みるので、熱いよりも寧ろ痛い、忍耐力の試驗と、觀念の眼を閉ぢ脣を噛んでジリ〳〵と腰を沈めて居る所へ、菊野さんの草履が聞えた、すると、プツリと忍耐の緒が切れて、僕は、いきなり立ち上つて仕舞つた、
『お熱うござんすか』と菊野さんは、無邪氣な眼で見上げて、
『どうも溫湯好きでしてね、今一杯願ひませう』と僕も頗る閉口した、
『御免なすつて』と言ひながら菊野さんは又一手桶明けて吳れた、
今度は本當に丁度可い湯になつた、が、菊野さんは直ぐに立ち去らない、矢張り手桶を提げて見て居る、
『誠に有難う』と僕は體を沈ませる、大手桶で二杯も水を入れたので大湯になつた、
僕の能く漬かり込んだのを見て、菊野さんは『どうぞ、お緩り』と頭を下げて立ち去つた、
實に良い湯だ、冷えた體の髓までジハ〳〵と好い工合に浸み透る、旅行の疲勞も、物思ひも、天地も、人生も、過去も未來も皆な此の一杯の風呂の中に溶けて仕舞つたやうだ、
此の首まで湯に漬かつたまゝ、桶の緣に頭を載せて、膝を抱いて長へに呼吸をすると、心頭また一點の浮雲も無い、まるで極樂淨土へ往生でもしたやうだ、
やがてポカリと目を開くと、勝手元の圍爐裡が眞直に見える、眞黑に煤けた自在鉤には大きな鍋が懸つて、榾火がパチ〳〵と元氣よく燃えて居る、菊野さんが一人坐つて居る、焚火の明りで見ると、菊野さんが一きは美しい、頰の血の色鮮かに透き通つて、鬢の亂れを輕く嚙へた脣の可愛らしさ、まるで野の花の風に輕く靡くがやうだ、太い長い火箸で榾を介酌する、其の紅味がかつた、逞しき手首、——僕は何時ぞやの狩野の手紙に『我が妻は地上の教育に於いて殆ど全く缺けたれども、天の父は其の高き知識を惠みて、彼女の清き胸に充ち溢れしめ給へり』と書いてあつたことを思ひ出した、其時は、例の狩野の空想病と、冷笑に流して仕舞つたが、成程美しい女だと僕は不思議な程に深く感じた、榾が燃え崩れる、白い灰が立つ、髮や袖に雪のやうに降りかゝる、顏を背向けて拂ふ、
熟と菊野さんの樣子を眺めて居ると、自然に彼のお雪さんの面影が浮んで來た、裳長に穿いた海老茶の袴の下から踵の高い細い靴をチラリチラリと見せて、高慢な目を据ゑて、バイオリンを提げた學生姿が浮ぶ、成程學問も出來たらう、容貌も一寸目に立つたらう、が、僕は實に冷やかな女だと思つた、文章もウマかつた、狩野が夢中になつたのも無理は無かつたが、あの狩野と往復した手紙を見ると、どうしても厭な女だと思つた、文章がウマ過ぎた、若し本當に戀して居るものなら、あんな巧妙な文句を綴つて居る餘裕が無い筈と思つた、僕が然う言ふた、狩野は却つて處女を侮辱するものだなどと眞赤になつて怒つたが、僕は如何しても感情の綺麗な正直な男を弄つて樂む不埒な妖女と睨んで居た、論より證據だ、何とか言つた海軍

の士官と結婚して仕舞つたぢや無いか、あの時も然うだ、長い手紙を狩野へ寄越した、家庭の事情が如何だの、父母の迫害が斯うだのと誠しやかに述べ立てて、舊道德の犧牲となつて囚はれて行く身を哀れと思ひ給へなどと、定り文句が書いてあつた、其れ見ろと僕は言つて遣つたが、狩野は未だ欺されて居た、だから『神よ、彼女を保護して下さい』などと泣いたり喚いたりしたのだが、然し狩野の爲めには結句幸福であつた、女と云ふものは浮かと信ずることの出來ないものだと云ふことを學んだのは、狩野の爲めに一生の幸福であつた、實際女と云ふ奴は厭な奴だ、滿身是れ虛僞だ、そりや僕だつて常に心が動く、が、此の賣女と思ふと直ぐ醒めて仕舞ふ、戀なんてことが眞面目に出來たものぢや無い、あのお雪さんも然うだ、折角の亭主が戰爭で死んだ、名譽の戰死をやつた、が、別段悲しんでも歎いても居りやしない、此の春の癈兵救助慈善會の時で知れる、相變らず着飾つて、塗りたくつて、是れ見よがしに飛び廻つて、若い男を捉へては、例の目づかひを演じて居た、最早何をして居るか知れたものぢや無い、あんな女に見棄てられたことは、實に狩野の幸福だ、あんな女に見棄てられたればこそ、狩野も文學だの、詩だの、歌だのと云ふ下らない迷から離れて、農民生活に立ち返ることが出來たのだ、そして此樣な菊野さんのやうな眞實の女に愛されることが出來る身になつたのだ、君代さんが嘸虐めることだらう、狩野も君代さんには餘程氣兼ねをして居る樣子だ、「若奥樣」の權力で、出戻り女のヒガミ根性で、嘸此の鳩のやうな菊野さんを虐めることであらう、——

第七

君代さんと此の菊野さん——あの着飾つた君代さんと、此の手荒な木綿の筒袖姿の菊野さんとを較べると、王の娘と奴隸の子との相違だ、菊野さんは元奉公人であつたから、今でも奉公人時代其儘で居るのだらう、一つの屋根の下に寐起きして居ながら、其の生活は千萬里も離れて居る、人間と云ふ奴は變な動物だと思つた、

フイと菊野さんが立つて行つた、赤ン坊の泣き聲が聽える、

菊野さんを奪はれたので、世界が急に寂しくなつて仕舞つた、氣が着いて見ると、僕は未だ風呂に浸つて居るのだ、風呂に居ることをも忘れて居た、此の世の記憶が一時に回復されて來た、出ようかとも思つたが、其れも何だか厭だ、矢張り膝を抱いたまゝ茫然と見やると、爐の火も段々燃え崩れて、四邊が瞬一瞬と暗く冷やかになつて行く、

濱さんのことが胸に出て來る、無邪氣な菊野さんを見た目には、濱さんの面には、一體に暗い霧が掛つて居る、が、濱さんも元決して彼樣では無かつた、僕の机の横で編物をした時の濱さんの顏には決して彼樣な厭な影は一點も無かつた、藝妓屋の目見えに行くと云つて、屋根裏の階子へ顏を出した時まで、濱さんも矢張り無邪氣な朗らかな少女であつた、僅か六日を經て驅け戾つて來た時の濱さんは、最早全く別人であつた、其後、家に居た間チラリ〳〵と見せた眼の中に、蛇のやうな恐い光の閃くのを感じたが、あれは慥に世を怨み男を怒る呪詛の火焔であつたのだ、其れが十年餘り、變り果てるのも無理は無い、あゝ、虛僞は女ばかりぢや無い、男も然うだ、否や、男が然うだ、

只無暗に不愉快になるので、僕は風呂を出て仕舞つた、體を拭いて居ると、『最早出たのか、大層早いぢや無いか』と狩野が來た、

『君、之を着給へ』と抱へて來たのを其處に置いて、僕のを丸めて持つて行つた、

浴衣の上に何かドッシリした上物が揃へて重

ねてある、袖を通して見たが、身幅も廣ければ、丈も長い、褄を取つて、ジョロリ〳〵と奥へ行きかけると、「僕も一風呂浴びてくからね」と云ふ狩野の大きな聲が後方に聽えた、

座敷へ戻つて、彼の友禪の蒲團の上に坐つて、壁の額など見て居る、

「大層お早いことね」と、イソ〳〵と君代さんが入つて來た、手には荒い縞の褞袍を持つて居る、

「あんな風呂で、嘸お厭でしたでせう」と言ひながら、僕の背後へ廻つて、フハリと肩へ掛けて呉れた、

僕は此の褞袍と云ふ奴が大嫌ひだ、宿屋などでも是れを持つて來る、が、僕は着たことが無い、褞袍と云ふものを身に掛けたのは、今が初めてだ、君代さんが急に藝妓か仲居か何かのやうに見えた、

「父のものですから、お召し苦いでせう」と微笑みながら、君代さんは摺り寄つて火鉢を搔き立てる、香料の高き香が甘く鼻を打つ、僕の胸には、婦人に對する卑劣な玩弄の慾望が、むらむらと熱した、君代さんが、ヒョイと面を上げた、僕は驚いて目を逸らした、

「本當に石田さん、能く來らしつて下さいましたことね」と、君代さんが媚びるやうな笑を見せて今更らしく云ふ「孝一へ貴郎から、此の暮から正月へ掛けて少し頭を休めたい、君の所が今少し便利だと可いがと云ふお手紙があつたでせう、石田君が斯様なこと言うて來たと見せましたからね、あゝ丁度可い、是非來らつしやいと言うてお上げなさいと申したんですよ、寒中だから氣の毒だと躊躇しますから、孝さん、貴郎は何事も弱くて可けない、ドウしても來らつしやいと力一杯書いてお上げなさいと私が、貴郎、側に附いてて直ぐと御返事を書かせましたの、すると貴郎から又、實は何處か海岸へ行く積りだつたが、君の引力に吸はれて急に山へ行くことにしたと云ふお手紙でせう、其れ御覽なさい、私の熱心が到頭石田さんに勝つたぢやありませんかと申したんですよ」

君代さんはホヽヽと笑ふ、

「其れに私は是非とも貴郎にお目に掛つて、詳細に申上げて、力になつて戴きたいと豫々考へて居た矢先きだもんですから」と、ヂッと君代さんは僕の顏を見据ゑた、

何かは知らず僕はギョッとした、火鉢に掛けて居た手を引つ込めて、同じく君代さんを睨むやうに見返した、

「實は弟の身の上に就きまして」と君代さんは、聲を低めて顏さし寄せた「石田さん、貴郎ですから私は最早何も彼も打ち明けてお話し申すんで御座いますよ、貴郎の御名譽の日々高くおなりなさるを見るにつけ、私は孝一の意氣地なしに腹が立つて堪りませんの、御存知の通りの弱い氣質の弟ですから、出來ない希望を繫けるでは御座いませんけれど、普通の男の地位には立たせてやりたいのが肉親の情合で御座いませう、元私は弟が直ぐ故鄕へ歸るのが不賛成で御座いました、ですけれど、彼の時のは失戀だの何だのと何樣な馬鹿な騷を致しまして、貴郎にも色々御厄介になりましたやうな矢先きでしたから、鄕里へでも行つて少し氣を落ち着けるも可からうと思ひまして、其れぢや歸ることになさいと申しました、で、其時も私は嚙んで含めるやうに言うて聽かせたんですよ、故鄕で少し休んだらば直ぐ出京なさい、そして一年でも二年でも可いから一通り歐米を廻つて來るが可い、人は如何しても身體に箔が着かないと、人が信用しない、然うなれば又私達も一生懸命に立身の道を開いて上げようからと、能う言ひ聽かして歸したんで御座いますよ、すると百姓になつたと言ふんで御座いませう、

百姓なら外に幾らも人がある、何の爲めに金を使つて高等の敎育を受けたと、煮え返るやうに腹が立ちましたけれど、彼云ふ弟の氣質だから、珍らし半分に其樣な眞似もして見るんだらう、直ぐ厭になつて出京て來ることと、待つて居たんで御座いますよ――」

君代さんは話を切つた、切つたと云ふよりは話が支へた、詮方なしに火箸で灰を搔きならして居た手を止めて、竊と上目に見ると、君代さんも、チラと見て直ぐ伏眼になつた、

『――私も、誠にお恥かしいことですが、再び斯うして父の家に歸るやうなことになりまして――』と君代さんの聲は頗る慄へた、が、直ぐと平生の鋭い能辯に立ち返つて『來て見ますと、あの態で御座いませう、小作人にだつて彼樣な穢ろしい風をして居るものはありやしませんよ、是れが狩野の家の相續人か、是れが私の杖とも柱とも賴む唯一人の男兄弟かと思ひました時、悲しいのか、口惜しいのか、石田さん、私は只泣けて仕舞ひました――』

君代さんは手巾で顏を隱した、

君代さんは涙を拭いて語り續ける『父も仕方が無いと斷念致しまして、では嫁でも貰つて身の定まりを着けさせることにしようと、內々相談も纏まつたので御座いましたが、其時は最早彼の菊野と云ふ女が懷妊して居ると云ふ始末ぢやありませんか、弟は彼女を妻とすると申すのですけれど、まさか奉公人を嫁女に直すと云ふわけにもならないで御座いませう、其樣な不しだらなことでは如何して此の多勢の奉公人を押へて行けますか、父も最早忍耐が爲きれなくなりまして、弟も女も皆な逐ひ出して仕舞ふと言うて怒りましたが、何分にも母が甘いので御座います、氣に入つたものなら、身分の高い低いは無いから孝一の嫁女にして吳れ、取分けお腹に孫まであると云ふものを、此儘逐ひ出して遣れば如何なるか解らない、自分を助けると思うて勘辨して吳れと、父の前に手を合せて泣くので御座います、若し女を逐ひ出すと云ふことになれば、母の方が先きへ死んで仕舞ひさうな樣子で、其れも外聞の惡い話ですから、私も色々と考へまして、父と相談したので御座います、仕方が無いから夫婦にしてお遣りなさい、あんな無敎育な女ですもの、弟だつて、直き厭になるは見えて居るから、其時出して遣つたら可いでせうと、父も不承々々私の言ふことを聽いて吳れたんですが、石田さん、今日となつては父よりも私の方が愛想が盡きて仕舞ひました』

『何故です』

『何故つて、貴郎、彼樣な女に弟は滿足して居るんですもの、呆れ返るぢやありませんか、其れで父は彼樣なものに家を讓ることは出來ない、先祖へ對しても世間に對しても其れでは餘りに親の威光を蔑にすると云ふものだから、鶴代に相當な養子をして相續させると、申すのです、弟は僕も其れが可いと思ふと、まるで他人のことでもあるやう平氣な顏して居りますので、手の着けやうも無いでせう、妹なぞは最早自分が此の家の相續人に決まつたやうに思つて、兄を兄とも感じない樣子ですけれど、私の身になりますれば、其れでは餘りに弟が可哀さうにも思はれますので、小兒でも殖えない中に一日も早く彼の女を離縁して、元の孝一にして遣りたいので御座います、其れには石田さん、貴郎より外に忠告をして頂く方は御座いませんので、實は私から手紙を差上げようかと、幾度も考へたので御座います、今度貴郎のお出で下すつたのは私の身に取りますと、天の御惠で、本當に斯樣な嬉しいことは御座いません』

君代さんは如何にも嬉しさうな樣子だ、僕は仕方が無いから『成程』と腕を組んで俯いて居た、

『先刻も弟は「是れが妻だ」なぞと御紹介申して

居りましたけれど、私共の身になつて考へて下さいませ、本當に顏から火が出るんで御座いますものね、石田さん、如何して弟は彼樣な墮落して仕舞つたんで御座いませう、矢張り、あの、失戀の結果とでも言ふんで御座いませうか』

『さあ』と僕も實に返事に困つた、

僕も無言、君代さんも無言、

緣側に沿うた方の障子が開いた、狩野が紅く鮮かな湯上りの面に笑傾けて入つて來た、

君代さんも驚いて顏を上げたが、直ぐに氣を變へて嫣然と笑つた『如何したの、孝さん、相變らず長湯だと、今も石田さんが笑つて居らしつたんだよ』

女と云ふものは、實に洒啞々々として謔を吐くものだと、僕は君代さんの顏を見た、

『失敬々々』と狩野は笑ひながら座に就いた『風呂の中で眠つて仕舞つたものだからね』

『呆れて仕舞ふのね、お客樣を置き放しにして湯の中で寐るなんて』と君代さんは心から呆れたやうな顏、

『しかし姉さん、湯の中で寐る程好い氣持のものはありませんよ、貴女も一度やつて御覽なさい』と狩野は眞面目なものだ、

『一寸ですよ、私、風でも引かうものなら大變だもの、ねえ、石田さん』と僕を味方に引き込まうとする、

『僕には所詮其樣な餘裕がありません』と體よくお斷り申したが、何と受け取つたのか、『私だつて然うよ』と最早僕と一味徒黨の口振だ、

『畢竟未だ趣味に觸れないからですよ』と狩野は笑ふ『身も心もヌク〳〵と暖まりながら夢を見て居るんだが、僕等が母の胎内に居た時も、丁度あの工合だつたらうと思ふんだ』

僕は不圖一種奇怪の感動を覺えた、恰も千萬年以前の紛失物の消息を聽いたとでも言ひたいやうな、妙な感動を覺えた、

『ほんとに石田さん、田舍漢は氣樂で困るんですよ』と君代さんは眉を顰めたが『さぞ、お腹がお空きなさいましたでせうね』と言ひながら、小急ぎに立つて行つた、

君代さんの足音が消えると、狩野は濡れた頭を撫でながら『飯も食はない先きから彈劾とは、恐縮した』と笑ふ、

『聽いたのか』と僕は彼の顏を見た、

『隣室の前までは來て居たが、餘り姉の攻撃の劇烈なので、僕も躊躇して居た』

『然うか、いや、檢事の論告は最早一應聽いたから、今度は被告の訊問だ』

『訊問が無くとも、進んで自白したいと思つて居るんだよ』と、顏見合せて呵々と笑つた、

第八

愈々膳が出た、なか〳〵に氣取つた御馳走だ、膳の端には盃がフセてある、君代さんが自ら德利を執つてお酌を勸めるのだ、

僕は驚いた、僕は酒を飮む、が、大抵手酌だ、宴會ででも無ければ、僕は女に酌をして貰ふことが無い、女で酌をするのは、藝妓か料理屋の女中に限られて居るやうな感じが僕の胸に在る、從つて酌をする女は、婦人の貞操など云ふことを蹂躙して居るものだと云ふ先入の感じが在る、僕は今君代さんが德利を執つて控へたのを見て、恐怖心に襲はれた、

『御亭主役だから』と言ひながら君代さんは先づ德利を狩野へ向けた、

『僕はドウせ飮みませんから』と狩野は言ふ、

『受けるだけお受けなさい』と君代さんは言ふ、

恐縮の態で狩野は酌をして貰ふ、

僕はヂッと見て居たが、厭な氣がして仕方が無い、

今度は僕の番となつた、『構ふものか、此の謔吐き女』と云ふ聲が何處かでする、僕は無遠慮

に酌いで貰つた、酌の手振の巧みなので、君代さんに對する輕蔑心が又ムク／＼と衝き上つた、

『田舍造りですから、東京の御口には合ひますまい』と君代さんは微笑む、

成程、少し變な香はするが、然しナカ／＼好い酒だ、寒い風に晒され、熱い風呂に蒸された空腹へ、濃い酒がズウと下りて行く、高い香が五臓六腑にジワ／＼と浸み渡る、

膳の側に、蒔繪の大きな黒椀が、麗々しく朱盆に載せてある、僕は何だかと思つて居たが、酒を飲まぬ狩野は、先づ其の蓋を取つた、南瓜の煮たのだ、何だ、南瓜の蒔繪かと思つたが、今日は冬至で、南瓜を食ふのが古い習慣だと云ふのだ、僕も食つてやつた、

『其れは御儀式に付けたんで御座いますよ、殿方の召しあがるものでは御座いませんけれど』と君代さんが言ふ、

『なに、女方のものでも何でも僕は食ひます、僕は豚ですからな』と僕はワザと聲立てて笑つた、

『豚は孝一のことですよ』と君代さんも笑ふ『此のまあ肥つたことを御覽なさいませ、ですけれど、石田さんは以前よりもお痩せなすつたと思ひますわ、ねえ、孝さん』

『然う、少し痩せたやうだね』と狩野は、ムシャムシャと食ひながら言ふ、

『然うでせうか、では豚ぢや無くて、狼ですか』と僕は言つた、

ホヽヽと笑ひながら君代さんは酌をして呉れる、

『君は禁酒したのかい』と僕は飲みながら狩野を見た、

『偏屈なことばかりして、仕方が無いんで御座いますよ』と、君代さんは、面を顰めた『父が留守で御座いますのに、弟が酒を飲まないと申すのでせう、人様のお出で下さつた時など、何時でも私が困つて仕舞ふんで御座いますよ』

『貴女、召しあがりますか？』と僕は目を見張つたが『ぢや、一つ差上げませう』と盃を突きつけた、

君代さんもサスガに顏を赧らめたが、『ですけれど、マンザラ相手の無いのも、おいしく無いさうぢやありませんか』と言ひわけしながら受けた、

僕は例の手酌流に酌いでやつた、

唇をスボめて飲む樣子を見つめて居たが、餘程慣れたものだ、彼の遠藤と毎晩飲んだのだなと僕は思つた、

『田舍に居て、男の酒を飲まないなんて、交際上どんなに困るか知れないので御座いますよ』と言ひながら君代さんは盃を返した、

『否や、僕も禁酒黨は賛成です』と僕は極めて無愛想に言うてのけた『酒なぞ飲むのは馬鹿野郎のことです』

斯う言ひながら僕はグイと呑んだ、

『餘程、手が上つたかね』と狩野が言ふ、

『手が上つたも下つたも無いのだ、飲んでも飲まなくても如何でも可いのだ』

『好い上戸で居らつしやいますのね』と君代さんが言ふ、

『否や、其の代り飲むと大變です』

『如何なさいますの』と氣づかはしげに君代さんは僕の顏を見た、

『甚だ不體裁な話ですが、其場に倒れて仕舞ふのです、倒れて仕舞ふまで飲むのです、否や、倒れて仕舞ひたい爲めに飲むのです』

『結構ぢやありませんか』と笑傾けながら君代さんは切りに酌いで呉れる、

遣つたり取つたりして居る中に好い工合に醉が發して來た、君代さんの目縁もホンノリと美しく紅くなつた、

「さあ、召しあがれ」と君代さんが勸める「御遠慮なくお倒れなすつて下さいませ、ですけれど御介抱申す方が居なくて、お困りですわねえ」と微笑む、

「どうせ、淫婦の唾吐きだ」と猛烈の叫びが心の底に響いた、

僕の眼が如何な厭な光に燃えたであらう、

君代さんは徳利を持つて立つて行つた、

僕は熱い呼吸を吹いて睨めて居たが、氣が付いて見ると狩野は胡坐をかいて、腕を拱いて俯いて居る、

僕は冷りとした、氷の刃を刺されたやうに、靈魂の底から冷りとした、

僕は此の久し振りに逢つた親友の目の前で、其の姉を弄んだのである、

僕は實に堪らなくなつた、——僕は褞袍を脱いで、座敷の隅へ抛りつけた、

『如何したね』と狩野が靜かに顔を上げた、

其の柔しい眼に視られるのが恐ろしくて堪らない、

『熱くて仕方が無いから』と言つて顔を横にしたが、冷たい汗が額からジト〳〵と落ちる、天井にも欄間にも、何か鋭い眼があつて、チッと睨んで居るやうに見える、

君代さんは新しい徳利を手にして嫣然として入つて來た、

僕は肉も骨も鳴るやうに慄へた、

君代さんは、自分の前にあつた盃を取り上げて左も心地よげに僕に差した、僕は受けない、飯を呉れろと固くなつて懇願する、

「何故です」と君代さんは輕快に笑つて不審がる「其れでは、今仰しやつたことが譃になるぢやありませんか、お酌が惡いから可けませんけれど、折角の良い燗ですから召しあがつて下さい、そして御遠慮なくお倒れ下さいませ、孝一でも誰でもお寢床へお連れ申しますから」

が、僕はドウしても再び手に取らない、

『姉さん、石田君は遠慮なぞしないでせう』と狩野が側から口を添へた、

君代さんは甚だ不滿の面地であつた、

飯が濟む、膳が下る、

すると、お母さんが弱々しい體を、靜かに入つて來られた、『山家は何も召しあがるものもありやせんで』

僕は誠にキマリが惡い、此の酒の顔を見られるのが苦しくて仕方が無い、

「お母さん、今晩は來らつしやらなければ可いに、石田さんもお疲れでせうもの」と君代さんは甚だ慳貪に言つた、

『ほんに然うだつたの』と、お母さんは、左も惡いことでもしたやうに目色に詫びて、早や立ち掛けさうな樣子、

「否や、お母さん、可いですよ」と僕はあわてて引き留めた、

「然うでやすか、では少々お邪魔を」と坐り直したが「寫眞でお目に掛りましたよりは、少しお痩せなされましたやうに、お見受け申しますが、なう、君代」と娘の方へ顔を向ける、

『其りや、お母さん、お仕事がお仕事だから氣をお使ひなさるんですもの』と君代さんは言ふ、

『然うだの』と、お母さんは合點いた「御覧下さいまし、孝一は斯樣に眞黒に肥りまして、嘸お見違へ遊ばして下さいませうな」と笑ふ、

『大袈裟なことを、お母さん』と狩野も笑ふ、

君代さんは厭な顔して居る、

「斯樣な百姓になつて仕舞ひましてな、貴方樣は結構で居らつしやいます」と、お母さんは僕を見上げた、

僕は恥かしくて仕樣が無い、

其れから、お母さんは、僕が從軍した時、蔭で心配したことを語られた、兵隊と違つて戰爭をするので無いから、危險も無いやうなものの、外の

事と違ふから、如何な間違ひが無いとも限らぬ、其れで僕の戰地の通信が新聞に出たと云ふことを聞いては、まあ可かつた、御無事で居なさると、安心して喜んだと、其の溫和な眼に涙を浮めて語られる、僕は實に嬉しく思つた、

此村からも大勢戰爭に行つて、死んだものもあり、負傷したものもあるが、歸つて來たものは皆な勇ましい話ばかりして聽かせて、戰地に居る間は、まるで鎭守の祭禮の時か何かのやうに喜び立つて居るものらしく言ふが、本當に其樣なものか如何かとお母さんは眞面目に尋ねる、

君代さんは、お母さんと僕とを等分に見て、危險さうに默つて居る、

『皆な其樣な話するんですか』と僕は言うた、

『然うでやす、誰も彼も皆な同じやうに然う申して聽かせやすが——』

『生きてる奴だから其樣なこと言ふんでせう、殺されたものに聽いて見ると、一番能く解りますよ』と僕は答へた、

『殺されたものにでやすか』と、お母さんも變な顏、

狩野は柱に凭れて笑つて居る、

『そんなお話は又ユックリとお聽きなすつたら可いでせう』と、君代さんは制へて仕舞つた『今日は石田さんも疲れておいでなさるんですもの』

『本當にの、老人は誠に氣が付きませんで』と、お母さんは甚く詫言うて、靜かに立つて戻つて行かれた、

あゝ、好いお母さんだなと、僕は切りに思つた、

『本當に、君、寢給へ』と狩野が起ちかけた『君の室が定めてあるのだ、案内しよう』

『私がお連れ申すから可う御座んすよ、其れよりも孝さん、貴方も行つてお寢みなさい』と君代さんが言ふ、餘程不機嫌な顏色だ、

『ぢや、宜しく願ひます、君、明朝』と狩野は自分の所へ別れて行つた、

君代さんは、己が顏を洋燈に照らして、暗い緣側を曲り廻つて僕を導く、雨戸の隙間洩る夜風が寒い、洋燈の火と共に君代さんの鬢が搖れる、

僕の起臥しの世界に宛てられたのは六疊の別室だ、

『母家の騷も此處へは屆きませんから』と君代さんは言ふ、

室の眞中に寢床が厚く設けてある、雪のやうな敷布が覆うてある、僕の衣服も羽織も皆な疊んで帽子と共に床の間に載せてある、外套は柱の釘に掛けてある、常に人の住まはぬ室なので何處となく厭に冷たい、

『本當に遲くまで御迷惑で御座いました』と改まつた口上、先刻の君代さんとは全く別の人だ、

僕は甚だ手持無沙汰に坐つて居た、

君代さんは背を見せて有明に火を點して居たがやがて向き直つて、『御ゆつくりお休み遊ばせ』と嚴肅に挨拶して、しとやかに障子を閉めて歸つて行く、

洋燈が無くなつた、有明の影がボンヤリと屏風に映す、室が暗くなつたと共に、急に寂寞を感じた、遠い小島に只一人置いて行かれでもしたやうな心細さを覺えた、僕は寢衣を持つたまゝ、障子傍に立ち寄つて耳を澄ました、上草履の音が一足毎に遠くなつて、やがて急に消えて仕舞つた、今來た緣の角を曲つたのであらう、

絹夜具の上にフハリと坐つたまゝ、僕は茫然と考へて居た、

カチリ〳〵と夜廻りの拍子木が響く、

第九

甚だ寢苦しき一夜であつた、うと〳〵としたか

と思ふと、直きに怖い夢に襲はれる、驚いて眼を覺ます、邪念が浮ぶ、幻影が動く、心を叱り身をひねつて、やがて漸く眠れたかと思ふと、又直きに夢に覺まされる、年中の一番長いと云ふ夜を四度、五度身も魂も綿のやうに疲れて仕舞つた、

不圖又眼が覺めて見ると、夜は既に明けて居た、障子が明るい、何時の間にか雨戸が開けてある、少しも知らなかつた、あわてて僕は飛び起きた、昨夜の緣側を辿つた、天が曇つて居る、胸一杯に冷たい空氣を呼吸した、疲れた手足に力が回復する、考へて見ると昨日一日と云ふものが全く夢のやうだ、否や、斯うして居るのが矢張り夢のやうな氣がする、

夜見たよりは大した家の構だなど思ひながら行くと、バタリ君代さんに出逢つた、

『あら、最早お目覺め、大層お早いぢやありませんか』と嫣然笑ふ、

君代さんは最早今朝のお化粧が濟んだと見えて、髮も鬢も一毛のホツレも無く結びて、顏にも眼にも新しき活氣が充ち滿ちて居る、僕を洗面場へと案内して呉れた、都會風に萬事整つて居る、今朝既に誰か顏を洗つたのであらう其處らが濡れて、石鹼の香がプン〳〵する、齒磨だの、楊枝だの、手拭だのと、君代さんは萬事引き取つたやうに親切に世話して呉れる、

『只今、お湯の熱いのを持たせて、よこしますから』と匆々と行きかける、『否や、僕は水が可いんです』と言ふと、振り返つて、『東京と違つて、お寒う御座いますから』と、小急ぎに行つて仕舞つた、

僕は覺えず赤面した、僕は昨夜甚しく君代さんを辱しめたのである、談話の際にも、酒飲む時にも、否な、實に夢の中に於いてさへも甚く之を辱しめた、が、目覺めた朝の今見ると、全く違つた新しい感が起つた、非常に忠實な親切な所のある人だ、狩野に對しても實に限りなき愛情を持つて居る、狩野の心を理解することの出來ないのは、境遇や、社會や、教育や、凡て外部から注入された時代の知識の爲めなので、何も君代さんの品性の罪と云ふのでは無い、弟嫁に對する殘酷な放逐の計畫でも然うだ、家に對し弟に對する非常な忠實な心から出て來たので、是れは凡て舊思想の責任だ、君代さんは高等の教育を受けた新時代の婦人だ、が、其の教育其物が舊思想なのだから仕方が無い、君代さんの責任では無い、と僕は考へた、すると又離緣の疑問が浮んで來る、何が原因であつたか知らない、が、彼の遠藤と云い奴、見るからに輕薄な厭な奴だ、ドウせ、役人で立身するのだから、品性の下劣な奴に定つて居る、君代さんは獨身で居る、然るに遠藤は再婚した、君代さんだつて未だ若い、家は財産家だ、學問もある、容貌だつて、惡くは無い、否や、容貌だつてナカ〳〵立派なものだ、再婚しようと思へば、今の世の中で何の困難も無い筈だ、然るに固く獨身を守つて、家の爲め弟の爲めに犧牲になつて働いて居る、駿河臺の邸で、遠藤夫人で鷹揚にして居た時のことを思ふと、今此の僕のやうなものの爲めに、寢る世話から顏洗ふ世話からまるで下女のやうに親切に周旋して呉れるのが、何とも痛々しくて氣の毒で堪らなくなつた、成程、昨夜の酒の席では、隨分淫猥な言葉もあつた、下劣な擧動もあつた、けれど其れは其場限りで消えて居る、今朝になつて見ると、何の影も無い、

斯う考へると、僕は君代さんに非常に高い清い所あることを感じて、自分の心の醜さに、鏡にまで背を向けて赤面した、

『つまり僕が女と云ふものを能く知らない所から來た誤解ぢや無からうか』と僕は考へた『女は奸佞な厭な動物だ』と云ふ幼少時代の先入の

感情が、成長の後も主となつて、遠くから眺めて皆な同じ惡い動物だと定めて居た、君代さんに對しても矢張り然うで、初めて狩野に伴れられて東京で逢つた時から、あゝ厭な女だと思つたが、偖て斯ら近く接して見ると、想ひも及ばなかつた豪い所がある、

で、一體如何して斯樣な偏頗な感情を持つたのだらうと、自分を調べて見たが、是れは言ふまでも無く義理の伯母、卽ち僕の伯父の妻から與へられたのだ、『あゝ、僕にも生みの母が生きて居て下すつたならば――』と下らないことまで考へた、

昨日の少年由十君が股引の下に赤い脛を露はして湯を持つて來て吳れた、朝寢をして暖かい着物を重ねて、其の上に湯で顏を洗ふ、何だか相濟まぬ氣がする、が、折角の君代さんの親切を、むざ〳〵流して仕舞ふのも甚だ惡いやうな氣がするので、澤山に水を混ぜて、殆ど水のやうにして洗つた、

洗面所と接して湯殿がある、是れが「上の風呂」と云ふのだなと、一寸覗いて我が室へ戻つた、

室はもう綺麗に掃除して、火鉢には鐵瓶が盛に湯氣を吹いて居る、茶道具が並べられて、昨夜の友禪の座蒲團が敷いてある、

『如何だ、寒くは無かつたかね』と莞爾として狩野が來た、もう何か朝の仕事を終へたものと見える、手でも顏でも血の氣鮮かに耀いて居る、足袋無しだ、が、見るからに暖かさうな笑面だ、

茶を呑んで一つ二つ話して居ると膳が運ばれた、君代さんが來て給仕をして吳れる、僕は給仕など甚だ恐縮なので斷つたが、君代さんは笑つて聽かない、『こんなに多勢女の手が遊んで居ながら、遠くから態々の御珍客に、お手盛りで御飯を差し上げたなぞとあつては、其れこそ私共の大恥搔きぢやありませんか』と、まるで子供でもスカすやうな打ち解けた工合だ、

其の權のある眼に笑を含んでジロリと見られると、昨夜の陋劣な心が皆な知られて仕舞ひさうで怖い、氣のセキか、なか〳〵美人に思はれた、

『今少しで、父が歸つて來ますから、お話相手が殖えませう』と君代さんは飯を付けながら言ふ、

『御尊父は何處に在らつしやる』と問くと、澁川だと言ふ、强つての依賴で銀行の全權を預つて常に彼の地に居るのだと言ふ、

『澁川』と聽いた瞬間、僕の胸底の疑問は、解決の鍵を握つたやうに驚いた、濱さんが狩野を恐れたのは、是れだなと合點いた、

君代さんは例の達辯で、父の手柄話を色々と聽かせたが、成程々々と僕は唇の頭で受け答へして居るのみで、心は外へ行つて居た、狩野の親父と云ふのは如何な奴だらう、此の君代さんの父で、彼のお母さんの夫なんだから、五十の坂をヅンと越して居る筈だ、最早六十の山に屆いても可い筈だ、否や、最早六十の峠を越して居るかも知れない、其れが娘のやうな濱さんを弄ぶ、『不埒な奴だ』と云ふ氣がムラ〳〵と騷ぐ、すると今の今まで心の高い情の淸い美人に見えた君代さんが、昨夜にも增した奸惡な婬婦になつて仕舞ふ、昨夜君代さんを辱しめたのが、何となく濱さんの爲めに、復讐でもしてやつたやうな、滿足の念が湧く、又何か一つ弄つて遣らうかと、咽喉まで出たが、狩野の顏を見ると引つ込んで仕舞つた、

甚だ不愛想に朝飯を濟ませた、君代さんは愛嬌を殘して引き下つたが、僕は其の笑顏までが賤しげに不愉快に感じた、

僕は目を瞑つて楊枝で歯をせゝくつて居た、

『如何かしたかね』と狩野が言ふ、

『否や』と僕は輕く言つたが、『併し顏色が惡い

ぢや無いか」と狩野は心配げに言ふ、

僕は默つて居た、正直に言ふと、僕の胸中には昨日以來狩野に對して一點の黑き影が出來て居た、昨日馬車を下りて濱さんと會談する筈の希望を破られてから、狩野に對して、甚だ我儘な話だが、不快の感が沸いて居た、折角狩野が迎へに來て吳れたことさへ、何となく餘計な邪魔と云ふやうな思ひがした、濱さんは一方ならぬ恐怖を狩野に對して抱いて居た、何か祕密があるに相違無いとは思つたが、端なくも今其の緒口を提へた、久し振りに逢つた狩野に對して、懷かしさは到底言ひ盡される筈も無いが、其れでも何か薄いながらに一枚の垣が二人の間に結はれたやうな感がするのである、僕は矢張り默つて居た、

「近來君の思想が大分動搖して居るやうに見えるが如何かね」と狩野は言ふ、

「然うだらうか」と僕は目を瞑つたまゝ、

「君の文章で考へると、餘程調子が變つて居るやうに見える」

「或は然うかも知れん」と僕は奧齒でギチリギチリと楊枝を噛んで居た、

僕が取り合はない爲めか、狩野も話を進めない、

「君、如何だい、親父さんの感情は」と、やがて僕は頗る冷淡な調子で聞いて見た、

「そりや、君、相變らず大不平でね、然うね、最早不平と云ふ域を通り越して、無關係のやうな關係になつて居る」

僕は目を開いて狩野を見た、僕は非常に愉快を感じたのである、狩野は首を傾けて火鉢の中を見込んで居る、

『どうせ、君、解りやしないよ』と僕は勝利顏に言つて退けた、

「成程、僕にも多くの過失があるんだから、無理も無いに相違ないけれどね」

「なあに、君、親父なんぞに解つて堪るもんぢや無い、心配することは無いよ」

「然うばかりも言へない」

「そんな弱いこと言つて如何するんだ、構ふものか」

僕は今朝未だお母さんに挨拶するのを忘れて居た、狩野と打ち連れて母家へ行つた、姿が見えない、

で、臺所の方へ行つて見た、勝手元の圍爐裏邊に背ろ向きになつて、孫を愛して居るのが、お母さんだ、

菊野さんは、此方向きに板の間に坐つて、乳を飮ませて居る、其のふつくりと張つた乳房を、お母さんが何か言ひながら指で突いては孫に揶揄つて居られる、小兒は乳首を含んだまゝに笑つて、可愛い握拳に乳房を押へて居る、菊野さんは襟かき擴げて、其の誰にも許さぬ胸をば、祖母と孫との戯るゝに任せて居る、

第十

外を歩いて雲を眺め、山を眺め、遠い雪を眺め、近い河を眺め、目を瞑つて我が一身の行方を考へて見た、只心が熱するばかりで何も得る所が無い、濃い霧の海に漂ふ一つの小舟のやうに、方角さへも解らないのだ、

午餐の後、お母さんの炬燵で色々話した、お母さんは眞綿の紡ぎ臺を片寄せて、一語半句も聽き洩らさじとやうに、熱心に僕の顏を見つめて居らるゝ、僕は、お母さんと差向ひに坐つて居る、君代さんと狩野とが又差向ひに坐つて居る、

お母さんは切りに戰爭の話を聽きたいのだ、然るに僕は又戰爭の話をするのが誠に苦しい、現在の僕に取つては戰爭の話が誠に心苦しい、

僕の此の心の霧が一方晴れて新しい光明を認めるまでは、僕は戰爭の話をしたくない、

君代さんが又切りに戦爭の話を避ける様子であつた、其の理由は後になつて合點した、戦爭中此の近所にも何々婦人會とか言ふものが出來て、戦爭の後援をした、君代さんは其の幹事に推薦された、然るに僕が從軍記者にはなりながら、元來×戦爭論者であつたことを知つて居るから、君代さんは、僕の口から戦爭の話を聴くことを好まなかつたのである、

僕が從軍するに就いては色々狩野の世話になつた、つまり金の世話になつたのだ、僕の從軍の目的も狩野は知つて居る、戦地からも數々手紙を出したので、戦爭を實見した後の僕の感想も狩野は略知つて居る、然し戦地に於て孕まれた今の此の苦悶に就いては、我が親友は未だ何も知らない、此の苦悶が愈々内部から破壊され、根本から解決された曉でなければ、僕は大膽に戦爭の話をすることが出來ないのだ、

が、お母さんは切りに聴きたがる、僕は又此の折角の希望を無茶に拒絶するの勇氣も無い、仕方がないから、時にも場所に關係なく、ほんの少しばかり戦爭と云ふものは大抵斯様なものだと云ふお話をした、例の××隊の××なぞは、新聞や雜誌などの上で大分景氣よく×ツ事が叩き立てられて居たやうだから、斯う云ふやうな人の耳慣れて居る題目に就いて話した、愈々××隊と云ふものが定まる、明日は愈々死にに行くと云ふ前夜の哀れさ寂しさ、天幕の外に立つて耳を側てると、シインとして墓場のやうだ、只ゴツ〳〵〳〵〳〵と云ふ幽かな音がする、故郷へ送つて貰ふ記念の荷造りをして居るのだ、魂魄は既に海山遠く父母や妻子の夢に通つて、人は最早死んで居るのだ、

僕は又肉を食ひ血を飲むと云ふことが、如何に人心を鬼にするかを説く爲めに犬の話をした、軍用の爲に徴發されたり、暖氣を取る爲めに燒かれたりしたので家を失つた支那人の犬が、仕方が無いから夜陰に出でては兵士の死骸を食つた、人肉人血の味を知つた犬の群が、後には日中、生きた兵士を襲撃するに至つたことを話した、が、人でも矢張り然うだ、僕の如きも初めて殘酷な死骸を見た時には、何とも言へない悲痛な感に打たれたが、見慣れて仕舞ふと感覺が鈍くなる、戦爭のあつた晩、其處らを歩くと遠く人の苦しむウナリ聲が響く、ハッと思ふと、直ぐ足下からキャッと魂消る聲が立つ、暗に横はる死骸を踏んだのだ、既に殆ど死んで居たのが、踏まれた爲めに黄泉の境から苦悶の聲を立てたのだ、

お母さんは、涙を浮べて熱心に聴いて居る、僕が餘り弱い話ばかりするので、君代さんは大分不愉快な顔をして居た、で、僕が戦爭の無い時には死んだやうになつて居る兵士等が愈々開戦となると、まるで狂人のやうに強くなることの話をすると、君代さんはスカさず鋭く舌を容れた、「其れ御覽なさい、其れが日本人の愛國心ぢやありませんか」

然うかも知れない、が、是れは少なくも今尚ほ僕の胸中の疑問なので、未だ何とも返事のしやうが無い、

僕は默つて居た、君代さんは勢に乘つて劇しく追撃する、

『其れで石田さん、貴郎は矢張り戦爭は悪いと仰しやるんですか』

「然うです」と仕方が無いから僕は受けた、

『でも、貴郎の御通信に皇軍萬歳とか何とか書いてあつたのは如何云ふわけで御座います』

君代さんはキッと僕の顔を見た、

是れにも返事のしやうが無い、「特派員石田栞」と署名してあつて見れば、世間へ對する責任は無論僕が負はねばならぬ、否や彼れは僕が書いたのでは無い、新聞社の編輯局で×××を付ける爲めに、無斷で書き加へたのだと云ふ秘密の

事情は、僕も男兒として暴露するのは厭だ、致方が無い沈默だ、

勝利の微笑は、君代さんの眼に見えた、

ニヤリ〳〵と狩野が眼を閉ぢて笑つて居る、

お母さんは何か切りに考へて居られる樣子、

「然し君もナカ〳〵空想家だね」と狩野が矢張り笑ひながら言ふ「君は以前僕を空想家々々々と切りに攻擊したつけが、君の方が餘程空想家だね」

何を言ひ出すかと僕は薄氣味惡く彼の顏を見て居た、

「今度こそ日本とか露西亞とか云ふことを全く忘れて仕舞つて、世界の人と云ふ純粹の眼で以て、此の人類の惡戲を觀に行く積りだと云ふんぢや無かつたかね」と狩野は柔しい目をして僕を見る、決して他の從軍記者のやうに、鐵砲だの、短刀だのと、下らないものは携帶しない、ステッキ一本、筆一本で何處までも行くんだと云ふ手紙だつけが――

僕は手をもて狩野を制めた、其れを言はれると實に一言も無い、消えて仕舞ひたいやうだ、實の所僕は其の覺悟だつたのだ、現に社長にも其れを話した、が、社長も矢張り空想の一語に消して仕舞つて相手にして吳れない、そしてピストルも短刀も社長自身に整へて吳れた、僕は不承々々な顏して受け取つて歸つたが、宿へ歸ると障子も襖も嚴重に閉てつめて置いて、ピストルの狙ひを修行して見た、短刀の利れ味も覺束ないので、竊と庭を步いて宿の商賣物の植木の松に斬りつけて見た、其れでも口先では『社長の好意だから』なぞと不平顏に、實は大切にして腰に付けて行つた、斯う考へて來ると、意氣地の無い我が姿が後から〳〵と目に浮んで來て仕樣が無い、思うても汗の出るのは伯母から貰つた御守札の一件だ、伯父の家へ暇乞に行つた、伯母が大變に歡待して吳れた、そして是れは八幡樣の御守札だから肌身を離さずに持つて行けと言ふのであつた、さんざ虐められた伯母だ、八幡樣の紙札が何だ、例ならば、何か冷やかに言つて突き返して仕舞ふ所であるが、此時ばかりは妙に感じた、虐められた怨を忘れたと言ふでは無い、が、此時には虐められた記憶よりも、幼い時から世話になつた感謝の念のみが無暗に湧いて來た、父の顏も母の顏も知らない脾弱な幼兒が兎に角一個の記者として日本の文壇に立つことの出來るのは、全く此の伯父さん夫婦のお蔭であると思ふと、何一つ恩報じもせずに死んで仕舞ふのが、如何にも心苦しくて堪らない、僕が競うて從軍記者になつたのは、平生の非戰論の材料を取り集める爲めであつたが、其れと同時に流彈にでも當つて滿洲の土となつて仕舞ふやうな氣もしたのである、假りにも怨を抱いたことが、取り返しの付かぬ大罪惡に感じられて、僕は實際心に泣いた、其れで僕は其の御守札を貰つて來た、歸つて考へると如何にも馬鹿々々しいので、且つは平生の議論の手前如何にも恥かしく、便所へでも捨ててやらうと持つて行つたが、偖て何だか變な氣がして仕方が無い、罰でも當るやうな氣がして仕方が無い、すると、「何だ、迷信」と何處かで叱る聲がする、又殺されでもして死體を檢査された時、無神論者が偶像の守札を所持して居つたと言ひ傳へられては、死後の大恥辱だと言ふことも考へて見た、が、何分にも心中に一大不安があつて、引つ裂くことも出來ない、捨てて仕舞ふことも出來ない、僕は又オメオメ室へ持ち歸つて、財布の底へ竊と隱した、僕は戰地から歸るまで矢張り此の紙札に何か神祕な妙智力が籠つて居るやうに實際感じて居た、――あゝ、一切のこと、僕は只議論して居たのだ、

「戰爭が惡いと仰しやいますけれど、そりや、誰

にしても戰爭が善いとは申しますまいけれど、若し外國から仕掛けて來た場合には、只戰爭は惡いものだと云うて手を引つ込めて居ることは出來ないでせう』と君代さんは益々攻め掛けて來る、

是れに應對するには、僕の心が餘りに疲れて居た、僕の目は茫として、何處にも焼點と云ふものを結んで居ない、

『姉さんのと、石田君のとは、議論の立脚地が違つて居るんですよ』と、狩野が應援に出て吳れた、

『假令立脚地が違ふにしても、石田さんだつて、國家と云ふものをお忘れなすつたわけぢや無いでせう』と今度は狩野に食つて掛る、

『其處に、然う無造作に言つて仕舞へない問題があるんですよ』と、狩野は恰も狂へる狼に對する象のやうに極めて穩かに扱つて居る、

『孝さんなどは、てんで話になりやしないわ、右の頰を打つものがあつたら、左の方も向けよなんて、其樣なことは人として出來る筈が無いんだもの』と君代さんは狩野をまでも自ら敵に引き込んで戰ふのだ『私、石田さんのはまさか然うぢや無いと思ふわ、だつて御覽なさい、石田さんの新聞の社說を見ると、彼の頃も斷えず熱心な主戰論であつたし、近頃だつて、只過度の軍備擴張を惡いと云ふので、あながち軍備に反對だと仰しやるんぢや無いもの、孝さんのやうに、軍備と云ふものが罪惡だなんて、女だつて言はない弱い議論とは、まるで違つて居なさるんだもの』

『新聞社の社論と石田君一個の意見とを混同しては無理ですよ』と狩野が言ふ、

『だつて、石田さんも社員で居らつしやるんでせう、社論に服從するのが社員の義務ぢやありませんか』

論じた所で仕方が無いと言ふやうな顏して、狩野も默つて仕舞つた、

僕も甘んじて負けて、沈默して居たが、然し君代さんの論鋒は、實に銳く僕の肺腑を貫いた、

『ほんたうに男子は我儘で仕樣が無い』と、君代さんの眼は實際血走つて居た、

『媾和の結果が傳はつた時、將校でも兵士でも皆な屈辱の條件に憤慨したさうぢやありませんか』と君代さんは、又僕の方へ顏を向けた、

『然うですかねえ』と僕は餘儀なく受け流したが、實際僕は顏を擡げるさへも大儀な程に疲れ果てて居た、

『然うですかねえつて、貴郞、彼の時未だ戰地に居らしつたんぢやありませんか』

『あゝ、然うでした』と我ながら全く夢の中に物言ふやうだ、

君代さんは、ヂッと僕を睨んだ、あゝ怖い顏だと思ひながら、僕の心は自分のことばかり考へて居た、

鶴代さんが郵便物を一束持つて來た、新聞がある、雜誌がある、封書がある、端書がある、新聞の中には僕の社のもある、旅に居て我社の新聞を見る程嬉しいものは無いのであつたが、此時、僕は非常に恐ろしい氣がした、狩野は先づ其れを僕の前へ出して吳れたが、僕は窃と押し遣つて避けた、手紙の中に僕に宛てた一通が混つて居た、見たことのない書風だ、差出人の名が無い、慥かに女の手だ、僕が此處に居ることを知つて居るものは無い筈だ、而も女？――僕の胸は踴つた、僕は其れを懷中に入れて仕舞つた、

直ぐに立つのも變なので、お母さんから貰つた菓子など食べながら、二つ三つ話の相手をして居たが、頭がまるで空洞になつて居るので、トンチンカンの受け答へばかりして居る、

君代さんの目が、僕の心臟の動搖までも觀破つて居るやうに見えて、不安で堪らない、

狩野は、お母さんに、新聞の講談の續きを讀んで聽かせて居る、其れが終むのを機會に僕は立つた、

第十一

急ぎ我が別室に立ち戻つて封を切つた、果して濱さんだ、

思ひも設けず逢ひ見たことの嬉しさ恥づかしさが、細やかに書いてある、歸つて後も夢のやうに茫として、只昔のことのみ、考へ出して、思ひ儘に泣いたなど書いてある、如何にも本意ないお別れであつたが、歸途に立ち寄つてやると仰しやつた御一言を力に、今から其の日をのみ御待ち申して居ると書いてある、讀んで行く中に全く手紙の底へ引き込まれて仕舞ふやうに感じた、其れから最後に斯う書いてあつた、

孝一様や御家内様から私のことに就いて自然御聞き込みに相成候御事と存じまするが、其れを思ふとお恥づかしいやら恐ろしいやらにて、いつそ死んでしまひたい程に候へども、是れにも色々こみ入りたる次第有之、其れにつけても是非是非御目もじの上、苦しき胸の中御聞き上げ被下候様願上まゐらせ候、厚顔しき女と御さげすみの程も御恥づかしく候へども、昔の御なじみ甲斐に、廣き世界に頼りすがる神も佛もなき身の上哀れと思召し、何卒々々今一度御顔御見せ被下候はゞ、御恩の程死んでもゆめ〳〵忘れ申間敷、

廻らぬ筆の何も彼も御目もじの上と、

もと

「二十五日夜」としてある、眠らで書いたのであらうか、僕は何度も〳〵繰返して讀んだ、

此の手紙に依つて見ても狩野の父と濱さんとの關係は明白だ、が、其れが眞實愛情の關係で無いことも推測される、歸途に濱さんに逢はうと言ふ決心は愈々確くなつた、其れと共に、狩野等が濱さんに就いて、否や、濱さんでは無い、叶屋才六と言ふ田舍藝妓に就いて、何と感じて居るだらうなどと、切りに考へて見た、

午後から寒さが厭に身に浸みるやうに感じて居たが、空が次第に曇つて來て、夕方には雪になつた、明日は赤城山へ上らうなどと狩野と話したのだが、駄目らしい、

晩飯の後、狩野と我が別室で、置炬燵に差向ひてシンミリと物語りした、

菊野さんのことも聞いて見た、元は此の村で中邊に暮らした家の娘だと云ふ、一人の兄が兵隊で放蕩を覺えて歸つてから、田地は皆な人手に渡つて仕舞ひ、まだ年はも行かぬ妹を、茶屋奉公にでも賣つて仕舞ふ見幕なので、兩親が心配の餘り、狩野へ頼んで奉公に寄越したのだ、母親は家の零落を苦勞にして死んで仕舞つた、兄と云ふのは行方が知れない、父は日雇に歩いては一人の口を僅に糊して居たが、是れも四年前の秋、川普請の人足に雇はれて働いて居た際、弱つて居る老人の足踏み滑らして、水死して仕舞つたと云ふのである、

『兄と云ふのも、決して惡い男ぢや無かつたがね』と狩野は言ふ、『小學校でも成績の可かつた方だし、其れに以前は村内でも評判の稼ぎ人だつたのだ、其れがガラリ變つて歸つて來たのだ、實に氣の毒さ』

狩野が、其の哀れな孤兒の境遇に動かされた徑路が目に見えるやうだ、

『彼女も讀書が好きなので、僕が夜々教へて遣つたのだ――』と言ひ掛けて狩野は默つて仕舞つた、炬燵の上へ肱を突いて、頭を載せて俯いて居たが『――百姓のことに掛けては、僕の先生さ』と獨語のやうに言うた、

『歌が好きでね』と狩野は顏を上げた、

『歌？』

『俗謡だ、興にまかせて謠ふんだ』
『ぢや、詩人だな』
『然う？――寧ろあれが本當の詩人と云ふのだらうね、初めは僕が添削をして見たのだ、が、可けない、僕が手を入れると殺して仕舞ふ、彼女の唇から出たまゝのを聴くと面白い、成程と僕は初めて會得したよ』
『然う褒めてばかり居らずに、一つ聴かせ給へ』
『其れは少し閉口だね、――何時か又彼女の唇から直接に聴いて呉れ給へ』と狩野は頬を紅らめて子供のやうに笑つた、
サラ〳〵と雨戸に當る雪の音が段々高い、狩野の影法師が大きく壁に映つて居る、狩野は何を考へるのか、又額を左手に載せて目を瞑つて居る、
僕は先刻から幾度も思ひながら言ひ後れて居たが、思ひ切つて唇を開いた、
『君、澁川の才六と言ふ藝妓を知つてるだらう』
僕は極めて無造作に言つてのける積りであつたが、妙に舌が硬ばつて誠にギク〳〵と角立つた、
狩野は默つて顏を上げた、そして自分の空耳では無かつたかと云ふやうな眼をして僕を見た、
『叶屋の才六と云ふ女を、君、知つてるだらう』と、今度は大分滑らかに口を出た、
『然う、知つて居ると云ふでも無いが――』と、狩野は言ひ淀んだ『其れが君、如何したと云ふのか』
狩野がヂッと見つめるので、僕も直ぐには切り出せない、
『昨日、澁川で馬車から下りた、君、見たらう』
『うム、見た、君と一所だつたのか』
『前橋で乘り合はせたのだ』
『前から知つて居るのかね』
あべこべに狩野から攻め掛けられる、
『昔、知つて居た女なので、不圖久し振りで逢つたのだ』と仕方が無いから有體に言うた、
『如何して僕が知つて居ると云ふことが判つたね』と狩野は問ひつめる、
『何處へ行くと聞くから、僕は君の處へ來ることを話したのだ』
『それで何か話があつたのかね』
『否や、何の話も出なかつたが、非常に君を恐れて居たから、何か事情があるんだらうと思つたのだ』
狩野は暫し腕拱いて考へて居た、
『實は少し僕の口からは言ひにくいことがあるので』と又口ごもつたが『君が昔時知つて居る女と聞けば幸だが、一體、君、如何云ふ成立の婦人かね』
僕は正直に話した、彼女が藝妓に賣られたまでの、僕の見た儘を、かい摘んで話した、
『曾て君にも話した事がありはせぬか知ら？』
『成程、言はれて見れば、其様な話を聴いたこともあるやうな氣がする、然うかねえ』と狩野は喫驚して居た、『――實は、其の、父が關係して居るので』と眞紅になつた、
『そんなことだらうと僕も推測して居た』
『それで色々の人が、色々のことを言うて來て呉れるので――君、なか〳〵有名な婦人ださうだ』
『有名？』
『千葉から、宇都宮、其れから上州へ流れ込んで來たのださうで』
『否や、最初は慥か水戸へ行つたのだ』
『然うかね、ぢや、愈々關東を荒れ廻るのだね、何でも先きには前橋へ買はれて來たのださうだが、抱主も其の好くない評判に氣いて、直ぐ今の處へ賣り飛ばして仕舞つたと云ふことだ』
好くない評判とは誠に氣掛りだ、

狩野は續いて言ふ『其れで僕の親戚の中にも心配して、態々色々言ひに來て吳れるものもあるけれど。』

『惡い評判て何だい。』と僕は堪へず、吻を容れた、

『何でも行く先々で、財産のある奴を騙しては、其の妾になる、そして直きに破產させて仕舞ふ、其れから他へ高飛びをする、其れが爲めに幾人死んだり狂氣したりした者があるか知れないと言ふことだ、財產家の而も戶主で無ければ客にしない、是れが彼女の特色ださうで、其れかと言つて、自分が別に貯蓄するでも何でも無い、妙な女だ、何か仔細のある婦人だらうと獨りで考へて居たのだが、君の話で了解した、——然うかね。』と狩野は深く肯いて居た、

聽いて居る中に僕は戰慄した、變化すればするものだと、恐ろしくもなり、氣の毒にもなり、可哀さうにもなり、戀しくもなつた、

僕は今日來た手紙を出して狩野に見せた、

狩野は一心に讀んで居る、

僕は又自分のことを考へた。「故鄕」と云ふことに就いて考へ始めた、

僕は故鄕と云ふものゝ無い人間だ、故鄕と云ふ觀念の無い人間だ、僕の父と云ふのは旅から旅への役人の身であつた、大阪から丹波へ轉任の途中、或る村の旅人宿で、母は俄かに產氣づいて、僕は月足らずにて生れたのだと云ふことだ、懷姙中に無理な旅行が原因で、母は僕が二歲の時に死んで仕舞はれた、其れから僕は父の兄なる伯父の手許に引き取られて、伯母さんの乳を分けて貰つて育てられたのだ、父等の故鄕は信州だ、が、伯父も矢張り役人で、其時は既に東京に居たのである、僕の五歲の時、父も亦病んで死んで仕舞つた、其れまでは月々僕の養育料を仕拂つてあつたのだが、其れから後は一切伯父の厄介者となつたのである、が、僕は成長の後に斯う云ふことを聽いた、僕の父は相當の資產を遺して死んだ、役人の身で住所不定のことだから、不動產と云ふものは無かつたが、公債や貯金やで相當の遺產を置いて死なれたのだと云ふことを聽いた、種々綜合して考へて見ると、僕の父と云ふ人は、非常な勤儉な人らしく思はれるので、死なれた時に相當の遺產のあつたと云ふことは眞實らしい、伯父は此の問題に就いて針の孔ほども口を開いたことが無い、伯母は何角につけて、僕の父の負債を遺して死んだ爲めに、種々迷惑を着せられた上に、僕と言ふ厄介者まで背負ひ込んだことを、誠しやかに口やかましく話し立てた、僕が他から聽いた所と、伯母の人に物語る所とは全く反對だ、何れにしても僕は伯父夫婦の厄介者に相違ない、僕を厄介者だと云ふだけならば、僕は忍耐する、が、其れが爲めに僕の父を嘲り、延いて僕の母を誹るを聽く每に、僕は實に口惜しくて堪らなかつた、伯母の品性が何だ、伯母の平生の擧動が何だ、自分よりも少し羽振りの可いものには猫撫聲で阿媚つかる、弱いものと見ると、大きなことを言つて殘酷に威張り散らす、直ぐに剝げる謔を吐いて洒啞々々として居る、あの可い年をして居ながら、白髮を染める、薄化粧をする、見たばかりでも胸の惡くなるやうな下劣な女だ、僕は伯母の言ふことを一切信じない、だから僕の父の遺產一件に就いても、僕は伯母の言ふ方が虛僞だと信じて居た、僕の父は實に僕と言ふものの爲めに貯蓄されたのだ、然るに今のやうに伯父夫婦の厄介になつて居るものと見えることは、地下の父に對して相濟まぬことだとも考へた、父の死去の際、一切の處置は此の伯父と、僕の母方の祖父と兩人して取り定めたと云ふことだが、祖父は疾の昔に同じく此世を去つて仕舞つた、幾度も伯父に詰問して見ようと思つたが、斯う出後れた今日となつては、

伯父も勢ひ伯母の日頃言うて居るやうなことを辯解する外はあるまい、兎に角眞實の伯父だ、父の兄だ、赤い面させるのも厭だ、可し〳〵、何處までも純粹の厄介者で行つて遣らう、伯母のやうな者を相手にするのは此方が馬鹿だ、と、斯う腹を定めて仕舞つたのは、僕の十四歳の時であつた、が、伯母に取つて、僕と云ふものが目障りで仕樣が無い、其處で男の子は家にばかり置いては爲めにならないとか何とか勝手な理窟を付けて、吝な充てがひ扶持で、實は逐ひ出しを食はせたのだ、僕は伯母の命令で小田垣の監督の下に學校へ通つた、放蕩者の監督を受けたのだ、恐ろしい話だ、然うだ、其時濱さんの二階を借りて居たのだ、

氣が着いて見ると、狩野は手紙を繰返して切りに考へて居る、

僕は又思を潛めて自分の身の其の後を追ふ、

僕は實に人間と云ふものは、何處まで得手勝手なものかと腹が立つたのである、僕の學問の成績が少し可いと云ふので、伯母はお佐世さんを僕に妻はさうと企てた、是れまでに金を掛けたものを、手離して仕舞ふのは勿體ない、其れよりも自分の娘の婿にして、生涯自分等の所有物にしようと云ふのだ、其の腹がギロ〳〵と見えて居た、お佐世さんか、僕は畢竟お佐世さんの乳の幾割を惠んで貰つたのだ、從姉妹ではあり乳姉妹ではあるが、實に身慄ひだ、母子とは言ひながら、彼まで氣質の似て居るものだらうか、其れで居て母子仲が頗る惡い、二言目には目に角立てて罵り合ふ、其の都度お佐世さんは僕に向つて母親の讒訴をするのだ、お佐世さんはスッカリ最早女房氣取りで居たが、僕は嚴格に構へて、笑顏一つ見せたことが無かつた、結婚なんて話に僕は曾て耳を貸さなかつた、僕は學校を出るまでの辛抱と、何事にも口を開かなかつた、——伯父には何と無く氣の毒にも思つたが、伯母や、お佐世さんの自由にばかりなるものでも無からうぢや無いか、女と云ふものは、小さな慾ばかり深い、實に詰らない、厭な動物だと思つた、

『君、歸途に逢ふのかね』と狩野に言はれて、僕は現實に返つた、

『うム、逢ふ約束だから、立ち寄つて遣らうと思ふ』と僕は言つた、

『成程』と狩野は考へて居る、

『事件は餘程進行して居るのか』

『然う、此の暮に落籍でもさせるやうな噂だつたがね、其れは中止になつたやうだ、女の方から何か故障を持ち出したとかでね、他の話だから慥かなことは解らないが』

『ぢや、皆さんも心配だらう』

『まんざら心配せぬと言ふでも無いがね』

『姉さんなぞ、嘸ヤキモキして居なさるだらう』と僕は竊に君代さんの苦勞に興味を持つた、

『否や、姉は平氣なものさ、つまり父を信じて居るのだ』と狩野の脣邊にも聊か嘲笑の氣が見えた、『成程、人の世は大きな戯曲だ』

狩野は目を瞑つた面を上げて、微笑を湛へて何か見て居るらしい、

夜が何時しか更けたので、狩野は歸つた、

雪はサラ〳〵と盛に降つて居る、

枕に就いたが、眼も心も冴え〳〵とする、濱さんの手紙を又讀み返して見た、

第十二

翌朝になつても雪はまだ降つて居たが、正午近くになつて天は初めて晴れた、殆ど一尺から降つた、奉公人總出になつて道を開ける、僕も雪掻を持つて手傳ひをした、否や、皆な邪魔をした、

皆な平氣に働いて居る中に、僕は腕が痛くなる、腰が痛くなる、幾度も腰を伸ばしては休

む、が、冷たかつたのが次第に暖かになる、ビッショリ汗になつて、全身さながら火のやうに熱して來た、

プツリと下駄の鼻緒が切れた、面倒くさいから足袋跣になつた、足の裏から冷や〳〵するのが好い氣持だ、

脛を沒する新雪をズブリ〳〵と少し高みへ上つて眺め廻す、野も山も森も家も眞白に埋もれて、薄日に美しく輝く底を、綠の色濃く利根川が流れて居る、一昨日の夕暮、舟で渡つた時には、さながら死の河でも越すやうな氣がしたが、今見れば自分の求めて未だ得ざる深い祕密が、彼の水底を通つてでも居るやうに思はれる、僕は雪の中に立つたまゝ、何事も忘れて眺めて居た、

やがて家に歸つて穿き替への下駄を提げて直ぐ其の足で井戸へ行くと、手拭を眉深に被つて、菊野さんが芋を洗つて居る、

「ま、お寒御座んしたらう」と嫣然と見上げて笑つた、

僕は實に美しいと思つた、

裳を高く端折つたまゝ、足袋を脫ぎ棄てると、菊野さんは、直ぐ深い井戸から水を汲み上げて吳れた、雪に汚れた足を洗ふ、

菊野さんは、大きな釣瓶に又汲み上げて吳れる、そしてザア〳〵と僕の脛に注いで吳れる、僕の兩脚は眞赤になつた、

僕は手拭を忘れて來た、仕方が無いから濡れたまゝで下駄を穿きかけると、菊野さんが其の頭の手拭を取つて、貸して吳れる、他の頭にして居たもので足を拭くのは、何だか變な氣がしたが、菊野さんの淸らかの眼を見ると、强ひても斷れない、足を拭いて、下駄を引つかけて、其れから一釣瓶、返禮に汲み上げながら、

「年暮でお忙がしいでせう」と僕は言うた、

「はい、別に」と、ほつれ掛る鬢を、濡手で掻き上げた、

「斯樣な時に來て、餘計なお手數ですね」と言うて見たが、只「否え」と輕く答へた、

「どうです、この雪で出來ましたか」と僕は又聞いて見た、

「何がでやんす」と菊野さんは不審顏に僕を見た、

「歌が」と僕も見つめて言うた、

「まー」と菊野さんは面を眞赤にして、俯いて、芋を一つ〳〵綺麗に洗ふ、

「狩野君に聞いたんです、可いぢやありませんか、一つ聽かせて下さい」

菊野さんは耳まで紅に染めて、默つて居る、

僕は去るにも去られず、何か言ひたいにも適當な言葉が無いので、只其の踞んだ姿を眺めて立つて居た、仕方が無いから、又問うて見た、「貴女は年中で何時が一番お好きです」

「私でやんすか」と菊野さんは、面を擡げた「何時でも可いでやんす、——寒くても暑くても、構はねえでやんす」

「成程、可いですね」

「野良へせえ出て居りや、其れで私は何も考へることが無くて、可いでやんす」

僕は別れて我が室へ戾つた、

今夜は臺所で正月の七五三飾を造ると聞いたので、一つ行つて見ようと思つて居る所へ、君代さんが遊びに來た、

雪の話から直ぐと又菊野さんの身の上に移つた、先刻僕が井戸側で菊野さんと話して居たことを、君代さんは何處からか見たのでもあらうか、切りに氣にして尋ねるので、僕は有體に話して遣つた、菊野と云ふ女を何と見ると言ふから、僕は、「至極宜い婦人だと思ふ」と答へた、君代さんは厭な顏して默つて仕舞つた、で、僕は進んで僕の見たる狩野の心事を說いた、狩野の胸底には、一つの新らしき主義が在ること、

菊野さんとの戀も其の主義の自然の發動なること、舊き習慣舊き道德の眼から見れば、狩野の擧動は如何にも意氣地なくも見え、墮落したとも見えようが、其れは却て見る者の眼の誤なることなど說いて、其れから君代さんの責任に結論した、新らしき人の心は、新らしき人が同情して遣らねばならないので、畢竟貴女のやうな新知識を持つて居る人が中に立つて、新舊思想の衝突を調和する外に道が無いと說いて遣つた、正直に言ふと、是れも無論君代さんを弄んだのである、が、此の「新知識」とか「新らしき女」とか言ふ空言は、君代さんの耳に、不愉快には響かなかつた、君代さんの面は忽ち溶けた、

『私も然う思はないことはありませんけれど、彼の通り弟が餘り人が善過ぎて、何時でも女に馬鹿にされますので、其れを石田さん、私は心配するので御座いますよ』

『併し貴女、菊野さんを、彼のお雪さんなぞと同じに見るのは可哀さうぢやありませんか』

『何故で御座います』

『菊野さんの淸淨無垢と云ふことだけは、貴女だつて御認めでせう』

『其れは私も見て居ますけれど』

『では、何も心配は無いぢやありませんか』

『ですけれど、孝一が餘り意氣地が無いものですからね』

『貴女は切りに狩野君を意氣地が無いと仰しやいますが、然し如何です、戀は元來意氣地の無いものでは無いですか』

『さあ』と君代さんは微笑んだ、

『僕は全く無經驗なので、批評の資格を持つて居ないものですが、只然う想像されるです』

『然うですね——然う云へば、言へないことも無いか知れませんけれど、其れも石田さん、程度問題ぢや無いでせうか』

『程度問題と言ひますと？』

『餘り、シツこくされたら、女だつて、男だつて、厭になると思ひますわ』

『然うでせうか』と僕は首を傾けた『僕は又互に生命を獻げ合つたのが戀と言ふものかと想像して居たんです』

『其れは又別問題ですよ』

『すると、貴女の仰しやるのは、腹の底には熱情が燃えて居ても、顏は氷のやうに冷やかに見せて居ると云ふのですか』

『冷やかに見せると言ふのぢやありませんけれど、可い加減の溫度で居る方が可かないでせうか』

『さア、其處が僕のやうな無經驗なものには、何とも言ひやうが無いですが、多くの人が、男でも女でも、腹のドン底は冷たいくせに、其れを如何にも高き熱があるらしく裝うて、互に欺き合つて居るとしか見えないです、白粉を塗つた若い娘などの眼を見ると、僕は何時でも然う思ふです、だから僕は眞面目に戀などする氣が起りません』

君代さんは目を見張つて僕の面を見て居る、

『狩野君は今の世には餘り眞面目ですよ、だから、彼のお雪なんて女に弄ばれたんです』

『ですけれど石田さん、弄ばれたのは矢張り男の恥辱ぢやありませんか』

『左樣、恥辱と言へば恥辱でせう、然し名譽の恥辱でせうね』

『貴郎のやうな方の戀しなさる所を一度拜見したいものですね』と君代さんは笑ふ、

不埒な女め、と僕は思つた、で、僕は愈々眞面目になつて、『其樣なこと仰しやるが、若し間違つて貴女でも戀したらば、如何なさる』

是れは餘りに言ひ過ぎたと、ハッと驚いたが、君代さんは平氣だ、

『さア、どんなものでせうね』とホヽヽと笑

ふ『一つ研究の爲めに試驗して見たら如何でせう』

僕は餘り忌々しいので、一番ヒドい目に逢はして遣らうと考へて居ると、君代さんは薄霧の眼を過ぎた程にも氣に掛けずして、話頭を轉へて仕舞つた、

『では、石田さん、貴郎、弟の腹を確かめて下さいまして？』

『はあ』と僕は詮方なしと首肯いた、

『然う』と君代さんは、如何にも嬉しげに嫣然した『有難う御座います、其れで、石田さん、私、やうやく安心致しました、私が取りたゞさればならぬ筈なんですけれど、外のことと違ひ、弟も私には言ひにくからうと思ひまして、其れで先日も申上げましたやうに、是非貴郎にお願ひしたいと祈つて居りましたの、弟が若し内々後悔でもして居りますなら、其の道にして遣らねばならないと心配して居たんで御座いますけれど、愈々其れ程の確手とした決心がありますなら、私も大層、事が爲易いので御座います、お蔭さまで、狩野の家も圓く納まります』

『ぢや、如何なさるんです』と僕は尋ねた、嘸慳貪な聲であつたらう、

『實は父も内々は非常に心配致して居りますので、此の年末は銀行が忙がしいので歸りますまいが、年が替れば參りませうから、尚ほ貴郎からも話して戴きまして、今後の取り定めをしたいと思ひます、――菊野を彼樣なに下婢同樣に取扱つて居りますのも、實は石田さん、本當の腹を試驗したいと考へましたので』

『然うですか』と僕は餘り馬鹿々々しいので、横を向いた、

『ですけれど石田さん』と、君代さんは言葉を改めて『貴郎も最早、本當に奧樣を御迎へなさらねば可けませんよ』と、顏を見る、

『然うですかねえ』と僕は相手にならない、

『本當ですよ、私は弟で懲りましたから、他人樣のことが氣に懸つて仕樣がありませんの』

『然うですか、一つ世話して下さい』と冷やかに笑つた、

『本當に貴郎のやうな方に、良い奧樣を御世話して見たいと思ひますわ』

下らないお喋りをして、君代さんは歸つて行つた、

僕は緣に立ち出でて雨戸一枚繰り開けた、冷たい空氣が熱した頭に好い氣持だ、利根の瀨音が夢のやうに響く、蒼き天の物凄き弦月の清光を額に受けて、僕は身の氷のやうになるのも打ち忘れて、立ち盡した、

第十三

狩野の客となつて最早今日で六日目だ、と、僕は曉の寢床の中で考へた、起きるには未だ少し時が早い、暗い室の眞中に眼を閉ぢて、又昨夜のことを考へる、

昨夜、村の青年が二人遊びに來たので、爐邊で遲くまで其の話を聽いた、修飾の無い其の話の中に、此の社會の深き眞相の一端を、初めて覗くことが出來たやうに感じた、僕は社會を評論することを商賣にして居る身だ、自分では天晴れ社會の先導者と心得て居た身だ、考へて見れば社會と云ふものを毫しも知つて居ないのだ、自分の對手に取つた社會と云ふのは、自分で捏造した社會で、畢竟空に描いた虛僞の社會だ、昨夜の談話の中に縣知事の蠶業視察のことがあつた、夏の蠶の忙がしい眞最中、今年も知事が視察に巡廻した、屬官を從へて、郡長が先導で、綱引きの腕車十臺も並べて乘り込んで來る、雇人をしても未だ手不足だと騷いで居る中で酒肴の用意をせねばならぬ、其れで知事は何處を見廻るかと言へば、村の中でも金のあ

る名のある人の家へ行く、知事樣の御光來と云ふので、働くものも衣服を着替へたり、手拭を新らしくしたりして待つて居る、悠々と御馳走になつて、又次の村へ驅けて行く、何も解るものぢや無い、斯樣な馬鹿げた視察の結果が、下らない訓令や命令となつて現はれて來る、と云ふのである、

政治と云ふものは本來×いものだ、非常な善意でやつても×いものだ、其れを惡意でやられて堪るもので無いと誰やらが言うたが、然し政治家や役人ばかりを惡くは言へない、僕等の「社會の指導」も其れと少しも違はないと云ふことを、ツク〴〵感じた、

僕は又一人の青年が「死」と云ふ問題に就いて話したことを思ひ出した、近頃の新聞や雜誌を見ると、「死」と云ふことが大層な問題になつて居るやうだが、自分は未だ曾て其樣なことを考へた覺えが無いと云ふのである、是れには僕も喫驚した、既に二十四五の男だ、其れが「死」に就いて曾て考へたことが無いとは、無頓着も餘りに甚だしいことである、成程、立派な體だ、殺しても死にさうにも見えない可い體の男であるが、斯くまで明白な現實な「死」と云ふ恐ろしい厭な事件を考へたことが無いとは、受け取れない話と思つた、が、其の顏を見れば、決して譃で無いことも明かである、

で、僕は農業の興味と云ふやうな問題を出して、聽いて見た、彼が言ふには、近來縣廳などで農業に就いて種々奬勵する、何を植ゑれば利益が多いの、如何なる方法を取れば、利益が增すのと切りに世話を燒くが、利益と云ふことを頭に持つて本當に働けるもので無い、言ふに言はれぬ樂があるから、苦勞とも骨折とも思はずに働くことが出來るのだと言ふのである、

是れに就いて彼は林檎栽培の新經驗を話した、彼は近年利根の川向うに林檎畑を開いた、其季節になると、每朝川を越して見廻りに行く、自分の顏が見えると、幾百の林檎の菓が皆な莞爾莞爾して、『お早う〳〵』と挨拶する、何とも言へない嬉しさであると言ふのだ、語りながらも彼は如何にも嬉しさうに笑つた、

『面白い〳〵』と狩野も同じやうに笑ふ、

すると彼の青年は、狩野に向つて、『孝さんは能く、神樣だの、祈禱だのと言ふが、俺などには如何しても解らねえ』と問ひ掛けた、

僕には神樣や祈禱も解らないが、林檎のお早うも解らない、何と狩野が答へるかと其の顏を見て居た、

『解らんことはあるめえ』と田舍言葉で、極めて無造作に狩野は言ふ、

『俺にや、神樣が在るなんてことが、如何しても思へねえ』

『其りや、お前が西洋の書なぞ見て、神樣つてものは、髮を長くしたり、羽を生やしたりして居るものだと思ふからだ』

『ぢや、如何な風をして居るだい』

『如何な風も斯樣な風も無えさ、お前の林檎のやうな顏だと思や可いんだ』

『林檎のやうな顏つて？』

『お前、今林檎が每朝挨拶すると云つたぢや無えか』

『然うさ、だが、神樣なんて、如何しても化物だ』

『神樣が化物ならお前の林檎も化物だ、石川君に聞いて御覽よ、林檎が每朝お早うつて言ふなんてことを東京の人が聽いたら、何と言ふか』

『だつて挨拶するだもの』

『林檎が挨拶すると同じに、神樣も祈禱を聽くよ』と狩野は微笑む、

『成程、然う云ふワケか』と、青年は切りに感服して腕組みして居たが『ぢや、俺も是れから神樣の書物でも貸して貰つてポツ〳〵讀んで見

るか』

「なあに、書物なんぞ讀むにや及ばねえよ」と狩野は言うた「皆なが書物なんぞ讀むから駄目だ、矢張り林檎とお話する方が可いよ」

「でも、人が馬鹿にして可けねえ」と、今一人の青年が吻を出した、

「人が馬鹿にしたつて可いぢやねえか、馬鹿にする奴の方が馬鹿なんだから」

「然う言へば、然うだけんど」と青年は首肯いた、

此の青年は戰爭に行つて來たのである、戰爭を觀て來て、働くのが馬鹿々々しくなつて仕舞つた、それで百姓を止めて東京へ出て、何か樂な仕事に取り付きたいと深く考へた、其の不所存を懇々と狩野に諭された爲めに、又思ひ返して、土を握む元の身になつたので、今になつて自分の初めの考の間違つて居たことが能く解つて、實に有難いと、狩野に禮を言うて居た、

狩野は聞かぬふりして直ぐ話頭を他へ轉へて仕舞つた、餅を燒いて居た菊野さんが、次第に垂首れて、窃と袖に涙を拭いた、兄さんのことを思ひ出したのであらう、

村の人達の狩野に對する評判が、略推測される、多數は無論「馬鹿野郎」と言うて居る、が、極く僅かの青年の中には、殆ど崇拜するまでに信頼して居るものがあるらしい、「今に俺にも本當に悔改める時が來ると思ふよ」と狩野は言うて居た、「神樣に立ち返ると云ふことが、お互に第一の心掛だ」と、昨夜も狩野が懇々と二人に話して居た、

僕は是れ全く無用の人間であると思つた、『實際無用の人間だ』

僕は兩手に頭を抱へて、又其處はかと無く迷ひ込んだ、

癩病の乞食などが路傍に坐つて、地に頭を摺りつけて、聲の限りに道行く人の憐みを乞ふのを見た時に、あゝ氣の毒だと心から思ひながらも、「又あんなにしても生きて居たいのか知らん」と輕蔑の念の、我知らず催さないことは無かつた、さうかと思ふと、獨身の老人が首を縊つたの、子持の女が親子で水死したのと言ふ通信に接する毎に、此の同胞を無理に殺して顧みざる社會の無情冷酷に立腹して、胸も裂けるばかりに憤つた、貴族の傲慢や富豪の專橫を見聞きすると、あゝ皆な此奴等の爲めだと思つた、此の階級××を打ち壞して仕舞へば可い、是非とも速に此の階級××を打ち壞して仕舞はねばならぬと考へた、が、僕は一個の凡人だ、僕の筆には自由が無い、

同窓の北原は社會黨の運動者だ、北原の紹介で社會黨の先輩達にも面會した、北原は熱心に僕をも社會黨に引き入れようとした、社會黨の議論には、僕は寸毛の異存が無い、が、斷然社會黨の名乘りを揚げようと思ふと、何だか知らぬが腹の底に大不安大空虛を感ずる、

『君は優柔不斷で駄目だ』と北原は得意の鋭舌で罵つた、實際僕は優柔不斷だ、僕の從軍記者と云ふことが決定した時、北原は×戰論を叫んで運動して居た、

愈々戰爭と言ふものを實見した時、僕は遂に北原に向つて謝罪した、が、疑問は益々深くなつた、僕は或る目的を抱いて從軍を志願したのであつたが、白痴のやうになつて歸つて來た、

僕は捕虜の露國人と同じ船で歸つた、中に一人の士官があつて巧に英語を話した、其の自ら言ふ所に依れば、彼は革命黨員である、彼は革命黨の運動に就いて色々話して呉れたが、「××に依つて奪はれた××は、××に依つて××する外に道が無い」と熱心に主張した、彼は「小兒だまし」の「議會」に××政治を冷笑して居た、僕も以前數々斯かることを夢想せぬでは無かつた、が、果して××は××に依つて回復し得

られるものだらうか、是れが僕には最大疑問となつた、××に依つて自由を回復するの企は必ず××にも起るに相違ないと思つた、が、果して其れが至當の道であるや否や、僕には解らない、のみならず、『自由とは何か』此の根本から僕には全然解らなくなつて仕舞つたのである、

斯の如き大不安者となつて、僕は再び日本に上陸した、そして空しく今日まで一年餘の歳月を過ごして來た、

が、今年も最早今日明日に迫つて居る、斯うして又空しく年を取つて仕舞ふのか、實際健康が著しく衰へた、頬の痩が自分にも見える、ツイ酒を飲んで仕舞ふ、其れがヒドク障る、知つて居ながら飲む、自分で殺して居るのだ、

悶々と熱して來る、呼吸が窒るやうだ、『此れで死ぬのは殘念だ』と割れるばかりに、キリ〳〵と齒を食ひしめた、涙が無暗に出る、人が戀しい、人が戀しい、

第十四

一度起き返つて見たが、どうしても立つ力が無い、仕方が無いから又夜具をかついで寢て仕舞つた、然し、何時まで斯うして居ることも出來ないから、力めて起き出でた、

皆なが顏色が惡いと言ふ、箸を取つて見たが、食慾が無いので止めて仕舞つた、

外へ出て見た、日が當つて居る、雪達磨が馬小屋の側に炭の大きな眼をして睨んで居る、

赤ン坊を背負つて菊野さんが、雞に餌を播いて遣る、コ、、、と幾羽の雞が雌も雄も子供も一所になつて拾ひ、背中の赤ン坊も何か聲を立てて笑つて居る、菊野さんも同じやうに笑ふ、

僕は彼れと此れとを見較べて茫然と立つて居た、

『おゝ、寒い〳〵』と我が兒に言ひながら菊野さんは家へ入つて行つた、

僕は何となく取り殘されたやうな氣がして、矢張り茫然と雞の群を眺めて居たが、是れもやがて、打ち連れて倉の蔭へと歩を運んだ、

仕方が無いから僕も家に入つた、

『否え、宜しう御座います、決して御依賴申しません』と鶴代さんが、厭に切口上を遣つて、顏を脹らして、奥へ行きかける所であつた、

『あれ、然うぢやありやせん』と菊野さんは、臺所に膝を突いたまゝ、言うて居る、

ピシリと荒々しく襖を閉てて鶴代さんは行つて仕舞つた、

狩野は歳暮の用事で、今朝早く出て居ない、

『何です、憎々しい』と言ふ聲は君代さんだ、

『だつて、失敬なこと言ふんですもの』と言ふのは鶴代さんだ、

涙ぐんだ眼をシバたゝきながら、菊野さんは、土間へ下りた、

僕は又、お母さんの炬燵へ行つた、お母さんは曾て手を遊ばせて居なすつたことが無い、紬を引つ張るとか、絲を繼ぐとか、合間々々には古い草紙類を讀むとか、必ず無駄に時を費して居なさる所を見たことが無い、『今の若い者等は、手織は肩が張るとて厭がりやすが、買物は見た所ばかり好くも弱くて、百姓なぞには駄目でやす』と此の間も話された、

『御氣分は如何でやす』と、お母さんが言ふ、

『何でも無いです、斯様なことは常にあるんですから』と僕は答へた、

『氣骨を折りなさる方は、御用心なさらぬと可けませぬ』と僕の顏を見られた、

『如何で居らつしやいます、石田さん』と君代さんが入つて來た、

『最早、可いやうです』と僕は俯いたまゝ、

『でも、何だか厭に沈んで居らつしやるぢやありませんか』と見て居たが『一寸失禮ですけれ

ども」と手を延ばして僕の額に當てた、

「少し熱氣が、おありなさいますよ」と君代さんは僕の面を見つめながら「一寸お手を拜見」と言ふ、

仕方が無いから僕は左手を炬燵の上へ出した、

君代さんは眞面目な顏して脈を取つて居たが、

「お脈の方は然うでも無いやうですけれども、如何も少し熱氣がお高いやうですよ、お風をお引き遊ばしたんぢやありませんか」

「然うかも知れません」と僕は言うた、

「厭で御座いますよ、石田さん、お歳暮風なんぞ」と君代さんは微笑む、

「ほんとに石田さん、お氣お着けなさいませよ」とお母さんも仰しやる「溫まつて居なさいませよ」

「お寢み遊ばせ」と君代さんが勸める、お母さんも勸める、

僕も少し寢てでも考へたいので、其れに從つた、

君代さんが、無理に自分で床を敷いて呉れた、言はれるまゝに僕は仰向けに枕に着いた、厚い夜具の暖かいのを重ねて掛けて、肩にも裾にも隙の無いやうに叩きながら、「石田さん、御遠慮遊ばしちや厭で御座いますよ、御惡いやうなら醫師を迎へに遣りますからね」

「否や、そんな御心配には及びません」

「然うですか、ぢや、今日明日、能うく溫まつて居らつしやいまし、元日には元氣よく起きて頂かねばなりませんから」

斯う言ひながら急々と立つて行つたが、直ぐ又藥を持つて來て呉れた、

僕は何だか本當の病人になつたやうだ、

僕は斷然新聞社を止めて仕舞ふことに就いて考へた、新聞社を退いて、何を爲ると云ふことは無い、今の新聞社にさへ居られないものが、外の仕事の出來る筈が無い、無職業になる、直ぐ麵包に差支へる、

社長の親切が浮ぶ、社長には實に世話になつた、本當に親切に世話をして呉れた、從軍の時でも然うだ、先輩の社員の中に熱心な希望者があつたので、本來ならば僕なぞは候補者にも數へられない筈のだ、其れを社長の方から竊に僕の希望を聽き取つて、候補者に加へて呉れた、

僕の從軍したことは社員間の不滿の種子であつた、其れを知つて居るから、僕も生命掛けで特殊の通信をした、所が其れが却つて社中の不信用の原因となつた、僕自身は成功した通信だと思つた、が、其時の內地の輿論とは相合はない、僕の苦心した多くの通信は、陸軍省の檢閱官の爲めに「不認可」の印を捺されて仕舞つた、生を賭けて集めた材料が空しく編輯局の反古になつて仕舞つた、僕は兎に角失敗の通信員であつた、

其れにも拘らず社長は一層僕のやうなものを信任して呉れる、若し僕の思想が社長の意見に一致することが出來るならば、僕は此人に從つて懸命に働いて見たいと思ふ、戰爭前でも僕の議論は隨分社長のと違つた、が、年少氣鋭の徒の常態と、社長は寬大に僕を慰諭し指導して呉れた、戰爭を經て、僕の思想は著しく變つた、實は今尙ほ朦朧として、五里夢中に迷つて居るのだが、後へ引き返すことだけは出來ない、社長との間には最早人工にては全く調和の望の無い程の懸隔が出來て仕舞つた、退社は實に人情に於て忍びない、が、此儘で居た所で、何の役にも立ち得ない、社長の恩義に報いる爲めには、今日斷然退社する方が可いのだ、

考へて居る中に、僕は何時かトロ〳〵と眠つて仕舞つたものと見える、起されて眼を開くと、君代さんが枕頭に居る、わざ〳〵粥を造つて持つて來て呉れたのだ、最早午過ぎだ、

驚いて起き直ると、「然うして居らつしやい」と

君代さんが立つて來て、夜具でスッポリと僕の背中を包んで仕舞つた、

僕は寢床の上に夜具に包まれたまゝで、粥を食べるのだ、君代さんが宛然身を僕に任せてでも居るやうに見えて仕方が無い、

食べながらも、種々なことが胸に往來する、斯う云ふ人は如何なるのだらうなどと、君代さんの行末までが氣に懸る、斯う云ふ婦人を妻にしたら如何なものだらうなどと、詰まらないことを考へて見る、矢張り再婚を求めて居るんぢや無いか知らん、强いやうな淡泊なやうな顏はして居るが、腹の底では矢張り非常な寂寞を感じて居ることだらうなどと、色々に空想を描きながら、其の顏を偸み見る、

腹が空いて居たので三椀食べた、未だ一椀位は食べたいと思つたが、斯樣な大病人扱ひをされて居ながら、餘り不謹愼のやうに感じたので止した、

其人を前に据ゑて置きながら、腹の裡に辱しめる、如何にも卑劣なことだ、僕は覺えず赤面した、外へ心を轉じようと思つたが、良い途も無いので、甚だ無意味なことだが、『年の經つのは實に早いですねえ』と言うて見た、

『本當ですよ』と君代さんは左も痛切に感じて居るらしき語調であつたが、直ぐに碎けて『ですけれど、貴郎方はお樂みね』とヂッと見る、

『名故です、年ばかり取つて仕舞つて、今に最早死なにやならんぢやありませんか』

『では私達は如何するんで御座います』

僕は返事に差支へた、

『貴郎方は是れから初めて本當の舞臺へお上りなさるんですもの』

『然うでせうか』と僕は俯いた、

『女と男とはマルで違ひますよ』

『如何してです』

『殿方は三十の聲が掛らない中は、世間が信用して吳れませんけれど、女は三十を越して仕舞へば、人が最早居たかとも言つて吳れませんもの』

君代さんはホッと微かに溜息を吐いた、

『然うでせうか』と言ひながら僕は竊と君代さんを見た、

君代さんは僕の膳を取り片付けたまゝ、立つ景氣も無い、顏に蒼味を帶びて、目の底が潤うて居る、

『本當に石田さん、腕限りお働きなさいましよ、蔭ながら私達も、貴郎の御成功を祈つて居るんで御座います』

僕は默つて俯いて居た、

君代さんも暫し無言で居たが、『ですけれど、石田さん、思ひ切つて仕事なさらうと思召すには、成程、獨身の方がお宜しいかも知れませんね』

『左樣——』と僕は顏を擧げた、

『本當に、石田さん、女なんて厭なものですよ』と君代さんは眉を顰めた、

『然うですか、僕は實の所、未だ女と言ふものを少しも理解して居ないんです』

『其の方が、お仕合せですよ、若し理解なさらうものなら、斯うして話なさるのさへ、急渡厭になつてお仕舞ひなさるでせう』

權のある目が一きは凄くなつて、何處か深い所を見据ゑて居る、

『私なぞ、貴郎は如何見て下さいまして?』と君代さんは面を上げたが、其の眸子は實に恐ろしく光つて居た、

僕は擊貫かれたやうにビクリとした、

『本當に石田さん、どんなに御覽下さいまして? お願ひですから、遠慮なく言うて見て下さいな』

難題だ、僕は膝に立てた枕の上に右の肘を突いて、目を瞑つて額を支へた、

『可いぢやありませんか、石田さん、……私の家の樣子も大抵お解りになつたで御座いませう、私と言ふものが如何なものにお見えになりますか、有りのまゝに言うて頂戴な、お願ひですから』

僕が默つて居るので、君代さんが又語る『私は石田さん、折々自分で自分を棄てて仕舞ひたくなるので御座いますよ、他人樣から御覽になりましたら、出戻りの姉が、弟の家を自由にして、弟や弟嫁を居候か奉公人同樣の生活をさせて置くのも、皆な私と云ふものの仕業と思ひなさるに違ひ無いでせう』

『其樣なことは思ひません』と僕は急いで遮つた『狩野君は現に自分の主義を表明して居るんですもの』

『其れは貴郎のやうに、孝一の心を知つてて下さる方には、能くお解りになりますけれど、十人の中九人と言ひたいですけれど、殆ど十人が十人まで、弟が彼樣なこと言ふのも、つまり私が出しや張つて自由にさせないからのことだと、思ひ取つて居るんですもの、……其れにもう、鶴代の養子の話もボツ／＼あるんで御座いますよ、すると直ぐ私と言ふものが邪魔になるんでせう、私だつて世間に不面目な聲で生れ故郷に居たいことはありません、米國に行つてる學校のお友達から、來い／＼と言うて下さるので、私も行きたいと思つたんですけれど、父と孝一の間が御承知の通りでせう、母は病身、其れに父が年中家を外にして居りますので、是非家の取締をして貰はねばならないと言はれて見ますと、厭だと言ひ切ることも出來ず、其中には父と弟の間も平和になるだらうと待つて居たんですけれど、段々に懸け離れますので、私の手なぞでは最早如何することも出來ないんです、本當に石田さん、困り切つて仕舞ふぢやありませんか』

『お父さんが、家に居なさることになすつたら可いでせう』と極めて靜かに言うて、君代さんの顏を讀まうとした、

『さあ、其事も折々言うて見るんで御座いますがね』と、君代さんは膝に吸ひ出して居る眞綿の玉を摘む『色々な仕事を無理に押しつけられますので、スゲなく斷つて仕舞ふわけにもならず、困るんですよ』

『ぢや、早く鶴代さんに婿を取つて、貴女の肩を拔きなすつたら可いぢやありませんか』

『今の所、其の外に道が無いんです、然うなると婿さんですがね、如何でせう、石田さん、良い人が無いでせうか』

『鶴代さんの婿さんですか』と、僕は是れは災難だと、心の裡に嘲りながら『いくらも有りませう』と何氣なく言うた、

『何學士だの、何だの言ふので、いくらも話がありますけれど、其樣なことだけでは何にもなりませんものね』

『なか／＼御註文が六ケしいですね』

『貴郎のやうな方が、今一人何處にか無いものでせうか』と君代さんは微笑んだ、

『僕のやうなものなら、其處らにヘタクタ轉がつて居りませう』

『本當に貴郎のやうな方だと可いと思ふんですよ』

『然うですか、一つ願ひませうかね』とカラ／＼と笑つた、

君代さんも聲を立てて他愛なく笑つて居たが、俄に面を正して、『貴方・貴族院議員の戸崎夫人を御存じ？』と言ふ、

『名前は承知して居ますが、見たことはありません、近頃新聞紙に名前が見えるやうです』

『其れで石田さん、私、世の中なんて馬鹿々々しいと思ひますの、私と同級だつたんですよ』

『然うですか』

『學問だつて不成績で、其れに操行だつて良くないんでせう、學生間には極々不評判でしたけれど、お父さんの爲めに校長も落第させることも出來ず、其れが此頃は貴婦人社會の花だなんて、新聞に書き立てられて居るんですもの、私、本當に厭になつて仕舞ひますわ』

『皆な其樣なもんですよ』

『で、石田さん、私のやうなものは、結句如何すれば可いんでせう、好い道を教へて下さいませんか』

『僕等に知れやうがありますか』

『まあ、髮を落して、尼にでもなるんで御座いますね』

脣頭には輕く笑つたが、目の底には深い憂の色が見えた、

第十五

君代さんが去つた後、僕は立つて縁側を彼方此方と歩いて見た、何の考案も浮ばない、新聞が來て居るが、讀む氣もせぬ、夜具に倚りかゝつて、膝を抱いて、只茫漠と障子の子を數へて居た、狩野の足音だと思ふと、障子が明いた、

『如何だ、好くないか』と僕の顏を見ながら座に就いた、

『如何したと云ふことも無いんだ』

『然うか、其れなら可いが、食も進まず、熱が高いと、今歸ると、姉がヒドク心配して言ふかられ』

言ひやうも無いから、僕は只苦笑して居た、

『君、愈々今日、親父と最後の談判をやつて來た』と、狩野は頗る昂奮して居る、

『何を？』

『此の間も一寸話した小作問題を』

狩野の小作問題と言ふのは、斯うだ、今の狩野の立場と云ふものが、如何にも曖昧である、狩野の信仰から見る時には、自分が地主の嫡子として現在の生活を送つて居ることが如何にも苦痛だ、自分は成程奉公人同樣の生活をして居る、けれども依然として地主の嫡子である、他の小作人等と一所になつて助け合ひ、慰め合ひたいと思つても、先方が疑つて、却つて新らしき懸隔が出來る、つまり自分の行爲が一種の遊戲と見られるのだ、他の目に遊戲と見えるのは當然で、自分で考へて見ても、遊戲と言ふのが尤も適當の批評である、集會などして見ても地所持ちの青年等は喜んで來るが、小作人の子弟は、寄りつかない、如何したらば可いかと云ふことに就いて、狩野は種々に考へて見た、北海道へでも行つて開墾しようかとも考へた、米國へでも行つて新百姓にならうかとも考へた、併し何處へ逃げても同じものだ、寧ろ自分の生み落された其地に於いて努力するが一番自然らしい、就いては自分が呪詛する小作制度と言ふものの奴隷となつて、親しく其の病苦を分擔しよう、相續權を棄てる、廢嫡して貰ふ、此の世の最も輕蔑されて居るものの位置まで落ちて見なければ、眞の恩寵と云ふものを味ひ、眞の同情と云ふものを分つことが出來る筈が無い、今日の狩野が貧者に與へる握手は、同情と云ふものでは無く、我が心は之を「恩惠」と思うて居る、實に傲慢千萬なことで、罪を離れようとして却つて一層罪に陷つて居ると言ふのである、之を言ひ出す時は、又家内に一浪荒立てる時で、母の涙を見るのが如何にも苦しいので言ひ出し兼ねて居ると、狩野は言うて居た、だから、今日親父と談判して來たと聽いた時、僕は其の突然なのに驚いたのである、

『で、談判の結果は如何だつた』と僕は危みつつ問うた、

『案じるよりは生むが易いと言ふが、其通りだよ』

『ぢや、如何なつたのだ』

『どうせ貴樣のやうな奴を當てにして居るのぢや無いから、勝手にするが可い、然し此の上州なぞに居られては困る、狩野の息子が日雇をして食ふや食はずに居ると言はれては吾の顏に掛るから、何處か遠方へ行つて何でも行るが可いと言ふのさ、僕の言ふには、其れならば何も斯樣な御相談は致しません、此の地球上には、未だ小作も取られず、租税も取られない所も在りませうから、僕は默つて其處へ行つて居りませう、が、僕は是非生れた村に居て、生れた土地の米に養はれたい、若し貴方が如何しても許して下さらないと言へば其れまでですが、何卒貴方の小作人として生活したい考ですと、心を盡し言葉を盡して談じたのよ、何の角のと枝葉の不平を並べたがね、結局僕の願を差許すと言ふことだけは決定したのだ、細かいことは年が替つた後に話さうと云ふことで別れた、是れで僕も先づ一安心だ』

『然うか、――然し、お母さんは嘸歎きなさるだらう』

『うむ、だが、餘程解つて來て居るから、――』と目を逸らした、が、急に狩野は又笑顏になつて『君、今日逢つた』と言ふ、

『逢つた？　誰に？』

『濱さんに』

『うむ』と狩野は點頭いた『丁度親父の宿に來て居たのさ、銀行から切りに迎へが來るので、親父は行つて仕舞つた、濱さんも歸らうとしたから、僕が竊と留めたのだ』

『ぢや、君とお父さんの談判を濱さんは聽いて居たのか』

『然うさ、僕が行つたので歸らうとしたがね、親父が色々用を言ひつけるものだから、歸るにも歸られずと云ふ始末だつた』

『何を話したんだ』

『つまり詫をしたのだね』と狩野は莞爾して居る『石田君から委細に聽きましたので、今まで貴女に對して抱いて居た想像の全く誤解であつたことを悟り、恥入つた次第であると云ふ意味を話したのさ』

『彼女は何と言つた』

『默つて居たがね、終に只一言「誠に申譯御座んせん」と言つた、其れで僕も、「又胸を披いてお話する時がありませう」と言つて別れて來た』

僕は恰も地球の進行が俄に其の方向を變じでもしたやうに感じた、

『彼云ふ人に逢つて見ると、僕等はマルで人生の坊ッちやんであることを深く思ふよ、苦勞が足りないね、是れぢや何も解る筈が無い』と狩野は獨語のやうに言ふ、

實に然うだと、僕も腹の底から恥ぢた、

『何億萬仭と知らない程、罪に染みた此の世界だ、之を直に神樣の手に返さうとしても、神は決して受け給はぬに相違無い、一先づ彼云ふ人の手に獻げるのだ、其れから神樣へ取り次いで貰ふのだ――』

斯う言ひながら狩野は何處か遙かに見入つて居る、其眼は宵の明星よりも美しい、

僕は胸が俄に波のやうに踊つて來た、狩野の眸子に、宇宙の生命の忽然浮みでもするやうに思はれて、僕は一心に見入つたのである、

狩野の面には此世ならぬ光がある、彼の心には僕等の眼に見えぬ何物かの顏を認め、僕等の耳に達せぬ何物かの聲を聽いて居るらしい、

僕は堪らなくなつて、いきなりムズと其の兩手を握つた、狩野は恰も高き天上の夢から引き戻されたやうに、喫驚して僕を見たが、眼には一杯に涙を湛へて居た、

彼の涙を見ると、僕も何とは知らず泣きたくなつて來た、『實に此の傲慢、不遜の奴』と言ふ勵

しき聲が、耳の奥に百雷の如く鳴り渡る、僕は恐ろしさにワナ〳〵と震へた、

『如何した』と狩野はキッと見る、

僕は言葉も無く、ヘタ〳〵と倒れた、

『君、冷えちや可かん、冷えちや可かん』と狩野は手を執つて引き立てる、僕は又寢床に横に倒れた、

『如何なだ、君、如何なだ』と狩野は僕を撫でながら顔すり寄せて尋ねる、

『何でも無い』と言つたが、僕は其實、死ぬやうに思つた『何、君、肉體の病氣ぢや無いんだから――』

『ふむ』と狩野も點頭いて居た、

狩野は母家へ歸つて行つた、

『一大決心を要する』と僕は天井を睨まへて、心の底に叫んだ、

第十六

大晦日の夜となつた、

神棚なぞに燈火がキラ〳〵と輝いて居る、

僕は狩野と連れ立つて外へ出た、

良い月の夜、雪に照りはえて、晝のやうだ、歩く毎に、凍つた道が、ミキリ〳〵と鳴る、

『寒くは無いか』と狩野が言ふ、

『否や、好い氣持だ』と僕は答へた、

『少し何處かで話さう』と、狩野は先きへ立つて廣い道を行つたが、やがて又坂を上る、

坂の上に寺らしき茅葺の大きな建物がある、元は寺であつたが、今は學校だ、其の縁に立つて眺めると、利根の曲りくねつて流れるのが能く見える、月を受けて浪が鱗のやうに光る、

二人共に言葉は無くて、良久し月光の中に踞んで居た

僕は今日の夕暮、風呂場での狩野の言葉を思ひ出した、『來年、是非來て呉れ給へ、最早斯樣な廣い家に暖かに寢せることは出來ないけれど、僕等夫婦が自由な眞實の待遇をすることが出來るから』と狩野は言つた、火口に居た菊野さんは、木のイブるので涙を拭いて居た、『是非來るよ』とは答へたものの、僕は胸中實に悲哀を覺えた、『來年の狩野は自由を得る、けれど自分は如何なることか、全く寸前暗黑の身の上ぢや無いか、生きて居ることか、死んで居ることか、其れも解らない、――』と云ふ感じが胸を衝いて出た、今又狩野と並んで蹲りながら、其れを思ひ出したのである、

月に向けた狩野の顏は、希望に充ち滿ちて居る、

『一たび袂を分つて、又逢ふ機會があるだらうか』と云ふやうな思ひが切りに湧く、僕は再び今夜の月を見ないかも知れぬが、月は何時までも今夜の色を變へぬであらう、僕が死ぬとする、何も殘りやしない、只狩野夫婦が月見る毎に、除夜の燈火を點す毎に、思ひ出し言ひ出して呉れるのみであらう、――ホロ〳〵と僕は涙を落した、

『然し君の前途こそ實に多望だと思ふね』と狩野は出し拔けに顏を向けた、

僕は俯いて默つて居た、

『君は故郷と云ふ觀念が無いと言ふだらう』と狩野は語り續ぐ『僕は考へた、僕の如きは全然此の故郷の一語に囚はれて居るのだ、故郷と言ふことを思ふ時に、僕の眼には直ぐ此の赤城の陰、利根の邊の山村が浮んで仕舞ふ、が、僕は又自ら此に大なる意味を發見して居る、僕の靈魂は此の山村に降り、僕の肉は此の山村に初聲を擧げたのだ、世界は廣い、名山大川も多い、が、僕に取つては何れも無意味だ、僕は此に生れて此に死ぬ、肉は此處の土に返りて、靈は天の父に行く、僕に取つては人生の成就だ、其他は皆な惡魔の誘惑だ、けれど君は違ふ、

狩野は言葉を切つた、

僕は垂首れたまゝ、熱心に聽いて居る、

狩野は又語る、『けれど君は違ふ、生れ出た時から、否や、人の腹に宿つた時から君の事情は僕とは全然違つて居る、僕は君が新聞記者を止すことに賛成だ、時事問題だの何だのと、泡のやうな影を追うて浮沈する馬鹿げた境界から脱却することに無論賛成だ、僕は豫て君の爲めに豫期し且つ希望して居たことだから、實に嬉しく思ふ、高等乞食を廢業して純粹の乞食に流轉すると云ふ、其れも僕は大賛成だ、が、君は流轉漂浪して何を求める積りだね』

『何を』と言つたが、僕はグッと窒つて仕舞つた『――何をと言つて、斯れと言ふもののある譯ぢや無い』

『其れが餘り傲慢だと思ふ、成程、君自身には、何を求めて居ると判然見えないだらう、けれど求めて居るもののあるには相違無い、君は北原君等と一所に運動することが出來ないと云ふ、北原君から見たらば君は如何にも優柔不斷だ、然し君を優柔不斷にさせる何物かがあるんでは無いか、其の何物かが解らない、其の爲めに君は現に惱んで居る、――』

『如何すれば可いんだ』と我知らず言つたが、言つて仕舞つて、ハッと氣が着いた、此の年をして、自分のことが自分に解らないで、他人に聽く、何たる意氣地の無いことであらうと、恥かしく思つた、

『石田君、僕の見る所を言はして呉れ給へ、君は故郷と云ふ觀念が無いと云ふ、が、僕には君が矢張り熱心に故郷を探して居るやうに見える』

『故郷を探す？』

『然う、故郷を探して居る、探して居るのは故郷が在るからだ、然るに此世の學問と、目前の功業との爲めに、君の眼は八重霞に掩はれて、故郷の森を見ることが出來ないのだ、君が眼を純粹の乞食に着けたのは、實に敬服する、が、君、若し『吾は乞食になつたぞ』と云ふ誇りの雲が懸つて居るのでは、矢張り駄目かと思ふが、如何だね』

狩野の一語一語が、ヅキリ／＼と腹を斬るやうに響く、

『ぢや、君、如何すれば可いんだ』と、僕は實に縋るやうな思ひで言つた、

『然う言はれると僕も困るがね、實は僕自身が此の問題で苦しんで居るんだから――何せよ、君、尋常なことでは可けない、どうしても死ななけりや可けない、死んで復活らなけりや駄目だ、お互に骨髓から罪に染まつて居るんだものね』

狩野はホッと溜息を吐いた、僕は胸中に只黑雲が渦卷くを覺えて、掻き撈つて仕舞ひたいやうに焦立つ、

『今少し、君、解るやうに話して呉れ給へ』と僕は言つた、

『君に向つて斯樣なこと言ふのは、高慢擬嬉に見えて可けないがね、僕は常に然う思つて居るのだ、僕等は實に何百代何千年と言ふこと知れぬ長き間、罪に生れ、罪に育ち、罪に誇り、罪に死んで來て居るのだ、早い話が、君にした所で、武士の家に生れて來たんだらう、君は議論の上でこそ、四民平等を唱へたり、世界同胞を唱へたり、武士道の階級的精神を攻撃したりするけれども、臓腑の奥は少しも變らぬ權力主義だよ、僕だつても然うだ、成程僕は農民の子だ、けれども代々名主を勤めたとか、庄屋を勤めたとか、清和源氏の末流だとか、系圖を誇り權威を誇る血液を受け、同じ乳に養はれた體だらう、だから學校時代に、君が社會主義の書物を讀んで來ては切りに「勞働の神聖」を振り播く、が、僕は反對した、力を勞するよりも心を勞する方が高尚だと言ふ信仰だつたのだ、君は政治的改革が男兒の本領だと言ふ、僕は政治的

事業なんと言ふものは、一時的のことで瞬く間に歴史の幕に掩はれて仕舞ふ、永遠の事業は文藝だ、一篇の詩、以て永へに美神の額を樂しませることが出來るなんて威張つたが、考へると實に死んで仕舞ひたくなるね、君、僕の一月の學資を供給する爲めに、小作人が何百萬粒の汗を絞つたと思ふか、其れを考へると、僕は能くまあ血へドも吐かずに生きて居たと、不思議に思ふよ、――「神は碎けたる靈魂を受け給ふ」、僕は唯是れだと思ふ』

僕は狩野の話を、夢のやうに聞いて居た、其れが何時か慥に見たことのある古き夢を繰返されるやうで、何處にか腹の底へ應へる所があるやうに感じる、

『成程、成程』と僕は熟と聽いて居る、

『本當に手に持てる一切を棄てて仕舞はなくては駄目だ、學問だの、知識だの、凡て我手の技巧を誇つて、進歩だの改革だのと、勝手な小細工に浮身をヤツすのは、如何しても間違つて居る、故郷の門は君の直ぐ前に立つて居るのだ、が、君の眼は人の智慧で包まれて居り、君の手は己の作品で塞がつて居る、其れでは假令門の鍵が、君の鼻先にブラ下つて居たにせよ、君は如何することも出來なからうぢや無いか』

狩野はヂツと僕の顔を見て居たが、『君に故郷と云ふ觀念が無いのは、僕から見れば實に大なる恩寵だ、古來大思想家だの、大宗教家だのと云ふ連中でも、皆な此の故郷とか祖國とか云ふ小感情に制へられて、自由自在に伸びることが出來なくて中途半片で萎縮して居る、人は何の爲めに苦心するか、要するに此の故郷だの、祖國だのと云ふ小さな牢獄を脱けて、直に世界人類と云ふ生命と一致したい爲めぢや無いかね、事業を見るから可けない、事業には功名が伴ふ、多勢を要する、黨派を要する、權力が立つ、是れが人生の禍亂だ、歴史は此の禍亂の蒸返しだ、進歩でも改革でも何でも無い、無神論だの、何々主義だのと云ふ小智慧に縛られて、君は傲慢と云ふ大馬鹿者になつて居るのだ、乞食は可いよ、乞食は可いよ、本當に素裸になり給へ、君の戀ひ慕つてる故郷は歡んで君を迎へて呉れる、君は其處に父君をも見るだらう、母君をも見るだらう、父の父、母の母を見ることが出來るに相違無い、其時、振り返つて僕を憐んで呉れ給へ、僕の故郷は草の葉裏の螢のやうなものだ、君のは今夜の月のやうなものだ』

あゝ久し振りで放論したと、狩野は快濶にハハ、、と笑つた、

僕は恰も革鞭で打たれた罪人のやうに、肉の痛むのを覺ゆるのである、

『考へて見ると、民心の變化は早いものだ』と狩野は言ふ『君が教場で勞働神聖論を唱へた頃には、君も議論として唱へたのであり、世間も議論として相和すると云ふ調子であつたが、如何だね、今日では最早口頭の議論ぢや無い、直に靈魂生死の活問題となつたぢや無いか、此の山の中の空氣まで其の響を傳へて居るが――』

『僕は何時でも口頭の議論のみで、面目ないよ』と僕は頭を垂れた、

ふら〳〵と庭を歩きながら、狩野は此の學校の歴史を語つた、學校の前身は眞言宗の寺で、近郷近村に澤山の檀家を持つて居たが、明治維新の頃住職に一人の惡僧が居た、檀家の葬式を當て込んでは脅迫をする、田を何畝寄進しなければ弔ひをして遣らないの、山を何反寄附しなければ經を誦むことが出來ないのと言ふ、棺桶を据ゑて置いての談判だから仕方が無い、斯う云ふ風にして寺の財産がメキ〳〵と殖えた、金を貸しては高利を絞る、二三里隔てた村に尼寺があつたが、其處の尼さんが小金を蓄めて居ることを知つたので、遂に誘惑して金を捲き上げた上、殺して仕舞つた、が、種々の惡事が露顯

して入獄の身となり、牢死して仕舞つたと云ふのである、斯様なことで無住の空寺になつて居たので、村の有志が醵金して私立の英語學校を開いた、隨分突飛な話である、狩野も初め英語を習ひに來た、狩野が入學すると間も無く、英語學校を廢して普通の小學校になつて仕舞つたが、今になつて考へると、彼の時の英語の先生と云ふのは、耶蘇教に相違無かつた、未だ耶蘇教を口に出して言へない頃であつたので默つて居たのであらうが、慥に篤實な耶蘇教信者であつたに相違無いと狩野は語つた、

『人は麪包のみにて活きるものに非ず』と言ふ言葉を教へて呉れたのは、實に此の先生であつたと、狩野は話した、

『君、此の庭で、百姓の娘にテニスなど演らして嬉しがつて居るんだもの、呆れ返るよ』と狩野は言つた、

第十七

其れから僕は、石塔の上の樹に身を凭せて、戀愛に關する狩野の感想を聽いた、彼は切りに都會の戀の悲慘を說いた、都會には神の愛が無い、「自然」の生命が無い、神を忘れ自然を離れた都會は、虛僞の技巧を弄んで其れを誇として居る、で、戀愛の如きも全く玩弄品となつて居ると云ふのが、狩野の議論だ、彼は自らお雪さんに依りて嘗めたる初戀の甘味は、所詮生涯忘れ得るもので無いことを說いた、「お雪さん」は今日でも決して彼に取つて不愉快の名前では無い、彼は只お雪さんが何時までも戀を玩弄することに耽つて、遂に其の深き靈氣に觸れること無しに滅亡する外ないことを悲しむと、熱心に論じた、

彼は君世さんに就いても深き同情を持つて居る、「姉なぞも然うだよ、彼女は結婚した、が、戀愛は知らない、彼女も戀愛を知らずに終つて仕舞ふ悲慘黨の一人だ」と言うて居た、

僕が「無經驗」の一語で、彼の戀愛論に應へたことが、頗る彼の感觸を害した、

『無經驗々々々と君は言ふが、成程、君は僕等のやうに人目に立つやうな騷ぎをしたことは無いにせよ、心の經驗も無いと言ふことは出來なからう』と、眞面目になつて僕の顏を見た、僕の心は戀愛問題よりも、我が身の行方と云ふことに傾注されて、胸中大攪亂、頭は熱し、耳は鳴ると云ふ場合であつたが、其の凝視めた狩野の眼色に僕は覺えずギヨツとして驚いた、

「古いことは知らないが、最も近き證據を僕は握つて居る」と狩野は言ふ『才六——否や、濱さん、あの濱さんに對して君は何と思うて居るね』

『何と思ふ？——別段何とも思うて居ない』と僕は言うたが、舌は極めて重かつた、

「其樣なこと言ふから可けない、君は其樣な虛僞を言ふから可けない、假令如何に否認しても君の眼に書いてあるから仕方が無い」と、如何にも僕の腹の奧を一字一句讀み拔くやうな眼で見つめる「僕は此の間、濱さんの心をも讀んで來た、さすがに商賣人だ、何食はぬ顏して居たけれど、僕が「石田君、石田君」と君の名を言ふ度に、彼女の心臟に騷ぐ波瀾が、筋肉に、血管に直ぐ應へるのが見えるだらうぢや無いか、——君の非戀愛論も久しいものだが、君の議論は、必竟戀愛の玩弄と云ふ文明の罪惡に對する反抗に過ぎないよ、如何だね、君』

ジロリ／＼と見入る、

『然うかも知れない』と、僕はニヤリと無理に笑つたが、冷たい汗が背中に一杯であつた、

月は次第に傾く、夜は益々寒い、僕等は歸途に就いた、

「面白い騷動があつてね」と、狩野は先きに立つて、ミキリ／＼と歩みながら笑つた「御承知の

通り、妹の養子問題が起つて居るんだらう』

『うム』

『此の問題に一番氣を病んで居るのが姉でね、是れは餘程可哀さうな事情があるのだ、若し僕が相續するのなら、姉は僕を與し易き好人物と踏んで居るんだから、何の心配も無いが、妹は彼の通りの氣質なので、姉でも兄でも容赦なく凌駕しようと云ふ勢だ、其處で養子の人物によりては、姉と云ふものは全く妹等夫婦の厄介者になつて仕舞はにやならぬだらう、姉の性質として迚も堪へ得る所で無い、其處で姉は養子の選擇に苦心をして居たのだ、親父は又姉の言ふことだと奇妙に納得するんでね、所で君、其の候補者が見當つたのだ』

『然うか、其りや、誠にお目出たいぢや無いか』

『然うさ、其の候補者先生が承諾して呉れさへすれば、お目出たいだらうがね』

『如何云ふ人物なんだ』

『人物か』と言つたまゝで、五六歩進んだが、クルリと狩野は振返つて『君さ』と云ふ、

『冗談言ふな』と僕は笑つた、

『否や、本當の話さ』と眞面目に云ふ『此の間、姉が僕を呼んで、石田さんを鶴代の婿に如何だらうと言ふのさ、然うすれば僕との間も平和に行つて萬事好都合だから、是非然うしたいと熱心な相談さ、何せよ、君に對する姉の信任と云ふものは非常なものだ、そして僕に是非君を說き落せと言ふのだ、僕も閉口したよ、と言つて、姉が餘り熱心なので、頭から駄目ですと言ふわけにもならず、ぢや、僕も折を見て言うて見るが、僕は餘り心易過ぎて却つて話がし惡いから、姉さんから當つて見たら可いでせうと言うて別れたのだ、姉は君に話したと言ふぢや無いか』

『然う言はれゝば、成程、姉さんから話があつた』

『君は養子に來ても可いと言うたさうぢや無いか』

『姉さんは座興のやうに言ひなすつたから、其れで僕も冗談に返事したのだ』

『何だか知らないが、姉が大恐悅さ、石田さんは決して厭では無い樣子だ、今度は妹を承諾させるのだと云ふのでね』

『本當に、君、冗談ぢや無いよ』

『まあ默つて聽き給へ、妹を呼んで話をしたんだ』と言つて、又五六歩默つて步く『恐ろしい妹の肘鐵砲さ、可いかね、君、新聞記者なんて下等な人物は厭ですツて言ふんだ、前橋あたりで新聞記者と言へば、脅迫詐欺と同一に見られて居ると云ふ論法だ、姉は切りに田舍の新聞記者と東京のと同一に見ることの間違、新聞記者が社會上の地位の實に尊いことなど諄々と說いて聽かせたが、妹は頑として承知しない、更に君の人身攻撃を始めちまつた』

『人身攻撃?』

『妹も矢張り君の新聞を讀んで居るので、君の非戀愛論を引つ張つて來ての攻撃さ、婦人の生命の戀愛を排斥するやうな人は、品性の下劣な人に相違無いと云ふ大氣焰だ、姉は一生懸命になつて君を辯護するのさ、品性の下劣だなんて失敬だと云ふので盛に君の學識人格の優れて居ることを稱揚する、所が駄目だ、段々に聲が荒くなる、母は僕に行つて止めさせよと言ふたが、最早お仕舞ひだらうと言つて默つて居ると、到頭喧嘩だ、其樣な良い人なら、姉さん自分でお貰ひなすつたら可いでせう』と言ふ棄てゼリフで、妹は襖を手荒く開けて出て行つて仕舞ふ、姉も次いで出て來たが、火のやうに怒つて物も言へないと云ふ始末だ、僕も、君、實に困らせられたぜ』

『然うか、僕の一言の過失で、飛んだ迷惑を掛けたね』と言つたが、僕は何だか變な氣がした、

『否や、姉が例の獨り呑み込みから起つた喜劇さ』と狩野は輕く笑つた、

斯樣な談話の中に何時しか門近く到着して居た、

福茶を呑むので、皆な僕等の歸るのを待ち兼ねて居た、

お母さんが昔話をする、狩野が面白い浮世話をして笑はせる、が、鶴代さん一人はツンと澄して、にこりともせね、養子問題の餘焔が未だ盛に燃えて居るものと知られた、やがて『お先きへ御免蒙ります』と輕く一禮して鶴代さんがスイと立つた、『百八を聞かなくて寢ると、白髮になるよ』と狩野が笑ひながら言うたが、『白髮になる方が可う御座います』と言ひ棄てて行つて仕舞つた、『我儘にも程がある』と君代さんが眉を顰げて呪むのを、『今夜は何も言ふで無い』と、お母さんが和かに制へた、僕は狩野と無言に目を見合はせた、

やがて除夜の鐘が山に響いて鳴り渡る、

第十八

元日の日は麗らかに上つた、

僕は昨夜寢ずして考へた、

僕は實に、權力を否認して來た、功名富貴を否認して來た、戀愛を否認して來た、榮耀榮華を否認して來た、實に此世の一切を否認して來た、去らば果して是等一切を否認し得たのであるか、

否な、

僕は全く自己と云ふものを知らなかつた、自己を知るの大切と云ふことすら知らなかつた、一旦氣が着いて見ると、是れまで長き間熱烈に否認して來た世の凡ての罪は、盡く自己であつた、僕は世の空しき影を追うて其れを斬るのに焦つて居た、其れは實に自己の影であつた、實體は自己だ、影の黒く濃く重かつたのは、此の心の底に燃ゆる罪の獰猛强烈であつた爲めだ、

僕は今夜も實に姦淫罪を犯した、狩野から、鶴代さんが僕を嫌つたことを聽いた時、僕の心は直に此の厭がる處女を捉へて、忿怒の情の燃ゆるが儘に、ある限りの殘忍暴戾を盡して之を姦淫した、福茶の席に於いても僕の邪熱は鶴代さんの額に復燃え上つた、僕は絶えず之に姦淫した、鶴代さんが怒つて席を去つた時、僕の心は彼女を其の寢室まで逐ひ縋つて、强ひて之を姦淫した、僕は君代さんを姦淫した、僕は菊野さんを姦淫した、僕は濱さんを姦淫した、僕は佐世さんを嫌ひながら、考へて見ると矢張り之を姦淫して居た、子供を姦淫したこともある、老人を姦淫したこともある、馬車の上の驕れる貴女を、路傍の哀れな盲目を、——其他自ら記憶せざる、忘れて仕舞つた姦淫の罪の、何程あるか、所詮算へ盡すことの出來るので無い、

僕は又何程竊盜罪を犯したか知れない、又何程人を殺したことか知れない、僕は實に世界の×の死を願うた、僕の心は幾度彼等の××に爆裂彈を投げたことであらう、幾度彼等の飾れる胸に匕首を突きつけたことであらう、僕は憎むべきものの死を希うたのみでなく、恩人の死を希うたこともある、親友の死を希うたこともある、

あゝ、實に僕は虛言者だ、勿論絶えず他人を欺いて居た、が、他人を欺いたことよりも、自分を欺いたことの方が、其の數に於いても、其の程度に於いても、多く且つ深かつたことを疑ふことが出來ない、

あゝ、罪、罪、——胸は盤石を積まれたよりも重苦しくて、呼吸が窒つて仕舞ふやうだ、何か額に障る、が、見えない、眼は厚き眼隱を當てられて見ることが出來ない、

如何したらば、此の苦悶から救はれることが出

來るだらう、如何したらば、此の目が明いて見ることが出來るだらう、

『あゝ、あゝ』と心の底から叫びを揚げて、彼方に寢返り、此方に寢返りして、此の一夜を明かして仕舞つた、

新らしき人にならねばならぬと、自ら元氣付けて洗面場へ行つた、

すると、直ぐ隣りの、例の上の風呂場の中に、湯を弄る音がする、僕の胸は忽ち鐘を亂打したやうに鳴り騷ぐ、一心に押し靜めて楊枝を使つて居ると、やがてザアと湯を流す、衣の音がする、

戸が開いた、鶴代さんだ、濡手拭を綺麗な歯に啣へて、細帶にダラシなく引いた裳を小褄を取つて、片足、廊下に踏み出したまゝ、恐い目をして見た、

僕は覺えず眞赤になつた、

『失禮』と言ひながら、鶴代さんは、すり〳〵に僕の側を通りぬけて、バタリ〳〵と草履の音させて應揚に行つて仕舞つた、白粉の香が殘つた、

母家へ行つて見ると、君代さんも、鶴代さんも皆な良き衣に着替へて、キチンとして居る、臺所へ行つて見ると、菊野さんが昨日のまゝで、鍋の火を焚いて居た、

僕は、お母さんと君代さんとの間に正客として、雜煮の餅の膳に就かねばならぬこととなつた、

お母さんの隣りに鶴代さんが坐つて居る、

今朝から全く新らしき人になるのだぞ、と、自ら心を叱つて坐つた、

外に出て見ると、只一夜のことではあるが、天地の色までが皆な新らしくなつたやうな氣がする、

逢ふ人每が『お目出たう御座んす』と笑顏を交換して行く、

全く新らしき人にならねばならぬと念じながら家に歸つた、そして狩野に『聖書を貸して呉れ給へ』と賴んだ、

『聖書？』と狩野は言つた、

『うム』

僕は昨夜の苦悶の中に斯樣なことを考へたのである、古來宗教だの哲學だのと言ふものが、古道具屋の店頭に山のやうに積み上げられてある、宏大なものは佛敎だとしてある、が、佛敎とは何だ、必竟釋迦が王位を捨てて乞食になつたと云ふことぢや無いか、希臘の哲學と八釜しく言ふ、が、ソクラテスの祕密はプラトンやアリストテレスの手に依つて決して發かれて居ない、キニックの乞食哲學に其の面影が稍々模寫されたらしく見える、東洋の思想を誤つたものは、實に孔子の治學者である――と云ふやうなことを考へた、

僕は耶蘇敎と言ふものを少しも知らない、てんで知らうと思つたことが無い、『耶蘇敎は世界の最も愚かなる迷信だ』と云ふ先入の獨斷がある、耶蘇敎の迷信の爲めに歐羅巴が受けた損害の歷史を學んで居る、だから僕は耶蘇敎を知りたいなどと思つたことが無い、只耶蘇敎を攻擊する爲めに、其の愚かなものであり、其の惡いものであることだけを知つて置く必要があると思つた、此の目的で僕は曾て神學と云ふものも讀んで見た、聖書と云ふものも讀んで見た、敎會の素見にも行つたことがある、が、僕には神學も聖書も敎會も、徹頭徹尾其の馬鹿らしさが餘り明白過ぎて、議論の必要など何處にも無かつた、正直の所僕には宣敎師だの、牧師だの、信者だのと云ふものの心が、不思議で滑稽で堪らなかつた、が、其れが近來餘程動きかけて居たのである、現に昨夜も學校の庭で狩野の話を聽いて居た時、切りに心の渴くのを覺えた、耶蘇と云ふ奴は一體如何云ふ男であつたらうと云ふ疑問が切りに湧いて來た、一個無學の

大工が、永久に幾億萬の心に糧を滿すと云ふのは、如何にも奇怪なことだ、僕は耶蘇を知りたくなつたのである、

狩野が一冊の薄い洋書を手にして來た、『是れは飜譯が新らしくて面白い』

受け取つて見ると、「二十世紀 新約全書」と金文字で記してある、

狩野は『如何したね』とでも言ひたげに微笑みながら僕の顔を見て居る、

『有難う』と僕は直ぐさま我が別室に歸つた、机の塵を綺麗に拭ひ、僕は座蒲團を除けて、端坐した、

机上の書に對して、僕は先づ萬感の湧き出づるを制へることが出來なかつた、

古來世界の大家が畢生の筆に成りたる書物、何千萬卷とも知れなかろう、其れが今何處に在るか、僅に殘存するものは、古瓦古錢古器物と同じ意味の價値を以て、圖書館の塵の底に埋もれて居るに過ぎない、其れは既に思想では無くして只古紙である、今日、此の小さな日本のみにて日々出版される新らしき書物でも恐らく何萬卷と云ふ莫大なものである、何れも一世の學者先生の血を絞つたものだ、が、果して幾月の生命を保つことが出來るだらう、

僕自身も筆を以て立つものだ、歷山大王や、シーザルや、クロムウエルの成したる大業を、一本の筆にて成就しようとの大勇猛心を以て新聞社の門をくゞつたものだ、爾來筆を禿にしたこと何百本、原稿紙を費消したこと何千枚、大文章、小文章、幾百幾千篇と言ふ數を知らない、――其れが如何した、今夜印刷されて明朝直に反古となつて仕舞ふのだ、果敢なきものは英雄の事業と罵つたが、去らば記者の事業は何と評して可いのであるか、僕は斯く自分の餘りの愚騃と餘りの傲慢を嘲らずには居られなかつた、

眼を開いて見ると、机の上の薄つぺらな聖書――是れを透して永遠に活動する耶蘇の奇怪、さながら伏魔殿の扉の前に立つた如く、僕は先づ手を觸れることを怖く感じた、しばし默つて睨んで居た、

第十九

＊　＊　＊　＊　＊

見よ、使者を一人汝の前に遣はす、彼が汝の道開きをするのだ、

『御主人が御座るぞ、道普請だぞやい』と大きな聲で野に叫ぶ、

と、昔時豫言者イザヤが言うて居るが、其の通り、洗禮のヨハネが愈々野に現はれて、罪の赦免の悔改の洗禮を怒鳴り出した、ユダヤ全國、エルサレムの町の者までも皆なゾロ〳〵と出掛けて、自分の罪を懺悔してはヨルダンの河水で洗つて貰ふ、ヨハネは駱駝の毛衣に革の帶と云ふ裝で、蝗と野蜜で生きて居た、

ヨハネは『今に己よりも豪い奴が來るぞ、己なんか其奴の草履取にもなれりやしない、己は水で貴樣達を洗つて遣るんだが、今度來る奴は、靈氣で洗つて吳れるんだ』と言うて居たが、其時耶蘇はガリラヤのナザレ村からやつて來て、ヨルダンでヨハネに洗つて貰つた、水から上つた時、見ると、天が開いて聖靈が丁度鳩のやうに頭の上に降つて來る、天の上に聲がする、『可愛や、倅、嬉しいぞ』

直ぐと聖靈は耶蘇を又野へ連れ出した、四十日四十夜と云ふもの、惡魔に試驗された、天の使者達に護られて、耶蘇は野獸の中に暮らしたのである、

卷を開くと馬可傳の第一章、僕は之を讀んで、何か天外の聲に打たれたやうに驚いた、以前な

らば只一笑に付し去つて仕舞つたに相違ない、其れが是まで曾て見たことの無い大文字として此の心を打つた、二章三章と僕は恰も何物かに逐ひやられるやうに先きへ〳〵と讀み進んだ、一字の奥、一句の裏、悉く何か深遠の意味が含蓄され潛伏して居るとのみ感じられて、肉は動く胸は躍る、呼吸を殺して只先きへ〳〵と進んだ、

耶蘇は遂に十字架の上に死んで仕舞つた、耶蘇の死を讀んだ時、彼の死刑を教唆し、煽動したものは、パリサイの徒でも、サドカイの徒でも無くして、實に僕自身であるやうに驚いた、耶蘇を殺したことよりも、耶蘇を殺せば自分等が生きると思つたことの愚かさに戰慄した、

偖て馬可傳一卷を讀み了つて、「耶蘇の何者」と云ふことを考へた時、僕は只眞に大洋の眞中に置き去りにされた幼兒のやうに感じたのである、只廣い、只大きい、——顧みて、自分と云ふものが餘りに卑吝な小さいと云ふことを思ふ、が、如何したらば可いか、解らない、

「耶蘇の愛」「耶蘇の力」——其れを思ふと、僕は恰も深き谷の彼岸に大伽藍を望むが如く、目には見ながら、辿るべき小徑をすら知らない時の重き恨に壓へられた、

熟と考へて居る中に、最初の第一章が浮んで來た、駱駝の毛衣を纏うた豪宕のヨハネ、其前に立つて罪の洗濯を求めた耶蘇、——耶蘇の罪、是れが僕の疑問となつた、又第一章を讀み返した、『四十日四十夜、惡魔に試驗された』と云ふ一句、僕は此の一句の上に良久しく冥想を凝らしたが、雲煙漠々として何の目に留まるものも無い、僕は疲れた、僕は殆ど絶望した、

自ら叱つて僕は第二卷に移つた——馬太傳、第一章の耶蘇の系圖、其れから處女マリアの懷姙——是れは僕に取つて初對面では無い、僕が曾て耶蘇教嘲弄の材料を獵る爲めに聖書を讀んだ時、僕は實に此の一章にて十分目的を達したと思つた、僕の見た聖書には此の馬太傳が卷頭にあつた、

耶蘇教嘲弄の聲が僕の胸底に復活した、見もせぬ耶蘇に對する輕蔑の久しき心が、其の頭を持ち上げて、眞面目に耶蘇を求めようとした一時の弱き迷信を、大口開いて笑ふ、

僕は身心の碎けるのを覺えた、僕は最早讀みつづける勇氣を持たなかつた、僕は疊の上へ仰向きに寐ころんで、目を閉ぢた、何だか厭になつて仕舞ふ、種々の邪念が目に見える、

何にかシタヽカ打たれたらしくピクリと驚いて目を覺ました、又起き返つて書物に向つた、鞭ち〳〵讀んで行くと、ヨハネが出て來た、「悔改めよ、天の王國は其處だぞ」と大音聲に呼はりながらヨルダンの河邊に現はれた、僕は如何にもヨハネが氣に入つた、彼が出て來たので僕の疲れた心は、夕立の雨に浴びたる夏草のやうに活き返つた、駱駝の毛衣に革の帶、罪の洗淨を受けに來たパリサイやサドカイの高慢ちきな奴等を睨まへて、「此の蝮の一族、然らば貴樣等の生活で悔悟の證據を見せて見よ」と叱つた樣子が、雷のやうに響く、耶蘇が來た、耶蘇が洗禮を受けた、洗禮を受けた耶蘇が荒野へ行く——惡魔の試驗、

僕は襟かき合はせた、

偖て耶蘇は聖靈に連れ出されて、荒野の眞中で惡魔の試驗を受けることになつた、四十日四十夜の絶食で彼も到頭餓ゑて仕舞つた、試驗の先生が現はれた、

『如何ぢや、貴樣が神の倅と云ふなら、其處らに澤山石がある、麵包になれと言うて見ろ』

が、耶蘇は答へた、『人は麵包で生きてるのぢや無い、是非、神樣の口から出た仰せに依るのだと、聖書に書いて御座りまする』

そこで悪魔は、あらたかな宮城へ耶蘇を引つ張つて行つて、御殿の屋根で問ひ掛けた、「如何ぢや、貴樣が神の倅と云ふなら、此處から一番飛んで見ろ、神は汝の足の地に着かぬ中に、使者を出して受け留めて吳れると、聖書に書いてあるぢや無いか」

「神樣を試すなと云ふことも、聖書に書いてありませう」と耶蘇は答へた、

三度目に悪魔は愈々高山の絕頂へ引つ張り上げて、世界の國々の其の廣大な樣子を盡く指し示し「さあ如何ぢや、乃公の前に頭を下げて隨身するに於ては、此の目に見ゆる者を皆な貴樣に吳れて遣るんだが」

『退れ、不穩漢』と耶蘇は怒鳴つた『神樣に從ひ、只神樣を拜めと、聖書に在るを知らないか』

耶蘇を捨てゝほかして悪魔は姿を隱した、天の使達が給仕に來た、

＊　＊　＊　＊

僕はヂッと考へて居たが、然うだ、是れだと、覺えず、机を叩いた、

此の三大敵に打ち勝つた耶蘇は、卽ち人生の勝利者だ、此の大勝利者にして初めて「愛」が說けるのだ、

此の勝利の耶蘇を眼頭に置いて、更に讀み進んだ、僕は實にスラ〳〵と之を讀み了つた、何の疑義も無く之を讀み了ることが出來た、胸がスキ〳〵した、霧が晴れて、山が見えた、

僕は不圖、先年或る耶蘇教の雜誌が、社會主義の衣食問題を陋劣だと攻擊したのに對して、冷評の一文を新聞に載せたことを思ひ出した、

「野百合を見よ、如何して育つか、別に働きもしなけりや縫も取らない、が、聽きなさい、ソロモン大王の全盛時代なぞと言つた所で、所詮此の花の一輪だけの色もあつたものぢや無い、——だから、如何したら食へようの、如何したら飮めようの、如何したら寒さが凌げようのと、ツマらないことを心配するな、そんなことは皆な天の老爺が先刻承知だ、先あ可いから老爺の國と、老爺の好きな正義と言ふ奴を尋ねるのだ、然うすりや君等の欲しいものも自然付いて來る勘定だ、——」

此の一節を引つ張つて來て、其の耶蘇教の記者は、「社會主義の連中は、物質主義で、神の愛と云ふことを知らないから、只麵包の分配ばかり、ガミ〳〵言ふ」と非難したのである、何を生意氣なと僕はグイと癪に障つたから「吾人不幸にして二十世紀の科學時代に生れしが爲めに、六日に世界を捏造せる神樣てふ飴細工屋を崇拜する迷信の光榮を有すること能はずと雖も、伏して惟るに、公等の所謂神の國とは外國傳道會社の誤聞にして、所謂正義とは金のある信者の靴の紐を結ぶの思ひ違ひに非るなきを得んや」と云ふやうなことを書き拂つて、頗る喝采を得た、實に汗の出る話だが、併し耶蘇を知らず、耶蘇の福音を知らない一點は、彼の教會の神學先生と無神論の僕と何の相違も無かつた、彼の教會の先生は、窄き門から入れと耶蘇が言うたのを聽かずして、廣き此世の物慾の大道から、一毛の悔改も經ずに乘り込んだ連中だ、だから何方へでも、麵包のある所に頭を下げる、讚美歌を歌つたり、祈禱をしたりさへすれば、其れで聖き身になれるものと思つて、皆な神を試みて居る、皆な悪魔の前に平身低頭して、此世の權力榮華に戀ひ焦れて居る、彼等も預言者の碑を建てる僞善者だ、羅馬皇帝の劍に媚びて耶蘇を十字架に懸けたパリサイの輩とは、卽ち今日の教會の先生達のことだ、

斯う思ふと共に、僕等が全く自分の狹い量見で耶蘇を誤り、且つ之を嘲り罵つたのが如何にも恥かしいことであつた、耶蘇を矢張り時の權

力階級に附屬して、貧民や弱者を「神」の看板で制へつけるもののやうに見て居たが、是れは必竟今の敎會を直に耶蘇の精神と見て取つたからの誤解である、耶蘇のは權力や階級や、凡て地上の慾望に戰ひ勝つた上の仕事だ、僕等のは權力や階級や凡て地上の慾望に囚はれて居ながらの嫉妬憎惡だ、及びも付かぬ懸隔だ、

『あゝ、あゝ』と僕は只歎息の聲を洩らすの外、何の分別も付かなかつた、

第二十

が、何處ともなく薄明が射して來たやうな氣がする、聊か手掛りが出來たやうな氣がする、「故鄕」と云ふやうな溫かい感じが腹の底に動く、

僕は只一心不亂に讀んだ、讀んでは考へ、考へては讀む、此の一擧に生命の大根を攫んで仕舞はねばならぬ と云ふ意氣込み、食事の時間も惜しい、寐る時間も惜しい、僕は眞に日を忘れて居た、

狩野の父が一寸歸つたさうだ、夜に歸つて、翌朝直ぐ行つて仕舞つたのださうだ、僕は見もしなかつた、四日の日に鶴代さんは三里ばかり距てた姉さん(松代さんと云うて狩野の直ぐの妹)の嫁入り先きへ遊びに行つたさうだが、僕は知らなかつた、鶴代さんのことなぞは、もう悉皆忘れて居たのだ、

五日の朝、狩野は二三日親類を年禮廻りして來るからと出掛けたが、出掛ける前、僕の室へ一寸來て『如何な風に思ふ』と言ふから、僕は斯う答へた、

『神を愛すると云ふことは、必竟大乞食になると云ふことらしく思はれる、僕等は皆な「我が物」と云ふ泥棒根性に囚はれて居るので、如何しても神の顏を見ることが出來ない、此の泥棒根性を打ち破つて仕舞ひさへすれば、天空快濶光明赫灼で、父の靈と我が靈とピタリ顏を合はすことが出來るのだ、當面の問題は神では無くして惡魔だ、天國の會食では無くして荒野の試驗だ、破壞だ、破壞だ、牢獄の破壞だ』

狩野は熱心に聽いて居たが、『愉快々々、早く歸つて聽から』と出て行つた、

鶴代さんが居なくなつた、狩野が居なくなつた、お母さんが嘸寂しいことだらうから、少し行つて慰めようとも思つたが、なか／＼お母さん所のことで無い、一息に惡魔を平らげてやらねばならぬと、又北風の机に向つて冥想を凝らして居ると、障子が明いた、君代さんが綺麗に化粧つて入つて來た、

『此頃は、石川さん、大變な御勉强ね』と嫣然と滴るばかりに笑を洩らしながら、机の側にピタリと坐つた、香油か香水か何か知らぬが、甘いやうな香が、高く腦を打つ、

僕は覺えず心の底から碎けるばかりに打ち慄へた、

『折角のお正月も、斯様な山の中では仕様がありませんのね』と、君代さんは覗くやうに見る、

『否や、僕は何處に居ても同じものです』と其の媚を含んだ眼を避けた、

『でも、多勢して歌留多など遊ばすんでせう』

『否や、彼様なことは嫌ひです』

話の緒が切れた、僕は固くなつて机の木目を睨んで居たが、ゾク／＼と不安の氣に襲はれて仕方が無い、で、僕は『どうも此頃は、飛んだ御迷惑をお掛け申して、何とも申譯がありません』と一生懸命に言つた、

『何です、御迷惑なんて、ちつとも存じませんよ』と君代さんは不思議さうに問ふ、

『――鶴代さんのことに就きまして――』

『あ、お婿さんのことですか』と君代さんは、平氣に笑ふ『本當に妹つたら、ヒドいことを申す

ので御座いますよ、其様に石田さんが御氣に召したら、私に下さるよりも、姉さんが御自分の旦那様になさる方が可いぢやありませんかつて、――』

僕は熱くなつて俯いて居た、

『石田さん、餘り然う氣をお詰めなさるとお毒ですよ、お顔だつて其様に蒼く、目に見えてお憔れなすつたんですもの、上州へ少し行つて居た爲めに此様に痩せたなんて、誰か又御心配なさると大變ぢやありませんか、其れにお髭が延びましたので、餘計に病人々々なさるんですよ、理髪屋が無いから可けませんけれど、私、剃つて上げませう』

言ひながら君代さんは立つた、

『否や、止して下さい』と僕は驚いて留めた、

『可いぢやありませんか、私、上手ですよ』と障子に手を掛けて振り向いて微笑む、

『否や、止して下さい、何卒止して下さい』と僕は切りに言つた、

『ほんとに貴郎も剛情ね、ぢや、能くお顔を御覽遊ばせよ』と、君代さんは違棚の鏡を取りに行く、

僕は机の上に腕を組んで、心の慴へを堪へて居る、

『さ、御覽遊ばせ』と言ひながら、君代さんは僕の左理に無理に膝突き並べて坐つた『ね、お髭が延びましたでせう』

斯う言ひながら君代さんは額すり寄せる、『さ、石田さん、御覽遊ばせよ』

仕方が無いから、恐る〳〵僕は面を上げた、蒼い面に血走つた眼の我が影よりも、君代さんの顏の方が先づ目に入つた、

『ね、御覽なさいませ、彼様にお髭が延びたでせう』と言ひながら、君代さんの鬢が僕の耳に觸るまでに摺りつけた、

同時に鏡の君代さんは脣に品を造つて嫣然と笑つた、目縁が美しく紅を潮した、

僕は全身の惡寒に打たれたので、眼を瞑つて顔を隱した、

『如何なすつて？　石田さん』と言ふ君代さんの呼吸は火のやうであつた、

『お願ひですから、退いて下さい』と言つた僕の聲は戰へて居た、

『何故です、石田さん、お邪魔？』

『否や、然うぢやありません、僕が謝罪しなけりやならぬことがあるんです』

『謝罪つて、誰に？』

『貴女に、だから何卒退いて下さい』

『私は貴郎に謝罪して戴く覺えが無いわ、何です、石田さん』

『否や、在るんです、在るんです』

『ぢや、何ですか、話して下さいな』

『話します、話しますから何卒退いて下さい』

『是れで可いんですか』と君代さんは一寸膝下つた、

『否や、其れんばかりぢや駄目です、遠く退いて下さい』

『若様は、お六ケしいことね』と笑ひながら君代さんは、立つて元の机の横へ坐り直して『此なら可いでせう』

僕は眼を開いたが、身は宛然火焔の底に投げられたやうだ、

『さ、石田さん、話して下さい、何時私に謝罪しなけりやならぬやうなことを爲さいましたか』

『いや、僕は貴女を辱しめたのです』と言つたが、舌が乾いて動かなかつた、

『私はチッとも覺えがありませんよ』

『無論貴女に覺えのおありなさる筈がありません』

『其れでは辱しめたも、謝罪するも、何も無いぢやありませんか』と君代さんは微笑む、

『貴女は御關係の無いことですけれど、私の心にはあるのです』

「だから、其れを早く聽かして下さいと申すぢやありませんか』

『では打ち明けて申上げます』と僕は姿勢を正して全力を籠めた『實に相濟まんことですが、僕は是れまで長く貴女を姦淫したのです』言ひつゝ僕は君代さんの顏を睨んだ、

『厭な、何ですつて？』と君代さんも眞赤な顏をした、

『僕は心に貴女を姦淫して居たんです、だから、白狀して御詫しなければ、苦しくて堪らんのです』

君代さんは瞬きもせずに僕の面を見つめて居たが、『謝罪々々つて、石田さん、只其れだけのこと？』

『然うです』と言ひつゝ見ると、君代さんの眼の色が厭な光を浮べて來た、ジリ〳〵と電氣のやうな恐ろしい力が迫つて來る、

『では、石田さん、私も申さなけりやなりません』と君代さんは膝を進めた、

『何です』と言ひながら、僕は覺えず立ち上つた、

君代さんの手が羽織の紐に觸れた．プツリと音してチが切れた、

『何をなさる』と突きのけたが、君代さんは目にも脣にも焔を吹いて最早全く狂亂の體だ、蛇の如くに纏はりつく、拂ひ退け〳〵つゝ僕は三廻りばかりも室の中を逃げ廻つたが、所詮かなはぬと思つたので、力限りに壁ぎはに突き倒し、其の起き上らうとする頭上へ羽織を脫いで投げつけた、僕は逸散に障子を開けて緣へ出た、

中には泣き倒れる聲がした、

第二十一

僕は庭下駄を穿いて、雪の固まつた上を、ガリガリと齒の痕をつけながら、彼方此方步いて見た、

頭が次第に冷えて來た、心が次第に鎭まつて來た、で、又室へ立ち歸つた、

君代さんは羽織に顏を押しあてて、室の眞中に泣き伏したまゝである、

僕は其の傍に正坐して『さ、お顏をお上げなさい、お上げなさい』と言うて見たが、返事が無い、只泣きじやくりをして居る、

『如何なすつたんです』と僕は少しく聲を荒らげてグイと抱き起したが、矢張り羽織を顏に當てて居て放さない、羽織を取らうとしても、一生懸命に押へて居て放さない、

『之をお放しなさい、少し申上げたいことがありますから』と言つたが、なか〳〵放さない、

『何卒此儘に捨てて置いて下さいまし、種々して下さると、又煩惱が起つて、如何な狂つた眞似をするかも知れません、私は最早二度と此世の人の顏を見ることの出來ない身で御座います、此の御羽織は貴郎が投げて下すつたので御座いますから、私は何處までも貴郎だと思つて、此儘此の室で死んで仕舞ひます、居て下さると迷の上の迷です、どうせ生甲斐の無い廢女の私のことですから、斯うして死ねば本望で御座います』

『お死になさるのをお留め申すのぢや無いです、欲しければ何でも差上げませう、斯様な直ぐ朽ちて仕舞ふもので無く、裂けも破れも朽ちもしないものを上げませう、だから、羽織はお放しなさい』

『厭です〳〵』と君代さんは首を振る『貴郎はお欺しなさるから厭です、欺した後でお笑ひなさるから厭です』

『僕は決して譃は言ひません』と叱るやうに言つた、

『ぢゃ、何を下さいますの？』

『物は僕の隨意です、何を差上げたいにも、貴女が然うして居なすつては仕樣が無いぢゃありませんか』

言ひながら僕は羽織を引つ張つた、羽織はズルズルと拔けて來た、

君代さんは兩手に濡れた顏を押へて居る、前髮だの、鬢だのの亂れたのが、涙で顏中へノタつて居る、

僕は心にイヂらしさを覺えた、

僕は自分の惡かつたことを詫びた、お互に此の恐ろしき罪に打ち勝つて淸潔の心に立ち返らねばならぬことを說いた、が、君代さんは承知しない、

『貴郎の今迄仰しやつたのは其樣なものですか、私は其樣な御說法ぐらゐで滿足するものぢやありません、私は堪へて居たのです、貴郎の奧さんになれる身では無し、ヂッと堪へて居たのです、其れを貴郎が彼樣なこと仰しやつて、私の心を亂してお仕舞ひなすつたぢやありませんか、迷つたのは私の罪ですけれど、お亂しなさつたのは貴郎が惡いのです、其樣な御說法なら私でも知つて居ます』

手を放して上げた顏を見ると、情慾の焰が野火のやうに燃えて居る、

『鶴代にまで悟られて居るのですもの、私は最早構ひません、貴郎の御迷惑は知つて居ります、ですけれど、斯樣に亂してお仕舞ひなすつたのは貴郎ですもの、貴郎も是れまでの運命と斷念めて、私と一所に死んで下さいまし』

言ひながら君代さんは又飛びついた、僕は其の雙の手首をシカと攫んで睨まへた、

『可し、貴女は本當に此の石田省吾とお死になさるか、本當に此の石田省吾に殺させなさるか』

『さあ、何卒殺して下さい、さあ、何卒殺して下さい、其の代り貴郎も一所に死んで下さらなけりや厭です』

『死にませう、では之をお受けなさい』

『は――』と言ひながら何氣なく見上げる君代さんの左の頰を、ピシーリと力まかせに平掌で毆つた、

吃驚した目にチラと怒氣の閃いたが、僕が鬼のやうに睨みつけたので、目を閉ぢて俯いた、

『是れが愛ですぞ』と又毆つた、君代さんは眉を顰めて、脣を嚙んで、ヂッと堪へて居る、最後の一擊、又毆つた、

頰は眞赤になつた、固く閉ぢたる瞼を洩れて、涙が瀧のやうに落ちる、

僕は心に神を念じて、見つめた、無言で相對すること、多時、

やがて君代さんはグタ〳〵に碎けて泣き崩れて仕舞つた、

午後にお母さんの室へ行くと、お母さんは眼鏡を掛けて繪本の釋迦八相記を見て居られた、『僕が讀んで上げませう』と言ふと、『然うですか』と眼鏡をハヅされた、曾て修業した朗讀法を久し振りに應用して僕は讀んだ、丁度釋迦が妻子珍寶及王位を捨てて山に入るの所であつた、釋迦が愈々山に入つて仕舞つたので、『さあ、石田さん、何卒、お休み下さい』と、お母さんは言はれた、お母さんは眼に涙を湛めて居られた、僕は世間の父母が皆な釋迦の親と同じく、地上の間違つた考の爲めに、苦勞して其子を邪道に引き入れようとして居ることを話した所が、お母さんは『本當に仰しやる通りで、私も漸く解つて參りました』と、シミ〴〵肯かれた、

お茶の御馳走になつて別室へ戻つて見ると、何時の間にか羽織の綻びを縫つて、チャンと疊んで片寄せてあつた、僕は泣いた、

＊　＊　＊　＊　＊

僕の心は東京へ、行くのを無暗に急ぐのである、

新聞社の方を片付けて、一刻も早く我が新生涯に入らねばならぬと焦立つのである、早く狩野が歸つて來れば可い、狩野の顏を見たら直ぐにも立たうと考へて居た、

翌日の宵である、僕は過ぎ來し方、行く末、自分のこと、他人のこと、天のこと、地のこと、彼れから此れ、此れから彼れと考へながら歩いて居ると、女の若い聲がする、目を上げて見ると、井戸端に赤ン坊を背負うて菊野さんが立つて居るのだ、天には眞圓な月がある、仰向いた顏を月の光が隈なく照らして居る、菊野さんは肩をユスぶりながら小聲に守歌を謠うて居る、

僕は袖垣の蔭に呼吸を殺して立ち留つた、

菊野さんは又歌ふ

　お月さま出ても
　　お父さま留守で
　　　坊のお家は闇だ
　お父さまは何處で
　　坊の顏思うて
　　　お月さま見て御座る

歌ひ了つて菊野さんは、其の綺麗な目を上げて、ヂッと月を眺めて居たが、やがて背中を振り向いて「坊やは寢んねしたかや」と言ふ、最早寢んねしたのであらう、菊野さんは家の方へ足を向けた

　早く坊やに良い嫁女とつて、
　　揃て田圃へ出て見たや、

と節廻しよく歌ひながら、僕の隱れて居る袖垣に手をバラ〳〵と觸れて行つた、

良人と子との爲めに一身を忘れて居る、美しき女の心を思うて、僕はヂッと見送つて居た、

第二十二

狩野が歸つて來たので、僕が直ぐに出立すると言ふと、皆な驚いた、十五六日頃までは厄介になると云ふ豫定であつたのが、十日にもならないのに立つと云ふのだから皆な不審がる、狩野の如きは怒るやうに留めたが、「早く行つて東京の始末をして仕舞はねばならぬ、然る後改めて來る、改めて是非來る」と僕が言うたので、皆なも默つて仕舞つた、

『留守の中に、濱さんから手紙が來て居た』と狩野が持つて來た、狩野への手紙の中へ、僕のも封じて來たのだ、

狩野への手紙には「先日は圖らずお目にかゝり、親御樣との段々のお話を承りて、自分も深く考へた」と云ふだけのことが書いてあつたが、僕へのには「昨冬あなた樣にお目に掛りてより昔のこと思ひ出でゝ、此心千々にかき亂れて居候所へ、孝一樣に思はぬ御面會を遂げ、淺猿しき一身捨てるにも捨てられず、死ぬるにも死なれず、人は春だの正月だのと樂しげに興じ居れども、我身は恰も空蟬の拔殼のやうに、只思ひ出してはシク〳〵と泣いてばかり居り候、歸途に必ず立ち寄つてやると仰せられし御一言を力草に、御待申上候、何時頃御歸京の御思召にや、せめて御日取なりとも御知らせ下されたく――』と云ふやうな意味が細々と認めてあつた、

望遠鏡にて遠き敵陣を伺つて居る胸元へ、突然短銃をつき付けられたやうに、僕は愕然と驚いた、

狩野も默つて讀んで居たが、「君、何と思ふ」と問ふ、

僕は瞑目して我が心の騷ぎを押し鎭めた、濱川は僕の難關となつた。立ち寄れば何となく捕はれさうな思ひがする、素通りにすれば大敗

北だ、僕は暫し默禱に沈んで居たが、やがて面を上げて、『僕は必ず彼女を救ふ』と斷言した、

狩野は無言に背いて居た、

其夜彼の奥座敷に於いて、僕の爲めに會食の催があつた、

行つて見ると、膳が五脚並べてある、勸められるまゝに僕は正面の床柱の前に坐つた、お母さんと狩野が、左右に向き合つて坐つた、尙ほ二脚の空膳がある、一つは君代さんのだ、が、今一膳は誰のであらう、斯樣なことを考へながら、二人が彼れ此れ話して居ると、次の間で、誰か切りに爭ふ聲がする、『まあ、何だね、其樣なこと言つて』と言ふのは君代さんだ、お母さんも狩野も同じく不審げに目を注いだ、

幼兒が泣く、『それ御覽よ、坊やが目を覺ますぢや無いかね』と君代さんの聲と共に襖が開いた、幼兒を左に抱いた菊野さんが、右手を君代さんに引つ張られながら、眞赤になつて閾ぎはにウヅくまる、

『厭な菊野さんね、貴女のお膳が待つてるぢやありませんか』と君代さんは微笑みながら、無理に引き立てて、狩野の横へ菊野さんを坐らせた、

菊野さんは消えも入りたげに小さくなつて坐つて居る、狩野は兩手を膝にして、目を閉ぢて俯いた、お母さんを見ると、袖口に竊と涙を押へて居なさる、僕も驚いた、

『今晩は私がお給仕で御座いますから、何卒皆さん、澤山に召しあがつて下さい』と、君代さんは獨りで嬉しげに莞爾して居る、

今夜の君代さんは非常な質素である、僕は實に貴高く美しき婦人と君代さんを見た、

箸を取らうとすると、『一寸、僕が祈禱をしたいから』と狩野が言ふ、

一同、手を膝にして目を閉ぢた、

『天の父樣』と言つたが、狩野は最早泣いて居る、言葉が綴れない、二たび三たび『天の父樣』と言ひ直して、涙呑み込み呑み込みして祈禱を續けた、彼は己の罪の爲めに祈つた、父の爲めに祈つた、母の爲めに祈つた、姉の爲め妹の爲め、妻子の爲めに祈つた、又僕の爲めに熱情を注いで祈つて呉れた、

彼の祈禱は了つたが一人も面を上げるものが無い、皆な泣いて居て面を上げるものが無い、やがて涙を拭いて身を起したが、何れの面も皆な爐を出でたる眞鍮の如く、眞赤に美しく輝いて居た、坊やのみは安らかにスヤ／＼と母の腕に眠つて居た、

＊　＊　＊　＊

翌朝、僕は門の前にて一同に別れを告げて出發した、狩野は吾妻橋まで送ると云ふので一所に出た、丁度半月前の夕暮に上つて來た坂を下りて例の渡船場指して急ぐのである、雪がチラチラと舞ふ、

狩野は姉の心の激變に驚いて居た、狩野の話に依れば、昨夜僕が室へ歸つた後で、君代さんは狩野と菊野さんの前に手を突いて、是れまでの自分の心得違を詫び、且つ愈々狩野夫婦が父と分れて小さな獨立をする節は、是非自分をも一所に連れて行つて呉れるやうに賴んだと云ふことだ、何せよ狩野は君代さんの心の激變を驚き怪しんで居た、僕は心の燃えるやうに覺えたが、押えて默つて居た、

渡船場に着いた、狩野は渡守の小家へ行く、僕は汀の砂の上に、河面を眺めて待つて居た、雪が次第に降つて來る、其の上になり下になり、衝突かつたり別れたりして落ちて來る綺麗な雪片が、蒼き河浪に溶けて流れる樣を見て居ると、人の生命のやがて神の靈に溶けて活さる樣が偲ばれるやうだ、

渡守が狩野と話しながら來た、砂の上に寢て

居る舟を、水の中へ押し遣る、僕は不圖先夜の青年のことを思ひ出した、毎朝此の舟で彼岸の林檎畑を見舞ひに行く、林檎が嬉しげにお早うお早うと挨拶すると言うた青年の談話を思ひ出した、然うだ、神は雲の上に居るのでも無い、風の中に居るのでも無い、此の心の奥の神の眼が醒めたならば、凡ての物に神の面影を見ることが出來るに相違無い、其時で無ければ、誠の兄弟の愛を言ふことは出來ないと、考へた、輕羅一重の外に曖き光を薄く見ながら、僕は言ひ知れぬ寂しさに打たれた、

舟が装はれたので僕等は乘り移つた、渡守が腰に力を入れて一手繰り綱を引かうとする時、

『待つてお吳んなせい、待つてお吳んなせい』と云ふ女の聲がする、聽いた聲だと思ふ時、狩野は『や』と言ひながら舟縁から腰を上げた、菊野さんが松林の中を逸散に走けて來るのである、

渡守は手を止めた、

『如何した、如何した』と狩野は言ふ、

『あの、是れを石田さまに――』と言ひながら菊野さんは、息を切つて、汀に走けつけた、手に御納戸縮緬の小さく疊んだのを持つて居る、

『石田君に如何したんだ』と狩野は言ふ、

『若奧樣が』と菊野さんは言ひかけたが、フト口に手を當てた『あの、お姉樣が、雪が降り出したで、石田樣にお頸へ卷いて行つて下さいやすやうにつて』

『然うか、御苦勞々々』と狩野は言つた、

『お姉樣も一所に走けて來たさいましたけんど、舟が出て仕舞ふと可けないで、早く飛んで行つて吳れて仰しやいやしたので』

菊野さんは面を赤くして、呼吸をハズませて居る、

僕は氣の毒だとは思つたが、躊躇した、

『第一のお布施だ、受けて遣り給へ』と狩野が僕に振り返つたので、僕は獨り舟を下りた、

僕が菊野さんから受けて、其の疊んであるのを解いて居る時、松の間に君代さんの顏が白く見えた、

僕は砂利を蹳んでスタ〱と急いだ、

走けたりなんど、慣れないことをしたので、君代さんは面を蒼くして死ぬるやうな呼吸づかひである、途中で顚びでもしたのであらう、上着の膝に土が付いて居る、

『御心配下すつて有難う』と言ひながら僕は右手を出した、

君代さんは倒れるやうに僕の手に捉まつた、

『昨晩のことは、狩野君から聽きました』と、僕は彼女の面を見つめたが、君代さんは未だ物が言へない、兩手で緊と僕の手を握つたまゝ、ハラ〱〱と熱き涙をこぼした、前髮にタマつた雪が、搖れて散つた、

僕は扶けて靜に汀まで連れて來た、

『折角の御厚意ですから、頂戴して參ります』と、僕は縮緬を長く解いて、頭から頸からギリギリ卷きつけた、

『其樣なもの、お厭でせうけれど、路傍の乞食にでもお遣り下さいまし』と言ひながら、君代さんはヂッと見て居るのであつた、

僕は二女に一禮して再び舟に上つた、

ビ、、ン〱と鐵線の鳴る下を、舟は浪を切つて彼岸へ〱と寄る、傘を無しに立つ二女の姿が、雪の中に薄く小さくなつて行く、

福田

藝術と一燈園生活

西田天香

福田

—一燈園の集りにて—

『福田』といふことに就いて話をせよとの御求めですが、佛教、專門家に聽いたのでも何でもなく、何だかいつの間にか此『福田』といふ二字が落付がよいので、常に私が用ひた丈のことであります、からして是も私一流の標語であるとして聞いていたゞきます。

『財產よりは福田』をと、私は常に申します。之は全く財產はあてにならぬに引かへて、福田はあてにしても大丈夫であるからであります。

私が幼少の頃、父は時々思ひ出した樣に申しました。『萬能者一つ知らいで橋の下』だぞ、といふことを。其說明は斯うである。萬藝に鍛能であつても金まうけをしらぬときは、橋の下の乞食も同然である、とであつた。父は誠に善い人で又所謂身上持も上手であつた。人からも可成に推重されて、世話も好き思慮分別も行屆いた人でありましたが、此知らねばならぬ、一つだけは見當違ひで果てました。勿論是は父丈でなく、地方一帶、否、國、恐らくは世界一般大方はからであらうかと思ひます。昔も今も此あとも、此一つを「金」と解釋するのが多數であらうと思はれます。『金是權』「地獄の沙汰も金次第』などの諺が、一場の物笑ひになる樣なことは近い將來にきますか、どうか、隨分あてにはなりませぬ。世界の戰爭も金づく力づく。ない袖のふりやうもなく、何というても金は全く便利なものであります。古聖が『道心に衣食あり』とか『學ぶや祿其中にあり』とか『汝等何ぞパンの爲に思ひわづらふや』などとさけばれても、大抵は骨董扱ひにして、其宗旨の流れをくむ寺院及び敎會等でも、事實にその權威を證明せうとは致しませぬ。してみれば、父のいうたのも道理であります。

併し私の新生涯は、身上持(即金)の事を少しも知らいでも、橋の下でないことを證明するに十分であつて、むしろ古聖連の言葉を明かに裏書して、此一つは『道』又は『(光』であると證明するが本當であることを證明します。

私の新生涯の產れ工合は玆には略しておきますが、兎に角自分から此生命を無理に維持せうとせぬ態度であります。(光に養はれてなら活きる、許されてなら活きる、人の利益していゝなら活きるといふ態度ですから、根本から自分に金や財產が必要な筈はないのです。斯うした身體が何の要求もなしに他に奉仕をするときに、他からは是非に食うて、活きてゐてくれといふことになる。「貴方が菩提心を起して私を供養なさるのでありますなら食べてもよい、また衣る事も宿る事もかまひませぬ。唯願くば私を供養するときには、あなたの方の供養の何十倍何百倍の福田の出來てあるやうにと祈ります」といふ樣になる。斯うした機勢に福田といひ出すことになつたのです。私の無一物の生活が馬鹿に危い樣で實は大盤石の樣であるのを、見聞き感得して、多少とも所有慾を少うし、自ら節約し、財產の眞價を增し、且道の爲には謙遜な態度で供養を惜しまぬ事となるならば、其己れに屬すると、先方に屬するとを問はず、その精神または財產は、福田化してゐるのであります。私の考へでは、豐かな魂をも、福田のうちに數へられぬことはありませんが、單に物質

的のものに解釋したとて、大した誤りもないやうに思ひます。已に必要な時は何時でも與へられる、然しながら正しからぬ支出の爲には、福田の庫の扉は決して開かぬ。財産はいくら正しく使ふつもりでも費ひ過し易いもので、なくなつたら如何に正當でもとつてくるわけにゆかぬ。福田は自他一體的のものであるから、人の反感とそねみを受けぬ。聖書に『さびくさり盜人にとられる處にたくはへるな』とある樣ですが、ちやうど福田はこれにあたる。けれども、財産はこれと反對である。財産は人の眼に數へる事が出來るけれども、福田は然う言ふわけにゆかぬ。かうして萬人が萬人迄福田には安心が出來ぬ。分つたものから見れば全く齒がゆい樣であるけれども、見えぬ間はしかたがありませぬ。曾て私が秋田で注意人物とされたために、京都に居ても警察部高等課のお係の厄介になりました。上局の人から、直接受持つて下さる方まで、いやな氣持を少しも與へずに丁寧な扱ひをしてくれました。色々な人々――中には要監視人もをります――がたよつて園にとまられるのに、警察の方では全くわたしを信用して之を咎めないのみか、反つて行きつまつた人を憫みにこられたことがあつた位でありながら、福田の意味にあたるやうな事は全く不思議に思つてゐられたらしい。ツマリどうして食つてゐるのだらう。取締上生活の基礎をはつきりする必要がある、私も又はつきりしてもらひたい。赤い團體から來てゐると思はれても厄介で、また白い資本主義の援助になつてゐると思はれても困る。預つてゐる鑛山で食つてゐるといふ推定をする人もあるけれども、是はあべこべに新生活のわたしの福田をかしてゐるのである。さうすると、一燈園が年が年中、金まうけもせずに托鉢して、人がくれば誰かれの區別なしに引とめて食つて貰ふ、其經費の出所をいゝ、はつきりするのは監督上必要であるのも當然です。無理のないことです。斯うした事から、新らしい係の人がくると、前の人と引繼ぎの時などに、話の種になるらしい。

　或時私の托鉢先きへ警察部から電話がかゝつた。

『あなたが西田天香さんかね。』

『ハイ然うで御座ります。』

『僕は高等課の……といふものですがね、一度一燈園のお話を聞きたいと思ふのですが。』

『さうですか、ありがたう、では私が今から伺ひませうか。』

『よせてもらふはずだがね、さうしてもらへば結構だね。』

『すぐ伺ひます。』

　高等課には前の係の人もゐた。〇〇さんというてよく理解をもつてゐてくれました。調べてくれる人は新らしく係になつた人らしい。此人もやさしい人です。さすが高等課です、思想問題の書物が棚に澤山ならべてある。讀んで見たいと思うても少しのよむひまもない私はから思うた、中々これは御苦勞な事であると。

『ようきて下さつた。』

『おそくなりましてすみませぬ。』

『鹿ケ谷迄往くはずを、事務とりながらきく事が出來て大變ありがたい。』

『どうぞ、何なとお尋ね下さい。』

『いろ〳〵人のために世話をしられて御苦勞なことですが、一體何うした風にやつてゐなさるか。』

『どうした風にしてゐるかといふ御尋ねはあまりに漠然としてゐますから、どんな風におこたへしたらよいかにまごつきます、何はどのやういゝ、にしてゐると尋ねていたゞけば結構です。』

『それでは訊問といふことでもないが、をかしく聞える事について聞いて見たい。一體金はな

くてもよいといはれるさうなが、本當ですか。もしさうであるとすればあまりに奇を好んだいひ方であるやうに見えますね。』
『さやう、よくさうした問題のとき、金はなけねばならぬといふ樣な考への爲に、ゆきつまつてゐられる人の問題のときに、ツイいひはなすことがあります。持ちやうがよければ金があつて惡いといふのではないが、なければならぬものではないといふのです。さうして丁度私の今の生活は金がいらぬものですから、金に對する執着を整理するのに便宜なのです。』
『成程、でも金がいらぬといふことは極端なやうに聞えますね。』
『ですが此生活は金がいらぬ筈なのです。』
『でも、一寸汽車にのつても、いるではありませぬか。』
『理窟のやうになりますが、「一寸も汽車にのつたことはない」と申せます。』
『あなたは常に旅行なさるぢやありませぬか。』
『あれはみな、人がひつぱつてゆくので。新生活になつてからの私は、私の用事といふものはなく、みな人の用事ばかりですから。』
『なるほど。』
『それはさうとして、何か一つ仕事をなさつて、さうして他の人の爲に世話をしてあげてもらうたら、よい樣に思はれますがね。』
『先程電話をかけて下さつたとき、すぐにこれから伺つたらどうですと申しましたら、「それは便利だ」と、おはなしでしたな。』
「左樣でした。』
『私に何か一寸の仕事でも持つてゐますと、あゝした時に矢張きてもらはねばならぬ事になりましてね。』
『それはさうだな……。』
『さうして一寸の用心もあると、他の事には中々お役にたてるものではありませぬ。』
時間は丁度十二時になつた。辨當をとつて吳れられた。
『さあ、まづいものですが辨當をあがつて下さい。』
『私はいたゞかずに歸りませう。』
『まだお聽きしたい事もある、わざ〳〵きていたゞいたのですもの、私も失敬します、さあ、どうぞ。』
『先程の御話中に、「さう他人の家でのみ食つてゐるといふ事が出來るものかね」といふやうな感じをもつてゐられたやうですが。』
『そんな事も感じますね。』
『今強ひて辨當をよんで下さる事は、どこかに無理がありますか。』
『いや、少しの無理もない、こちらの用事の爲にきて下さつたのですから。』
『十年來他處の事のみさせてもらつてゐます私は、今はどこでも此辨當の樣に強ひられていたゞいて居るのであります。常に食のみならず、衣もまた住も、同じことです。』
『成程よく解りました。隨分ハッキリしてゐますね。さあたべて下さい。』
丁寧な辨當を頂いて、あとは心持よく、四方山の話を交へて歸つた。至つてよい氣持の方であつた。
これは畢竟、福田と云ふ事が判然せぬことからして起る當然の疑問であります。若しこれが判然しません時は、私共の生活はその根柢を失ひます。が、これさへ判然して居りますれば、物質的に行詰つた世界の總ての問題が、根本的に判然する事になると思ひます。
凡ゆる宗教はこの福田で無くては立ち得ません。「佛に養はれる」「神に養はれる」と云ふ事が如何なる問題に對してもはつきり解決することの出來る基礎であります。「金がなければ傳道が出來ぬ」「宗教の宣傳には基本金が要る」など

と云ふ事は常に耳にする事ですが、私は思ひます、本當の宗教の宣傳は、金があつては絶對に出來ません。金で爲たものなら、金の力で出來たものなら、もはやその生れて出て來るものは金臭いのです。自分の力で出來、又地位で出來る樣な傳道なら、その根本に於て人臭く地位臭いのです。之は私どもの力にします宗教ではありません。金の力も及ばず、人の力も又地位も役に立たぬ行詰りを、素裸で判然整理し得るものが本當の宗教です。それらのものを蹴飛ばして現れて來る光景には、又それに値する至純な、淨い、いゝ供物が來るのです。

維摩經に香積國の供養と云ふのがあります。文珠以下澤山な菩薩方を、所謂維摩の方丈に集めて不二の法門を論議しました時、お午になつて食事の必要が起りました。維摩は神力を現して香積國の如來に傳へますと、香積國から數多の菩薩衆が雲に駕して淨飯食を持つて降られました。室も必要に應じて擴がりますが、食物も亦必要に應じて無限であります。決して爭奪のものではありません。かうした事は維摩經をドラマのやうに見て了へばそれまでありますが、一度福田と云ふ事を知つた者は、それが決して空想ではなく現實の事である事を確かに知り得ます。

「生死を越える事を目的とする」程の信仰を傳へる人が、金や力や智慧が必要であつてはならぬのです。さうしたものが一つも無くて、それで生死を超え、自在を得、何の行詰る事もない天地を證明してこそ、宣傳する價値があるのです。それを推し轉がして行けばよい。金や智慧や力が要るやうに思うて行詰つて居る處へ、轉がして行けばよろしい。廣い野戰の眞最中へタンクがゴロ〳〵行きますやうに、不死身の體になつて轉がして行くのです。其れが何よりもよい宣傳です。其處から救はれる人が本當の救ひを得るのです。

嘗て斯ういふ事がありました。歳の頃二十五六のKさんが來まして申しますには、

「此の間一燈園の事を新聞で見ました。行詰つた人をお助けになるさうです。私は一人貴方にお願ひしたいが、聽いて下さいませ。」

「それは何うした方です?」

「殆ど乞食のやうにまでなりかけた氣の毒な五十男ですが、東寺の境内で拾ひました、何とか仕事を見つけて上げるからいらつしやいと云つて預つたのです。それは二日前の事であります。種々尋ね廻りましたが思はしい仕事が見付かりません。實は私の恥話も申さねばなりませんが、私はまだ獨立しては居りません。家内が産婆をやつて居て、その收入を學資として藥學校へ通つて居る者です。出來るだけよい事したいと思ひますので、東寺の境内でその五十男を拾うては來ましたが、家で養ひます事が長びくに連れて不平は家内の口から出て參りました。獨立しない私は強ひてとは申せません。何うしたらよいかと思つて居た時、丁度貴方の新聞を見て、それでお願ひに出たのです。」

「乞食の隣まで行つた程の人ならば、俄かに一燈園へ來ては都合がよくありません。園には種々の方が居ります。私は構ひませんが他の未熟な人を躓かせても濟みません。園へ預る前に裸の私が預りませう。」

「それでは連れて參りますから、どうぞ……。」

「一寸お待ちなさい。私へ連れて來ずに貴方が拾ひなさつた元の場所へお返しなさい。緣があつたら私が拾ひませう。」

Kさんは歸りました。翌日は二十一日で弘法大師の命日であります。東寺は非常な人出であります。私は每月その日は河道屋と云ふ饂飩屋の出店を手傳ひに參ります。申合せた場所はその饂飩屋から稍遠からぬ處です。來るか〳〵

と遙かから眺めて居ますと、一人の中爺さんが來ました。石に腰かけたのを見て私は傍へ行きました。

『爺さん、貴方がKさんの云うて居られた人ですか。』

『はい、左樣でございます。何でも私よりはずつと偉い人が救つて下さるから、私の拾うた場所へ行けとの事でした。貴方がその先生ですか。』

『先生と云ふわけでもないけれども……。然し爺さん、私は何も無い身です。さうして救はれてゐる者です。貴方は私の救はれたやうにやつて見る考へですか。』

『どんな事か知りませんが、出來ることなら教へて頂いてやつて見ます。』

『出來ぬことではありません。それではやつてみなさるか。』

『はい。』

『では今救はれたとして、これから御恩返しの事を爲なさい。』

『いえ、私はまだ救はれて居りません。何か仕事を見付けて貰ひまして、お金でも儲けたなら御恩返しをしたいと思ひますが、今はこの通りの裸でございますから。』

『いや〳〵、まだ貴方はいろ〳〵持つて居なさるのです。』

『どう致しまして、この通り裸です。』

『けれども、爺さん、私はあなたの持つて居るその鳥打帽子も持つて居ません。それから懷には竹の皮に包んだものを持つてゐなさるらしい。小錢も全くない事はありますまい。』

『こんな鳥打帽子……。懷の竹の皮はKさんから頂いた夕御飯の握り飯です。木賃宿に泊るだけの錢を頂いては來ましたが。』

『それ御覽なさい。貴方の三つのものを私は持つて居ません。初め私の救はれた時は、まだまだ薄い着物でした、下駄も穿きませんでした。その時の私が、其處から死ぬまで報恩の仕事を爲たのです。それに比べると今の貴方は長者のやうです。』

爺さんは眼を丸くして私を見つめて居りました。どれ丈見ても私は爺さんの持物よりも少かつたのです。溜息をついて爺さんは申します。

『私は五十の歲まで、さうした話を聽いた事はありません。この貧乏のどん底からまだ人樣に與へて行くのですか。』

『五十年このかた聽かぬやうな道なればこそ五十年來救はれなかつた貴方が救はれるのです。すべき時があつてもよい事を爲て來なかつた貴方であるかもしれぬ。德が減びてこんなにまでなつたのです。今は確かに救はれなさる。いやいや、救はれたのです。お禮のためにその有る丈のものをもつと無い人に貰うておもらひなさい。』

爺さんは、一段と深い呼吸をして居ます。どうしても合點がゆかぬらしい。眼をパチ〳〵して伏目になつて、飛んでもない事になつたよ、ふやうな氣持で居るらしい。私は獨り默禱した。

『無理はない、爺さんの心配するのは無理はない。何のこんな事は誰が今まで爺さんに聽かすものか、出來ることなら今直ぐ棲家と仕事を與へたい。けれども本當の救ひは其處にはない。本當の魂が救はれることなしに、この德を亡した結果の爺が當座の衣食住を與へられたとて、何うなるものか。爺さん、分らんのも無理はない、しかし今が大事の時だ。私のこの無理な註文を默つて温順に聞いてくれ。はいと開けるな。はや心の中に光が輝る。不安を起して哭れるな、不安は爺の迷ひである。どうぞ、一はいと温順に請けて哭れ。さうして五十年の暗から覺めよ。生命を賭けてわしは保證する。死

ね、今死ね、さうして光をしたゝかに受けよ。南無大師遍照金剛。』

爺の口は一文字に結ばれて、眼をも潤ませてゐるやうであつた。何時の間にか兩手は合掌して兩股の間へ押し込んで居た。微動もせぬ。

私は靜かに口を添へて、

『爺さん、死んだと思へばいゝではないか、どうせ一度は死なねばならぬ。さうしてこの預り物を無い人に分け、死んだ筈の身體を動ける間、奉仕をなさい。死際にさうした事をさせて貰つてそれで滿足せうではないか、一人は決して死なしはせぬ。爺さん、よいか。』

眼に溜つて居た爺の涙はこぼれかけた。深い底の方から出るやうな聲で、

『どうぞよろしく願ひます。私は死にます。何分よろしく。』

『それでは爺さん、私の云ふ通りになさいな、云ふ通りに。』

『はい。』

『今日は此通りな、澤山な人が參られる。こゝの公園はごもくだらけになつて居ます。私はあなたに箒を一本持つて來て置きます。第一にあなたは、その持つて居る弁當とその小錢を、この境内のうちの物貰ひの最も貧しさうな人に分けて上げなさい。それが濟んだらこの箒で出來るだけ掃除をさして貰ひなさい。人が靜まつて門の閉ぢる時分になつたら、一人靜かにお大師樣へ參詣して有難うございましたとお禮をおつしやい。さうして今晩は其處の門の下にお通夜をなさい。』

『はい、それから後は何う致しませう。』

『後は自分も何うしてよいか分らぬ。何處からか佛樣がお指圖をして下さることと思ふ。若し何のお指圖もなかつたら、生命のある間、やつぱり境内の掃除をさせて貰ひなさい。私はこれから高野山へ行かねばならぬ。これは人に頼まれた事で、三日經つと歸ります。緣があつたら此處へ尋ねていらつしやい。貴方を野宿させて置いて私が疊の上に寢る事は濟まない心地がする、けれども頼まれた事で人と一緒に行くのです。貴方が木賃宿に泊る丈のお錢は私が貰ふ旅費を割いて分けませう。でもこれは私としてせねばならぬこと、あなたは又あなたとして、あなたを安逸におくために使つてはなりません。それでは別れます。何處に居ても私は貴方と一つになつて祈つて居ます。さやうなら。』

河道屋で箒を一本借りてその爺さんに渡して別れました。きつと決心した樣な面持で爺は群衆の中へ入つて行きました。私は河道屋の店へ歸つて番頭に、

『もしあの爺さんがこの邊を綺麗に掃除したら後で饂飩を二杯お接待して下さい。』

番頭は快諾致しました。私はその夕方高野山へ發ちました。

五日經つてから京都に歸り、一日も忘れなかつた爺さんの消息をきかうとしました。或處へ電話をかけてKさんを喚出してきいて見たら、今その爺さんが來て居る所です、丁度よい鹽梅でしたといふことです。

『爺さんはどんなにして居りますか。』

『非常に喜びましてな、こんな有難い事はないと云うて居ります。』

私は思はず胸を撫で下しましたが、どうしてそのやうに有難い事になつたかを一刻も早く聽きたいので、Kさんに直ぐ來るやうにと傳へて貰ひました。一時間も經ちますと爺さんがやつて來ました。

『先生有難う。大變に仕合せな事になつて居ります。』

見れば眉間に皺一つ寄せず、晴々とした顏は五日前の石にしやがんで居た時のそれとは雲泥

の違ひである。思はず私も、
『あゝ……、有難い！』と喜びまして、
『あれから何うしました。』
『先生、まあ聴いて下さい。貴方のおつしやつた通り、持つてゐた錢と握り飯とを哀れな人に分けました。喜びましたよ。けれども先生、私も嬉しかつたのです。私はその時、變だなと思ひました。長い間の足らん／＼の生活の中には、人に與へて喜ばれたといふやうな經驗が一つもありませんでした。その私が幾人かの人に禮を云はれた時の氣持は何ともかとも云へぬ妙な嬉しさでした。握り飯のなくなつた事、小錢のなくなつた事がちよつとも淋しうは思ひませなんだ。そのつぎは、この箒で掃除する事だなと思ひまして、とう／＼日の暮れるまで夢中で掃いて居ました。所が先生、饂飩屋の番頭さんがそれを見て居たものですか、「爺さん、御苦勞樣。」と挨拶してから私に、饂飩を二杯下さつたんです。妙だなと私は思ひました。それこそ賴まんのに下さつた、お大師樣から下さつたのだと私は思はず手を合せて頂いたのです。それからおつしやつた通り、お大師樣へお禮を申して、その晩は門の傍で通夜をしました。全く今までの氣持と違ひまして、廣々とした處に、悠たりとした心持でした。すると十時頃かと思ひますが、巡査が一人來られまして、
「コラ！　何して其處に居る！」と叱られましたが、その時、先生、不思議でしたな。今までなら、ビク／＼しまして、遠い足音にも逃げ腰になつたものです。所が今度は、傍へ來られて、斯うどなられても私の心は少しも騷ぎません。
「はい、今日は或先生に信心のお話を聴きまして、お大師樣へお禮を申して、一晩お通夜をさせて貰つて居るのです。」
巡査は、「フン／＼、さうか。」と叱りもせずに行かれました。何だか自分が生れ變つたやうな氣が致しました。
翌朝、殘つた處を又掃き出しますと、今度は表門の角の餅屋の主人が、
「あんたは昨日も掃除をして呉れたが、今朝も亦早うから……。つひぞ見馴れぬ人ぢやが、お寺へでも來られたのかな。」
「いえ／＼、私は然うしたものではありません。」と、先生から聴いた事やら、その朝までにあつた事を殘らず話しました。すると餅屋の主人が感心しまして、
「まあ／＼、入つて茶漬なと食べるがよい。」
勿體ないと思ひ乍ら又頂きました。ふくれた腹を抱へましてな、今度は何處かで斯うした御用に立たうと考へましたが、丁度、稻荷のお瀧場がよいと思うて行きました。先生のお話の通り又此處でも御恩返しの氣持で掃除をして居りますと、一人に尋ねられ、二人に訊かれして、食物や寢る場所に不自由をせぬ事になりました。一人大阪から每日瀧に打たれに來る人がありまして、その人が申されますには、
「わしはこれまで瀧に打たれに來たが、まだ有難いと思うた事はなかつた。所がおぢいさんのその有難さうな働振りに有難うなつて來た。わしの來る間は、わしの辨當を食べて下さい。寢る所もわしに任せてなあ、ぢいさん。」と云はれます。
先生が「入れと云はれても門に立て、あがれと云はれても庭に居よ。二枚の蒲團は一枚で寢るがよい。かうした氣持で居れば何處でも厭がられる事はない。」とのお言葉を忘れずに、勿體ない勿體ないと思ひ乍ら供養を受けては又働き出しますと、澤山な人が皆可愛がツて呉れますのです。三日目に來いとのお話でしたのを忘れて居たわけではありませんが、こんな事で來兼

ねました。木賃宿に泊る時にと下さつたお金もお返しします。勿體ない。先生、私は何だか生れ更つたやうな氣がします。このやうに世間の人はよい氣持のものでしたが、つい五日前までは人が皆鬼の樣に見えました。有難うございました。先生、もう私は大丈夫です。』

私はその救はれ方の鮮かなのに感心しました。二杯の饂飩までは豫定の事ですが、後の方は全く捨身に加へられた（光）の働きです。思はず心の中で合掌致しました。

『爺さん、それではもう大丈夫ですか。』

『はい〳〵、大丈夫です。ではもうお暇致します。』

『爺さん、それならその氣で一燈園へ寄せて貰ひなさい。私は又今夜東京へ行きます。半月許り經てば歸る。この手紙を持つて鹿ケ谷へ行きなさい。』

『はい〳〵、それでは先生の所へ寄せて貰へますか。』

『いや、私の處へではないが、皆さんの寄つて居なさる處へ……。』

『有難うございます。』

私は名刺にその由を書いて與へ、その夜東京へ發つた。半月經つて歸るや否や、爺さんはどんなにして居られるかと訊きますと、

『小杉さんはよい人ですね。あなたのお歸りを樂しんで待つて居られます。』

小杉の爺さんは園の生活でも成績がよろしかつた。後に三井の別莊へ賴まれて、時々喜んで手土産などを持つて參りました。それから、又比叡山の無動寺へ托鉢に行きまして、病にかゝり、里へ歸つて死なれましたが、何處へ行つても喜ばれて晩年を飾りました。

この一つの物語りは、金と力と地位とでする傳道のそれとは全く反對の現象です。私が裸であつたればこそ、この人にこの事がさせられたのです。この人が同じ裸になつたればこそ魂が蘇生したのです。魂の眼覺めた狀態には物の有無は問題になりません。かうなつて居ります時には、何處からでもよい物が來ます。供養する人も淨められます。これを名づけて福田と申します。維摩經では香積國の淨飯食と申します。キリストが、我に從へ、持てるものを皆棄てて十字架を負うて我に來れ。」と云はれた事は、この境涯の高く且深いものであります。大小の區別こそあれ、（光）は矢張（光）です。

財產と福田との問題を、經濟的生產に移して考へて見ますのも亦興味のある事です。私共の生涯に對して常に多くの人の心配して吳れます事は、何の生產もしないで、又專門の事を手に入れないで、あちらこちらのきれ〴〵の用を奉仕してゐると云ふ事は非常に消極的な、そして女性的な行方であつて、この激烈な世の中を整理するのには不適當であるといふのです。一應尤もな事で、常にさうした事に就いての反省を怠らないやうにして居ります。然し乍ら、この見方は決して當を得ては居ません。少くともその立場からさう見えると云ふまでの事で、此方の立場には又寧ろ反對に これが非常に積極的で、又男性的で現代の行詰つた世界を立てかへる力が、この中に含まれてあると信ずべき理由があります。

生產といふ事は殖すといふやうな意味でせうが、實際、私どもに對して心配して吳れる人達の多くは、殖して居る事は少くて、取り合ひ、奪ひ合ひしてゐるのであります。經濟學上からは定めて生產の二字は、物の增加する意味にのみ用ゐられる事と察しますが、大抵は取り合ひして、俗に「儲けた〳〵」と空騷ぎして居る事が多いのであります。理窟を附ければ何とでも附けられますが、隨分いかゞはしい事を爲て居乍

らも、それは普通の事として怪しまずに、却て私共の立場を危みます。根本的に達觀しますと、一つのものも殖えもせず又減りも致しませぬ。が、これは別としても、普通の生活は先づ心を貧乏にします（聖書に所謂心の貧しき者の意味ではない）。次に身體を餓鬼のやうにします。生活の向上と品よく申しますが、多くは果しなく己れの餓鬼性を滿足させる事を云ふやうにも思へます。落着いて食べる時には麥の中にも米以上の味が出、芹の根、干鰯の丸噛りの中にも種々の滋養素がとり入れられます。而も消化の機能が完全に働いて、駄目に排泄しないさうです。反對に落着かずに食べます時は、如何な高價な珍味でもその割合に旨くなく、消化機能が弛緩して折角の熱量も攝り得ずに終ふさうです。

身心に三密相應すれば、破れ疊の上が蓮臺になり、然らざれば金殿玉樓も身體を愉快にする譯に參りません。心身が整はぬと欲求が無限になります。飽くことを知らぬ餓鬼の虜となつて、更に殖さう、又奪はうとなるのが多いのです。巾着の底の綻びを繕はないで物を詰める愚かさは知つて居ますが、果しなく取らうとし、又果しなく不足を感ずる愚かさには氣が着きません。

幾百年に亙つての歐洲の文化が隨分悲慘に破壞されたのは、たつた四五年の間の事です。かうした文化の逆行を仕方のないものとして放つて置いていゝものでせうか。どうせ壞されるものと知り乍ら、賽の河原で石を積むのは賢い事でせうか。その鬼を己れの心の内に養うて、どうせ積んでも壞れるものぢやと悟つたらしくすまして居るのは、いゝ、てんで鬼に負けてだゝつて居るのでありますまいか。

新生涯は、斯樣な目先の見えぬ愚かで消極的な諦めから目醒めたのであります。その鬼を取りひしぐ事を怠つて石を積んでは居られません。心の内に燃えて出る餓鬼性を優待して、この大切な身心を奴隷にする事は出來ません。何ぼう、この餓鬼や魔の王どもが、大きな組織で固めて居つても、それを見遁すわけにはゆきません。

新生涯から觀る積極的とは先づ巾着の綻びを繕ふ事です。餓鬼や魔王を取りひしぐ事です。如何はしい僅かな生産をするに先立つて、確かな大きな消費を整理することです。食べても食べても瘠せるやうな身體の持方をせずに、多くを取らないで滋養素の能率を完全にして、佛の相好のやうに生きかへるのです。息まうとしても息まれぬやうな、追つかけられた生涯から超越して、追かける者を取りひしぐのです。

政治や教育、殊に宗教は、かうした事をねらつては居るでせう。何うすれば人類が落着き、世界が平和になれるかと云ふ問題を扱ひます以上は、前に申したやうな事に反對はない筈です。然しながら、徹底してその目的を達しますには、一つの極めて面倒な關所があります。其處にちやんと魔の王が陣取つて居ます。人の惡い事は見せます。他の國の惡い事も見せます。然し乍ら自分の惡い事、自分の國の善くない事をば、見せないやう〳〵とさせて居ます。決烈な反省をする者があつて、『それは自分の方が惡いのだ』と知つたとしても、『謝罪する事は正義ぢやない、自分だけ懺悔したからとて他が惡を續ける限りは行りきれぬ。此方も惡からうが先方は何更惡いのだ。懺悔の實を行つて見よ、直ぐにお前は破滅である。お前の家族は餓死するであらう。止せ！　天國は死んでからの事ぢや。』と號令します。更に思切つて起ちますと、女房をして泣かしめます、親をして不孝者と呼ばしめます、友達には發狂したと笑はせたり、

悲しませたり、遂に、宗旨からは異端者として取扱はさせます。家を奪ひ、職を奪ひ、衣を剝ぎます。廣い世界に、その小さな身體の存在をも許さないやうにさせます。さうして魔王は冷かに笑つて居ます。『どうぢや、これでもか、これでもか。』と。そこを若しも高い靈感に打たれて、十字架を想ひ、捨身品を念じ、少しもひるまずに飛躍突破しようとします時は、今度はかの魔王は優しく出ます。さも聖者賢人に敬意を表するらしい態度をもつて。又打ちあけて相談するやうに、

『貴公と乃公とがよくものを知つて居るのだ。』と云つたやうな風に寛ろいで囁きます。

『貴公だけその決心で十字架に掛つたとて、それは貴公だけの解脫欲でないか、そんな事が一般の者に出來る事ではない。一切が救はれねば本當でない。昔から其處を通り脫けた者は數々ある。然し、世の中はどうにもなつて居ないではないか。それは弱い、强さうで弱い。それは捨身でもない。十字架を裝うた强度の利己だ。よく考へて見給へ。貴公の最も眞面目な智慧に靜に、又最も深い純情に依つて、今の時代はそれでは救はれぬ。』と輕く背中を叩かれて見ると『成程さうだ』と考へる。賢ければ賢い者程、祈る人はよく祈る程この魔王の話は尤もだと思ふ。それ故、最後の飛躍は大抵茲で阻まれて了ふ。最も純な感情と正しい知識と强い意志とを統一して、そこへ熱烈な祈禱を加へて事を越えようとしても、此處で大抵引き戾されます。

『下地は好きなり御意はよし』と云ふ諺があります。一切が救濟されるやうにといふやうな名で、最後の飛躍を殘して罷り下る心を仔細に吟味して見ると、この『下地は好きなり御意はよし』であります。魔王は赤い舌を出して笑つてゐる、それを知らないで救濟を叫ぶ。けれども實際問題を背負うて立つて、仔細に整理しようとすれば行詰ることは元の通りです。爭ひ合へば和合相が破れる、和ぐには讓らねばならぬ、讓ると云ふ事は又無限である事を否むわけにはゆきません。

『貴方にやれますか』と訊かれた時に、『この通り』と飛躍した世界を示す事が出來ない時は爭ひは止むを得ぬと云ふ逆轉的な結論を見ます。其處で凡ゆる問題は實際に於ては行詰るのであります。蘇つた生命、限りなき福田を證明することは暗夜を照らす炬火のやうであります。特に召された者だけしか行けない所だと思うてはなりません。行かないのは行き難いと云ふ事ではありません。炬火を點じてさつさと行けば、後はだん／＼に行けると思ひます。此處を突破される事を魔王は非常に恐れて居ます。私は直ぐに其處を見透して突破しなければならぬと思ふのであります。

この魔王と云ふのは何處にでも居ます。又如何なる時にも潛んで居るものです。手近に、身の內に、そして、今居ります。心にもしがみつき、身にも、生活にもしがみついて居ります。この三つを一括して征服する時、私共の新生涯となるのです。又それが外から觀れば懺悔奉仕の姿ともなるものです。此處ではどんな問題でも解決がつく、徹底的で、又理想的であります。此處から割出して凡ゆる問題を整理する、少しも破壞の分子を含むことなしに、凡ゆる建て直しが出來るのです。此の炬火に照された智慧や感情や意志は、あつて差支へないし、凡ゆる文化も障りなく採り容れられるのであります。高い調子の藝術や整うた經濟組織も生れて來ます。完全な極樂はかうした步みの前に現はれる事と信じます。

話は橫道へ行きましたが魔王を征服すると云ふ事は大消費を止める事です。よしんば少し

位直接の生產に從事せないでも大消費を止めるといふ事は生產以上の生產とも云へます。新しい建築も惡くはない。枯野原を燒くやうな勢で、建てる以上に燒かれて行く、その火を消すのも新しい建築には劣らぬ。斯る意味に於て懺悔奉仕は積極的です。かうして有り餘るものは福田の一部です。死ない命は福田の體です。解放される淨まつた財物はその相です。之に養はれて爭奪の世界を平和にするはその用です。この福田に養はれるを『許されて生きる』と申します。

新生涯の特色の一つは（光に依つて（福田に依つて）生きる事であります。

藝術と一燈園生活

——若き藝術家の群れを前にして——

「今日は、皆さんが藝術家でおいでになる爲に、私は話をするに大層重荷を感じます。知らぬ事は話すことが出來ません。ぢやと云つて、藝術家の方に一燈園の生活を申して見ても面白くなからうし、又ひよつとすると却て障りになるかも知れません。殊に皆さんはこれから立派になつて行きなさる方々でありますから、若しひよんな事を云つて、貴方方の行手をまごつかせたりしては濟まぬことと思ひます。成るべくなら、普通の障りのないこと、修養から謂はばまづ倫理道德と云ふやうなあんばい式の事を喋舌つて、元氣よく勉強の出來るやうにして別れたいと思ひます。」と、毛利三郎と云ふ、紹介して吳れた青年に相談しますと、

「いや、今晩集る人達はみな立派な人です。低級な藝術を以て滿足する人ではありません。然うでなければ今晩集つては來られません。先生の「六萬行願」の話をし、又私が藝術家の立場でありながら、先生に從ひ、一燈園生活を教へて貰つてゐることなどを興味がつて來て下さつたのですから、ちよつとも遠慮せず、どし／＼お考へのまゝをお話し下さい。それを皆が期待して居ります。」との事でありました。

然う云はれて見れば、齒に絹被せて、體裁のよい話でお話を濁すわけにもいかん。止むを得ず話をせねばならぬなら、これまでの一燈園生活と藝術との關係に就いてあつたきれ／＼の事を參考の爲に申して見ませう。

私の藝術と云ふことが貴方方の藝術、又本當の藝術に當てはまるかどうかも分りません。たゞ一燈園が藝術を如何やうに扱つて居るかと云ふことを申し上げるまでです。今日の話は遠慮なく、勝手に皆さんが批評なさつて、又意見があつたら聞かして下さい。

初め、一燈園へは藝術家は參りませんでした。それがだん／＼に人が集つて來なさる中には或は繪畫、彫刻、文學其他色々の藝術の專門の人、又はその志望の有る人が來て吳れました。斯うして種々の話を聽きました。又何時の間にか園の生活との交渉が出來ました。それから私も教へて貰ひまして、成程、藝術と云ふものはそんな調子のものか、かうした事を藝術と云ふのだなといふ風に段々覺えて來た次第なのであります。

多くの人の評を聽きますと、一燈園生活には藝術味が足りない、乃至藝術が無い、又は藝術を解せない、と云ふやうな批評があるさうです。先程申した通り、それは皆當つて居ります。最初から私は藝術といふやうなものを頭に持つて居りませんでした。行詰つた生活から新しい生涯へ甦ります迄、また甦つての生活をして居りました久しい間、流石に宗教と云ふ言葉や文字は、よく用ひなれて居ましたが、藝術など云ふ言葉は、言葉としては私に耳新しく響いたのであります。

所がその藝術の方から一燈園へ來て吳れる人があり、又園の生活を味つて行く人があるのを見ますると、何か關係のある事だと云ふ事は爭はれない事實となりました。

ずつと以前に或家に托鉢して居りましたが、其處は可愛い孫にあとを嗣がす婆さんの別莊であります。座敷が一寸立派なので、或時某富豪

の茶席に貸したことがあります。骨董屋さんが美服を着けて、飾り立てをしに來に居りました。色々むづかしい骨董品をうまく並べ込んで、名香を焚き、水まで庭に打つてちやんと出來た時分に、臺所の方へ出て來られて、その婆さんと孫と男衆のやうな姿をしてゐた私との團ひの處へ來られて、金口を吸ひ乍ら得意氣にかう申されます。

『まあ、おばあさん、一遍見せてお貰ひなさい。息子さんも一緒に。それは〳〵立派なもんですぜ。床の間に掛けてある山陽の畫讚は、元は一兩二分とかで先々代が買はれたのぢやさうですが、今はそれがまあ五千圓でせうかなあ。南の方にたててある屛風は何々であつて、次の室の敷物は……』と、手前の家から賣り込みでもしたものか賞めちぎつてゐられました。私が傍に居たものですから、お慈悲に、お前も見せて貰ふがよい、といつた調子に、『お相伴なさい。』と云はれて、『では見せて頂きませう。』と私も見せて貰ひました。

成程體裁よう飾り立ててあつて、聞かされた軸物や屛風のほか、床の置物から、料紙硯、さては敷物、茶の道具などに至るまで、中々澤山で且立派なものの樣でした。

拜見して元の處へ歸つて來ましたが、お婆さんが羨しさうにして孫に申します。

『あんたも早う大きうなつて、あのやうな軸物を買ふやうにおなりや。』

孫はその時十二三であつたかと思ひます。

私は非常にその孫の前途に期待を持つて居りました爲に、その言ひ草は孫の口を開けて毒を注込むやうなものと感じました。それ丈で後を聞かねば私も默つて居たかもしれませんのに、お婆さんは私の方を向いて、重ねて、

『天香さん、さうですなあ。』と其裏書をば私にさせようとしたのであります。私はたまりかねてから答へました。

『そんな者になつたら大變です。』

この突飛な答に胸を打たれたやうな思ひをしたお婆さんは、眼を大きくしまして、

『何んでですいなあ。』と詰寄つて問はれました。私の答はかうでした。

『山陽が慰み半分に描いたやうな繪位をば、何千圓てな金を出して買はねばならぬやうな人になつてはなりませぬ。手前が慰み半分に描いた畫を人が何千圓でも出して買ひたくなる程の人物になるのです。そんなものを飾り立てて自慢せねばならぬやうなさもしい根性になりなさるな。いゝ、あんたの居る所がどんなに貧しい家でも、其處を中心に人が集るやうになる程の人物になりなさい。』と。

お婆さんは默つて了つた。金口の骨董屋は呆氣にとられて座敷へ行つて終ひました。

山陽の畫讚が藝術品としてどれ程のものかは知らぬ。當時托鉢の身の私にはもつと引きつける大きな(これ宗教的藝術？)もののために、そんなものにはとんと興味がなかつたのです。處がその富豪は翌年大きな損をされて、書畫骨董も賣つて終うて、整理をされたときゝました。出入りの美服の骨董屋さんは大かた他の家へ周旋でもして、また飾り立ててゐられたかもしれません。整理するやうになつたりする時は、いつも一燈園はよい慰安の場所となるのです、けれども園には何千圓の骨董品はありませぬ。これは今から十三四年前の事でした。

七年程前に美術學校出の彫刻家が入園された事があります。學校では相當な成績であつたらしいのですが、酒が非常に好きなので身を持ち崩し、大變すさんで終つて、その叔父さんに隨分世話になられたのです。一人の子供を連れてゐましたが細君はありませんでした。たのみに來られた叔父さんは、『必要な費用は出しま

すから。』と申されましたが、叔父さんから金を出すと云ふ事では耽溺した當時の美術家の生活を引締める事が出來ません。私は叔父さんに云ひました。『濟まんと思うて金をお出しなさるならそれは一燈園への供養になさい。一燈園は園のきそくを守つて托鉢される限り、（光の名によりて養ひます。叔父さん直接の糧が絶えたと云ふ事でないと、わるいくせは矯正できません。その持崩した身を直さうとするには、暫く園に養うて托鉢をさせねばなりません。』と。

叔父さんは喜んで承諾致しました。それから美術家は兎に角、園に養はれて托鉢せねばならぬ事になつたのです。酒は飲めないし、好きな仕事は出來ない、さうして馴れぬ仕事は爲さねばならず、定めて此美術家はどんなにか惱んだ事でせう。そこで、手を代へ品を代へ、私に、

『同じ仕事をするなら藝術の仕事をさせて貰つた方がよいではありませんか、藝術は尊いものです、藝術は宗教と一つであります。』

などと非常に主張されたものです。けれども何を爲るにも資本が要ります、資本を與へると飲んでしまふ分が多いので云ふとほりにもさせませぬ。

『あなたはあなたの藝術品を、人が菩提心を起して貰ひに來るまで作つてはいけない。拵へたものを、「どうぞ買うて下さい」と云つて行くやうではいけない。一燈園は他へは何にも賴まない。たとひ衞生掃除をして居ても、賴まれて托鉢（奉仕）のことをするのはよい氣持がする。どんなよい藝術品でも作るに無理があつたり、又買うてくれいと賴むのは見識のない事だ。あなたの人格を慕うて、その作品を賴みに來るまで、便所の掃除でもしてる方がよい氣持であるはずです。みなをよい氣持にするのが藝術の目的なら、托鉢してゐてもよいではないか。』

と、はねかへした事であります、それでもぼつぼつ我慢をして居て吳れました。私だけは信用されて、そんな事を云つてもよくいふ通りにして吳れました。

最初の托鉢に、伏見の舊知の人形屋へ人形の型を拵へに行かれました。先方から禮を持つて來ましたが、一燈園の當番は、

『どうかこの人の爲に祈つて上げて下さい。金は頂かないでもよろしいから。』

伏見の人は感心して居ました。園の美術家は酒を飲まなくなつた事から自信が出る。その感化は先方も受ける。人形の型を作りに行つたのだが、大分そこの家庭によい感化を與へて歸られた。人形屋の人は、

『お蔭さんで有難う、皆も修養させてもらひました、しかし、お禮をせいではすみませぬ、手間賃といふでなく、お供へとしてをさめて下さいませ。』と。私は人形の出來がよいか惡いかは知りません、そこの家の人の心がよくなつた事を聞いて樂しんで居ました。

程經て、斯うした事を私は賴まれました。ある一軒の家が失敗して持家を賣拂ひ、新しい所へ借宅して移つた時の事です。先きの家の片隅に、地藏さんが祭つてあつて、毎年地藏盆をするのが例であつたのが、家移りした爲にそれが出來ないので、その家のおばあさんや母人が淋しがりますから、地藏さんをおまつりしたいと云ふのです。

『お家に居なさる何某さんが此頃偉い眞面目になりなすつて感心して居ます。あの方に地藏さんを一體作つて頂きたいとおもうたのですが、お願ひ出來ますまいか。お禮はどの位したものかも御遠慮なくおつしやつて下さい。』

『それは、よいおたのみです、どのやうなものが出來ますかしれませぬが、さしてもらはれま

すでせう。普通にお禮はまづ頂きません事になつてゐます。あなた方が、わたしらと同じ樣な氣持になつて下さるのを喜びますが、よい氣持になつて、家の潰れるやうな原因をなくして、これから立派に家をたてなほして下さいませ。出來上つたお地藏樣には、さうした心持を守つて貰ふやうに園で開眼して上げませう。信心をお禮の代りになさい。賣買ひするのではありがたい地藏樣が出來ませぬ。』

その人は喜んで、本當に譯が分つたのかどうかは知りませんが、ひたすら賴んで去りました。

園ではその美術家が無心になつて毎日型を作つてゐました。ほどなく出來上つて、石膏に移込みましたが、見るとよい氣持のするものでした。或日敎壇の上に祀りまして同人と一緒に讀經しました後、私は作つた人をも前に置いて、かやうに祈りました。

『どうかお地藏樣、この世界の人類を守つて下さい。あなたは彌勒の下生まで捨身なされてこの世の人類をお守り下さる事を、釋尊にお誓ひなされた御身です。今度一燈園は淸淨な供養によつて同人の一人が純な氣持で御姿を拜刻しました。お守護する家とその願主と、作らせてもらうた人をばまもつて下さい。お守護する人が若し不信であつたらお叱り下さい。刻んだ人の身持が崩れましたら、あなたのお姿も碎けて了うて下さい。一燈園が若し（光を消しましたら、あなたの御姿も消え失せて下さい。さうして皆をいましめて下さい。どうぞ御願ひ申します。』

あとにまた心經一卷讀誦して拜み納めました。園で出來た南瓜を一つ添へて、地藏尊は賴んだ人の宅へお送りしたのであります。拵へた人が何と思うたか賴んだ人がどのやうな感じがしたかは知りません。またその彫刻がよいかわるいか、それも私には判りません。私は今言うたやうな祈りをきいて下さる（光と、その一つのあはれである地藏さんををがみつめたのであります。その作品よりはそれを扱ふ人々の上に（光あれと祈つたのです。何時も中心がこの方に移ります。

又暫く經つてから一人の精神病者を世話する事になりました。近くの病院へ移してから、同人がかはる〴〵其處へ世話しに參ります。美術家も番が當つて二三日行かれました。辨財天を病室で拵へられましたが氣持のよいものでした。それでも私はその世話する心持の方にやつぱり尊さを感じました。布袋さんも拵へましたが、彩色する繪の具が買へないので裏山の木の皮を煎じて染められた事があります。さうした考へはその美術家が、有る金を後前見ずに使ひツぱなした、古い心の惡習を染め直して居ります。一年も居られます間には、時々脫線したり、かくれて色々な無分別をしたことなどもあつたやうですが、大體に於て隨分よくなつて吳れました。

或時金光敎の先生であつて、そこから一燈園のやうな十字街頭の生活に甦られた高橋正雄さんと云ふかたが來られまして、その美術家の話を聞いて、穢い細工部屋へ入り、ごろ〳〵轉がつて居る小さい作品を眺めて、『私にこの三つを下さい。』と云つて、一寸輕く頂いて持つて行かれたことがあります。それからずつと經つた後に、私は法事と二人で大谷なる金光敎の御本部へまゐり、高橋さんの所謂十字街頭の安居場所である「山の一つ家」へ行きました。部屋には神樣がまだ祀つてありません。床の間には掛軸もない、勿論蒲團もないのですからあらう筈がないのです。然しながら淸い祈りは必ずしも偶像を要しませぬ、藤井新さん外に三人さんばかりと、なんでも夜ふくるまでたのしく話

しあひまして、あとは下に毛布を布いて、一二枚の蒲團をひつぱりあうて、ごろ〳〵ねたことでした、今思ひ出しても、全く清淨な一夜でした。翌朝高橋さんはあてどもない床の間に向ひ、坐つてお祈りしてゐられます。私も後からをがんでゐましたが、ひよツと見ますと、前の方に小さい置物があるのです。何だか見おぼえがあると思うたも道理、それは前に園から持つて歸られたあの作品の一つです。思出したやうに私は訊きました。

『あれですなあ。』

『えゝ、さうです。』

『あの時の三つの中の二つはどうなりました。』

『一つは兵庫の某さんに貰つてもらひました。その方は酒を止めたいと云つて居られた人でしてなア。――私は、これは「酒を止められた人の作つたものです。」と云つて、上げましたら、何か感じて、「よろしい！ 今日からわしも止めます。」と云つて、確か止めてしまはれたやうです。もう一つの方も然うした方にあげました。それはどんなになつたか音信がありません。あとに殘つたこの一つは私が欲しかつたのです。』

『これの何處が何ういゝのですか。』

『私はこの極度に謙遜な態度が懷かしかつたのです。』

（一寸申しますがこの作品はかまぼこ板位の大きさの疊のやうなものの上に、一方に何か知らぬが積重ねてある白いものがありまして、その前に一人の人が疊とその積重ねたものとの間の所へ、自分の頭を底まで徹れと云つたやうな風に、手をついて、突込んでゐる形態を作つたものであります。何だかさつぱり譯が分らないものです）私は重ねて、

『そんなにいゝのですか。』

『私は今、自分がこんな氣持で神樣に謝罪りたいので、その眞劍なひれ伏し方に打たれたのです。からしてかうして、をがんでゐます。』

高橋さんの神樣は高橋さんをそこ迄にさせなさる。又高橋さんは御自分をそこ迄にする事によつて、はつきり神樣ををがまれるのであるらしい。さうして此小品を拜む自身の態度を激勵する權威とされて居た。「手前は勝手な事を爲て居て、都合よく御利益のある樣にと神樣に無理を祈る。」それとは大した違ひです。私はその話に頭が下つた。心の中では感謝しました。一燈園の美術家はこの一つのものを拵へた丈で死んでもよい。このまばゆいばかりの法友にかうまで思はれて假令一日でもをがみあうて貰へるこの作品は光榮である。

考へて見ますと高橋さんがこれを持つて歸られたのに、二つの原因があるやうです。一つはこの作品に興味があつたのと、一つは作者の修養的態度に同情されたのであります。

人格の光りは作品を活かします。拵へた人から來ても、亦貰つて吳れた人から來ても。

歸つて私は作者にこの事を告げましたら、作者は頭を搔いて、しきりに閉口して居られます。

『何で頭を搔くのですか。』

『實はそんなつもりで私は拵へたのではありません。その樣に大切に扱はれては恐入ります。私は不覺汗がびつしより出ました。何時か病院へ伊藤さんの世話をしに行きました時、辨天さんを拵へましたが、あれは感謝の記念でありました。嘗て弟が東京で入院しました時、私は美術學校に居ましたが、たつた一人の病弟を、勉强の爲めと云ふ口實で、ろくな世話一つしませんでしたが、その樣にして學校を卒業しても、こんな身持になつて居ます。これでは死んだ弟にも濟まぬと云ふやうな氣がしまして、せめては伊藤さんを看病させてもらつて

先立つた弟にあやまりたいと、こんな氣分でやらして貰ひました。こんな氣になつたのも一燈園のお蔭だ、人らしくなりかけたやうにも思へて嬉しくなり、その記念にもとあの辨天樣を拵へたのです。所が今おつしやつた作品はほんの遊戲に過ぎません。面白半分にしたものです。或朝氣狂ひさんが蒲團を疊んで積上げて白い「シーツ」で包んで了ひましたが、何と思つてか、鰻が石の間へでも這入るやうな狀態をしてその蒲團の下の處へ首を突込んで居ました。いかにも、その狀態がをかしいので、ひよつとスケツチしてみたまでです。高橋先生にそんなに眞面目に拜まれては反つて勿體ないやうで、まだ汗がひきませぬ。』

私も思はず吹き出しました。『鰯の頭も信心からと云ふが妙な事もあるものだなあ。と思ひました。この時もこんな風に藝術品が仲介物のやうに扱はれて、實生活が藝術化される處に中心がおかれ、藝術的實生活からその作品を産出すときにおいてのみ、それは結構なものであるとするやうになつてゐます。藝術に對して之が正當な扱振りであるかどうかは皆さんの敎へを乞はねばなりませぬ。

その美術家も云ひました。

『今迄は何を拵へても金の事を思はぬわけにはゆきませんでした。拵へて居る間は忘れて居てもその前後には生活の壓迫を感じます。その壓迫を感ずる心持から、拵へようと純な氣持に立返るのには餘程の努力を要しました。こんなときに拵へたものは、いくら氣にいつたものであつても、定めて不純なものであつたでせう。園で生活して居る間はその恐れはありません。拵へたものにまとまつたものとてはありませぬが、酒は飲まず生活は落着いて割合に無邪氣でしたから、どんな小品にもそれだけのにほひは屹度あつたと思ひます。』と。

素人の私が見ましても無邪氣は小品にも大分出てゐました。一寸私が手紙を書きましても、心に混雜のある時にはその混雜だけが字に滲み出て來ます。力んでゐる時には力みが出、ひねくれて居る時はひねくれて出ます。どうした拍子かによい境涯が出て、筆が無心に動く時は、思ひも寄らぬ氣持のよい字があらはれます。自分の氣持は作品に現さないわけにはゆかぬ。何ぼう祕めようと思うても祕める事の出來ないものであるやうです。さればその人の人格はその作品で、その作品はその人格です。一燈園の生活に若し利己的の分子が少ければ、その生活に觸れたものは、その作品にその影響を受け、一燈園の氣分が一切の平和に貢献する事となつてゐれば、この生活によつて産れたる作品は又さうしたにほひがする筈です。藝術は藝術のためのもので、勸善懲惡でない、倫理道德でない、といふ話もきかせて貰つて居ます。私はそれはさうだと思ひます。然し乍ら、藝術が人の心を亂したり、墮落させたり、人と人とを爭はせたり、社會が混亂するやうな事の原因になつたりするものとは思ひ度くない。自然は自然であります。自然は平和なもので落着いたもので又惱みのないものです。假令疾風怒濤が來て、樹木を倒したり、土をかすめて行くやうな事があつたにしても、それは人が殺意を起して生命のとりやりをするのとはまるで違ひます。何かによつて自然の生命を掴出してそれを表現することが、人の心を惡に導くものであつてはならん。低級な倫理道德や勸善懲惡を求める事は藝術の尊嚴を汚す事でありますが、本當の自然が如實に出たら、人の心を大自然に導くべきであると思ひます。然うした風の藝術はそれを拵へる人の人格が亦大自然に近づいて居らなければなりません事も自明の理であります。

大自然とは何ぞや、と云へば、事が面倒になりますが、之を要するに一切に對して自然に愛とか慈悲とかいふ樣なものが出て來なければならぬもののやうであります。之は先程の低級な倫理道德の要求とは違ひます。若し『佛心とは大慈悲是れなり。』とか『神は愛なり。』とか、いふ自分自身の姿をも亦自然の懷の中へ抛げ入れて、消して了つて、それから無作の愛無爲の慈悲が、自然に現れて來るのが本當です。然うならないのは所謂野狐とか魔道とかいふやうになると思ひます。して見ると心と身と生活が渾然として、その無相の慈悲に成り切つてゐるといふ事は、眞の藝術家の爲にまことに必要な事であらうと思ひます。

藝術といふものは何處までが藝術であるか、それも私には判然しませんのですが、必ずしも大きなカンヴァス、高價の繪具に依つて作られるものに限りはしますまい。この方面をどんどん推し進めて行きますと、畫や彫刻や建築にのみ限りません。更に推し擴めて行けば、一足の鞋を作るその中にも、藝術はあると云へます。或人が、ある人格者を慕うてその人に掛軸を一幅書いて貰ひたいと思つてたのみに行くと、その人はもう字を書く暇も、書く興味もなくなつたやうで、一生懸命に鞋を作つて居つたさうです。如何程賴んで見ても書いて吳れないものですから、その作つた鞋を一足貰つて歸つて、床の間に吊下げて每日拜んだと云ふ事です。

鞋は實用品である。併し見やうに依つては藝術品であるともいへる。若し大かたの藝術家がもつと〳〵自然に近づいたら、さうして低級な需要がなくなつて、唯金持から金を取つてやらうと云ふ樣な考へも消えて、たゞいたづらに大げさなもののみが藝術品らしく鑑賞されるやうな事もなくなつたら、藝術品はもつと私達お互に生活に手近な者になり、單純になつて往くかもしれぬと思ふ。藝術家も藝術を要求するものも大分垢脫けがしたやうでも、永い傳統的な因襲や骨董癖やらで、不知不識囚はれて居る事が隨分あるかも知れんと思ひます。『沈默は雄辯の極度である。』『種々の茶を飲んで湯に返る。』『釋尊が四十九年の說法は實は何にも喋舌つてはゐない。』などいふやうな調子が、若し藝術にも現れ出したら一度は唯單に實生活のみにかへるかもしれぬ。迷ひがなければ悟りはない、彌陀は衆生が呼ぶから現はれる。一切が大自然に歸るならば、大自然そのものが大藝術です。そこから出るあらゆる表現は遊戲三昧です。勿論私は實生活のみが藝術とは云はない。沈默は同時に雄辯である、拈華微笑は卽ち四十九年の說法である。どんなものでも藝術たるに妨げはないのだが、彩刻を俟たずに、實生活そのまゝを藝術としたとてなんの差支へもありさうに思へぬ、さうした觀方をする時は、一燈園にも亦藝術がある。

一燈園に藝術なしとか、藝術味が乏しいとか、藝術を了解しないとか云ふ批評があるのも無理ではないが、その藝術と云ふものはどう言ふもの？　まづそれから決めてかゝらねば、批評するわけにゆかぬ事になる。嘗て倉田百三氏の『出家とその弟子』の芝居を一燈園が主催した事があります。あの時の實演者の村田と云ふ人が私に云はれました。

『今までの芝居は皆偶像化してゐます。私等は其の偶像を破壞したい。それはありのまゝを舞臺へ出すことです。偶像化した劇と云ふのは、何時の間にか種んな型に捉はれて了つたミイラのやうなもので、活きてをりませぬ。私等はぢき〳〵に私等の實際問題にふれて、なるたけそのあひだに小刀細工を加へず、また他の模倣を雜へずに、それ〳〵の魂をもつて、

劇の生命を其場へ盛出し度いのです。』
私は聽いて面白く感じました。隨分あの時は公會堂の狹い舞臺で、極めて貧弱な背景やら、簡短な裝置やらに、古新聞を截つた雪を降らせたりする、中途半ぱさは、こんな事して芝居になるのかと心配しましたが、二日目などは可成緊張して、見て呉れてる人の心を惹付けました。親鸞聖人の臨終の場面に、ベトーヴェンの第九シンホニーとかを蓄音機で演奏した外、何の鳴物もなく、拍子木一つ入れないのです。それにも拘らず、其時の氣分がしんみり出て居りました。殊に驚いたのは村田といふ實演者は、私等と色々な事を喋舌つて居るその話振りを、一寸も變へずに唯圓に扮して話すのでした。すれば私等の毎日喋舌つてゐるのも其儘芝居であるとも云へます。是を偶像打破といふならも一つ打破すれば私等の生活其儘が劇であるといふ事になると思ひました。

「信は莊嚴より入る』と云ふ方面では、飾立てねば信心が起らぬが、それが又弊害となつては、その飾立てから脱却せねばならぬ。木像よりは御繪像、御繪像よりは六字の名號と、莊嚴から離れて來て、行住坐臥念佛の聲とともに實生活を行ずるのが、他力往生の信ぢやと喝破されたのも矢張一種の偶像打破であるやうです。その親鸞聖人の芝居を倉田さんの『出家とその弟子』で、偶像打破の目的でやるのも妙な縁でした。皆さんに隨分援助して貰つて、芝居は無事に濟みました。が、內輪話ですがこんなこともありました。當時、出演者にエランビタールのお連れがありましたが、東京の村田さんの仲間との間に一寸した行違ひが起つて、明日開演と云ふ前の日になつてゐるのに、『そんなら止めて了はう。』といふことになりかけました。私は主催者として少々困つた。どうやら原因は私の方にはなかつたらしいが、止めになつて見ると隨分困る。その時に私の賴んだ事はからでありました。

『みなさんはそれ〳〵親鸞聖人の人格に共鳴を感じ、その魂を盛出すつもりの此度の催しだといふ事を、私は此の間うちの話で聞いて居りました。さうならこゝは一つ、この行違ひを銘々親鸞の心持で扱つて見たら何うでせう。』と。

之は芝居の主人公の人格を實際問題に引きつけて來たのであります。さう考へて呉れられた爲か何うか知らなかつたが、行違ひは互に我慢してやつて下さつた。後に私はエランビタールの方に何だか少し濟まない氣持が殘つてゐて、いつかは詫びに行かうと思つてゐる事もありますが、その時は兎も角無事に濟みました。やつぱり皆がその人格者の氣持になつてくれられた爲でせう。

二ケ月程經つた後に、東京から村田さんの手紙が來た。それが又面白い、何でもその後病氣になつたり種々な經濟上の壓迫にあはれたさうで、その實際問題の解決を私に相談されて來たのであります。それは芝居の間に心安くなつて、何かのはずみに『偶像打破ならいつそ、實生活まですゝめてはどうです。』といふた私の話に『それでは藝術になりませぬ。』と辯護してからまだ間のない事です。『此の間は有難う、お別れしてから病氣や種々の壓迫がありまして、私等の仲間も一段何うにかせねばならぬやうになりました。都合に依ると私も一燈園の生活がしたい。此の間は芝居で親鸞聖人に種々尋ねた唯圓の私でありました。今度は實際生活で眞劍に貴方に相談するのであります。今度の芝居は眞劍です。』と。

私はこの手紙を讀んで非常に面白く思ひました。確か返事は、

『いつでもいらつしやい、互に芝居をして見ま

せう、今度の見物は切符はいらぬ、ほんとに偶像を打破しませう。』といつた調子であつたと思ひます。

　倉田さんの「出家とその弟子」は實生活の體驗から盛出たものです。それを芝居にした作者がその因緣で一燈園へ入りたいと云つて來られましたのです。爾より出でしものは爾にかへる。所詮藝術は實生活を中心として堂々廻りをして居るのでありますまいか。實生活を如法にして、自然に叶ふやうにして、それから腰を浮かさずに、藝術を扱ふならばそれは眞實のものでせう。技巧は末の末である。實生活より藝術が貴いといふ事はありますまい。『でも、新作の一幅の繪畫が何千と云ふ金でも飛んでは行つたではないか。』と云ふ人もある。それは前にも云つた通り、歐洲戰の大津浪のために偶然、日本へ打寄せた澤山な不時な金の祟りです。その金がまぐれ當りに色々な人の手に入つたので、一時やり場に困つた譯でせう。前にロシヤの皇太子が來られて難にあはれた時、皇太子を助けた車夫が軍艦にまでよばれて、纏つた賞金を帽子に山盛り受けて歸つたが、一人は病死し、一人は身を持崩したと云ふやうな事になつた。人格にふさはぬ金をもつのは危いです。物には大抵ほどあひがあります、骨董熱もあまりあてにはなりますまい。今のやうに生活に行詰つてゐる者が多く、終日汗水たらして働いて、高い物價に追はれてゐるものが澤山あるのに、繪や彫刻だけがそんなに高く賣れよう筈がない。何時もそんな事をあてにしては居られますまい。

　魂を⌒光にわたし、大慈悲の懷に入り、無心になつて人の要求に奉仕するとき、たとひそれが草取りでも、病める人の背をなでるのでも、それはたしかに自他一體の大日を描くのである。此繪畫は何千でも金では賣らぬ、けれどもそこには人の魂よりする感謝がくる。その感謝をも⌒光にさゝげてもらふ、するとその人が救はれる。人が救はれるは大藝術であるまいか。

　靈火を描くより靈火に燃えるがよい、觀音を刻むよりは觀音三昧を修するがよい。

　活きた藝術は表現する迄にもある、までにもあるものでなかつたら、その表現された藝術は死んでゐる。

　キリストの十字架は活きてゐる。此口より出た金句は大藝術であるまいか、釋迦の成道は活きてゐる、此身の行乞は大藝術であるまいか。

　私はヂョットとかいふ人の繪を見て拜む。しかし、あの樣な繪の描けるヂョットの魂を更に拜みたい。ミレーとかいふ人の繪にあたまが下る、しかし、その筆者の生涯を聞いてはなみだぐむほどなつかしい。此二人の繪が人類にはたらいてゐるそれよりは、その人格が働いてゐる方に重きを置く。繪だけがその魂を傳へてゐると思ふは淺い見方であるまいか。その何千年間の繪ならぬ繪の人格が地上にきざみつけた大藝術を見おとしてはならぬ。その生活をまねずに繪だけを描かうとするは看板屋であるかもしれぬ。專門は專門に斃れることがある、表現されたもののみを藝術とするは危いことであると思ふ。

　フランシスがヂョットの樣に繪を畫かないでも恥ではあるまい、關山が雪舟を產む事が易いか、雪舟が關山を作り出すが易いか、問題にもならぬ程のことであるが、暫く青年の方の判斷に任せておく。

　表現される藝術にのみ力を入れると金に媚びねばならぬ、金は取れても魂は慰められぬ。まづ魂と生活を藝術化すれば、何物にも媚びないでもよい、人の魂とむすびつき、佛に

參し、キリストに會へる。金や權力に傲る心では此藝術は買ふことは出來ぬ。

大分話が長くなりました。一燈園の『托鉢』や、天華香洞の六萬行願は、乞食の樣な生活です。藝術味がないといはれても仕方がない、併し一通り今申した樣な考へはもつてゐます。前途ある青年諸君が、如何に藝術を扱はれるかは人類の生活にも大關係があります。どうか大切にして下さい。

諸家略年譜

福田 行誡

文化三年(一歳) 武藏國豐島に生る。諱は行誡、字は普阿。

明治十二年(七十四歳) 增上寺貫主に進み大敎正に補せらる。各宗管長等と謀り弘敎書院を興し、推されて同院の貫主となる。

明治十八年(八十歳) 冬、『大藏經』校訂縮刷の功を奏す。

明治十九年(八十一歳) 三月、微恙あり、深川本誓寺僧房に退る。

明治二十年(八十二歳) 四月、總本山智恩院門主となる。

明治二十一年(八十三歳) 一月、傳宗傳戒の要領を述作して後進に貽す。三月に至つて稿成る、『傳語』と曰ふ。四月二十五日正午頃北面西右臥し、掩然眠るが如く正念往生の素懐を遂ぐ。[illegible]と讃し、舍利を得て本山に葬る。法語章疏、算し來れば等身にして足らず、主なるもの、『大日本佛法傳』『德本行者傳』『いり日の光』『落花遺語』『[illegible]問答』『松浦龜鑑』『釋敎正謬再破批』『吉野川もとする』『傳語』『緣山法話挾經』『寒林集』『落葉集』『釋敎百首』『栴檀瑞像傳』其他。

清澤 滿之

文久三年 九月、名古屋新出來町に生る。元の姓は德永。

明治二十年 七月、東京帝國大學文學科卒業、第一高等學校歷史講師となる。本郷區西片町一の十六號に卜居。

明治二十一年 京都に赴き敎學の事に忙殺さる。尋常中學校長となる。

明治二十三年 校長の職を辭す。

明治二十七年 春肺を病み、舞子に轉地療養す。

明治二十九年 八月、病を冒して上京白川黨を組織して之が領袖となり、渥美契緣の本山局内に反抗す。十一月二十日「敎界時言」發行。

明治三十年 二月、石川内局成るに及びて止む。

明治三十四年 一月、雜誌「精神界」を出す。眞宗大學を東京に移すに及び之が校長となる。精神主義天下を風靡す。

明治三十五年 病中、トルストイの『戰爭と平和』ユーゴーの『哀史』などを反覆愛讀す。

明治三十六年 六月六日逝く。

田中 智學

文久元年 十一月十三日、江戶日本橋本石町に生る、父は多田玄龍、醫を業とす、其三男にして巴之助と稱す。

明治三年(十歳) 前年母を亡ひて幾もなく此歳二月父の喪に遭うて孤兒となる。四月、亡父生前日蓮主義篤信の緣故に基き、日蓮宗説敎の大家智境院日進師の門に入り薙髮して智學の名を享く。

明治四年(十一歳) 下總飯高なる日蓮宗檀林に從學す

明治七年(十四歳) 東京二本榎なる日蓮宗大敎院に學籍を轉ず。

明治十年(十七歳) 冬重患に罹る、是より先日頃宗風學風に疑あり、病を機として學院を去る。

明治十一年(十八歳) 師の寺なる東京府南

葛一之江の等覺院に痾を養ふと共に、專心日蓮聖人の遺文を獨學研鑽して大いに生解發信し、一期の本誓を立す。

明治十二年（十九歲） 寺門僧籍に在りては、眞の日蓮主義を宣揚し難きを感得し、師に請て俗に歸る。

明治十三年（二十歲） 在家佛敎の「敎會同盟」を創始し、橫濱に「蓮華會」を起す。

明治十七年（二十四歲） 同一趣旨を進展して東京に「立正安國會」を創立す。

明治十八年（二十五歲） 熾んに立正安國の敎陣を都下に張る。七月佛敎青年會の田島任天、伊藤洋二郎、大瀧不立、美野田覺念等の人々と、法華對諸宗の異見について江東井生村樓に公開の論戰を交へ、更に續て大に日蓮聖人四個格言の敎旨を宣揚す、此一擧維新以降空前の提唱として、頗る當時の佛敎界を震撼す。

明治十九年（二十六歲） 東京日本橋區蠣殼町に立正閣を建つ、淸水晴風等と「佛敎信徒衞生會」を起す。

明治二十年（二十七歲） 『佛敎夫婦論』の新著を公刊す。

明治二十一年（二十八歲） 六月、「日蓮宗ノ爲メニ計ル三大建議」を公演し、日蓮宗管長を招じて、宗門制度の改革を說く。七月、岩代磐梯山の噴火に際し、慘狀視察の爲め寫眞技師を隨へて罹災地を訪ひ、詳細の實況寫眞を幻燈映畫となし、東京及近縣に救恤金を募る、又『磐梯紀行』を記し、寫眞と共に三十回に亙りて「讀賣新聞」紙上に連載す。

明治二十二年（二十九歲） 一月、埼玉縣樋遣川の聖德寺に閱藏して「佛敎僧侶肉食妻帶論」の論案を作る。二月憲法發布に際し、「王法正理論」に據りて『大日本帝國憲法講義』を公開し、國體の特勝を衍說す。十一月、舊恩師智境院日進師の古稀に會し、盛大なる祝賀會を江東井生村樓に開く。

明治二十三年（三十歲） 六月、木挽町厚生館に「龍口法難論」を公演して、修史局長官文學博士重野安繹氏の龍口法難無根說を論駁す。九月、『龍口法難論』を公刊す。

明治二十四年（三十一歲） 一月、宗敎病院大日本救世館の創立に盡す。四月、雜誌「師子王」を創刊す。七月、木挽町厚生館に「日蓮聖人元寇豫言論」を公演して、修史局吏員小倉秀貫氏が前月大日本史學會に於て講演せる「日蓮ハ元寇ノ豫言者ト謂フヲ得ベキ乎」と云へる元寇豫言否定說を論駁す、併せて當時の日蓮宗團が、宗祖の大事に關し斯かる異見の世に出づるを顧みずして宗內の紛擾に沒頭せるを慨し、猛然として宗門革命を唱へ「祖道復古義會」を起して宗門の諫曉に努め、且つ汎く此趣旨を筆舌に唱導す。九月、祖道復古の大旆を揭げて名古屋大阪に遊化す。

明治二十七年（三十四歲） 三月、兩陛下大婚滿二十五年の御祝典に際し、『佛敎夫婦論』の再治本を獻上す、其奏疏に始めて道義建國世界統一の皇猷を說く。八月、日淸の役について大阪天保山櫻島に三七日の大國禱を修し、加持の寶刀を大本營に獻上す。

明治二十九年（三十六歲） 組織的宗學の完成を期し、鎌倉要山の閑寂境に師子王文庫を創始して、專ら敎學執筆に從事す。

明治三十年（三十七歲） 一月、英照皇太后の御大喪に際し、御菩提の奉爲『大喪法論』を著はして施本す。七月、敎學雜誌「妙宗」を創刊す。十月、舊恩師智境院日進師の喪に逢ひ『妙宗信行要訣』を著述施本して菩提に資す。

明治三十二年（三十九歲） 一月、「日本國の宗旨」と題する一大論篇を「妙宗」誌上に揭げ、全國鐵道各驛に周備して汎く公衆の閱讀に供す、以後連月鐵道大施本を繼續す。

明治三十三年(四十歳) 大患の靜養期を利用して日蓮聖人の靈蹟幷に宗寶の寫影保存を發企し、房總互相の各靈蹟を踏査す。

明治三十四年(四十一歳) 四月、宗門改革の具體案として『宗門の維新』を著はし、宗門當路幷びに朝野の有識者七百餘名に贈る、文學博士高山樗牛氏此書に感動して日蓮主義の研究を志し、居を鎌倉に移して親しく指導を請ふに至る。七月、日蓮門下各教團の夏期講習會に「本化攝折論」を講ず。

明治三十五年(四十二歳) 多年の宿案たる日蓮主義の組織宗學の體系を完成し『本化妙宗式目』と題して發表す。

明治三十六年(四十三歳) 四月、本化宗學研究大會を大阪に開き、一ケ年を期して『妙宗式目』の内容を講授す、求道學者日蓮門下各教團の學徒數百名、之に純乎たる宗風教育を實施す。十月、其修學旅行に學徒を引率して、南都佛教の古蹟を訪ふて信仰の表現を論じ、畝傍の太陵に參拜して陵畔に於て「皇宗の建國と本化の大教」を講述し、「日本書紀」に基き、創めて建國の三大綱を掲げて道義建國世界統一の皇猷を提唱す。

明治三十七年(四十四歳) 日露の役起るや三週の大國禱を嚴修し、前年畝傍に於ける講演の一部を筆述し『世界統一の天業』と題して二萬部を公刊し出征の陸海軍將士に贈る。

明治三十八年(四十五歳) 一月「教育勅語」の深義を淵釋し『勅教玄義』を著はす。七月、國諫同志義會を起して『勅教玄義』を全國の公共機關各方面の人士八萬四千人を選みて汎施す。

明治三十九年(四十六歳) 四月、雜誌「妙宗」百號祝賀に際し、藝術傳道を創始し、長唄『池上八景』『身延名所』『百代獅子』『常盤津』『船守』『首途』『琵琶歌』『小松原』等を創作し、新曲を附して上演、教化の新生面を開く。同月、日蓮聖人遺文註釋の大事業を發起し「聖典講究會」を設立す、爾來十有五年にして『本化聖典大辭林』を完成す。

明治四十二年(四十九歳) 五月、月刊新聞「日蓮主義」を創刊す。夏駿州三保松原に講學の道場を新築し「最勝閣」と名づけ國體擁護之處と題す。

明治四十三年(五十歳) 三月、「日蓮聖人の教義」を著はす。七月、「最勝閣」新たに成て鎌倉より師子王文庫を移す、日蓮主義の大講習會を「最勝閣」に開く。

明治四十四年(五十一歳) 三月、幸德事件に際し「大逆事件に於ける國民的反省」を論述して、國體精神の涵養充實と普及を策り、國諫同志義會に依りて數萬部を全國要路に周施す。六月、關西各都市に國民的反省の大講演會を開く、八月、三保の講習會に、始めて「日本國體學」を提唱し、其大綱を講述す。

明治四十五年(五十二歳) 三月、「妙宗」と「日蓮主義」を併せて旬刊「國柱新聞」を發行す。四月、『太廟太陵參拜新議』と『鎭守論』を發表して國諫施本を行ひ、且つ各所に是れが講演を開く。大正元年九月、明治天皇大御喪に際し、奉弔大法會を三保に開き『本化教判法華八講』を虔修す。

大正二年(五十三歳) 七月、明治天皇御一周年に、前年奉弔大法會の奉弔疏事歷幷びに寫眞を編輯して『叫雲錄』と題し、兩陛下皇太后陛下皇太子殿下に獻上す。

大正三年(五十四歳) 十一月、最勝閣寶殿の落慶に依りて模範的本尊奠定式を示し、幷びに落慶の大儀典を擧行す、此時立正安國會を中心として同主義の諸團體を合同し國柱會を創立す。

大正四年(五十五歳) 九月、大正天皇御

即位大典奉祝の爲に三七日結界して、國體の眞意義を要述し『天壤無窮』と題す。十一月、奉祝施本大傳道を興して『天壤無窮』十萬部を汎施す。

大正七年（五十八歲）東京下谷鶯谷に國柱會館を造る。

大正八年（五十九歲）三月、思想問題解決のために「日本國體ノ開顯」を講述す。十月、要山香風園を賣却して、思想宣傳の機關誌「毒鼓」創刊の資に充つ。

大正九年（六十歲）九月、雜誌「毒鼓」を改めて日刊「天業民報」を創む。十一月、明治神宮奉鎭の吉日を以て『日本國體の研究を發表するに就ての宣言』を發表す。

大正十年（六十一歲）一月、「日本國體の研究」を「天業民報」に連載一年に亙る。三月、新文藝協會の爲めに、聖史劇「佐渡」を創作し、歌舞伎座に於ける其上演を指導す。十一月、國民劇研究會を起し「栗橋の靜」等の新作を上演す。

大正十一年（六十二歲）一月、國民劇研究會を改めて國性文藝會と爲し、千葉縣市川に學習所を設け、加藤精一以下俳優十數名を敎養す。十月、學習所開所式に「凱旋の義家」「函谷關」『林間の話』等の新作を創演す。

大正十二年（六十三歲）一月、天業青年團を起す。六月、北白川宮成久親王殿下の追悼大法會を奉修し『尊王正義』を講述す。十一月、國體政治の興隆を期して立憲養正會設立の宣言を發表す。十二月、三保の越年講習會を、興國大詔奉賛講習會となし「大詔を拜せる我等の覺悟」を講ず。

大正十三年（六十四歲）一月より四月に亙り大詔聖旨普及の大運動を起して、帝都及び近畿東海の各地に大擧宣傳を行ふ。二月、「興國の大詔」を筆述す。四月、衆議院議員總選擧に東京第五區より立候補して、國體主義の政道を絶叫すると共に、徹底して理想選擧の範を示す。

大正十四年（六十五歲）二月、同志二萬餘人と共に「明治節制定の請願」を帝國議會に提出す。三月、更に内閣諸大臣に同一趣旨の願書を提出す。四月、請願令に據り内大臣府へ同一請願を提出す、又此月奥州勿來の史蹟に、かねて其荒敗を嘆き私財を投じて植櫻建碑の工を起せるもの竣成を告ぐるに依て、盛大なる遺蹟顯彰式を擧行し、勿來山上數萬の群衆に對して、「模範的日本人としての源義家」を說く。五月、東北北海道在住の門下の情願を容れて巡遊し各地に國體の正義を說く。七月、「明治會」を主唱す。

大正十五年（六十五歲）二月、東鄉元帥小笠原子爵等と共に、再び「明治節制定の請願」を貴族院に提出す。（前年同院に於て審議未了なりしに由る）

昭和二年（六十六歲）一月、明治節の制定并びに實現促進について、重ねて當路に請願を提出す。三月、明治節制定の勅諚を拜し願意貫徹の感謝大會を青山會館に開き、「君ケ代」の舞樂を創演す。四月、五大聖地に大擧巡拜して願意貫徹の奉謝を捧げ且つ大宣傳を行ふ。五月、新國民運動としての明治會興隆を全國の門下に令す。八月、三保講習會に「明治天皇の哲學」を講ず。十月、帝劇の囑に依り「社頭諫言」を創作す。

昭和三年（六十七歲）一月、帝劇の囑に依り『代々木の神風』を創作す。二月、帝劇上演の『大菩薩峠』を中里介山氏と共に監閲す。四月、東京府下一之江に造營せる「妙宗大靈廟」の工成て盛大なる式典を擧ぐ、（同信同行の人の遺骨を一塔の下に合安する佛滅後破天荒の表式にして本佛奠定の模範表式と共に一代に於ける宗教的創建の眉目たり）。十一月、國體讀本『日本とは如何なる國ぞ』を著はして國體の要義を高

調す。今上御即位の大典に際し、多年教化盡瘁の功に依り天盃恩賜の榮典に浴す。

昭和四年（六十九歳）三月、『大國聖日蓮上人』を著はして日蓮聖人の世界救濟を徹底詳說す。六月、日向に神武天皇の聖跡を探究す。十月、文部省の教化總動員令を貫徹して、五十日間明治會の特別宣傳を全國に布き、國體主義の解說と其破天荒の創始に係る國性藝術の演奏に依りて絕大の感化を收む。十一月、自ら宣傳の中央部隊を率ゐて關西九州の旅途に上り、途中大阪に於て喀血を發し同地に療養す。十二月、宣傳の終結大會を東京日比谷公會堂に舉ぐるに際し病を推して東京に還る。

昭和五年（七十歳）一月、興津に療養すると一百日、病回復に向りて一之江に歸りて申孝園の道園と國柱會本部講堂の建築を督す、十一月、古稀の祝典を舉ぐ。

昭和六年（七十一歳）四月、日蓮聖人六百五十遠忌の大法要に兼ねて國柱會本部講堂の落慶式を舉ぐ、序分式として宮城廣前に於ける「君ヶ代」の百人童舞、流通式に於ける新作の舞踊劇「龍女成佛」の創演并に宗曲「鎮守」の百人演奏等空前の盛儀に成る。六月、新たに國體學會を創めて國性藝術の具體的發揚に資せんとす。十月、日蓮聖人六百十遠忌に際し、身延祖廟に敕額恩賜の盛儀を迎へて、法と國との感應を提唱し、國柱會を率ゐて身延の本院に奉祝の藝術大傳道を舉ぐ、蓋し五十餘年を一貫せる宗門諫曉有終の美として其意を暢る所たり。四十餘年來の劇烈なる神經痛、三十餘年來の執拗なる眼疾と戰ひつゝ、學教に經營に文筆に、今や老來倍〻白熱の熾烈さを以て爲法護國の精進裡に在り。（師子王文庫編輯部纂抄）

新島襄

天保十四年　一月十四日、江戸に生る。幼名は七五三太。家は代々上州安中藩主に仕へてその家來であつた。

安政元年　藩主の召を蒙り右筆職の席末に列せらる。職務の餘暇蘭學を學ぶ。

元治元年　江戸を去りて函館に向ひ、同地に滯留した希臘正教會の宣教師ニコライに日本語を教へながら海外渡航の機を待つた。英人某の商館の書記に福士宇之吉なるものあり、深く彼の志を憐み、上海まで渡航しようとする帆船のある事を知らして來たので六月十四日夜陰に乘じてその船に乘こみ、函館を脫出した。航海中、給仕として役仕す。

上海で折よくボストンの紳商アルフィアスハーディの所有船がまさに出帆しようとしてゐたので、船長に乞うてそれに乘こんだ。米國上陸後、ハーディは彼に資を給してアンドーヴァル中學、及びアモスト大學に學ばしむ。

明治三年　アモスト大學卒業。

明治四年　岩倉大使の一行來米。乞ひにより大使取調の要務を助くること一年に及ぶ。

明治六年　九月再びアンドーヴァルに歸り、神學校に入る。

明治七年　神學校卒業。日本に歸國して基督教傳道の決心を堅む。恰もヴォルモント州ローランドに米國傳道會社の總會あり、招待を受けて告別の辭を述べ、大いに會衆の心を動かして卽時六千弗餘の據金を得たり。十二月歸朝。

明治八年　山本覺馬と結び同志社を設立して十一月二十九日開校式を舉ぐ。最初の生徒僅か八名。

明治九年　最初の新校舍建築され、九月十八日捧堂式を舉行す。熊本洋學校にてジェーンスの教育を受けたる學生三十餘人入學するに及びて初めて學校の實を備へたり。

明治十六年　校勢漸く大いに揮ひ、基督教大學を起すの計畫を抱く。

明治十八年　大學資金募集をかね、歐米を漫遊す。スキスにて心臟病を病む。十二月歸朝。

明治二十一年　大學設立趣意書を發表す。

明治二十二年　アモスト大學より法學博士の學位を受く。健康衰へ、大磯に靜養す。

明治二十三年　一月二十三日逝く。京都に若王寺山上に葬る。

植村　正久

安政四年　江戸日蔭町の旗本の家に生る。幼名道太郎。

明治三年　横濱に移住す。

明治五年　一月、初めて洗禮を受く。

横濱なるブラウン博士の塾に入る。

明治八年　神戸にてミス・マニクールと云ふ婦人を援けて傳道す。

明治十三年　紀州の人、山内秀野と結婚す。又小崎弘道と共に東京基督教青年會を起す。又「六合雜誌」創刊の事に與かる。

明治十七年　日本基督傳道局創立、その理事長と爲る。又禁酒會創立者の一人としてその副會長たり。

明治十八年　番町教會創立。外人の援助を少しも仰がず。

明治二十一年　「日本評論」發刊、ユーゴーを紹介、又初めて日本にトルストイを紹介す。その他カーライル、エマスン、ブラウニング、バイロン、バーンズ、コルリッヂ、ワーズワース、テニスンなども論じた。中途廢刊「宗教と文學」と改題刊行したが永續せず。

明治二十三年　「福音新報」創刊、今日に到る。

明治三十七年　飯田町に東京神學社を建設す。これ亦毫末も外人の力をからず。

大正十一年　傳道開始五十年記念運動の開始さるゝや、感謝のため日本基督教を代表し英米の教會に使す。三回目の海外旅行である。

大正十四年　六十九歲にして逝く。

著書『眞理一斑』『信仰の友』『靈性の危機』『祈の生活』『信仰の生活』。死の前、基督傳執筆の腹案があつたが果さず。右の外聖書の飜譯、フルベッキ博士を助けて詩篇の飜譯に隨ひ讃美歌編纂委員でもあつた。

直接指導盡力して設立したる教會。東京市内のみにても下谷、市ケ谷、千駄ケ谷、青山、中澁谷、大森、白金等あり。

大西　操山

元治元年　八月七日、岡山の城下に生る。

後年操山の號を用ゐしは、市の附近にある操山にちなんだのである。本姓は木全、十四歲の時、母弟大西定道氏の家を嗣いで、その姓を名乘るに到つたのである。

六歲より十四歲迄郷里の小學校に學ぶ。

明治十年　京都に出で、同志社英學校に入る。

明治十四年　同上、普通科卒業。

明治十七年　神學科卒業。

同志社在學中は弱齡を以て學力群をぬき、教員生徒みな、その前途に囑目す。特に山崎爲德から感化を受くる事が甚大であつた。

明治十八年　東京大學豫備門の編入試驗を受け、一躍して第三年級に入る。他校から來つてその破格の榮譽を得たものは、氏を以て初めとする。同年六月、大學文學部に移り、文學科改まつて文科大學となるに及び哲學科を修めて毎年特待生であつた。

明治二十二年　七月、大學院學生たることを命ぜられ、給費を受く。專攻科目は倫理。

明治二十四年　大學院學生たる傍ら東京專門學校(後の早稻田大學)の聘に應じ、哲學、心理、論理、倫理、美學の講義をなす。『良心起原論』は大學院在學時代の研究論文である。この間又「六合雜誌」の編輯を擔當し、毎號「思潮」

評論」を執筆して大いに評壇を賑がす。

明治二十六年　松井幾子と結婚す。

明治二十九年　横井時雄、姉崎正治その他の諸氏と共に丁酉倫理會を組織す。

明治三十年　十一月、東京高等師範學校倫理科講師を囑託せらる。

明治三十一年　二月、歐洲留學を命ぜらる。この年、新設京都大學は文科大學の學課及びその組織の調査を依囑し來り、同大學内に增設せる文科大學長になる事にほゞ内定してゐた。渡歐後は直ちにドイツに赴き、ベルリンに停ること旬日、イエーナに移る。同地の大學にてリープマン、オイッケンなどに親炙し、特に後に世界的名聲を馳するに到つたオイッケンの爲人を喜んだ。盲腸炎を患ふ。十一月、ライプチッヒに移る。多くの講義に出入したが、特にヴントとフォルケルトを尊敬してゐた。フォルケルトは大西氏に一日、「君は一見學生のやうだが、語るに及んで既に學生時代の人でないことが分る。願はくは君の年齢を知りたいものだ。」と云つたと云ふに徴しても、ほゞ當時の教養の程度を窺ふことが出來る。インフルエンザに罹り、更に肺炎、肋膜炎を併發す。

明治三十二年　ライプチッヒに二學期を過した後、一度ベルリンに歸り、又ハイデルベルヒに轉じ、又フランス、イタリ等に古美術をさぐりて漫遊した。健康ます〳〵衰ふ。

八月四日、歸國の途につく。

九月二十四日、神戸着。

十一月、羅馬字日本語書方取調委員を命ぜらる。

明治三十三年　博士會の上申によつて文學博士の學位を受く。

三月、京都に移居す。理工科大學の課外講義として、教育學を依賴さる。健康が惡くて一日も出講せず。

十月、療養のため郷里岡山に歸る。腹膜炎を發し、十一月二日午前八時遂に逝く。享年三十六年三ケ月。岡山の西郊妙林寺に葬る。

綱島　梁川

明治六年　五月二十七日、岡山縣備中國上房郡有漢村市場に生る。本名は榮一郎。

明治十一年　四月、郷里、知新校に入學す。在學中中村長遷、臨田厚氏等の薫陶を受く。

明治十九年　三月、知新校を卒業す。秋、知新校に教鞭を執る。

明治二十年　高梁教會に於て牧師古木虎三郎氏より洗禮を受く。其後在郷中、郷村の講義所に於て友人と共に聖書の研究、感話等をなし、高梁教會へも時々出席す。

明治二十四年　九月、夙に遊學の志ありしが、この頃より次第に具體的となる。京都同志社入學を志し、後東京專門學校にかふ。

明治二十五年　一月、職を罷めて十一日郷里を出で十六日着京。東京專門學校專修英語科に入學す。上京後は主として本郷教會（牧師横井時雄氏）、市ケ谷教會（牧師植村正久氏）に列席。

六月、東京專門學校專修英語科を卒業す。

九月、東京專門學校文科に入學す。これより專ら東西の文學哲學に親む。

明治二十六年　五月、引續き咽喉を病む。この頃哲學及び歷史を研究する志あり。在學中坪内氏の外に、大西祝氏の指導を受くること多し。

明治二十六年　七月二十三日日誌に正統派の信仰を棄てたる告白あり。

九月、坪内雄藏氏の厚意により同氏邸に寄寓す。此時より「早稻田文學」の編輯を助く。

十二月二十四、五日、日誌に懷疑の告白あ

り。此の前後倫理を以て宗教に代ふるを得べしと信じたり。
此の頃より漸次教會に遠ざかるに至れり。
明治二十七年　一月、始めて「早稻田文學」に譯稿『をもしろし』を出し、爾後引續き時文等を同誌にのす。
明治二十八年　六月、論文『道德的理想論』を提出して東京專門學校文科を卒業す。
九月、金子氏、島村氏と共に雜誌「早稻田文學」の編輯に從事す。又專門學校講義錄の爲に大西氏の『西洋哲學史』を筆記す。
九月二十日、日誌に、天地の父戀し、人格的神のなかるべからざる所以を證明したし、との告白あり。この頃擊劍の稽古をなす。
明治二十九年　四月三十日、突然喀血す。
五月二十四日、逗子に轉養す。
六月二十六日、歸京。七月四日喀血、前田秀村氏の診察を受く。前田氏は其後主治醫として長く厚意を寄せたり。
七月十一日、東京出發、十三日、神戶諏訪山吉田病院に入院す。同院副院長橋本善次郎氏と日夕往來して相善し、氏は基督敎徒なり。又滯神中屢々神戶教會に列席し、其の牧師海老名彈正氏を訪へり。

明治三十年　二月、書簡に、今次の病氣によりて久しき懷疑より出でて一道の光明を得たりといひ、又日誌に、神戶にある間宗教の方面に一轉機を得、前の如く神を空理的に考ふることを止め、人格的なる神は唯一の慰藉者、鞭韃者、鼓吹者となれる旨の告白あり。
三月、病氣全癒して歸京。再び「早稻田文學」の編輯に與かり、約一年間休止せし文筆の活動又始まる。文藝美術の評論最も多きは此年及び三十一、三十二、三十三の四年なり。又本年以降東京專門學校講義錄に倫理諸問題を講じ、又漢文講義に筆を執る。
十月十二日、鄕里の家族を迎へて牛込區原町三丁目十一番地に居を卜す。
美術及び倫理に關する評論は本年に始る。
明治三十一年　二月、書簡に、將來學者として記者として立つとの告白あり。
三月三日、牛込區大久保余丁町十七番地に轉任す。
十月、「早稻田文學」廢刊。
宗教に關する評論は本年に始まる。
明治三十二年　一月、雜誌「日本教育」興り其主筆となる。
四月、再び喀血。「日本教育」の編輯を辭して翌月小田原在早川に轉養、『白隱全集』に沈潛す。
八月、病おこたりて歸京す。雜誌「日本教育」廢刊、この頃より平田禿木氏の經營せし雜誌「大帝國」に月々文藝美術教學に關する文章を寄せ、三十三年末に及べり。
教育に關する評論は本年に始まる。
明治三十三年　二月二十八日、書簡に、少しづつ明りに近ける心地なりとの告白あり。
六月、『スチーブン倫理學解說』を育成會より出版す。病復た宜からず、喀血屢々至る。
八月、牛込區大久保余丁町十七番地内の別宅に移る。
『快樂派倫理』（ジョン、ワトソン博士原著）を東京專門學校より出版す。
明治三十五年、一月、『悲哀の高調』出づ。
本年以降殊に宗教的思索に耽り、公表せる評論、感想の大部分は宗教に關するものなり。學友中中桐確太郎氏とは宗教的方面に於て道交殊に深し。
四月、『西洋倫理學史』を東京專門學校より出版す。
此頃より『大西博士全集』の編輯校訂に與る。
明治三十五年、六月、『迷信論』出づ。

明治三十六年、四月、哲學館事件に關する文部當局の處置を憤慨し、大に之を痛論す。

七月、『答道友書』出づ。

本年殊に汎神論に就て思索多し、眞宗他力の教に接近し來る。

明治三十七年、二月十七日、夢、光耀の經驗を得。

七月、『心のたどり』出づ。某夜光耀、後に自ら第一次の見神の實驗と稱したるものなり。

九月、『宗教上の光耀』出づ。

十月一日、午後三時、第二次見神。

十一月某夜、第三次見神。

自ら本年を以て光耀啓示時代と稱せり。

明治三十八年、三月二十一日、牛込區大久保余丁町四十八番地に轉居す。

五月、『予が見神の實驗』出づ、是非の論囂し。

七月、二十九年以來の文藝教學に關する評論文、美文其他の諸篇を輯めて『梁川文集』と題し行陽堂より出版す、收むる所八十五篇。

九月、『病間錄』を文淵堂より出版す、主として最近數年間の宗教的自覺の感想を輯めたる文集なり。收むる所三十二篇。

十月、『予は見神の實驗によりて何を學びたる乎』出づ。

明治三十九年、一月、『神子の自覺』出づ。この頃より西田天香氏と相識る。

殊に本年以降各地よりの來信、來訪者多し。

六月、病勢一時危殆に陥り、月を越えて恢復す。神子、法悦、見神は本年中最も多く說かれたる題目なり。

明治四十年、四月、『病閒錄』以後の文を輯めて『回光錄』と題し文淵堂より出版す。收むる所三十八篇。

見神の表白に對する世論を編輯して、『見神論評』を文淵堂より出版す。

六月二十日、磐城に梁川會興る。

八月、『我とは何ぞや』を草す。

晩年益〻法然親鸞の他力信仰に傾倒し、佛基兩教の信仰上の差別を認めざるに至る。唯汎神思想の人格の觀念明瞭ならざるを慊らずとする念は最後まで繼續したるが如し。『我とは何ぞや』の一篇に其の極意の顯はれたるを見る。又晩年社會問題に注意を向くるに至り、勞働、報酬等の問題に就て考ふる所あり、歿後に公にされたる絕筆『勞働と人生』はその一端を示すものなり。

九月十四日、夜半永眠。十七日葬儀を海老名彈正氏の本鄕教會に營み、雜司ケ谷共同墓地に埋葬す。

木下　尚江

（『現代日本文學全集』第三十九卷『社會文學集』參照）

西田　天香

明治五年　二月十日、滋賀縣坂田郡長濱町大字片、西田保三長男市太郎として生る。

明治二十三年　紙商に從事す。

明治二十五年　北海道石狩國空知郡栗澤村に於て北海道土地拂下規則に依りて百五十萬坪の未墾地の貸下を受け、同志と共に必成社を合資組織にて創立し開墾に從事す。

明治三十三年　右事業を同志のものに讓り、鑛業の調査を爲しながら重に精神修養の事に專念す。

明治三十七年　新生涯に入る。

明治四十五年　一燈園を創立す。

大正十四年　燈影塾を創む。

昭和四年　財團法人光泉林を創立す。

昭和六年十一月十八日印刷
昭和六年十一月二十二日發行

現代日本文學全集 第五十二篇

編纂者 山本三生

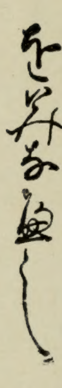
發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

左、印刷所の過失に依り刷脱落致しましたゆゑ
第十頁右上の見出し箇所に御貼附を願ひます。



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02978 9658

改造社